ザ・ビートルズ ワークス

マーク・ルイソン／著　ザ・ビートルズ・クラブ／翻訳・監修

THE BEATLES

The Complete BEATLES Chronicle 1957-1970

CamScannerでスキャン

CONTENTS

序文／サー・ジョージ・マーティン……4

はじめに／マーク・ルイソン……6

ビートルズ、永遠のクロノロジー／ザ・ビートルズ・クラブ……10

1957〜1959年 クオリーメン登場……13

1960年 ビートルズ誕生、ハンブルクへ……24

1961年リバプールでの大躍進……43

1962年レコード・デビュー……74

1963年イギリス制覇……120

1964年 アメリカ制覇……179

1965年 アイドル、ツアーへの疑問……233

1966年 レコーディング期へ……269

1967年 サージェント・ペパー……303

1968年 バンドという意識の崩壊……352

1969年 ゲット・バック……391

1970年 ひとつの時代の終焉……440

INDEX……456

CamScannerでスキャン

GEORGE MARTIN

サー・ジョージ・マーティン

私は昔のことを思い出してなつかしむような人間ではない。人生には過ぎ去った日々を振り返っている暇などないのだ。しかし、ビートルズの音楽だけは不思議なことに私に過去の郷愁に浸ることをためらわせない。

彼ら（ボーイズ）とロンドンのEMIスタジオで会い、レコーディングの世界に引き入れてからなんと何年もの歳月が流れた。1962年当時、すばらしい音楽や歌を創造する才能はまだ開花していなかったが、すでに彼らはプライドのあるプロのミュージシャンだった。ハードな仕事にも慣れていた。人気が爆発的に出てからも——コンサート、テレビ、ラジオ、映画、記者会見、フォト・セッション、そしてもちろんレコーディング——彼らは音楽を決して「仕事」とは呼ばなかった。彼らはただ純粋に音楽が好きだった。そして彼らでなければ、このハードな状況に才能もつぶれてしまっていたことだろう。世界から突きつけられるビートルズへの要求はあまりにも多かったのだから。

しかし、こんな状況下でも彼らはレコーディングを楽しみ、すぐれた創造力を発揮して次々に新しいサウンドを生み出していった。最初は教えていたが、彼らは何でもすぐに覚えてしまい、すぐに教えられる立場になった。レコーディングに専念し始めた1966年

以降，ビートルズの創造力はとどまることを知らなかった。常に新しいサウンドを求め，それを実現させる新しい方法を模索していたのだ。

もちろん一緒に仕事をしていればお互いにムッとくることもあった。でも今でも心に残っているのは，今たちと楽しかったということだ。成功とか儲けは二の次だった。頭にあったのは最高の作品を作ることだけ。その点で私たちの意見は完全に一致していた。何十年たったあとに残る作品を作りあげていると信じていたから誰も口には出さなかったが，何かホンモノが生まれていることはみんなわかっていた。

ビートルズに関する本は星の数ほどあるが，この書籍はもっとも信頼のおける貴重な本である。もちろん当の私たちより詳しい。こうした信頼に値する研究本を読めることは大いなる幸運である。安心して読んでいただきたい。

ビートルズの人気，そして影響力は時代を経るごとに増している。2006年にも私と息子のジャイルズがプロデュースしたビートルズのアルバム"LOVE"がリリースされ，ビートルズは今もなお現役トップを走り続けている。

CamScannerでスキャン

MARK LEWISOHN
マーク・ルイソン

先日アメリカを訪れたとき、ビートルズの存在が日常の大衆文化にあまりにも浸透していることに気づき、改めて感銘を覚えた。ほんの数時間の間に、ニュース、映画やテレビ・ドラマのせりふ、広告、あるいは人々の会話のなかに、ビートルズという名前が登場してくる。また、間接的に引用されたり、見出しに使われたりすることも多い。たとえば「だれそれは最後に逃げおおせるだろう(so and so has got to "ticket to ride")」とか「どこそこの国に平和は訪れるのか?(Will this or that country "give peace a chance ?")」といったぐあいだ。イギリスでも、おそらく程度としてはアメリカほどではないが、同じことが言える。解散してから20年以上もたつというのに、ビートルズにはあいかわらず大きな関心が寄せられている。ビートルズのイメージと音楽は1960年代だけでなく、20世紀後半全体に大きな影響を与え続けてきたのだ。

当然のことながら、今日の事態を予測できる人物などいなかった。本書を読めばわかるように、そのなかでもとくにこの事態を予測していなかったのは、つつましく謙虚に活動を始めた当のビートルズである。世界的なリーダー、あるいは影響力の強いオピニオン・リーダーに自分たちがなるなどとは夢にも思っていなかったのだ。しかし、才能と個性がビートルズをトップの座に押しあげた。今やビートルズが歴史上の偉大なグループであることは間違いないどころかまぎれもない事実なのである。ためしに現代版の百科事典や参考書をめくってみるといい。必ずビートルズに関する記述があるはずだ。

しかし、それほど昔の出来事ではないにもかかわらず、ビートルズのキャリアはあらゆる種類の誤認によって真実がゆがめられて、不正確に伝わっていることがあまりにも多い。1979年、私は真実と誤りをより分けようと、漠然と思いたった。そこでまず、1950年代後半のクオリーメンのスキッフル時代から、ビートルズがコンサート活動を中止した1966年までの、すべてのライブ・パフォーマンスの完璧なリストを作ることから始めた。驚いたことに、ビートルズのライブについてまとめたカタログや資料はまったく存在せず、したがって近道もなく、この調査だけでじつに7年も要してしまった。その結果を『ザ・ビートルズ・ライブ!』という本にまとめ、1986年に出版した。

その後まもなくして、EMIレコードから生涯でもっとも光栄な招待を受けた。ビートルズとジョージ・マーティン、そし

CamScannerでスキャン

て数名のスタジオ関係者と一緒にアビイ・ロード入りし、EMIが所有しているビートルズのレコーディング・セッションのテープを残らず聴くことを、部外者としては私ひとりだけが許されたのだ。さらに、実際にレコード制作に関わったすべての人から話を聞き、その内容を1988年に出版した「ザ・コンプリート・ビートルズ・レコーディング・セッションズ」にまとめることも許されたのである。この本はベスト・セラーとなり、15万部も売れた。

この事実に誰よりも驚いたのは、ほかならぬ私自身だった。しかし、ビートルズの力を思えば、それは当然だったのかもしれない。

「レコーディング・セッションズ」がまもなく出版されようというところ、『ライブ!』が品切れとなった。再版を考えていた私に、ライブ・パフォーマンスの素材とレコーディング・セッションについての集約版、それに新たなラジオ、テレビ出演、映画やビデオ作品の調査内容を加えた本にしたらどうかという話があった。こうしてできたのが本書である。本書「ザ・ビートルズ　ワークス(コンプリート・クロニクル)」には、1957年以降のライブ・パフォーマンス、レコーディング・セッションとその他のスタジオ活動、ラジオ、テレビ、映画への出演に関するビートルズの活動のすべてが、年代順に記述されている。

また、ライブおよびセッションについては、前2作の出版後に明らかとなった新たな情報を加え、より正確なものにすることができた。

ビデオを見て、レコードを聴いて、この本を読んで、いつまでも輝きを失うことのない20世紀最大の現象と言われるあの体験を、もう一度味わっていただければ幸いである。

イギリス、ハートフォードシアにて

AUTHOR'S ACKNOWLEDGEMENTS

著者からの謝辞

本書は12年間の調査の結果を集大成したものであり、非常にたくさんの方々から情報を提供していただきました。みなさんのご協力に心から感謝致します。

ビートルズのライブ・コンサートの調査に協力していただいた次の方々に感謝致します。
John Askew (Johnny Gentle), Neil Aspinall, Tony Barrow, Art Barry, Johnny "Guitar" Byrne, Roy Carr, John Cochrane, Ray Coleman, Joe Collins, Mark Cousins, Pat Daniels, Hunter Davies, Rod Davis, Harry Dickinson, Peter Doggett, Tony Elwood, Walter Eymond, Jack Fallon, Stan Fishman, Dave Forshaw, Neil Foster, Bill Fraser Raid, Danny Friedman, Bob Gannon, Debbie Geoghegan, Nigel Greenberg, Jim Gretty, Johnny Gustafson, Arno Guzek, Maurice Haigh, Colin Hanton, Roger Howell, Liz and Jim Hughes, Douglas Jenkins, Hilary Kay, Leslie Kearney, Fred Keight, Brian Kelly, Spencer Leigh, Monty Lister, Charlie McBain, Jr, Mike McCartney, Eric MacKenzie, Tony Meehan, David Moores, Chas Newby, Jos Nicholl, Jimmy Nicol, Jos Remmerswaal, Geoff Rhind, Mike and Elizabeth Robbins, Charles Roberts, Brian Roylance, Eileen Ruane, Sir Jimmy Savile OBE, the late Roger Scott, Helen Simpson, Keith Sluchansky and Eddie Suarez, David J Smith, the late John Smith, Peter and Coral Stringfellow, Pauline Sutcliffe, Derek Taylor, Chas Tranter, Rene van Haarlem, John Waker, Ron Watson BE, Bob Woodward, Graham Wooton.
そのほか、1986年5月「ザ・ビートルズ・ライブ!」出版後、貴重な新情報を提供してくださったすべてのみなさん、ありがとうございました。

●

ビートルズのレコーディング・セッションの調査に協力していただいた次の方々に感謝します。
Malcolm Addey, Terri Anderson, Kenny Baker, The late John Barrett, Norman Bates, Martin Bange, Pete Best, Anil Bhagwat, Leo Birnbaum, Chris Blair, Peter Blake, John Blocher, Bob Boast, Peter Bown, Jerry Boys, Tonny Bramwell, Alan Brown, Jack Brymer, John Burden, Barrie Cameron, Jenny Caswell, Clem Cattini, George Chkiantz, the late Alan Civil, Tony Clark, Frank Glarke, Peter Coe, Ray Coleman, Terry Condon, Hunter Davies, Malcolm Davies, Bryan Dunn, Ruth Edge, Stuart

CamScannerでスキャン

Eltham, Geoff and Nicole Emerick, Kenneth Essex, Jack Fallon, Eric Ford, Jim Foy, Francisco Gabarro, Brian Gibson, Tony Gilbert, Laurie Gold, Keith Grant, Richard Hale, Dave Harries, Derek Healey, Mike Heartley, Sarah Hobbs, Alan Holmes, David Hughes, Ted Huntley, Bill Jackman, Jeff Jarratt, Philip Jones OBE (the musician), Jenny Keen, Harry Klein, Bobby Kok, McCartney MBE, Phil McDonald, Linda Mallarkey, George Martin CBE, David Mason, Peter Mew, Mo Miller, Barry Morgan, Rex Morris, Harry Moss, Sarah Murgatroyd, Mitch Murray, Piers Murray Hill, Cris Neal, Alan Parsons, Ron Pender, Bill Povey, Ron Richards, Christine Russell, Mike Sammes, Sidney Sax, John Scott, Ken Scott, Mike Sheady, Stephen Singles, Kenneth Sillito, John Skinner, Keith Slaughter, Norman Smith, Tracie Smith, Brian Southall, Bob Street, Derek Taylor, Chris Thomas, Eddie Thornton, John Timperley, Ken Townsend, Kathy Varley, Peter Vince, Tony Wadsworth, Nick Webb, Andy White.

そのほか、1988年9月『ザ・コンプリート・ビートルズ・レコーディング・セッションズ』出版後、情報を提供してくださったみなさん、ありがとうございました。

●

1988年から1991年まで、ビートルズのラジオおよびテレビ出演、映画やビデオ制作の調査に協力していただいた次の方々に感謝します。

John Bauldie, David Bellan, Roy Benson, Tony Bilbow, Billy Blaney, Tony Bramwell, Jack Breckon, Richard Buskin, Ed Butcher, Adrian Cairns, Richard Carraro, Ray Coleman, Roy Corlett, Ivor Cutler, Peter, Doggett, Jo Durden-Smith, Frank Elliott, Naomi Fairbairn, Michael Fentiman, Nicholas Ferguson, Denise Fraser, Rune Hallberg, Tommy Hanley, Andy Hitchcock, Kevin Howlett, Philip Jones OBE (the TV executive), Shelagh Jones, Julia Kent, Dave Lee, Richard Lester, Michael Lindsey-Hogg, Mike Lowson, Jennie McClean-Cooke, Joe McGrath, Barrie MacDonald, George and Judy Martin, Stephen Maycock, Andrew Milton, Desmond Morris, Denis OユDell, Staffan Olander, Stuart Payton, Wally Podrazik, Clive Reed, Mark Rigby, Tim Ritchie, Susan Rolling, Norman Rossington, Brian Roylance, Neil Shand, John Sheppard, Rodger Simons, Adam Smith, Jim Smith, David Stark, Harry Storey, Caroline Tipple, Jacques Volcouve, Jeff Walden, Carey Wallace, Scott Wheeler, Mary Wilcock, Muriel Young.

みなさん、ありがとうございました。

本書の執筆にあたっては、ライブおよびセッションに関して、前2作『ザ・ビートルズ・ライブ!』および『ザ・コンプリート・ビートルズ・レコーディング・セッションズ』にて謝辞を述べた方々にもご協力いただきましたが、ここでは、本書のためにとくに力を貸してくださったみなさん、および、ラジオ、テレビ、映画およびビデオ関係者のみなさんに感謝の意を表したいと思います。

すばらしい序文を書いてくれたジョージ・マーティン。貴重なフィルムを探して私に見せてくれたITCライブラリーのジョン・キーブル。1993年1月までに返してくれればいいと言ってABC/テムズの記録資料を貸してくれたテムズ・テレビの寛大なビル・パーカー。グラナダ・テレビのフィルムとテープ担当者のシルビア・カウリング、グラナダの記録担当のとても勤勉なデニス・カーリン。いつも親切にお茶をいれてくれ、レコーディング・セッションの膨大な未整理資料を見せてくれたEMIのルース・エッジ、ジェニー・キーンおよびサラ・ホッブス。はるか昔のアメリカのコンサート会場の住所をつきとめてくれたジェイミー・リーシング。私を常に励ましインスピレーションをかきたててくれたピエット・シェローダーズ。ニューヨーク時間の午前3時に必ずファックスのそばにいてくれて、オーディオ・ビデオ・テープやアドバイスを提供してくれたアラン・コージンと、親切にもてなしてくれたやさしい奥さんのジョアンナ。何百という私の質問に熱心に答えてくれ、語りつくせないほどお世話になったフレッド・ビンセント。膨大な調査の結果を提供してくれ、ビデオ・テープをすぐに見せてくれた親切で協力的だったアップル・コープスのネル・バーリー。以上のみなさんには心から感謝いたします。

また、私のエージェントを務めてくれたAMヒース・アンド・カンパニーのビル・ハミルトン、オクトパス・イラストレイテッド出版のピアズ・マレー・ヒル、デビッド・ヘズラム、マイク・エバンズ、アンナ・スミス、ブライアン・ダン、アシュリー・ウェスタン(フィクサー・アッパー)のご支援には厚くお礼を申し上げます。

●

最後に、ストレスが多く、いつも多忙で疲れはて、めったに家にいることのなかった夫、父親に、辛抱強く耐えてくれた妻のターヤ、息子のオリバーとトーマスに、心からの愛と感謝を捧げます。

本当にありがとう。

そして、すばらしい才能を授けてくれ、人生に大きな喜びをもたらしてくれ、さらにビートルズにめぐりあわせてくれた、亡き母に愛を込めて本書を捧げます。

CamScannerでスキャン

NOTES

●ミキシングについての特記事項

EMIスタジオでのビートルズの活動は、スタッフの手で可能なかぎり詳細に記録されていたが、ミキシング・セッションについてはメンバーが参加していたかどうかを確認する手だてがない。

1962年から1965年半ばまでは、メンバーがほとんどミキシングに参加していなかったことは一般的に事実だとされている。実際、たとえビートルズが望んだとしてもほかの場所での仕事があるため不可能だった場合が多く、ジョージ・マーティンとバランス・エンジニア、またはバランス・エンジニアだけがミキシングという重要な仕事をまかされていた。しかし、1965年半ばから1970年にかけて、とりわけ1966年以降になると、ビートルズはミキシングに大きな関心を払うようになっていた。しかし、どの作品のミキシングに実際に関わっていたのか（またはグループの誰が参加していたのか）、そしてどの作品のミキシングをEMIのバランス・エンジニアとジョージ・マーティンにまかせていたのかは特定できない。アルバム "SGT.PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND" の制作を例にとってみても、モノ・ミキシングは自分たちの手で行なったが、ステレオ・ミキシングはほとんど他人にまかせていたという。

●イギリスのテレビ出演についての特記事項

ビートルズが初めてテレビに出演した1962年10月、番組制作会社15社により、BBC（英国放送協会）に競合するITV（英国民間テレビ放送網）が組織された。この組織に属する放送局は、地元向けの番組の制作、他地域でも放送できる番組の制作、他局で制作された一般向けのすぐれた番組の放送という3つの制作協定を結び、現在にいたっている。

したがって、ITVのビートルズ出演番組は、地元の放送局のみで放送されたもの、地元と周辺の数局によって放送されたもの、ITVのネットワーク番組としてほかの14局により（実質上）全国的に放送されたものとがある。また、ネットワーク番組とは言っても、局ごとに放送時間も違えば、放送日も異なる場合もある。本書では、ビートルズのすべてのITV出演について、具体的な放送日と番組の開始時間、終了時間とを記したが、これは地域によって異なるものであることを了承しておいてほしい。本書では、ローカル局がその番組を制作した場合、その地域での放送時間を、ネットワーク番組の場合にはロンドンでの放送時間を記した。

● その他の特記事項

ビートルズのライブ・パフォーマンス、おもに1964年以降のものは、観客のポータブル録音機材により不法録音され、1970年代以降にブートレグ（海賊盤）として市場に多数出まわった。レコードほど多くはないが、同じく不法に撮影された映像も存在する。本書に記録しているのは、合法的な作品についてのみである。

ラジオおよびテレビ出演については、a）ニュース番組、b）記者会見、c）イギリス以外で制作された番組の3つはすべて除いている。ただし、c）については特殊事情がある場合には除かない。たとえば、アメリカでのおもなビートルズ出演番組はすべて記録している。しかし、アメリカ、あるいはそれ以外の土地での数百にもおよぶインタビューについて調査することは不可能なので、そうした番組の詳細については触れていない。

ライブ・パフォーマンスを行なった会場、ラジオ局、テレビ局および映画スタジオの完全な住所は、本書に初出の箇所にその当時の住所記録で掲載した。2回目以降の表記には省略形を用いた。

本書前半では、不必要な反復を避けるため、リバプールが当時属していたランカシア州の表記はあえて割愛した。

レコーディングについては、ほかのアーティストの作品へのゲスト・ミュージシャン、プロデューサー、アドバイザーとして参加した場合を除き、ビートルズの各メンバーが関係している1970年4月までのすべてのレコーディングの詳細を記録した。ただし、レコーディング・スタジオ以外の自宅やホテルの部屋などで録音されたテープもあり、そういった私有テープについては録音日などの詳細が不明であるため、記載していない。

CamScannerでスキャン

ビートルズ、永遠のクロノロジー

ザ・ビートルズ・クラブ代表　斉藤早苗

ビートルズのコンサートやレコーディングセッションを詳細に記録した決定本とも言える本書を通して、ビートルズにも不穏な時代があったことや、スターダムにのぼりつめるまでいかにハードスケジュールをこなしたかがよくわかり、またビートルズの業績を再認識させられます。「成功するためにはタイミングは必要条件である」とはジョージ・マーティンの言葉ですが、まさにビートルズは時代の申し子。ビートルズが時代を切り開いた、新しい時代の流れにビートルズが乗ったという二面があると思います。ビートルズの歴史はひとつのバンドが残すにはあまりにも膨大で、しかもそれを短い期間でなしえたことは驚異だと言わざるをえません。

本書は1991年にザ・ビートルズ・クラブが翻訳・監修、プロデュース・センター出版局から刊行された『ザ・ビートルズ全記録 1』と『ザ・ビートルズ全記録 2』の改訂アップデート版です。さらに読みやすくなりましたがこの記録を丹念に読んでいくことによって、今一度ビートルズの歴史があなたのなかで生き生きと甦るのではないでしょうか。本書は、著者マーク・ルイソンが1988年に出版された『THE COMPLETE BEATLES RECORDING SESSIONS』を著者自身が見直し、加筆し、コンサート・データを加えることで、ビートルズのすべてを網羅した決定本となりました。従来の通説や常識が本当に通用するのかどうか、著者自身が今一度検証すべく、EMIアビイ・ロード・スタジオのレコーディング記録やイギリス各地方新聞のコンサート記事など可能な限り一次資料にあたって、調査・研究した成果をまとめたものなのです。

この直後の1995年にビートルズのメンバー自身のビートルズ・アンソロジー・プロジェクトが開始。2枚組CDが3セット、映像版(TV放送→VHS, LD→DVD)、そして書籍からなるアンソロジー3部作が続々リリースされました。このプロジェクトには本書の著者であるマーク・ルイソンも加わっています。彼のビートルズ史の調査研究がビートルズ側にも評価されたからです。彼はCD"ANTHOLOGY"のライナーなど、公式データにも多く関わるようになりました。こうしてビートルズ自身も加わることにより、新たにビートルズ・ヒストリーを見直すブームが巻き起こったのです。そういった意味でもこの書籍はビートルズを知る上での原典と位置づけることができるものなのです。今回、アップデート版を出すにあたり、読みものとしても通読出来るように、判型をハンディにし、読みやすいレイアウトを心がけました。

一方、2006年、亡きジョージ・ハリスンの構想で誕生した"LOVE"プロジェクトが開始され、ビートルズのサウンドそのものにハイライトがあてられ、こちらの分野でもまた新たに発見された事実が明らかになってきているようです。

このようにまだまだビートルズの現役時代は終わりそうにありませんが、本書ではビートルズの時代だったとも言える、60年代をじっくりと楽しんで頂きたいと思います。

今日も世界のどこかで誰かがきっとビートルズを聴いていることでしょう。彼らは見えない力で今も人々をつなげているのです。これからもずっと。

CamScannerでスキャン

Introduction
1957-59

1959年9月、カスバ・クラブで演奏するクオリーメン。
（左から）ジョージ、ポール、ケン・ブラウン、ジョン。
なぜドラマーがいないのかと聞かれると「リズムはギターのなかにある」と答えていた。

CamScannerでスキャン

1956年1月に突然脚光を浴びたとき、24歳のロニー・ドネガンはまさか自分がイギリスの若者と文化にはかりしれない影響を与えることになるとは夢にも思わなかっただろう。実際、ドネガンがカバーしたハディ・(レッドベリー)レッドベターの‘Rock Island Line’は、オリジナルの古い黒人ブルース・バージョンとほぼ同じだったからだ。しかもリリースしてから18か月が経過していた。

しかし、ロニー・ドネガン・スキッフル・グループによるこのレコードは、ティーンエイジャー、それもとくに男の子たちのあいだで熱狂的に受け入れられ、1956年から1957年にかけてイギリス中で大ヒットした。スキッフルそのものは、大恐慌に見舞われた1920年代のアメリカで流行した黒人ジャズとフォーク・ミュージックから生まれた音楽で、決して新しいものではなかった。イギリスでも、1949年にはすでにケン・コリアーが自分のジャズ・バンドでスキッフルを演奏していた。

だが、イギリスのティーンエイジャーにスキッフルがウケたのは、この音楽のルーツのせいではなく、その編成にあった。簡単で、誰にでもすぐに演奏できたからだ。金なんかなくても、誰もがグループを作ることができた。安い(大抵はスペイン製の)アコースティック・ギター、どこの家庭にもあった洗濯板、それとみごとな発明であるティーチェスト(茶箱)・ベースがあればよかった。ウッド・ベースをまねて作ったこのベースは、茶箱を逆さにして丸い穴をあけ、ほうきの柄を差し込んで、コードを張っただけという素朴なものだ。少し金に余裕がある場合には、バンジョーやドラム・セットが加えられたが、グループの編成から言えば、そういうものはおまけのような存在だった。

1956年から1957年にかけて、イギリス全域に5,000を超えるスキッフル・グループが誕生したのは、このドネガンのヒット曲の影響と言っても過言ではない。もちろん、彼ほどではないが、トミー・スティール、バイパーズ、チャス・マクデビット、ナンシー・ウィスキー、ジョニー・ダンカンなどのあと追いミュージシャンたちの影響も大きかった。リバプールだけでも、優に数百を超えるグループが存在していた。

当時16歳のジョン・ウィンストン・レノンは、リバプール市の中心から少し離れたのどかな地域ウールトンに住む、聡明だが生意気な少年だった。1956年5月にエルビス・プレスリーの‘Heartbreak Hotel’の魅力にとりつかれてからは、すっかりティーンエイジャー・ミュージックの虜になっていた。ジョンはスキッフル・グループを作ろうと思い立った。ギターは別居している母親が通信販売で買ってくれた。とにかく楽しければよかったのだ。大金を稼いだり有名になりたいと、まったく考えないわけではなかったが、それは決して大きな動機ではなかった。

グループを結成して1週目、メンバーはまだジョンと親友のピート・ショットンだけだったが、ジョンはこのバンドにブラックジャックスという名前をつけた。しかし、たまたまふたりが通っていたクオリーバンク・ハイスクールの校歌に「クオリーメン、生まれる前から強かった」という一節があり、クオリーメンのほうがいいじゃないかということになった。バンドのメンバーはすぐに集まったが、やめていくのも早かった。たった1回の練習や1回のステージだけでやめてしまうメンバーもいたし、ラインナップはひっきりなしに変わっていた。今となっては完全なメンバーのリストを作ることは不可能だ。しかし、最初に加わったのが、ジョンとピートのクラスメイトで、ティーチェスト・ベースを担当したビル・スミスだったことは間違いない。そのほか初期のメンバーには、ロッド・デイビス(バンジョー)、エリック・グリフィス(ギター)、レン・

CamScannerでスキャン

ギャリー、アイバン・ボーン、ナイジェル・ウォーリー（ベース）、コリン・ハントン（ドラム）がいた。ジョン・レノンはギターと、バンドのリーダーだったのでボーカルも担当し、ピートはたまに洗濯板をかき鳴らす程度だった。正確な記録は残っていないが、最初のころはおもに友人たちのパーティーや、スキッフル・ブームのころにダンス・ホールやボールルームで開かれていた10ペニー・スキッフル・コンテストで演奏していた。リバプール・エンパイア・シアターで開催された「スター製造機」ことキャロル・リービスが司会をする勝ち抜きコンテストにも参加したが、最初のオーディションで落ちてしまった。

1957年7月6日土曜日、クオリーメンはウールトンのセント・ピーターズ教区教会で開かれたサマー・パーティーで演奏した。この日の出番はピート・ショットンの母親が押さえてくれたものだった。このときの演奏を、ひとりのぽっちゃりした少年が見ていた。近所のアラートンからやってきた、15歳のジェイムズ・ポール・マッカートニーだ。この日、やがてエンターテインメント界全体をロックのリズムでゆるがすことになる、ジョン・レノンとポール・マッカートニーというパートナーシップの種がまかれたのだ。

ポールの父親ジムは、1920年代初めに、みずからジム・マックス・ジャズ・バンドという地元のコンボを結成していた。ポールは最初にトランペットとピアノを習った。しかし、1956年11月11日にリバプール・エンパイアでロニー・ドネガンのショーを観てからはギターに夢中になった。この日、屋外のステージでの昼の演奏を終えたクオリーメンは、教会の講堂で催される夜のダンス・パーティーでの演奏にそなえて、楽器のセッティングをしていた。もの覚えが早かったポールは、ギターを手に取るとエディ・コクランの新曲'Twenty Flight Rock'とジーン・ビンセントの'Be-Bop-A-Lula'を弾いてみせた。両方ともジョンの大好きな曲だったが、歌詞をよく知らなかったため、これまで適当に歌ってきていた。そこで、歌詞を覚えるのが得意だったポールは、親切にも歌詞を紙に書いてジョンに渡したのである。それだけではなかった。ジョンとエリック・グリフィスの目の前で、ギターをチューニングするという覚えたての技を披露した。当時チューニングができなかったふたりは、ウールトンのキングズ・ドライブまで自分のギターを持って行き、いくばくかの金を払って他人にやってもらっていたのである。

ポールが自転車に乗って帰ったあと、ジョンは一大決心を強いられた。あのすごい才能の少年を自分のバンドに引き入れてバンドの格をあげるか、それとも彼なしで今までどおりにやっていくか。前者を選べばバンドのリーダーとしての立場が危うかったが、ジョンはさんざん悩んだあげく、前者を選んだ。

2週間後、ピート・ショットンがウールトンで自転車に乗っていると、ポール・マッカートニーに偶然出会った。ジョンの代わりにピートは、ポールにクオリーメンに入らないかと誘った。ポールはしばらく考えて、いいよと返事をした。それからの練習にはポールも参加していたが、8月7日、クオリーメンが初めてキャバーン・クラブに出演したときは、弟のマイケルとハザーセイジのピーク村にボーイスカウトのキャンプに出かけていて、参加することができなかった。クオリーメンのメンバーとしてポールが観客の前で実際に演奏したのは、1957年10月18日のニュー・クラブムーア・ホール（コンサバティブ・クラブ）が最初だった。

ポールがクオリーメンに加わったころ、スキッフルの人気が急激に下火になってきた。人気が出るのも早かったが、衰えるのも早かったのだ。時期を同じくして、クオリーメンの何人かのメンバーが学校を卒業し、就職した。ジョンはリバプール・カレッジ・オブ・アートに進学したため、今までどおり練習する時間があ

CamScannerでスキャン

ったが、フルタイムの仕事に就いたメンバーもいた。1958年初めまでにクオリーメンは、ジョン、ポール、レン・ギャリー、エリック・グリフィス、そしてコリン・ハントンの5人が固定メンバーとなっていた。「ダフ」というあだ名のピアニストのジョン・ロウもときどき参加していた。

1958年3月、ポールはバトリン・ホリデイ・キャンプで働いていた家族の知り合いのマイク・ロビンズに、学校が夏休みの間だけバンドを雇ってもらえないだろうかという手紙を書いた。手紙にはポール自身とジョン、レン・ギャリーが署名したが、ハントンとグリフィスは定職を捨てる気はなく、署名しなかった。結局この仕事はもらえなかったが、この手紙のなかでポールはバンドに引き合わせたばかりの若いギタリストについても触れていた。ジョージ・ハリスンである。

ジョージはポールと同じ学校に通っていたが、ポールより年下で、まだ15歳になったばかりだった。指先に血がにじむほど練習していたジョージは、ギターの腕前は確かだったが、ジョンには子ども扱いされた。10代の若者にとって、2年半の歳の差は大きかった。しかし、ジョージは辛抱強くバンドが演奏する場所にくっついていき、一所懸命アピールした。そしてついに、クオリーメンの正式メンバーになったのである。

新メンバーを加えて、さらに実力アップしたにもかかわらず、クオリーメンは1958年の残りと1959年を通じて、プライベートなパーティーでの演奏をこなしたほかは、演奏する機会がほとんどなかった。ジョンとポールが一緒に曲を作り始めたのはこのころである。学校のノートは、'I Lost My Little Girl' 'That's My Woman' 'Thinking Of Linking' 'Years Roll Along' 'Keep Looking That Way' 'Just Fun' 'Too Bad About Sorrows' などの単純明快な歌や、'Looking Glass' 'Winston's Walk' といったインストゥルメンタル曲で、ぎっしりと埋まっていた。のちに発表された 'Love Me Do' 'One After 909' 'Hello Little Girl' 'When I'm Sixty-Four' 'Hot As Sun' 'Catswalk' などもこのころに作られた作品である。

1958年半ばには、リバプールのケンジントン53番地にあったパーシー・フィリップスという老人の家の奥にある部屋を借りて、クオリーメンはデモ・レコードを録音した。コリン・ハントンは参加しなかったが、ジョン、ポール、ジョージ、ジョン・ロウの4人は、かき集めた17シリング6ペンスでSPの両面レコードを制作した。2曲ともジョンがリード・ボーカルをとり、A面にはバディ・ホリーの 'That'll Be The Day'、B面にはハリスン=マッカートニーの曲で1950年代後半のドゥ・ワップ・スタイルの 'In Spite Of All The Danger' が吹き込まれた。また、ブラウン管を通して有名になろうと、マンチェスターのディズベリーにあるABCテレビのスタジオで行なわれた同テレビのオーディションにも参加したが、これは落選に終わった。

1959年の初めになると、バンドは目的もなくさまよっていた。プレスコットで演奏したあと、ドラマーのコリン・ハントンとほかの3人のメンバーが大ゲンカを始めた。この日の演奏がうまくいけば、地元の映画館のマネージャーが上映のあいまの演奏をクオリーメンにまかせてくれるかもしれないというチャンスだったのに、演奏は泥酔のはてのめちゃめちゃなものになってしまった。アルコールで頭がもうろうとしていたハントンは、どういうわけか、いつものバス停よりも手前の停留所でドラム・セットと一緒に降りてしまった。それ以来、ハントンがクオリーメンのメンバーと顔を合わせることはなかった。ジョー

CamScannerでスキャン

ジまで、おもにレス・スチュワート・カルテットというほかのバンドで演奏することが多くなり、数か月間クオリーメンは消滅してしまったかのようだった。しかし、8月29日、運命はそうはさせなかった。

レス・スチュワート・カルテットは、リバプールのウエスト・ダービー地区にあるビクトリア様式の大きな建物の地下に新しくオープンしたカスバ・クラブのオープニング・ナイト出演を依頼されていた。しかし、そのオープニングの日、スチュワートとベーシストのケン・ブラウンとのあいだで言い争いが起こり、スチュワートは出て行ってしまい、それっきり帰ってこなかった。困りはてたブラウンはジョージに、誰か助っ人で演奏してくれる仲間はいないだろうかと相談した。ジョージはジョンとポールに連絡した。その夜、カスバで演奏したクオリーメンは、その後も毎週土曜日の夜に、このクラブで演奏するようになった。

解散寸前の危機から逃れ、復活したクオリーメンは、ブラウンを誘い入れた。しかしブラウンがメンバーだったのは、わずか6週間足らずだった。1959年10月10日だと思われるが、ひどい風邪をひいていて演奏できなかったブラウンは、カスバでの演奏のあと、ほかのメンバーとケンカしてバンドをやめた。その夜、クラブのオーナーだったモナ・ベストは、ブラウンにもバンドの報酬3ポンドの分け前である15シリングを渡した。だが演奏しなかったブラウンになぜ分け前をやらなければならないのか、ポールには理解できなかった。ジョン、ポール、ジョージは、しばらく話し合ったあと、ブラウンともクラブとも手を切ることにしたのだ。

カスバでの演奏はなくなったが、3人は再度キャロル・リービスのコンテストに挑戦することにし、クオリーメンという名前を一時的にジョニー・アンド・ザ・ムーンドッグスに変えた。リバプールでの2回のオーディションをみごとに通過、マンチェスターで開催される次の予選に出場することになった。そこで勝ち残れば、リービスのATVの番組『ディスカバリーズ』に2分間スポットの出演権が約束されていた。ただ、当時電気工として働いていたジョージと違い、ポールとジョンはまだ学生で、まったく金がなかったから、マンチェスターに行って演奏した夜、収録の時間が押して延長になっても、そこで一泊できるほどの余裕がなかったのである。観客が優勝グループを決める(拍手の大きさで決められた)ころ、ジョニー・アンド・ザ・ムーンドッグスは最終列車に飛び乗り、すでにリバプールへの帰路についていた。

成功へのチャンスは、あっというまに逃げてしまった。1959年の終わりごろには、グループの将来への見通しは暗かった。しかし、当時のメンバーには知るすべもなかったが、のちのビートルズの原型であったバンドは、最初の長くて苦しい試練の段階を確実に終えつつあったのだ。苦しい時期が終わったわけではなかったが、1960年以降は、彼らはもううしろを振り返ることはなかった。

CamScannerでスキャン

クオリーメン最初のステージ

6月9日(日) 1957年

エンパイア・シアター

Lime St. Liverpool

[illegible]

6月22日(土)

ストリート・パーティー

Rosebery St. Liverpool

[illegible]

ジョンとポールの歴史的な出会い

7月6日(土)

ガーデン・パーティー

St. Peter's Church, Church Rd. Woolton, Liverpool

まさに歴史的な日。

[illegible]

キャバーン・クラブに初出演

8月7日(水)

キャバーン・クラブ

Matthew St. Liverpool

1957年1月16日、[illegible]

1957年7月6日、ジョンとポールが初めて出会った日。ウールトンのセント・ピーターズ教会で演奏するクオリーメン。この写真はクオリーバンク・ハイスクールの生徒だったジェフ・リンドが撮影したもので、オリジナル・ネガから現像したもの。(左から)エリック・グリフィス、コリン・ハントン、ロッド・デイビス、ジョン、ピート・ショットン、レン・ギャリー

正式にオープンした。店の名前はパリのル・キャボー・フランセ・ジャズ・クラブにちなんで名づけられていた。オーナーのアラン・シトナーは医者の息子で、当時プロ・ゴルファーをめざしていた元クオリーメンのナイジェル・ウォーリーと同じゴルフ・クラブ、リー・パークに所属していた。その関係からクオリーメンのキャバーン・クラブへの出演が決まったのである。キャバーン・クラブは正当なジャズ・クラブだったが、ジャズ・バンドのあいまのショーとして、ジャズから発生したスキッフルも聞かせていた。クオリーメンの演奏した'Come Go With Me'は、客にウケた。調子にのったジョンは、エルビス・プレスリーの'Hound Dog'と'Blue Suede Shoes'を続けて歌い、クオリーメンのメンバーでフォークが好きだったロッド・デイビスからひどく反感をかった。オーナーのアラン・シトナーも大あわてでステージに向かって「その不愉快なロックをやめろ!」と叫んだ。ポール・マッカートニーは、ボーイスカウトのキャンプに出かけていたため、この日のステージには参加していない。

レノン=マッカートニーの初ステージ

10月18日(金)

ニュー・クラブムーア・ホール(コンサーバティブ・クラブ)
[Back] Broadway, Norris Green, Liverpool

サウス・リバプールのダンス・プロモーター、チャーリー・マクベイン(通称チャーリー・マック)は、社交ダンスのショーだけでなく、ロックやスキッフルのショーも定期的に企画していた。こういったショーは、ガーストンのウィルソン・ホール、ガーストン・スイミング・バス(かつて残酷なギャングの抗争があったことから地元ではブラッド・バス、血のバスと呼ばれていた)、ウェイバートリーのホーリーオーク・ホールやウェイバートリー・タウン・ホールなどで行なわれた。
この日、ノリス・グリーンにあるコンサーバティブ・クラブ、ニュー・クラブムーア・ホールで、ポール・マッカートニーはクオリーメンのメンバーとして初めてジョン・レノンと同じステージに立った。初めてのステージでリード・ギターを務めたポールはかなりあがってしまい、アーサー・スミスの1946年の

CamScannerでスキャン

ヒット曲'Guitar Boogie'のソロ・パートを決定的に間違えてしまった。

マクベインはこの夜のクオリーメンについて、「最高にして最悪」という曖昧な感想を、バンドの名刺に鉛筆で書き残している。

11月7日(木)

ウィルソン・ホール
Speke Rd, Garston, Liverpool

フランシス・ウィルソンによって、ガーストンのバス停の向かい側に建てられた見ばえのしないウィルソン・ホールに、クオリーメンは4回出演している。この日はそのうちの最初のステージ。チャーリー・マックは、毎週木曜日にこのホールで「リズム・ナイト」を催していた。

11月16日(土)

スタンリー・アバトゥワール・ソーシャル・クラブ
East Prescot Rd, Old Swan, Liverpool

クオリーメンが出演したダンス・パーティーのなかでも、スタンリー食肉市場の社交クラブで開かれたこの日のパーティーは、もっとも場違いだった。食肉処理場の職人や運搬業者やその妻たちにとって、クオリーメンの2回のステージはひどく耳ざわりな音以外のなにものでもなかった。このあとクオリーメンがここに呼ばれることはなかった。

11月23日(土)

ニュー・クラブムーア・ホール
Norris Green, Liverpool

コンサバティブ・クラブに再出演。

12月7日(土)

ウィルソン・ホール
Garston, Liverpool

土曜日の夜の部に出演。少しばかり、バンドの格がランクアップしたことになる。

1月10日(金) 1958年

ニュー・クラブムーア・ホール
Norris Green, Liverpool

当初、クオリーメンは前日の1月9日の夜にガーストンのウィルソン・ホールに出演する予定だった。だが、プロモーターのチャーリー・マクベインがこれを変更。この日のニュー・クラブムーア・ホールに出演した。

1月24日(金)

キャバーン・クラブ
Liverpool

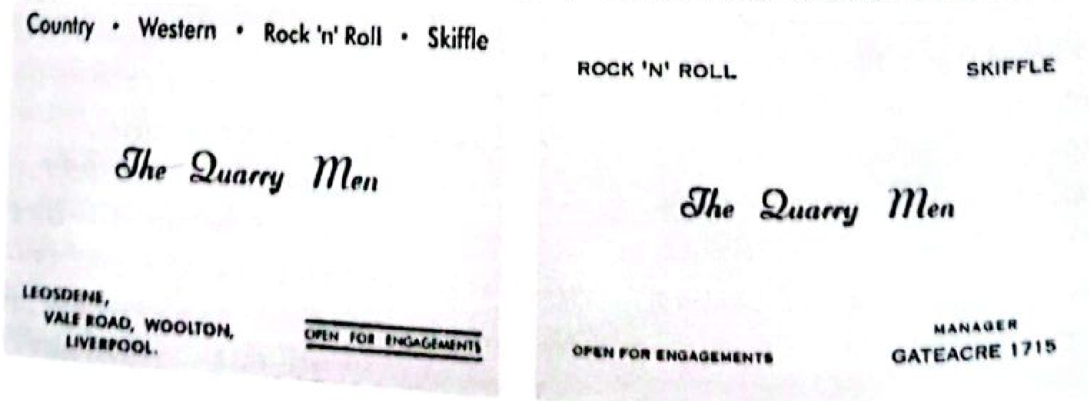
ジョージ・ハリスン、クオリーメンに加入

2月6日(木)

ウィルソン・ホール
Garston, Liverpool

14歳のジョージ・ハリスンがクオリーメンに初めて会ったのは、まず間違いなくこの日だ。ジョージ自身が、この日ウィルソン・ホールで初めて顔をあわせたと語っている。しかし、ドラマーのコリン・ハントンは、モーグ・スキッフル・セラー(1958

クオリーメンの名刺。出演依頼をもらうために、クラブの経営者たちに配られた。このころマネージャーを担当していたのはベースもたまに弾いたメンバーのナイジェル・ウォーリーで電話番号も彼の自宅のものが書かれている



1957年11月23日、ニュー・クラブムーア・ホールでスキッフルを演奏するクオリーメン。(左から)コリン・ハントン、ポール、レン・ギャリー、ジョン、エリック・グリフィス。全員おそろいのタイ、ジョンとポールがジャケットを着用しているのにも注目

年3月13日参照)で初めてジョージを紹介してもらったと記憶しているし、ジョージの母親によれば地元のファストフード店で出会ったという。また、当時とっくにクオリーメンを脱退していたピート・ショットンは、ジョージと同じ学校に通っていたポール・マッカートニーが、スピークのアプトン・グリーン25番地にあったジョージの住む公営住宅までバンドを連れていき、そこで会ったと言っている。

3月13日(木)
モーグ・スキッフル・セラー
'Balgownie', Oakhill Park, Broadgreen, Liverpool

18歳のアラン・コールドウェルが始めたクラブのオープニング・ナイト。コールドウェルはアル・コールドウェルズ・テキサンズというバンドを作っていた(1959年3月25日からリンゴ・スターがドラマーとして参加した)。彼はのちに名前をロリー・ストームと改名、バンド名もハリケーンズに変更した。モーグ・スキッフル・セラーはオークヒル・パーク25番地のビクトリア朝の大きな建物の地下室にあり(のちに退職看護婦の寮となった)、死体安置所(モーグ)という名前がぴったりの場所だった。このクラブのオープニング・パーティーは夜7時30分から始まり、テキサンズやクオリーメンなど、いくつかの地元のグループが出演した。クラブには100人ほど入れたが、照明は青い裸電球1個と蛍光灯1本だけ、あとはかろうじて新鮮な空気を送り込む換気扇が1個あるだけだった。
こうしたひどい環境のなかでパーティーを開くことは危険で、非合法だった。当然のことながらクラブは長続きしなかった。4月1日に警察が立ち入り検査し、4月22日をもって永久に閉鎖された。このモーグ・セラーでは、毎週火曜日と木曜日にクラブ・ナイトが開かれていたが、どのバンドがいつ出演したかという記録は残っていない。確実に言えることは、クオリーメンは少なくとも10回は出演したということだ。

12月20日(土)
ジョージ・ハリスンの家
Upton Green, Speke, Liverpool

ギャラのある仕事がまったく途絶えているときでも、仲間うちの家族のパーティーとなればクオリーメンはノーギャラで喜んで演奏していた。この日はジョージ・ハリスンの兄ハリーとアイリーン・マッキャンとの結婚披露パーティー。明確に記録されているのはこの日だけだが、1957年から1959年にかけて、クオリーメンはこの種のパーティーで何回か演奏している。

CamScannerでスキャン

Diary1959

1月1日(木)1959年
ウィルソン・ホール
Garston, Liverpool

スピーク・バス・デポウ・ソーシャル・クラブが主催した少し遅いクリスマス・パーティーに出演。ジョージの父のハリー・ハリスンがこのクラブの代表者だったことから、クオリーメンがこの日の午後のパーティーに招かれた。どの学校も休みだったため、メンバーたちはずる休みせずにすんだ。

1月24日(土)
ウールトン・ビレッジ・クラブ
Allerton Rd, Woolton, Liverpool

これもまた遅いクリスマス・パーティー。クオリーメンは近所に住んでいたことから呼び出され、お得意のスキッフル・ナンバーを10分間演奏した。

カスバ・クラブにレギュラー出演

8月29日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
Hayman's Green, West Derby, Liverpool

モナ・ベスト夫人所有のヘイマンズ・グリーン8番地にあった大きなビクトリア朝の建物の広い地下室に作られた、ティーンエイジャーのためのクラブのオープニング・ナイト。クオリーメンは、この日から10月10日ごろにメンバーのケン・ブラウンといざこざを起こしてやめるまで、毎週土曜日の夜、計7回出演した。次に出演したのはハンブルクから帰ってきたあとの1960年12月17日。ビートルズとなってからである。

9月5日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

9月12日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

9月19日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

9月26日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

10月3日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

10月10日(土)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

コンテストに再挑戦

10月18または11日、25日
エンパイア・シアター
Liverpool

1957年にクオリーメンとしてキャロル・リービス主催のコンテストに出場し、惜しくも落選してから2年以上が経った。カスバ・クラブでのケンカがもとでやめたケン・ブラウンを除く、ジョン、ポール、ジョージの3人は、再びキャロル・リービス主催のオーディションに挑戦。バンド名も、このオーディションのためにジョニー・アンド・ザ・ムーンドッグスに変更した。予選オーディションは日曜日に3週続けて行なわれた。ムーンドッグスはそのうちの1回、おそらく10月18日に出演した。10月11日の予選通過者のなかに、リンゴ・スターがドラムを担当するジェット(のちのロリー)・ストーム・アンド・ザ・ハリケーンズが入っていた。
ジョンたちは今回はみごとに予選を通過し、次の予選に進出することになった。

10月26日(月)〜31日(土)
エンパイア・シアター
Liverpool

キャロル・リービスのテレビ・タレント発掘の地区大会。エンパイア・シアターで1週間続けて行なわれ、ジョニー・アンド・ザ・ムーンドッグスは少なくとも2日間出演し(正確な日付は不明)、優勝は逃したが、マンチェスターのヒッポドローム・シアターでの最終決勝への出場権は余裕で獲得した(このときの地区大会の優勝グループはコノーツ。名前こそ変えていたが、1957年に優勝したニッキー・カフのいるサニ

ーサイド・スキッフル・グループだった）。マンチェスターで行なわれる決勝戦に勝てば、ATVのリービスの番組にスポット出演が約束されており、そうなれば「名声」を得ることも夢ではなかった。

コンテスト最終決勝進出

11月15日（日）

ヒッポドローム・シアター

Hyde Rd, Ardwick Green, Ardwick, Manchester, Lancashire

リービスのテレビ・タレント発掘の、1959年の北西部最終決勝。のちにビートルズとなるグループが、マージーサイド以外の土地で初めて演奏した日である。

彼らはけっこういいプレイをした。しかし、このコンテストの優勝者は、最後に各出場者がもう一度ステージにあがったときに、観客からどれだけ多くの拍手がもらえるかによって決まることになっていた。この夜、優勝者の決定はかなり遅い時間に行なわれた。リバプールから来た3人の若者たちは、残念ながら外泊するほどの金を持っていなかったので、名声を得るチャンスを胸にマージーサイドに帰るしかなかった。名前が呼ばれるころには、会場からはるか遠くにいたのである。

CamScannerでスキャン

Introduction 1960

0年5月10日、ラリー・パーンズとビリー・フューリーが行なった
ディションで演奏するシルバー・ビートルズ。横を向いてベース
スチュアート・サトクリフと、遅刻したトミー・ムーアの代わりに
そうにドラムを叩いているジョニー・ハッチンソンが気合いの
ジョン、ポール、ジョージと異質の雰囲気を醸し出している。

クオリーメンの3人は1959年末の暗い気分をひきずったまま1960年を迎えたのかもしれなかった。しかし、この年はこれまでのキャリアから最高の収穫を得る1年となる。この1年間にはさまざまな重要な変化があった。たとえば、バンド名だけをとっても、ビータルズ(Beatals)、シルバー・ビーツ(Silver Beats)、シルバー・ビートルズ(Silver Beetles、のちにSilver Beatles)と次々に変え、8月中旬についにビートルズとなったこと。さらに、プロとして契約を交わした初めてのツアーを経験し、バンドにとってもっとも収穫が大きかった初のハンブルク巡業もあった。何とかバンドで食べていけるかもしれないという気持ちも芽生えた。そして3年後にイギリスで生まれ、やがては全世界に出現することになる「ビートルマニア」の原形とも言える熱狂的なファンが初めて誕生したのもこの年である。

飛躍への胎動

この時期、グループの活動を掌握していたのは、当時29歳のアラン・ウィリアムズだった。ウィリアムズは、1960年5月から1961年4月まで、グループの出演契約の交渉とマネージャーらしきことをやっていた。ウィリアムズは、リバプールの中心部のスレイター・ストリート23番地で、ジャカランダという当時流行の小さなコーヒー・バーを経営していた。クオリーメンはこの店に昼食時と夕方によく顔を出し、6ペニーのエスプレッソ・コーヒー1杯で最低2時間はねばった。

1960年1月、クオリーメンに新しいメンバーが加わった。ジョンのアート・カレッジの親友、スチュアート・ファーガソン・ビクター・サトクリフである。スコットランド出身で、聡明で独創的な感性を持った19歳のサトクリフは、音楽的な野心や才能はなかったが、彼の芸術家としての資質がミュージシャンの生き方にあこがれを抱かせていた。1959年11月17日から1960年1月17日まで、リバプールの由緒あるウォーカー・アート・ギャラリーで、2年に1度開かれるジョン・ムーアズ展の第2回が開催され、サトクリフの描いた絵も出品された。そして、この作品にいたく感激したムーアズが、2か月におよぶ展覧会が終わると65ポンドで自らこの絵を購入したのである。これはわずかな奨学金で生活していた美術学生にとっては大金だった。両親はその金を芸術の勉強のために使うように願った。しかし、ジョン・レノンから熱心にグループに誘われていたサトクリフは、ヘフナーのプレジデント・ベースを買い、クオリーメンのメンバーとなる。ただその後、腕前は初心者の域を越えることがなかったので、客に未熟な演奏がばれないように、背中を向けて弾くことが多かった。

1960年3月14日から20日までの1週間、当時イギリスでトップ・クラスのポップ・ミュージック・プロモーターとして活躍していたラリー・パーンズが仕込んだパッケージ・ショーが、リバプール・エンパイアで行なわれ、エディ・コクランとジーン・ビンセントがトップ・ゲストとして出演した。この興行は大成功をおさめ、アラン・ウィリアムズの言葉を借りれば「大金のにおいがした」という。ウィリアムズはさっそくパーンズに書簡を送りつけると、電話を入れて、このふたりのトップ・ゲストとほかの何人かのサポート・アーティストを集め、5月3日にもう1回リバプールでショーをやりたい、それもパーンズと手を組んでやりたいと申し出た。場所はリバプール電話交換局の裏にあるピクステス・ストリートのリバプール・スタジアムで、ふだんはボクシングやレスリングの試合が行なわれる会場だった。出演者にはコクランとビンセントを筆頭に、デイビー・ジョーンズ(モンキーズのデイビーではなく、アメリカの黒人ロックンロール・シンガー)、ビスカウンツ、コ

リン・グリーン・アンド・ビート・ボーイズ(ジョージィ・フェイムを含む)、ピーター・ウィン、ランス・フォーチュン、ネロ・アンド・ヒズ・グラディエイターズ、そしてリバプールのグループでは、リーダーのブライアン・キャサーにちなんで名づけられたキャス・アンド・カサノバズ、ロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズといったバンドが顔をそろえていた。

チケットは順調に売れ、すべてはうまくいっていた。しかし、それもあの悲劇的な事故が起きるまでの話だった。4月17日、ブリストルのコンサート会場からロンドン空港に向かっていたコクランが、ウィルトシアのチッペンハム郊外で交通事故にあって死亡してしまったのだ。同乗していたビンセントは、昔のオートバイ事故ですでに障害があったが、今度は鎖骨を折る重傷を負った。しかしリバプールでのコンサートは16日後にせまっており、パーンズは中止に同意しなかった。ウィリアムズはパーンズからビンセントの出演の確約を取りつけると、ただでさえ多い出演者リストにパーンズの抱えるジュリアン・エックスとディーン・ウェブを加えた。さらにリバプールのグループ、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、ワラシーのグループでボブ・エバンズ・アンド・ヒズ・ファイブ・シリングス、マル・ペリー、そしてコノーツを加えた。

クオリーメンはスチュアート・サトクリフのアイデアで、バディ・ホリーのクリケッツにちなんでビータルズ(Beatals)に改名していた。依然としてドラマーがいないという理由で出演依頼がなかったため、メンバーは客としてこのコンサートに出かけ、将来の状況を予感させる大騒ぎのなか客席に座っていた。この当時、ウィリアムズが彼らに声をかけるのは、ジャカランダ・コーヒー・バーの女子トイレの内装を変えたいときだけだった。

パーンズはマージーサイドのロックンロール・バンドの気風に感激し、すばらしい原石の宝庫にめぐり合ったことを知った。ショーのあとジャカランダにやってきたパーンズは、自分が抱えているソロ・シンガーたちのツアーでバックを務めるバンドをいくつか探していることをウィリアムズに打ち明けた。ちなみに、パーンズはシンガーたちに次のような勇ましいステージ・ネームをつけていた。ビリー・フューリー、ダフィ・パワー、トミー・スティール、ディッキー・プライド、ジョージィ・フェイム、ジョニー・ジェントル、ネルソン・キーン、ランス・フォーチュン、マーティー・ワイルド、ビンス・イーガーといった具合だ。とくに全国ツアーを間近に控えたフューリーはバック・バンドを切実に求めていた。そこで、1週間後にパーンズがフューリーをリバプールに連れてきて、有望なバンドをいくつかオーディションしてみる約束になった。

その週の5月5日、ウィリアムズはブライアン・キャサーから紹介されたトミー・ムーアという男を、ビータルズのドラマーとして連れてきた。ほかのメンバーたちよりかなり年上だったが、ドラマーには変わりないということで歓迎された。また、キャサーはぶしつけにビータルズというバンド名はばかみたいだと指摘し、ロング・ジョン・アンド・シルバー・ビートルズ(Silver Beetles)というグループ名はどうかと提案した。ジョンはロング・ジョンと呼ばれるのを嫌がったが、そっちのほうがいいのならと、とりあえずシルバー・ビートルズにすることになった。

パーンズとフューリーによるオーディションはシール・ストリート108番地にあるワイバーン・ソーシャル・クラブで、5月10日、午前10時30分から午後4時30分まで行なわれた。そこはアラン・ウィリアムズが新しく手に入れたクラブで、ブルー・エンジェルというナイトクラブとして改装する予定になっていた。キャス・アンド・カサノバズ、デリー・アンド・シニアーズ、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、クリフ・ロバーツ・アン

ド・ロッカーズなど、リバプールのトップ・クラスのビート・グループが、ロンドンからやってきたスターと大物興行師の前で演奏した。シルバー・ビートルズも演奏することになっていて、演奏曲のチェックなどしていた。しかし、出番がきてもドラマーのトミー・ムーアが来ない。そのころ彼は、また町のクラブからドラム・キットを調達している最中だったのだ。仕方なく、カサノバズのたくましいドラマー、ジョニー・ハッチンソンが代理を務めた。ムーアが現れたのは、シルバー・ビートルズの4曲10分間のオーディションが半分を過ぎたころだった。

真偽のほどは定かではないが、ウィリアムズによれば、パーンズもフューリーもシルバー・ビートルズを気に入ったが、横を向いてつたない演奏をしていたスチュアート・サトクリフのベースだけがネックになったという。パーンズはツアーへの同行をえさにして、サトクリフをやめさせないかとほかのメンバーにもちかけたが、バンドの結束の前にあっさり断られたという。しかし、パーンズはこの話を覚えていない。遅刻してあわてて駆け込んできたドラマーのトミー・ムーアを見て、がっかりしたことだけが印象に残っているという。

結局、その日ビリー・フューリーのバック・バンドは決まらなかった。しかし、パーンズは自分が抱えているなかで少し格が落ちるジョニー・ジェントルのイギリス北東部ツアーとスコットランド・ツアーに、ウィリアムズのバンド2組を連れていくことを申し出た。これにシルバー・ビートルズは真っ先に選ばれた。大工見習いだった20歳のリバプール出身のシンガー、ジョニー・ジェントルのバック・バンドとして、9日間で7ステージというスコットランド・ツアーを依頼され、5月18日、彼らは喜んで承諾した。報酬はひとりあたり週給18ポンド、さらに経費の一部も支払われる約束だった。

準備期間は2日しかなく、プロモーターのブライアン・ケリーがせっかくブッキングしてくれたシーフォースのレイゾム・ホールでのステージをキャンセルすることを知らせるような気も回らなかった。ジョージとトミー・ムーアは大急ぎで欠勤届けを出し、ポールは家を離れて休養すれば次の試験でAを取れるからと父親を説得し、ジョンとスチュアートは学校をさぼることにした。

スコットランド・ツアーへ

初めてのツアーに出発する前、3人のメンバーはそれぞれステージ・ネームを考えた。ポールはポール・ラモーン、ジョージはアメリカのロカビリー・シンガーのカール・パーキンスの名をとってカール・ハリスン、スチュアートはロシアの芸術家ニコラ・ド・スタールにちなんで、スチュアート・ド・スタール。というわけで、名前が大きく貼り出され、富と名声を得て女の子たちに追いかけられることを夢見ながら、メンバーはリバプールのライム・ストリート駅からアロア行きの列車に乗った。

ところが、このツアーの計画はかなりずさんで、大きな失望を味わうことになる。アロアの公演が終わると、インバーネスからピーターヘッドまでおよそ180キロのスコットランド北東の海岸に沿って、6つの町を訪れることになっていた。しかし、パーンズと、スコットランドの手配師でダンフリーズで養鶏場をやっていた年配のダンカン・マッキノンは、移動のことなど考えずに日程を組んでいたのである。そのため一行はハイランド州の険しい道路を不必要に行ったり来たりし、結局のべ480キロも移動させられることになった。そして5月23日、インバーネスからフレザーバーグに向かう途中、休憩したいという運転手のゲリー・スコッ

CamScannerでスキャン

トに代わり、ジョニー・ジェントルがバンのハンドルを握っていたときのことだ。疲れていて、アルコールも入っていたジェントルは、バンフ郊外の交差点で停車中のフォードのワゴンに追突してしまった。ワゴンに乗っていたふたりの老女はかなりの衝撃を受け、ジェントルも処分をまぬがれることはできなかった。最悪の被害を被ったのは、飛んできたギター・ケースがもろに顔面に命中したトミー・ムーアだった。前歯が数本折れ、脳震盪を起こして病院に運ばれてしまったのだ。しかし、フレザーバーグのダルリンプル・ホールのマネージャーは、ジョンに案内されて病院に駆けつけると、ベッドからムーアを引きずり出し、ステージでドラムを叩く義務があると怒鳴りつけた。

日を重ねるにつれて、ツアーは収拾がつかなくなっていった。せまいバンの中で、みんないらいらしていた。とくに、辛辣で、ズケズケ言うジョンの標的にされていたトミーとスチュアートは、ひどくヒステリックになっていた。さらに悪いことに、持ち金も底をついてきた。食事の回数も減り、うっかり金があると知られたら、ほかの全員にたかられる始末。ラリー・パーンズは、3日前に報酬を支払ったばかりだというのに、ジョンが興奮した声で「早く金を払えよ」と5月23日にコレクトコールで電話してきたことを覚えているという。フォレスでは、金に困って支払いをせずにロイヤル・ステーション・ホテルを抜け出した。

5月29日、落胆し、空腹のまま、ほとんど無一文になったシルバー・ビートルズは薄汚れてリバプールに戻ってきた。しかし、きらびやかなロックンロール・ビジネスの厳しい現実のなかでのしのぎ方は少し身についたようだった。7月半ば、今度はディッキー・プライドのバック・バンドとして同じスコットランドの北東部をまわるという話がきたが、この話はボツになった。ただ、喜ばしいことに、スコットランド・ツアーのあいだ、ウィリアムズはリバプールでは初めてのプロとしての契約を取りつけてくれていた。ワラシーのプロモーターであるレス・ドッドと、ワンステージ10ポンド（ひとりにつき2ポンド）という出演契約だった。ドッドは、ワラシーのリスカードのグロブナー・ボールルームとネストンのインスティチュート・ホールで、ダンス・パーティーを手がけている男だった。しかし、どのホールもダンスよりケンカが多いことで有名で、実際、ネストンではビートルズがステージで演奏しているあいだにひとりの少年が蹴り回され、死にかけたことがあった。

ウィリアムズはまた、自分が経営するジャカランダ・コーヒー・バーのせまい地下室で、専属バンドのロイヤル・カリビアン・スティール・バンドが休みの月曜の夜、シルバー・ビートルズのメンバーにコカ・コーラとビーンズとトーストの現物支給という条件で演奏させた。マイク・スタンドがなかったため、ガールフレンドたちが足元に座り、逆さにしたほうきやモップの柄を支え、その先端にマイクをくくりつけていた。

トミー・ムーアがグループで最後に演奏したのは、おそらく6月13日のジャカランダでのステージだ。もっとちゃんとした仕事で稼げるのにバンドで時間をむだにしていると、ガールフレンドにいつも非難されていたからだ。もっともな理由だったし、ジョン・レノンのいやみにも愛想をつかしていた。

6月9日にネストン・インスティチュートに出演したあと、ムーアはシルバー・ビートルズをやめる決心をした。6月11日、ワラシーのグロブナー・ボールルームに向かうための集合場所だったジャカランダ・コーヒー・バーに、ムーアは姿を現さなかった。メンバーたちはあわててウィリアムズの車に乗り込み、猛スピードでトクステスのファーン・グローブにあるムーアの家に向かった。ムーアはいなかったが、ガールフレンドが2階の窓から身をのりだし、「帰ってよ。彼はガーストンのボトリング工場で働いているんだから。もうあんた

たちとは縁を切ったの」と叫んだ。ウィンドー・レインの工場に行ってみると、白いつなぎの服を着たムーアが、仏頂面をして背の高いフォークリフトの運転席に座っていた。

いくら頼んでも、ムーアは運転席から降りてこなかった。メンバーたちは、仕方なく持ち主のいないドラム・セットを持ってグロブナーに向かった。ただでさえ弱みにつけ込む高圧的なホールの責任者は、ドラマー不在とわかれば猛烈に怒り出すに決まっていた。機転をきかせたジョンは、彼の怒りをやわらげようと、ステージに上がると、誰か代わりにドラムを叩きたい奴はいないかと、冗談っぽく問いかけた。この冗談が災いをもたらした。地元の不良少年のボスで、ずう体のでかいロニーというテディ・ボーイがステージによじのぼると、ムーアが分割払いで購入した大事なドラム・セットに腰をおろし、薄笑いを浮かべたのだ。しかも、ロニーがこれまでドラムに触ったことすらないのは明らかだった。休憩時間に、ジョンは抜け出すと、大あわてで、しかし見つからないようにウィリアムズに電話をかけた。グロブナーに飛んできたウィリアムズは、ロニーが「俺をバンドのメンバーにしろ、さもなければ……」などと脅し始める前に、何とかメンバーとドラム・セットを救い出した。

ムーアが抜けて、シルバー・ビートルズはまたもとのドラマー不在に戻った。再びロニーのときのようなへまをしないよう肝に命じながら、しばらくはドラマーなしでやっていたが、グロブナー・ボールルームでの土曜の夜の契約がひととおり終わると、どこからも誘いが来なくなった。

ウィリアムズが、シルバー・ビートルズ（Silver Beatlesに綴りを変えた）に、もっとも風変わりな仕事を依頼をしてきたのは、おそらく7月初めのことだ。ウィリアムズは、いつも葉巻をくわえていたのでウッドバイン卿と呼ばれていた西インド諸島の紳士と共同で、リバプールのアッパー・パーラメント・ストリート174a番地にあるビクトリア様式の家屋の薄暗い地下室に、無許可のストリップ・クラブ、ニュー・キャバレー・アーティスツをオープンした。このあたりは、娼館やもぐりのいかがわしい居酒屋などがある、いわゆる歓楽街だった。

あるとき、ウィリアムズのところにストリッパーのジャニスという娘が連れてこられた。彼女は店で働くことを承諾したが、レコードではなく、生バンドの演奏でなければ脱がないと言い張った。ルックスのいいジャニスが売れっ子になるのは目に見えていたので、ウィリアムズは仕方なくその主張を聞き入れ、唯一レギュラーのなかったシルバー・ビートルズに声をかけた。最初はきっぱり断ったが、ひと晩にひとり10シリング払うという誘惑には勝てなかった。1週間、シルバー・ビートルズは全員がギターとアンプを、およそ2メートル四方のせまいステージに持ち込んで、ジャニスの姿にうめき続ける垢にまみれたコート姿の男たちの前で演奏するはめになった。ジャニスはバック・バンドのためにベートーベンやハチャトゥリアンの楽譜を持ってきたが、譜面を読めないメンバーたちには役に立たなかった。代わりに、'Harry Lime' 'Summertime' 'Moonglow And The Theme From Picnic' 'September Song' 'It's A Long Way To Tipperary' 'Begin The Beguine' といった古いスタンダード・ナンバーを演奏した。ビートルズのキャリアのなかで、間違いなくどん底のものだった。

ストリップ・クラブでの仕事のあと、新ドラマーとしてノーマン・チャップマンが加わった。額縁の製作や修繕の仕事をしていたチャップマンにとって、ドラムは単なる趣味にすぎなかった。分割払いで買ったドラム・セットで、スレイター・ストリートのジャカランダの真向かいにある事務所でよく練習していた。ウィリア

CamScannerでスキャン

ムズとシルバー・ビートルズが、通りの向こう側から聞こえてくるチャップマンのドラムの音に気をとめたのは、ある夏のたそがれどきだった。その演奏が気に入って、どこで叩いているのかと、しばらく探し回って、やっとチャップマンに出会い、バンドに入らないかと誘った。彼は承諾した。しかし、その後すぐに徴兵で2年間ケニアとクウェートに行くことが決まり、チャップマンのシルバー・ビートルズとしてのキャリアは、グロブナー・ボールルームでの3回の土曜のステージで終わった。

ハンブルクへ

6月の終わり、ジャカランダの専属だったロイヤル・カリビアン・スティール・バンドが、ケトルドラム（ティンパニ）などの楽器もろとも、西ドイツから来たビジネスマンにハンブルクの波止場にあるクラブへ引き抜かれた。ウィリアムズにはこの話は寝耳に水だった。夜逃げのように去ったのを悪びれもせず、ハンブルクでは手っ取り早く金を稼げるし、とくに悪名高い赤線地区のレーパーバーンではそれ以上に、女も手に入り、楽しくて仕方がないといったことを書きつらねた手紙が、バンドのメンバーからウィリアムズのもとに届いた。「ここで演奏できそうなバンドの連中を連れて見にこないか」とも書いてあった。うまい話には絶対に食いつくウィリアムズはこの誘いにのった。そこでまず、今にも落ちそうなダコタ飛行機をチャーターし、ウッドバイン卿と地元のビジネスマン一行を連れて、よこしまな週末を過ごすためにアムステルダムに飛んだ。そこから、ふたりはいかにもそれらしくシルクハットをかぶり、期待で胸をおどらせながらハンブルクまでの列車の旅に出た。

ウィリアムズはリバプールを出発する前に、シルバー・ビートルズ、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、キャス・アンド・カサノバズ、スピナーズ・フォーク・グループ、ノエル・ウォーカーズ・ストンパーズ（地元のトラッド・ジャズ・バンド）に数曲ずつテープに録音させていた。向こうで売り込むためだった。しかし、グロッセ・フライハイトにある「カイザーケラー」というナイト・クラブのオーナー、ブルーノ・コシュミダーの前で強引に売り込みながら再生した2トラックのリール・テープからは、何も流れてこなかった。ヨーロッパ大陸までの飛行機と列車の波乱に富んだ旅の途中で、どうやらテープの音が消えてしまったらしい。

ハンブルクでバンドを売り込むことに失敗したウィリアムズは、すっかり気落ちしてリバプールに戻った。しかし、運命のいたずらがラリー・パーンズを介してやってきたのだ。ロンドンの興業師パーンズは、夏のあいだ、ブラックプールとグレート・ヤーマスでステージの予定がある歌手のバック・バンドを提供してくれないかと、ウィリアムズに頼みに来たのだ。選ばれたデリー・アンド・シニアーズは、この話に取り組むため、それまでの仕事を辞めた。ところが、パーンズが申しわけないがキャンセルすると言ってきた。バンドのメンバーは憤慨した。とりわけハウイ・ケイシーという大柄なサックス奏者は、パーンズをひどい目にあわせてやると脅した。どうしようもなくなって、ウィリアムズはバンドのメンバーを車に乗せ、トミー・スティールなどの大物を生み出したロンドンのソーホー地区にあるトゥー・アイズ・コーヒー・バーに連れていった。このバーのオーナーのトミー・リトルウッドは、ウィリアムズの友人だった。彼は喜んでリバプールのバンドを迎え入れ、ワンステージ分の演奏を認めた。そのとき、まさに偶然にバーに居あわせてコーヒーをすすっていたのが、はるかかなたのハンブルクのカイザーケラーのオーナー、ブルーノ・コシュミダーだった。

コシュミダーは、数週間前にウィリアムズがドイツまでやってきて自分のバンドは世界一だと自慢したこ

とが気にかかっていた。そこで、自分からイギリスに渡り、自分の目でどんなすごいバンドがいるのか確かめることにした。当然のことながらコシュミダーは、リバプールではなく、ポップ・ミュージックの本場であるロンドンを訪れた。コシュミダーは英語を話せなかったため、隣のヘブン・アンド・ヘルというコーヒー・バーにいたオーストリア人のシュタイナーという男が通訳として呼ばれた。このときデリー・アンド・シニアーズに興味を持ったコシュミダーは、1日ひとりあたり30ドイツマルクの報酬を提示し、出演契約を交わした。7月24日のことだった。そして7月31日には、このバンドは「カイザーケラー」のステージに立っていた。

先にハンブルクに来ていたロイヤル・カリビアン・スティール・バンドと同様に、デリー・アンド・シニアーズからも、生き生きとして興奮した様子の手紙がウィリアムズのもとに届いた。その2日後には、コシュミダーからも手紙がきた。カイザーケラーの店が大盛況なので、近くのインドラというストリップ・クラブをつぶして新しいライブハウスにしたいから、次のバンドを紹介してくれないか、という内容だった。ウィリアムズはもちろん承諾したが、どのバンドを送るかは決めかねていた。シルバー・ビートルズにはドラマーがいないことを考慮したうえで、まず、ロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズを候補にあげたが、彼らはウェールズ北部のプールヘリーにあるバトリンズで夏いっぱい演奏することになっていた。キャス・アンド・カサノバズも、ダフィ・パワーのバックでスコットランドを回っていた。ジェリー・アンド・ペースメイカーズにも声をかけたが、数か月後には西ドイツに行くことになる彼らも、この時点では話にのってこなかった。仕方なくウィリアムズは、自分たちでドラマーを見つけてくるという条件つきで、シルバー・ビートルズを行かせることにした。

ウィリアムズは、デリー・アンド・シニアーズに、近いうちにシルバー・ビートルズが行くからよろしく頼むという丁寧な手紙を出した。しかし、シニアーズのメンバーであるハウイ・ケイシーから届いた返事には、あんなゴミ・バンドに来てもらっても迷惑するだけだという、強い抗議が遠慮なく書かれていた。手紙にはデリーを除くシニアーズ全員の署名も入っていた。

1960年8月6日、ワラシー・コーポレーションは、シルバー・ビートルズが出演していたリスカードの「グロブナー・ボールルーム」での土曜のダンス・パーティーを中止することに決定した。10代の客のなかでも騒々しい連中のけたたましさと騒動に反対する地元住民の声についに屈したためだ。演奏する場をなくしたシルバー・ビートルズの4人は、ウエスト・ダービーをうろつき、数か月ごぶさたしていた「カスバ・クラブ」に再び出入りするようになった。クラブはとても繁盛しており、ブラックジャックスというバンドがレギュラーで出演していた。バンドのギタリストは、1年にも満たない前に3ポンドの出演料のことでケンカ別れしたケン・ブラウンだった。ドラマーは、クラブのオーナーであるモナ・ベストの息子だった。ピートと呼ばれていた当時18歳のランドルフ・ピーター・ベストである。ピートはシャイだったが、新しいぴかぴかのドラム・セットを自慢げに叩いていた。このふたりとチャス・ニュービー、そしてビル・バーローがブラックジャックスのメンバーだった。ピートはグラマー・スクールを卒業したばかりで、自分のバンドであるブラックジャックスは解散寸前ではあったが、誰と一緒というわけでもなく、とにかくプロのドラマーになることをめざしていた。しかし、ほかのメンバーたちは、「くだらない」音楽をやめ、そろそろまともな仕事に就くほうに気持ちが傾く年齢に達しており、まもなくバンドは解散した。たとえば、ブラウンはロンドンに行き、そのまま帰ってこなかった。エセックスのハーローで職を見つけたニュービーは、再び勉強するためにリバプールに戻り、セント・

CamScannerでスキャン

ヘレンズにある大学に入学した。

バンドをなくしたドラマーと、とくにその新品のドラム・セットに目をつけたシルバー・ビートルズの面々は、ハンブルクに行くために、さっそくピートに声をかけた。8月12日、ワイバーン・ソーシャル・クラブでほとんど形式ばかりのオーディションが行なわれた。メンバーたちは最初から彼を加えることに決めていたため、このオーディションでピートが落ちることはあり得なかった。ピートが加入して、シルバー・ビートルズはめでたくハンブルクへの切符を手にしたのである。

メンバーは大急ぎでパスポートとビザを申請した。しかし、面倒な労働許可の申請については都合よく忘れていた(これはコシュミダーにまかされていたが、彼もまた忘れていた)。シルバー・ビートルズからザ・ビートルズと名前を変えた5人のメンバーは、アラン・ウィリアムズ、彼の妻のベリル、彼女の兄弟のバリー・チャン、そしてウッドバイン卿とともに、ウィリアムズの緑色のオースティン・バンに乗り、機材一式も積み込んで、ハンブルクに向けて出発した。途中ロンドンのヘブン・アンド・ヘルに立ち寄り、通訳代わりのシュタイナーを同乗させた一行は、のらりくらりとハリッジに向かい、そこからオランダのフーク・ファン・ホラント港行きのフェリーに乗った。オランダに到着したあと、満員のバンはゆっくりとオランダを横断し、西ドイツに入った。

ハンブルクにたどりついたのは、8月17日の夕方、歓楽街が活気づき始める時刻だった。グロッセ・フライハイトではさまざまなネオンが、道の両側はもちろん頭上でも点滅し、店のショー・ウィンドーの向こうには臆面もなく肌をあらわにした娼婦が座り、客を待っていた。「カイザーケラー」では、デリー・アンド・シニアーズがまさにステージに上がろうとしているところだった。ビートルズが店に入っていくと、彼らはあからさまに冷たい態度をとった。

グロッセ・フライハイト36番地にある「カイザーケラー」は、かなり豪華なナイトスポットで、この手の店にはめずらしく海のイメージで統一され、照明も立派だった。その点、ビートルズが出演することになった58番地にある「インドラ」は正反対だった。このみすぼらしいストリップ小屋を音楽とダンスの店に作りかえるにあたって、明らかにコシュミダーはほとんど、あるいはまったく金を使っていなかった。「インドラ」はせまくて陰気で、古ぼけていた。ちっぽけなステージ、ごてごてしたカーテン、絨毯敷きの床、ちっぽけな赤いランプをすえつけた小さなテーブルといった典型的なストリップ・クラブの内装がそのまま残されていた。それにも増してひどかったのが、ビートルズに与えられた宿泊場所だった。最初の夜はコシュミダーのアパートに泊めてもらい、2日めにはコシュミダーが経営している汚い映画館に連れていかれた。パウル・ローゼン街33番地のバンビ・キノ(映画館)である。なぜこんなすたれた古い西部劇専門の映画館に連れてこられたのかわけもわからず、コシュミダーのうしろにくっついて、黄ばんだスクリーンの裏にある小さくて汚い部屋に入ると、西部劇の音が響きわたる部屋で、「ここが、君たちの寝る場所だ」とコシュミダーが通訳を介して言った。それから劇場のトイレを指さすと、「顔を洗いたければ、あそこを使え」と言った。せめてものなぐさめとなったのは、豪華な「カイザーケラー」に出演しているデリー・アンド・シニアーズでさえ、同じくらいひどい場所に寝泊まりしていると知ったことだった。

「インドラ」のステージに出演する前に、ささやかな商談が行なわれた。つまり契約である。8月17日から10月16日までの2か月契約で、報酬はひとり1日あたり30ドイツマルクで、毎週木曜日に支払われるという内

容だった。さらに、ウィリアムズには仲介料として毎週10ポンド相当の金額が、ハンブルクのセント・パウリにある銀行に作った口座に振り込まれた。ビートルズは、平日の夜は4時間半(8:00-9:30、10:00-11:00、11:30-12:30、1:00-2:00)、土曜の夜は6時間(7:00-8:30、9:00-10:00、10:30-11:30、12:00-1:00、1:30-3:00)、そして日曜の夜は6時間(5:00-6:00、6:30-7:30、8:00-9:00、9:30-10:30、11:00-12:00、12:30-1:30)演奏することになった。また、ブルーノ・コシュミダー・エージェンシーから同意書を得ないかぎり、半径40キロ以内にあるほかの場所で演奏してはならないことも契約書に注記された。

8月17日、前日リバプールを出発してから食事も睡眠もほとんどとっていないビートルズの5人は、疲れきった状態で、ハンブルクでの初ステージに立った。客は5人ほど。しばらくすると店の上階に住む年配の女性から苦情が寄せられた。彼女は、騒音には耐えられないとコシュミダーに抗議し、警察にまで訴えた。解決策はひとつしかなかった。ただでさえ貧弱なアンプのボリュームをさらに落とすことだ。これはバンドには致命的だった。'Long Tall Sally'は、どうあってもひっそりと歌う曲ではない。10月4日、ビート・ミュージック用にオープンしてからわずか48日目に、コシュミダーはついにこのライブハウスを閉め、あいかわらず繁盛しているカイザーケラーにビートルズを出演させることにした。

「カイザーケラー」でビートルズが直面した唯一の問題は、傷んではいるがかなり巨大なステージだった。1年前、リバプールとマンチェスターでのキャロル・リービスのオーディションで、ジョン、ポール、ジョージの3人が5分間の演奏を4回こなしたことを除けば、これほど大きいステージで演奏するのは初めてだった。これに比べれば、「インドラ」のステージなどマッチ箱のようだった。10月10日まで、ビートルズは棒立ちで演奏していた。この日、再びハンブルクに来ていたアラン・ウィリアムズは、この姿に我慢できなくなって叫んだ。「メイク・ア・ショー、ボーイズ!(しっかり見せろ)」。コシュミダーとカイザーケラーの常連客は、すぐにこの言葉をドイツ語なまりで覚えて、バンドへのエールにした。「マック・シャウ!」と。そして長い夜を通して、グループの演奏がだれてくると、いつでもこのエールを送るようになった。

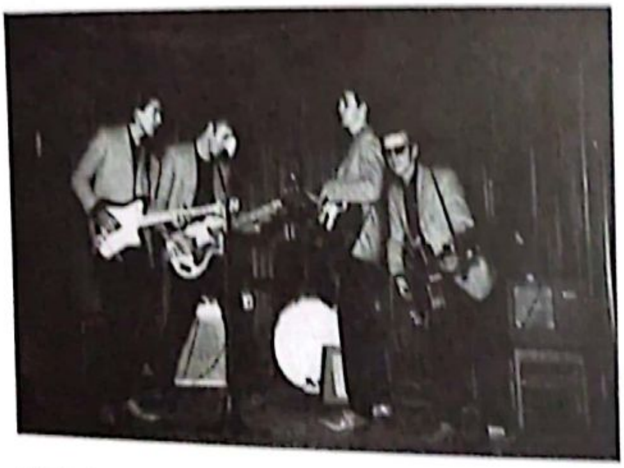
この声援に元気づけられたビートルズは、信じられないほどに見違えるパフォーマンスを見せた。4人のギタリストは思いきり体をよじらせ、くねらせた。ジョンは、リバプール・スタジアムで見た片足に障害のあるジーン・ビンセントそっくりの動きを大げさにやってみせた。文字どおり、一夜にしてビートルズはとにかく騒々しいハンブルクの客を大いに喜ばせた。ビートルズは次第に人気者になり、演奏中にも客からビールを1ダースか2ダースおごられるようになった。ごろつきの多い常連客の性格をよく心得ていたメンバーは、決して断ったりしなかった。「'Hound Dog'を歌えば2ダースおごるぞ!」といった言葉があたりまえのように飛びかった。アルコールの効果は、さまざまな色の錠剤を合わせて飲むと絶大だった。ピート・ベスト以外のメンバーは、ステージでの長い夜のあいだ、眠くならずにじゅうぶんなエネルギーを発揮できるようにと、興奮剤を飲むことが多かったという。ビートルズに対する客の注文は、とどまるところを知らず、客が「マック・シャウ!」と叫んだら、客を喜ばせるためにビートルズにやれないことはなかった。ジョンなどはそのうち、「くそナチス野郎!」と客に向かって怒鳴りながら、ナチスの腕章をつけ、ナチス流の敬礼や上げ足歩調を披露するまでになっていた。戦後わずか15年のドイツでは、どれも違法行為だった。

10月2日、デリー・アンド・シニアーズはコシュミダーとの契約が切れて、しばらくハンブルクをうろついてからイギリスに帰った。代わりにやってきたのが、バトリンズでの夏季ステージを終えて意気あがるロリー・

CamScannerでスキャン

ストーム・アンド・ハリケーンズだった。10月4日から、「カイザーケラー」ではビートルズとロリーのバンドが交替で演奏するようになった。2組のバンドは、日増しにガタついてくる腐りかけたステージを、どちらが早く壊すかを競い合って楽しんだ。結局、'Blue Suede Shoes'を歌いながらジャンプし、わざと力いっぱい床を踏みつけたロリーが勝った。しかしロリーはコシュミダーから大目玉をくらい、修繕費としてギャラから65ドイツマルクを天引きされるはめになった。

1960年にも、ビートルズはレコードを自主制作している。アラン・ウィリアムズがハンブルクに来ていた10月15日、ビートルズはロリー・ストームのバンドのドラマーだったリンゴ・スターと、ベースとボーカルを担当していたウォルター・イーモンド（芸名ルー・ウォルターズ、ニックネームはウォーリー）と一緒に、ハンブルクのセントラル・ステーションの裏、キルヒェナレー57番地にあるアクスティックという小さなスタジオに入った。ピート・ベストがいなかったので、イーモンドを除けば、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの4人が初めて一緒に演奏したことになる。ジョージ・ガーシュインの'Summertime'を録音し、78回転のレコードの片面に収録された。裏面は、革製のハンドバッグと靴の宣伝メッセージだった。全部で9枚のレコードがカットされたが、現存することが知られているのは1枚だけである。



揃いのスーツを着た
ジョージ、ジョン、ポール、そして
サングラスをかけた
スチュアート・サトクリフ

ハンブルクのインドラ・クラブで
演奏するビートルズ。
音がうるさいと近所から苦情が来た

国外追放

10月16日、ビートルズとコシュミダーとの契約期間が、12月31日までに更新された。さらに、1961年の1月7日から西ベルリンで1か月間働くという話も出た。そして、10月末に、レーパーバーン136番地にある、元はセックス・ショーを売りにしていたバラエティ劇場に、「トップ・テン」という新しいクラブがオープンした。オーナーのペーター・エクホルンは明らかにカイザーケラーをつぶそうとねらっていて、ブルーノ・コシュミダーの雇っていた用心棒、元ボクシング・チャンピオンのホルスト・ファッシャーを引き抜いた。物騒なハンブルクのクラブ界隈では、用心棒はなくてはならない存在だった。エクホルンはさらに、すでに何枚かのレコードを出してテレビにも出演し、ひとかどのアーティストになっていたイギリスのシンガー兼ギタリスト、トニー・シェリダン(本名アンソニー・エズモンド・シェリダン・マクギニティ)と出演契約を結んだ。シェリダンを尊敬していたビートルズのメンバーは、「カイザーケラー」での30分間の休憩中、店を抜け出しては「トップ・テン」まで走った。ビートルズは自然のなりゆきで、シェリダン、そしてロンドンから来た彼のバンド、ジェッツと共演するようになっていた。

ほかの店で演奏しているという契約違反の噂は、すぐにコシュミダーの耳に入った。ステージを壊されたことでビートルズとロリー・ストームにはかなり頭にきていたコシュミダーは、もうたくさんだと考えた。そこでビートルズに、許可なく半径およそ40キロ以内の場所で演奏してはならないという条項に違反したことを指摘し、1か月で契約を破棄するという書状を渡した。また、どういう経緯からか、ジョージ・ハリスンが18歳未満であることが警察当局に知れてしまった。西ドイツの法律では、18歳未満で深夜以降ナイトクラブに入ることは違法であり、働くなどもってのほかだった。

ビートルズは残りの契約期間をやる気のない態度で消化していた。その一方で11月21日、法律を故意に犯したとして、ジョージは当局から国外追放を命じられた。ジョージは鉄道料金とポーターへのチップとタクシー代に持ち金をすべてはたき、リバプールに帰った。1日がかりの大変なひとり旅だった。4人になったビートルズは、カイザーケラーで最低限の時間だけ演奏し、時間が許すかぎり「トップ・テン」に顔を出した。オーナーのペーター・エクホルンは、クラブの屋根裏にある2段ベッドを使ってもいいと言ってくれた。おせじにも豪華ではなかったが、バンビ・キノの悲惨なねぐらに比べれば5つ星ホテルなみだった。

11月も終わろうという日、おそらく29日ごろ、ポール・マッカートニーとピート・ベストは荷物をまとめるためこっそり映画館に戻った。劇場はもう閉まり、真っ暗で、懐中電灯もろうそくもなかった。薄暗い光のなかで、ポールとピートは衣類をまとめた。魔がさしたふたりは、ちょっとしたいたずらで壁に打ち付けてある釘にコンドームをひっかけ火をつけた。

数時間後、ビートルズのふたりが「映画館に火をつけた」とコシュミダーが警察に訴えた。ポールは放火の疑いで逮捕され、セント・パウリ警察の留置場に収監された。ほどなくピートもそこに加わった。ふたりは留置所でひと晩過ごし、翌朝釈放された。疲れきったふたりは、新しいねぐらとなったトップ・テンの屋根裏に戻り、すぐに眠りについたが、昼過ぎにドアを激しく叩く音で目が覚めた。ピートが寝ぼけながら鍵をはずしてドアを開けると、ふたりの私服警官が立っており、すぐに服を着て外に出るよう要請した。ポールとピートは車に放り込まれ、そのままハンブルク警察本部に連行された。待ち受けていたガーキンス刑事は、ふたりに深夜の飛行機でロンドンに強制送還処分になったと言いわたした。警察はポールとピート

を再びトップ・テンに連れていき、5分で荷物をまとめるように言った。ピートはドラム・セットを置いていかざるを得なかった。ポールはギター・ケースをかついでいくことにした。ふたりは夜中まで留置場に拘置されたあと、空港に連れていかれた。言葉もわからず唖然としていたふたりには、わけがわからなかった。とりあえず英国公使館に電話したいと申し出たが断られ、数時間後には早くもふたりはロンドン空港に到着していた。ユーストン駅までの早朝バスとリバプールまでの列車に乗れる程度の金は持っていた。12月1日のことだった。

ポールとピートが強制送還される前日の11月30日、もうひとつの出来事があった。ビートルズはベーター・エクホルンと、国外追放処分がとけることになる翌年4月に1か月間「トップ・テン・クラブ」に出演するという仮契約を交わしたのだ。しかし、アラン・ウィリアムズはこの話を聞かされておらず、それがビートルズとの関係をこじらせることになる。

ビートルズの3人のメンバーが国外追放されてからまもなく、西ドイツ警察はジョン・レノンとスチュアート・サトクリフに対しても同じ動きを見せ始めた。12月10日の朝、ジョンは自分から列車でイギリスに帰る決心をした。この旅のあいだ、ジョンは大切なアンプを盗まれないように背中にくくりつけていた。一方、スチュアートはアストリット・キルヒヘルというハンブルクの女性のもとで、身をひそめていた。スチュアートとアストリットはすでに婚約していた（アストリットは写真家で、ハンブルク滞在中のビートルズを撮影した）。スチュアートがリバプールに戻ったのは、1961年2月末だった。

リバプールで人気が急上昇

しばらくの間、ポール、ジョージ、そしてピートは、ジョンがリバプールに戻ったことを知らなかった。12月15日まで、ジョンから連絡もなかったし、誰もジョンを見かけなかったからだ。しかし、合流すると4人は地元で出演できる場所を探すことにした。サトクリフが帰ってきていなかったため、まずベース・プレイヤーを探すことが先決だった。ピートはブラックジャックスのケン・ブラウンはどうかと提案したが、ケンは当時ロンドンに住んでいたし、クオリーメン時代に一度ケンカ別れした相手を呼び戻したいとは思わなかった。ピートは、次にブラックジャックスのリズム・ギタリスト、チャス・ニュービーを候補にあげた。エバートンの自宅に電話したところ、クリスマス休暇で大学が休みだから、手伝ってもいいという返事だった。ニュービーにはポール・マッカートニーとの共通点がふたつある。まず誕生日がふたりとも6月18日（ニュービーは1941年、ポールは1942年）であること。もうひとつは左利きであることだ。ニュービーはベース・ギターもビートルズがハンブルクでユニフォームにしていたレザー・ジャケットも持っていなかったので、どちらも借りて参加した。しかし、1月になると大学に戻ったため、実際には4日間しかプレイしなかった。ニュービーのその後の消息は不明である。

12月17日、5人編成のビートルズがハンブルクから戻ったあと最初に演奏したのは「カスバ・クラブ」だった。さらに、大みそかにもこのクラブに出演することが決まった。12月19日には、アラン・ウィリアムズが、以前レギュラーで出演していたワラシーのグロブナー・ボールルームでのクリスマス・イブ・パーティーへの出演を決めてきた。しかし、すべてが順調に進み始めたのは、12月27日、リザーランドのタウン・ホール・ボールルームで行なわれたショーがきっかけだった。この日を境に、ビートルズはマージーサイドのロックン

ロール・バンドの第一人者として急速に人気を集めていった。

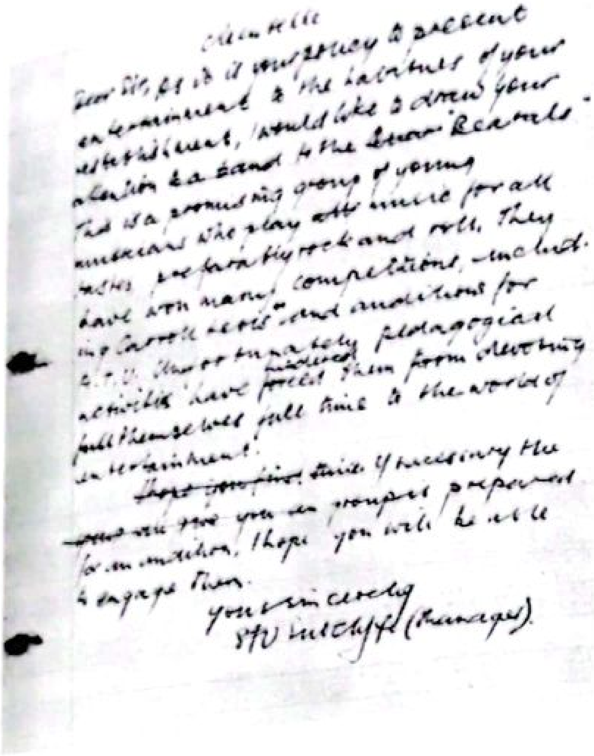
ビートルズをこの日のパーティーに出演させたのは、学歴があって少し前まで鉄道事務所で働いていた28歳のボブ・ウーラーだった。ハンブルクから壮大なアイデアを抱えて帰ってきたアラン・ウィリアムズは、12月1日、リバプール中心街のソーホー・ストリート100番地に、新しく無許可のキャバレー、トップ・テン・クラブをオープンした。ウーラーは安定した鉄道の仕事を辞め、このクラブのDJとなった。オープニング・ウイークには、地元のバンドのほかポップ・ミュージック界でもスター的な存在であるテリー・ディーンとギャリー・ミルズが出演し、そのあとの4週間も、デイビー・ジョーンズ、ダニー・リバース、マイケル・コックス、ドン・フォックスが顔をそろえていた。しかし、12月6日、客がすべて帰った直後の午後11時半ごろ、おそらく放火魔の犯行で、と言っても証拠は何もなかったが、このクラブは火事で全焼してしまった。

仕事をなくしたウーラーは、ジャカランダで暇をつぶしているとき、ビートルズと話す機会を得た。ビートルズが何か仕事を見つけてくれないかと頼むと、ウーラーはDJの仕事をもらっているプロモーターのブライアン・ケリーに相談してみると言い、さっそく「ジャカランダ」から電話してくれた。ケリーは、7か月前にせっかくのブッキングを何の連絡もなくすっぽかしてスコットランドへ行ったビートルズには愛想をつかしていた。そのうえ、ウーラーを介して8ポンドも要求してきたことで、いっそう不機嫌になった。ケリーは4ポンドなら出演させると言ったが、ウーラーが根気よく交渉し、6ポンドで折り合いがついた。ケリーはすでに、デル・レナス、サーチャーズ、デルトンズという3組のバンドをブッキングしていたため、この日ビートルズが出演できたのは、まぎれもなくウーラーの骨折りのおかげだった。

ビートルズの出演はかなりあとから決まったため、「ブートル・タイムズ」紙に掲載されるケリーの広告にはビートルズの名前は載らなかった。宣伝は、クリスマス・シーズンにシーフォースの「レイソム・ホール」とクロスビーの「アレクサンドラ・ホール」でケリーが開催したほかの3回のパーティーでのアナウンスと、急遽デザインを変更した手作りポスターに貼りつけられた「ハンブルクから直撃!ザ・ビートルズ」という謳い文句だけだった。リバプール北部では、ビートルズは5月14日に「レイソム・ホール」で、何の告知もなくオーディションのために1回演奏しただけだったので、ほとんど知られていなかった。そのため、ポスターを見たリザーランド・タウン・ホールの常連客は、ビートルズをてっきりドイツのバンドだと思い込んでいた。

当日、ビートルズがステージに上がり、ポールがリトル・リチャードの'Long Tall Sally'を歌い始めると、観客はまるで磁力で引き寄せられるかのように、いっせいにステージの前に走り寄ってきた。ハンブルクでの500時間以上ものステージ経験のなかで、ビートルズは世界を制覇するスタイルを磨きあげていたのだ。ジョン、ポール、ジョージ、チャス・ニュービー、そしてピートの5人のビートルズが発揮する絶大なパワーは、ティーンエイジャーたちを魅了し、これまで見たことのない不可思議な熱狂を生み出した。ハンブルクのナイトクラブでやってきたナンバーを次々に演奏しながら、ビートルズのメンバーもまた、自分たちが引き起こしたこのわけのわからない状況に当惑していた。ビートルマニアが産声をあげたのだ。

CamScannerでスキャン


Dear Sir, As it is your policy to present entertainment to the clientele of your establishment, I would like to draw your attention to a band, the Beatals. This is a promising group of young musicians who play all music for all tastes, preferably rock and roll. They have won many competitions, including Carroll Levis and auditions for A.T.V. Unfortunately pedagogical activities have prevented them from devoting themselves full time to the world of entertainment.
If necessary the group is prepared for an audition. I hope you will be able to engage them.
Yours sincerely
Stu Sutcliffe (Manager)

1960年初め、スチュアート・サトクリフがマネージャーと
書いた手紙。バンド名をクオリーメンからビータルズに変
したことがわかる。
《拝啓。常連客向けにエンターテインメントを提供するこ
を方針としているあなたに、Beatals（ビータルズ）というバ
ンドに注目していただきたいと思います。Beatalsはロッ
ンロールを中心に、あらゆる好みに応じた音楽を演奏する
前途有望な若いミュージシャンのグループです。彼らはキャ
ロル・リービスやATVのオーディションを含む多くのコンテ
ストを勝ち抜いてきています。残念なことに学業により彼
はエンターテインメントの世界に専念することを妨げられて
います。
必要であれば、このグループはオーディションを受ける用意
ができています。あなたが彼らと契約することができれば幸
いです。よろしくお願いします。スチュ・サトクリフ（マネージ
ャー）》

2日かぎりのナーク・ツインズ

4月23日（土）

フォックス・アンド・ハウンズ
Gosbrook Rd, Caversham, Berkshire

ジョンとポールはイースター休暇を利用してイギリス南部に出かけ、ポールのいとこのベット（エリザベス）・ロビンズの家に数日間泊まった。彼女の夫マイクはバトリンズ・レッドコーツでの仕事を辞めて、カバーシャムにフォックス・アンド・ハウンズという新しいパブをオープンさせたばかりだった。滞在中ずっと店を手伝ってくれたお礼にと、マイクはジョンとポールに土曜の夜に店で演奏する機会を作ってくれた。そしてナーク・ツインズという名前をつけ、パブの入り口のドアに手作りの宣伝ポスターを貼った。
ナーク・ツインズは真新しい店内でバーの高い椅子に座り、アコースティック・ギターを使ってマイクなしで演奏した。オープニングの曲を決めかねていると、マイクがバトリンで人気のあった古いお笑いソング'The World Is Waiting For The Sunrise'はどうかと言った。ジョンもポールも1953年にレス・ポールとメリー・フォードが出したレコードを聴いて知っていた。客たちの笑いがうずまくなか、ナーク・ツインズはなんとかこの曲を歌い終えた。その後ふたりはお得意のカントリー・アンド・ウエスタンやロック・ナンバーを歌った。

4月24日（日）

フォックス・アンド・ハウンズ
Caversham

リバプールへの長旅に出発する前の正午から午後2時まで、パブのランチタイム・セッションで、ナーク・ツインズはこの店で2度目の、そして最後の演奏をした。

シルバー・ビートルズと名乗り始める

5月14日（土）

レイソム・ホール
Lathom Ave, Seaforth, Liverpool

シルバー・ビートルズ（Silver Beetles）と名乗り始めて最初の正式なステージ。しかし、この日だけはなぜかシルバー・ビーツ（Silver Beats）と名乗った。この日の演奏は、リバプール北部にあるみすぼらしいホールや施設でダンス・パーティーを手がけていたプロモーター、ブライアン・ケリーによるオーディションを兼ねていた。ケリーはマージーサイドで盛り上がり始めていたビート・ブームにいち早く注目したひとりだった。1959年5月11日、ウォータールーのバス・ス

CamScannerでスキャン

トリートにあるサボイ・ホールで、初めてのライブ・ダンス・パーティーを開いたのち、シーフォースのレイソム・ホール、リザーランドのタウン・ホール、エイントリーのインスティチュート、クロスビーのアレクサンドラ・ホールのような有名な場所で次々にパーティーを主催していた。

この日はクリフ・ロバーツ・アンド・ロッカーズ、デルトンズ、キング・サイズ・テイラー・アンド・ドミノスが出演した。シルバー・ビーツはオーディションのために呼ばれていたので、宣伝ビラに名前はなく、あいた時間に数曲を演奏した。このときの演奏については、両極端のレポートがある。ひとつは、かなりひどい演奏だったため、2曲目が終わったときにケリーが「ステージから下りろ」と命令したというもの。もうひとつ、地元の新聞「ブートル・タイムズ」によれば、シルバー・ビーツの演奏は「センセーショナルだった」という。ケリーは次の土曜日にあたる5月21日のパーティーにシルバー・ビーツをブッキングし、しかもそれはキング・サイズ・テイラーより格上の扱いなので、シルバー・ビーツの演奏が気に入ったことは確かだろう。

ところが、週の半ばにスコットランド・ツアーが決定したため、シルバー・ビーツ(シルバー・ビートルズ)は土曜日に出演することができなくなった。しかも、ビートルズらしいことだが、ケリーにそれを連絡しなかった。ビラに載せた出演者にすっぽかされたケリーは、常連客の前で面目まるつぶれだった。

バック・バンドとしてツアーへ

5月20日(金)

タウン・ホール
Marshill, Alloa, Clackmannanshire

シルバー・ビートルズがバック・バンドとして同行したジョニー・ジェントルのスコットランド・ツアー初日。このツアー中、スコットランド南部での唯一の公演で、残り6回の公演はハイランズ州の北東海岸沿いの町で行なわれた。シルバー・ビートルズとジェントルは、この日だけ本番前に30分のリハーサルをした。

5月21日(土)

ノーザン・ミーティング・ボールルーム
Church St, Inverness, Inverness-shire

ジョニー・ジェントル一行は、およそ245キロ北にあるハイランドの州都インバネスに到着。参加したメンバーはこのツアーの実状が思っていたものとまったく違うことに気づく。実際、屈辱的な仕事だった。1階のホールでトラディショナルなリンジー・ロス・バンドが出演し、年配の市民たちが昔のダンス・ナンバーで楽しく踊っている間、2階のがらんとしたホールに出演させられていたのだ。

この日の公演のために、シルバー・ビートルズはリバプールで初めて正式に告知されたシーフォースのレイソム・ホールへの出演を棒に振って来たのに……。

5月23日(月)

ダルリンプル・ホール
Seaforth St, Fraserburgh, Aberdeenshire

5月25日(水)

セント・トーマス・ホール
Chapel St, Keith, Banffshire

5月26日(木)

タウン・ホール
High St, Forres, Morayshire

5月27日(金)

リーガル・ボールルーム
Leopold St, Nairn, Nairnshire

5月28日(土)

レスキュー・ホール
Prince St, Peterhead, Aberdeenshire

ジョニー・ジェントルとのツアー7日目。最終公演。

ジャカランダ・クラブに出演

5月30日(月)

ジャカランダ・コーヒー・バー
Slater St, Liverpool

リバプールの中心にある、アラン・ウィリアムズの経営するクラブに初出演。クラブのレギュラー・バンドだったロイヤル・カリビアン・スティール・バンドがオフをとる月曜日の夜、ほかにブッキングがなければシルバー・ビートルズが出演することになった。

(当時は誰も記録せず広告にも載らなかったので、シルバ

CamScannerでスキャン

ー・ビートルズがこのクラブに出演した正確な回数はわからない。おそらく12回ほどだと考えられる)。

6月2日(木)

インスティチュート
Hinderton Rd, Neston, Wirral, Cheshire

ウェールズ北部に近いウィラルの西側にあったクラブ、インスティチュートに初めて出演する。この日を含め、シルバー・ビートルズは木曜日の夜に6週連続で出演。プロモーターのレス・ドッドが経営するパラマウント・エンタープライズは、1936年からこのクラブとワラシーのリスカードにあるグロブナー・ボールルームで、「strict tempo」というダンス・パーティーを主催していた。しかし、ドッドはロックンロールやジャイブのほうがもっと儲かることに気づき始めていた。この夜、シルバー・ビートルズはドッドから出演料10ポンドを受け取り、そのうちの1ポンドを仲介料としてアラン・ウィリアムズに渡した。

乱闘騒ぎのなかでの演奏の日々

6月4日(土)

グロブナー・ボールルーム
Grosvenor St, Liscard, Wallasey, Cheshire

レス・ドッドが経営していたもう1軒のクラブ、グロブナー・ボールルームは土曜の夜にビッグ・ビート・ナイトを開催していた。ドッドは「新しいオールスター・バンドのスウィングを楽しもう」を宣伝文句にしていたが、地元の若者の多くはケンカを楽しむ場所だと考えていたようだ。ステージ下のダンス・フロアで繰り広げられる血しぶきが飛ぶ乱闘騒ぎをよそに、ビートルズは果敢に演奏を続けた。

6月6日(月)

グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

ウィットサン・バンク・ホリデイ(聖霊降臨祭)を祝して、レス・ドッドはスペシャル・マンデイ・ジャイブ・アンド・ロック・セッションを主催。リバプール出身バンドのなかでもっとも成功することになる2組のバンド、シルバー・ビートルズとジェリー・アンド・ペースメイカーズがブッキングされた。このセッションで初めて名を連ねた両バンドは、このあと何度も共演することになる。

6月9日(木)

インスティチュート
Neston, Wirral

6月11日(土)

グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

先に紹介したドラムを叩く不良少年ロニーのエピソードは、ほぼ間違いなくこの日の夜に起こった。

6月13日(月)

ジャカランダ・コーヒー・バー
Liverpool

6月11日にシルバー・ビートルズを見限ったトミー・ムーアが、バンド・メンバーとして出演した最後の日。

6月16日(木)

インスティチュート
Neston, Wirral

6月18日(土)

グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

ポールの18回目の誕生日。

6月23日(木)

インスティチュート
Neston, Wirral

6月25日(土)

グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

6月30日(木)

インスティチュート
Neston, Wirral

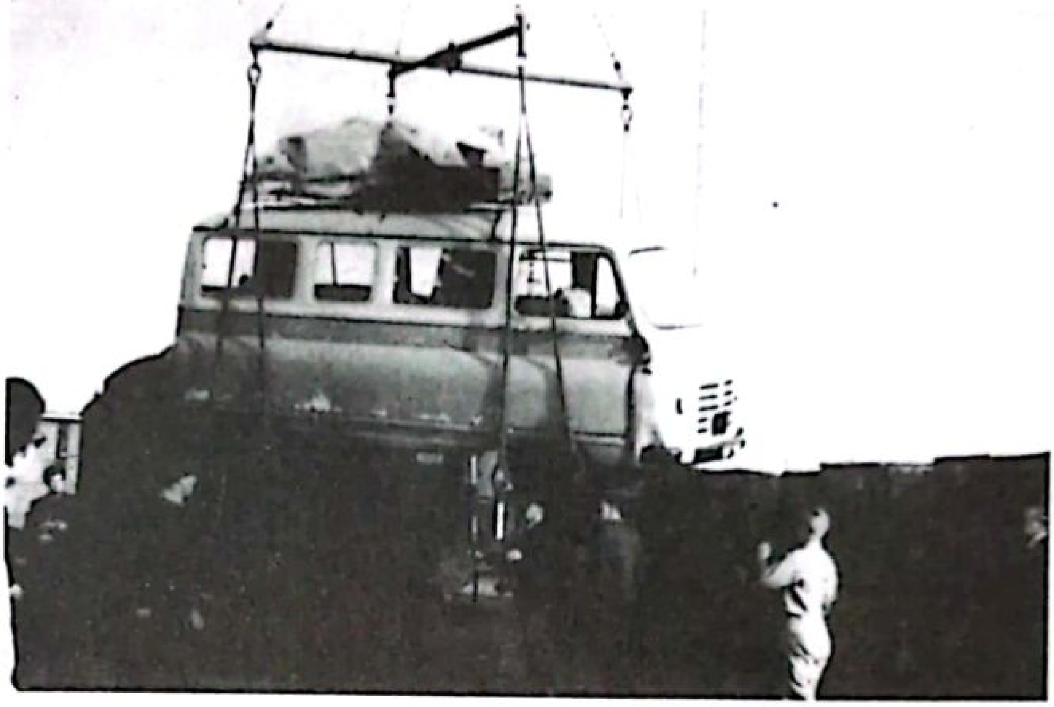
7月2日(土)

グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

おなじみの土曜の夜のグロブナーの荒れたステージにな りそうだったところ、この日はジョニー・ジェントルが不意に

CamScannerでスキャン

8月16日、ハリッジ港からハンブルクに向かうため、重い荷物を積んだアラン・ウィリアムズのバンがフェリーに乗せられるところ。左端で眼鏡をかけ、それを眺めているのはジョン



顔を見せたため、大変な盛り上がりをみせた。ジェントルはめずらしく週末が休みになったので、リバプール北部のリザーランドにある実家に戻っていた。ツアーで一緒だったシルバー・ビートルズに会いたくて、父親と一緒にアラン・ウィリアムズのジャカランダ・コーヒー・バーを訪れ、グロブナーに出演していることを知って驚かせにやってきたのだ。久しぶりに再会した彼らは大喜びで、ジェントルもステージに上がって何曲か歌った。

7月7日(木)
インスティチュート
Neston, Wirral

7月9日(土)
グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

7月16日(土)
グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

7月23日(土)
グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

7月30日(土)
グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

グロブナーでのシルバー・ビートルズの土曜の夜の出演は、9回目のこの日をもって中止された。このころには、ダンスの前後とその最中にも起こる騒動や暴力はかなりひどいものになっていた。地元住民たちはグロブナーの所有者であるワラシー・コーポレーションに苦情を申し立て、このようなダンス・ナイトをやめて以前の「strict tempo」ダンス・パーティーに戻すようにせまった(しかし、この年の終わりごろ、会場の持ち主のワラシー・コーポレーションは自ら乗り出してグロブナーでのロックンロール・セッションを再開した。そして、レス・ドッドのパラマウント・エンタープライズを少しずつ締め出しながら、確実に金になるこの催しを仕切るようになった)。

ビートルズと改名
初のハンブルク巡業へ

8月17日(水)〜10月3日(月)
インドラ・クラブ
Grosse Freiheit, Hamburg, West Germany

ビートルズ最初のハンブルク公演。48日間に200時間以上演奏した。騒音がひどいという苦情が相次ぎ、このクラブでの活動は終わった。

10月4日(火)～11月30日(水)

カイザーケラー
Grosse Freiheit, Hamburg, West Germany

インドラ・クラブで演奏できなくなったビートルズは、ブルーノ・コシュミダーの別のクラブ、カイザーケラーに出演することになった。58日間にわたって出演。11月末までの8週間、ビートルズは同じリバプール出身のロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズと交互に出演し、長い夜を過ごした。

帰ってきた伝説のビートルズ

12月17日(土)

カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

ハンブルクから帰国したビートルズの初ステージ。一時的にベーシストのチャス・ニュービーを加えた最初のステージでもある。ニュービーはこの日から連続4回演奏に加わった。ピート・ベストの母でクラブのオーナーでもあるモナ・ベストと、ピートの友人で会計士見習いのニール・アスピノールが、「帰ってきた伝説のビートルズ!」と手書きしたポスターをクラブいっぱいに貼ったこの夜、クラブは満員だった。

12月24日(土)

グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

暴力ざたが多少やわらいだためか、あるいは記憶が薄れただけか、グロブナーはワラシー・コーポレーションの管理下でロックンロールとダンスを再開した。カスバは厳密な会員制クラブだったため、この日がハンブルクから戻ったビートルズの初めての公式出演となる。共演はデリー・アンド・シニアーズ。2組のバンドはそれぞれ10ギニーずつ受け取った。

ターニング・ポイント

12月27日(火)

タウン・ホール・ボールルーム
Hatton Hill Rd, Litherland, Liverpool

ビートルズのキャリアのなかでターニング・ポイントとなるライブ出演があったとすれば、1960年の最後から2番目の、この日のライブがそうだろう。一時的な低迷がまったくなかったわけではないが、ビートルズはこの日以降、前進し続けた。

12月31日(土)

カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

チャス・ニュービーがビートルズと演奏した最後のステージ。

Introduction
1961

CamScannerでスキャン

1960年12月27日、リザーランドのタウン・ホールは、熱狂する客であふれていた。この光景をまのあたりにしたその夜のギグのプロモーターであるブライアン・ケリーは、ほかの連中にこのバンドを取られてなるものかと、あわててビートルズに出演依頼を目いっぱいもちかけた。そしてビートルズは1961年1月から3月まで、1ステージ6ポンドから8ポンドのギャラで、計36回のステージを行なうことになった。ビートルズがマージーサイドで人気ナンバーワンのロック・バンドにのしあがったのは、まぎれもなくこのときの出演契約があったからだ。

チャス・ニュービーが大学に戻り、ビートルズは再びベーシストを失うものの、これでメンバーの最終的な担当楽器が決定することになった。ジョンはまず、ジョージにベースをやらないかともちかけたが、ジョージは断った。そこで、リズム・ギターとピアノを担当していたポールがベースを弾くことになった。最初、ポールはソリッド7という安もののモデルに、手近にあったピアノからこっそり調達してきた3本の弦を張ってベースとして使っていた。そして、2度目のハンブルク公演に出かけたとき、ためた金でバイオリンの形をした風変わりなヘフナー・ベースを手に入れた。

リバプールでの大躍進

1961年、ビートルズの生活は熱狂に包まれることになり、不安定で試練の連続だった1960年とはまったく対照的だった。ライブの出演状況を見てもそれは明らかである。1960年12月にハンブルクから戻ると、10日間ほどはアラン・ウィリアムズがマネージメントを手がけた。その後はピート・ベストと彼の母であるモナ・ベストが出演交渉をしてくれるようになった。ピートの父、ジョニー・ベストは地元でも有名なボクシングのプロモーターで、『リバプール・エコー』紙のスポーツ欄にレギュラー・コラムを持っているほどだった。そのため、ふたりとも交渉の腕にはたけていた。ベスト親子が1日に2度3度の出演契約を取ってくることもよくあった。それだけビートルズに人気があったわけだが、1ステージ20分というような生やさしいセッションではなかった。長時間のランチ・タイム・セッションのあと、ひと晩に3時間のステージを2回こなすといったハードなものだった。

すべてがワイルドだったこの時代には、どんなバンドもじゅうぶんな機材を持っていなかった。1961年初頭にビートルズが持っていたのは、ギター3本、アンプ3台（常時ではなかった）、そしてドラムが1セットだけ。マイクはプロモーターに準備してもらうことが多かった。そのため、マイクを持っていないプロモーターは、バンドの代わりにマイクの調達に奔走した。また当時は、現在のように性能のいい機材は開発されていなかった。1961年のリバプールでは、ミュージシャンがまずやることはアンプ（ほとんどが自家製）のボリュームをいっぱいに上げることだった。

出演回数の増加、ホールからホールへの移動、深夜の終演時間を考慮すると、車が必要になった。ドライバーがいればなおさら都合がいい。こうした世話役はグループがビッグになるためには不可欠な存在だった。そこで、ピート・ベストの友人、ニール・アスピノールがビートルズの最初の世話役になった。経理の通信講座に飽き飽きし始めていたアスピノールは、試算表の勉強をするよりも、現金を手にできる「ロード・マネージャー」という仕事に魅力と興奮と生きがいを感じた。アスピノールは80ポンドで中古のコマー・バンを買って、ビートルズの専属アシスタントとなった。

CamScannerでスキャン

しかし、1960年から、いや何十年も前から変わらないのは、マージーサイドの特定のダンス・ホールの暴力的で(ときには文字どおり暴力沙汰となる)ピリピリと張りつめた空気だった。テディ・ボーイの時代は下火になりつつあったが、盛り場での暴力行為がなくなることはなかった。実際、1961年にビートルズが出演したほとんどのホールは、おとなしくて気の弱い若者が来られるような場所ではなかった。ポールとアスピノールは、そんなホールのひとつ、ハイトンのハンブルトン・ホールのことを思い出すと今でもぞっとするという。ある夜、ポールとジョージはそこで袋叩きにあった。アスピノールも、何かひと言でも失言すれば、待ってましたとばかりに殴りかかってきそうな猛者たちが、睨みをきかせているところで、機材をバンに積んだり下ろしたりしなければならなかった。アスピノールは機材を車からこのホールに運び込むたびに、車を慎重にロックした。さもないと、戻ってきたときには、残りの機材を盗まれているだけでなく、バンごと消えてしまいかねないのだ。ポールは、そこで'Hully Gully'を演奏すると必ずケンカが起きたと回想している。ある夜など、対立した不良グループが、おなじみの鉄パイプ、ナイフ、チェーン、拳につけるナックルを振りかざしたうえに、消火器まで持ち出したという。

このような暴力行為とは無関係だったクラブのひとつに、リバプールの中心街マシュー・ストリート10番地にあったキャバーン・クラブがある。ビートルズはこの薄暗い地下クラブに、1957年から58年にかけてクオリーメンとして出演したことがあった。経営者は、当初のオーナーのアラン・シトナーの会計士だったレイ・マクフォールに替わっていた。マクフォールは、1959年10月 3 日にキャバーン・クラブのオーナーとなった。イギリスではトラッド・ジャズが一大ブームだったため、新オーナーも本物のジャズだけを聴かせるという旧オーナーの「アンチ・ビート」方針をそのまま受けついでいた。しかし、1960年半ばになると、マクフォールはロックンロールにも注目し始めた。しばらくは、ジャズ通の客にはウケなかったものの、ジャズ・バンドの出演のあいまに地元で人気のあるロックンロール・バンドを試しに演奏させていた。シルバー・ビートルズがジョニー・ジェントルのバックとしてスコットランドに行っていた1960年5月25日、キャバーン・クラブはとうとうキャス・アンド・カサノバズとロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズをヘッド・ライナーとして迎え、初めての完全なビート・ナイトを開くまでになった。

その日からビートルズがキャバーン・クラブに出演できるようになるまでに、さらに9か月余りが必要だった。出演できたのは、モナ・ベストとキャバーン・クラブのDJになっていたボブ・ウーラーがマクフォールに熱心に働きかけてくれたおかげだった。とくにモナは、ピートがハンブルクから国外退去になって戻ってきた3日後の1960年12月4日にはもう、マクフォールに「息子のバンド」をよろしくと電話攻勢をかけ、出演できるまでねばり続けた。

ビートルズとして初めてキャバーン・クラブに出演したのは、1961年2月9日のランチタイム・セッションだった。それは1957年8月のある夜、ジョン・レノンのクオリーメンがキャバーンでスキッフルを演奏したときから、3年半後のことだった。夜のセッション出演は、初出演から6週間後、ジャズとロックの妙な混成バンド、スウィンギング・ブルージーンズのゲストとして実現した。それから1963年8月まで、キャバーンはビートルズのセカンド・ホームのようになり、少なくともリバプールでは、キャバーンとビートルズとは同義語となった。

ビートルズを語るうえで、キャバーン・クラブの存在は欠かせない。メンバーが才能に磨きをかけたのは、

CamScannerでスキャン

通りから18段の石階段を下りた地下にある元青果倉庫のこのクラブだった。観客と信じられないほど一体化したのもここが始まりだ。当時の出演料は、ひと晩15ポンド、ランチタイム・セッションは5ポンドだった。ビートルズは、この薄暗い地下のクラブからリバプール市全体をリズムでゆさぶり、無名のミュージシャンからイギリスのエンターテインメント史上最大の存在へと駆けあがったのだ。

キャバーン・クラブは衛生局の検査官から見れば悪夢のようなところだった。換気設備はなく、ステージ全体を上から照らす60ワットの電球以外にはこれといった照明もなく、トイレの設備もかなりひどかった。テーブルも、カーテンも、カーペットもなし。酒やケンカもなかったが、何より店の中には空間がなかった。ビートルズが出演する日には何百という客が押し寄せ、ひしめきあい、せまい地下室は熱気でムンムンした。レンガでできた壁やアーチには客たちの汗がしたたり、店内には悪臭と蒸気がこもり、きしむ木造ステージのヒーローたちは、今にも酸欠になりそうだった。ステージとは言っても、高さ60センチほどで、最前列でひざまづいて騒ぐ女の子たちが伸ばす腕の長さと大差なかった。

キャバーン・クラブに来る女の子たちは、ビートルズをアイドル視し、ロマンティックな思いを寄せていた。ビートルズがステージに上がるたびに、何とか目立ってメンバーの目にとまり、あわよくばデートできないかと必死だった。ビートルズのステージが始まる2分前になると、女の子たちはみんな、おしゃれの仕上げに夢中になった。コンパクトのパウダーがあたりに充満し、カーラーをはずした髪に念入りにブラシをかけた。ファンたちは大抵、セメント・ミキサーズとかブルドッグ・ギャングとかウドゥントップスといった名前のグル

CamScannerでスキャン

ープを作っていて、リーダー格の女の子が、GAR6922番のポール、GAR4596番のジョージ、GAT1696番のジョン、STA1556番のピートに直接電話をかけては、この曲を演奏してほしいとリクエストした。ビートルズのメンバーたちは嫌がるどころか、積極的にファンたちとの交流を楽しんだ。のちに、最前列のファンがステージから180メートルも離れた巨大な会場で演奏するようになったビートルズにとって、このときの親密な交流はなつかしいものとなった。

1961年、キャバーン・クラブへの出演でビートルズが得たものがもうひとつあった。各メンバーのパーソナリティとステージでのスタイルが定着したことだ。ジョンは鋭い切れ味を持ち、激しい性格。ステージでは両足を大きく開き、頭をぐっとうしろに引いて、ギターを胸まで持ちあげ、堂々として反抗的な態度を前面に押し出した。女の子たちはこんなジョンにどう接すればいいのかとまどっていたが、キャバーンの常連の男たちは、そんなジョンのふてぶてしさに憧れた。一方、ポールは甘いルックス、ステージでの気のきいたおしゃべり、常にやさしい振る舞いで、女の子たちの注目を集めた。ジョージはいつもステージの後方で控えめに演奏していたが、まだ初々しく、口の片方を少しだけあげてほほえみながらおどける表情は、女の子たちのお気に入りだった。しかし、いちばん人気があったのは、無表情でじっと黙ったまま正確にビートを刻み続けるドラマー、ピート・ベストだった。ピートの無関心そうな態度と無表情な声は、キャバーンに集まる女の子たちのハートをしびれさせた。

2度目のハンブルク
初の正式レコーディング体験

キャバーン・クラブでのデビューをはたしたあと、ビートルズは2度目のハンブルク巡業に出かけた。わずか3か月前に強制送還されたジョージ、ポール、ピートにとって、入国許可を得るのはかなり困難だった。ピートとモナ・ベストは西ドイツ当局に、正しく振る舞うと誓った書簡を何通も送った。幸運なことに、ハンブルクにはビートルズのために動いてくれる仲間がいた。ほかのメンバーよりもだいぶ遅れて、1961年2月後半にリバプールに戻ってきたベーシストのスチュアート・サトクリフだ。スチュアートはアストリット・キルヒヘルとの恋を実らせ、ハンブルクでも有名なステート・カレッジ・オブ・アート(国立芸術大学)で美術の勉強を始めるため、3月15日に再びハンブルクに渡っていた。もうひとりの味方は、1960年11月30日の時点で、早くも4月のビートルズの出演を決めていたトップ・テン・クラブのオーナー、ペーター・エクホルンだった。

こうした仲間の協力のおかげで、西ドイツ入国管理局からピート・ベスト宛に、ついに入国許可の手紙が届いた。その手紙には「外務省の特別措置により」ピートとポールの国外追放命令を1年間猶予すると書かれていた。エクホルンはポールとピートに代わって、4月分のバンドの出演料のなかから、入国管理局に158ドイツマルクを支払っていた。それはピートとポールをイギリスに強制送還するために、管理局が支払っていた費用だった。ジョージもこの時点で18歳になっており、ビートルズは晴れて西ドイツの地に再び足を踏み入れることができるようになった。

ハンブルクに向かう数日前、メンバーたちはピートの家に集まり、エクホルンに電話をして出演契約の最終的な打ち合わせをした。ハンブルクではごくあたりまえの過酷な条件に変わりはなかった。月曜から金曜

CamScannerでスキャン

までは午後7時から午前2時まで、週末には午後7時から午前3時まで出演し、1時間に15分ずつの休憩が与えられた。出演料は、1日ひとりあたりわずか35ドイツマルクだった。エクホルンの用意した宿泊場所はクラブの4階上の薄汚い屋根裏で、軍隊用の古くて窮屈なベッドが並んでいた。それでも、前回の公演でブルーノ・コシュミダーが用意した映画館のスクリーン裏よりはずっとましだった。3月の終わり、ビートルズはライム・ストリート駅からハンブルクに向けて、列車と船の長い旅に出発した。ビートルズは4月1日からステージに立ち、途中2回の契約更新を経て、7月1日まで計13週間出演した。

ハンブルクに定住することに決めたスチュアートは、もはやビートルズの一員ではなかった。それでも、ときどき昔のよしみでビートルズと一緒に演奏したり、マージーサイドからやってきたほかのバンドと共演したりした。このころスチュアートはバンドを代表して、リバプールのアラン・ウィリアムズに、ビートルズは自力でエクホルンと出演契約を結んだので、もうウィリアムズに仲介料は支払わないという内容の手紙を書いた。その嫌な役がスチュアートにまわってきたのは、おそらく元ビートルズのメンバーという肩書きを見込まれてのことだったのだろう。ウィリアムズは激怒した。ビートルズをハンブルクに連れていき、エクホルンとの契約を手配し、ポールとピートの国外追放命令を撤回してもらうために努力したのは自分だと主張した。4月20日、ウィリアムズはビートルズに、口頭での契約（これはウィリアムズには不利だった）をこのまま破るのであれば、それ相当の賠償請求に訴えると短く記した手紙を出したが、時間とともにこの騒動はおさまった。

ハンブルクは前と変わっていなかった。騒々しく、不謹慎で、不道徳。でもやはり魅力ある街だった。ビートルズは戻ってきたことを心から喜んだ。今回は、少人数ではあるが信頼できる応援者もいた。ほとんどはアストリット・キルヒヘルの友人だった。スチュアートはビートルズのメンバーではなかったが、アストリットと連れだって毎晩のようにトップ・テン・クラブにやってきた。アストリットは機会あるごとにメンバーたちの写真を撮り続けた。アストリットがスチュアートをモデルに、前髪をたらした、のちにビートル・カットと呼ばれる髪形を初めて試してみたのも、このハンブルク滞在中だった。スチュアートがこのヘア・スタイルで現れたとき、メンバーはおなかの皮がよじれるほど大笑いした。しかし、そのうちにだんだん気に入り、数か月もしないうちに、ピート・ベスト以外の全員がロックンロール・ヘアをやめてこのヘア・スタイルにした。

2度目のハンブルク巡業においてもっとも重要な出来事は、何と言っても初めてプロとしてレコーディングしたことだ。レコーディングした曲はリリースされ、ビートルズはレコード・デビューをはたした。トップ・テン・クラブで、ビートルズは自分たちの演奏だけでなく、定期的にトニー・シェリダンのバックも務めていた。イギリスのテレビのポップ番組ではすでにベテラン格だったシェリダンの存在は大きかった。前年1960年の11月、スターになることを夢見ていたビートルズに、ブルーノ・コシュミダーとの契約を破ってまでライバル・クラブのトップ・テンに出演する気にさせたのも、シェリダンの存在があったからだった。シェリダンはドイツ・グラモフォンと契約を交わし、その傘下のポピュラー音楽レーベルであるポリドールでレコードを制作することになっていた。1961年4月のある夜、アバーバッハ音楽出版のヨーロッパ担当ディレクターだったアルフレッド・シャハトは、シェリダンと話をするためにトップ・テン・クラブを訪れ、ビートルズを目にした。シェリダンとビートルズという組み合わせに強く魅せられたシャハトは、友人のベルトホルト（ベルト）・ケンプフェルトと、ポリドールのレコーディングに両者を呼んだらどうかともちかけた。ケンプフェルトは当

CamScannerでスキャン

時37歳で、ドイツのオーケストラの指揮者兼作曲家。アメリカでそのころナンバーワン・ヒットとなった'Wonderland By Night'の作曲も手がけていた。ケンプフェルトのオフィスに招かれ、レコーディングと音楽出版の契約の話をもちかけられたビートルズは喜んでサインした。

ある朝(おそらく6月22日)、ステージを終えたメンバー全員がトップ・テン・クラブの屋根裏までの階段を上り、やっとベッドで眠りについたころ、2台のタクシーがやってきた。レコーディング・スタジオに連れていくため、メンバーと機材を迎えに来たのだ。ケンプフェルトはかなり名の知れた人物だったが、その彼がスタジオと称して連れていったところは学校だった。レコーディングはカーテンを閉めた講堂のステージで行なわれた。ビートルズはシェリダンのバックで5曲演奏し、自分たちだけでもう2曲、'Ain't She Sweet'とレノン=ハリスンというめずらしいコンビで作曲したギターのインストゥルメンタル曲'Cry For A Shadow'をレコーディングした。

8月、ビートルズがリバプールに戻ったあとで、ポリドールはレコーディングした曲のなかから2曲をリリースした。'My Bonnie'と'The Saints'(ポリドール側がタイトルをつけた)を収録したシングル盤で、クレジットは「トニー・シェリダン・アンド・ビート・ブラザーズ」となっていた。ポリドールは、ビートルズという名前がドイツ北部のスラングでペニスを意味する「ピードルズ(peedles)」と発音が似ていることから、あえて名前を変えたのだった。このレコードは非常に評判がよく、地元のヒット・パレードでは5位まで上がり、10万枚のセールスを記録した。

ブライアン・エプスタインの登場

2度目のハンブルク巡業を終えたビートルズは、さっそく7月13日から、マージーサイドでめまぐるしく精力的なステージ活動を再開した。今やビートルズはまぎれもなく特別なバンドだったが、バンド自体には大きな変化が訪れそうな気配はなかった。ロンドンのポップ・ミュージックのプロモーターたちにすれば、リバプールは北の果て同然だったのだ。ビートルズは、ここで朽ちていくのではという不安にとらわれていた。どのホールでも熱狂的に迎えられ、レコードまで出していたビートルズは、マージーサイドでは無冠の帝王とも言える存在だったし、キャバーン・クラブでのステージはメンバー全員とても気に入っていたが、ステージそしてまたステージの単調な日々に飽き始め、次第に不安がつのっていった。しかし、どうしたらこの地の果てから脱出できるのか見当もつかなかった。

当時、地元のロックンロール・シーンで唯一メンバーたちを興奮させたのは、アート・カレッジでのジョンとスチュアートの友人だったビル・ハリーが創刊した隔週音楽誌「マージー・ビート」だった。ビルと婚約者のバージニア・ソウリーは、数か月にわたってさまざまなライブ会場を訪れ、数々のバンドから話を聞きながら、急激に人気を増してきたビート・シーンを取材した。そしてすぐに、ふたりは地元のロック・シーンが非常に閉鎖的であることに気づいた。ある町のある地区のバンドは、ほかの地区の音楽シーンについてほとんど知らなかった。そんな状況をふまえて、音楽情報誌を発行しようと思いたったのである。ハリーはさっそく知り合いのバンドを紹介することにし、創刊号(1961年7月6-20日号)の2ページ目に、ジョンがハンブルクに出発する前の3月に書いたウイットに富んだ記事「ビーイング・ア・ショート・ディバージョン・オン・ザ・デュビアス・オリジンズ・オブ・ビートルズ(ちょっとひと休みできる、疑わしきビートルズの起源)」を掲載し

CamScannerでスキャン

た。それはジョンにとって初めて活字になった文章である。3年後、ジョンは同じようなナンセンスなスタイルの文章でベストセラーとなった『イン・ヒズ・オウン・ライト(ジョン・レノンセンス)』という本を出版する。

ジョンの21歳の誕生日(10月9日)の2週間前、スコットランドのサザーランドに住むエリザベスおばさんから、成人になった祝いに100ポンドもの大金が届いた。ジョージとピートは気を悪くしたが、ジョンとポールはすぐにその金で2週間パリへ行くことに決めた。ハンブルクから届いたスチュアートの手紙に、ユルゲン・フォルマーがパリにいると書いてあったからだ。ユルゲンはアストリットの友人で、ハンブルクにいるビートルズ支持者のひとりだった。また、トップ・テン・クラブでは何度となくビートルズの写真を撮っていた。ジョンとポールは、早くユルゲンに会いたくて、すぐにパリに向かった。ふたりはセーヌ川左岸(画家や作家が集まる一画)のカフェめぐりをしながら、持ち金を使いはたした。そのあとスペインに行く計画もあったのだが、あきらめなければならなかった。一方でふたりは、フランスの代表的な音楽シーンを目のあたりにした。今から考えると、この旅行でのもうひとつの大きな出来事は、ユルゲンが、ついにジョンとポールを自分やスチュアート・サトクリフのようなヘア・スタイルにするよう説得に成功したことだ。それは当時、多くのフランスのティーンエイジャーのヘア・スタイルでもあった。かくして、ビートル・カットは定着したのである。

1961年11月9日、キャバーン・クラブのランチタイム・セッションに出演したビートルズに、興味深い訪問客があった。その人物はリバプール中心街のホワイトチャペル大通りにある人気のレコード店、NEMS(North End Music Store)の上品な言葉づかいの、ぱりっとした身なりの27歳の店長だった。名前はブライアン・サミュエル・エプスタイン。しかし、この日エプスタインが何のためにキャバーン・クラブに行ったのかは、本人もはっきりとは覚えていない。そのために、エプスタインが、どうやってキャバーン・クラブを発見し、ビートルズを見つけたのかということも完全には明らかになっていない。

エプスタインの自伝から推測すると次のようになる。スチュアート・サトクリフが、できあがった'My Bonnie'のレコード数枚をハンブルクからリバプールに送った。8月のある土曜の夜、ジョージはエイントリー・インスティチュートに向かうバスの中で、ボブ・ウーラーにこのレコードを1枚譲った。ボブは、自分がDJをやっていたマージーサイドのあちこちのホールで、毎晩のようにこのレコードをかけ、レコード店に買いに行くように客に勧めた。どこかの店が西ドイツから正式にこのレコードを輸入してくれるのではないかという思惑もあった。ハイトンに住む18歳のレイモンド・ジョーンズは、ハンブルトン・ホールでボブ・ウーラーの勧めるこのレコードを聴いた。彼は10月28日の午後3時ごろ、革ジャンにジーンズというかっこうでホワイトチャペルのNEMSに行き、店長のエプスタインにこのレコードのことをたずねた。エプスタイン自身によれば、このとき彼は、このレコードのこともグループのことも知らず途方に暮れたという。エプスタインは調べてみて可能なら取り寄せるとジョーンズに約束した。翌週の月曜の朝、今度はふたり連れの女の子がレコード店に現れ、同じ質問をした。そこでエプスタインは、聞いたこともなく、業界誌「レコード・リテイラー」のリストにも載っていないようなレコードになぜ問い合わせがくるのか、調べてみようと決心した。

レコードの輸入専門業者に電話したが、誰もこのレコードのことは知らないようだった。あきらめかけていたころ、ビル・ハリーに会い、何気なくこのレコードの話をした。「マージー・ビート」の編集者であるビルから、ビートルズがじつはリバプールのバンドだと聞かされ、エプスタインは驚いた。無理もないことだが、

CamScannerでスキャン

それまでてっきりドイツのバンドだとばかり思っていたからである。しかもハリーは、NEMSからほんの180メートルしか離れていないキャバーン・クラブに、ビートルズがレギュラー出演していることまで教えてくれた。

ところが、ビル・ハリーの記憶はエプスタインのものとは違っている。ハリーによれば、エプスタインはその4か月前の創刊当初から「マージー・ビート」をもっとも熱心に販売した人物で、何よりもその内容に興味を持っていたという。「ビートルズ、レコーディング契約!」という大見出しと、ポリドールとの契約のいきさつを説明した記事と写真が一面トップを飾った第2号などは、144部も売りさばいた。また、エプスタインは第3号からはレギュラー執筆陣としてレコード・レビューを書いていた。確かにエプスタインはロックンロールには興味がなかったかもしれない。しかし、毎号、自分の書いた記事以外は読まなかった、あるいは目も通さなかっただろうか。

いずれにせよ確かな事実はひとつだけだ。11月9日、ピシッとアイロンをかけたピンストライプのスーツにネクタイを締め、アタッシュ・ケースを小脇にかかえたエプスタインが、同じようないでたちのアシスタントのアリステア・テイラーを連れて、キャバーン・クラブに入ると、新たな世界が彼の前に開けたということだ。1964年のBBCラジオのインタビューで、エプスタインはこの日の出来事について次のように語っている。

「昼間だというのに、薄暗く、じめじめして、煙に包まれた地下のクラブで、大勢の若者たちがステージの4人に見入っている様子は、まるで異次元の世界でした。彼らにしてみれば、目いっぱいしゃれこんで、かっこよく着飾っていたつもりだったのでしょうが、4人とも黒い革ジャンにジーンズというスタイルで汚らしく、髪は長髪でした。ステージの演出もいささかいいかげんで、自分たちがどんなふうに見えているかなどは気づいていなかったし、さして気にもかけていませんでした。でも、今思うと、そのころから自分たちのサウンドに気を配っていたのだと思います。私はビートルズの演奏がすぐに気に入りました。新鮮で、心に響いてきて、ある種独特な存在感があると思いました。ひどく曖昧な表現になりますが、スター性というものがあったんです。具体的には説明できませんが、とにかくビートルズには確かにスター性があったか、さもなくば私が一方的にそれを感じとったということなんです」

つまり、エプスタインは1961年のキャバーン・クラブでの典型的なビートルズのステージを目のあたりにし、彼らの虜になったのである。典型的なステージとは、ステージでタバコを吸ったり、ものを食べたり、悪態をついたり、仲間うちでジョークを言い合って笑ったり、客に背中を向けたり、曲の途中で突然演奏をやめたり、というようなステージである。ブライアン・エプスタインがホモセクシャルだったことはもはや周知の事実だ。そのために彼がビートルズに魅了されたという見方もあるが、それは推測の域を出ないし、本書の趣旨にそって考えればどうでもいいことでしかない。ランチタイム・セッションが終わると、ビートルズに会うため、エプスタインは汗だくのティーンエイジャーたちをかきわけてキャバーン・クラブのせまい楽屋を訪れた。そもそもエプスタインはビジネスでここに来ていたのだ。ビートルズがバックを務めたトニー・シェリダンのレコードを200枚ほど輸入するために、詳しい話を聞きに行ったのである。最初に会ったのはジョージだった。ジョージは「エプスタインさんが、こんなところにいったい何しに来たの?」と皮肉っぽい口調で言った。エプスタインはビートルズのレコードについて問い合わせがあったことを話し、必要な情報を得

て、キャバーン・クラブでDJをしていたボブ・ウーラーの配慮でそのレコードを聴き、キャバーンをあとにした。

この日以降、11月いっぱい、エプスタインはビートルズが出演する日には必ずキャバーン・クラブに足を運び、何としてでも言葉を交わすようにしていた。すぐには親しくなれなかったが、ビートルズのメンバーも次第にエプスタインの努力に心を動かされるようになった。エプスタインは日増しにビートルズについて詳しくなり、何とかしてビートルズの父親代わりになりたいという漠然とした考えが生まれた。じつに突拍子もない考えである。エプスタインがこの話をすると、まわりの誰もがそう言った。それでもエプスタインは、レコード会社の販売担当者やロンドンのレコード店の責任者などに、ポップ・ミュージック・アーティストのマネージメントの複雑な仕組みがどうなっているのかを聞いてまわった。さらには、ブルー・エンジェル・ナイト・クラブのアラン・ウィリアムズを訪ねてアドバイスを求めたりもした。「とりあえず、どうしたらいいんでしょう」と相談するエプスタインに、ハンブルクの一件で頭にきていたウィリアムズは、「ブライアン、とんでもない連中だぞ!」と答えたという。

これまたエプスタインの意図は定かではないのだが、彼は12月3日午後4時半にビートルズのメンバーを自分の店に招いている。その日ポールはかなり遅刻してやってきた。全員がそろうと、一行は近くのアイスクリーム屋に場所を移して、互いの利益となる話し合いを始めた。ビートルズの反応は悪くなく、次の水曜日、12月6日の午後にもう一度話し合うことになった。それまでの3日間に、エプスタインはファミリーの顧問弁護士E・レックス・メイキンに相談した。エプスタインを生まれたときから知っているメイキンは、どうせそのうち興味を失ってしまう気まぐれのひとつだろうと見ていた。

それでもエプスタインはあきらめなかった。その水曜の午後、ビートルズに自分の提案と条件を話した。エプスタインは週単位で、バンドの全報酬の25パーセントを受け取る。その代わり、仕事の手配の責任を負う。しかも、今よりスケジュールに無理がなく、会場が今よりも格上となる仕事を用意し、さらに今までは未開拓のリバプール以外の場所からも仕事を探してくると強調した。また、1日15ポンド以下のギャラでは仕事を受けないとも断言した。ただしキャバーン・クラブのランチタイム・セッションだけは例外で、5ポンドから2倍の10ポンドに値上げ交渉すると約束した。これは1961年当時ではかなり大胆でむこうみずな約束だった。それだけでなく、エプスタインはメンバーが今にも飛びつきそうな最大の獲物をちらつかせた。ベルト・ケンプフェルトとのレコーディング契約から解放し、イギリス北西部最大のレコード店のひとつの責任者である自分の立場を利用して、イギリスの大手レコード会社と満足のいく条件で契約するというのだ。

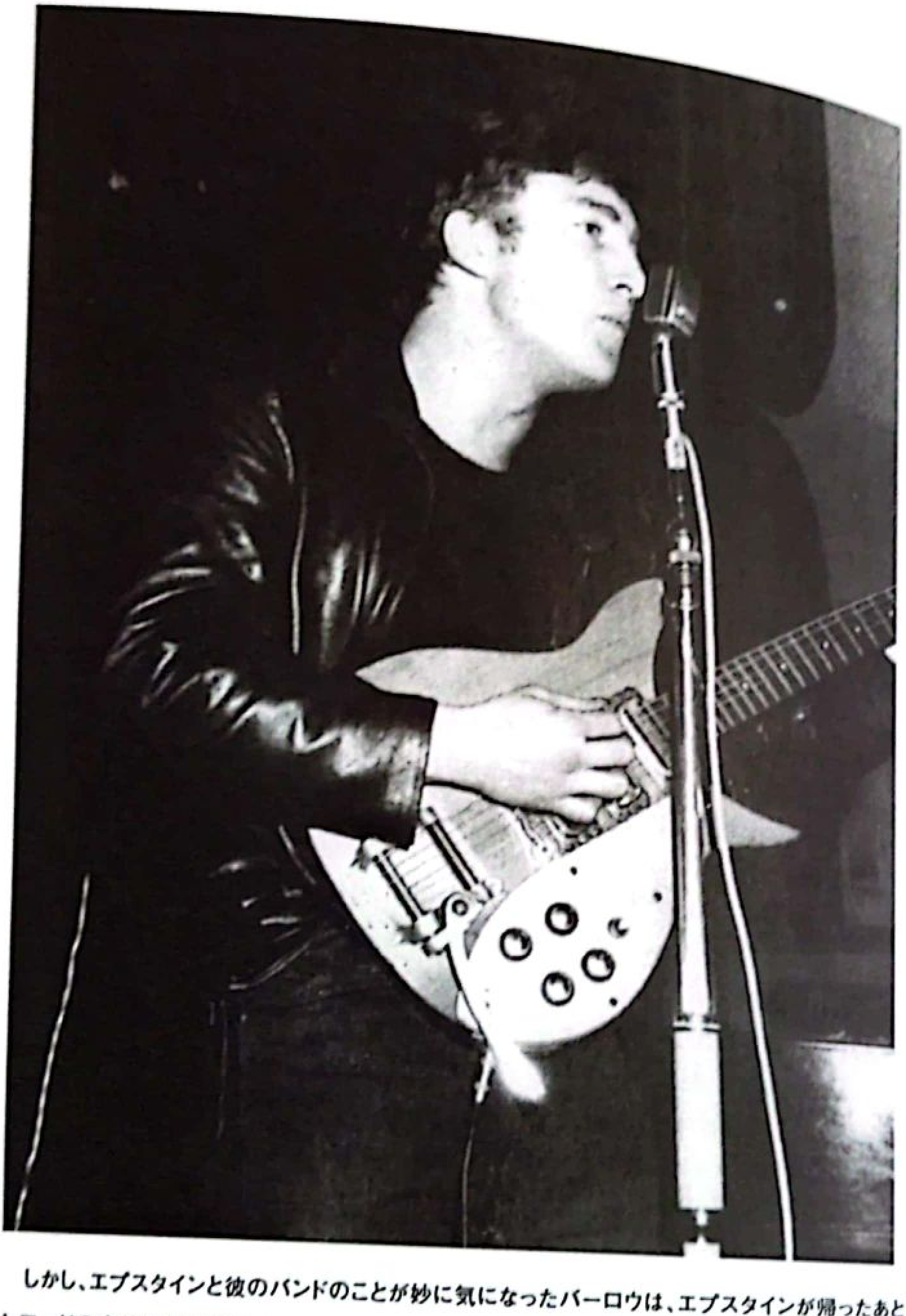
今までポップ・アーティストのマネージメントを手がけたことのない人間が、バンドにもちかける話としては、あまりにも強気な提案だった。4人がこの提示を思案している間、ぎこちない沈黙があった。しばらくすると、グループを代表してジョンが唐突に言った。「いいだろう、ブライアン。マネージャーになってくれ。契約書を出せよ。サインするぜ」。しかし、契約書はまだなかった。この業界での友人が、当時の典型的なマネージャーとアーティストとの契約書を用意してくれていたのだが、あまりにもあさましく、搾取が見え見えで、アーティストを言いなりにさせる内容を読んでうんざりしたエプスタインは、即座にその契約書を使うのを思いとどまった。そして、逆にこれを参考にして、もっと公平な契約内容に書き直すことにしたのだった。

4日後の12月10日、今度はビートルズが夜のステージに出かけるときの集合場所としていたカスバ・クラブで、エプスタインとのミーティングが行なわれた。ジョン、ポール、ジョージそしてピートの4人は、契約書の条項におおむね同意し、契約内容の遂行者となるエプスタインに、最終的に契約すると断言した。1962年1月24日、ビートルズがキャバーン・クラブのランチタイム・セッションに出演したあと、契約書はNEMSのオフィスで滞りなく交わされた。しかし、おかしなことに、この契約書ではアリステア・テイラーが立会人として5か所に連署しているのだが、当の本人たちの署名は4人分しか記されなかった。エプスタイン自身は署名しなかったのである。おそらく、根っからの紳士であったエプスタインとしては、契約より先に実績を上げておきたかったのだろう。エプスタインはそのあと9か月間、1962年10月まで契約書に署名しなかった。当のビートルズの4人はこの事実にまったく気づかなかった。たとえ気づいたとしても、両者間でそれが問題になったり、互いの関係が危うくなったりはしなかっただろう。いずれにしても、1962年1月24日の午後、ブライアン・エプスタインがビートルズにとって最初で最後の、実質的なマネージャーになったことは事実である。

エプスタインが自らかってでたこの仕事がとてつもないことで、またどれほど困難なものであったかは、1961年11月10日、プロモーターのサム・リーチ主催によるニュー・ブライトン・タワー・ボールルームで行なわれた盛大なダンス・パーティー、「オペレーション・ビッグ・ビート」へのファンの反応の大きさとマスコミの無関心さの両方を見ればよくわかる。会場には、5時間半におよぶマラソン・セッションに登場するマージーサイドのトップ・ビート・バンドを見ようと、3,000人を超える客が押し寄せた。しかし、北部での出来事に無関心なロンドンの音楽誌に予想どおり完全に無視されただけでなく、リバプールの日刊紙である「ポスト」と「エコー」、さらには地元の週刊誌「ワラシー・ニューズ」と「バーケンヘッド・ニューズ」までもが、このイベントの無視を決め込んだのだった。イベント前のことも、イベント後のことも、ひと言も触れられなかった。しかし、エプスタインは負けなかった。この熱気に満ちた、しかしイギリスの一部の地域にかぎられていたミュージック・シーンを、イギリスでかつて見られなかったほどの盛り上がりを誇るポピュラー・ミュージック・ブームへと発展させたのだ。その後2年足らずのうちに、「オペレーション・ビッグ・ビート」に参加した5組のバンドすべてが、ロンドンの大手レコード会社とレコーディング契約を結んだのである。

「リバプール・エコー」が当時ポピュラー・ミュージックに割いていた紙面は、毎週土曜日に掲載される「オフ・ザ・レコード」というレコード・レビュー欄だけで、ディスカーというペンネームの謎の人物が担当していた。1961年12月初め、エプスタインはビートルズに好意的な記事を書いてほしいとディスカーに手紙を出した。しかし、返事は「エコー」からではなく、不思議なことにロンドンのデッカ・レコードから届いた。ディスカーとは、ロンドンに住むリバプール出身のトニー・バーロウのペンネームだった。彼は当時フリーのジャーナリストをやりながら、デッカ・レコードの専属ライターとしてライナーノーツ執筆陣に加わっていた。バーロウからまんざらでもない返事をもらったエプスタインは、ロンドンに行って彼に会うことにした。エプスタインはバーロウの前で、録音状態の悪い雑音混じりのアセテート盤をかけた。キャバーン・クラブでのビートルズの演奏だった。しかし、バーロウはいかにも関心がないといった様子で、「オフ・ザ・レコード」は新譜レコードを紹介する欄だと言ってエプスタインを失望させる。バーロウの言い分は、レコードが発売されてもいないバンドの記事を書くわけにはいかないというものだった。

CamScannerでスキャン

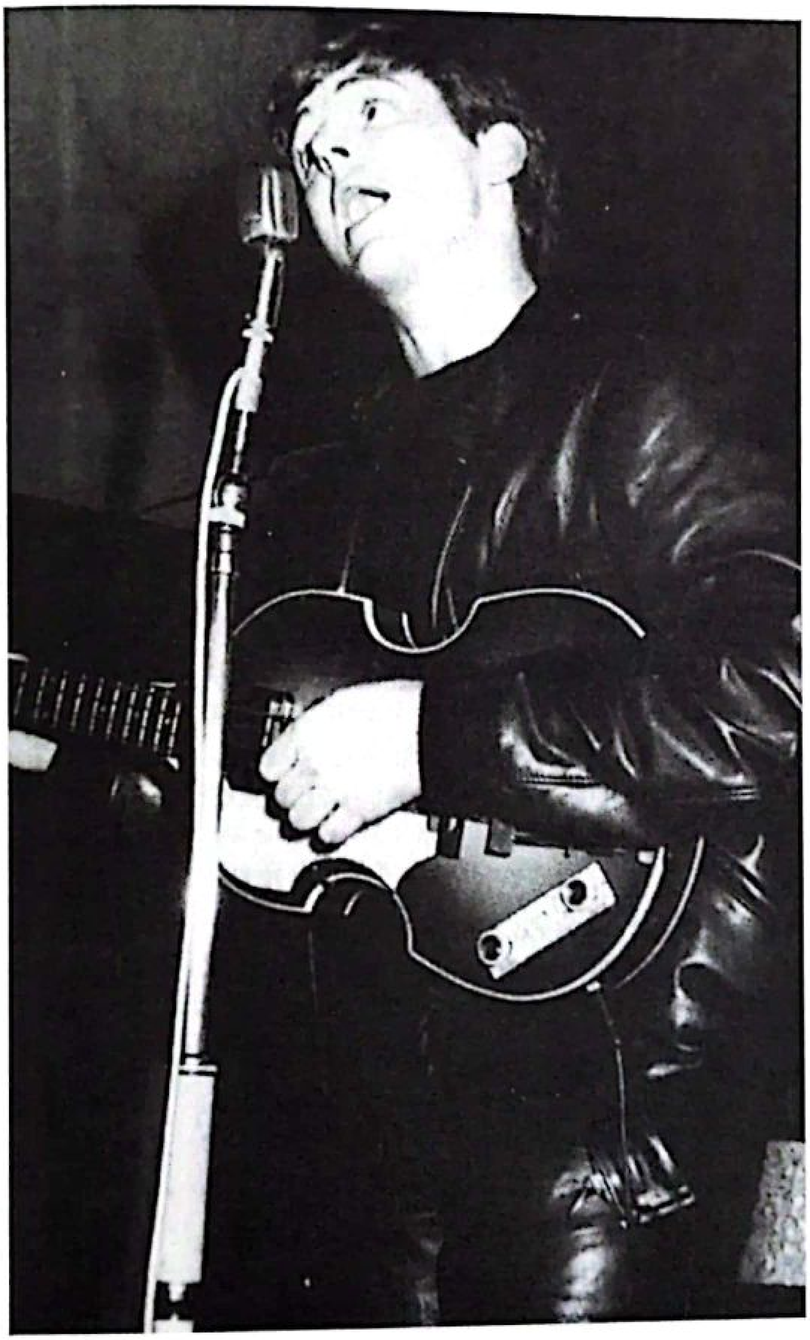


しかし、エプスタインと彼のバンドのことが妙に気になったバーロウは、エプスタインが帰ったあとデッカ・レコードの内線電話で何人かにこの話をした。バーロウが予期したとおり、販売部の人間はA&R（アーティスト・アンド・レパートリー）部に連絡し、会社の大事な顧客（エプスタイン）がバンドを売り込んできたと話していた。A&R部では、デッカで一度オーディションしてみたほうが無難だということになった。デッカのA&R部の部長だったディック・ロウは、長年の経験から、オーディションを断れば会社の業務にとって、あとあとろくなことにならないと判断したのだ。

CamScannerでスキャン

1961年12月13日、ロウのアシスタント、若きマイク・スミスがビートルズのステージを見るためリバプールに送り込まれた。場所は、ビートルズにとってもっとも条件のいいキャバーン・クラブ。その夜のキャバーン・クラブは、オープン以来初めてA&Rの人間がやってくるというので大騒ぎだった。ブライアン・エプスタインにとって、これは大勝利だった。スミスはビートルズの演奏を気に入った。すぐに契約するほどではなかったが、近いうちに、今度は北ロンドンのデッカの本物のレコーディング・スタジオで、2度目のオーディションを設定するだけの満足感はあった。

オーディションの日取りは、1962年1月1日に決まった。



Diary 1961

リバプールで連日のステージ

1月5日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

プロモーターのブライアン・ケリーとの出演契約の初日。契約は3月11日までの36回におよぶ。ケリーはリバプール北部のいくつかのホールで、BK(ブライアン・ケリー)・ダンス・パーティーを主催していた。以前ショーをすっぽかされたケリーも、1960年12月27日にこのホールで行なわれたビートルズのセンセーショナルなステージを見ると、すぐに多くの出演契約を交わした。この日の出演料は7ポンド10シリングだった。

この日、観客のなかには、前の日にハンブルクから戻ってきたばかりのロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズのジョニー・ギターとリンゴ・スターがいた。

1月6日(金)
セント・ジョンズ・ホール
Oriel Rd, Bootle, Lancashire

12月27日のリザーランドでのショーのあと、ブライアン・ケリーのほかにもうひとり、ビートルズの楽屋を訪れたプロモーターがいた。この日の公演を主催した17歳のデイブ・フォーショーだ。デイブはその場で、月に1度の公演に3か月間出演してくれるよう依頼した。出演料は6ポンド10シリング。ホールはほぼ満席になったため、フォーショーにとってそれくらいの出演料はすぐに回収できた。ビートルズの筋金入りのステージの評判は、あっというまに知られるところとなった。

1月7日(土)
エイントリー・インスティチュート
Longmoor Lane, Aintree, Liverpool
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

エイントリー・インスティチュートにビートルズは計31回出演している。この日がその初日。プロモーターのブライアン・ケリーが広告にいつも載せていたように、このホールは「年1回のグランド・ナショナル障害競馬が行なわれることで有名なエイントリー・レース場の近くにあるブラック・ブル・パブの裏」という場所にあった。このホールでは一部のたちの悪いグループの間で、誰かれかまわず、ステージのバンドにまで、椅子を放り投げるという遊びが流行っていた。

この日2回目の公演は、レイソム・ホールでのBK・ショーだった。1960年5月14日、当時シルバー・ビーツと改名していたビートルズが初めて正式な出演契約をつかみとったそのホールに凱旋したことになる。

1月13日(金)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

1月14日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

1月15日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

1月18日(水)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

この日、ビートルズは8ポンド10シリングの出演料を受け取った。

1月19日(木)
アレクサンドラ・ホール
College Rd, Crosby, Liverpool

BK・ショーへの出演。

1月20日(金)
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

1月21日(土)
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

この日、エイントリーへ出演することは、告知されなかった。

1月25日(水)
ハンブルトン・ホール
St. David's Rd, Page Moss, Huyton, Liverpool

プロモーターのウォリー・ヒルとビック・アントンとの計16回の出演契約の1回目。このホールはリバプールの東端にある、ひどくみすぼらしい市営の建物だった。

1月26日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

1月27日(金)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

1月28日(土)
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

1月29日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

1月30日(月)
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

この日のステージで、ビートルズは再び8ポンド10シリングの出演料を受け取った。

2月1日(水)
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

2月2日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

2月3日(金)
セント・ジョンズ・ホール
Bootle, Liverpool

デイブ・フォーショーとの契約による2回目の出演。出演料が前よりアップし、7ポンド10シリングになった。

2月4日(土)
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

2月5日(日)
ブレア・ホール
Walton Rd, Walton, Liverpool

ピーク・プロモーションズとの契約による最初の公演。この会社は、ウェイバートリーのホリーオーク・ホール、グレート・ジョージ・プレイスのデビッド・ルイス・クラブ、ウィドネスのコランバ・ホール、そしてこのブレア・ホールの4か所で、ジャイブ・ダンス・パーティーを主催していた。ビートルズはコランバ・ホールを除く3つのホールに出演した。

2月6日(月)
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

この日の出演で、ビートルズはこのホールに1週間で3回出演したことになる。

2月7日(火)
マージーサイド・シビル・サービス・クラブ
Lower Castle St, Liverpool

ビートルズは、この日を含めて計5回ここで演奏している。残る4回はこの年の11月に出演。この日の出演料は5ポンドだった。

2月8日(水)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

ひと晩でプロモーターの違うふたつのダンス・パーティーに

CamScannerでスキャン

出演。おまけにふたつの会場は数マイル離れていたので、新米ロード・マネージャー、ニール・アスピノールはてんてこまいだった。

キャバーン・クラブに進出

2月9日(木)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

キャバーン・クラブでは、3年以上も前にクオリーメンとしてスキッフルを演奏したことがあった。ビートルズとしてはこの日が初出演。この日の出演は告知されなかったが、ビートルズはすぐにこのクラブをわがものにすることとなる。この日の出演料は5ポンドだった。

2月10日(金)

エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

2月11日(土)

レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool
カサノバ・クラブ
Sampson and Barlow's New Ballroom, London Rd, Liverpool

この夜2回目のステージは、地元のプロモーター、サム・R・リーチとの契約による最初の出演。このあと、ビートルズはサムの仕事を多数受ける。カサノバ・クラブは、2月9日にテンプル・ストリートからこの場所に移転したばかり。

2月12日(日)

カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

2月14日(火)

カサノバ・クラブ
Liverpool
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

カサノバ・クラブのビラとポスターには、ビートルズは「アトム・ビートの創始者」と記されていた。これは足をやたら踏み鳴らす踊りだった。

タウン・ホールでは、セント・バレンタイン・デイを祝う特別イベントが開催された。ポールはイギリスでヒットしつつあったエルビス・プレスリーの映画"GI BLUES"の挿入歌'Wooden Heart'を歌った。その際ポールは"John" "Paul" "George" "Pete"と4人の名前が刺繍されたサテン地の大きなハートをコートの上にまとった。このハートは抽選で当たった客にプレゼントされ、さらにポールがキスをしてくれることになっていた。この幸運を射止めた女の子がプレゼントを受け取るためステージに上がろうとすると、ほかの女の子たちも悲鳴をあげながらステージに押し寄せ、ステージは大混乱。ジョンは床に倒され、ほかのメンバーも取り囲まれて身動きできなくなった。みんな用心棒に救われたが、カーテンは閉められ、騒ぎがおさまるまでショーは中断された。

2月15日(水)

エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

2月16日(木)

カサノバ・クラブ
Liverpool
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

2月17日(金)

セント・ジョンズ・ホール
Snaefell Ave, Tuebrook, Liverpool

カスバ・コーヒー・クラブのオーナーだったピートの母モナ・ベストは、ウエスト・ダービーの自宅からそれほど離れていないこのホールでも何度かダンス・パーティーを主催した。この日ビートルズは特別扱いを受け、20ポンドという破格の出演料をもらった。

2月18日(土)

エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

この日の夜、ビートルズは2か所に出演する予定だったが、カサノバ・クラブへの出演が2月28日に変更されたため、ここだけになった。

2月19日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

2月21日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:カサノバ・クラブ
Liverpool
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

ビートルズにとって初めての1日3公演。これ以降、1日3公演が増える。

2月22日(水)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

この日、エイントリーの出演料は、7ポンド2シリングだった。

2月24日(金)
グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey

1961年になって、初めてのマージー河を越えた会場に出演。

2月25日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
レイソム・ホール
Seaforth, Liverpool

ジョージにとってはあわただしい18歳の誕生日だった。

2月26日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

2月28日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:カサノバ・クラブ
Liverpool
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

それぞれ違うプロモーターと組んで3か所に出演。キャバーンはレイ・マクフォール、カサノバ・クラブはサム・リーチ、リザーランド・タウン・ホールはブライアン・ケリー。

3月1日(水)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

3月2日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

3月3日(金)
セント・ジョンズ・ホール
Bootle, Liverpool

3月4日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

3月5日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

3月6日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:リバプール・ジャズ・ソサエティ
Temple St, Liverpool

リバプール・ジャズ・ソサエティはもともとアイアン・ドア・クラブと呼ばれていた。のちにもとの名前で再オープンした。この日、ビートルズはこのクラブに初めて出演。

CamScannerでスキャン

3月7日(火)
カサノバ・クラブ
Liverpool

3月8日(水)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

3月10日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

ワラシーの「グロブナー」への出演は、アラン・ウィリアムズがビートルズにアレンジした最後のステージとなった。3か月前にビートルズがハンブルクから戻ってきて以来、ウィリアムズはグロブナーにしか彼らをブッキングしていなかった。

3月11日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool
リバプール・ジャズ・ソサエティ
Liverpool

リバプール・ジャズ・ソサエティ(LJS)でのショーは、マージーサイドではもっとも冒険的で野心的なロック・プロモーター、サム・リーチによるまさに画期的なステージだった。それは土曜日の夜8時から翌朝の8時まで12時間ぶっとおしで12バンドが出演するという、オールナイト・セッションだった。入場料もLJSのメンバーで6シリング6ペンス、一般客でも7シリング6ペンスと格安だった。テンプル・ストリートの地下にあるこのクラブの収容人数は1,000人だったが、この夜は約2,000人の客が次々と入れ替わり、少なくともショーの一部を見た。
以後2年間にわたり、リーチは「ビッグ・ビート・セッションズ」と称する同じようなオールナイト・セッションをいくつかのホールで何度も開催した。ビートルズはすべてではないが、ほとんどのショーにメインとして出演している。

3月12日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool
カサノバ・クラブ
Liverpool

3月13日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:リバプール・ジャズ・ソサエティ
Liverpool

3月14日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月15日(水)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
午後:リバプール・ジャズ・ソサエティ
Liverpool

この日、ビートルズは正午から午後1時までキャバーン・クラブで演奏したのち、機材を持ってビクトリア・ストリートを移動し、リバプール・ジャズ・ソサエティでの5時間にわたる午後のセッションに出演した。ビートルズ以外の出演者は、ロリー・ストーム・アンド・ワイルド・ワンズ(ロリーとゲスト・ミュージシャンによるバンド)とジェリー・アンド・ペースメイカーズ。3バンドが交替で演奏し、ビートルズの最初の出番は午後2時だった。

3月16日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月17日(金)
モスウェイ・ホール
Moss Way, Croxteth, Liverpool
リバプール・ジャズ・ソサエティ
Liverpool

トップ・テン・クラブに出演しはじめたころ、
「マック・シャウ」するビートルズ。

モスウェイ・ホールへの出演は、プロモーターのマックアイバーとマーティンが組んだ唯一のもの。ふたりは当時、アイバマーという名前で、クロスビーのセント・ルークス・ホール(通称ジャイブ・ハイブ)、スケルマーズデイルのアイバマー・クラブ(通称マソニック・ホール)、そしてこのモスウェイ・ホールの、リバプール北部にある3つの会場でショーを手がけていた。

3月19日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

地下のクラブに若い常連客を集めて行なわれた、ベスト夫人との契約による恒例の日曜日のステージ。

3月20日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

キャバーン・クラブ夜の部にデビュー

3月21日(火)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

マシュー・ストリートにあるキャバーン・クラブの夜のセッションに初出演。

3月22日(水)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月24日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月26日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

2度目のハンブルク公演に出発する前の最後のステージ。

2度目のハンブルク巡業

4月1日(土)～7月1日(土)
トップ・テン・クラブ
Reeperbahn, Hamburg, West Germany

2度の契約更新を経て、ビートルズはトップ・テン・クラブに計13週間出演。92日間にわたり、のべ503時間もステージに立った。
初めてのハンブルクのときと同じように、ハンブルク滞在が延びれば延びるほど、ビートルズのスタミナと音楽の懐の深さが飛躍的に増していったことは明らかである。7月にリバプールに戻ったビートルズは、まさに比類なき存在にな

っていた。

初めての正式なレコーディング

6月22日(木)～23日(金)

フリードリヒ・エベルト・ホール
Hamburg, West Germany

ビートルズがプロデューサーのベルト・ケンプフェルトのもとでレコーディングした2日間。このレコーディングについては情報がとぼしく、しかも内容がそれぞれに矛盾しているため、はっきりしたことはわからない。ビートルズはフリーのプロデューサーとしてのケンプフェルトと契約を交わし、ケンプフェルトはこのレコーディングをポリドール・レーベルに委託した。この契約は1961年7月1日から有効ということだが、レコーディングが終わってから契約を交わすというのは、奇妙なことのように思える(ちなみにこの契約書の有効期間は1962年6月30日までの1年間。申し込み次第で更新可能となっていた)。
レコーディングにはビートルズのメンバー4人が参加した。スチュアート・サトクリフも現場にいて、シェリダンのバックで5曲演奏するビートルズを見守っていた。1曲目は、トップ・テン・クラブでも人気があり船乗りからのリクエストが多かった'My Bonnie Lies Over The Ocean'のロック・バージョン。オープニングのリード・ギターはジョージが弾いているが、間奏の8小節のソロはシェリダンが弾いている。バックにはポールの声がはっきりと聞こえる。2曲目も古いスタンダード・ナンバー'When The Saints Go Marching In'。3曲目はシェリダンのオリジナル・バラード'Why (Can't You Love Me Again)'、4曲目はハンク・スノーのカントリー・ナンバー'Nobody's Child'、5曲目はジミー・リードの'Take Out Some Insurance On Me, Baby'(別名'If You Love Me Baby')である。
ビートルズはシェリダン抜きでもう2曲レコーディングした。1曲はジョンがリード・ボーカルをとった'Ain't She Sweet'。もう1曲はレノン=ハリスンのギター・インストゥルメンタルである。この曲には最初題名がなく、'Beatle Bop'というタイトルも考えられたが、最終的には、クリフ・リチャードのバック・グループ、シャドウズにひっかけて、'Cry For A Shadow'というタイトルに決まった。

リバプールに帰還、ライブ活動が続く

7月13日(木)

セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

7月2日にハンブルクを出発し、翌日リバプールに帰ってきたビートルズは、4日から12日まで休みをとった。ベスト夫人主催のセント・ジョンズ・ホールでのこのステージが帰国後初めての出演。

7月14日(金)

ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月15日(土)

ホリーオーク・ホール
Smithdown Rd, Wavertree, Liverpool

クオリーメンとして、1957年にこのホールとセント・バーナバス・チャーチ・ホールに出演しているのを別にすれば、このホールはビートルズが出演した会場のなかで、1967年のレコードで世界的に有名になったペニー・レインに、地理的にもっとも近い場所にある。

7月16日(日)

ブレア・ホール
Walton, Liverpool

この日から3週連続で日曜の夜に、ピーク・プロモーションズと組んでこのホールに出演。

7月17日(月)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タウン・ホール
Litherland, Liverpool

7月19日(水)

ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

7月20日(木)
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

7月21日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

7月22日(土)
ホリーオーク・ホール
Wavertree, Liverpool

7月23日(日)
ブレア・ホール
Walton, Liverpool

7月24日(月)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

7月25日(火)
ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

月26日(水)
:キャバーン・クラブ
verpool

月27日(木)
チタイム:キャバーン・クラブ
erpool
セント・ジョンズ・ホール
brook, Liverpool

夜セント・ジョンズ・ホールには、ビートルズのほかにビスリーというバンドが出演した。これは、ブライアン・キーがロンドンに出たため、残されたキャス・アンド・カサのメンバーが結成したバンドである。この日、ビートときどき一緒に歌っていた若い女性シンガー、シラ・ホワイトのバックも務めた。シラはのちにシラ・ブラックという名前で世界的に有名になる。

7月28日(金)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

7月29日(土)
ブレア・ホール
Walton, Liverpool

7月30日(日)
ブレア・ホール
Walton, Liverpool

7月31日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タウン・ホール
Litherland, Liverpool

8月2日(水)
ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月3日(木)
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

8月4日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

キャバーンでオールナイト・セッション

8月5日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

キャバーン・クラブでのオールナイト・セッションに出演。有名なジャズ・トランペッター、ケニー・ボールも出演した。

Diary1961

8月6日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

8月7日(月)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

8月8日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月9日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月10日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

8月11日(金)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月12日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

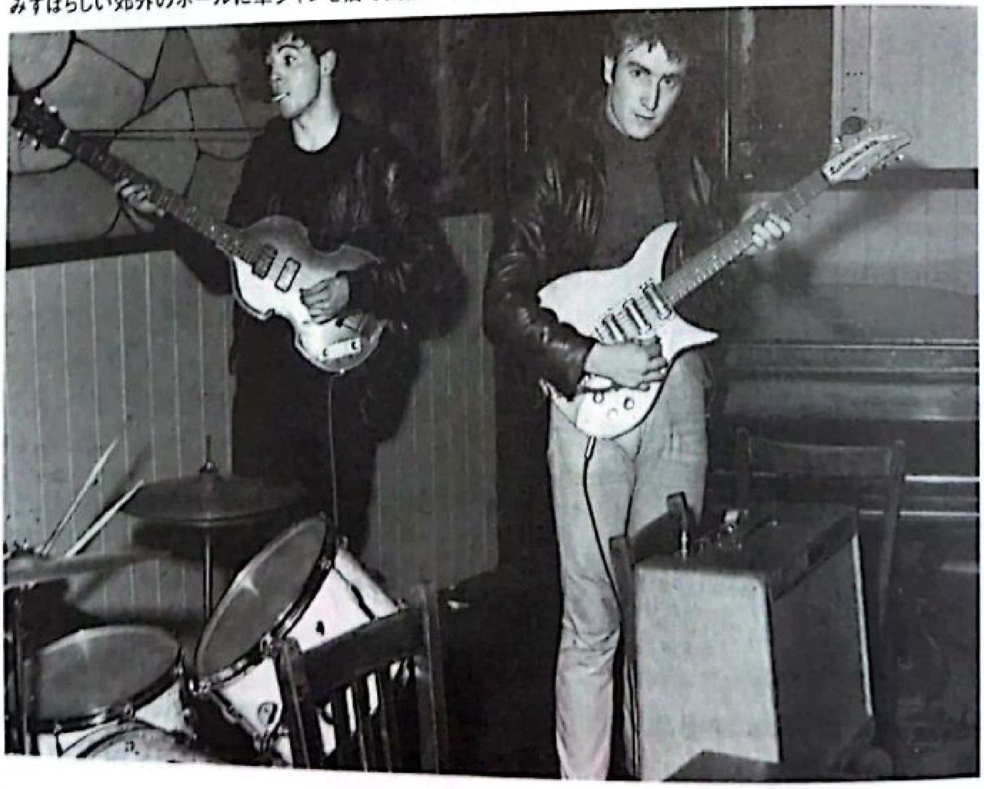
ブライアン・ケリーの主催するエイントリー・インスティチュートでの土曜の夜のショーに、この日から7週連続で出演。

8月13日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

8月14日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月16日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月19日、エイントリー・インスティチュートでステージ前のウォーミングアップをしているポールとジョン。
みすぼらしい郊外のホールに革ジャンを着て出演していたころの典型的な光景



CamScannerでスキャン

5人編成での演奏

8月17日(木)
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

この日、ビートルズはショーの共演者だったビッグ・スリーのハンサムなベーシスト、ジョニー・グスタフソンを迎え、5人編成で演奏。ギターを持たずにマイクだけで歌ったポールは、当時のソロ・シンガーのように、ステージや客席の間を動きまわった。

8月18日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

8月19日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

8月20日(日)
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

8月21日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月23日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月24日(木)
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

マージー河のフェリー船上で演奏

8月25日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:MV ロイヤル・アイリス
River Mersey

初めての船上での演奏。ビートルズは「フィッシュ・アンド・チップ・ボート」と呼ばれる評判の悪いマージー河の遊覧フェリー、ロイヤル・アイリス号でのショーにこの日を含めて4回出演した。
夏の間、キャバーン・クラブのオーナーのレイ・マクフォール

CamScannerでスキャン

は、ときどきこのフェリーを借りて「リバーボート・シャッフルズ」というイベントを主催した。イベントでは、できるだけ多くの観客が楽しめるように、さまざまなエンターテインメントを用意した。この日のメイン・ゲストはアッカー・ビルク。トラッド・ジャズ・ブームの先頭に立つクラリネット奏者で、多くのファンが集まった。そして、ビート・ミュージックで若い客を集めたのがビートルズだった。船はピア・ヘッドから出発し、3時間15分後にそこへ戻った。

8月26日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

8月27日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

8月28日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月29日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月30日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月31日(木)
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

9月1日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月2日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

9月3日(日)
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

9月5日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

この日の早版の新聞には、ビートルズは夜のセッションにも出演するという広告が載ったが、差し替えられ、翌日の夜に出演した。

9月6日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月7日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タウン・ホール
Litherland, Liverpool

9月8日(金)
セント・ジョンズ・ホール
Tuebrook, Liverpool

9月9日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

9月10日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

9月11日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月13日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

9月14日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

9月15日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:グロブナー・ボールルーム
Liscard, Wallasey
ビレッジ・ホール
East Prescot Rd, Knotty Ash, Liverpool

キャバーン・クラブのランチタイム・セッションに出演したあと、夜はマージー河の両岸にあるふたつのホールに出演。河の向こう側にあるワラシーのグロブナー・ボールルームは、半年ぶりの出演だった。一方、モナ・ベストが主催したノッティ・アッシュでのダンス・パーティーは、チューダー様式の立派なビレッジ・ホールで行なわれた。ビートルズは初出演だった。この地域は、コメディアンのケン・ドッドと彼の愉快な仲間たちの出身地として有名だった。

9月16日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

9月17日(日)
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

9月19日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月20日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

リバプールのトップ・バンドの共演

9月21日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タウン・ホール
Litherland, Liverpool

リザーランドのタウン・ホールを埋めた満員の観客の前で、プロモーターのブライアン・ケリーがリバプールのトップ・スリー・バンドを共演させた記念すべき日。そのバンドとはビートルズ、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、そしてロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズ。3時間半におよぶ「ロッキング・アワーズ」の入場料は、わずか3シリングだった。

9月22日(金)
ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

9月23日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

9月24日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

9月25日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月27日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月28日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

CamScannerでスキャン

9月29日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

ジョンとポールが2週間のパリ旅行に出発する前の最後の出演。

名士の前で場違いな演奏

10月15日(日)
午後:オールバニー・シネマ
Northway, Maghull, Liverpool
夜:ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

ジョンとポールがパリから帰国後、初めて出演したのはマグハルのオールバニー・シネマだった。それは、これまでになく変わったショーだった。
1930年代から活躍していたカントリー&ウエスタンのギタリスト、ジム・グレッティはふだんはリバプールのヘシーズ・ミュージック・ストアでギターのセールスに従事しながら(ジョン・レノンが1957年にギターを買ったのもグレッティからだった)、慈善事業を中心とするさまざまなエージェントをやっていた。この日の午後、グレッティはエイントリーの北部に位置するのどかなマグハルという村で、チャリティ・コンサートを主催した。コンサートの収益はすべて、セント・ジョン・アンビュランス・ブリゲードという救護団体の地元支部に寄付された。3時間のショーに16組が出演。コメディアンのケン・ドッドを筆頭に、テナー歌手、オルガン奏者、トラッド・ジャズ・バンド、カントリー&ウエスタン・バンド、オペラ歌手などが出演した。これらの出演者のなかでビートルズは明らかに浮いていた。市長や議員、町の名士が混じった聴衆を前に、ビートルズは10分で演奏を切りあげた。

10月16日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月17日(火)
デビッド・ルイス・クラブ
Great George Place (Nile St entrance), Liverpool

ビートルズが町の中心にあるこのクラブに出演したのは、この日1回だけ。発足1か月のビートルズ・ファン・クラブが初めて主催したコンサートだった。

10月18日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

一夜だけのビートメイカーズ

10月19日(木)
タウン・ホール
Litherland, Liverpoo

木曜の夜の典型的なBK・ショー。この日はビートルズのほかにジェリー・アンド・ペースメイカーズも出演した。ショーの途中で、マンネリを防ぐために趣向を変えてみようという声があがった。ひと晩だけ2組のバンドを一緒にして、「ビートメイカーズ」を作ったらどうかという話になり、実際にやってみた。ジョージがリード・ギター、ポールがリズム・ギター、ピート・ベストとフレディ・マースデンが交替でピートのドラム・セットを使い、レス・マグワイアがサキソフォン、レス・チャドウィックがベース、ジョンがピアノ、ジェリー・マースデンがリード・ギターとボーカルというラインナップでの演奏が行なわれた。さらに、この夜出演していたもうひとつのバンド、カール・テリー・アンド・クルーザーズのリーダー、カール・テリーもボーカルで参加した。

10月20日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

10月21日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

これは、実際には2回分の出演と同じである。この夜、キャ

バーン・クラブではオールナイト・セッションが行なわれた。ビートルズは、深夜をはさんで土曜の夜と日曜の朝の2回、ステージに立った。

10月22日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

10月24日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月25日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月26日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月27日(金)
ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

10月28日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

10月29日(日)
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

10月30日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月31日(火)
タウン・ホール
Litherland, Liverpool

11月1日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

11月3日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

11月4日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

11月7日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:マージーサイド・シビル・サービス・クラブ
Liverpool
キャバーン・クラブ
Liverpool
この日から4週連続で、マージーサイド・シビル・サービス・クラブの火曜日のショーに出演。

11月8日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

エプスタイン、キャバーンへ

11月9日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タウン・ホール
Litherland, Liverpool

デビュー前のビートルズにとって、おそらくもっとも重要な日。ほとんどが若い女の子というキャバーン・クラブのランチタイム・セッションの観客のなかで、ピンストライプのスーツに身を包んだ地元のレコード店のオーナー、当時27歳のブライアン・エプスタインの姿はひときわ目立っていた。
まったくの偶然にすぎないが、その後エプスタインがビートルズにおよぼした影響を象徴するかのように、この日はビートルズがみすぼらしいリザーランドのタウン・ホールに出演した最後の日となった。

CamScannerでスキャン

5,000人規模の会場に初出演

11月10日（金）
タワー・ボールルーム
Promenade, New Brighton, Wallasey, Cheshire
ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

ビートルズにとって、目のまわるほど忙しい夜。メイン・イベントは何と言ってもタワー・ボールルームへの出演である。収容人数5,000人というこの巨大な会場に、初めて登場する機会となったからだ。
野心的なプロモーター、サム・リーチがリバプールで初めて実現させたアメリカ式の大規模なイベント「オペレーション・ビッグ・ビート」がこの会場で開かれ、3,000人以上の客が押し寄せた（リーチは1961年7月にチェシャー州のエルズミーア・ポートにあるシビック・ホールで「ビッグ・ビート・セッション」というイベントを手がけて感触を探っていたが、これにはビートルズは出演しなかった）。
午後7時半から午前1時まで、5組のトップ・グループが交替でステージに上がった。ビートルズの最初の出番は午後8時。このステージをこなしたのち、急いでマージー・トンネルを抜けてノッティ・アッシュのビレッジ・ホールで演奏。さらに、タワー・ボールルームでの午後11時半からの最後のステージまでにうまい具合に戻って、その夜を締めくくった。マージー・トンネルからリバプールの中心街まで帰る際、ビートルズはロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズの連中と血迷ったかのようにカー・レースを繰り広げ、危うくハリケーンズの面々は事故で早世するところだった。
注：タワー・ボールルームでのショーの告知は10月27日付の「リバプール・エコー」に初めて掲載されたが、チケット取扱店としてNEMSの名前も載っていた。この日はエプスタイン自身の言っていた「初めてビートルズの名前を知った日」の前日にあたる。

11月11日（土）
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

エイントリー・インスティチュートに出演したあと、ビートルズはリバプール・ジャズ・ソサエティに行き、前日サム・リーチが主催したタワー・ボールルームでのショーの成功を祝うパーティーに参加した。

11月12日（日）
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

11月13日（月）
ランチタイム：キャバーン・クラブ
Liverpool

11月14日（火）
夜：マージーサイド・シビル・サービス・クラブ
Liverpool
キャバーン・クラブ
Liverpool

11月15日（水）
ランチタイム／夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

11月17日（金）
ランチタイム：キャバーン・クラブ
Liverpool
夜：ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

11月18日（土）
夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

11月19日（日）
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

11月21日（火）
ランチタイム：キャバーン・クラブ
Liverpool
夜：マージーサイド・シビル・サービス・クラブ
Liverpool

11月22日（水）
夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

11月23日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

黒人トップ・シンガーとの共演
11月24日(金)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

ビートルズはカスバに出演したあと、ニュー・ブライトンのタワー・ボールルームで、またしてもサム・リーチの企画「オペレーション・ビッグ・ビートII」に出演した。
午後11時からのビートルズの出番では、イギリス人のエミール・フォードとイギリスに住むアメリカ人のデイビー・ジョーンズという当時のトップ黒人シンガーふたりが、何の前ぶれもなく会場に姿を現したため、かなりエキサイティングなステージとなった。ジョーンズはビートルズのステージに参加して2曲歌い、フォードはロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズのステージに参加した。

11月26日(日)
ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

11月27日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

11月28日(火)
マージーサイド・シビル・サービス・クラブ
Liverpool

11月29日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月1日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

タワー・ボールルームで、ビートルズをメインに6バンドが出演して、「ビッグ・ビート・セッション」が5時間半にわたって行なわれた。2,000人を動員。

12月2日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月3日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

12月5日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月6日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月8日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

ビートルズにとって大きな1日。タワー・ボールルームでは、サム・リーチが7バンドのトップ・ゲストとしてデイビー・ジョーンズを招待。キャバーン・クラブでも、レイ・マクフォールがランチタイム・セッションにジョーンズを招いた。両会場で、ビートルズは自分たちの演奏のほかに、ジョーンズのバック・バンドを務めた。
ちょうど、'Moon River'がヒット・パレードの4位(3週間後にトップの座を獲得)だった南アフリカ生まれのスター、ダニー・ウィリアムズが、リバプールのキャバレー・クラブに1週間出演していた。そのため、数日前にウィリアムズの名

CamScannerでスキャン

前もタワー・ボールルームの出演者リストに急遽追加された。

南部への進出も観客はわずか18人

12月9日（土）

パレス・ボールルーム
Queens Rd, Aldershot, Hampshire
ブルー・ガーデニア・クラブ
St Anne's Court, off Dean St / Wardour St, London

イギリス南部およびロンドンでのビートルズ初のステージ。しかし、南部の人たちにしてみればまったく知らない名前だった。実際、オールダーショットでのステージは前もって告知されなかったという大きなミスもあり、わずか18人の客しか集まらなかった。一方、ロンドンでの演奏は、友人が経営していたなかば非合法なソーホーのクラブを訪れたビートルズが、その場の思いつきでステージに上がったものだった。

オールダーショットでの客入りの悪さは、企画の性急さやずさんさを物語っているが、この思いつき自体はさえていたと言わざるを得ない。つまり、リバプールのプロモーター、サム・リーチはロンドンのエージェントやレコード会社のお偉方がリバプールにまったく足を運ぶ気がないことを見抜いたので、それならばこちらからリバプールのバンドを見せてやろうと思いついたわけである。アイデアはよかったのだが、現実的には、イギリス南部の地理についてリーチの知識がやや浅はかだった。彼が土曜の夜に5週連続で予約したのはロンドンの会場ではなく、首都から南西に60キロも離れていて、近所には軍の駐屯地しかないオールダーショットのパレス・ボールルームだった。当然のことながら、リーチが招待したロンドンのトップ興行主たちは誰ひとり来なかった。

この初日の公演ポスターやビラには、「バンド対決」という謳い文句のもと、ビートルズとまったく無名のロンドンのバンド、アイバー・ジェイ・アンド・ジェイウォーカーズ（ヒット・グループ、ピーター・ジェイ・アンド・ジェイウォーカーズとは無関係）の名前があがっていた。リーチによると、地元の新聞「オールダーショット・ニューズ」にも大きな広告が掲載されるよう手配したという。しかし、残念ながら、リーチが定期的な広告主ではなかったため、新聞社は小切手の受け取りを拒否した。おまけにリーチは自宅の住所を教えていなかったため、新聞社は彼に連絡もできなかった。その結果広告は掲載されなかったのである。

その当日、リバプールから9時間もバンに揺られ、疲れ果ててやっと到着したメンバーを待ち受けていたのは、誰もいないホールで演奏することになりかねないという恐るべき事態だった。メンバーが考えついたのは、町にある喫茶コーヒー・バーとパブに行き、「よお！ 今夜パレスでダンスパーティーがあるんだってよ。しかも無料！」と触れ回った。その結果、18人の客が集まった。ビートルズは彼らに敬意を表して立派に演奏した。その間サム・リーチはもっと人数が多く見えるように広がって踊ってくれと客に頼んで回った。リーチの友人のカメラマン、リチャード・マシューズは、この様子を後世に伝えようと写真を撮った。

公演が終わったあと、メンバーは南部のワトニー・ビールを浴びるように飲み、ダンス・フロアでビンゴ・ゲームに使う玉でサッカーを始めると大騒ぎになり、警察に町から即刻退去するよう命じられた。

午前1時、寝る場所もなく、若さゆえ元気があり余っていた4人は、そのままロンドンめざして車を走らせた。目的地はキャス・アンド・カサノバズの元リーダーで古い友人のブライアン・キャサーが経営しているクラブだった。ソーホーにあるそのクラブは、せまくて薄暗かった。おまけに、ジョージは参加しなかったが、メンバーがステージに上がって即興で演奏し始めても、深夜まで飲んでいたわずかな客はビートルズに対して目もくれなかった。

翌週、12月16日の土曜日、リーチはアイバー・ジェイとの「バンド対決第2弾」にロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズを連れていった。このときは「オールダーショット・ニューズ」紙にちゃんと広告が掲載されたため、210人の客が入場料を払って見に来た。けっこう客が入ったにもかかわらず、オールダーショットでの先の出来事ですっかり意欲をなくしたリーチは、残る3回の予約をキャンセルしてしまった。

12月10日（日）

ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

高速道路のなかった当時、北上するリバプールへの道のりは長く、大変なものだった。おかげで、ビートルズはハンブルトンでの出演時間に大幅に遅刻してしまった。そのため

CamScannerでスキャン

実際には、15分間しか演奏できなかった。15ポンドの出演料に見あう演奏を期待していたプロモーターたちにしてみれば、とても許せる事態ではなかった。

12月11日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

デッカのマイク・スミス、ビートルズを見る

12月13日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

キャバーン・クラブの夜のセッションに、デッカ・レコードのA&R部のアシスタント、マイク・スミスがロンドンから訪れた。イギリスでは名誉あるデッカのレコーディング契約を、ビートルズと交わそうという心づもりからだった。

12月15日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

5時間半にわたり、5組のバンドが出演するという典型的なサム・リーチ主催によるタワー・ボールルームでのイベント。直前になって、ブライアン・キャサーとビッグ・スリーがひと晩だけ一緒に演奏することになり、キャス・アンド・カサノバズが復活した。

12月16日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月17日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

12月18日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月19日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月20日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月21日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月23日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

オールナイト・セッション。

12月26日(火)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

12月27日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この公演は、「ビートルズ・クリスマス・パーティー」として告知された。

12月29日(金)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月30日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

Introduction
1962

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

オーディション落選

1962年1月1日、寒々として凍てつくような元日の午前11時、ジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、そしてピート・ベストの4人は、ロンドン北部のウエスト・ハムステッドにあるデッカ・スタジオの受付の椅子に腰かけ、大成功への足がかりとなるオーディションが始まるのを待っていた。前日の大晦日、すでにブライアン・エプスタインは列車でロンドンに到着し、おばの家にひと晩泊まっていた。一方、ビートルズのメンバーは、機材ですでにいっぱいのせまいバンに乗り込み、窮屈な思いをしながら10時間かけてやってきた。おまけに外は猛吹雪で、ロード・マネージャーのニール・アスピノールはウルバーハンプトンで道に迷ってしまった。

1961年12月13日にキャバーン・クラブでビートルズを見て、このオーディションを仕切ることになっていたデッカのA&Rマン、マイク・スミスは時間になっても姿を現さなかった。前夜から夜通しのニュー・イヤーズ・パーティーがあったのだ。おかげでビートルズはまるで落ち着かなかった。エプスタインは、スミスが遅刻するのは自分たちなどどうでもいいからだろうと腹を立てていた。やっとスミスが現れ、リバプールからの風変わりな一行をスタジオに案内した。マージーサイドのダンス・ショーと長いハンブルクのショーで300回以上も酷使されてきたボロボロのアンプを見て、スミスはびっくりしてしまった。そして、代わりにスタジオにある機材を使うように言った。

セッティングを終えると、赤いライトが点灯し、オーディションがスタートした。気負いすぎた4人はかなり緊張し、演奏も抑えぎみになっていたが、それでもがんばって15曲演奏した。曲はビートルズの多様性を示すために、エプスタインが慎重に選んでおいたものだった。押しぎみのオーディションが終わると、スミスはメンバーをせかしてスタジオの外に出した。スミスが担当する次のバンドのオーディション開始時刻を回ってしまったからだ。そのバンドはエセックス州バーキング出身のブライアン・プール・アンド・トレメローズだった。それでもスミスはビートルズの演奏を気に入っていたようなので、念願のレコーディング契約も夢ではないように思えた。ビートルズはリバプールに戻り、いい知らせを待つことにした。

新年を迎えてから1週間、ビートルズの将来はかなり明るく思えた。デッカのオーディションから3日後の1月4日、「マージー・ビート」に第1回人気投票の結果が掲載された。ライバルのジェリー・アンド・ペースメイカーズ、レモ・フォー、ロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズ、ジョニー・サンドン・アンド・サーチャーズを押さえて、ビートルズは堂々の第1位を獲得。翌日の1月5日、イギリスでもトニー・シェリダンとビートルズ(グループ名も正しく改められた)のシングル盤'My Bonnie'がポリドールから発売された。エプスタインの働きかけによるものだった。エプスタイン自身も気づいていたが、この曲がヒット・チャートに入る見込みは薄かった。しかし、自国イギリスでレコードを出しているという実績こそが、何よりも重要だったのである。ビートルズはステージでこの曲をレパートリーに加え、ジョンがリード・ボーカルをとった。エプスタインは、ビートルズが出演するライブの広告、ポスター、ビラに「ポリドール・レコーディング・アーティスト」とか「ビートルズの新曲を聴きに行こう!」といった文句をつけ加えた。

エプスタインが実質的にマネージャーとなって1か月、正式なマネージメント契約をしてから1週間たった1月末までに、ビートルズはさまざまなものを手に入れた。良心的で公正なマネージメント契約、レコードの正規発売、大手レコード会社デッカとのレコーディング契約の可能性、2月12日に行なわれるBBCラジオ・

CamScannerでスキャン

オーディションの参加決定、ずっと好条件になった春のハンブルクでの出演契約、多少の金、そして格段に条件のよくなった会場などである。同時に、エプスタインがビートルズにふさわしくないと思っていた1961年の出演会場の大半がスケジュール表から姿を消した。また、いいかげんな振る舞い、ステージ上での子どもじみたおふざけ、時間にルーズな面も改善された。さらに、行きあたりばったりの選曲も改められ、60分以内におさまるような演奏曲リストがあらかじめ用意されるようになった。

しかし、ビートルズにとって最大の変化は、3月7日、マンチェスターのプレイハウス・シアターに向かうメンバーがそれぞれ抱えていた茶色の紙袋の中身がもたらしたものだった。その日、4人は初めてのBBCラジオ出演のためにリハーサルと録音をする予定だった。紙袋には、えりが極端に細いグレーのツイード・スーツとネクタイが入っていた。このスーツは、バーケンヘッドのグレインジ・ロード・ウエストにある洋服仕立屋ビノ・ドーンで、40ポンドで仕立ててもらったものだ。1月29日に、前金3ポンドを支払って採寸してもらっていた。この日を境に、ビートルズのステージで黒い革ジャンとジーンズにスニーカーといった粗野なかっこうは見られなくなった。もし本気で成功してトップになりたいのなら、プロらしい振る舞いとそれにふさわしい身なりをしなければならないと、エプスタインはことあるごとに言い聞かせた。ビートルズは少し抵抗したが、すぐにエプスタインの考えに従った。それまでの2年間、ビートルズは自分たちなりのやり方をやりつくしたが、リバプールとハンブルク以外では無名のままだった。スーツを着ることで全国的な成功につながるのであれば、そうするまでだ。

しかしそのスーツも、手元に届いた思わぬ知らせに対しては何の効果もなかった。2月初め、デッカ・オーディション不合格の知らせが届いたのである。メンバーはがっかりし、エプスタインは心を痛めたに違いない。ビートルズを売り出すためにエプスタインが思い描いていた計画では、レコーディング契約は必要不可欠なものだった。それに、ビートルズを2度見たマイク・スミスの反応は2度とも好意的だったのである。しかし、ふたを開けてみると、デッカは次のような不合格理由を突きつけてきた。「ビートルズはあまりにもシャドウズにサウンドが似ているし、これからはギター・バンドの時代になるという意見もどうかと思います」

エプスタインは必ず契約を取りつけてくると言い残し、ロンドンに向かった。テムズ川沿いにあるデッカ本社で、A&R部長のディック・ロウと販売部長のシドニー・アーサー・ビーチャー＝スティーブンスに会った。しかし、ふたりはオーディションの結果を変えようとはしなかった。丁寧さを装いつつも高慢な態度で、「ビートルズは成功しませんよ、エプスタインさん。われわれにはわかるんです。あなたはリバプールで立派なレコード店を運営していらっしゃる。それの何がご不満なのですか」と、エプスタインを鼻であしらった。冷静さを失ったエプスタインは、顔を真っ赤にして怒鳴った。「あなた方は頭がどうかしてるんじゃないですか。この子たちは今に爆発的な成功をおさめますよ。いずれエルビス・プレスリーより大物になると断言します!」

デッカのお偉方は、これを聞いて苦笑した。レコーディング契約にありつこうとするイギリス中のバンドのマネージャーたちが毎日のようにやってきては、必ず同じことを言うのだ。

エプスタインはあきらめがつかず、デッカがビートルズのシングルを出してくれたら、自分が毎回3,000枚購入すると申し出ようとまで考えた。だが、やめた。翌日、エプスタインは元シャドウズのドラマーでフリーのプロデューサーに転身していたトニー・ミーハンに会った。100ポンドでスタジオを借り、ミーハンにシングルをプロデュースしてもらおうと考えたのだ。しかし、さんざん待たされたあげく、いざ話をもちかけてみ

CamScannerでスキャン

ると、そんな先の見えないバンドのために貴重な時間を割きたくはないと言われたと、のちにエプスタインは語っている。憤慨したエプスタインは、デッカとのレコーディング契約の話はきっぱりあきらめることにし、2月10日付で、ビートルズのことはもう考えなくていいという手紙をデッカに送った。

レコード・デビューへの足がかり

デッカとの交渉は断念したが、ロンドンにいるという絶好の機会を逃さず、エプスタインはほかの大手レコード会社にも売り込みにまわった。デッカのオーディションで手に入れた唯一の収穫、15曲入りのテープ2本を持って、まずパイ・レコードに、次にオリオール・レコードに足を運んだ。両社とも応対時の態度はともかく、返事ははっきりと「ノー」だった。そこで2月8日ごろ、エプスタインはわらをもつかむ思いで、オックスフォード・ストリートにあるEMI系列のHMVレコード店を訪ねた。1年前、エプスタインはNEMSの経営者として、奇遇にもハンブルクを訪れたことがあった。ドイツ・グラモフォン・レコード主催のレコード小売店管理セミナーに参加するためだ。そこで知り合ったのがHMVの責任者で親切なボブ・ボーストだった。エプスタインはやりすぎない程度に、この友人の力に頼ってみるつもりだった。しばらくおしゃべりをしたあと、デッカのテープから数曲聴いてもらった。しかし、エプスタインにもわかっていたことだが、ボーストは自分の立場では何の手助けもできないと話した。ただ、扱いにくいリール・テープよりディスクにして売り込んだほうが賢明だろうと提案してくれた。エプスタインが同意すると、ボーストは店の2階にある小さなスタジオに彼を案内した。そこには店の顧客が78回転のデモ・レコードを制作することができる設備があった。

エプスタインのテープをディスクにカットしている最中に、エンジニアのジム・フォイは、このバンドのサウンドはなかなかいけると言った。エプスタインは、3曲はバンドのメンバーが作った曲だと自慢げに話した。当時、バンドの曲をメンバーがみずから作ることはめったになかったのだ。フォイは、オリジナル曲は出版されているのかと聞いた。されていない、とエプスタインは答えた。フォイは、店の最上階にEMIの子会社で音楽出版をやっているアードモア&ビーチウッドの事務所があると教えた。そう言い残して、フォイがアードモア&ビーチウッドの所長シド・コールマンをスタジオに呼びに行ったとき、エプスタインの心の中では小さな希望の光が見え始めたに違いない。コールマンもビートルズのサウンドを気に入って、音楽出版権について相談したいと言ってきた。ディスクのカットが終わると、ふたりはコールマンの事務所に向かった。

コールマンが興味を持ってくれたことは非常にうれしかったが、エプスタインは自分の本来の目的をはっきりと告げた。ビートルズにとってまず必要なのはレコーディング契約であって、音楽出版権の契約ではないのだと。エプスタインの意図をくんだコールマンは、EMIのレーベルのひとつであるパーロフォンのA&R部長をしていたジョージ・マーティンに電話を入れた。EMI傘下のレーベルのなかではパーロフォンは落ちこぼれレーベルだった。それはコメディ・レコードばかり出していたせいだけではなかった。予算、ヒット、格という点で、EMIの強力レーベルのコロンビアやHMVに劣っていたからである。

ジョージ・マーティンのデスクは、マンチェスター・スクエア近くのEMI本社ビルの5階にあった。電話に出たのは、秘書のジュディ・ロックハート・スミスだった。マーティンは不在だったが、エプスタインは2月13日に会えるよう手配してもらった。しかし、じつはその前の2月9日の午前10時半に、コールマンとマーティ

CamScannerでスキャン

ンは会っているのである。おそらく、ほかの話のついでに、エプスタインがもちかけたレコーディング契約のことが話題になったのだろう。

2月13日、ブライアン・エプスタインはマンチェスター・スクエアに出かけ、初めてジョージ・マーティンと顔をあわせた。マーティンはそれまでにエプスタインが出会ったレコード会社のどんなA&Rマンとも違っていた。言葉づかいも丁寧で教養があり、機転がきいてジョークも通じる話しやすい相手だった。エプスタインはさっそくビートルズの売り込みを始めた。マージーサイドでは絶大な人気を誇っていると説明してから、マーティンがビートルズという名前は聞いたことがないと言うと、まさかと思いっきり驚いたふりまでした(これはそのときまでにもうじゅうぶん鍛えあげてきた演技だった)。カットしたばかりのディスクをマーティンに聴かせ、エプスタインは緊張しながら反応を見守った。

ほかのレコード会社のA&Rマンと違い、ジョージ・マーティンは、ビートルズのサウンドに何かを、言葉では言い表せないある肌ざわりを感じとった。すっかり感心したというほどではなかったが、興味ありげで、'Hello Little Girl'と'Till There Was You'を楽しんでいるようすだった。ジョージのギターをほめたり、たぶんポールがバンドのリーダーだろうと言ったりした。最後にマーティンは、一度ビートルズと会ってみようと言った。実際の日取りは決められなかったが、エプスタインはこの言葉にかなり勇気づけられ、リバプールに戻った。しかし、マーティンとの約束は3か月以上も実現しなかった。多忙なマーティンは、とくに契約を急ぐ必要がなかったからだ。

いっぽう、ビートルズの面々、とくにジョンは、デッカのオーディションに落ちたのはエプスタインの選曲のせいだと考えていた。つまり、自分たち自身がいちばんよくわかっている音楽の領域に干渉するなということだった。

3度目のハンブルク、親友の死

そうこう言っているうちに、次のハンブルク行きがせまってきた。3度目となる今度のハンブルクは、1961年12月下旬、ペーター・エクホルンがトニー・シェリダンとともにリバプールを訪れたときに話がもちあがった。ふたりはトップ・テン・クラブの出演バンドをいくつか決めに来たのだ。エプスタインはひとり1週間につき500ドイツマルクを要求したが、エクホルンは450ドイツマルクしか出せないと言い、結局ビートルズとは契約せずに、12月30日にハンブルクに帰っていった。その3週間後、ブルーノ・コシュミダーのカイザーケラーとエクホルンのトップ・テン・クラブの両方で用心棒をやっていたホルスト・ファッシャーが、ミュージシャンのロイ・ヤングとともにリバプールを訪れた。そのときファッシャーは、グロッセ・フライハイト39番地に新しくスター・クラブという店をオープンさせようとしていたハンブルクでも有名なクラブ経営者、マンフレッド・ワイスレダーのもとで働いていた。ファッシャーはひとりあたり500ドイツ・マルクを承諾した。さらに1回きりの契約金として1,000ドイツマルク加算すると申し出た。そして1962年4月13日から5月31日までのビートルズ出演契約が交わされた。

メンバーはもはやハンブルクまで長い列車に揺られていく必要はなかった。エプスタインが、贅沢にも飛行機を手配してくれたのである。4月11日、ジョン、ポール、ピートの3人が、マンチェスターからドイツに飛びたった。体調の悪かったジョージは、翌日エプスタインとともに飛行機に乗った。しかし、ハンブルクの

CamScannerでスキャン

空港でジョンたち3人を待っていたのは、ひどく取り乱したアストリット・キルヒヘルだった。彼女のフィアンセだったスチュアート・サトクリフが、ビートルズの到着する前日、脳出血を起こし、21歳という若さでこの世を去ったのだ。芸術的な才能に恵まれ、ビートルズの元ベーシストであり、ジョンの親友だったスチュアートはすでに亡き人となっていたのだった。友人を失ったジョン、ポール、ジョージ、そしてピートは深い悲しみに包まれた。スター・クラブがオープンした4月13日の金曜日、悲しみに暮れたスチュアートの母親がハンブルクにやってきた。気の毒な彼女は、息子の死体を確認するという痛ましい作業に立ち合い、リバプールで埋葬するために遺体とともに帰っていった。

エプスタインはビートルズが無事ハンブルクに到着したことを見届け、マンフレッド・ワイスレダーに会い、ビートルズが7週間出演するスター・クラブでの初日のステージを見たあと、イギリスに戻り、ロンドンのレコード会社に猛攻勢をかける準備を始めた。

その段階でまだ窓口の閉ざされていないレーベルはパーロフォンだった。パーロフォンでは、2月13日にジョージ・マーティンがビートルズに会いたいと言ったまま、その後何の連絡もしていなかった。しかしアードモア&ビーチウッドのシド・コールマンの協力により、エプスタインは再びジョージ・マーティンと会えることになった(シド・コールマンはパーロフォンがだめならエプスタインをEMIのライバル会社であるフィリップスに連れていこうとまで思っていた)。5月9日午前11時半、場所はセント・ジョンズ・ウッドのアビイ・ロードにあるEMIスタジオだった。

その2度目のミーティングに関してこれから記す事実は、数多くの本で語られてきた話と異なる。EMIの書類に書かれていたので、揺るぎようのない事実なのだが、その日、ジョージ・マーティンはすぐさまエプスタインのバンドにレコーディング契約を申し出たというのだ。まだ、メンバーたちに会ってもいないにもかかわらずだ。と言ってもマーティンはビートルズとの契約を完全に保証したわけではなく、いわば最大のチャンスを与えてくれたということだ。EMI側で用意しておかなければならない書類上の手続きを進めることを約束し、そうすることにより、マーティンが実際にバンドに会ってみて、契約する価値があると判断すれば、EMI側のサインひとつですべての契約手続きが完了する下準備を整えたのだ。その日取りはすぐに6月6日と決められ、ビートルズは初めてアビイ・ロードを訪れることになった。

5月18日、マーティンはEMIの総務部に、契約内容の項目や条件を説明した「アーティスト契約申請書」を提出し、それをもとに契約書が準備された。5月24日、意識的に6月4日付でタイプされた契約書がマーティンのもとに届き、さっそくこれをブライアン・エプスタインに送付した(マーティンは契約書を受領したのは5月25日だと記憶している)。そしてビートルズがマーティンと初めて会う前日の6月5日、エプスタインと立会人の署名を入れた契約書がマーティンのもとに返送されてきた。この書類は再び総務部に届けられ、この契約を発行させる、何よりも重要なEMI側のサインを待つのみとなった。

6月6日のセッションがただのオーディションではなく、じつはデビュー・シングルのレコーディングも兼ねていたという、ふつうでは考えられない段取りになっていたと言われてきたが、この契約書が5月18日の時点で6月4日付という指定で作成されていたという事情がわかれば、それも合点がいく。事実、そのセッションではまずオーディションとしてかなりの曲を演奏し、これらはレコーディングされなかったが、そのあとで4曲実際にレコーディングしている。つまり、オーディションとレコーディングというふたつの目的をはたして

CamScannerでスキャン

いるのだ。そうすると、ビートルズがどうして7月に早くもデビュー・レコードが発売されると期待していたのかもよくわかる。また、6月6日のセッションでの出来事を追うと、あたかもビートルズがすでにEMIの契約下にあるような印象を受けてしまう説明もつく。さらに、1962年5月9日の午後12時半ごろの時点ですでに、EMIスタジオを出たエプスタインが近くのウェリントン・ロードの郵便局に直行し、両親に電話をかけ、次のような電報を2本打った理由も説明がつく。1本はハンブルクにいるビートルズ宛てで、「オメデトウ　ボーイズ　EMIヨリ　レコーディング　ヨウセイ　アリ　シンキョク　リハーサル　ヨロシク」という内容。2本めは「マージー・ビート」のビル・ハリー宛てで、「ビートルズニ　ケイヤクトリツケタ　EMIノ　パーロフォン　サイショノ　レコーディング　ロクガツ　ムイカ」というものだった。

ビートルズが最終的にEMIと契約したことは、運命のいたずらのようなものだ。と言うのも、1961年12月、デッカのオーディションよりも前の時点でビートルズを蹴ったのは、ほかならぬEMIだったからである。ビートルズは、EMIのレーベルであるコロンビアとHMV双方のA&Rマンから手紙で断られていたのだ。じつは、エプスタインはEMIの販売部長ロン・ホワイトに'My Bonnie'のレコードを送っていた。ホワイトはコロンビアとHMVのA&Rマンにこれを聴かせてみた。トニー・シェリダンの歌ではなくバック・バンドの音に注目してくれと言っていたのだが、ふたりは何の興味も示さなかった。

5月31日、7週間にわたるスター・クラブでの出演契約が終わり、ビートルズは6月2日にイギリスに戻った。そして4日後の6月6日に、初めてアビイ・ロードのEMIスタジオを訪れた。いつも無口なドラマーのピート・ベストを除く3人は、ジョージ・マーティンとかなり打ちとけることができた。マーティンは、ラジオ・コメディ「グーンズ」のピーター・セラーズとスパイク・ミリガンのソロ・コメディ・レコードは自分がプロデュースしたのだと話し、このレコードが大好きだったジョンとジョージはとくに喜んだ。また、ふつうならかなり緊張する状況にもかかわらず、ビートルズはいたって気楽なようすで、ところかまわずジョークを連発して、マーティンを笑わせた。「失うものは何もない」と決心したマーティンは、ビートルズとのレコーディング契約書に正式にサインした。

6月9日から、ビートルズは再び毎晩のようにマージーサイドのステージに立った。2か月以上ごぶさたしていたが、ビートルズの人気はまったく衰えていなかった。キャバーン・クラブでのウェルカム・ホーム・ナイトでは、同クラブの入場者数記録を軽く突破した。ビートルズがキャバーンに出演する日は、ランチタイム・セッションでさえ何時間も前からマシュー・ストリートに長蛇の列ができるようになった。6月11日にマンチェスターのプレイハウス・シアターで行なわれた2回目のBBCラジオ収録には、ファン・クラブのメンバーがツアー・バスを借りて、ビートルズとともに出かけたほどだ。帰りには、劇場付近の道という道にビートルズ・ヒステリアがあふれ、バスは大混乱のなか、ピート・ベストただひとりを残してリバプールに戻ってきた。ファンに捕まって動けなくなったピートはバスに乗り遅れてしまったのだ。それはピートにとって、その後を象徴するかのような出来事だった。

1962年の夏、エプスタインは次々と地元の格上クラスの会場へビートルズを出演させた。また、少しずつではあったが確実に、ストラウド、ノースウィッチ、ライル、ドンカスター、スウィンドン、モーカム、リドニーといった貴重な足場となるリバプール以外の会場も押さえていった（素人っぽい強引さもときどき目についたが）。それはビートルズにとって、とても重要なことだった。6月7日には、エプスタインは弟のクライブ

CamScannerでスキャン

と各1000ポンドの出資金を出し合って、NEMSエンタープライズを設立。ショー・ビジネスの世界での活動を本格的に、またより効率的にするためだった。6月29日、ビートルズはバーケンヘッドにあるマジェスティック・ボールルームに初出演した。ショー自体は特別なものではなかったが、この会場へ出演したことは重要で、今後の展開も楽になった。これは1962年中盤という非常に重要な時期に、エプスタインがどうやってビートルズを切り回していたかを如実に語る好例である。

マジェスティックはトップ・ランク社がイギリス各地に所有している28のボールルームのうちのひとつだった。バーケンヘッドの支配人だったビル・マースデンから社の劇場部長、レン（Len）・ファンコートの名前を聞き出したエプスタインは、さっそく彼に手紙を書く。ビートルズをほめちぎり、ぜひトップ・ランク社の会場に出演させていただきたいという内容だった。しかし、ファンコートは将来有望なポップ・バンドのマネージャーたちから同じような手紙を何十通も受け取っており、エプスタインの手紙もそのひとつとしてファイルされただけだった。彼はいつもと同じ返事をエプスタインにも出した。それは、トップ・ランク社の所有するすべてのボールルームの名前と住所のリストと、「自分で直接かけあってほしい」というだけの返信だった。仕方なく、エプスタインはそのとおりにすることにした。アバディーンからプリマス、クルーからキルバーンにいたるまでのすべてのボールルームのマネージャー宛に、できあがったばかりのNEMSエンタープライズのレターヘッドに完璧にタイプされた手紙を出した。書き出しの文章はどれも同じ。「レン・ファンコート氏からあなたをご紹介いただき、私のバンドであるビートルズの出演契約の可能性について特別にご連絡をさしあげました――」。また、次のような文章を必ずつけ加えた。「ビートルズは10月まで（どの手紙も書いた日から3か月先の月が記されていた）びっしりスケジュールがつまっておりますが、そちらで出演させていただけるならば、何とか調整をとることも可能です」。驚いたことに、この書き方は大いに効を奏した。ビートルズはバーケンヘッドに初出演してから1年以内に、トップ・ランク社の所有する28のボールルームのうち12か所に出演したのである。

ハンブルクから帰国して8週間、6月6日から7月31日までの間に、ビートルズは驚異的な62回ものライブ出演と、EMIとBBCのレコーディング・セッションを2回こなした。エプスタインは毎週、ビートルズのメンバーとニール・アスピノールにきちんと「支払い明細」を渡した。そこには、前の週7日分の出演内容、出演料、経費、手数料が1ペニーの単位まで細かく計算され、詳細に明記されていた。また、翌週の仕事の予定とそれにともなう注意事項もあわせて明記されていた。その際、エプスタインは常に、時間厳守、きちんとした身なりを指示し、そして各ステージすべてがバンドの将来にとってどれほど重要なのかを強調し、わざわざアンダーラインを引いて強調することもあった。1週間の出演予定には必ずキャバーン・クラブでの水曜の夜の出演と、2、3回のランチタイム・セッション（通常、1週間に月、水、金と出演したら翌週は火、木に出演するローテーション）が含まれていた。また、少なくとも1回は、ウィラルのサウスポートや市外の大きな会場での出演が組まれていた。大会場では、エプスタインはビートルズのそれまでの1時間のステージを30分ずつ2回のステージに分け、客にもっと見たいという気を起こさせるようにした。また、ビートルズにとってそれは来たるべき時代にそなえる意味もあった。当時それがスターのライブ出演の形式だったからである。

リンゴがビートルズのメンバーに

そのころ、リバプールからイギリスを横断して260キロほど離れたリンカンシャーのリゾート地スケグネスでは、ロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズがバトリン・ホリデイ・キャンプで演奏していた。そこでドラムを叩いていた、小柄でさびしげな目をした22歳のリバプールの若者に、ショー・ビジネス界史上まれにみる幸運が訪れた。彼の名前はリチャード・スターキー。仲間うちではリッチーと呼ばれ、ステージではリンゴ・スターと名乗っていた。1962年8月14日(リンゴによると15日)、彼はほとんど引き抜かれるようにしてビートルズのメンバーに迎え入れられ、生涯続く名声がふってわいたのだ。

ビートルズはかなり前からピート・ベストをやめさせようという考えを胸に秘めていて、少しずつ、自分たちなりのやり方でピートをバンドの活動から締め出し始めていた。たとえば、デッカのオーディションに落ちたことも、みんなが「言い忘れて」しまっていたため、しばらくピートは知らないままだった。ジョン、ポール、ジョージの心の中ではピートをクビにするという考えが固まりつつあった。3人がそう思った原因のひとつには、ハンサムで女の子たちからやたらともてるピートへの嫉妬心があったと言われている。しかし、もっと深刻で切実な原因もあった。ピートのドラムの腕は人並みだったとは言えるが、演奏の幅があまりにもせまく、レコーディングに向いているとはとても言えなかったのである。それはジョージ・マーティンが6月6日のセッションでブライアン・エプスタインにはっきりと指摘していたことでもあった。また性格的にもピートはほかの3人とはまったく違っていた。機転がきいて、生意気で、いつも元気な3人とは違って、ピートは痛々しいほどに内気で、ひっこみ思案だった。ほかの3人のような前髪をたらしたビートル・ヘアにするのも嫌がった。そのため、余計にバンドのなかでは浮いた存在に見えたのである。ジョージはピートをやめさせてリンゴ・スターを入れたいという気持ちが強く、わざわざリンゴの家まで出向き、リンゴの両親に彼をビートルズに迎える相談を本人にしてもかまわないかと聞いたほどだ。やがて、ジョンとポールが直接リンゴと話すためにスケグネスまで出かけた。ロリーをはじめハリケーンズのメンバーは、ふたりが何をしに来たのかとリンゴを問いつめたが、そのときリンゴは何も言わなかった。

エプスタインはマネージャーだからという理由で、ピートにクビを宣告する嫌な役回りを押しつけられた。8月16日の午前11時、エプスタインはホワイトチャペルにあるNEMSの自分のオフィスにピートを呼び出し、その話をした。30分後、ショックで口もきけないピートは、親友のニール・アスピノールとともにビールを浴びるように飲み、怒りを発散させた。数時間もたたないうちに、このニュースは街中に知れわたり、ピートのファンは大騒ぎを起こした。標的になったエプスタインは、数日間はひとりでマシュー・ストリートを歩くこともできず、新車のフォード・ゼファーは傷だらけにされた。また、キャバーン・クラブの外で取っ組み合いのケンカになって、ジョージが左目に大きな青あざを作ったこともあった。

この話が明るみに出ると、リンゴはしばらくロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズのメンバーといても落ち着けなくなった。リンゴは、1957年、58年とエディ・クレイトン・スキッフル・グループに参加してから、1959年3月25日、リバプールのマウント・プレザントにあるマーディ・グラー・クラブで、初めてハリケーンズの前身であるレイビング・テキサンズでドラムを叩いた。リンゴはこのバンドにその年の11月になるまで正式に加入しなかったが、その間にバンドは3度バンド名を変えてロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズと名乗るようになっていた(その前のバンド名は、アル・ストーム・アンド・ハリケーンズとジェット・ストーム・アン

CamScannerでスキャン

ド・ハリケーンズ）。

1960年5月、ハリケーンズはノース・ウェールズにあるプールヘリのバトリンズ・キャンプ村で6月4日から始まる重要な夏季出演の契約を取りつけてきた。しかし、リンゴはこれには参加しないことに決めていた。6月に結婚を控えていたのである。ところが、結婚がとりやめになったため、リンゴはバトリンズに向かい、10月にはハンブルクに渡ってカイザーケラーに出演した。リンゴとビートルズが日常的に接触するようになったのはこのときが初めてで、お互いすぐに意気投合した。同年10月15日、ビートルズがウォルター・エイモンドとちっぽけなアクスティック・スタジオで'Summertime'をレコーディングしたときに参加したドラマーは、ピート・ベストではなくリンゴ・スターだった。

1年後の1961年の10月にプールヘリのバトリンズ・キャンプで2度目の夏季出演をはたすと、リンゴは気もそぞろになった。アメリカの西部劇にぞっこんだったリンゴは、テキサスに移住したいという手紙をヒューストン商工会議所に出した。なかなか好意的な返事をもらったにもかかわらず、リンゴは同封されてきた移住申請書類の多さを目にして気が重くなり、あっさりこの計画をあきらめた。それでも3か月すると、リンゴはハリケーンズをやめて、海外に働きに出た。行き先はヒューストンではなく、ハンブルクだった。トップ・テン・クラブのハウスバンドのドラマーとしてトニー・シェリダンのバックを務めることが決まったのである。1961年12月30日、リンゴはペーター・エクホルンとトニー・シェリダンとともにライム・ストリート駅を出発、ハンブルクに旅立った。しかし、1962年2月、口うるさいシェリダンに嫌気がさしたリンゴは、ハンブルクを飛び出すと、仕事と休暇を兼ねたフランス旅行を間近に控えていたハリケーンズに合流し、その後、スケグネスのバトリンズ・キャンプで3回目の夏季公演に参加した。

8月14日、ジョンはスケグネスにいるリンゴに電話を入れ、ビートルズに加入してくれと話した。ロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズは、3か月間の出演契約を完了するまで、残すところ15日間になっていた。ビートルズ側は急いでいたし、リンゴもかなりその気になっていた。実際、ピート・ベストが病気で出演できなかった2月5日の2回のステージでは、リンゴが代役でビートルズのドラマーをかってでたこともあった。そこでリンゴはロリーに3日後にバンドをやめると伝えた。そして1962年8月18日、リンゴはバーケンヘッドに近いポート・サンライトのハルム・ホールに、初めてビートルズの正式なドラマーとして出演した。この夜、ファブ・フォーが誕生したのである。

ピートとリンゴの交代劇には、もうひとつやっかいな問題があった。ニール・アスピノールだ。ニールはベスト家の友人で、ヘイマンズ・グリーン8番地で一緒に住んでいるほどだった。その一方で、ニールはビートルズにとって、忠実で仕事熱心なロード・マネージャーだったし、おまけにこの仕事についてはきわだった才覚があった。ピートがやめさせられ、ニールはどちらにつくかの選択をせまられた。結局ニールはビートルズと働くことを選び、エプスタインと3人のメンバーはほっと胸をなでおろした。

リンゴがメンバーになって4日後の8月22日、グラナダ・テレビ局のカメラ・クルーがキャバーン・クラブを訪れ、ビートルズの演奏を収録した。これは、キャバーンで演奏するビートルズの姿をとらえた唯一の映像となっただけでなく、その後数えきれないほど経験することになるテレビ出演の1回目となる、画期的な出来事だった。この8月の激動の1週間はこれだけではまだ終わらなかった。8月23日、リバプールのマウント・プレザント登記所で、ジョン・レノンがシンシア・パウエルと結婚したのである。しかし、その日の夜も、ジョ

CamScannerでスキャン

ンはチェスターのリバーパーク・ボールルームでビートルズと過ごした。

6月6日に、ビートルズはEMIで4曲をレコーディングしたが、どれもデビュー・シングルとして発表するほどの出来ではなかった。そこで、9月4日、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの4人は、2回目のセッションを行なうため飛行機でロンドンに向かった。この日は 'Love Me Do' とミッチ・マレー作の 'How Do You Do It' の2曲がレコーディングされた。ビートルズには、自分たちの気に入らない曲を演奏しなければならないことと、自分たち自身で選曲できなかったことが不満だった。1950年代および1960年代はそういう手法が主流だったのだが、ビートルズの面々は臆面もなく不満をあらわにした。

2回目のセッションでもまだ満足しなかったジョージ・マーティンは、1週間後の9月11日、3回目のセッションにビートルズを呼んだ。デビュー・シングルにこれほどの時間と費用をかけることはめずらしかった。このとき、マーティンはセッション・ドラマーのアンディ・ホワイトを雇い、リンゴは落胆しながらも、タンバリンとマラカスを担当した。この日、レノン=マッカートニーによる曲が3曲レコーディングされた。'Please Please Me' の初期バージョン、'Love Me Do' そして 'P.S. I Love You' である。ジョージ・マーティンはやっと満足し、ビートルズのデビュー・シングルとして、A面に9月4日収録の 'Love Me Do' (再プレスの際リンゴがタンバリンを担当しているバージョンに差し替えられた)、B面に9月11日収録の 'P.S. I Love You' を選んだ。

いよいよレコード・デビュー

1962年10月5日、ビートルズの記念すべきデビュー・シングルが発売された。1週間後、このシングルは『レコード・リテイラー』誌のチャートで49位に入った。エプスタインは固く否定していたが、1962年10月から12月にかけて、じつはエプスタインが自らこのレコードを1万枚購入してチャートの順位を上昇させたのだというのがリバプールでもレコード業界でももっぱらの噂だった。事実、このシングル盤のチャート・アクションは不自然に上がったり下がったりを繰り返した(12月27日に最高順位の17位に上がるまでの順位は、49位から始まって、46、41、32、37、29、23、21、26、19、そして22位)。いずれにしても、デビューとしては幸先のいいスタートだった。デビュー・シングル発売日の3日前にあたる10月2日、ブライアン・エプスタインとビートルズは5年間の正式なマネージメント契約を交わした。このときは、エプスタインも自分のサインを記した。

'Love Me Do' が少しずつチャート順位を上げてきたため、ビートルズが遠方の会場に出演することも多くなった。10月28日正午、あと数時間でビートルズが名誉あるリバプール・エンパイア・シアターに初出演するというとき、エプスタインはノーサンプトンシャーのピーターバラに長距離電話をかけた。イギリスのあらゆる主要な劇場(あるいはステージ完備の映画館)を自分のパッケージ・ショーで踏破しつくしたと言われる大物コンサート・プロモーター、アーサー・ハウズの自宅の電話番号を偶然に入手したのである。ハウズが電話口に出ると、エプスタインはいつもの調子で売り込みを始めた。おまけに、チャート上昇中のレコードという強い味方があった。ここぞとばかりに、エプスタインは出演交渉をした。驚いたことに、ハウズはすぐに1963年2月のヘレン・シャピロのパッケージ・ツアーにビートルズの出演をとりあえず予定しておくと答えた。しかしその前に、ハウズが住んでいるピーターバラのエンバシー・シネマでのショーにひと

CamScannerでスキャン

晩出演してもらい、どんなバンドか見せてもらうと言った。それはヨーデルを得意とするオーストラリア人シンガー、フランク・アイフィールドをメイン・アクトに迎えてのショーだった。結局、ハウズが提示したシャピロのツアーでのビートルズへの報酬はひと晩たったの30ポンド、しかもアイフィールドのショーに関しては交通費以外はいっさい支払わないという条件だった。しかし、この重要な時期に主要会場を回れる機会を与えてくれたハウズにエプスタインは恩を感じ、以後、どのビートルズのツアーに関しても最初にオファーできる権利を提供した。ピーターバラでの演奏はビートルズとしてはかなりひどいほうだったが、それでもハウズは、1963年3月のアメリカ人ミュージシャンのトミー・ロウとクリス・モンテスとのパッケージ・ツアーにもビートルズを出演させることにした。

しかしその前に、ビートルズには2回のハンブルク出演契約が控えていた。スター・クラブでの2週間ずつの出演が、何か月も前から決まっていたのである。この2回のハンブルク出演のあいまの11月26日、ビートルズはEMIで4回目のセッションを行ない、翌年の1月初旬に発売が予定されていたセカンド・シングル(A面'Please Please Me')用のレコーディングをした。長かった準備期間が終わり、突然すべてがビートルズのために動き始めた。リバプールの外での公演が日増しに多くなる一方、'Love Me Do'のプロモーションのためにラジオやテレビ出演もみるみる増えた。「マージー・ビート」の2回目の人気投票ではらくらく1位の座を獲得。それどころか、全国誌「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」の年末人気投票でも、ベスト・ブリティッシュ・ボーカル・グループ部門で第5位、ベスト・ブリティッシュ・スモール・グループ部門で第7位に入った。イギリス北部の無名のバンドによる1枚のシングル盤の成果としては、驚異的な結果であった。

12月17日(18日説あり)、ビートルズは5回目の、そして最後のハンブルク巡業に向かったが、4人は明らかにもうこの出稼ぎを嫌がっていた。ハンブルクに到着した瞬間から、ビートルズの胸の中にはたったひとつ、早くイギリスに戻って、やっとつかみかけた名声への小さな足がかりをしっかりと固めたいという気持ちしかなかった。

デッカ・オーディション

1月1日(月)

デッカ・スタジオ
Broadhurst Gardens, London

当時、元日が公休日なのはスコットランドだけだった。その朝、ビートルズはこれまでの活動のなかでもっとも重要な仕事にとりかかる。イギリスのレコード会社デッカでの、初めての正式なオーディションである。

ライバル会社EMIのスタジオがあるアビイ・ロードから3キロも離れていないデッカのスタジオで、ビートルズは緊張しながら15曲を演奏した。その15曲は、ブライアン・エプスタインがビートルズの才能のあらゆる側面を披露するために選んだものだった。おそらく以下の順で演奏されている。'Like Dreamers Do' 'Money (That's What I Want)' 'Till There Was You' 'The Sheik Of Araby' 'To Know Her Is To Love Her' 'Take Good Care Of My Baby' 'Memphis, Tennessee' 'Sure To Fall (In Love With You)' 'Hello Little Girl' 'Three Cool Cats' 'Crying, Waiting, Hoping' 'Love Of The Loved' 'September In The Rain' 'Besame Mucho'、そして'Searchin''。レノン=マッカートニーの作品が3曲('Like Dreamers Do' 'Hello Little Girl' 'Love Of The Loved')、スタンダード・ナンバーを個性的にアレンジしたものが2曲、ロックンロール、リズム&ブルース、カントリー&ウエスタンなど1950年代の曲のカバー・バージョンが7曲、バラードが2曲、最新ヒット曲が1曲という組み合わせだ。

おそらく、各曲1回ずつしか演奏できず、2トラックのモノ・テープにライブ・レコーディングされた。コントロール・ルームには、19日前にキャバーン・クラブにビートルズを見に訪れたデッカのA&R部門のスタッフ、マイク・スミスがいた。オーディションは午前11時ごろから始まり、1時間ほどで終了。結果は必ず通知すると、スミスはエプスタインに約束した。

1月3日(水)

ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月5日(金)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月6日(土)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月7日(日)

カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

1月9日(火)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月10日(水)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月11日(木)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月12日(金)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

ひと晩にふたつのホールに出演。タワー・ボールルームでのステージは午後11時半からだった。メインとして予定されていたスクリーミング・ロード・サッチが時間になっても会場に現れず、急遽ビートルズがその夜のメインを務めることになった。

1月13日(土)

ハンブルトン・ホール
Huyton, Liverpool

ハンブルトン・ホールに最後の出演。これでおそらく関係者全員せいせいしたことだろう。ブライアン・エプスタインもビートルズも、このようなみすぼらしいホールにはもう出演したくはなかったはずだから。

CamScannerでスキャン

Diary 1962

1月14日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

1月15日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月17日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月19日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

1月20日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月21日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

1月22日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:キングズウェイ・クラブ
Promenade, Southport, Lancs

キャバーン・クラブのランチタイムでは、通常の半分である1時間のセッションが初めて試験的に行なわれた。入場料は1シリングだった。

サウスポートのキングズウェイ・クラブは、新しい方向性をめざすビートルズにエプスタインがおよぼした影響を示す好例と言える。ビートルズは1961年によく出演していたような、みすぼらしく暴力的な郊外特有のダンス・ホールでは演奏しなくなった。代わりに、格が上がったバンドにふさわしい上品で洗練されたクラブが選ばれたのである。こういったクラブには、本物のステージ、カーテン、楽屋があり、絨毯まで敷いてあった。また、プロモーションにもかなり力が入れられるようになった。エプスタインはビートルズの経歴を誇張し、巧妙に計算された広告を出し、公演に先駆けて地元の新聞社にバンドの最新の写真やニュース・リリースを送った。

1月24日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月26日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

1月27日(土)
エイントリー・インスティチュート
Aintree, Liverpool

このホールへの出演もこの日が最後。また、ブライアン・ケリー主催のショーに出演するのもこの日が最後となった。ビートルズの面々を車で送り迎えしていたエプスタインに、ケリーが出演料の15ポンドをばら銭だけをかき集めて支払うと、エプスタインの怒りは頂点に達した。あまりにもバンドをばかにしていると、憤懣やるかたなくなったのだ。以来、二度とケリーのもとではビートルズを出演させないと宣言した。2年後に書いた自叙伝のなかでも、エプスタインはこの日の出来事について怒りをこめて語っている。

1月28日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

1月29日(月)
キングズウェイ・クラブ
Southport

このホールでの3週連続出演の2回目。このクラブではアルコール類の販売が許可されていたため、ロック・バンドはバーのない2階のホールに出演させられた。18歳未満の客でも入場できるようにするためである。

1月30日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月31日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

店名を変えさせたエプスタインの手腕

2月1日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:シスル・カフェ
Banks Rd, West Kirby, Wirral, Cheshire

この夜のシスル・カフェへの出演は、エプスタインが初めて仲介料を取ったものであり、当時のエプスタインのマネージング手腕のほどを如実に物語るものである。
この会場は階下がカフェになっているダンス教室用ホールで、リバプールから16キロほど離れたディー川沿いの静かな村にあった。あまりビート・グループは出演しないホールで、持ち主もその方面にうとかったため、エプスタインは会場名を「ザ・ビートル・クラブ」と変えるよう説得し、この大ばくちに成功した。しかし、ここに出演したのはこの夜だけだった。いずれにしてもこの日の出演はグランド・オープニング・ナイトと銘打たれ、ビートルズは18ポンドという、当時としては高い出演料を受け取った。エプスタインはこの特別な機会を祝うため、ガソリン代、オイル代などさまざまな雑費をまかなう手数料として10パーセントしか取らなかった。

2月2日(金)
オアシス・クラブ
Lloyd St, Manchester, Lancashire

リバプール以外の会場で、初めてプロのバンドとして準備された出演。エプスタインの力が目に見えて発揮され始めた。オアシス・クラブのオーナーのケネディ・エンタープライズの責任者トニー・スチュアートは、この先1年間にビートルズをあと3回出演させている。

1. The Hippy Hippy Shake
2. Sweet Little Sixteen
3. The Sheik of Araby
4. September In the Rain
5. Dizzy Miss Lizzie
6. Take Good Care of My Baby
7. 'Til There Was You
8. Memphis Tennessee
9. What A Crazy World We Live In
10. Like Dreamers Do
11. Money
12. Young Blood
13. Honeymoon Song
14. Hullo Little Girl
15. So How Come (Everly's)
16. Oo My Soul
17. To Know Her is to Love Her or Bully Cally
18. Roll Over Beethoven
19. The Love of the Loved
20. Dance/Twist In the Streets
21. Dream
22. Searchin.

2月3日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月4日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

ピートの代役でリンゴが出演

2月5日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:キングズウェイ・クラブ
Southport

リンゴ・スターがビートルズのメンバーになった1962年8月18日の2年前から、リンゴとグループはすでに知り合いだった。リンゴがドラムを担当していたロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズが、1960年の秋にハンブルクのカイザーケラーでビートルズと交替でステージを務めていたからだ。しかも、リンゴは実際にビートルズのドラマーをやったことがあった。それがこの日だ。ピート・ベストは体調が悪かったため、この日の2回のステージを務めることができなくなった。そこでジョン、ポール、ジョージが代役としてまっ先に名をあげたのがリンゴだった。この日、ハリケーンズにはめずらしく仕事が入っていなかった。

CamScannerでスキャン

2月7日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月9日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:テクニカル・カレッジ・ホール
Borough Rd, Birkenhead, Cheshire

テクニカル・カレッジ・ホールに、3週続けて金曜の夜に出演。この日はその1週目。

2月10日(土)
ユース・クラブ
St Paul's Presbyterian Church Hall, North Rd, Tranmere, Birkenhead, Cheshire

ブライアン・エプスタインが取りつけてきた、めずらしい会場での公演。前の夜に出演したテクニカル・カレッジ・ホールから1キロも離れていなかった。

2月11日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

ラジオ出演のためにオーディション

2月12日(月)
ブロードキャスティング・ハウス
Piccadilly, Manchester, Lancashire

ブライアン・エプスタインはビートルズを売り出すために寸暇を惜しんであらゆる手段を講じた。まずもっとも重要なのは、レコーディング契約を取ること。それに加えて、この年の行動でもわかるように、より格上の会場に出演させ、イメージを洗練させ、マスコミへの売り込みに力を注いだ。
もうひとつの売り出し術が、放送網の利用である。1962年1月10日、エプスタインはBBCマンチェスター支局に「バラエティ部門オーディション申請書」を3ページ分入念に書きあげて提出した。ラジオ番組のプロデューサーのオーディションの機会を得るためだった。
その申請が認められ、この日ビートルズはマンチェスターでオーディションを受けることになった。審査するのは、ティーンエイジャー向けのラジオ番組を多数手がけていたプロデューサー、ピーター・ピルビーム。その番組は北西地区用に作られていたが、どれも全国放送されていた。
このオーディションでビートルズは4曲演奏した。ポールが自作の'Like Dreamers Do'とペギー・リーの'Till There Was You'を歌い、ジョンがチャック・ベリーの'Memphis, Tennessee'と自作の'Hello Little Girl'を歌った。オーディション申請書の裏にメモされたピルビームの評価は、ポールの歌については「だめ」、ジョンの歌については「よし」、バンド全体については「個性的なバンド。ほかのグループと違って、いかにもロックンロールという感じではなく、カントリー&ウエスタン風の趣が強いのに音楽性も高い」というものだった。
しかし、重要なのはピルビームの最後のコメントだった。「わかりました。では1962年3月7日、TTに出演お願いします」。つまり、ビートルズはめでたくオーディションに合格し、3月7日に収録される『ティーンエイジャーズ・ターン』という番組でラジオ初出演をはたすことになったのである。ラジオ出演に関する契約書は、2月20日にBBC側で作成した。

2月13日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月14日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月15日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

タワー・ボールルームでは、翌日の夜にもバント・ボールと題されたショーに出演することになっていたので、この日はその前夜祭となった。ビートルズのほかにテリー・ライトフット・アンド・ヒズ・ニュー・オリンズ・ジャズ・バンドが出演。3,500人の観客が入った。

CamScannerでスキャン

2月16日(金)
テクニカル・カレッジ・ホール
Birkenhead
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

マージー河の両サイドにあるふたつのホールに出演。

2月17日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月18日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

2月19日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月20日(火)
フローラル・ホール
Promenade, Southport, Lancashire

エプスタインが仕切ってきた仕事では、おそらくこれまででもっとも大きな会場。実際は劇場であるこのホールには、金ラメのカーテン幕があり、座席も傾斜をつけて並んでいた。できるだけ多くの観客を動員するために、ショーはロックン・トラッド・スペクタキュラーと銘打たれた。ビートルズのほかに、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、ロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズなど4組のロックンロール・バンドが出演。一方、トラッド側からはクリス・ハミルトン・ジャズメンが出演した。

2月21日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月23日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey
テクニカル・カレッジ・ホール
Birkenhead

タワー・ボールルームでは、午後9時からと10時45分からの2ステージに出演。そのあいまにビートルズは会場を抜け出し、カレッジ・ホールでの30分のステージを務めた。

2月24日(土)
夜:YMCA
Birkenhead Rd, Hoylake, Wirral, Cheshire
キャバーン・クラブ
Liverpool

YMCAという意外な場所への出演は、エプスタインが決めたものではなかった。ビートルズを出演させたくて仕方がなかったクラブのまとめ役チャールズ・トランターの骨折りによるものだった。チャールズは最初、1961年9月8日の出演を依頼したのだが、ビートルズにはすでにほかの出演が決まっていた。そこでトランターはモナ・ベストの家を訪れ、1回の出演で30ポンドという破格の出演料を支払うと申し出た。ところが、トランターの熱心な斡旋とはうらはらに、この夜YMCAに集まった観客はビートルズにさして興味を示さなかったどころか、曲のあいまの長すぎるMCに退屈してやじを飛ばし、ビートルズはステージを降りてしまった。

キャバーン・クラブでは恒例のオールナイト・セッションが行なわれた。ビートルズは真夜中を過ぎてから出演。

2月25日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

2月26日(月)
キングズウェイ・クラブ
Southport

CamScannerでスキャン

2月27日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

2月28日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月1日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:ストーリービル・ジャズ・クラブ
Temple St, Liverpool

ートルズは前にもストーリービルで演奏したことがあった。
の当時、このクラブはリバプール・ジャズ・ソサエティとい
前だった。1962年9月、このクラブはさらに名前を改め、
アン・ドア・クラブとなる。

2日(金)
ージョンズ・ホール
le
・ボールルーム
Brighton, Wallasey

ジョンズ・ホールは、以前出演していた薄汚いホー
環境だった。たまにはトップ・クラスのバンドを出
いという若きプロモーター、デイブ・フォーショーの
働きの成果だった。
ふけてから、ビートルズはマージー河を渡ってタ
ルルームの公演に向かった。この夜のショーは
ーチ・ロック・ボール」と銘打たれていた。

(土)
ン・クラブ

(日)
ー・クラブ
Liverpool

3月5日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:キングズウェイ・クラブ
Southport

3月6日(火)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

BBCラジオに初出演

3月7日(水)
プレイハウス・シアター
St John's Rd, Hulme, Manchester, Lancashire

この日ステージはなく、2月12日にラジオのオーディションに合格したビートルズは、マンチェスターのプレイハウス・シアターでBBCラジオのライト・プログラム・ショー(軽音楽放送、現在のラジオ1局)「ティーンエイジャーズ・ターン/ヒア・ウィ・ゴー」の収録に参加。ラジオ初出演をはたした。番組は翌日の3月8日午後5時から5時29分にかけて放送された。ビートルズは午後3時45分からリハーサルを開始、初めてスーツ姿に身を包み、ブラッド・ニューマン、トラッド・ラッズ、バーナード・ハーマン率いるノーザン・ダンス・オーケストラなどの共演者とともに、午後8時から8時45分まで、ティーンエイジャーの客の前で公開番組を収録した。ビートルズは、ほかの出演者の演奏を間にはさみながら、'Dream Baby (How Long Must I Dream?)' 'Memphis, Tennessee' 'Please Mister Postman' という3曲のカバーを演奏した。

3月8日(木)
ストーリービル・ジャズ・クラブ
Liverpool

3月9日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月10日(土)
ユース・クラブ
St Paul's Presbyterian Church Hall, Tranmere, Birkenhead

このクラブに初出演してから1か月、2回目の出演をはたす。

3月11日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

3月12日(月)
キングズウェイ・クラブ
Southport

キングズウェイ・クラブにはこの日と翌週の月曜に2週続けて出演しているが、いずれも告知されなかった。

3月13日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月14日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月15日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:ストーリービル・ジャズ・クラブ
Liverpool

ストーリービルでの公演は、ビートルズ・フェアウェル・パーティーと題して行なわれた。

3月16日(金)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月17日(土)
ビレッジ・ホール
Knotty Ash, Liverpool

プロモーターのサム・リーチによる特別イベント。モナ・ベストが興行権を手放してからは、彼がこのホールでのショーを主催していた。
この夜は「セント・パトリックス・ナイト・ロック・ガラ」と題して、リーチはビートルズとロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズを出演させた。多数の観客を動員して、このロックンロール・ショーが終わったあとハイトンで行なうパーティーの費用をまかなう目的もあった。両バンドとも出席したこのパーティーは、翌日の午後まで続く典型的なリバプール・スタイルだった。

3月18日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

3月19日(月)
キングズウェイ・クラブ
Southport

3月20日(火)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月21日(水)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月22日(木)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月23日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月24日(土)
ヘズウォル・ジャズ・クラブ
Barnston Women's Institute, Barnston Rd, Heswall, Wirral, Cheshire

ビートルズはこのちょっと変わったホールに3回出演している。この日が初出演。

3月25日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

3月26日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月28日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月29日(木)
オッド・スポット・クラブ
Bold St, Liverpool

1961年12月9日にリバプール中心街にオープンしたこのナイト・クラブに初出演をはたす。

3月30日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

3月31日(土)
サブスクリプション・ルームズ
George St, Stroud, Glos

1961年12月のサム・リーチによるオールダーショットでの大失敗に続く、ビートルズにとっては2回目の南部への進出。ブライアン・エプスタインの手配としては初めての南部での公演になる。しかし、エプスタインの手にかかっても、さして適切な会場とは言えなかった。

実際の手配はロンドンでも定評のあるケイナ・バラエティ・エージェンシーに依頼して行なわれたものだった。じつは、ビル・フレイジャー・リードと手を組んでこのケイナ社を経営していたジョン(ジャック)・ファロンはジェイビー・クラブスという別会社を使って西部諸州でのダンス・ショーを独占的に近い形で興業していた。当然、そこへバンドを融通するのもファロンで、その関係で以後ビートルズはジェイビー系会場で4回出演することになった(1968年7月12日を参照)。

4月1日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

4月2日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:パビリオン・シアター
Lodge Lane, Liverpool

パビリオン・シアターでのステージは、このショーのためにアイルランドからわざわざ飛行機でリバプール入りしたロイヤル・ウォーターフォード・ショーバンドと共演するという、ビートルズのショーとしては趣向の変わったものだった。主催は地元のバラエティ・エージェントのジム・グレッティ。ちなみにこの劇場は「ピビー」と呼ばれ、リバプールでいちばんのストリップ劇場として知られ、1950年代の終わりにクオリーメンもスキッフル・コンテストに出場したことがあった。ビートルズとして出演したのはこの日だけ。

4月4日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

4月5日(木)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

ビートルズ・ファン・クラブが主催した特別公演。ファン・サービスとして、前半のステージでビートルズは以前のように黒の革ジャンを着て演奏。後半はピノ・ドーンで仕立てたばかりのスーツとタイに着替えて演奏した。

4月6日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

ハンブルク行きを間近に控えていたため、タワー・ボールルームでのショーは、ビートルズ・フェアウェル・ボールと題され、2時間半におよんだ。エミール・フォード・アンド・チェックメイツと共演。

4月7日(土)
夜:カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool
キャバーン・クラブ
Liverpool

ハンブルクへの出発まで、ショーは残すところあと3回のみ。この日の2回のショーと翌日のカスバ・クラブでのステージに、ジョージは体調が悪かったため参加していない。目前にせまったハンブルク行きにそなえてエプスタインは大事をとり、ジョージをステージに立たせなかった。

4月8日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

カスバで演奏後にハンブルクへ向かう。

3度目のハンブルクはグレード・アップ
4月13日(金)~5月31日(木)
スター・クラブ
Grosse Freiheit, Hamburg, West Germany

ハンブルクにオープンしたばかりのロックンロール専門のスター・クラブに7週間出演。ビートルズは、1時間演奏して1時間休憩というローテーションで、ひと晩に3時間と4時間のステージを1日ごとにこなした。7週間のうち2週間は、共演者としてジーン・ビンセントがやってきた。休日は聖金曜日の4月20日のみ。
2年間で3回目となる今回のハンブルク出演契約は5月31日まで続き、その間ビートルズは48夜にわたって172時間もステージに立った。そして6月2日の午後、ルフトハンザ航空でハンブルクを出発し、ロンドン空港に帰った。ロンドン空港からマンチェスター行きの飛行機に乗りつぎ、午後7時25分にリングウェイ空港に到着。そこからは車でリバプールに帰った。6月3日(およそ午後3時から6時半まで)および4日(午後7時から)は、キャバーン・クラブでプライベートなリハーサルを行ない、6月5日に車でロンドンに向かった。

ケンプフェルトのもとで再びレコーディング
4月23日(月)~27日(金)
ハンブルク
Hamburg

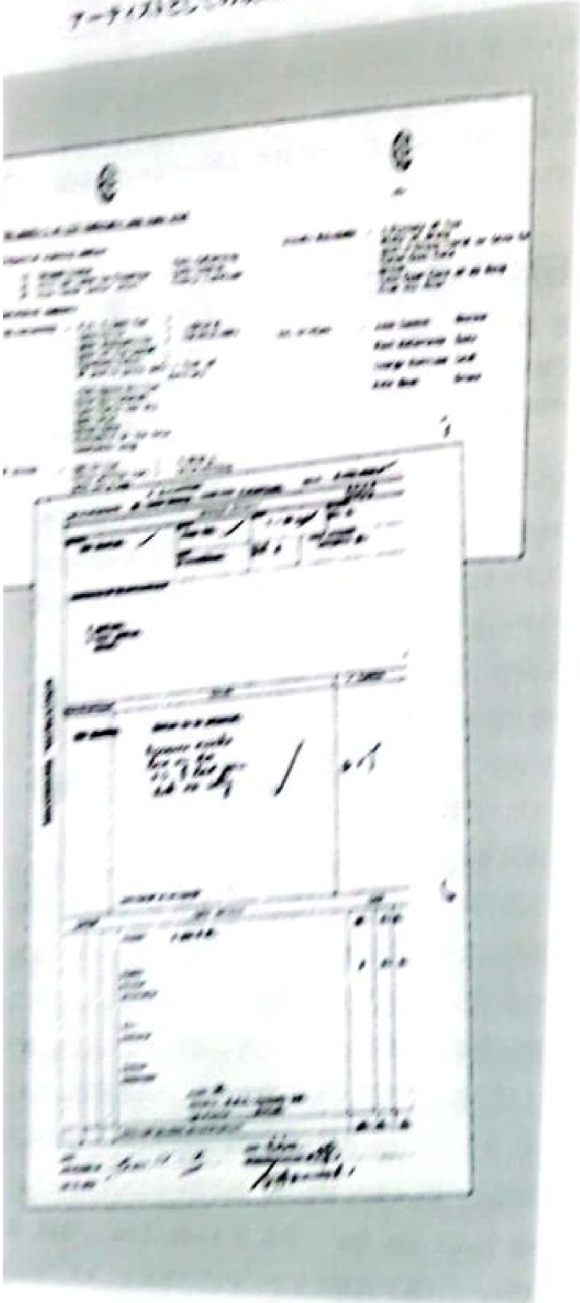
プロデューサーのベルト・ケンプフェルトは、6月30日まで有効なビートルズとの独占レコーディング契約の早期終結を承諾する前に、もう2曲ビートルズとレコーディングしたいとエプスタインに申し出た。
ビートルズが参加したレコーディングは4月23日から27日までの間に行なわれ、'Sweet Georgia Brown' と 'Swanee River' が、また、ピート・ベストのバイオグラフィ「ビートル!」によれば 'Skinny Minny' がレコーディングされたことになるが、現存する資料では信憑性は薄いと言わざるを得ない。

EMIで初めてのレコーディング
6月6日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
Abbey Rd, London

ビートルズにとって、またしても歴史的な1日。ロンドン郊外のセント・ジョンズ・ウッドにあるアビイ・ロード3番地のEMIスタジオに、ビートルズはこの日初めて足を踏み入れた。街の中心から北に5キロと離れていないにもかかわらず、とても閑静なところだった。この日、ピート・ベストにとっては最初で最後のEMIセッションへの参加となった。次にビートルズがこのスタジオを訪れた9月4日には、ドラマーはリンゴ・スターに替わっていた。
1991年に公開されたEMIの資料により、このセッションは午後7時から10時まで第2スタジオで行なわれたことが明らかになり、単なるオーディションではなく、ビートルズ最初の正式なレコーディングでもあったことが判明した。そのために書面上のレコーディング契約締結日は、6月4日に繰り上げられていたのである。かなり多くの曲を演奏したあとで、オーディション合格、つまり即レコーディング開始OKが出ると、'Besame Mucho' およびレノン=マッカートニーの 'Love Me Do' 'P.S. I Love You' 'Ask Me Why' の4曲が実際にレコーディングされた。スタジオの資

CamScannerでスキャン

緒によると、サンプルのラッカー・ディスクが制作されており、'Besame Mucho'と'Love Me Do'は1995に『ANTHOLOGY 1』に収録された。
セッションは、ジョージ・マーティンのアシスタントであるロン・リチャーズの指示のもとに始められた。マーティンは、バランス・エンジニアのノーマン・スミスが'Love Me Do'に興味を持ち、テープ・オペレーターのクリス・ニールに呼びに行かせるまでスタジオにいなかった。その後マーティンは、この日のセッションの最後まで立ち会う。
ビートルズは翌6月7日にリバプールに戻り、レコーディング・アーティストとしての次のステップへの進展を待った。



6月9日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この夜のビートルズ・ウェルカム・ホーム・ショーでは、キャバーン・クラブ開店以来の観客が訪れ、900名という観客動員を記録した。若者たちが押し寄せ、ビートルズを見ようと、地下のせまい店内はすし詰めになった。
この日から12日間、ビートルズはキャバーン・クラブと独占出演契約を結んでいた。

6月11日(月)
プレイハウス・シアター
Manchester

ラジオ番組「ティーンエイジャーズ・ターン/ヒア・ウィ・ゴー」の2回目の収録のため、ビートルズは再びマンチェスターのプレイハウス・シアターを訪れた。午後4時からリハーサルをして、8時45分から9時30分まで公開収録が行なわれた。レノン=マッカートニーの曲としては初めて電波に乗った'Ask Me Why'、そして'Besame Mucho' 'A Picture of You'を演奏。
この番組は、BBCライト・プログラムで6月15日の午後5時から5時29分にかけて放送された。

6月12日(火)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この週は3日間にわたり、キャバーン・クラブのランチタイムと夜の両セッションに出演。この日はその初日。

6月13日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

6月15日(金)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

6月16日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

6月19日(火)
ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

6月20日(水)
ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

6月21日(木)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

1962年後半になると、エプスタインはマージーサイドに数多くのトップ・アーティストを呼び、出演させた。ビートルズを前座として、そしてあわよくばその主役を食ってしまおうという狙いだった。この日のメインはわずか5週間前に'Hey! Baby'でトップ・テン・ヒットを放ったばかりのブルース・チャネルだった。
この夜はさらに予期せぬ収穫があった。ジョンがチャネルのハーモニカ・プレイヤー、デルバート・マクリントンにただならぬインスピレーションを受けたことだ。以降、1964年までにレコーディングされたビートルズの曲の多くに、マクリントンの影響が明確に表れている。

6月22日(金)
ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

6月23日(土)
(ビクトリー)メモリアル・ホール
Chester Way, Northwich, Cheshire

リバプールから40キロほど南東に行った、岩塩産地として有名なチェシャー州ノースウィッチにある、この格上のホールにビートルズは6回出演している。この日が初出演。プロモーターのルイス・バックリーはイギリス各地でビート・ミュージックのダンス・パーティーを主催していたため、ビートルズは彼の目にとまるよう印象的な演奏を心がけた。

6月24日(日)
カスバ・コーヒー・クラブ
West Derby, Liverpool

カスバ・クラブへのビートルズの出演はこの日が最後となる。3年ほど続いたこの店は、ベスト家に不幸があったため、6月末に閉店した。

6月25日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:プラザ・ボールルーム
Duke St, St Helens, Lancashire

プラザ・ボールルームへの出演はウェットストーン・エンターテインメンツとの最初の出演契約によるものだった。この会社はマージーサイド地区でほかに2軒の音楽専門の店を経営していた。リバプールのオーレル・パークとチェスターのリバーパークである。
25ポンドの報酬が支払われたこの公演の前、エプスタインはビートルズのメンバーに「ウェットストーンは北西部で16店舗を経営している」と書いたメモを渡した。しかしこれは、グループを活気づけるためにエプスタインが企てた巧妙な策略だった。というのも、16店のうち13店は賭博場であることをエプスタインはよく知っていたからである。

6月27日(水)
ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

6月28日(木)
マジェスティック・ボールルーム
Conway St, Birkenhead, Cheshire

このホールにビートルズは17回出演しているが、この日はその初日という以上に重要な意味があった。当時イギリスでもっとも勢いのあったエンターテインメント・シンジケートとして、劇場、映画館、ボールルーム、賭博場などを多数手がけていたトップ・ランク社との初めての出演契約だったからである。トップ・ランク社は28軒のボールルームを所有しており(ほとんどがマジェスティックという名前)、そこでビート・ミュージックのライブを主催していた。この日から数

CamScannerでスキャン

えて1年のうちに、ビートルズはそのうちの12会場に出演している。

6月29日(金)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

サム・リーチは、前年の冬に成功させた2回のショーに続いて、この夜タワー・ボールルームで「オペレーション・ビッグ・ビートIII」を主催した。ビートルズをメインに地元の10組のバンドが出演し、5時間半にわたるロックン・ツイスト・オン・パレードが繰り広げられた。

6月30日(土)

ヘスウォル・ジャズ・クラブ
Barnston Women's Institute, Heswall, Wirral

7月1日(日)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この夜のキャバーン・クラブには、ビートルズが春にハンブルクで出会い、親交をあたためたジーン・ビンセントも出演した。

7月2日(月)

プラザ・ボールルーム
St Helens

月曜の夜に4週続けて出演。この日はその2週目。

7月3日(火)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月4日(水)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月5日(木)

マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

7月6日(金)

MV ロイヤル・アイリス号
River Mersey

キャバーン・クラブ主催のフィッシュ・アンド・チップ・ボートとロイヤル・アイリス号でのリバーボート・シャッフルに再び出演。今回もビートルズはアッカー・ビルクと共演した。船上コンサートにぴったりのタイトルを持つビルクのヒット曲'Stranger On The Shore'は、発売から半年以上たったこのときもまだトップ・テンに残っていた。
共演者全員にいつも配ったのか、ビートルズにだけだったのかはわからないが、この夜ビルクは、ジョン、ポール、ジョージ、ピートに黒い山高帽をプレゼントした。それはビルクのステージでのトレードマークだった。

7月7日(土)

ハルム・ホール
Bolton Rd, Port Sunlight, Birkenhead, Cheshire

ポート・サンライト村にあるこの会場に初出演。ビートルズはこの日を含め計4回このホールに出演している。ポート・サンライト村は、もともと1888年にレバーハルム子爵が自分の石鹸会社の従業員のために作ったという変わった成り立ちを持つ村だった。この会社は現在では多国籍企業のユニレバー社として成功している。ホールの正式な収容人数は450名だったが、ビートルズが出演する夜には500名の観客を押し込んでいた。この日は地元のゴルフ・クラブのためのダンス・パーティーだった。

7月8日(日)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月9日(月)

プラザ・ボールルーム
St Helens

CamScannerでスキャン

7月10日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月11日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月12日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

7月13日(金)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

7月14日(土)
リージェント・ダンセット
High St, Rhyl, Flintshire

ウェールズでのビートルズ最初の公演。当時多くのスヌーカー場やビリヤード場がそうだったように、リージェント・ダンセットもまた、大手テーラー会社バートンズの店舗の階上にあるボールルームだった。

7月15日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月16日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:プラザ・ボールルーム
St Helens

7月17日(火)
マッキルロイズ・ボールルーム
Havelock Square, Swindon, Witshire

ビートルズ3度目の南部出演。ジェイビー・クラブが手配した会場では2回目の出演。60分のステージを2回行なった。

7月18日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月19日(木)
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

ビートルズは6月28日から7月12日まで、木曜の夜に3週連続でこの会場に出演している。観客からの要望が強かったため、もう1週追加され、この日も出演することになった。

7月20日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:ベル・ホール
Orford Lane, Warrington, Lancashire

夜のショーは、ビートルズにとって、リバプールから30キロほど西にあるウォーリントンでの最初で最後の出演。

7月21日(土)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

7月22日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

7月23日(月)
キングズウェイ・クラブ
Southport

7月24日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

Diary1962

7月25日(水)

ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:キャバレー・クラブ
Duke St, Liverpool

キャバレー・クラブへの出演はなかなか興味あるものだった。キャバレー・ライブ・サーキットにもくい込もうとするブライアン・エプスタインの(誤った)試みだった。出演料は15ポンドだったが、告知なしのこの出演はオーディションと言ってもよく、結果は大失敗だった。当時このクラブの共同マネージャーだったボブ・ウッドワードは、この夜の客がまったく無反応で、ビートルズがやみくもに大音量で演奏したため窓ガラスがガタガタ鳴ったのを覚えているという。ウッドワードは二度とビートルズを店に呼ばなかった。

7月26日(木)

ケンブリッジ・ホール
Lord St, Southport, Lancashire

ブライアン・エプスタインのNEMSエンタープライズ主催による2夜連続のショーの初日。出演者はジョー・ブラウン・アンド・ヒズ・ブラバーズとビートルズ。ブラウンの'A Picture Of You'は当時ヒット・チャートの第3位に入っていて、エプスタインも大好きな曲だった。ビートルズもこの曲をステージでのレパートリーに加え、ジョージがボーカルを担当していた。

7月27日(金)

タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

7月28日(土)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

7月30日(月)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:セント・ジョンズ・ホール
Bootle

何とかしてビートルズを出演させようとギリギリまで粘るプロモーター、デイブ・フォーショーのかいがいしい努力の割に、またしても、1961年を最後におさらばしたはずのおぞましい会場に戻ってしまった。フォーショーは、このころにはセント・ジョンズ・ホールでブルー・ペンギン・クラブと銘打った独自のロックンロール・ライブを主催していた。

8月1日(水)

ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月3日(金)

グラフトン・ルームズ
West Derby Rd, Liverpool

地元のプロモーターのアルバート・キンダーが手がけていた、戦前からあるこのダンス・ホールで初めて開催されたロックンロール・ショー。ビートルズを筆頭に、ジェリー・アンド・ペースメイカーズとビッグ・スリーが出演。1950年代の終わりに、クオリーメンはこの会場でスキッフル・コンテストに出演したことがあった。

8月4日(土)

ビクトリア・ホール
Village Rd, Higher Bebington, Wirral, Cheshire

ここもロック・グループの会場としてはかなり変わったところだった。このホールに出演したバンドはほとんどいなかったため、エプスタインでさえこのホールの所在地がさっぱりわからなかった。

8月5日(日)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月7日(火)

ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月8日(水)

コープ・ボールルーム
St. Sepulchre Gate, Doncaster, Yorks

CamScannerでスキャン

ペナイン山脈の向こう側にある140キロほど離れたドンカスターのコーブ・ボールルームに出演。そのため、キャバーン・クラブの水曜の夜のレギュラー出演を休ませてもらう。

8月9日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月10日(金)
MV ロイヤル・アイリス号
River Mersey

前回のアッカー・ビルクとの共演からひと月ばかりして、またキャバーン・クラブが主催した船上コンサート。今回のビートルズの共演者は、2年前に'Shakin' All Over'をナンバーワン・ヒットさせたことのあるジョニー・キッド・アンド・パイレーツ。また、のちにブライアン・エプスタインがビリー・J・クレイマーとチームを組ませた、マンチェスターのインストゥルメンタル・グループ、ダコタスもこの船上コンサートに出演した。

8月11日(土)
オッド・スポット・クラブ
Liverpool

8月12日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8月13日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:マジェスティック・ボールルーム
High St, Crewe, Cheshire

トップ・ランク社のこのマジェスティック・ボールルームには、2週続けて月曜の夜に出演。この日はその1週目。このホールではブラックプール・ロック以来最大のロックンロール・ショーと題してビート・ナイトを開催していた。

ピート・ベストとの最後のステージ

8月15日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

ピート・ベストがビートルズのメンバーとなって2年と3日たった。この夜のキャバーン・クラブへの出演が、ピート・ベストのビートルズ・メンバーとしてのラストステージとなる。

8月16日(木)
リバーパーク・ボールルーム
Union St/Love St, Chester, Cheshire

美しいチェシャーの街で(不定期に)木曜の夜に行なわれた4回の公演の初日。この日のショーはそれなりに充実したものとなるはずだったが、ピート・ベストが姿を現さず、その逆の結果となった。エプスタインがピートをクビにしたのは、この日の公演の数時間前。その時点でピートはこのチェスターのステージには出演すると言っていたのだが、当然のことながら気が変わった。そのため、ビッグ・スリーのジョニー・ハッチンソンが代理でドラムを叩いた。

8月17日(金)
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

前日と同じく両会場とも、ジョニー・ハッチンソンがピート・ベストの代わりを務めた。ただ、おかしなことに、この夜はジョニーの所属するビッグ・スリーもオーレル・パーク・ボールルームに出演する予定になっていたため、彼らも代わりのドラマーを探さなくてはならなかった。ビートルズとの共演はそれほど魅力的だったということだろう。

リンゴを迎えてのステージ

8月18日(土)
ハルム・ホール
Port Sunlight, Birkenhead

ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの新生ビートルズによる初めての正式な出演。ビートルズは午後10時すぎに、17回

CamScannerでスキャン

目になる地元のホーティカルチュラル・ソサエティ（園芸協会）主催の毎年恒例のダンス・パーティーにトリとして出演。その前に2時間ほどリハーサル。

8月19日（日）
夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

8月20日（月）
マジェスティック・ボールルーム
Crewe

初めてのテレビ収録

8月22日（水）
ランチタイム／夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

この日のキャバーン・クラブのランチタイム・セッションは、記念すべきステージとなった。ビートルズの演奏が初めてテレビ・カメラにとらえられたのだ。
きっかけは熱烈なビートルズ・ファンからの手紙だった。マンチェスターに本拠をかまえるグラナダ・テレビのプロデューサー数人は、とりあえずビートルズの演奏を見てみようと、7月26日にケンブリッジ・ホール、8月1日にキャバーン・クラブを訪れた。関心を持ったプロデューサーは、さっそく「ノウ・ザ・ノース」という番組でビートルズの演奏を放送することに決定。この日カメラ・クルーがキャバーン・クラブを訪れ、'Some Other Guy'と'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'の2曲を収録した。賛否両論を呼んだピート・ベストの脱退から1週間もたっていないこともあり、男のファンが'Some Other Guy'の最後のほうで「ピートを出せ！」と怒鳴っているのがマイクに入っている。
しかし、薄暗いキャバーン・クラブの店内はおよそテレビ撮影にふさわしい場所ではなかった。そのため映像は満足な仕上がりにならなかった。テレビ局側はこれでは使用できないと判断し、そのままお蔵入りになった。このときの映像が放送されたのはずっとあとで、ビートルズが有名になってからのことだ。それも'Some Other Guy'のみで、1963年11月6日、グラナダ・テレビの番組「シーン・アット6:30」（午後6:30～7:00）で初めて放送され、それ以降はよく放送されている。

このときの映像は今やこの'Some Other Guy'と数カットの断片が現存しているだけだが、ビートルズが全国的に有名になる以前の姿をとらえているものとして、しかもキャバーン・クラブで演奏している姿をとらえているものとしては、今のところこの映像が唯一のものである。
注：グラナダ・テレビが収録した音源からカットされた'Some Other Guy'のアセテート盤がのちにリバプールで出まわったが、これはエプスタインが地元でプレスさせ、NEMSの店を通して販売したものである。しかし、アセテート盤に収録されている内容がフィルムに収録されている演奏とは若干異なることから、ビートルズがカメラ撮りのために何回かこの曲を演奏しているのは確かである。

8月23日（木）
リバーパーク・ボールルーム
Chester

ジョン・レノンは結婚初夜も、チェスターのステージでビートルズとして演奏していた。

8月24日（金）
ランチタイム：キャバーン・クラブ
Liverpool
夜：マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

8月25日（土）
マリーン・ホール・ボールルーム
Esplanade, Fleetwood, Lancs

漁業で有名な北部沿岸にある街の、この会場へのビートルズ唯一の出演。

8月26日（日）
夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

1961年10月に'Tribute To Buddy Holly'がトップ30ヒットとなったソロ・シンガー、マイク・ベリーも出演。

8月28日（火）
夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

CamScannerでスキャン

翌29日にモーカムに出演することになったため、定例となっていた水曜夜のキャバーン・クラブへの出演を、この日に変更していた。

8月29日(水)
フローラル・ホール・ボールルーム
Promenade, Morecambe, Lancs

北西部の海岸沿いのリゾート地にあるこの会場に、ビートルズは2回出演している。その第1回目。

8月30日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:リバーパーク・ボールルーム
Chester

8月31日(金)
タウン・ホール
Town Hall Chambers, Church Rd, Lydney, Gloucestershire

ジェイビー・クラブ主催のショーに金曜、土曜と2日連続で出演。

9月1日(土)
サブスクリプション・ルームズ
Stroud

3月31日以来の出演。

9月2日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月3日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:クイーンズ・ホール
Victoria Rd, Widnes, Lancashire

この日から、NEMSはリバプールから20キロほど南にあるマージー河沿いの工業都市ウィンズで、3週続けて月曜の夜にショーを主催した。メインはもちろんビートルズ。共演者は週ごとに異なり、1週目と2週目には9月1日にバトリンズ・キャンプ村の仕事から帰ってきたばかりのロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズが出演した。ドラマーのリンゴ・スターを引き抜かれたハリケーンズのメンバーは、最初はビートルズに対して敵意を見せたが、それもすぐにおさまった。

アビイ・ロードでデビュー曲をレコーディング

9月4日(火)
EMIスタジオ、第3、2スタジオ
London

6月6日の初めてのセッションから90日後、ビートルズは再びEMIスタジオを訪れ、デビュー・シングル用のレコーディングに再度挑戦した。朝リバプール空港を出発したメンバーは、こじんまりとしたチェルシー地区のホテルにチェックインしたあと、昼食後にアビイ・ロードに到着した。
午後2時から5時までは第3スタジオで、ロン・リチャーズのもとで精力的なリハーサルを行なった。6曲を練習し、そのうちの2曲が夜のセッションでレコーディングされた。スタジオは午後7時から10時まで予約していたが、結果的に11時15分までかかった。そのうちの1曲は、オリジナル曲にこれといったものがないと感じたジョージ・マーティンが前もって選んでいたミッチ・マレー(本名ライオネル・ミッチェル・スティッチャー)の'How Do You Do It'だった。マーティンはこの曲をビートルズのデビュー・シングルに強く推した。午後のセッションでリハーサルした6曲のなかには'Love Me Do'と'Please Please Me'も含まれていた。
'How Do You Do It'のレコーディングについては、興味深い事実がある。もっとも注目すべき点は、ビートルズがこの曲のアレンジをかなり変えていたことだ。ジョージ・マーティンから送られてきたオリジナル・デモ収録のアセテート盤を聴いて、自分たちのスタイルに合うように時間をかけて編曲したに違いない(1962年夏にロンドン中心部のデンマーク・ストリートにあるリージェント・サウンド・スタジオでカットされたこのアセテート盤では、当時無名だったロンドンのデイブ・クラーク・ファイブのバックで、ソングライター志望のバリー・メイソンが歌っていた。もともとアダム・フェイスの気を引くことが目的だったため、軽くスキップするような曲調に仕上がっていた)。その後、ビートルズのレコーディングが採用されなくなると、この曲はジェリー・アンド・ペースメイカーズにまわされた。ジェリーはマレーのオリジナル・バ

9月4日、EMIスタジオで初めて撮影されたビートルズの写真。第3スタジオでリハーサル中のショット。カメラマンのデゾ・ホフマンはジョージの顔を右側から撮るように指示されていた。キャバーンでのケンカ騒ぎでジョージの左目のまわりにあざができていたからだ

CamScannerでスキャン

ージョンではなく、ビートルズのアレンジをコピーしている。1962年のミッチ・マレーの日記には、翌9月5日にロン・リチャーズが「昨夜この曲が最高のできばえに仕上がった」と伝えてきたと記されている。また、その2日後、マレー自身もビートルズのバージョンを聴いたと書かれている。しかし12日には、ビートルズが別の曲（'P.S. I Love You'）を収録したため'How Do You Do It'のリリースは見送られたとマレーは知らされた。
その決定がビートルズを喜ばせたことは言うまでもない。たしかにこの曲はメンバーの好みと異なり、あまりにも白っぽくて、リズム&ブルース風の要素が皆無だった。しかし、その点を除けば、'How Do You Do It'にはまったく問題はなかった。実際、ジェリー・アンド・ペースメイカーズはこの曲でチャートのナンバーワンを獲得している。しかしジョンとポールはあくまでも自分たちの曲をシングルとして発売することを望んでいた（この方針は以後のビートルズのレコードで実現されている。アルバムにはカバー・バージョンを収録したものもあるが、シングル盤の両面は必ずレノン=マッカートニーの曲かハリスンの曲である）。つまり、ビートルズは一応'How Do You Do It'をレコーディングする準備はしていたが、それはいやいやながらの話だったし、やる気はなかったのだ。その気持ちをくみ、現時点でのかんばしくない仕上がりからいずれ大きな飛躍があるだろうと見込んだジョージ・マーティンは、レノン=マッカートニーの行く末をもう少し見守ることにした。一方、楽曲管理会社のディック・ジェイムスはビートルズ・バージョンの'How Do You Do It'はオリジナルのデモより劣悪だと考えていた。
午後5時から7時まで、ジョージ・マーティンはビートルズを夕食に連れ出した。そして夜のセッションで、'How Do You Do It'と'Love Me Do'を15テイク以上レコーディングした。'Love Me Do'で、ポールはリハーサルでもステージでも歌ったことのないラインを歌わなくてはならないことで緊張した。また、リンゴは複数のパーカッションをひとりで同時に演奏しようとして、スティックではなくマラカスでハイハットを刻むのも辞さないという、妙なドラム・テクニックを試みた。
スタジオの資料によれば、'How Do You Do It'と'Love Me Do'はこの夜のうちにジョージ・マーティンとバランス・エンジニアのノーマン・スミスによってミキシングされ、翌朝、マーティンとエプスタインが試聴できるようにアセテート盤もカットされた。

9月5日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

ロンドンでのレコーディング・セッションから何時に戻れるかわからなかったため、この日のランチタイム・セッションはあらかじめ翌日に変更されていた。しかし、ビートルズは夕方までにリバプールに戻り、夜のセッションには出演した。

9月6日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:リアルト・ボールルーム
Upper Parliament St / Stanhope St, Toxteth, Liverpool

リアルト・ボールルームはトップ・ランク社のボールルームだったが、このショーはサム・リーチの主催によるものだった。クオリーメンは1950年代の終わりにここでのスキッフル・コンテストに1、2回出場していたが、ビートルズとして出演するのはこの日が初めて。

9月7日(金)
ニュートン・ダンシング・スクール
Village Hall, Thingwall Rd, Irby, Heswall, Wirral, Cheshire

ビートルズにとってはまたしても場違いな会場でのショー。

9月8日(土)
YMCA
Whetstone Lane, Birkenhead, Cheshire
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

9月9日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

トップ30シングルを2曲持つイギリスのシンガー、クリントン・フォードも出演。当初、彼は1週前の日曜日(9月2日)に出演する予定だった。

CamScannerでスキャン

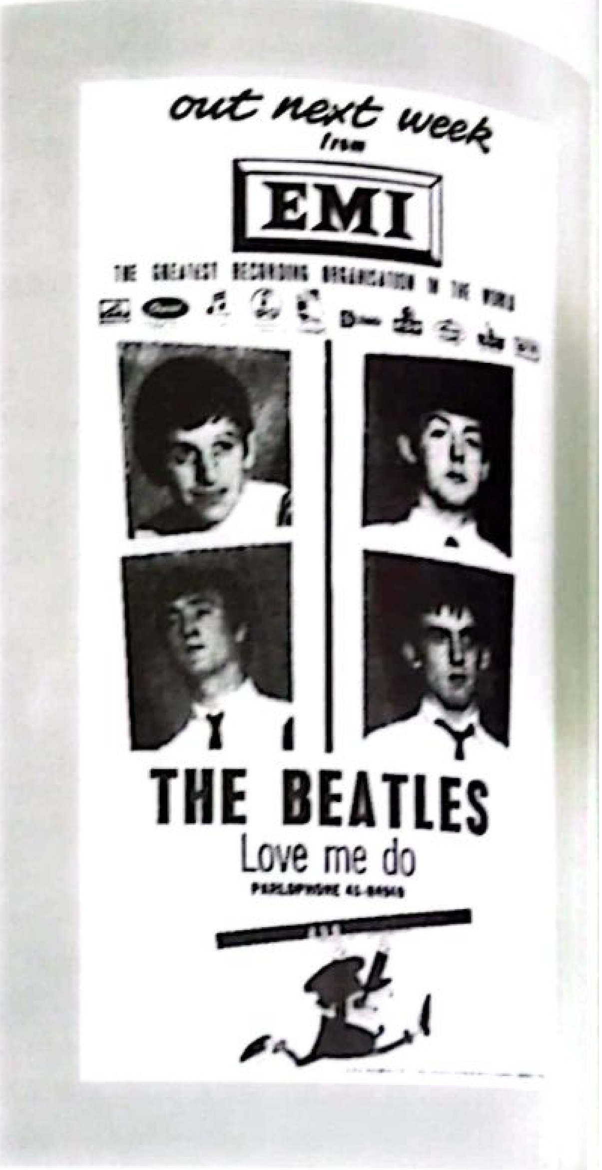
9月10日(月)
ランチタイム：キャバーン・クラブ
Liverpool
夜：クイーンズ・ホール
Widnes

リンゴの代わりにセッション・ドラマーを迎える

9月11日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

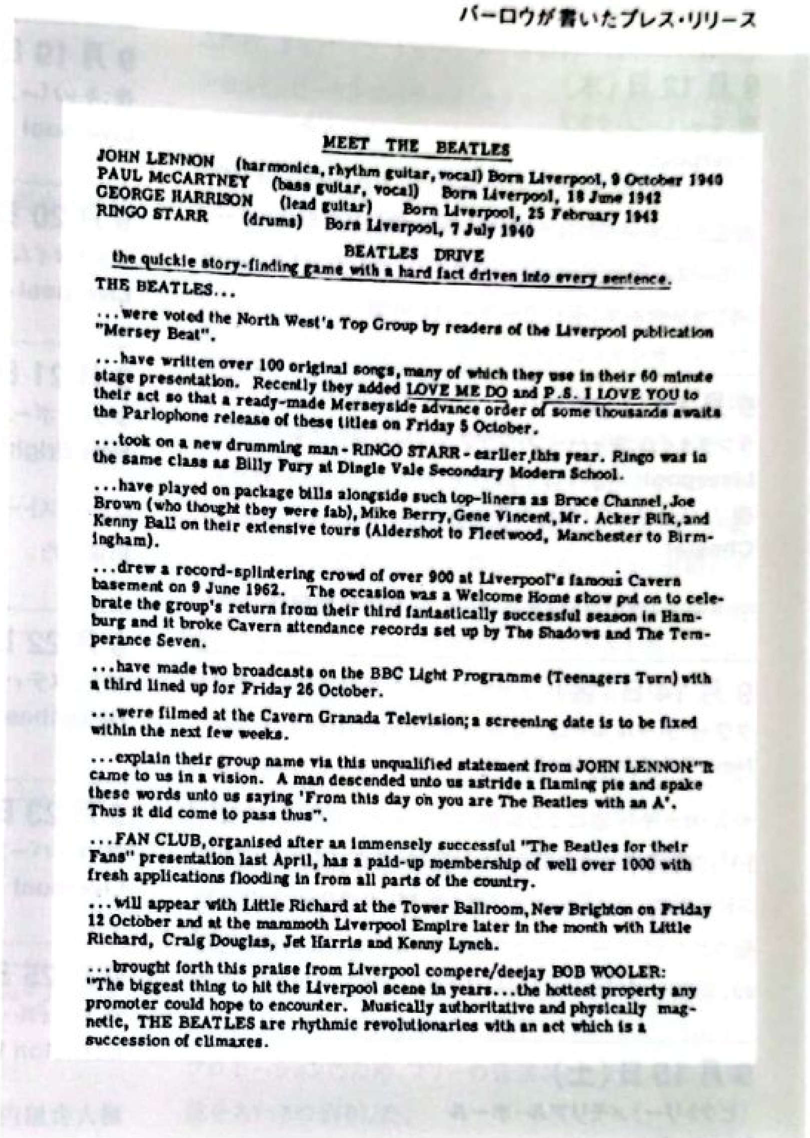
デビュー・シングルのための3回目のレコーディングが急に決まり、ビートルズはアビイ・ロードへ向かった。この日、ジョージ・マーティンは成り行きまかせにことを運ぶことはしなかった。スタジオ経験の浅いリンゴの代わりに、熟練セッション・ドラマーのアンディ・ホワイトを雇ったのである。リンゴは、その時点でA面の有力候補だった'P.S. I Love You'ではマラカス、'Love Me Do'ではタンバリンを担当した。EMIの資料によれば、第2スタジオでのセッションは午後5時から6時45分までとなっている。予定では4時45分から6時半までだった。ロン・リチャーズがこのセッションを仕切り、ジョージ・マーティンはセッションの半ばに姿を現した。'P.S. I Love You'の再録が10テイク、'Love Me Do'の2回目のリメイクが18テイク収録された。さらに、アンディ・ホワイトがドラムを叩いた'Please Please Me'もレコーディングされた。セッションのあとマーティンはビートルズに、'Please Please Me'はテンポを速くしてハーモニーをタイトにすればずっとよくなるだろうと話した。

レコーディング終了直後、'Love Me Do'と'P.S. I Love You'はモノにミックスされ、デビュー・シングルのA面とB面はこの順番で制作が進められた。このビートルズのデビュー・シングルは、10月5日に発売された(興味深いことに、ファースト・プレスには9月11日のバージョンではなく、リンゴがドラムを叩いた9月4日の'Love Me Do'が収録されている。つまり、アンディ・ホワイトがドラムを叩いても、さしてよくならなかったという考えもあったということだ。しかし、そのあとのプレスとリリース、たとえばLP"PLEASE PLEASE ME"にはアンディ・ホワイトのバージョンが収録されている)。



CamScannerでスキャン

シングル・リリースにあたり、トニー・バーロウが書いたプレス・リリース



MEET THE BEATLES

JOHN LENNON (harmonica, rhythm guitar, vocal) Born Liverpool, 9 October 1940
PAUL McCARTNEY (bass guitar, vocal) Born Liverpool, 18 June 1942
GEORGE HARRISON (lead guitar) Born Liverpool, 25 February 1943
RINGO STARR (drums) Born Liverpool, 7 July 1940

BEATLES DRIVE

the quickie story-finding game with a hard fact driven into every sentence.

THE BEATLES...

...were voted the North West's Top Group by readers of the Liverpool publication "Mersey Beat".

...have written over 100 original songs, many of which they use in their 60 minute stage presentation. Recently they added LOVE ME DO and P.S. I LOVE YOU to their act so that a ready-made Merseyside advance order of some thousands awaits the Parlophone release of these titles on Friday 5 October.

...took on a new drumming man - RINGO STARR - earlier this year. Ringo was in the same class as Billy Fury at Dingle Vale Secondary Modern School.

...have played on package bills alongside such top-liners as Bruce Channel, Joe Brown (who thought they were fab), Mike Berry, Gene Vincent, Mr. Acker Bilk, and Kenny Ball on their extensive tours (Aldershot to Fleetwood, Manchester to Birmingham).

...drew a record-splintering crowd of over 900 at Liverpool's famous Cavern basement on 9 June 1962. The occasion was a Welcome Home show put on to celebrate the group's return from their third fantastically successful season in Hamburg and it broke Cavern attendance records set up by The Shadows and The Temperance Seven.

...have made two broadcasts on the BBC Light Programme (Teenagers Turn) with a third lined up for Friday 26 October.

...were filmed at the Cavern Granada Television; a screening date is to be fixed within the next few weeks.

...explain their group name via this unqualified statement from JOHN LENNON "It came to us in a vision. A man descended unto us astride a flaming pie and spake these words unto us saying 'From this day on you are The Beatles with an A'. Thus it did come to pass thus".

...FAN CLUB, organised after an immensely successful "The Beatles for their Fans" presentation last April, has a paid-up membership of well over 1000 with fresh applications flooding in from all parts of the country.

...will appear with Little Richard at the Tower Ballroom, New Brighton on Friday 12 October and at the mammoth Liverpool Empire later in the month with Little Richard, Craig Douglas, Jet Harris and Kenny Lynch.

...brought forth this praise from Liverpool compere/deejay BOB WOOLER: "The biggest thing to hit the Liverpool scene in years...the hottest property any promoter could hope to encounter. Musically authoritative and physically magnetic, THE BEATLES are rhythmic revolutionaries with an act which is a succession of climaxes.

〈右資料の翻訳〉
MEET THE BEATLES
(ビートルズってこんな人)

ジョン・レノン(ハーモニカ、リズム・ギター、ボーカル)1940年10月9日リバプール生まれ
ポール・マッカートニー(ベース、ボーカル)1942年6月18日リバプール生まれ
ジョージ・ハリスン(リード・ギター)1943年2月25日リバプール生まれ
リンゴ・スター(ドラム)1940年7月7日リバプール生まれ

BEATLES DRIVE(ビートルズ・ドライブ)
各文に確固たる事実が詰まった、すばやいストーリー発見ゲーム

THE BEATLESとは……

●リバプールの出版物「マージービート」の読者投票で、イギリス北西部のトップ・グループに選ばれた。
●100曲以上の曲を書いた。その多くを彼らは60分のステージで披露する。最近、彼らは'Love Me Do'と'P.S. I Love You'をレパートリーに加えた。だからすでにマージーサイドでは何千かの先行注文が、10月5日のパーロフォンからのリリースを待っている。
●新ドラマーのリンゴ・スターが今年に入ってから加入した。リンゴはディングル・ベイル・セカンダリー・モダン・スクールでビリー・フューリーと同じクラスだった。
●ブルース・チャネル、(彼らをファブだと思った)ジョー・ブラウン、マイク・ベリー、ジーン・ビンセント、ミスター・アッカー・ビルク、長いツアー(オールダーショットからフリートウッド、マンチェスターからバーミンガム)をしていたケニー・ボールといったトップライナーたちと一緒にパッケージ・ツアーに出演したことがある。
●1962年6月9日、リバプールの有名なキャバーンの地下で、記録的な900人以上を集客した。この日は、3回目のハンブルク遠征で成功をおさめた彼らの凱旋帰国を祝うために開かれた「ウェルカム・ホーム」ショーで、ザ・シャドウズとザ・テンペランス・セブンが樹立したキャバーンの集客記録を破った。
●BBCの番組「ティーンエイジャーズ・ターン」に2度出演したことがあり、10月26日に3回目が予定されている。
●グラナダ・テレビに撮影された。放送日は、数週間以内に決定予定。
●彼らのグループ名の由来を、ジョン・レノンが次のような奇妙な発言で説明する。「幻を見たんだ。炎を発するパイにまたがった男が俺たちのところに降りてきて、"今日からおまえたちはAの入ったThe Beatlesだ"と言ったんだ」
●昨年4月の「The Beatles for their Fans」発表の大成功に続き立ち上げられたファンクラブは、すでに会員が1,000人以上いて、さらに全国から加入希望者が殺到している。
●10月12日、ニュー・ブライトンのタワー・ボールルームで、リトル・リチャードとともに出演予定。今月後半には、リトル・リチャード、クレイグ・ダグラス、ジェット・ハリス、ケニー・リンチとともに巨大会場リバプール・エンパイアに出演予定。
●リバプールの司会者/DJのボブ・ウーラーからこの称賛の言葉を得た。「ここ何年かでリバプール・シーンに訪れた最重大事…どのプロモーターも出会いたいと望むもっともホットな逸材。確固たる音楽性、人を魅了する存在感、THE BEATLESはクライマックス連続のライブが武器のリズミカルな革命だ」

CamScannerでスキャン

Diary 1962

9月12日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

通常のステージのほかに、ビートルズは16歳のシンガー、シモーヌ・ジャクソンのバックも務めた。マンチェスターのバンド、フレディ・アンド・ドリーマーズも出演。

9月13日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:リバーパーク・ボールルーム
Chester

リバーパークでの4回目のそして最後の木曜出演。

9月14日(金)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

サム・リーチ主催による恒例のオペレーション・ビッグ・ビートV。5時間半におよぶイベントで、ビートルズをメインに6バンドが出演(オペレーション・ビッグ・ビートIVは8月3日に開催されたが、ビートルズはグラフトン・ルームズに出演したため、参加していない)。

9月15日(土)
(ビクトリー)メモリアル・ホール
Northwich

9月16日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月17日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:クイーンズ・ホール
Widnes

NEMS主催のウィドネスでの月曜の出演。これが3回目で最終日。

9月19日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月20日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月21日(金)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

ロリー・ストームの誕生日を祝う特別なイベント。5バンドが出演した。

9月22日(土)
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

9月23日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月25日(火)
ヘズウォル・ジャズ・クラブ
Barnston Women's Institute, Heswall, Wirral

婦人会館内の会場に平日出演。

9月26日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

9月28日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:MVロイヤル・アイリス号
River Mersey

この夏3回目、そしてビートルズにとって最後のリバーボート・シャッフルに、メインとして出演。共演はリー・キャッスル・アンド・バロンズ。

9月29日(土)
オアシス・クラブ
Manchester

ブライアン・エプスタインの手配でビートルズが初めて出演したメジャーな会場に再び出演。

9月30日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月2日(火)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月3日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月4日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

デビュー・シングルをプロモーション

10月6日(土)
ハルム・ホール
Port Sunlight, Birkenhead

地元のホーティカルチュラル・ソサエティ主催のハルム・ホールでの3回目のショー。会場に向かう前、ビートルズはウィンズのドーソンズ・ミュージック・ショップでサイン会を行ない、前日に発売されたシングル'Love Me Do'にサインをした。

10月7日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月8日(月)
EMIハウス
Manchester Square, London

この日、キャバーン・クラブのランチタイム・セッションをキャンセルし、ビートルズはラジオ・ルクセンブルク初出演のためロンドンに向かった。
1960年代初め、イギリスのレコード会社は、アーティストやレコードの独占プロモーション用に、当時絶大な影響力のあったラジオ・ルクセンブルクの番組枠を買い取ることができた。この局はイギリスのリスナーを対象に、ルクセンブルクから中短波放送を流していた。EMIはスポンサーとして番組をいくつか抱えていた。この日の夜、ビートルズが出演したのはそのひとつ「ザ・フライデイ・スペクタキュラー」で、収録はロンドンのEMI本社地下にある小さなスタジオで行なわれた。スタジオには100人以上の若者たちが集まって、座るか踊るかして音楽を楽しむのだが、実際にアーティストが来ているにもかかわらず、番組ではレコードがかけられた。リスナーに実際のレコードの音を聴いてもらうためである。番組では、インタビューも行なわれた。
この番組は10月12日の午後10時から11時(イギリス時間)に放送され、インタビューとともに'Love Me Do'と'P.S. I Love You'が流れた(ラジオ・ルクセンブルクをめぐる〈伝説〉が正しいとすれば、ほとんどのリスナーが親の目を盗んでベッドのなかでこのときの放送を聴いていたことになる)。
ジョンの誕生日である10月9日には公演予定は入っていなかったが、ビートルズはロンドンに残り、'Love Me Do'のプロモーションのため、フリーの音楽ジャーナリストや音楽誌をあいさつ回りした。

10月10日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月11日(木)
リアルト・ボールルーム
Liverpool

リバプール大学が主催したロックン・ツイスト・カーニバルと題するショーに出演。

CamScannerでスキャン

憧れのリトル・リチャードと共演

10月12日(金)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

この日のタワー・ボールルームのショーは、それまでにブライアン・エプスタインが手がけたもののなかでもっとも野心的な興行となった。アメリカの押しも押されもせぬロッカー、リトル・リチャードをメイン・ゲストに呼び、12組のアーティストを出演させて5時間半におよぶステージを催したのである。このショーは大成功をおさめ、エプスタインは10月28日のリバプールのエンパイア・シアターでのNEMS主催の公演にもリトル・リチャードをメイン・ゲストとして迎えた。ビートルズにとって、12組の出演者のなかでリトル・リチャードに次ぐスターとしてステージに立つのは大事件だった。また、この日はタワー・ボールルームの楽屋でも当惑するような大事件があった。リー・カーティス・アンド・オールスターズのドラマーとしてやってきたピート・ベストにばったり出会ってしまったのだ。

10月13日(土)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月15日(月)

マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

10月16日(火)

ラ・スカラ・ボールルーム
High St, Runcorn, Cheshire

マージー河沿いにリバプールから23キロ南にある工業都市ランコーンで、ビートルズは2回公演を行なっている。この日はその1回目。

テレビ・デビュー

10月17日(水)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夕方:グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Quay St, Manchester, Lancashire
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

2回のキャバーン・クラブへの出演のあいまに、ビートルズはテレビ初出演をはたした。番組はグラナダ・テレビのローカル番組『ピープル・アンド・プレイシズ』。イギリスの北部および北西部で午後6時35分から7時に生放送された。午後3時から4時までと4時15分から6時までの2回、カメラ・リハーサルをして、大事な初の生出演で'Some Other Guy'と'Love Me Do'の2曲を演奏。

10月19日(金)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月20日(土)

マジェスティック・ボールルーム
Witham, Hull, Yorkshire

トップ・ランク社の会場に出演。リバプールから200キロ以上離れた場所にあり、リバプールからはそれまででもっとも遠方での演奏だった。この会場には4か月後に再び出演している(1963年2月13日参照)。

10月21日(日)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

10月22日(月)

クイーンズ・ホール
Widnes

NEMSがビートルズのために主催したショー。この日はリー・カーティス・アンド・オールスターズも出演していたので、またもやビートルズのメンバーたちはピート・ベストと顔を合わせることになった。

CamScannerでスキャン

10月25日(木)
プレイハウス・シアター
Manchester

BBCの「ヒア・ウィ・ゴー」(このときには番組名に「ティーンエイジャーズ・ターン」という前置きはなくなっていた)への3回目の出演のためマンチェスターへ。午後4時からリハーサルを開始し、午後8時から8時45分まで、番組はスタジオの観客の前で収録された。
この日の収録分は、10月26日の午後5時から5時29分に放送された。ビートルズが演奏した3曲、'Love Me Do' 'A Taste Of Honey' 'P.S. I Love You'は前回のようにばらばらではなく、ひとまとめで放送された。トミー・ロウの曲'Sheila'も演奏したが、番組を29分にまとめるため、編集段階でカットされた。

10月26日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:パブリック・ホール
Lune St, Preston, Lancashire

リバプールから北西に50キロほど離れたランカシャーの主要都市、プレストンにある会場に出演。ビートルズがこの都市で演奏したのはこの日が初めて。

10月27日(土)
ハルム・ホール
Port Sunlight, Birkenhead

ビートルズがこの会場に出演するのはこれで4回目。この日が最後の出演となった。地元のレクリエーションズ・アソシエーション主催のダンス・パーティーで、ビートルズはメインとして演奏。
ステージに上がる前の午後8時45分に、地元のクリーバー病院とクラッターブリッジ病院の患者のためのラジオ・インタビューを収録した。取材をしたのはモンティ・リスターとふたりのティーンエイジャー、マルコム・スレッジルとピーター・スメザースト。このときのもようは、翌日、病院向けの有線放送のなかのリスターのレギュラー番組「サンデイ・スピン」で放送された。
ビートルズは1963年11月29日にも病院用のラジオ・インタビューを収録しているが(同日参照)、同じ目的のインタビューはほかにも多数あったと考えられる。

リバプール・エンパイアで大物アーティストと共演
10月28日(日)
エンパイア・シアター
Liverpool

ビートルズにとってもっとも重要な公演のひとつ。地元以外の大物アーティスト8組のなかに混じって出演しただけでなく、(クオリーメンがオーディションで出演したのを除けば)リバプールでトップ・クラス中のトップの劇場、エンパイア・シアターへの初出演をついにはたしたのである。また、午後5時40分からと8時からの2回のステージをこなす、ビートルズにとって初めての「ポップ・パッケージ・ショー」となった。
NEMS主催のこの公演のメイン・ゲストは、再びリトル・リチャード。加えてクレイグ・ダグラス(ビートルズがバックを務めた)、ジェット・ハリス(元シャドウズのベーシスト)、ケニー・リンチ、サウンズ・インコーポレイテッドなどが出演した。エプスタインはサム・クックも出演させたかったのだが、残念ながらできなかった。
この日、ひたむきなリバプールのファンの目の前で、ビートルズはようやく成功を名実ともに手中にしたのである。

10月29日(月)
グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester

グラナダ・テレビの番組「ピープル・アンド・プレイシズ」へ2回目の出演。この日の収録分は11月2日の午後6時半から7時に放送された。そのときビートルズはすでにハンブルクにいた。
リハーサルのあと、午前11時から午後1時までの収録で'Love Me Do'と'A Taste Of Honey'を演奏した。'Love Me Do'は、アコースティック・ギターのジョージ、ベースのポール、ドラムのリンゴの3人が立ったままで、ジョンだけが楽器を持たずにセットに腰かけて歌うという、まるでソロ・シンガーとバック・バンドのような非常にめずらしいセッティングを披露した。'A Taste Of Honey'では、いつものように3人並んで、ジョンもアコースティック・ギターを弾いたが、

CamScannerでスキャン

4人は上着を脱いでベスト姿で演奏した。
翌10月30日の朝、メンバーは飛行機でハンブルクに向かった。

4度目のハンブルク巡業は2週間だけ

11月1日(木)～14日(水)

スター・クラブ
Hamburg, West Germany

14日間という短い巡業。ビートルズは初めて前と同じ会場に続けて出演。報酬は、ひとりにつき週600ドイツマルクに上がった。またメンバーは、その直前の3週間の間にリバプールで2回共演したリトル・リチャードと再び同じステージに立つことができて大喜びした。これでハンブルクでの密度の濃い体験にさらに49時間の出演時間が追加された。

11月16日(金)

EMIハウス
London

ラジオ・ルクセンブルクへの2回目の出演のため、この日の夕方、EMIのスタジオでの公開収録に参加。収録番組は前回と同じEMIの番組『ザ・フライデイ・スペクタキュラー』で、11月23日の午後10時から11時に放送された。今回もデビュー・シングルの両面がかかり、あいまにインタビューが収録された。

11月17日(土)

マトリックス・ホール
Fletchamstead Highway, Coventry, Warwickshire

コベントリーのこのホールでの公演は、イングランド中部のミッドランド地方でのビートルズ初のステージとなった。ポールは1969年のジョンとの会話のなかで、この日のステージについて、(その後まもなく出演するレスターのド・モンフォール・ホールと勘違いして)ハンブルクから戻って「あんな最低な初日はほかになかったな」と語っている(映画"LET IT BE"で見られる)。

11月18日(日)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

ハンブルクから帰国したビートルズを迎える、またしても大成功をおさめたウェルカム・ホーム・ナイト。

11月19日(月)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:スメズウィック・バーズ・ボールルーム
Thimblemill Rd, Bearwood, Smethwick, Staffordshire
アデルフィ・ボールルーム
New St, West Bromwich, Staffordshire

夜にミッドランドの2会場への出演が決まっていたため、キャバーン・クラブに出演したあと、ビートルズはリバプールから大急ぎで南へ137キロ移動した(スメズウィック・バーズは地元ではシンブルミル・バーズとも呼ばれていた)。

11月20日(火)

フローラル・ホール
Southport

ひと晩に2回のステージ。

11月21日(水)

ランチタイム／夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この日のランチタイム・セッションには当初レモ・フォーが出演する予定だったが、ビートルズが急遽23日の出演分と交替して出演した。ビートルズが23日にロンドンに行く予定が入ってしまったため。

11月22日(木)

マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

BBCテレビのオーディション

11月23日(金)

ランチタイム：セント・ジェイムス・チャーチ・ホール
Gloucester, Terrace, London
夜：タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

この日、キャバーン・クラブのランチタイム・セッションにはレモ・フォーが代わりに出演。ビートルズはテレビでの成功を確実なものにするべく、BBCテレビの出演オーディションのため、ロンドンに来ていた。
意外にも、このオーディションはブライアン・エプスタインの尽力によってもたされたものではなかった。プレストンに住むビートルズ・ファン、デビッド・ジョン・スミスが、ビートルズをどうしてもBBCの番組に出演させてほしいという2通の切実な手紙を出したのがきっかけだった。BBCはてっきりスミスがバンドのマネージャーなのだと思い込み、11月6日にロンドンでオーディションを行なうという返事をスミス宛てに送った。スミスはこれをNEMSエンタープライズに転送した。そして、ビートルズと一緒にハンブルクに行っていたブライアンに代わって、弟のクライブ・エプスタインがオーディションの日を11月23日に変更したのである。
オーディションはロンドン中心部にある教会付きのホールで午後12時20分から10分間行なわれた。4日後、BBCの審査員ロニー・レインから「こちらからご連絡するまでお待ちください」という曖昧な返事がブライアン・エプスタインのもとに届いた。結局、ビートルズがBBCテレビに初出演をはたしたのはレコードがナンバーワンになってからだった(1963年4月13日を参照)。
オーディションが終わると、ビートルズは急いでマージーサイドに戻り、タワー・ボールルームに出演した。この日のショーはいつもとは趣向の違う、12回目を迎える年1回のランカシャー・アンド・チェシャー・アーツ・ボールだった。共演者は、ビリー・クレイマー・アンド・コースターズ(クレイマーはのちにエプスタインとマネージメント契約を結ぶ以前に、自分の芸名にミドル・ネームのJを入れ、名義上は別人を装ってコースターズとは別にマンチェスターのグループ、ダコタスと手を組んだりしていた)、ルー・ハード・ジャズ・バンド、そしてクラン・マックレオド・パイプ・バンドだった。

11月24日(土)

ロイヤル・リド・ボールルーム
Central Beach, Prestatyn, Flintshire

1か月前にこのホールの近くのライルに出演して以来、2度目のウェールズでの出演。

11月25日(日)

夜：キャバーン・クラブ
Liverpool

セカンド・シングルのレコーディング

11月26日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

デビュー・シングルの'Love Me Do'がまずまずの成功をおさめたため、ビートルズはEMIでセカンド・シングルをレコーディングすることになった。9月11日の時点で初めてトライしていた'Please Please Me'を、午後7時から9時15分までのセッションで完成させた。セッションは10時まで予定されていたが、予定時刻の15分前に仕上がった。メンバーは午後6時にアビイ・ロードに到着し、少しだけリハーサルをしている。
'Please Please Me'は、ジョンの印象的なハーモニカのオーバーダビングを含め、18テイクがレコーディングされ、A面の収録曲に決まった。少し休憩したあと、(6月6日に初めてレコーディングされた)'Ask Me Why'のリメイクが6テイク、レコーディングされ、ベスト・テイクがB面に収録された。ビートルズは3曲目の候補としてレノン=マッカートニーの'Tip Of My Tongue'も演奏したが、ジョージ・マーティンはどうしてもアレンジが気に入らず、この曲はもうしばらく寝かせてみることになった。しかし、ビートルズがのちにこの曲をとりあげることはなかった。結局、1963年7月に、やはりエプスタインがマネージメントしていたトミー・クイックリーがレコーディングしている。

ロンドンでのラジオ収録

11月27日(火)

BBCパリス・スタジオ
Regent Street, London

初めてロンドンでのBBCラジオの収録を行なう。スタジオはパリス・スタジオというまぎらわしい名前だが、フランスではなくロンドンのウエスト・エンドのピカデリー・サーカスの南にある。
収録番組は、12月4日午後5時から5時29分に放送されたBBCの「ザ・タレント・スポット」。午後4時からリハーサル、そして7時から8時まで観客を前に収録が行なわれた。ホスト役のゲイリー・マーシャルが番組の冒頭で言う「明日のスターとなる本日のゲスト」には、ビートルズのほかにエルキー・ブルックスが名を連ねていた。彼もまた数年後に名を売った。
ビートルズは'Love Me Do' 'P.S. I Love You' 'Twist And Shout'の3曲を演奏した。

11月28日(水)

夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
527クラブ
Lewis's, Ranelagh Street, Liverpool

ひと晩に2か所に出演。527クラブでのステージは、「ヤング・アイデア・ダンス」と銘打たれ、リバプールで最大手のルイス・デパートの最上階で行なわれた。そこの従業員のためのダンス・パーティーだった。

11月29日(木)

マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

11月30日(金)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タウン・ホール
Market St, Earlestown, Newton-le-Willows, Lancashire

タウン・ホールの出演は、T&Tピカーズ・スポーツ・アンド・ソーシャル・クラブ(フットボール部)主催によるザ・ビッグ・ビート・ショーNo.2だった。
この日アビイ・ロードでは、ジョージ・マーティンがビートルズのセカンド・シングル収録曲'Please Please Me'と'Ask Me Why'のモノ・ミックスを行なっている。ビートルズは参加していない。数少ない事例を除けば、ビートルズの面々がミックス・セッションに本格的に参加するようになったのはずっとあとのことで、1965～66年ごろからである。セカンド・シングルは、1963年1月11日にEMIから発売された。

12月1日(土)

(ビクトリー)メモリアル・ホール
Northwich
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

タワー・ボールルームへのビートルズの出演は、伸び悩んでいたチケットの売り上げにハッパをかけるため、前日になって追加されたものである。ビートルズはノースウィッチから大急ぎでマージーサイドまで北上し、かなり遅い時間に出演した。

12月2日(日)

エンバシー・シネマ
Broadway, Peterborough, Northants

フランク・アイフィールドをメインに迎えたこのショーへの出演は、エプスタインが楽観的に決めたものだったが、ビートルズはご当地のエンバシー・シネマとキャバーン・クラブでも悲惨な結果に見舞われた。観客の反応が悪いのはいい経験にはなったかもしれないが、グループとしての自尊心はひどく傷つけられた。この日の唯一の成果は、当時一目置かれていたテッド・テイラー・フォーのリーダーで柔和な性格で有名なギタリスト、テッド・テイラーから、楽屋でステージ用の顔のメイクアップの手ほどきを受けたことだけだった(ミック・ジャガーに最初にメイクを教えたのはビートルズだった。ミック・ジャガーはそれを発展させ、誰よりも自由にそれを使いこなし、ほかのアーティストたちに広く影響を与えた。それもすべてこの日のテッドのメイク指導が始まりだった)。
一方、この夜はキャバーン・クラブでの出演予定が入っていたが、オーナーのレイ・マクフォールは寛大にも大変だろうから出演を見送っていいと申し出た。

12月3日(月)
TWWテレビジョン・センター
Bath Rd, Bristol, Somerset

TWW(テレビジョン・ウェールズ・アンド・ウェスト)制作によるITVの番組に出演。番組はウェールズと西部地域のみで放送された。
「ディスクス・ア・ゴーゴー」という、いかにも1960年代っぽい、しかもウェールズ風の語呂のタイトルを持つこの番組は、「街でいちばん陽気なコーヒー・バー」というセッティングの週1回のポップ・ミュージック・ショーだった。ビートルズは午後7時から7時半までTWWテレビジョン・センターのスタジオから生出演し、'Love Me Do'を口パクした。ビートルズが実際にこの番組に出演したのはこの日のみ。

12月4日(火)
ウェンブリー・スタジオ、第4スタジオ
Wembley Park Drive, Wembley, Middlesex

ロンドンのITV放送局アソシエイテッド・レディフュージョン(平日のみ)の子ども番組『チューズデイ・ランデブー』に出演。ビートルズがロンドン近辺のテレビ番組に出演するのは、これが初めて。
エンパイア・プールと同じ通り沿いにあり、1963年から1966年にかけてビートルズが4回出演したウェンブリー・スタジオからの生放送だった。番組は午後5時から5時55分まで放送され、ビートルズは'Love Me Do'と45秒間の'P.S. I Love You'をレコードの音に合わせて疑似演奏。午後1時半から5時まで行なわれたリハーサルにも参加。
この番組ではラジオ・ルクセンブルクの『ザ・フライデイ・スペクタキュラー』同様、かわいらしいミュリエル・ヤングが司会を担当していた。この日の番組共演者は、ギターの名手バート・ウィードン、フォーク・シンガーのウォリー・ホワイトン(ジョージ・マーティンがプロデュースしたバイパーズ・スキッフル・グループの元メンバー)、そしてフレッド・バーカーとオリー・ビークという名前の指人形師たちだった。

12月5日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月6日(木)
クラブ・ジャンゴ
Queen's Hotel, Promenade, Southport, Lancashire

名前が示すとおり、クラブ・ジャンゴは本来ジャズ・クラブだった。しかし、店の責任者にはビートルズの人気はとても見逃せるものではなかった。

12月7日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

タワー・ボールルームでは、7組の出演バンドのうちメインとして演奏。

12月8日(土)
オアシス・クラブ
Manchester

12月9日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この夜のキャバーン・クラブには、ジョージ・マーティンとアシスタントのジュディ・ロックハート・スミスが訪れた。デッカのマイク・スミスがビートルズを見るためにキャバーン・クラブに来た日から、あと4日で1年がたとうとしていた。

12月10日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月11日(火)
ラ・スカラ・ボールルーム
Runcorn

この会場にビートルズが出演するのは2回目。前回と異なり今回の公演はNEMSエンタープライズが主催した。

CamScannerでスキャン

12月12日(水)
ランチタイム/夜:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月13日(木)
コーン・エクスチェンジ
St Paul's Sq, Bedford, Bedfordshire

またしても南部の会場に出演。当初告知されていたジョー・ブラウンの出演がキャンセルされ、ビートルズに声がかかった。

12月14日(金)
ミュージック・ホール
The Square, Shrewsbury, Shropshire

プロモーターのルイス・バックリーによるメジャー公演。当時のトップ・スターたちはほとんどこの会場に出演していた。

12月15日(土)
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

ひと晩にまったく違うふたつのショーに出演。夜、マジェスティックで通常のステージを終えたビートルズは、真夜中から開催された第1回の「マージー・ビート」紙主催(1962年度)人気投票授賞式に参加した。この人気投票で2年連続第1位のビートルズは、最後の出演者として午前4時にステージに上がった。手の込んだ盾も贈られた。
ビートルズのすぐ前に出演した第2位のバンドは、ピート・ベストのいるリー・カーティス・アンド・オールスターズだった。ビートルズとピートはまたもや顔を合わせるはめになった。

12月16日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

12月17日(月)
グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester

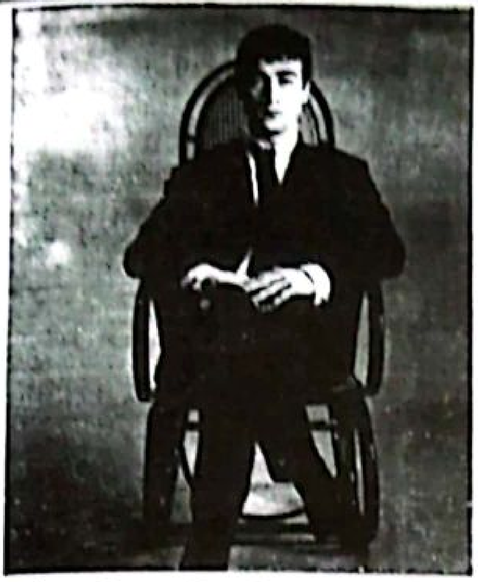
グラナダ・テレビの番組「ピープル・アンド・プレイシズ」へ3回目の出演。この日は午後6時35分から7時までの生放送だった。
午後3時から4時までと4時15分から6時まで、2回のリハーサルが行なわれ、'Love Me Do'と'Twist And Shout'の2曲を演奏。

最後のハンブルク巡業

12月18日(火)~31日(月)
スター・クラブ
Hamburg, West Germany

イギリスでのビートルズは、すでにチャート入りしたレコードがあり、ラジオやテレビにも出演し、ますます格上の会場で演奏することができるバンドになっていた。そのため、わざわざハンブルクへ出向く必要はなかった。13夜にわたる5回目の、そして最後のハンブルク巡業は、ビートルズにとって無意味であり、もはやまったく魅力のないものだった。報酬はひとり週750ドイツマルク(67ポンド)と、かなりよくなったものの、4人はイギリスに戻って、ひたすら成功を確かなものにすることしか頭になかった。
休日はクリスマスの12月25日だけ。大晦日のビートルズ最後の演奏は、素人の機材で録音され、ビートルズの意に反して1977年にレコード化された。録音状態はかなり悪いが、興味深い内容であるために、その後も繰り返しプレスされている。
今回のスター・クラブでの最後の42時間を加えると、ビートルズの過酷とも言えるハンブルクでの出演時間はおよそ800時間にもおよぶ。だが、これだけの労苦がはかり知れない実りを結んだのだ。ビートルズは厳しい修行を耐え抜き、もっともつらい方法で試練を乗り越えていた。今や、世界から何を突きつけられても動じることはなかった。

CamScannerでスキャン



LEFT
JOHN LENNON

RIGHT
PAUL McCARTNEY

BOTTOM LEFT
GEORGE HARRISON

BOTTOM RIGHT
RINGO STARR

1962 the BEATLES

YEAR OF ACHIEVEMENT

- ★ WON "MERSEY BEAT" POPULARITY POLL (2nd YEAR)
- ★ VOTED FIFTH IN NEW MUSICAL EXPRESS POLL FOR BEST BRITISH VOCAL GROUP
- ★ E.M.I. RECORDING CONTRACT
- ★ FOUR B.B.C. BROADCASTS
- ★ FOUR T.V. APPEARANCES
- ★ TWO LUXEMBOURG BROADCASTS
- ★ TWO HAMBURG ENAGEMENTS
- ★ ENTERED THE TOP FIFTY WITHIN TWO DAYS OF "LOVE ME DO" RELEASE
- ★ HIT NO 21 IN THE CHARTS WITH "LOVE ME DO" THEIR FIRST DISC
- ★ APPEARED WITH LITTLE RICHARD, FRANK IFIELD, JOE BROWN, JET HARRIS, GENE VINCENT, JOHNNY AND THE HURRICANES, CRAIG DOUGLAS and many others.
- ★ APPEARED AT LIVERPOOL (EMPIRE), BIRMINGAM, MANCHESTER, HULL, DONCASTER, CREWE, STROUD, COVENTRY, SHREWSBURY, BEDFORD, PETERBOROUGH, PRESTON, BLACKPOOL, etc., etc.

AND IN 1963

- ★ **'Please, Please Me'**
  Released by Parlophone JANUARY 11th
- ★ Appearances in 'Thank Your Lucky Stars,' 'Saturday Club,' and B.B.C. T.V. (January).
- ★ **Scottish Tour**
  (JANUARY)
- ★ **Helen Shapiro Tour**
  (FEBRUARY)
- ★ **'Love Me Do'**
  RELEASE AMERICA, CANADA AND GERMANY

TOMMY ROE CHRIS MONTEZ TOUR (MARCH)

AND WHO KNOWS!

Sole Direction:
Brian Epstein,
Nems Enterprises Ltd.,
12/14 Whitechapel,
Liverpool, 1
ROYal 7895

Recording Manager:
George Martin,
EMI Records Limited,
20, Manchester Square,
London W.1

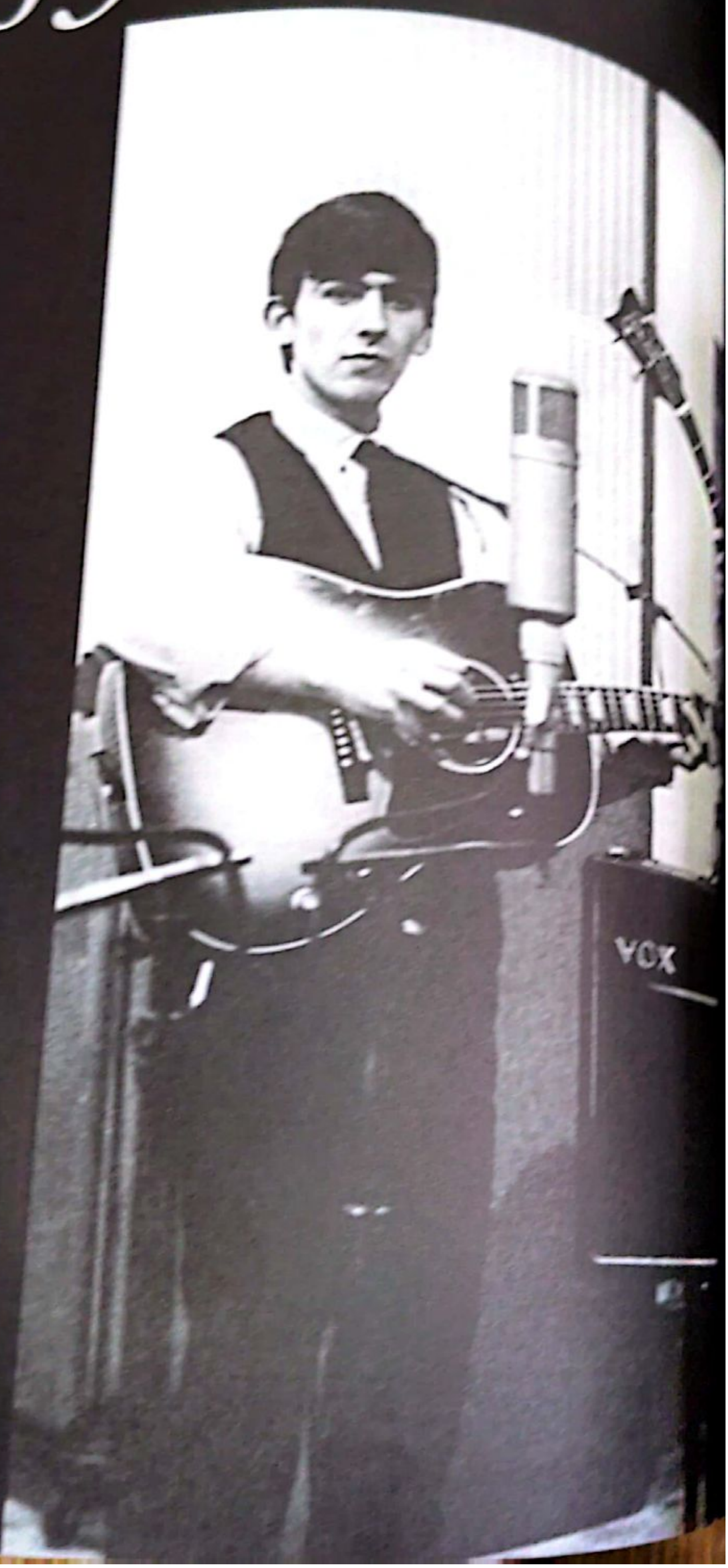
Press Representative:
Tony Calder Enterprises
15, Poland Street,
London W. 1

Road Manager:
Neil Aspinall

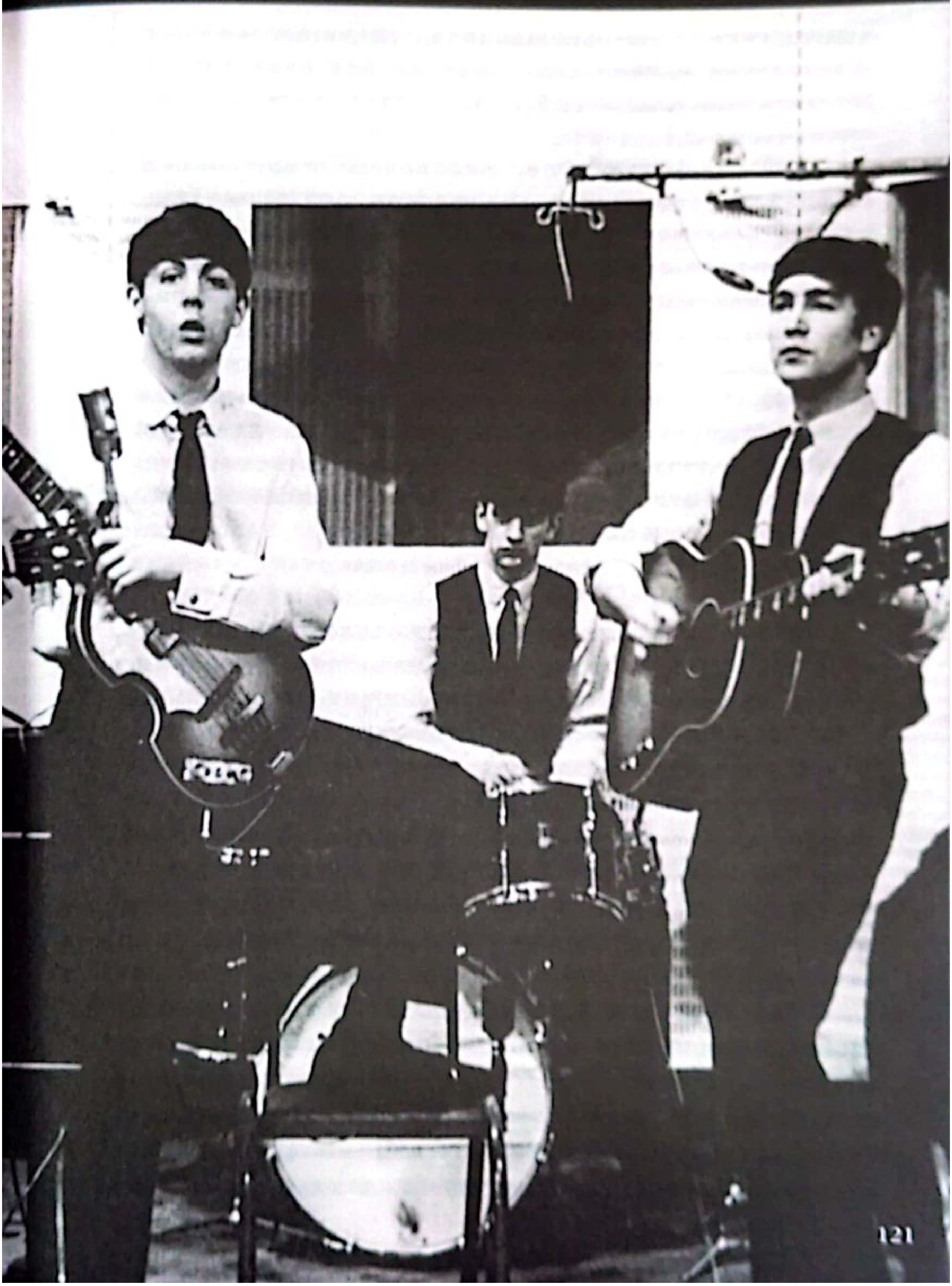
Fan Club Secretary:
Miss R. Brown
90, Buchanan Road,
Wallasey, Cheshire

CamScannerでスキャン

Introduction 1963



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

1963年は、すべてが手のつけようがないほどに激しく動き出した。数十年に1度という寒波のなか、よりによってスコットランドに5日間のツアーに出るという地味なスタートだったが、数日後の1月11日にはセカンド・シングル 'Please Please Me' が発売され、1月17日にはファースト・シングル 'Love Me Do' に続くチャート入りとなった。

'Love Me Do' のチャート成績は浮き沈みの多い、不安定なものだったが、'Please Please Me' はヒット曲の王道パターンを踏襲するものだった。つまり、人気テレビ番組への出演(全国放送の「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」初出演)や好意的なレビューが、ラジオのヘビー・ローテーションを誘い、それがさらに好調なセールスを呼ぶというものである。しかも重要なのは、こうした現象が今度はリバプールにかぎらず全国的に起き始めたことだった。実際、2年以上もビートルズを独占してきたマージーサイドの熱心なファンは、自分たちがレコードを買えば買うほどますます人気が出て、ビートルズが自分たちだけのものではなくなっていくことに、いやでも気がつかざるを得なかった。

そして、実際にそういうことが起きたのである。'Please Please Me' が確実にチャートの順位を上げると、ビートルズの活動はますます広範囲になり、当然、リバプールでの出演は減る一方だった。1月には6回あったキャバーン・クラブでのステージも、2月には3回に減り、ついに3月には1回も出演しなかった。そして、移動にかかる時間を節約するためにも、リバプールを離れてロンドンに住む必要性が出てきていたのは当然である。

イギリスでナンバーワンの座に

こうした状況を確固たるものにするため、ビートルズはブライアン・エプスタインの指揮のもと、がむしゃらに働かねばならなかった。ビートルズは1963年の1年間に、コンサート・ツアー、ボールルームへの出演、レコーディング、BBCのラジオ出演、テレビ出演、フォト・セッション、記者会見と、途切れなく続く情け容赦のないスケジュールを果敢にこなしていった。ビートルズは、誰からも、どんな仕事からも逃げなかった。誰にでも会い、相応な仕事なら何でも引き受けた。ビートルズほど一所懸命働いたポップ・グループを、それまで誰も見たことがなかっただろう。

チャートを急上昇した 'Please Please Me' は、「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」(NME)誌の2月22日付チャートで、かつてはまったく無縁に思えたナンバーワンの座をついに獲得した。1週目はフランク・アイフィールドの 'The Wayward Wind' と1位を分けあったが、翌週には単独1位に輝いた。ビートルズのメンバーをはじめ、ブライアン・エプスタイン、友人、家族、そして関係者の誰もが有頂天になった。NME から1位を知らせる電報が届いたとき、ビートルズはヘレン・シャピロとのパッケージ・ツアーのパート2に出る用意をしているところだった。2月19日、キャバーン・クラブでビートルズの出番の直前、DJのボブ・ウーラーがこのニュースを発表した。地元のもっとも献身的なファンたちは、そのニュースを沈黙で迎えた。不安が現実のものとなってしまったからだ。一方、リバプール以外の地方では、たとえばシャピロとのツアーを観に来た客の目には、ビートルズこそがもっとも注目すべきグループとして映った。

シャピロとのツアーの直後に行なわれたツアーでも、ビートルズは熱狂的に支持された。このツアーでヘッドライナーを務める予定になっていたのは、トミー・ロウとクリス・モンテスというふたりのアメリカ人シ

CamScannerでスキャン

ンガーだった。ふたりはイギリスではそれほど人気が高かったわけではなく、チャート入りしたヒット曲が数曲あるだけだった。しかし、何と言ってもアメリカ人だ。それまで、アメリカ人をさしおいてイギリスのミュージシャンがメインの座を奪うことなどありえなかった。しかし、ビートルズはまさにそれをやってのけたのだ。客からの要望だったとはいえ、このようなツアーでメイン・アクトになったことを、ビートルズは喜びもしたが、同時にとまどいを隠せなかった。

ロウとモンテスとのツアーは3月末に終わったが、ビートルズはイギリス席巻の手を少しもゆるめなかった。深い雪がようやく溶け始めた4月、ビートルズは毎晩のように東へ、西へ、南へ、北へとイギリス中のボールルームに出演した。また、4月11日には3枚めのシングル'From Me To You'が発売されたので、シングルと自分たち自身の売り込みのために、スケジュールのすきまをテレビやラジオ出演で埋めていった。

当時の各地方紙のビートルズ関連記事を読み返していくと、ビートルズによって引き起こされたファンの集団ヒステリー状態が、この春の終わりごろにはすでに現れていたことがわかる。この現象が大手の全国紙にとりあげられ、全国的な注目を浴びるようになる半年も前のことである。なぜこのような現象が起こったのか、そしてなぜファンがそのような行動に走らなければならなかったのかについては、当時も今も社会心理学者や歴史学者を悩ませるだけで、いまだに謎のままである。もちろん、熱狂的な歓声に包まれたことなら、なにもビートルズが最初ではない。フランク・シナトラも最盛期にはティーンエイジャーの少女たちを絶叫させ、卒倒させた。1950年代半ばのジョニー・レイもそうだった。ロックンロールの時代になってからは、アメリカではエルビス・プレスリー、イギリスではクリフ・リチャードが似たような現象を引き起こしていた。しかし、どうしてそうなるのか、どうすればそういうことが起きるのかは誰にもわからないことだった。資質があったからだと言い切るのも説得力がない。その証拠に、ビートルズに続いて一時期無数に現れた、一発屋ミュージシャンもやはり同じように騒がれたからである。いずれにせよ、ビートルズ自身もほかのグループ同様、その現象にとまどいを覚えた。少なくとも最初のうちは心がくすぐられる思いだったが、その思いも、そう長くたたないうちに、その異常さに息のつまるものになっていった。

'From Me To You'がNME誌の6位に入り、その翌週からトップに長く居座り続けたころになると、将来が期待できそうでフレッシュなグループが、イギリスの音楽シーンに登場したのだということが誰の目にも明らかになった。だが、おかしなもので、当のビートルズの面々は次にどういうポップ・ミュージックがはやるのか探り当てたくて、それまでずいぶんとそういう話に時間を費やしてきていた。ラテン・ビートか、カリプソ・ロックか、あるいはツイスト・ミュージックの再来か？　しかし、まさか自分たちが次の、そして圧倒的なブームとなる音楽を作り出すことになるとは夢にも思っていなかった。

ビートルズの成功は、かなりきわだった新しい変化を生むことにもなった。

たとえば、これまでさして話題にものぼらない町だったリバプールが、突然、黄金郷として脚光を浴び始めたのである。エージェント、マネージャー、ツアー・プロモーター、レコード会社の幹部らが、突然ペンと契約書を振り回しながら大挙してマージーサイドへ押しかけてきたのだ。そして、長年ロンドンのバンドに牛耳られていたチャートに、リバプール出身のバンドが続々と登場するようになるまで、それほど時間はかからなかった。ジェリー・アンド・ペースメイカーズをはじめ、ビリー・J・クレイマー、シラ・ブラック、サーチャ

CamScannerでスキャン

ーズ、フォアモスト、スウィンギング・ブルー・ジーンズ、マージービーツが、ビートルズに続いて次々にヒットを飛ばしていった。その全員がビートルズのおかげで成功したのだと言っても過言ではない。ブライアン・エプスタインとビートルズがいわば水門のせきを開けていなかったとしたら、とてもではないが、どのバンドも全国的なヒットをものにすることはできなかったはずだからだ。

しかし、長続きしたバンドはほとんどいなかった。わずかに生き残ったバンドの多くは(すべてではないが)、やはりブライアン・エプスタインがマネージメントを手がけているバンドだった。ビートルズの活動が'Love Me Do'で軌道に乗り始めたころ、エプスタインはNEMSエンタープライズの事業も広げ、ビッグ・スリー、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタス、フォアモスト、シラ・ブラック、トミー・クイックリーを自分の事務所に抱え込んでいた。これらのアーティスト全員が成功を手にしたわけではないが、それでも当たったバンドは、大抵はレノン=マッカートニーの曲を特別に提供してもらい、それを起爆剤にして1963年のイギリスのチャートの常連となった。「レコード・リテイラー」誌がこの年発表した52週分のチャートのなかで、エプスタインの手がけたビートルズ以外の3バンドは、トップテン内に45週もいたことになる。さらにビートルズの40週間分をあわせると、この年エプスタインお抱えグループのトップテン在位期間はじつにのべ85週分にもおよぶ。1961年12月にはリバプールにあるレコード店のオーナーにすぎなかったエプスタインが、1963年12月にはイギリスのレコード産業、音楽産業に起きた最大の革命を裏で仕掛けた人物にまでのしあがっていたのだ。

ビートルズの成功がもたらしたもうひとつの変化は、イギリスの音楽シーンを劇的に、そして急速に変えてしまったということだ。1963年の3月、4月ごろから、イギリス全域でビート・ミュージックやロックンロール・ミュージックの受けとめ方がいちじるしく変わり始めた。この突然のブームに乗って、バンドを出演させる新しいクラブや会場が無数にオープンした。そこそこの人口を持つ町なら、そういう会場は必ずひとつは見つかるようになった。そして、そういったクラブに出演しようと、ビートルズを手本とする、とくにリーダーを持たずに自作曲を演奏するバンドが数多く結成された。このとき誕生したバンドの多くがのちに、アメリカのミュージシャンに牛耳られていたイギリスのチャートを取り戻し、ひいてはそのアメリカ本国のチャートをも席巻するようになっていったのだ。

イギリスの新聞もそれまでポップ・ミュージックの動向などさほど重要視していなかったが、1963年5月ごろから、突然地方紙が関心を寄せるようになった。そして、このブームが全国的に浸透すると全国紙規模で注目が集まるようになった。

1963年初夏までに、ビートルズは、急激に開花しようとしていたポップ・ビジネスとあらゆるレベルで関わっていた。さまざまなラジオ番組に立て続けに出演した彼らに、BBCは15回におよぶビートルズのシリーズ番組「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」を提供した。また、「メロディ・メーカー」「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」「ニュー・レコード・ミラー」「ディスク」の4大音楽週刊誌は、ビートルズの活動なら必ず特集として掲載した。「ボーイフレンド」や「バレンタイン」などという数多くのティーンエイジャーの女の子向け週刊誌も、毎週ビートルズをとりあげ、カラー・ピンナップ・ポスター、インタビューなどを掲載し続けた。おもにビートルズとリバプール出身アーティストの記事で埋まった「ビート・マンスリー」を発行してすでに大成功をおさめていたショーン・オマホニーにいたっては、ビートルズの動きを追った情報雑誌「ビートルズ・

マンスリー・ブック」をビートルズ側の協力を得て独自に出版する準備をほぼ完了させ、創刊号の出版を7月初めに控えていた。

テレビ局もすぐにこの新たな変化を察知した。とくに民間放送局は敏感に反応し、ABCは「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」の夏バージョンとして、ビートルズをメインとしたリバプール出身バンドだけの特集番組「ラッキー・スターズ（サマー・スピン）」を6月29日に放送した。そして肝心のチャートではビートルズは圧倒的に強く、ほかに勝るものはいなかった。シングル・ヒットのあとに発表されるアルバムはぱっとしないというそれまでの定説をくつがえし、ビートルズのデビュー・アルバム "PLEASE PLEASE ME" は5月11日付の「レコード・リテイラー」誌のチャートでトップに輝き、ビートルズ自身の次作にその座をゆずりわたすまで、30週間連続1位を記録した。

5月18日から6月9日まで、ビートルズはその3か月ですでに3回目となる、全英ツアーに出発した。3月の段階ではアメリカ人ギタリストのデュアン・エディをヘッドライナーとして迎えるはずだったが、彼が出演できなくなり、ベン・E・キングとフォー・シーズンズが出演することになった。ところが彼らも来られなくなり、最終的には、あのロイ・オービソンをツアーのメインとして迎えることが発表された。ビートルズがグループの形成期に大きな影響を受け、深く尊敬していたオービソンだが、ヘッドライナーはビートルズだった。結局、このツアーはビートルズの独壇場と化した。

エプスタインのもとには、園遊会出席からキャラクター・グッズの商品化まで、次から次へとビートルズへのオファーが殺到した。イギリスのプロモーターでビートルズを呼びたがらない者など存在しなかった。ほんの1年で、何という変わりようだろう。しかし、突然有名になったアーティストの例にもれず、エプスタインもビートルズもこの状況からすぐに利益を回収することはできなかった。6月と7月の仕事は春に契約していたものだったため、今要求できる金額に比べたらばかばかしくなるほどわずかな報酬しか得られなかった。こうした場合、アーティストが急病で出演できなくなったと、マネージャーがプロモーターに泣きつくようなことがよく起きるものである。しかし、エプスタインの場合そういうことはありえなかった。とてもグループの安全が保証されると思えない会場なら1～2度、それもキャンセル料を支払って断ったことがあるが、ほかには契約を取り消すことはなかった。当時のエージェントやプロモーターたちはみんな、おせじ抜きでエプスタインの良心的で公正な仕事のやり方をほめた。

ビートルマニア

7月になると、ビートルズは海浜リゾート地での長期にわたる夏季公演を開始し、マーゲイト、ウェストン・スーパー・メア、チャネル諸島、ランディドノー、ボーンマス、サウスポートなどといった保養地では1週間単位で公演を行なった。そのほかにも4つの町でひと晩だけのショーを行なった。そのスケジュールのあいまには、クラブ、ボールルームへの出演、BBCのラジオ・セッション、EMIでのレコーディングもこなしていった。7月1日、ビートルズは4枚目の、画期的なシングル 'She Loves You' をレコーディングした。さらに7月中に時間をしぼり出しては、セカンド・アルバム "WITH THE BEATLES" のレコーディングを行なった。EMI は、"PLEASE PLEASE ME" の売り上げが落ち着くまで、セカンド・アルバムの発売を見送ることにした。

CamScannerでスキャン

8月3日、ビートルズはキャバーン・クラブで最後の演奏を行ない、ひとつの時代が幕を下ろした。キャバーンでは、もはや急激に増え続けるファンに対応しきれなかったのだ。それはリバプールそのものが、もはやビートルズを抱えきれなくなったことを意味していた。このときから以後3年間のライブ活動のなかで、ビートルズがリバプールで公演を行なったのはわずかに4回だけである。

このころには、ファンの騒ぎは、コンサートが始まる前も最中も終わったあとも異常そのもので、ファンにとってもビートルズにとっても危険なものになってきていた。もっとも深刻だったのは、どうやってもみくちゃにされずにこっそり会場に入り、コンサート後、楽屋裏から抜け出てバンに乗り込み、さらにどうやって駐車場から一般道路に出ていくかということだった。人影に隠れるといっても、守ってくれるのは人並みの体格しかないロード・マネージャー、ニール・アスピノールひとりしかいないのだ。そこでふたつの重要な決断がなされた。ひとつは、セカンド・アシスタントを雇うことだった。そこでキャバーン・クラブの元用心棒で、郵便局員をしていたマル・エバンズが雇われることになった。人なつこい「ビッグ・マル」は、5日間のチャネル諸島公演から帰ったメンバーに会い、8月11日以後はビートルズの仕事になくてはならない人材となった。

ふたつめの決断は、いかにもエプスタインらしいものだった。ビートルズは今後クラブやボールルームにはいっさい出演せず、出演するのは会場の出入りが安全な劇場にかぎることにしたのである。グループの格にこだわっていたということもあったろうが、夏のショーでファンの騒ぎを見たエプスタインは、そんな会場で出演を続けていたら、いつかは誰かがケガをするに違いないという一抹の不安も感じていたのだ。

全国紙で見るかぎり、ビートルマニア（このころ新聞紙面で生まれた言葉だった）現象が初めて起こったのは、10月13日、ビートルズがATVの番組「バル・パーネルズ・サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム」に出演したときだ。この長寿番組は、有名なロンドン・パラディアム劇場から毎週生放送されていたバラエティ・ショーだった。翌日の新聞は、運転手付きのオースチン・プリンセスで到着したビートルズに群がるファンが起こした騒動をこぞって書きたてた（オースチン・プリンセスを用意したエプスタインの演出は、ふだんのバンより当然ファンの心理をあおることになった）。そして、それ以上に顰蹙をかったのが、ティーンエイジャーのファンたちが、音が響きわたるこの立派な劇場の中でさえも悲鳴をあげてしまったことだった。

さらにその2日後、プロモーターのバーナード・デルフォントから、エリザベス皇太后（エリザベス女王の母）とマーガレット王女の前で催される毎年恒例のロイヤル・コマンド・パフォーマンスへの出演依頼をビートルズが受けていて、しかもそれをビートルズ側が承諾していたことが報道された（一般には知られていないが、ビートルズはその後も毎年この王室主催のショーに招待されていながら、毎年これを断っていた）。

その後、何回かステージをこなし、そのいずれもが大事件のように新聞に書きたてられた。EMIで次のシングル（'I Want To Hold Your Hand'と'This Boy'）のレコーディングを終えると、ビートルズは初めての海外ツアー、スウェーデンに向かった。このツアーはイギリスでのツアーと同様にハードで、1週間のうちに9回のステージ、そのうえテレビ、ラジオへの出演が組まれていた。このスウェーデンでも、イギリスに劣らないマスコミやファンの異常な反応が展開され、ビートルズの面々は圧倒された。ビートルマニア現象は、英語を母国語としないスウェーデンのティーンエイジャーをもすでにのみ込んでしまっていたの

CamScannerでスキャン

である。ストックホルムのショーではジョージが熱狂したファンにつかまり、あやうくステージから引きずりおろされそうになった。

しかし、おかしなもので、このスウェーデン・ツアーについていちばんよく記憶されているのは、じつはイギリスに帰国したときの出来事である。10月31日、ビートルズはストックホルムのアルランダからロンドン空港に到着したが、激しい暴風雨にもかかわらず、空港には数百人のファンたちが悲鳴をあげながらつめかけていた。ファンの多くは、アストリット・キルヒヘルがかなり前にハンブルクで発案して、今やすっかり有名になった「ビートル・カット」にしていた。空港のクイーンズ・ビルディングの屋上に群がったファンがあまりにも大きな悲鳴をあげるので、ジェット機の騒音さえもかき消されてしまうほどだった。さらに全国紙各社やBBCなどの報道陣も大挙して集まっていた。50人ものカメラマンと、やはり50人ほどの記者たちがひしめきあうなか、当惑気味にタラップを下りたビートルズの4人は、それ以降何回となく体験するいわゆる「空港での大歓迎」を、この日初めて経験したのである。

名高いロイヤル・コマンド・パフォーマンスは、11月4日にロンドンのプリンス・オブ・ウェールズ・シアターで開催された。劇場の外には、今やごく当然のことながら、ビートルマニアが群がっていたのだが、叫びたてるティーンエイジャーの前に、腕組みをしてがっしり人垣を作った警官隊が勇ましく立ちはだかっていた。このときばかりは、王室関係者が到着しても、影が薄かった。しかも、そうさせているのはロックンロール・ミュージックを演奏する地方出身の4人の若者だったのだ。

ビートルズはひとたび演奏を始めると、宝飾を身にまとったハイソな観客の心を、昔キャバーンの客の心をつかまえたときのように、またたくまにつかんでしまった。もちろん、ピンキー・アンド・パーキーと共演すること、そして社交界の名士や社交界デビューしようとする若い淑女たちの前で演奏することが、ビートルズの求めていた名声ではなかっただろう。しかし、この場違いなステージを、ビートルズは持ち前の資質と鼻っ柱の強いユーモアで乗りきることに成功した。これほど厳粛な場にはおよそ適切な選曲とは言いがたい'Twist And Shout'の演奏を始める前、マイクに歩み寄ったジョンはこう言った。「最後の曲になりましたので、みなさんに少し協力していただきたいと思います。安い席の方は手拍子をお願いします。そのほかの方は、宝石をじゃらじゃら鳴らしてください」

タキシードに身を包み、王室関係者に囲まれて誇らしげに座っていたエプスタインは、これを聞いてほっと胸をなでおろした。というのも、ジョンは「そのいまいましい宝石をじゃらじゃら鳴らしてみやがれとでも言ってやるか」と、楽屋でエプスタインを脅かしていたからだ。

そして、もう誰にも止められない本格的なビートルマニア時代がやってきた。エプスタインが企画した音楽とコメディによる豪華な「ビートルズ・クリスマス・ショー」の10万枚のチケットは、発売から25日で売り切れた。そして、ビートルズの秋季ツアーのチケット前売りが始まると、イギリス各地で数千人単位のティーンエイジャーが徹夜で並び、寒々とした夜を外で過ごし、さまざまな騒ぎの原因にもなって、そのもようは連日のように新聞の一面で大々的に報道された。秋季ツアーは、スケジュールが6月の時点ですでに発表されており、ビートルズにとって、この10か月で4回目となる全英ツアーだった。34か所の会場を訪れ、ひと晩に2回のステージをこなすことになっていた。

まだスケジュールが比較的穏やかだった7月に大半がレコーディングされていたビートルズのセカンド・

CamScannerでスキャン

アルバム"WITH THE BEATLES"が、11月22日に発売された。このアルバムは27万枚の予約があり、発売から1週間で50万枚という驚くべき売り上げを記録した。また、8月13日に発売されたEP"TWIST AND SHOUT"は、EPでは初めて25万枚を売って、シルバー・ディスクに輝くレコードとなった。やがて8月からずっとナンバーワンを維持し、すでに100万枚を突破していた'She Loves You'は、12月の第1週に、ビートルズ5枚目のシングル'I Want To Hold Your Hand'にようやく1位の座をゆずった。今度のシングルは予約注文の時点ですでに記録破りの100万枚を突破していた。予約が多いせいでかえって発売後の売り上げが鈍るのではないかという関係者の心配をよそに、クリスマス・シーズンを通じて6週間ナンバーワンをキープした。また、このシングルは発売が発表された翌日の11月5日、発売日まであと24日もあるのに、すでに50万枚の予約注文がEMIに殺到していた。

当時の新聞には、「ビートル・カット」にしたため学校から自宅に帰されたイギリス中の少年たちのニュース、ビートルズの曲によるバレエが企画されたこと、人気を得るためにビートルズの名前を何かと引き合いに出す進歩的な牧師や多くの政治家たちのこと、ロンドン公演に際してビートルズの身辺警備のために駆り出された警官の人件費が国会で問題になったというニュースなどであふれていた。しかし、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの誰かひとりでも骨折したりした場合に起きる騒ぎのことを考えれば、そんな警官の人件費など安いものだというのは明らかだった。

一方、ビートルズのメンバーにとっては、この状況はもう冗談どころではなかった。街を歩くには念入りな変装が必要で、誘拐されそうになり、家族や住居は絶えず監視され、楽屋からは服や楽器が盗まれた。さらに、ジョージが冗談でお菓子はジェリー・ビーンズ（ベイビー）がいちばん好きだと話したばっかりに、ステージにジェリー・ビーンズの雨が降り、エプスタインがステージにものを投げないでとファンを説得しなければならなかったりした。秋のツアーで、町から町へと身を隠して移動する様子は、ツアー中のロック・バンドというよりはむしろ軍隊の訓練に近かった。やっとのことで劇場に入っても、今度はむさくるしい楽屋に閉じこめられた。まさに、自らの名声にとらわれた囚人だった。

そうかといって、ステージも楽しいわけではなかった。抑制のきかない観客を前にしての20〜25分のステージは、悲鳴と歓声にかき消されて演奏は観客にはまったく聞こえていなかった。それだけならまだしも、当時の原始的な機材にはモニターもなかったので、ビートルズ自身も自分たちの声やハーモニーや演奏を聴くことができなかった。この6年、ステージの上で音楽的な進歩を絶えず実現してきたビートルズのショーは、ここにきて型にはまったものになってしまっていたとも言える。

ある新聞が、ビートルズ特集号で「ビートルズの名前はもはや国民の心に刻み込まれた」と記したように、この騒がしかった1963年はまさにビートルズ一色で終わった。新聞も雑誌もテレビもラジオも、ビートルズの話題で持ちきりだった。チャートも、ビートルズが頂点に君臨しただけでなく、そのほとんどがビートルズのレコードあるいはビートルズ関連のレコードで埋まっていた。「レコード・リテイラー」誌によれば、イギリス人はこの1年にビートルズのレコードだけに625万ポンドを支払ったという。

CamScannerでスキャン

アメリカ進出に向けて

ビートルズの成功がゆるぎないものとなったことを確信したブライアン・エプスタインは、ビートルズをこの年以上にハードに働かせることは二度としなかった。少なくともイギリス国内についてはそうだった。しかし、その一方で、ビートルズの活動の地平は国外へと広がりつつあった。7月末には、1964年1月にパリのオランピア劇場で3週間公演をすることが決定した。さらに、ビートルズがスウェーデン・ツアーに出ていた10月29日の夜、エプスタインは映画会社のユナイテッド・アーティスツと、ビートルズの初主演映画の出演契約を交わし、撮影は1964年3月から始まる予定だった。また、12月半ばには、翌年6月のオーストラリアとニュージーランドへのツアーの契約も交わされた。

11月5日、ビートルズがロイヤル・コマンド・パフォーマンスに出演した翌日、エプスタインはプロモーションのためにビリー・J・クレイマーを連れて渡米した。アメリカ滞在中、エプスタインはアメリカでもっとも人気の高いテレビのバラエティ番組「エド・サリバン・ショー」のホストであるエド・サリバンと会った。ビートルズがスウェーデンから帰国した10月31日、サリバンは飛行機が遅れた関係でちょうどロンドン空港で足止めをくらい、あのビートルマニアを偶然にも目撃していた。そして、このすさまじいイギリスでの熱狂を引き起こしている張本人をアメリカでも紹介してみたらおもしろいと考えていた。しかし、アメリカではまだ無名のこのバンドを、あくまでもショーのメイン・ゲストとして出演させてほしいとエプスタインが主張したときには、さすがにサリバンも番組プロデューサーのボブ・プレックトも腰を抜かした。しかし、その条件のためなら出演料を大幅に下げてもいいというエプスタインの熱意に負け、ふたりはビートルズの出演を承諾した。

そういう経緯で、1963年11月11日の夜、ニューヨークのデルモニコ・ホテルにあるサリバンの住居兼事務所で、その契約は交わされた。アメリカでは破格に安い1万ドルの出演料で、ビートルズは「エド・サリバン・ショー」に3回出演することになった。内容は、1964年2月9日にニューヨークから、16日にはマイアミから、それぞれ3,500ドルで生出演し、23日は3,000ドルで録画出演するというものだった(当時「エド・サリバン・ショー」のトップ・ゲストの出演料の相場は1回で7,500ドルだった)。ビートルズのアメリカまでの往復航空運賃と、ニューヨークおよびマイアミでの宿泊費は、サリバンが持つことになった。この契約は、エプスタインにとってもサリバンにとっても、生涯のうちでもっとも割のいい投資となった。

一方、エプスタインはこのニューヨーク滞在中に、北米のEMI傘下レーベルのキャピトル・レコードで、東海岸の制作部長だったブラウン・メグスにも会っていた。メグスは、シングル'I Want To Hold Your Hand'を1964年1月13日に発売することを決定し、これからは全社をあげてビートルズを推すつもりだと知らせて、エプスタインを大喜びさせた。キャピトルは、これまでに出ていた'Love Me Do' 'Please Please Me' 'From Me To You' 'She Loves You'の4枚についてはリリースを渋ってきていたからだ。このシングル4枚はアメリカのマイナー・レーベルから発売されていたが、ほとんど成功らしい成功はおさめていなかった。

キャピトルが'I Want To Hold Your Hand'をラジオで流したところ、リスナーからの問い合わせが殺到し、キャピトルは発売日を17日早めた。1963年の12月26日、シングル'I Want To Hold Your Hand'がアメリカで発売された。

CamScannerでスキャン

初の本格的ツアーをスコットランドで

1月2日(水)
ロングモア・ホール
Church Rd, Keith, Banffshire (キャンセル)

5日間のスコットランド・ツアーの初日。これはビートルズとしては初めての本格的なツアーだった。しかし、スコットランド全域が凍りつくほどの悪天候にみまわれ、この日の公演は中止。猛吹雪のため、ハイランド全域(スコットランド高地地方)の道路が通行不能となり、ビートルズは開演時間までにキースにたどりつくことができなくなったのである。本来なら、1960年5月25日にジョニー・ジェントルのバック・バンドとして訪れて以来のショーになるはずだった。
この日の公演が中止になる前から、このツアーは幸先の悪いスタートをきっていた。1日にハンブルクからロンドンに飛び、そこでひと晩泊まったビートルズは、2日の午前中にロンドンからエジンバラに向かった。しかし、悪天候のため飛行機はアバディーン空港に緊急着陸してしまい、すでにバンでエジンバラ空港に迎えに来ていたニール・アスピノールには、変更を知らせることができなかった。3日の夜までスケジュールがあいたため、ジョンは飛行機でリバプールの家に戻り、ほんの数時間過ごして、翌朝早く再びスコットランドへ向かった。

1月3日(木)
トゥ・レッド・シューズ・ボールルーム
South College St, Elgin, Morayshire

スコットランド・ツアーがいよいよスタート。この会場はややL字型をしていたため、一部の客はステージのビートルズを見ることができずに音楽だけを聴いて踊っていた。

1月4日(金)
タウン・ホール
High St, Dingwall, Ross and Cromarty

1月5日(土)
ミュージアム・ホール
Henderson St, Bridge of Allan, Stirlingshire

1月6日(日)
ビーチ・ボールルーム
Sea Beach, Aberdeen, Aberdeenshire

5日間のスコットランド・ツアーの最終日。

1月8日(火)
スコティッシュ・テレビジョン、シアター・ロイヤル
Hope Street, Glasgow, Lanarkshire

アバディーンでのツアー最終日のあと、ビートルズはそのままスコットランドに滞在し、その日のうちにグラスゴーに向かった。スコティッシュ・テレビのスタジオで、子ども向けの番組「ラウンドアップ」に出演するためである。この番組は、午後5時から5時55分に地元のみで生放送された。ビートルズは発売間近のニュー・シングル 'Please Please Me' を口パクした。

1か月ぶりのリバプール公演は大盛況

1月10日(木)
グラフトン・ルームズ
Liverpool

ほぼ1か月ぶりのリバプールでのライブ。5バンドが出演し、ビートルズはメインで登場した。大会場のグラフトン・ルームズには記録破りの大勢の入場者が訪れ、ショーは大成功をおさめた。ショーの数日前に100枚のチケットが盗まれたが、幸い通し番号がふってあったため、その100枚は無効になった。

1月11日(金)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:プラザ・ボールルーム
Halesowen Rd, Old Hill, nr Dudley, Staffordshire
リッツ・ボールルーム
York Rd, King's Heath, Birmingham, Warwickshire (延期)

セカンド・シングル 'Please Please Me/Ask Me Why' がイギリスでリリースされるこの日、ランチタイムのステージを終えたあと、悪天候のなかをリバプールから出発。何と

CamScannerでスキャン

かオールド・ヒルの出演会場にはたどりつけたが、吹雪がひどく、そこから18キロ離れたふたつめの会場リッツのあるキングズ・ヒースまでは、どうしても運転していくことができなかった。この夜、中部地方一帯は7年ぶりの寒波におそわれた。リッツでの公演は2月15日に延期となった。

1月12日(土)
インビクタ・ボールルーム
High St, Chatham, Kent

これまでに行なった公演のなかでは、もっとも南の会場。

全国ネットのテレビ番組に初出演

1月13日(日)
アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston Rd North, Aston, Birmingham, Warwickshire

ビートルズの音楽出版版権管理代理人、ディック・ジェイムズの手配によって実現したこのテレビ出演は、この時点までのテレビ出演のなかではもっとも重要なものだった。なぜかというと、この「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」は人気番組というだけでなく、全国ネットで放送されていたからだ。イギリスのティーンエイジャーのほとんどがこの番組を見ていたし、この番組は当時のトップ・スターが最新リリースのレコードを演奏するという番組だった。そしてほとんどの視聴者にとって、これがビートルズを目にする初めての機会となった。ちなみに、ディック・ジェイムズがビートルズの版権を得たことは、ジェイムズにも非常に重大なことであった。というのも、そのおかげで彼の会社は'Please Please Me'とその後の楽曲の著作権管理費として、莫大な財産を手にしたからである。

「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」は、ITV傘下の局で中部と北部向けの週末番組をおもに(それに全国向け番組も少し)制作していたABCテレビが手がけていた。この日の収録は、ABCとATV(平日は中部向け、週末にロンドン向けの放送をしていた局)が共同所有する、バーミンガムのアルファ・テレビジョン・スタジオで行なわれた。7組の出演者のなかでビートルズはいちばん格下で、番組前半が終了する直前のコマーシャルまでの間に'Please Please Me'を口パクした。番組は1月19日午後5時50分から6時30分に放送された。

1月14日(月)
シビック・ホール
Whitby Rd, Ellesmere Port, Wirral, Cheshire

リバプールから30キロほど南にある工業都市エルズミア・ポートで行なわれたビートルズ唯一の公演。この日行なわれたウルバハム・ウェルフェア・アソシエーション・ダンスには、700人の客がつめかけ、シビック・ホールは満杯になった。

1月16日(水)
グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester
プレイハウス・シアター
Manchester

マンチェスターでグラナダ・テレビの番組「ピープル・アンド・プレイシズ」に生出演したあと、BBCラジオの番組「ヒア・ウィ・ゴー」の収録。この日午後のスケジュールは次のように進められた。

3:00-4:00:グラナダ・テレビ・センターの第4スタジオでリハーサル。

4:30-5:30:プレイハウス・シアターでBBCラジオのリハーサル。

6:35-7:00:グラナダ・テレビに戻り、「ピープル・アンド・プレイシズ」の生放送に出演。'Ask Me Why'と'Please Please Me'を口パクした。

8:45-9:30:プレイハウス・シアターでBBCの「ヒア・ウィ・ゴー」の収録。ビートルズは、'Chains' 'Please Please Me' 'Three Cool Cats' 'Ask Me Why'の4曲を演奏。この日の収録分はBBCラジオで、1月25日の午後5時から5時29分に放送。'Three Cool Cats'は最終的にカットされた。

1月17日(木)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

マジェスティックでのチケットはいつも前売りの段階で完売

になった。そのためいつも500人ほどの入場できないファンが会場の外にあふれていた。

1月18日(金)
フローラル・ホール・ボールルーム
Morecambe

1月19日(土)
タウン・ホール・ボールルーム
Pauls Moss, Dodington, Whitchurch, Shropshire

1月20日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月21日(月)
EMIハウス
London

ラジオ・ルクセンブルクのEMI番組枠「ザ・フライデイ・スペクタキュラー」へ3度目の出演。1月25日の午後10時から11時に放送。ビートルズと司会者とのおしゃべりのあいまに'Please Please Me'と'Ask Me Why'がレコードで流された。収録はいつものように、ロンドンのEMIハウスで、100人の観客の前で行なわれた。トニー・バーロウは、ビートルズのデビュー・アルバム"PLEASE PLEASE ME"のライナーノーツでこの日の収録について書いている。

ハード・スケジュールをこなす

1月22日(火)
BBCパリス・スタジオ
London
プレイハウス・シアター
Northumberland Ave, London
BBCパリス・スタジオ
London

非常に忙しい1日。BBCのラジオ番組に生出演したあと、さらにふたつの番組の収録。まず、リージェント・ストリートにあるパリス・スタジオで、午後1時から1時45分までのBBCの生番組「ポップ・イン」に出演。ニュー・シングル'Please Please Me'をかけてもらい、ホスト役と談話。ビートルズのほかには、ジョーン・リーガン、ジョン・パートウィー(のちのドクター・フー)、シェーン・フェントン(のちのアルビン・スターダスト)が出演。
次にビートルズはチャリング・クロス近くのプレイハウス・シアターに向かった。人気ポップ番組「サタデイ・クラブ」へ初出演するため、午後2時30分からリハーサル、4時から5時まで本番収録。この番組は、人気ポップ・テレビ番組「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」と同じように影響力の強い番組で、司会者も同じブライアン・マシューだった。
「サタデイ・クラブ」では、'Some Other Guy' 'Love Me Do' 'Please Please Me' 'Keep Your Hands Off My Baby' 'Beautiful Dreamer'の5曲を演奏。番組は1月26日の午前10時から正午に放送された。この2時間のうちの30分(正確には10時31分から10時59分までの30分)は、BBCのジェネラル・オーバーシーズ・サービス(現在のワールド・サービス)による短波放送で、南洋州(オーストラリアとその周辺の南洋諸島)、アフリカ、極東、中東、東南アジアおよび地中海沿岸地方に同時放送された。ビートルズの分で海外放送されたのは、'Some Other Guy'と'Love Me Do'の2曲だった(イギリスの夏時間の間は午前11時31分から11時59分までの放送分が海外放送された。ちなみに1963年の夏時間適用期間は4月21日から10月6日まで、1964年は3月22日から10月25日まで)。
そのあと、ビートルズはパリス・スタジオに戻り、BBCの別の番組「タレント・スポット」の公開録音。この日の出演は、ビートルズの版権管理を請け負っているディック・ジェイムズの手配によるものだった。午後5時30分からリハーサルをし、7時から8時まで収録。'Please Please Me' 'Ask Me Why' 'Some Other Guy'の3曲を演奏。番組は、1月29日午後5時から5時29分に放送された。

1月23日(水)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

この日の朝ロンドンを車で出発した一行は、キャバーン・クラブの夜の開演時間ぎりぎりに、ようやくリバプールにたどりついた。この車での移動は、悲惨なものだった。具合が悪くてリバプールで休んでいたニール・アスピノールの代わりに、臨時のアシスタント・ロード・マネージャーとして同行していたマル・エバンズ(のちに正式なスタッフに迎えられ

CamScannerでスキャン

る)は、バンのフロントガラスが割れてしまったため、ひどい寒さのなかをフロントガラスなしで運転しなければならなかったのである。ビートルズのメンバーは、バンのうしろでうつぶせに覆いかぶさりあって寒さをしのいだ。

セカンド・シングルのプロモーションのためのサイン会

1月24日(木)

アセンブリー・ホール
High St, Mold, Flintshire

ウェールズ北部のフリントシャーに向かう前、ビートルズはNEMSレコード店に行って、ニュー・シングル'Please Please Me'のサイン会。また、1階(ポピュラー・レコード売り場)から2階(クラシック・レコードとAV機器売り場)に向かう階段をステージにして、短いアコースティック・コンサートを行なった。

1月25日(金)

コーポレイティブ・ホール
Market St, Darwen, Lancashire

地元のバプテスト教会の青年クラブ主催によるダンス・パーティーに出演。エプスタインがアメリカのビー・ジェイ・レコードと発売契約を結ぶ。

1月26日(土)

エル・リオ・ダンス・ホール、エル・リオ・クラブ
Queen Victoria St, Macclesfield, Cheshire
キングズ・ホール
Glebe St, Stoke-on-Trent, Staffordshire

この日出演したふたつの会場は、34キロも離れていた。エル・リオ・クラブへの出演は、当初1月19日に予定されていたのがこの日に変更されたもの。共演は地元のウェイン・フォンタナ・アンド・ジェッツというグループ。フォンタナはのちにマインドベンダーズと組んで有名になった。
ジョンとポールはキングズ・ホールの楽屋で、1週間後に一緒にツアーを行なうヘレン・シャピロのために'Misery'を書き始めた。また、ステージではアメリカのバンド、ルーフトップ・シンガーズの'Walk Right In'を演奏した。この曲はアメリカではすでにナンバーワンを獲得し、イギリスでも火がつき始めていた。ビートルズがこの曲をステージで演奏したのは、このときだけである。

1月27日(日)

スリー・コインズ・クラブ
Fountain St, Manchester, Lancashire

ラジオのDJジミー・サビルが共同経営していたクラブに再び出演(最初に出演したのは、1961年末にこのクラブがオープンしてまもないころ)。

1月28日(月)

マジェスティック・ボールルーム
Westgate Rd, Newcastle-upon-Tyne, Northumberland

1月30日(水)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

1月31日(木)

ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool
夜:マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

マジェスティック・ボールルームでの出演は、チケットの予約が殺到したため、午後8時と11時の完全入れ替え制で2ステージをこなさなければならなかった。劇場や映画館でなら入れ替え興行はふつうだったが、ボールルームを使っているクラスのミュージシャンではありえないことだった。

2月1日(金)

アセンブリー・ルームズ
Corporation St, Tamworth, Staffs
メイニー・ホール(セント・ピーターズ・チャーチ・ホール)
Maney Hill Rd, Maney, Sutton Coldfield, Warwickshire

中部地方にある2会場での出演。両会場は13キロほど離れていた。

CamScannerでスキャン

ヘレン・シャピロとのパッケージ・ツアー、初めて全国をまわる

2月2日(土)
ゴーモント・シネマ
New Victoria St, Bradford, Yorks

ビートルズにとって初めての全国ツアーの初日。ツアーのメインは1961年度と1962年度のイギリスの最優秀女性シンガーに選ばれた16歳のロンドンっ娘、ヘレン・シャピロが務めた。ビートルズは6組の出演者のなかではもっともランクが低かった。
初日のビートルズの演奏曲は、'Chains' 'Keep Your Hands Off My Baby' 'A Taste Of Honey' 'Please Please Me'の4曲。そのほかに、'Love Me Do'と'Beautiful Dreamer'を予備曲にしていた。このあと、ツアーは2月5日に再開。

2月3日(日)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

8バンドによる8時間のリズム・アンド・ブルース・マラソンのメインとして出演。

キャバーンのランチタイムに最後の出演

2月4日(月)
ランチタイム:キャバーン・クラブ
Liverpool

ビートルズがキャバーン・クラブのランチタイム・セッションに出演したのは、この日が最後。

2月5日(火)
ゴーモント・シネマ
Hallgate, Doncaster, Yorkshire

シャピロとのパッケージ・ツアー2日目。

2月6日(水)
グラナダ・シネマ
St Peters Street, Bedford, Bedfordshire

2月7日(木)
リーガル・シネマ
Kirkgate, Wakefield, Yorkshire

革ジャン姿でパーティーを追い出される

2月8日(金)
ABCシネマ
Warwick Rd, Carlisle, Cumberland

ステージを2回こなしたあと、平穏無事なこのツアーではもっとも大きな事件と言える出来事が起こった。街の中心にあるクラウン・アンド・マイター・ホテルで行なわれたカーライル・ゴルフ・クラブのダンス・パーティーから、ビートルズ、ヘレン・シャピロ、そしてケニー・リンチが追い出されたのだ。原因はビートルズが革ジャン姿だったため。

2月9日(土)
エンパイア・シアター
High St, Sunderland, Durham

ビートルズにとっては、シャピロとのパッケージ・ツアー・パート1の最終日。ビートルズは2月23日から再び合流することになっていた。本当の最終日は2月10日、ピーターバラのエンバシー・シネマでのステージだったが、2月11日朝からロンドンで行なわれるレコーディングの準備のため、ビートルズは参加しなかった(10日の公演にはその代わりにピーター・ジェイ・アンド・ジェイウォーカーズが出演)。

ファースト・アルバムを1日でレコーディング

2月11日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

1963年当時、ポップ・グループが1枚のアルバムをたった1日でレコーディングすることはさほどめずらしいことではなかった。クオリティや緻密さよりも、予算が優先されたからだ。しかし、ビートルズが性急なスケジュールをこなしただけでなく、すばらしいデビュー・アルバムまで作りあげてしまったのには驚かされる。この日、ビートルズはアルバム'PLEASE

PLEASE ME"収録の14曲のうち10曲をレコーディングしたが、現在でもこのアルバムは最高級の演奏を集めたすばらしい作品集であると評価が高い。そういう作品を585分余りの時間で仕上げたのである。レコード音楽史上、これほど実りある585分はほかにないだろう。驚いたことに、当初のレコーディング予定は、午前10時から午後1時までと午後2時30分から5時30分までの2回のセッションだけだった。実際には、2回目のセッションは6時まで延長され、さらに午後7時30分から10時45分までの3回目のセッションが追加された。ビートルズの状態は決して万全ではなかった。ジョンはひどい風邪をひき、声の調子が悪かった。メンバーは、紅茶とミルクとタバコ、そして「喉の痛みを抑えて気分爽快」という謳い文句で有名なズープスのドロップで長い1日を乗りきった。

この日のセッションの概要は次のとおりだった。

午前10時から午後1時までのセッションでは、'There's A Place'を10テイクと、'Seventeen'('I Saw Her Standing There'の仮タイトル)を9 テイク、レコーディングした。

午後2時30分から6時までは、'A Taste Of Honey'を7テイク、'Do You Want To Know A Secret'を8テイク、'There's A Place'と'I Saw Her Standing There'をさらに3テイクずつ、そして'Misery'を11テイク。

午後7時30分から10時45分までは、'Hold Me Tight'を13テイク(この曲はデビュー・アルバムには収録されず、1963年9月12日にリメイクされたバージョンがセカンド・アルバム"WITH THE BEATLES"に収録された)、'Anna (Go To Him)'を3テイク、'Boys'を1テイク、'Chains'を4テイク、'Baby It's You'を3テイク、最後に'Twist And Shout'を2テイク(アルバムに収められたのはテイク1)。

2月22日付の「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌とその少しあとに出た「ポップ・ウイークリー」誌の記事(おそらくどちらも同一執筆者によるもの)は、'Keep Your Hands Off My Baby'もこの日にレコーディングされたのではないかと推測している。しかし、EMIのレコーディング・シートにはこの曲は記載されていないし、テープ・ライブラリー日誌にもそんな記録は残されていない。

デビュー・アルバム"PLEASE PLEASE ME"は1963年3月22日にリリース。ビートルズ自身のセカンド・アルバム"WITH THE BEATLES"にトップの座をゆずるまで、連続30週間、ナンバーワンを保持した。

2月12日(火)

アゼナ・ボールルーム
White Lane, Gleadless, Sheffield, Yorkshire
アストリア・ボールルーム
King St, Oldham, Lancashire

2月13日(水)

マジェスティック・ボールルーム
Hull

2月14日(木)

ロカルノ・ボールルーム
West Derby Rd, Liverpool

セント・バレンタイン・デイを祝うスペシャル・ダンス・パーティー。リバプールでは有名なこのボールルームに、1950年代の終わりごろクオリーメンとして1、2回スキッフル・コンテストに出場したことがあったが、ビートルズとして出演したのはこの日が初めて。

2月15日(金)

リッツ・ボールルーム
King's Heath, Birmingham

1月11日の公演予定が延期され、この日になった。今やシングル・チャートのトップ3を誇るバンドを無名時代並みのギャラで出演させることができたため、リッツのプロモーターにとって、この出演契約は申し分ないものとなった。

2月16日(土)

カーファックス・アセンブリー・ルームズ
Cornmarket St, Oxford, Oxfordshire

中心街の会場でのひと晩だけの公演。ロンドンのトップ・プロモーターのひとり、ジョン・スミスとの初めての出演契約だった。この日発売されたイギリス全国発売の音楽紙「レコード・ミラー」の表紙をビートルズが初めて飾った。

CamScannerでスキャン

2月17日(日)
テディントン・スタジオ・センター
Broom Rd, Teddington, Middlesex

「トップ・オブ・ザ・ポップス」以前ではもっとも影響力のあったABCテレビのポップ番組「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」への2度目の出演のため、ロンドン南西部にあるテディントン・スタジオ・センターでの収録に参加。午前11時からリハーサルを行ない、午後に番組を収録。ビートルズは'Please Please Me'を口パクした。この日の収録分は2月23日の午後5時50分から6時30分にかけてイギリスのほぼ全域で放送された。ビートルズは7組の出演者のうち、3番目にまでランクアップ。この日のメイン・ゲストは、リバプール出身のビリー・フューリーだった。アマチュア時代の1960年5月10日、シルバー・ビートルズはこのフューリーのバック・バンドのオーディションを受けたことがあった。
また、この日の収録分の一部が、3月2日にテレビ番組「ABCアットラージ」で再放送されている(1963年3月2日を参照)。

2月18日(月)
クイーンズ・ホール
Widnes

NEMSエンタープライズ主催の公演。完全入れ替え制の2ステージのチケットは完売。

ピート・ベストと最後の顔あわせ
2月19日(火)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

ひさびさのキャバーン・クラブへの出演。前回の出演から、2週間以上たっていた。入場希望者は、なんと2日前から列を作った。共演者は、ピート・ベストの在籍するリー・カーティス・アンド・オールスターズ。ビートルズのメンバーがピート・ベストと直接顔を合わせたのは、この日が最後となる。

2月20日(水)
プレイハウス・シアター
London
スイミング・バーズ
St James Street, Doncaster, Yorkshire

アビイ・ロードの第1スタジオでは午前10時30分から午後1時までオーバーダブ・セッションが行なわれ、ジョージ・マーティンが'Misery'にピアノを、'Baby It's You'にチェレスタとピアノをオーバーダブした(後者のピアノは最終的には使用されなかった)。ビートルズはこの作業に参加していない。
前日リバプールでの公演を終えたビートルズは、その夜のうちに車でロンドンに移動し、この日BBCラジオの番組「パレード・オブ・ザ・ポップス」に出演した。番組は午後12時31分から1時30分まで、プレイハウス・シアターから生放送された。ビートルズは、午前11時15分からのリハーサルにも参加し、本番では'Love Me Do'と'Please Please Me'の2曲を演奏。
この放送を終えたあと、わずか4分10秒間しかなかったBBCラジオへの出演が本当にそれほど価値があるのかと悩みつつ、ビートルズは大急ぎで夜の公演会場のあるドンカスターまで、258キロの道のりを北へ向かった。

2月21日(木)
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

この日も2回の入れ替え制で、午後7時30分と11時30分のステージに出演。

2月22日(金)
オアシス・クラブ
Manchester

2月23日(土)
グラナダ・シネマ
West Gate, Mansfield, Notts

ヘレン・シャピロとのパッケージ・ツアー再開。1回目のステージが始まる前、ビートルズのメンバーはシャピロの楽屋に集まり、1週前の日曜日に収録した「サンク・ユア・ラッキー・

スターズ」を観た。テレビが用意されていたのはメイン・アクトであるシャピロの楽屋だけだった。

2月24日(日)

コベントリー・シアター
Hales St, Coventry, Warwickshire

この公演のあと、ツアーは1日オフになり、次の公演は26日。

2月25日(月)

カジノ・ボールルーム
Lord St, Leigh, Lancashire

やはりビートルズのメンバーは参加しなかったが、EMIの第1スタジオでは、午前10時から午後1時までと午後2時30分から5時45分の2回にわたり、アルバム"PLEASE PLEASE ME"の仕上げがジョージ・マーティンらによって行なわれた。モノラルおよびステレオ・マスターの制作のため、ミキシング作業をして収録曲14曲が収録順に並べ替えられた。
そのころビートルズは、NEMSエンタープライズ主催のダンス・パーティーに出演するため、会場のあるリーに向けて車を走らせていた。アメリカではビー・ジェイ・レコードからシングル'Please Please Me/Ask Me Why'がビートルズのレコードとして初リリースされた。

2月26日(火)

ゴーモント・シネマ
Corporation St, Taunton, Somerset

ヘレン・シャピロとのパッケージ・ツアー。連日の寒波のために風邪でダウンしたシャピロは、この日のステージに出演できなかった。代わりにダニー・ウィリアムズがメインを務めた。さらに穴埋めのため、'Tell Him'という曲がチャート入りしていたビリー・デイビスの出演が急に決まった。

2月27日(水)

リアルト・シアター
Fishergate, York, Yorkshire

体調が回復しないシャピロは、この日もステージに出演できなかった。

2月28日(木)

グラナダ・シネマ
Castle Gates, Shrewsbury, Shropshire

シャピロ・ツアーの一行は、全員同じバスでヨークからシュルーズベリーに向かった。そのバスの中で、ジョンとポールはビートルズの次のシングル曲'From Me To You'を書きあげた。
この日の公演からヘレン・シャピロが復帰したため、ビリー・デイビスはツアーから降りた。

3月1日(金)

オデオン・シネマ
Lord St, Southport, Lancashire

3月2日(土)

シティ・ホール
Barker's Pool, Sheffield, Yorkshire
ディズベリー・スタジオ・センター、第2スタジオ
Parrs Wood Road, Manchester, Lancashire

シェフィールドでシャピロとの2回目のステージを終えたあと、ビートルズは約60キロ離れたマンチェスターに向かい、ABCのテレビ・ニュース「ABCアット・ラージ」に生出演した。番組は、午後11時から11時50分にディズベリー・スタジオ・センターから中部および北部地域で放送された。ビートルズはブライアン・エプスタインとともに出演し、のちにラジオのトップDJとなるデビッド・ハミルトンからインタビューを受けた。突然有名になったことや、リバプールやほかの地域には何百というグループがいるにもかかわらず、なぜビートルズがこれほど成功したのかといった内容の質問に答えた。番組ではファンに意見を聞いたり、ジェリー・アンド・ペースメイカーズのジェリー・マースデンも出演した。
ビートルズはこの番組で演奏はしなかったが、ABCの「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」(2月17日収録、2月23日放送)での'Please Please Me'の演奏シーンが放送された。

CamScannerでスキャン

パッケージ・ツアー最終日、前半のトリを務める

3月3日(日)
ゴーモント・シネマ
Piccadilly, Hanley, Staffordshire

シャピロとのパッケージ・ツアー最終日。このころになると、前座のいちばん最初に登場する不名誉な扱いだったビートルズも、前半のトリにまで昇格していた。

出演料が100ポンドに

3月4日(月)
プラザ・ボールルーム
St Helens

この出演で、初めて100ポンドの出演料を受け取った。

3枚目のシングルをレコーディング

3月5日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

5日前、シャピロとのツアーの移動バスの中で書いた'From Me To You'を、EMIスタジオでレコーディング。セッション開始当初、この曲は3枚目のシングルのB面に予定されていたが、セッション中にA面候補だった'Thank You Girl'(仮タイトル'Thank You Little Girl')と入れ替わってA面に昇格した。予定では、午後2時30分から5時30分までと午後7時から10時までの2回のセッションに分けて行なわれる予定だったが、実際には午後2時30分から9時まで第2スタジオにこもり、'From Me To You'と'Thank You Girl'を13テイクずつレコーディングした。シングルは、4月11日に発売された。
スタジオ使用時間が余ったため、ビートルズはさらに'One After 909'と'What Goes On'の2曲のレノン=マッカートニー・ナンバーをレコーディングしたいと望んだ。しかし、結局'One After 909'しかレコーディングできなかった。5テイク録音され、この日のバージョンは"ANTHOLOGY 1"で発表された。'One After 909'は、のちに"GET BACK"セッション(1969年1月28～30日参照)で再びレコーディングされ、その結果アルバム"LET IT BE"に収録された。また、'What Goes On'はアルバム"RUBBER SOUL"でとりあげられた(1965年11月4日参照)。

3月6日(水)
プレイハウス・シアター
Manchester

マンチェスターにあるプレイハウス・シアターで、BBC「ヒア・ウィ・ゴー」の収録に参加。この番組への出演は5回目で、これが最後の出演となった。番組のプロデューサーは、ビートルズがまだEMIと契約する前にラジオのオーディションを受けさせ、番組に出演させたピーター・ピルビームだった。
午後4時からリハーサルを行ない、午後8時から8時45分までの収録で'I Saw Her Standing There' 'Misery' 'Do You Want To Know A Secret' 'Please Please Me'の4曲を演奏。この日の収録分は3月12日、午後5時から5時29分に放送され、'I Saw Her Standing There'は編集段階でカットされた。

マージー・ビート・ショーケース、NEMSのアーティスト一堂に

3月7日(木)
エリザベサン・ボールルーム
Co-operative House, Parliament St, Nottingham, Nottinghamshire

ブライアン・エプスタインのアイデアで、リバプールから一躍名をあげた、エプスタインお抱えのバンドだけを集めたショーが開かれた。ビートルズをはじめ、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、ビッグ・スリー、ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタス、そしてキャバーン・クラブのDJボブ・ウーラーも出演した。一行はNEMSエンタープライズが用意した2台の貸し切りバスに乗り込み、25シリングの参加費を支払った80人のファンと一緒にリバプールを出発して会場に向かった。この日から6月16日までの3か月の間に、同じ趣向のショーが計6回催され、それはのちにマージー・ビート・ショーケース・ツアーと呼ばれるようになった。

3月8日(金)
ロイヤル・ホール
Ripon Rd, Harrogate, Yorkshire

CamScannerでスキャン

トミー・ロウ、クリス・モンテスとツアー開始、主役の座を奪う

3月9日(土)

グラナダ・シネマ
Barking Rd, East Ham, London

ヘレン・シャピロとのツアーを終えてからわずか5日の間に、ビートルズは3回のライブ出演、レコーディング、そしてBBCラジオの収録をこなしていた。ひと息入れる暇もなく、この日まだ雪におおわれたイギリス国内を回る2回目の全国ツアーに早々と出発した。今回のツアーのメインはふたりのアメリカ人シンガー、トミー・ロウとクリス・モンテスだった。しかし、圧倒的に人気が急上昇していたビートルズは、ツアー初日の1回目のステージから、早くもメインの座を奪った。このツアーでのビートルズの演奏レパートリーは、'Love Me Do' 'Misery' 'A Taste Of Honey' 'Do You Want To Know A Secret' 'Please Please Me' 'I Saw Her Standing There'。

3月10日(日)

ヒッポドローム・シアター
Hurst St, Birmingham, Warks

ファンの群れを避けるため、ビートルズは警官に変装して会場入り。この日の公演のあと、翌11日はツアーが休みになる。

3月11日(月)

EMIハウス
London

ツアーのオフ日の夜、ビートルズはEMIハウスの1階にある小さなスタジオで、ラジオ・ルクセンブルクのEMI番組枠「ザ・フライデイ・スペクタキュラー」に出演。これが、この番組への4回目にして最後の出演となった。番組では、自分たちのことや仕事のことについて語り、あいまに'Please Please Me'と'Ask Me Why'が流された。3月15日、午後10時から11時に放送。

ジョンが寝込み、3人だけのステージ

3月12日(火)

グラナダ・シネマ
Bedford

ロウ／モンテス・ツアー。ジョンがひどい風邪をひいて寝込んでしまい、この日の公演は残るメンバー3人だけで出演した。曲はジョージとポールでボーカルをやれるように、とくに'Please Please Me'はかなりアレンジし直された。

3月13日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London
リアルト・シアター
York

前日の公演地ベッドフォードからロンドンへ向かい、午前10時から午後1時までEMIスタジオで'Thank You Girl'のハーモニカのオーバーダビング。テイク14からテイク28までを録音した。ジョンは風邪のために声が出なかったが、ボーカルは必要なかった。オーバーダブが完了すると、'Thank You Girl'は編集され、モノラルおよびステレオにミキシングされた。セッションを終えたビートルズは、夜に予定されていたツアー公演のためにヨークへ向かった。公演は2ステージ行なわれたが、声の出ないジョンはこの日もステージを休んだ。

3月14日(木)

ゴーモント・シネマ
Snow Hill, Wolverhampton, Staffs

EMIスタジオで午前10時から午後1時まで、ジョージ・マーティンらにより'From Me To You'の編集、モノラルおよびステレオ・ミキシングが行なわれた。そのころビートルズはヨークから次の公演地のウルバーハンプトンに移動中だった。この夜も、ジョンは出演できなかった。

CamScannerでスキャン

ジョン、ステージに復帰

3月15日(金)
コルストン・ホール
Colston St, Bristol

この夜の2回のステージから、ジョンが復帰。

3月16日(土)
ブロードキャスティング・ハウス、第3Aスタジオ
Portland Pl, London
シティ・ホール
Sheffield

ラジオ・ルクセンブルク用の収録があったのと、ジョンが風邪をひいていたために、ビートルズは3月11日に収録が予定されていたBBCのラジオ番組『サタデイ・クラブ』への出演をキャンセルしていた(当初、収録はロンドンのプレイハウス・シアターで午後5時30分から6時30分までの予定)。その穴埋めとして、この日BBCラジオのロンドン本部であるブロードキャスティング・ハウスで、『サタデイ・クラブ』に生出演することになった。午前9時からのリハーサルに間にあうようにタクシーで駆けつけたビートルズは、午前10時から正午までの生放送のなかで、'I Saw Her Standing There' 'Misery' 'Too Much Monkey Business' 'I'm Talking About You' 'Please Please Me' 'The Hippy Hippy Shake' の6曲を演奏。しかし、午前10時31分から10時59分までの海外同時放送分では、'Too Much Monkey Business' しか流れなかった。
番組終了後、今度は午後6時10分開演のロウ/モンテス・ツアーの1回目のステージに間にあうよう、255キロ北のシェフィールドのシティ・ホールに急いだ。

3月17日(日)
エンバシー・シネマ
Peterborough

3月18日(月)
リーガル・シネマ
St Aldate Street, Gloucester, Gloucestershire

3月19日(火)
リーガル・シネマ
St Andrews Street, Cambridge, Cambridgeshire

3月20日(水)
ABCシネマ
South St, Romford, Essex

3月21日(木)
BBCピカデリー・スタジオ、第1スタジオ
Piccadilly, London
ABCシネマ
London Rd, West Croydon, Surrey

午前10時からのリハーサルのあと、午後1時から2時まで、BBCの番組『オン・ザ・シーン』の収録。番組は3月28日の午後5時から5時29分に放送された。ビートルズは、'Misery' 'Do You Want To Know A Secret' 'Please Please Me' の3曲を演奏。ロンドン中心部のピカデリー201番地にあるこのピカデリー・スタジオで仕事をするのは、この日が初めてだった。
収録のあと、クロイドンでロウ/モンテス・ツアーに合流するため南へ向かった。

3月22日(金)
ゴーモント・シネマ
Doncaster

デビュー・アルバム"PLEASE PLEASE ME"のリリース日でもある。

3月23日(土)
シティ・ホール
Northumberland Rd, Newcastle-upon-Tyne, Northumberland

デゾ・ホフマンとフォト・セッション

3月24日(日)
エンパイア・シアター
Liverpool

ほぼ1か月ぶりに地元リバプールで凱旋公演。
翌3月25日はツアーのオフ日だったため、リバプールのあちこちの場所で、カメラマンのデゾ・ホフマンがビートルズの

スチール写真と8ミリ・カラー・フィルムの撮影をした。その後、ビートルズはウェストン・スーパー・メアでも同様の撮影を行なっている(1963年7月22～27日を参照)。

3月26日(火)

グラナダ・シネマ
Mansfield

3月27日(水)

ABCシネマ
Abingdon Square, Northampton, Northamptonshire

3月28日(木)

ABCシネマ
London Inn Square, Exeter, Devonshire

3月29日(金)

オデオン・シネマ
Loampit Vale, Lewisham, London

3月30日(土)

ギルドホール
The Square, Portsmouth, Hampshire

3月31日(日)

ド・モンフォール・ホール
Granville Rd, Leicester, Leicestershire

トミー・ロウとクリス・モンテスとのツアー最終日。

ラジオ番組の収録が続く

4月1日(月)

BBCピカデリー・スタジオ、第1スタジオ
London

のちにトップ司会者となるアナウンサー、ジョン・ダンが司会を務め、週1回放送されるBBCのラジオ番組「サイド・バイ・サイド」の収録に参加。番組2回分が収録された。リハーサルも含めて、午後2時30分から5時30分と、午後6時30分から10時30分の2回に分けて収録された。

「サイド・バイ・サイド」は、レギュラーのカール・デンバー・トリオと、必ずもう1組のゲスト・バンドが出演するという構成だった。番組は2組のバンドが一緒に歌う'Side By Side'(ハリー・ウッズ作曲、1927年にポール・ホワイトマン・オーケストラが初めてレコーディング)で始まり、それ以降は交互に演奏することになっていた。

午後から行なわれた1回目の収録分は4月22日の午後5時から5時29分に放送された。ビートルズはデンバー・トリオと'Side By Side'を共演したほかに、'I Saw Her Standing There' 'Do You Want To Know A Secret' 'Baby It's You' 'Please Please Me' 'From Me To You' 'Misery'を演奏。

夜に行なわれた2回目の収録分は5月13日の午後5時から5時29分に放送された。ビートルズはやはり'Side By Side'をデンバーと共演し、'From Me To You' 'Long Tall Sally' 'A Taste Of Honey' 'Chains' 'Thank You Girl' 'Boys'を演奏。

4月3日(水)

プレイハウス・シアター
London

プレイハウス・シアターに熱狂的なティーンエイジャーを集めて毎週収録されていたBBCラジオ番組「イージー・ビート」に初出演。ホストは、おなじみの人気司会者ブライアン・マシュー。

ビートルズは午後5時30分からリハーサルを開始し、収録は午後8時30分から9時45分までだった。'Please Please Me' 'Misery' 'From Me To You'の3曲を演奏。番組は4月7日の午前10時31分から11時30分に放送された。

演奏のほかに、ジョンとポールは同番組のレコード・レビュー・コーナー「ゴーイング・アップ ? 」にも、ローラ・リー、クレア・オロークとともに登場。バート・ウィードン、クレオ・レイン、バーノンズ・ガールズ、トミー・ロウのそれぞれのニュー・シングルについて寸評した。このコーナーに参加したパネリストには、スタジオを出る際、コーナー出演料として1ギニーがキャッシュで支払われた。

CamScannerでスキャン

4月4日(木)

BBCパリス・スタジオ
London
ロクスバラ・ホール
Stowe School, Stowe, Bucks

ビートルズはこの週の月曜日にBBCで「サイド・バイ・サイド」を2回分収録したばかりだったが、この日の午前11時から午後2時に、再びBBCのスタジオで同番組の3回目の出演分を収録した(じつはさらに午後2時から6時まで4回目の放送分も収録するという案もあったが、それは見送られた)。番組のオープニングに流す、ビートルズとカール・デンバー・トリオによる'Side By Side'の収録は、4月1日分の録音を流用することになって省略された。ビートルズは、'Too Much Monkey Business' 'Love Me Do' 'Boys' 'I'll Be On My Way' 'From Me To You'を演奏。この日の収録分は、2か月以上先の6月24日の午後5時から5時29分に放送された(実際の放送日からこれほど間をおいてBBCが収録を行なうのは非常にめずらしいことだった。ビートルズにとっても、放送までの日数がもっとも長い収録テープとなった)。

'I'll Be On My Way'は、ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタスに提供されたレノン=マッカートニー・ナンバーだが、ビートルズがスタジオでこの曲をレコーディングしたことはない。さらにこのとき以外、観客の前で演奏したことがないので興味深い。ダコタスのバージョンは3月14日にEMIスタジオでレコーディングされ、'Do You Want To Know A Secret'(同じくレノン=マッカートニーだがこちらはすでにおなじみ)のB面として、4月26日にリリースされた。

この夜、ストウにある男子校で行なわれた公演は、ビートルズのものとしてはおそらくもっとも異色なものとなった。これはリバプール出身の生徒が自分の出身地のバンドに興味を持ったことが直接のきっかけとなって実現したコンサートだった。

セカンド・シングルがシルバー・ディスクに

4月5日(金)

スイミング・バーズ
High Rd Leyton, Leyton, London

夕方、レイトンでの出演の前に、ビートルズはロンドンのEMI本社を訪れた。シングル'Please Please Me'で、ビートルズが初めてシルバー・ディスクを受賞し、その受賞パーティーに出席するためだった。4人はレコード会社の幹部の前でプライベートなパフォーマンスを披露した。

4月6日(土)

パビリオン・ガーデンズ・ボールルーム
St John's Rd, Buxton, Derbyshire

4月7日(日)

サボイ・ボールルーム
South Parade, Southsea, Portsmouth, Hampshire

ラジオ、テレビ、コンサートを1日でこなす

4月9日(火)

BBCパリス・スタジオ
London
ウェンブリー・スタジオ、第4スタジオ
Wembley
ゴーモント・ステート・シネマ、ボールルーム
Kilburn High Rd, Kilburn, London

この日も、忙殺される1日。昼にラジオの生番組でインタビューを受け、午後にテレビ番組に生出演、夜はコンサートというスケジュールだった。

ラジオ出演は、BBCのランチタイムのトーク番組「ポップ・イン」。パリス・スタジオで12時30分からリハーサル、午後1時から1時45分までが本番。インタビューに合わせて発売間近のニュー・シングル'From Me To You'も紹介された。ほかのゲストは、DJのデビッド・ジェイコブズ、ベテラン・コメディアンのアーサー・アスキー、ポピュラー・ピアニストのウィニフレッド・アトウェル。

テレビ生出演のほうは、前にも出演したことのあるアソシエイテッド・レディフュージョンの子ども番組「チューズデイ・ランデブー」。ロンドンおよび一部のITV局で、午後5時から5時55分に放送された(ビートルズは午後2時から5時までのリハーサルにも参加)。この番組では'From Me To You'と、番組の終わりにクレジットを流すところで'Please Please Me'を口パクした。ほかの番組出演者は、レギュラー出演の人形、オリー・ビークとフレッド・バーカー、自然

CamScannerでスキャン

主義者のグレアム・デンジャーフィールド、料理研究家のファニーとジョニー・クラドック夫妻。
夜の公演が行なわれたキルバーンのゴーモント・ステート・シネマは、ウェンブリーからさほど遠くない場所にあり、アビイ・ロードのEMIスタジオにはなおさら近かった。

4月10日(水)
マジェスティック・ボールルーム
Birkenhead

この会場でのビートルズ最後のステージ。

4月11日(木)
コーポレイティブ・ホール
Long St, Middleton, Lancashire

4月12日(金)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

'From Me To You/Thank You Girl'がイギリスでリリースされたこの日、キャバーン・クラブでの聖金曜日の特別ショー。8時間におよぶリズム・アンド・ブルース・マラソンのメインとしてトップバッターを務める。

パーティーで クリフ・リチャードに会う

4月13日(土)
ライム・グローブ・スタジオ、Eスタジオ
Lime Grove, Shepherd's Bush, London

イギリスの民放テレビに11回出演したビートルズは、ついに国営放送BBCの全国ネット番組にも初出演することになった。この日は、4月16日午後6時25分から6時50分に放送分の「ザ・625・ショー」への出演分を録画収録。ビートルズは「有望若手タレント」として登場した。
収録はロンドン西部にあるBBCのライム・グローブ・スタジオで行なわれた。午前10時30分から11時30分までがバンドの準備時間、午前11時30分から午後1時までと午後2時15分から3時45分までがカメラ・リハーサル、午後4時30分から6時までが最終リハーサル、そしてやっと午後7時30分から8時15分に本番収録という1日がかりのスケジュールだった。
ビートルズは、'From Me To You' 'Thank You Girl'、それに'Please Please Me'の3曲を演奏。'Please Please Me'は番組のクロージング・ナンバーだったため、全出演者が登場しての演奏となった。この日の出演者は、司会者で歌手のジミー・ヤング、歌手でギタリストのロルフ・アンド・ティノ、歌手のボビー・キャロル、歌手でギタリストのハンク・ロックリン、ギタリストのウィウト・スティーンヒュイス、ミッキー・グリーブ率いる4人のオーケストラ、ピアニストのジョニー・ピアソン、指揮者のエドウィン・ブラーベン。
「ザ・625・ショー」の収録のため、ビートルズはこの日の夜、出席の約束をしていたランカシャーのオールダムに近いアッパーミルのシビック・ホールで開かれたサッカー・クラブのダンス・パーティーに行けなくなった。しかし、ビートルズが個人的に訪れることは告知されていたが、演奏は最初から予定されていなかった。結局、ビートルズはロンドンにとどまり、シャドウズのギタリスト、ブルース・ウェルチがノース・ハローの自宅で開いたパーティーに出向き、このとき初めてクリフ・リチャードに会った。

テレビでデル・シャノンと共演 ローリング・ストーンズのステージを初めて観る

4月14日(日)
テディントン・スタジオ・センター
Teddington

ABCテレビの番組「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」の3度目の出演分を収録。この日の収録分は、4月20日午後5時50分から6時30分に、全国のほとんどの系列局で放送された。
ビートルズは午前11時からリハーサルに呼ばれ、午後いっぱいは'From Me To You'1曲のみを口パクした。この日のビートルズは出演リストのなかで3番目のランクだった。ほかのゲストは、まだ売れる前のデイブ・クラーク・ファイブ、バーノンズ・ガールズ、バート・ウィードン。メインはアメリカのデル・シャノン。ビートルズはこの週の木曜日にもシャノンと共演する。
収録を終えたビートルズは、テディントン近郊にあるリッチモンド・アポン・テムズで、やはり当時の有望若手グループとさ

れていたローリング・ストーンズのステージを初めて観に行った。ストーンズはステーション・ホテル・パブにあるクローダディ・クラブでのライブに出演していた。

4月15日(月)

リバーサイド・ダンシング・クラブ
Bridge Hotel, Teme St, Tenbury Wells, Worcestershire

4月16日(火)

グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester

グラナダ・テレビに3か月ぶりに出演。番組は、「ピープル・アンド・プレイシズ」の後番組として始まった北部向けの30分のニュース番組「シーン・アット6:30」。生放送で、ビートルズは'From Me To You'を口パクした。午後3時から4時までと4時15分から6時までのリハーサルのあと、午後6時30分から7時までが本番。ほぼ同じ時間帯の午後6時25分から6時50分に、BBCテレビではビートルズ出演の「ザ・625・ショー」を放送していた(1963年4月13日参照)。

4月17日(水)

マジェスティック・ボールルーム
Mill St, Luton, Bedfordshire

ロイヤル・アルバート・ホールに初出演 ポールとジェーン・アッシャーの出会い

4月18日(木)

ロイヤル・アルバート・ホール
Kensington Gore, London

BBCは1963年の上半期のあいだに、有名なロイヤル・アルバート・ホールから、コンサート生中継番組を3回放送した。ビートルズはその3回のうち1回だけ出演。「スウィンギング・サウンド'63」と題されたそのショーにはほかに、デル・シャノン、スプリングフィールズ、ランス・パーシバル、ロルフ・ハリス、バーノンズ・ガールズ、ケニー・リンチ、シェーン・フェントン・アンド・フェントンズ、ジョージ・メリーが出演した。
コンサートの進行はかなり複雑だったが、大筋としては途中休憩をはさんだ午後8時から8時50分までの前半と9時10分から10時15分までの後半の2部構成になっていた。
しかし、テレビ放送されたのは後半だけで、前半は放映すらされなかった。そのため厳密に言うと、前半はコンサート出演、後半はラジオ生出演だったと言ってもいいだろう。
また、BBCは海外向け放送で午後9時15分から10時まで、コンサートのもようをほぼ世界中に同時放送したが、ビートルズがステージに登場したのは午後10時2分だったため、海外リスナーは惜しいところでビートルズの演奏を聴き逃してしまった。
1967年の'A Day In The Life'の歌詞に出てくるロイヤル・アルバート・ホールに、ビートルズが出演するのはこの日が初めてだった。ビートルズは、この日のほとんどを会場の楽屋5Aの中で過ごしたと言ってもよかった。午前10時15分に呼ばれて、10時45分から11時30分までリハーサル、再び12時45分に呼ばれ、午後1時から1時30分までコンサートのフィナーレのリハーサルを行なった。
ビートルズをステージに紹介したのは、リバプール出身のジャズ・シンガーで芸術評論家のジョージ・メリーだった。前半は午後8時40分ごろに登場し、'Please Please Me'と'Misery'の2曲をほとんど間をあけずに演奏した。
後半では、'Twist And Shout'と'From Me To You'をやはり続けて演奏。ビートルズは当初1曲目を'Thank You Girl'にするつもりで、リハーサルでもこの曲を演奏していたが、土壇場でもっとアップビートの'Twist And Shout'に変更した。BBCのプロデューサー、テリー・ヘンブリーとロン・ベルチアはこの変更を知る由もなかった。フィナーレでは、ビートルズを含む出演者全員がステージに登場し、午後10時15分に番組が終了するまでのおよそ3分間、全員で'Mack The Knife'を演奏した('Mack The Knife'は、1928年にクルト・ワイルが「三文オペラ」のために書いた曲で、その後多数のアーティストがレコーディングしている)。
コンサートが終わったあと、ポールはのちにフィアンセとなるジェーン・アッシャーに初めて会った。本格派女優をめざしていたジェーンは、当時ティーン向けのテレビ番組のパーソナリティを務めていた。その日ジェーンはBBCの番組ガイド誌「ラジオ・タイムズ」の表紙用に、ビートルズに向かって叫ぶというポーズの写真をこの会場で撮影していた。

CamScannerでスキャン

4月19日(金)
キングズ・ホール
Stoke-on-Trent

2回目の「マージー・ビート・ショーケース」(1963年3月7日参照)。

4月20日(土)
マージー・ビュー・プレジャー・グラウンズ、ボールルーム
Overton Hills, Frodsham, Cheshire

北西部にあるこの会場にビートルズが出演したのはこの日のみ。ほかのリバプールのトップ・バンドは1961年から定期的にこの会場に出演していた。

これまでで最大規模のコンサート「ポール・ウィナーズ」に特別出演

4月21日(日)
エンパイア・プール
Empire Way, Wembley, Middlesex
ピガール・クラブ
Piccadilly, London

この日の午後、エンパイア・プールで行なわれたショーは「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌の1962〜63年度人気投票受賞者が出演するポール・ウィナーズ・オールスター・コンサートだった。コンサートの格と会場の規模では、この時点でのビートルズにとって最大のコンサートへの出演となった。およそ1万人のポップ・ファンが、14組の出演者を見ようと集まっていた。
メインはクリフ・リチャード・アンド・シャドウズ。ビートルズは1962年末に行なわれたこの読者人気投票では何も受賞していなかったが、すでにナンバーワン・シングルを2枚出していた実力を買われ、メイン・アクトに次ぐゲストとして出演することになった。ビートルズは、'Please Please Me' 'From Me To You' 'Twist And Shout' 'Long Tall Sally'の4曲を演奏。
ピガール・クラブでの夜の公演はちょっと趣が変わっていて、この夜の客はほとんどがユダヤ人だった。と言うのも、「ジューイッシュ・クロニクル」というユダヤ人向け週刊新聞にしか広告が載らなかったからである。ちなみに、流行の最先端をいくロンドン中心部にある、このレストラン兼ナイト・クラブへビートルズが出演したのはこの日だけだった。このクラブはのちにモッズお気に入りの店となった。

4月23日(火)
フローラル・ホール
Southport

4月24日(水)
マジェスティック・ボールルーム
Seven Sisters Rd, Finsbury Park, London

NEMSによるマージー・ビート・ショーケース。トップ・ランク社のこのボールルームは、ビートルズがのちに何度も出演することになるフィンズベリー・パークのアストリア・シネマの近くにあった。この夜は2,000人の観客が集まった。

4月25日(木)
フェアフィールド・ホール、ボールルーム
Park Lane, Croydon, Surrey

この日のマージー・ビート・ショーケースは、プロモーターのジョン・スミスがこの年の1月にアレンジしたものだった。その時点では、ビートルズにはヒット曲 'Please Please Me' もなかったし、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、ビリー・J・クレイマー、ビッグ・スリーもリバプール以外で知られていなかった。スミスは、2回のステージのうちどちらも客席が埋まらないのではないかと案じて、人気シンガーで俳優のジョン・レイトンをメインとして出演させる手配をしていた。ところが3か月後のこの日、レイトンは急に体調が悪くなり出演できなくなった。スミスが会場の入口にこのことを急告として貼り出すと、客からは大喝采が起こった。つまり、誰もがビートルズ目当てで、レイトンを見に来た客などひとりもいなかったのだ。

4月26日(金)
ミュージック・ホール
Shrewsbury

プロモーターのルイス・バックリーの依頼による2日連続公演の初日。

CamScannerでスキャン

休暇を前にひと仕事

4月27日(土)

(ビクトリー)メモリアル・ホール
Northwich

この公演が終わった翌日の4月28日、ポール、ジョージ、リンゴは12日間の休暇を過ごすため、カナリア諸島のテネリフェにあるサンタ・クルーズに旅立った。一方、ジョンとブライアン・エプスタインはスペインに飛んだ。

5月11日(土)

インペリアル・ボールルーム
Carr Road, Nelson, Lancashire

北部の工業の町にもビートルズ旋風が吹き荒れた。およそ2,000人の熱狂的なティーンエイジャーたちが、ビートルズを見ようと、大きなインペリアル・ボールルームに押しかけた。この日、アルバム"PLEASE PLEASE ME"が全英No.1を獲得。

5月12日(日)

アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston, Birmingham

アストンにあるスタジオで、ABCテレビの「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」の収録。ビートルズは初めてメイン・アクトとして出演した。この日の午後収録された番組は、6日後の5月18日の午後5時55分から6時35分に放送された。ビートルズはこの番組で初めて2曲も口パクした。曲目は'From Me To You'と'I Saw Her Standing There'。

5月14日(火)

リンク・ボールルーム
Park Lane, Sunderland, Durham

5月15日(水)

ロイヤルティ・シアター
City Road, Chester, Cheshire

この夜の公演でビートルズは、'Some Other Guy' 'Thank You Girl' 'Do You Want To Know A Secret' 'Please Please Me' 'You Really Got A Hold On Me' 'I Saw Her Standing There' 'From Me To You'を演奏。

2度目のBBCテレビは子ども番組

5月16日(木)

テレビジョン・シアター
Shepherd's Bush Green, London

BBCテレビへの2度目の登場は子ども番組「ポップス・アンド・レニー」への出演だった。ロンドン西部にあるテレビジョン・シアターで熱狂的な観客を迎えて繰り広げられ、そのもようは生放送された。このシリーズ番組は、「Oh don't embarrass me (困っちゃうなぁ)」という決まり文句を連発するレニー・ザ・ライオンという人形とそれをあやつるテリー・ホールが、ポップ・ミュージックを紹介するというものだった。

ビートルズは午後1時30分からのリハーサルに参加し、午後5時から5時30分までの放送で、'From Me To You'と'Please Please Me'のショート・バージョン(1分5秒)を演奏した。また、レギュラー・バンドのバート・ヘイズ・オクテット、さらにテリー・ホール、レインドロップス、パッツィ・アン・ノーブル、そしてもちろんレニー・ザ・ライオンといったほかのキャストとともに、フィナーレで'After You've Gone'を1分間演奏。この曲はクリーマー＝レイトンの手による(1929年)スタンダード・ナンバーで、数多くのアーティストがとりあげている。

5月17日(金)

グロブナー・ルームズ
Prince Of Wales Rd, Norwich, Norfolk

ロンドンのプロモーター、バリー・クレイマンを通じて4月半ばに交わした出演契約。出演料は250ポンドだった。

ロイ・オービソンとのパッケージ・ツアー開始

5月18日(土)

アデルフィ・シネマ
Bath Rd, Slough, Buckinghamshire

3か月のうちに、早くもビートルズ3回目の全英ツアーの初日。当初、ツアーのメインは、ビートルズが尊敬していたロイ・オービソンだったが、観客の要望により、まもなくビートルズが

メインを務めることになった。このツアーでのビートルズのレパートリーは、'Some Other Guy' 'Do You Want To Know A Secret' 'Love Me Do' 'From Me To You' 'Please Please Me' 'I Saw Her Standing There' 'Twist And Shout'。

5月19日(日)
ゴーモント・シネマ
Hanley

5月20日(月)
ゴーモント・シネマ
Commercial Rd, Southampton, Hampshire

翌21日はロイ・オービソンとのツアーのオフ日。

人気番組にメイン・ゲストとして出演
5月21日(火)
プレイハウス・シアター
London

BBCラジオの収録が2回分入ったため、せっかくのオフも、ビートルズにとっては休みどころではなかった。
最初の収録は「サタデイ・クラブ」で、ビートルズはこの人気番組に初めてメインとして出演した。午後2時30分からリハーサル、本番収録は午後5時30分から6時30分に行なわれた。番組は5月25日の午前10時から正午までの間に放送された。
司会のブライアン・マシューとのウイットに富んだやりとりのほかに、ビートルズは'I Saw Her Standing There' 'Do You Want To Know A Secret' 'Boys' 'Long Tall Sally' 'From Me To You' 'Money (That's What I Want)'の6曲を演奏。後半の3曲を含んだ最後の30分は、BBCの海外向け放送で同時放送された。
45分の休憩の間に夕食をとったビートルズは、今度は新番組「ステッピン・アウト」収録のため、プレイハウス・シアターに戻った。午後7時15分からリハーサル、午後10時から11時15分に本番収録。この番組は、6月3日の休日の午前10時31分から11時30分にBBCで放送された。冒頭で司会のディズ・ディズリーは次のようにビートルズを紹介した。
「さあて、これから登場します4人の若者は、なんとほんの数か月前に人跡未踏のマージーサイドから出てくるやいなや、ブリテン島最西端のランズエンドから最北端のジョンオグローツまで、イギリス中の会場で女の子をなぎ倒しにしてきた連中だから、しーっかり聴いてくれよ。地も揺るがすようなサウンドの、ビートルズだ!」
持ちあげたいのかばかにしたいのか、どちらともとれるこの表現の意味については置いておくとして、とにかく、ラジオやテレビのポップ番組でのしゃべりに関しては、こういった類のものがヒップだと考えられていたのだった。
ビートルズは熱狂的な観客を前に'Please Please Me' 'I Saw Her Standing There' 'Roll Over Beethoven' 'Twist And Shout' 'Thank You Girl' 'From Me To You'の6曲を演奏したが、放送では'Twist And Shout'はカットされた。

5月22日(水)
ゴーモント・シネマ
St Helen's Street, Ipswich, Suffolk

オービソンとのパッケージ・ツアーに合流。

5月23日(木)
オデオン・シネマ
Angel Row, Nottingham, Notts

『ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ』放送開始
5月24日(金)
エオリアン・ホール、第2スタジオ
New Bond St, London
グラナダ・シネマ
Hoe St, Walthamstow, London

ビートルズの急激な人気上昇を象徴するかのように、この日ロンドンの中心にあるBBCのエオリアン・ホールで、ビートルズ自身のラジオ番組シリーズ「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」が初めて収録された。ほんの1年前にはまだEMIでのレコーディングもわずかしかなく、これまでにナンバーワン・レコードを2枚出しただけの新人バンドがいきなり番組を持つなど、異例の成功と言うべきことだった。また、そんなグループを大抜擢したBBCにとっても、これは勇気のいる決断だった。
このシリーズは、BBCの軽音楽部門の若手スタジオ・マネ

CamScannerでスキャン

ージャー、バーノン・ローレンスの発案によるものだった。4月30日に部長補佐のドナルド・マクリーンにこの企画を提出したところ、マクリーンはこれを承認し、ローレンスに番組をまかせて制作を進めさせた（以後ローレンスは次々に要職に抜擢され、1991年にはヨークシャー・テレビの重役にまで昇進した）。わずか4週間のうちに、番組タイトル、収録日、放送日が決定し、プロデューサーのテリー・ヘンプリーに1回あたり100ポンドの予算が割りあてられた（しかしヘンプリーは、じつはジャズ狂いで、ポップスには大して興味がなかった）。

当初は4回分の制作が決定し、順調ならばさらに11回分制作することになった。フォーマットは当時のこの手の番組の典型で、レギュラーのビートルズが毎週BBCの選んだゲストを呼ぶというものだった。ただし、初回収録分を除き、ゲストとビートルズの収録は毎回別々に行なわれた。また、レギュラー司会者もいて、最初の4回はときどきDJもやっていた声優のリー・ピーターズが務めた。マイクから離れているときなど、ビートルズは彼のことを、ピー・リーターズ(Pee Litres:大量のおしっこ)と呼んでからかっていた。そのビートルズにピーターズもおふざけで応酬し、おかげでビートルズにも、番組中に気軽にジョークを飛ばし、ほどほどに素行の悪いところをみせ、リスナーからのリクエストや手紙をちゃかして読むだけの余裕ができた。番組は毎週火曜日、ポップ番組のゴールデン・タイムだった午後5時から5時29分に放送された。

また、番組タイトルのもとになった童謡'Pop Goes The Weasel'を、パトリック某氏が特別にロックふうにアレンジしたものが番組テーマ曲として用意された。ビートルズは第1回の収録でこの曲をレコーディングしたが、一説では、レコーディングにてこずったため第1回のゲストのローン・ギブソン・トリオに手伝ってもらったとも言われる。いずれにしても、このテーマ曲は毎回番組のオープニングとエンディングに必ず流された。オープニングでは20秒ほど、エンディングはそのときどきの都合によって長さが変わり、1分以上流されることもあった。

ビートルズとゲストのローン・ギブソン・トリオは午後2時から6時にかけて、リハーサルと6月4日放送分の番組収録を一緒に行なった。ビートルズは、'From Me To You' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Do You Want To Know A Secret' 'You Really Got A Hold On Me' 'Misery'、それに'The Hippy Hippy Shake'を演奏した。

BBCの視聴者調査部が初回放送分について行なった調査によると、聴取率は5.3パーセント、つまり、およそ200万人がこの番組を聴いたことになった。この数字は火曜日のこの時間帯としてはごく平均的なものだった。しかし、反応は熱狂的なファンの「すごくよかった」というものから「不愉快な騒音だった」という否定的なものまでさまざまで、まとめると、好意的だったのは全体の52パーセントと平均値を下まわり、予想以上に悪かった。

BBCでの収録を終えたあと、ビートルズはロイ・オービソンとのツアーに合流。ロンドン北部にあるウォルサムストーのグラナダ・シネマで、2回のステージをこなした。

5月25日（土）

シティ・ホール
Sheffield

5月26日（日）

エンパイア・シアター
Liverpool

ほぼ6週間ぶりの地元リバプールでの公演。ビートルズは急成長を続け、リバプールだけの存在ではなくなりつつあった。

5月27日（月）

キャピトル・シネマ
Dock St, Cardiff, Glamorganshire

5月28日（火）

ゴーモント・シネマ
Foregate St, Worcester, Worcs

5月29日（水）

リアルト・シアター
York

CamScannerでスキャン

デレク・テイラーがコンサート・レビューを書く

5月30日(木)

オデオン・シネマ
Oxford St, Manchester, Lancashire

この日のコンサートは「デイリー・エクスプレス」紙にレビューが掲載された。記事を執筆したのは、同紙で北部地方のショー・ビジネスを担当していたデレク・テイラー。彼はのちにブライアン・エプスタインの個人秘書となり、ビートルズおよびアップル・レコードの広報担当となる。

5月31日(金)

オデオン・シネマ
High St, Southend-on-Sea, Essex

6月1日(土)

BBCパリス・スタジオ
London
グラナダ・シネマ
Mitcham Rd, Tooting, London

またしても多忙な1日。BBCのラジオ・スタジオで8時間の収録をしたあと、ロイ・オービソンとのステージに2回出演した。BBCでは、「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」の第2回と第3回の放送分を収録した。おかしなことに、午前9時30分から午後1時30分にまず第3回の放送分が収録され、午後1時30分から5時30分に第2回の放送分が収録された(どちらもリハーサル時間を含む)。第3回のゲストはカーター・ルイス・アンド・サザナーズ、第2回のゲストはカントリーメン。ビートルズはこのシリーズ番組が始まる前、グループがまだ無名なころにライブでよくレパートリーにしていた曲をBBCの貴重な時間枠を使って放送すると発言していた。実際、1963年5月24日付の「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌には、「ビートルズは毎回5〜6曲を演奏する。リズム・アンド・ブルースの曲が中心となる予定」という紹介記事が掲載されていた。レノン=マッカートニーの楽曲も多少は披露したとはいえ、オリジナル・ナンバーをあまりアピールしなかったのはいかにもビートルズらしい着眼だった。演奏時間20〜25分、ヒット曲だけに制限されたそのころのコンサートで演奏できなくなってしまったナンバーを、イギリス全土のオーディエンスにも提供したかったのである。ビートルズの珠玉の演奏が貴重なスタジオ収録テープ(ほとんどが1テイクのみのライブ・レコーディング)としてかなり残っているのは、この方針のおかげだったのである。

6月18日の午後5時から5時29分放送の第3回分では、'A Shot Of Rhythm And Blues' 'Memphis, Tennessee' 'A Taste Of Honey' 'Sure To Fall (In Love With You)' 'Money (That's What I Want)' 'From Me To You'を演奏。

6月11日の午後5時から5時29分放送の第2回では、'Too Much Monkey Business' 'I Got To Find My Baby' 'Youngblood' 'Baby It's You' 'Till There Was You' 'Love Me Do'を演奏した。

6月2日(日)

ヒッポドローム・シアター
Middle St, Brighton, Sussex

6月3日(月)

グラナダ・シネマ
Powis St, Woolwich, London

6月4日(火)

タウン・ホール
Congreve St, Birmingham, Warwickshire

6月5日(水)

オデオン・シネマ
The Headrow, Leeds, Yorkshire

6月7日(金)

オデオン・シネマ
Renfield St, Glasgow, Lanarkshire

ビートルズはグラスゴーで計5回コンサートを行なっているが、この日が初めての公演。グラスゴーにはとくに熱狂的なファンが多かったため、いつも楽しんで演奏していた。

6月8日(土)

シティ・ホール
Newcastle-upon-Tyne

CamScannerでスキャン

6月9日(日)
キング・ジョージズ・ホール
Northgate, Blackburn, Lancashire

5月18日にスロウから始まったロイ・オービソンとのツアーの最終日。

6月10日(月)
パビリオン
North Parade, Bridge Rd, Bath, Somerset

チャリティ・コンサート出演

6月12日(水)
グラフトン・ルームズ
Liverpool

2月の時点で手配されていた慈善団体NSPCC(全国児童愛護会)のための特別チャリティ・コンサート。ビートルズは出演料なしで演奏した。このコンサートは、のちに保守党の政治家となる作家のジェフリー・アーチャーの協力のもとに催された。

6月13日(木)
パレス・シアター・クラブ
Turncroft Lane, Offerton, Stockport, Cheshire
サザン・スポーティング・クラブ
The Corona, Birch St, Hyde Rd, Manchester, Lancashire

非常にめずらしい2会場での公演。両会場は16キロほど離れていて、バラエティ演芸場とキャバレーふうナイト・クラブという取り合わせだった。

6月14日(金)
タワー・ボールルーム
New Brighton, Wallasey

NEMSエンタープライズ主催の恒例のマージー・ビート・ショーケース。ビートルズお気に入りのタワー・ボールルームへの最後の出演であり、センセーショナルなショーとなった。

6月15日(土)
シティ・ホール
Fisherton St, Salisbury, Wiltshire

ジェイビー・クラブ社との契約によるサプライズ出演。このプロモーターは歴史的に重要なステージになった1962年3月31日のストラウドでのショーを主催した会社。この日のショーは300ポンドという巨額の報酬と引き替えに、この年の4月に契約が交わされていた。しかし、ショーが近づくにつれ、エプスタインはこの会場ではビートルズがケガをするのではないかと不安になり、ジェイビー側に200ポンドのキャンセル料を申し出たが断られた。この日シティ・ホールには1,500人以上の観客がつめかけた。

チャートの上位3バンドが出演したコンサート

6月16日(日)
オデオン・シネマ
South St, Romford, Essex

最後のマージー・ビート・ショーケース。この日はジョン・スミスが主催した。この日の顔ぶれは、ポピュラー音楽史上おそらく二度とないような画期的なものだった。ビートルズ、ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタス、そしてジェリー・アンド・ペースメイカーズ。つまり、この日出演した3組のメイン・バンドが、その週のイギリスのシングル・チャートの1位、2位、3位を占めていたのである。マージー・ビート・ショーケースは、この日以降5回の公演が、6月17日から20日までと23日に計画されていた。しかし、ブライアン・エプスタインはそのすべてをキャンセルした。

6月17日(月)
メイダ・ベイル・スタジオ、第5スタジオ
Delaware Rd, London

とりあえず最終回にあたる第4回放送分の「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」の収録。アビイ・ロードのEMIスタジオに近いBBCのメイダ・ベイル・スタジオで収録された。午前10時30分から午後1時までリハーサルと収録を行なったあと、ビートルズはBBCの社員食堂で昼食をとった。そのあと、午前中からセッションとレストランでバンドの写真撮影をしていたカメラマンのデゾ・ホフマンとともにデラウェア・ロー

ドに出かけ、翌日21歳になるポールの誕生日にかこつけて遊びに繰り出した。

この日の収録でビートルズが演奏した曲は、'I Saw Her Standing There' 'Anna (Go To Him)' 'Boys' 'Chains' 'P.S. I Love You' 'Twist And Shout'。番組は6月25日の午後5時から5時29分に放送された。ゲストはバチェラーズ。

ポールのバースデイ・パーティーから仕事に直行

6月19日（水）
プレイハウス・シアター
London

このころのビートルズは毎日がてんてこまいの生活だった。2日前の17日にロンドンでBBCラジオの収録を終えると、メンバーはポールの21歳のバースデイ・パーティーに間にあうよう、リバプールまで車を走らせた。パーティーは18日の夕方、ハイトンにあるポールのおばの家の裏庭に大きなテントを張って開かれた。4人は数時間そこで過ごすと、もう翌日の夜の出番に間にあうようにロンドンに向かわなければならなかった（それだけ車の移動が大変だった）。午後8時45分から9時45分まで、プレイハウス・シアターの熱狂的な観客の前で、BBCの番組「イージー・ビート」の2度目の収録をするためだった。

この日の収録分は6月23日の午前10時31分から11時30分に放送された。ビートルズは、'Some Other Guy' 'A Taste Of Honey' 'Thank You Girl' 'From Me To You'を演奏。

6月21日（金）
オデオン・シネマ
Epsom Rd, Guildford, Surrey

ジョンだけ出演した番組『ジューク・ボックス・ジュリー』

6月22日（土）
テレビジョン・シアター
London
タウン・ホール、ボールルーム
Cross St, Abergavenny, Monmouthshire

ジョージ、ポール、リンゴはロード・マネージャーのニール・アスピノールとともにバンでウェールズに向かったが、ジョンはBBCのテレビ番組「ジューク・ボックス・ジュリー」の収録があったのでロンドンに残った。当時絶大な人気のあったこの番組は、ニュー・シングルを聴いて、ヒットすると思えばベルを鳴らし、ヒットしないと思えばクラクションを鳴らして審査するという内容だった。

この日の収録分は次の土曜日、6月29日の午後6時35分から7時に放送された。司会は愛想のよいDJデビッド・ジェイコブズ。4人の審査員は、毎回ショー・ビジネスの異なる分野で活躍する人物がそれぞれ選ばれることになっていた。したがって、この日ジョンと一緒に審査員として出演したのも、テレビ司会者のキャサリン（ケイティ）・ボイル、俳優のブルース・プロクニック、そして女優のキャロライン・モードリングという顔ぶれだった。

案の定、ジョンの発言は周囲の人々の度胆を抜き、スタジオはどよめいた。審査員はそれまで、どちらかといえば肯定的で痛くもかゆくもないコメントを出すのがふつうだったのに、ジョンは何のためらいもなく、どのシングルについてもダメとはっきり言ってしまったからだ。この日対象となった曲は、クレオ・レインの'Southend'、タイムズの'So Much In Love'、エルビス・プレスリーの'Devil In Disguise'（ジョンはかつての自分のアイドル、エルビスについてでさえ、まるでビング・クロスビーだと発言）、ミリアム・マケバの'The Click Song'、トム・グレイザーの'On Top Of Spaghetti'、ラス・コンウェイの'Flamenco'、ポール・アンド・ポーラの'First Quarrel'、ジュリー・グラントの'Don't Ever Let Me Down'だった。ジョンが全曲こきおろしたため、ほかの審査員たちもエルビス以外についてはすべてクラクションを鳴らした（ジョニー・サンドン・アンド・レモ・フォーの'Lies'、リチャード・アンソニーの'Too Late To Worry'、ドリス・トロイの'Just One Look'も審査されたが放送ではカットされた。サンドン・アンド・レモ・フォーはビートルズと同じ世代で、リバプール出身のグループ。ドリス・トロイはのちにビートルズのアップル・レコードと契約する）。

「ジューク・ボックス・ジュリー」の収録で、ジョンはかなり遅くまでロンドンに足止めを食らった。午後7時45分から8時までカメラ・リハーサル、午後8時から8時30分までサウンドと映像のテスト、そして午後8時30分から本番が始まって9時15分にやっと終わった。そのあとジョンは大急ぎでバタ

CamScannerでスキャン

ーシー・ヘリポートに向かい、エプスタインが100ポンドでチャーターした専用ヘリコプターでウェールズに飛んだ。午後9時50分にアバーガベニーのペニーパウンド・フットボール・グラウンドに到着したジョンは、すべり込みで250ポンドで契約したショーに間にあった。

リバプール・バンドの特集番組に出演

6月23日(日)

アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston, Birmingham

この翌年、つまり1964年2月になると、ビートルズのセンセーショナルな成功は、北米のレコード・マーケットのよろい戸を開けて、大勢のイギリスのグループにアメリカでヒットを出すチャンスをもたらすことになる。

同様に、1963年の夏の時点では、ビートルズのセンセーショナルな成功はイギリスのレコード・マーケットにおいて、リバプール出身のバンドにヒット・メイクのチャンスを与えていた。事実、当時のイギリスのヒット・チャートでは、ジェリー・アンド・ペースメイカーズ、ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタス、フォアモスト、サーチャーズなどリバプール出身のグループが目白押しだった。さらに、シラ・ブラックなどの有望な歌手も控えていた。このマージービート・ブームを祝って、ABCテレビの番組「ラッキー・スターズ(サマー・スピン)」(「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」の夏版タイトル)の番組枠まるまる1回分を使って、リバプール出身グループ特集が企画された。司会にはレギュラーのブライアン・マシューではなくピート・マレーが選ばれた。番組はこの日の午後に収録され、6月29日の午後6時5分から6時45分にITV系列局のほとんどで放送された。600万人以上がこの番組を観たが、最後の10分間はジョンが出演したBBCの「ジューク・ボックス・ジュリー」とかちあってしまい、ビートルズ・ファンはジレンマでイライラさせられた。

メインのビートルズは番組のいちばん最後に登場し、'From Me To You'と'I Saw Her Standing There'を口パクした。

6月24日(月)

プレイハウス・シアター
London

6月29日の午前10時から正午に放送されるBBCラジオ番組「サタデイ・クラブ」の収録に参加。

ロンドンのプレイハウス・シアターで、午後2時30分からのリハーサルのあと、午後5時30分から6時30分に番組の収録が行なわれた。ビートルズは、'I Got To Find My Baby' 'Memphis, Tennessee' 'Money (That's What I Want)' 'Till There Was You' 'From Me To You' 'Roll Over Beethoven'を演奏。最後の2曲は番組のラストに放送され、海外向けにも同時放送された。

6月25日(火)

アストリア・ボールルーム
Wilson St, Middlesbrough, Yorks

ホテルで'She Loves You'を作曲

6月26日(水)

マジェスティック・ボールルーム
Newcastle-upon-Tyne

トップ・ランク社のこのボールルームへの最後の出演。ただし、同社の各地の劇場やシネマには出演を続けた。

公演のあと、ジョンとポールはニューカースル・ホテルの部屋で、次のシングルのA面となる'She Loves You'を書いた。

6月28日(金)

クイーンズ・ホール
Sovereign St, Leeds, Yorkshire

3,200人の観客がビートルズを見るために広いクイーンズ・ホールにつめかけた。共演者はアッカー・ビルク・アンド・ヒズ・パラマウント・ジャズ・バンド。

6月30日(日)

ABCシネマ
Regent Rd, Gt Yarmouth, Norfolk

海辺のリゾート地での10週間にわたる公演の初日。この

CamScannerでスキャン

夜ビートルズは、'Some Other Guy' 'Thank You Girl' 'Do You Want To Know A Secret' 'Misery' 'A Taste Of Honey' 'I Saw Her Standing There' 'Love Me Do' 'From Me To You' 'Baby It's You' 'Please Please Me' 'Twist And Shout'を演奏した。司会はテッド・ロジャーズ。

'She Loves You'のレコーディング

7月1日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

前週の水曜日にニューカースル・アポン・タインで書いた'She Loves You'を、EMIスタジオでの345分におよぶセッションでレコーディング。この曲はビートルズ初のミリオン・セラー・シングルとなり、「yeah yeah yeah」というキャッチフレーズは、メディアにとってなくてはならない常套句にさえなった。セッションでは、このシングルのB面に収録された'I'll Get You'もレコーディングした(この時点でのタイトルは'Get You In The End'だった)。

当初は午後2時30分から5時30分にセッションが予定されていたが、実際には午後5時から10時45分に行なわれた。現存するEMIのセッション記録には、この2曲のテイク数は記されていない。

シングル'She Loves You'は8月23日にEMIから発売された。イギリスでは、9月3日に売り上げ50万枚を突破し、11月27日にミリオン・セラーを記録した。また、このシングルはナンバーワンを2回獲得するという離れ業をやってのけた。最初に4週間トップの座を占めたあと、7週間2位、3位にとどまり、再び2週間トップに返り咲いたのだ。

『ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ』続行

7月2日(火)

メイダ・ベイル・スタジオ、第5スタジオ
London

『ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ』は最初の4回の反響が上々だったため、BBCはさらに11回分の放送を収録することにし、合計15回の番組となった。追加収録が決まったこの番組は、放送終了から2週間の間をおいて再開され、リー・ピーターズに代わり、新しくロドニー・バークが司会になった。ビートルズはあいかわらず司会者の名前を冗談の対象にしてもてあそんだ。リー・ピーターズの場合はあくまでも録音していないときにピー・リーターズと呼んでからかっていたのだが、今度は本番の冒頭でバークが「私ロドニー・バークです」と自己紹介すると、ジョンはいきなり「うそつけ!」と声を張り上げたのだ(バークは芸名だった)。

ビートルズはこの日、7月16日の午後5時から5時29分に放送する第5回を収録した。リハーサルと収録は午後6時30分から9時30分にメイダ・ベイル・スタジオで行なわれた。音楽的な多様性という点から見れば、この日のビートルズ自身の収録内容にたちうちできるBBCラジオ出演はほかにない。エルビス・プレスリーの'That's All Right (Mama)'のカバーで始まり、オリジナル曲'There's A Place'、チャック・ベリーの'Carol'、アーサー・アレキサンダーの'Soldier Of Love (Lay Down Your Arms)'、カール・パーキンスの'Lend Me Your Comb'、ザ・ジョディマーズの'Clarabella'といった具合だ。加えて、コースターズの'Three Cool Cats'、チャック・ベリーの'Sweet Little Sixteen'、オリジナルの'Ask Me Why'も収録したが、これらは放送には使用されなかった。

第5回目のゲストはダフィ・パワー・ウィズ・グレアム・ボンド・カルテット。

7月3日(水)

プレイハウス・シアター
Manchester

この日のBBCラジオ番組「ザ・ビート・ショー」の収録は、1962年にビートルズが初めて「ヒア・ウィ・ゴー」に出演したときと同じ収録会場、つまり、マンチェスターのプレイハウス・シアターで行なわれた。じつは「ザ・ビート・ショー」は、「ヒア・ウィ・ゴー」とほとんど同じ内容で、出演者のバーナード・ハーマン率いるBBCノーザン・ダンス・オーケストラとトラッド・ラッズも同じだった。違っていたのはプロデューサーと司会のゲイ・バーンだけである。バーンは、ビートルズが出演したことのあるグラナダ・テレビの番組「シーン・アット6:30」でも司会を担当する、愛想のよい司会者だった。

午後4時からリハーサルを開始し、番組は午後8時から9時に、観客の前で収録された。ビートルズは、'From Me To You' 'A Taste Of Honey' 'Twist And Shout'を演奏。番組は翌7月4日の午後1時から1時30分に放送された。

CamScannerでスキャン

このころになると、エプスタインはビートルズがテレビやラジオに露出しすぎではないかと憂慮していた。そして、そろそろ番組をじっくり選んでもよいステイタスを得ているはずだという判断から、いくつかのBBCのラジオ契約を断っている。この日の「ザ・ビート・ショー」への出演も、6月17日、18日、そして7月3日の「ヒア・ウィ・ゴー」への出演を断ったあとに実現したものだった。またエプスタインは、7月2日、7月10日、8月23日に予定されていた「サイド・バイ・サイド」への出演もキャンセルしている。

ピーター・アッシャーとの交流

7月4日(木)

EMI スタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から午後1時まで、ジョージ・マーティンにより'She Loves You'と'I'll Get You'のモノ・ミックスが作られた。
ビートルズはおそらくスタジオには姿を現していない。しかし、その夜ソーホーのシーン・クラブに顔を出し、ローリング・ストーンズのライブを再び観ていることから、ロンドンにいたことは確かだ。この日は、ジェーン・アッシャーの兄で、のちにピーター・アンド・ゴードンというデュオとして成功するピーター・アッシャーも一緒に行動していた。

デニー・レインと共演したコンサート

7月5日(金)

プラザ・ボールルーム
Old Hill

この会場に出演するのは2度目。かなり以前に出演が決まっていて、エプスタインとしてはキャンセルしたかったであろうが、契約どおり実施された。
この日の共演者は、地元のコンボ、デニー・レイン率いるデニー・アンド・ディプロマッツ。デニーはのちにムーディー・ブルースのメンバーとなり、ポールがビートルズ解散後に結成したウイングスに加入した。

7月6日(土)

(ビクトリー)メモリアル・ホール
Northwich

この夜のステージの前に、ビートルズの4人はノースウィッチのバーディン・パークで行なわれた年1回のノースウィッチ・カーニバルに参加し、会場を大混乱に巻き込んだ。ポールは、新しく選ばれたカーニバル・クイーンに王冠を授けるという大役もあった。もちろんPRとしては大成功。

7月7日(日)

ABCシアター
Church St, Blackpool, Lancashire

この日の公演と、以降2か月間にこの会場で行なわれたビートルズの4公演の司会は、映画"CARRY ON"に出演した俳優のジャック・ダグラスが務めた。

7月8日(月)〜13日(土)

ウィンター・ガーデンズ
Fort Crescent, Margate, Kent

7月10日(水)

エオリアン・ホール、第2スタジオ
London

マーゲイト公演は1日2ステージの6夜連続の出演契約になっていた。演奏曲は、'Roll Over Beethoven' 'Thank You Girl' 'Chains' 'Please Please Me' 'A Taste Of Honey' 'I Saw Her Standing There' 'Baby It's You' 'From Me To You' 'Twist And Shout'。
しかし、BBCラジオの「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」の収録があったため、この連続公演の途中の7月10日の朝早くロンドンに向かった。7月23日と30日の午後5時から5時29分に放送の2回分を収録。第6回分は午前10時30分から午後1時30分に、第7回分は午後1時30分から3時30分に、リハーサルと収録が行なわれた。そのあとメンバーは、1回目のステージに間にあうよう、マーゲイトのウィンター・ガーデンズに大急ぎで戻った。
第6回放送分でビートルズが演奏した曲は、'Sweet Little Sixteen' 'A Taste Of Honey' 'Nothin' Shakin' (But The Leaves On The Trees)' 'Love Me Do' 'Lonesome Tears In My Eyes' 'So How Come (No One Loves Me)'。
第7回放送分では、'Memphis, Tennessee' 'Do You Want To Know A Secret' 'Till There Was You' 'Matchbox' 'Please Mister Postman' 'The Hippy

Hippy Shake'を演奏した。
ゲストは第6回がカーター・ルイス・アンド・サザナーズで、第7回がサーチャーズだった。

7月14日(日)
ABCシアター
Blackpool

1日で3回分の番組収録

7月16日(火)
BBCパリス・スタジオ
London

ビートルズのメンバーと、BBCのスタッフたちのスタミナ勝負とも言える1日。この日1日で、ビートルズは「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」を3回分収録した。
パリス・スタジオで、午後3時から5時30分に第8回放送分、午後6時から8時30分に第9回放送分、そして午後8時45分から10時30分に第10回放送分のリハーサルと収録が行なわれた。各回は、それぞれ8月6日、13日、および20日の午後5時から5時29分にBBCで放送された(ゲストはそれぞれ、スウィンギング・ブルー・ジーンズ、ホリーズ、ラス・セインティ・アンド・ニューノーツ)。
しかし、この日のスケジュールが強行軍になってしまったのはビートルズ自身の責任だった。というのも、ロンドンのプレイハウス・シアターで収録を開始するはずだったこの日の午前10時30分の約束に遅れてしまったからだ。加えて、翌17日も午前10時から午後1時にプレイハウス・シアターで別番組の収録が予定されていたため、この日のうちに場所を変えて3回分の収録を済ませてしまおうと考えたのが原因だった。
第8回放送分でビートルズが演奏したのは、'I'm Gonna Sit Right Down And Cry (Over You)' 'Crying, Waiting, Hoping' 'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!' 'To Know Her Is To Love Her' 'The Honeymoon Song' 'Twist And Shout'。
第9回放送分での演奏曲は、'Long Tall Sally' 'Please Please Me' 'She Loves You' 'You Really Got A Hold On Me' 'I'll Get You' 'I Got A Woman'。
第10回放送分での演奏曲は、'She Loves You'(放送では第9回放送分として収録されたバージョンが使用された)'Words Of Love' 'Glad All Over' 'I Just Don't Understand' '(There's A) Devil In Her Heart' 'Slow Down'。
1963年2月11日に、ビートルズがデビュー・アルバム用の10曲全曲をEMIでわずか1日でレコーディングしたのは、ポピュラー音楽史上に残る業績として語り継がれている。しかし、この日の仕事ぶりもすばらしいものだった。デビュー・アルバム制作のときより短い時間のうちに18曲ものニュー・トラックを、1回リハーサルしただけで収録し、さらにその時間内に司会者との会話もかなり録音しているのである。

7月17日(水)
プレイハウス・シアター
London

この日もBBCラジオの収録。番組は、7月21日の午前10時31分から11時30分にBBCで放送されるポップ番組「イージー・ビート」。午後8時45分から9時45分、いつものようにティーンエイジャーの観客を前に収録され、ビートルズは、'I Saw Her Standing There' 'A Shot Of Rhythm And Blues' 'There's A Place' 'Twist And Shout'の4曲を演奏した。

セカンド・アルバムのレコーディング開始

7月18日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

EMIの第2スタジオでセカンド・アルバムのレコーディング・セッションの開始。当初の予定では、この日のセッションは午後6時から10時までだったが、午後7時から10時45分に行なわれた。'You Really Got A Hold On Me'(11テイク)、'Money (That's What I Want)'(7テイク)、'(There's A) Devil In Her Heart'(6テイク)、'Till There Was You'(3テイク)の4曲のカバー・バージョンをレコーディングした。
このセカンド・アルバム(タイトルはまだ未定)のレコーディング・セッションでは、ビートルズがレコーディング・アーティストとして着実に成長していることが顕著に現れてきていた。とくにスモーキー・ロビンソン・アンド・ミラクルズの'You

Really Got A Hold On Me'のカバーは、原曲をみごとに消化したすばらしい出来栄えとなっている。

7月19日(金)および20日(土)

リッツ・ボールルーム
Promenade, Rhyl, Flintshire

1年前には、ライルのバートンズ・テイラー・ショップの階上にあるボールルームに出演して、ウェールズでの悲惨なデビューを味わったビートルズ。しかし、ウェールズ北部での2回目の2日間の出演は、みごとに完璧だった。土曜の2回目のステージを終えると、ビートルズはすぐにリバプールに戻った。

7月21日(日)

クイーンズ・シアター
Bank Hey St, Blackpool, Lancashire

デゾ・ホフマンと海岸でフォト・セッション

7月22日(月)〜27日(土)

オデオン・シネマ
The Centre, Weston-super-Mare, Somerset

6日間にわたるこの公演の最中、ロンドンからカメラマンのデゾ・ホフマンがやってきて、ビートルズとともに1日を過ごした。ホテルでの4人の姿や、宿泊地の近くのグリーン・ダウン海岸でビクトリア調の水着に身を包んだ姿や、ゴーカートで遊んでいる様子を、カメラとカラー8ミリ(無音声)で撮影した。

7月28日(日)

ABCシネマ
Great Yarmouth

7月30日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London
プレイハウス・シアター
London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

途中BBCの収録をはさみ、EMIスタジオで朝と夜の2回にわたってのセカンド・アルバム用のレコーディング。
最初のセッションは午前10時から始まった。まず、マーベレッツの'Please Mister Postman'を9テイクで完成させ、続いてこのアルバムの1曲目のレノン=マッカートニー・ナンバーとなる名曲'It Won't Be Long'に挑戦。10テイクをレコーディングするが未完成に終わる。このセッションは予定より30分遅く、午後1時30分に終了した。
午後はBBCラジオ番組の収録を2回分行なった。最初は、8月30日の午後5時から5時29分に放送される「ノン・ストップ・ポップ」のなかの「ポップ・チャット」コーナー用のインタビュー。もうひとつは、8月24日の午前10時から12時に放送される「サタデイ・クラブ」。
「ノン・ストップ・ポップ」用の短いインタビューは、ビートルズが「サタデイ・クラブ」のリハーサルと収録のためにプレイハウス・シアターに到着した直後の午後2時30分すぎに、バンド指揮者のフィル・テートが行なった。
予定では「サタデイ・クラブ」の収録は午後5時30分から6時30分だったが、インタビューが終わるとすぐに開始された。ビートルズは、'Long Tall Sally' 'She Loves You' 'Glad All Over' 'Twist And Shout' 'You Really Got A Hold On Me' 'I'll Get You'の6曲を演奏。最後の3曲は番組のラストで放送され、BBCの海外放送で同時放送された。
午後5時からEMIスタジオに戻り、セッションを再開。ジョージ・マーティンが'Money (That's What I Want)'にピアノをオーバーダビングし、ビートルズは'Till There Was You'のリメイクを5テイク、チャック・ベリーのクラシック・ロック'Roll Over Beethoven'を8テイク、レコーディングした。さらに、'It Won't Be Long'をテイク23までレコーディング。最後に、この時点でポールが書いたもっともすぐれた、多様性をも持ち合わせたナンバー'All My Loving'を13テイク、レコーディングした。セッションは予定より1時間延びて午後11時に終了した。

7月31日(水)

インペリアル・ボールルーム
Nelson

またしても大騒動のショーとなった。

8月1日(木)
プレイハウス・シアター
Manchester

8月27日と9月3日の午後5時から5時29分に放送されたBBCの「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」の第11回と第12回の放送分を収録(ゲストは、第11回がロング・ジョン・ボールドリーをフィーチャーしたシリル・デイビーズ・リズム・アンド・ブルース・オール・スターズ、第12回がブライアン・プール・アンド・トレメローズ)。

収録はマンチェスターのプレイハウス・シアターで行なわれた(この番組での慣例どおり観客はなし)。ビートルズは正午に到着してリハーサルを開始し、午後1時30分から4時まで第11回放送分、午後4時から6時に第12回放送分を収録した。

第11回分でビートルズが演奏した曲は、'Ooh! My Soul' 'Don't Ever Change' 'Twist And Shout' 'She Loves You' 'Anna (Go To Him)' 'A Shot Of Rhythm And Blues'。

第12回分は、'Lucille' 'From Me To You' 'I'll Get You' 'Money (That's What I Want)' 'Baby It's You' 'There's A Place' 'Honey Don't' (ボーカルはジョン)、'Roll Over Beethoven'。'Lucille'と'Baby It's You'は実際の放送ではカットされた。

8月2日(金)
グラフトン・ルームズ
Liverpool

7週間ぶりのマージーサイド。ビートルズがグラフトンに出演するのはこれが最後。

キャバーン・クラブ最後の出演
8月3日(土)
夜:キャバーン・クラブ
Liverpool

およそ2年半にわたり、ビートルズが300回近くも出演したキャバーン・クラブへの最後の出演。キャバーン・クラブはビートルズが成功をつかむのに非常に重要な存在だった。そしてビートルズはついにその成功を手にした。キャバーン・クラブのDJを務めていたボブ・ウーラーによると、エプスタインは、いつかきっとビートルズはここに戻ってくると約束したという。

この日のチケットは7月21日の午後1時30分から発売され、午後2時には売り切れた。出演料は300ポンドだったが、ビートルズが初めてこのクラブに出演したときのギャラは、たったの5ポンドだった。

8月4日(日)
クイーンズ・シアター
Blackpool

クイーンズ・シアターの入口は表も裏も大勢のファンでふさがれていた。ビートルズは仕方なく隣接する建築現場に入り、足場の骨組みを上って会場の屋根に渡り、天井裏から舞台そでに下りてこなければならなかった。

8月5日(月)
アームストン・ショー
Abbotsfield Park, Chassen Road, Urmston, Lancashire

年に1度、公休日に行なわれるマンチェスター南部のイベントに出演。巨大なテントの中で演奏するというおもしろい公演となった。ビートルズは4組の出演者のメインとして演奏。司会はデビッド・ハミルトン。

8月6日(火)および7日(水)
スプリングフィールド・ボールルーム
Janvrin Rd, St Saviour, Jersey, Channel Islands

ジョン・スミス主催によるジャージー島公演計4回のうちの前半2回。ビートルズはチャネル諸島での5夜にわたる公演で1,000ポンドを稼いだ。

8月8日(木)
オーディトリアム
Candie Gardens, Candie Rd, St Peter Port, Guernsey, Channel Islands

ビートルズは定員12名の小型飛行機に乗り、ジャージーから50キロほど離れたガーンジー島に向かった。機材はフェリーで運ばれた。

8月9日(金)および10日(土)
スプリングフィールド・ボールルーム
St Saviour, Jersey

ジャージー島に戻り、火曜日から土曜日までのチャネル諸島での最後の2回の出演をこなす。

8月11日(日)
ABCシアター
Blackpool

8月12日(月)〜17日(土)
オデオン・シネマ
Gloddeath Ave, Llandudno, Caernarvonshire

8月14日(水)
グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester

ウェールズ北部での6夜連続2ステージずつという公演中、2日目の公演を終えたビートルズはその夜のうちにリバプールに戻り、翌朝、マンチェスターのグラナダ・テレビ・センターに車で向かった。いつものスーツ姿ではなく、黒のタートル・ネック・セーターにジーンズというかっこうで、グラナダ・テレビの北部向けニュース番組「シーン・アット6:30」のために2曲を演奏。
1曲目は'Twist And Shout'で、この日の午後6時30分から7時に放送。2曲目は'She Loves You'で、8月19日の同時間帯に放送された。
収録を終えたビートルズは急いでウェールズに戻り、ランダドノーでの2回のステージに出演した。

8月18日(日)
アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston, Birmingham
プリンセス・シアター
Torbay Rd, Torquay, Devonshire

ウェールズのランダドノーから、ステージ2回の約束のあるトルケーに移動する途中、バーミンガムのアストンにあるアルファ・テレビジョン・スタジオへ。昼前にスタジオに到着したビートルズは、ABCテレビの番組「ラッキー・スターズ(サマー・スピン)」のリハーサルと収録を行なった。司会はピート・マレー。番組は8月24日の午後6時5分から6時45分までほぼ全国的に放送。ビートルズは次のシングルの収録曲'She Loves You'と'I'll Get You'を口パクした。

ロバート・フリーマンがアルバム・ジャケットを撮影
8月19日(月)〜24日(土)
ゴーモント・シネマ
Westover Rd, Bournemouth, Hants

ボーンマスで6夜連続2ステージずつの公演。この期間中、カメラマンのロバート・フリーマンがビートルズの滞在していたホテル、パレス・コートを訪れ、次のアルバム"WITH THE BEATLES"のジャケットとなる、顔の半分が影に隠れた写真を撮影した。

8月21日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ロンドンのEMI スタジオでニュー・アルバムの収録曲の編集とモノ・ミックスが行なわれていた。曲は'(There's A) Devil In Her Heart' 'Money (That's What I Want)' 'You Really Got A Hold On Me' 'Please Mister Postman' 'Till There Was You' 'Roll Over Beethoven' 'All My Loving' 'It Won't Be Long'。作業は午前10時から午後1時と午後2時から5時30分に行なわれた。確かな証拠はないが、ビートルズのメンバーも最初のセッションと午後のセッションの一部に参加した可能性はある。いずれにしても、4人は夕方にはボーンマスの会場に向かったはずだ。

8月22日(木)
サザン・インディペンデント・テレビジョン・センター
Northam, Southampton, Hampshire

22日の木曜日の昼ごろ、ビートルズはサザン・テレビジョンのサウサンプトン・スタジオを訪れた(カメラマンのフリーマンも同行)。この日の午後5時55分から6時40分に放送された地元局のニュース番組「デイ・バイ・デイ」の収録のために'She Loves You'を口パクした。

CamScannerでスキャン

8月25日(日)
ABCシアター
Blackpool

8月26日(月)〜31日(土)
オデオン・シネマ
Southport

リバプールから海岸沿いに少しばかり北上したところにあるサウスポートで、ひと晩2ステージずつの6夜連続公演。演奏曲は、'Roll Over Beethoven' 'Thank You Girl' 'Chains' 'A Taste Of Honey' 'She Loves You' 'Baby It's You' 'From Me To You' 'Boys' 'I Saw Her Standing There' 'Twist And Shout' だった。

ドキュメンタリー番組『ザ・マージー・サウンド』

8月27日(火)〜30日(金)
サウスポート、マンチェスターおよびリバプールの撮影ロケ地
Southport, Manchester, and Liverpool

上記の公演期間中の27日から30日まで、BBCテレビのマンチェスター支局のプロデューサー、ドン・ハワースが「マージービート」ブームの核心とその空気を、社会的な側面から掘り下げる30分のドキュメンタリー番組を制作するため、さまざまなロケ地でビートルズを撮影した。ハワースは、ブライアン・エプスタインとの打ち合わせののち、7月21日にビートルズに会い、制作内容について話し合った。その席でハワースは、通常のポップ番組の軽い調子ではなく、もっとまじめに君たち自身について語る機会を提供すると約束したが、これをビートルズの面々が望んでいたことは言うまでもない。8月6日に再びエプスタインと打ち合わせしたあと、ハワースは正式な出演契約を交わした。そのためビートルズは、同時期にITVのアソシエイテッド・レディフュージョンが企画していた、同じくマージービートについて扱ったドキュメンタリー番組「ビート・シティ」には出演できなくなった(「ビート・シティ」はハワースの番組ほどシリアスではなかったが、徹底した取材に基づいていたという点では遜色ない作品だった)。

最初の撮影は、8月27日の午前9時30分から行なわれた。番組にはビートルズの演奏シーンが必要だったが、実際の公演の大混乱のなかで撮影することは不可能だった。そこでハワースは、サウスポートのホートン・ストリートにあるリトル・シアターを借り切り、ビートルズは観客のいない会場のステージで演奏した。この映像には編集段階で、前夜のオデオン・シネマでのビートルズの公演で撮影された熱狂的な観客の様子が挿入された。撮影では、ビートルズはその当時おなじみの服だったグレーのえりなしスーツを着て、'Twist And Shout'と'She Loves You'を演奏。次に、黒のえりなしスーツに着替え、別のステージに見せかけるために背後にカーテンをひき、'Love Me Do'を演奏。しかし演奏の映像に、のちにレコードの音声がダビングされ、実際の演奏は使用されていない。

8月28日、やはり午前9時30分から、今度はマンチェスターのディッケンソン・ロードにあるBBCの建物内の楽屋で撮影。4人は、自分たちの過去のこと、成し遂げたいと思うこと、将来の希望などについて率直に、しかも現時点でのブームが長続きするわけがないということを踏まえながら語った。また、前日に収録済みのライブ・ステージにいかにもこれから出演するといった様子でメイクアップしている風景や、あたかもこれからBBCテレビに出演するといった様子でギターを持って楽屋を歩き回るシーンなども撮影された。

8月29日には、リバプールのピア・ヘッドとワラシーを往復するフェリー・ボートに乗り、サインをしているシーンや船首から景色を眺めているシーンを撮影。さらにリバプール南部のスピーク空港に行き、飛行機のタラップを下りて空港に到着したシーンを撮影した。

8月30日の撮影は、リバプールのアドミラル・グローブ10番地にあるリンゴの自宅の外で行なわれた。リンゴが玄関から出てきて、通りにいる大勢の子どもたちに取り囲まれながら通りを歩き、ジョージのオープンカーに乗り込むシーンを撮影。その車は後部のトランクの上に子どもたちを乗せたまま走り去る(ジョンとポールもこの撮影に同行したが、このシーンには参加していない)。続いてリンゴ単独のシーン撮影。美容師になりたかったというリンゴの日ごろの希望をかなえるため、リバプール中心部のロード・ストリートにあるホーン・ブラザーズ洋服店の中に併設されている美容サロンに行き、ずらりと並んだパーマ用のヘアドライヤーをセットして腰かけている女性の前を歩くというシーンが撮影された。

CamScannerでスキャン

番組制作中の仮タイトル「ザ・ビートルズ」は、内容をよりま
確に反映するため、放送に先立って「ザ・マージー・サウ
ンド」に変更された。番組には、ビートルズだけでなくマー
ジービートにまつわるリバプールの多数のグループや関係
者の映像、あるいはインタビューも含まれていたからだ。こ
の番組は1963年10月9日の午後10時10分から10時40分
に初めて放送された。初回放送はロンドンと北部地域に限
られていたが、11月13日には午後7時10分から7時40分に
かけて全国放送された。初回放送の10月9日という放送
スケジュールは、ビートルズが主演したATV局のバラエテ
ィ・ショー「バル・バーネルズ・サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロ
ンドン・パラディアム」のわずか4日前だったため、ATVの
幹部らは腹を立て、ブライアン・エプスタインに対してもあか
らさまに怒りをぶつけた。
しかし、「ザ・マージー・サウンド」は、するどい観点で制作
されたドキュメンタリー作品として、視聴者からも批評家か
らも好評だった。番組全編コピーの請求申請も少なくとも
2件あり、1件はリバプール市で保管するためにというリバ
プール市長からのもので、もう1件はロンドンにあるナショナ
ル・フィルム・アーカイブからのものだった。また、以後世界
各国で制作されたさまざまな番組やドキュメンタリーに、こ
の番組からの抜粋フィルムが使用されている。さらに、番
組でのビートルズの語りの部分が、1963年10月11日のBBC
ホーム・サービスの番組「ピック・オブ・ザ・ウイーク」(午後
1時10分から2時に放送、10月12日午後3時10分から4時
に再放送)と、10月12日のノース・オブ・イングランド・ホーム・
サービスの番組「ザ・ウイーク・イン・ザ・ノース」(午前9時
30分から9時50分)で放送されている。
「ザ・マージー・サウンド」からの抜粋放送は、1964年1月
にも1回あったが、これはビートルズにとって非常に重要な
放送となった。というのは、この放送はニュース以外で初
めてビートルズがアメリカのテレビに登場する機会となった
からだった(1963年11月16日参照)。ことの起こりは、BBC
のニューヨーク支局がアメリカのNBCテレビの「ザ・ジャッ
ク・パール・ショー」に'She Loves You'のクリップを売
ったことだった。この事実を知ったエプスタインは、ビートル
ズがパールの番組に出てしまうと(この時点で締結されて
いた)CBSテレビのライバル番組「エド・サリバン・ショー」
との独占契約に触れてしまうと激怒した(といっても、実際
には契約違反にはならないのをエプスタインは知っていた)。

エプスタインの怒りが公になると、イギリス内外から
対する抗議の手紙やテレックス、電話が殺到し、BBC
死でこのクリップを取り戻そうとNBCと折衝を続けた
かし、パールはいっさいとりあわず、これを1月3日の自分の
番組(午後10時から11時、アメリカ東部標準時間(
EST))で放送してしまった。怒り狂ったエプスタインは
いかにも彼らしく、今後BBCの番組にビートルズを出演さ
せないと脅しをかけたが、これはBBCだけでなくビートル
ズにも不利を招くと判断し撤回。クリップの売却料は
ドももちろん受け取った。
一方、「エド・サリバン・ショー」でのアメリカ・デビューにこ
だわったエプスタインの狙いをよそに、パールが放送した
ビートルズのクリップは反響を呼び、アメリカではビートルズ
への関心が急増した。番組中パールが「イギリスもやっと
アメリカと同じ文化レベルにまで成長してきたようで、喜ば
しいかぎりです」という皮肉まじりのコメントをはさみ、翌
の「ニューヨーク・タイムズ」紙ではジャック・グールドが「い
わゆるビートルマニアと呼ばれている熱狂的なファン現象
がアメリカにもおよぶとは考えられない。アメリカではこんな
ものはすでに時代遅れの現象だからだ」と書いていたが、
それでもアメリカでのビートルズへの関心はやまなかった。

9月1日(日)

ディズベリー・スタジオ・センター、第1スタジオ
Manchester

ABCテレビの番組を収録。この日は「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」ではなく、マイク・ウィンターズとバーニー・ウィンターズが司会を務めるバラエティ・ショー「ビッグ・ナイト・アウト」への出演(ビートルズとこの兄弟コメディアンとはテレビ番組で4回共演しているが、これが1回目。1964年2月23日、7月19日、1965年8月1日を参照)。この日のほかのゲストは、ビリー・デインティ、パッツィ・アン・ノーブル、ライオネル・ブレア。
番組は、昼間リハーサルを行なったあと、夜にABCのマンチェスター・スタジオのメイン・ステージで、600人の観客を集めて収録された。ビートルズは、'From Me To You' 'She Loves You' 'Twist And Shout'の3曲を口パクした。収録分は、9月7日午後7時40分から8時30分にかけてITVのほとんどの系列局で放送された。
注:当初ビートルズは8月24日放送予定の「ビッグ・ナイト

アウト」に出演を依頼されたが、8月18日の収録日がスケジュールと折り合わず、この日に延期された。

『ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ』最終回を収録

9月3日(火)

エオリアン・ホール、第2スタジオ
London

BBCの15回にわたるシリーズ番組「ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ」の最後の3回分を、この日1日で収録。収録された3回分のうち、最初の放送分はいつもと同じテリー・ヘンブリーがプロデュースを担当したが、残りの2回はイアン・グラントが担当した。

第13回放送分は、リハーサルを含めて午後2時から4時30分の間に収録され、ビートルズは、'Too Much Monkey Business' 'Till There Was You' 'Love Me Do' 'She Loves You' 'I'll Get You' 'The Hippy Hippy Shake'を演奏。番組では、第14回放送分として収録された'A Taste Of Honey'も'I'll Get You'のあとに挿入され、この回にかぎり通常の6曲より1曲多い7曲が放送された。この回は9月10日午後5時から5時29分に放送。ゲストはジョニー・キッド・アンド・パイレーツ。

30分の休憩のあと、午後5時から7時30分まで第14回放送分を収録した。演奏曲は'Chains' 'You Really Got A Hold On Me' 'Misery' 'A Taste Of Honey'(第13回の放送分に流用)、'Lucille' 'From Me To You' 'Boys'だった。この回は9月17日午後5時から5時29分に放送。ゲストはマローダーズ。

さらに30分休憩したあと、第15回放送分を収録。'She Loves You' 'Ask Me Why' '(There's A) Devil In Her Heart' 'I Saw Her Standing There' 'Sure To Fall (In Love With You)' 'Twist And Shout'を演奏。最終回のゲストは、のちにビートルズの会社アップル音楽出版に所属するグループ、グレープフルーツの母体となったトニー・リバース・アンド・キャスタウェイズ。彼らはジョージ・ハミルトンIVがアメリカで当時ヒットさせていたジョン・ラウダーミルクの'Abilene'など、古いカントリー・ナンバーを披露した。最終回は9月24日の午後5時から5時29分に放送。

9月4日(水)

ゴーモント・シネマ
Worcester

ジョン・スミスの主催による4夜にわたる公演の初日。ブライアン・エプスタインはスミス主催の「マージー・ビート・ショーケース」を数回キャンセルさせていたため、この短いツアーをまかせることにした。ビートルズへの報酬はひと晩250ポンド。

9月5日(木)

ゴーモント・シネマ
Taunton

9月6日(金)

オデオン・シネマ
Dunstable Rd, Luton, Bedfordshire

この日、EP"THE BEATLES HITS"がイギリスでリリースされた。

9月7日(土)

プレイハウス・シアター
London
フェアフィールド・ホール
Croydon

夜の公演会場のあるクロイドンに向かう前、ビートルズはロンドンのプレイハウス・シアターでBBCライト・プログラムの「サタデイ・クラブ」の5周年記念番組への出演分を収録。この番組は、1958年10月4日に初めて放送されてから262回も続いていた。最後の29分間の海外同時放送の結果は芳しくなかったが、イギリス国内ではここ数回の番組を900万人ものリスナーが聴いたというかなり高い聴取率を誇っていた。この日の収録分は10月5日の午前10時から正午に放送。

収録はリハーサルを含めて午後1時から4時まで行なわれ、ビートルズは、'I Saw Her Standing There' 'Memphis,Tennessee' 'Happy Birthday Saturday Club' 'I'll Get You' 'She Loves You' 'Lucille'を演奏。'Happy Birthday Saturday Club'は、この番組の5周年を祝って手短かに演奏したおなじみの曲で、

CamScannerでスキャン

番組の記録には作曲クレジットが「Trad arr Lennon(トラディショナル、アレンジ:レノン)」となっている。午前11時31分から11時59分のあいだに演奏された最後の3曲は、BBCの海外放送で同時放送された。
「サタデイ・クラブ」の収録のあと、ポールはBBCのラジオ・プロデューサー、ローズマリー・ハートから短いインタビューを受けた。この時の内容は11月21日の午後4時30分から5時までの同プロデューサーが担当するBBCホーム・サービスのシリーズ番組「ア・ワールド・オブ・サウンド」で放送された。その回には、「リバプール:ア・スウィンギング・シティ」というサブタイトルが付けられた。

9月8日(日)
ABCシアター
Blackpool

9月11日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

EMIスタジオで、“WITH THE BEATLES”のタイトルでリリースされるセカンド・アルバムのレコーディング。まず、午後2時30分から6時に、レノン=マッカートニーによる新曲が3曲レコーディングされた。リンゴがボーカルをとる‘I Wanna Be Your Man’を1テイク(前日ジョンとポールはローリング・ストーンズにこの曲を提供。ストーンズは10月7日にこれをレコーディングし、11月1日にリリース。1か月以内にグループ初のトップ20ヒットとなった)、‘Little Child’を2テイク、‘All I've Got To Do’を15テイク録音した。午後7時から10時15分の夜のセッションでは、もうひとつのレノン=マッカートニー・ナンバー‘Not A Second Time’を9テイク、初めてジョージ・ハリスンの名前がクレジットされた曲‘Don't Bother Me’を7テイク、レコーディングした。

オーストラリアのファンにメッセージを送る

9月12日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズの驚異的なレコード売り上げは、イギリス国内に限ったことではなかった。オーストラリアでも1964年6月にはツアーを敢行すると、エプスタインは7月5日の時点で口約束していたが、12月2日には正式な契約を交わすことになった。とにかく、オーストラリアのラジオ局からは番組出演の要望が殺到していた。これに応えて、ビートルズはこの日4種類のオーストラリア向けメッセージを録音した。そのうち3本はボブ・ロジャース(シドニーのラジオ局2SMのDJ)に直接寄せられたもので、もう1本はどのラジオ局でも使用を認めたオープン・メッセージだった。これらは原稿があってないような内容で、ビートルズ特有のウイットに富むおしゃべりだった。EMIではこの日以降、この種のビートルズからのメッセージが数多くレコーディングされた。
メッセージの録音は、午後2時30分から6時30分までのアルバム・レコーディング・セッションに合わせて行なわれた。アルバム用のレコーディングでは、“PLEASE PLEASE ME”には収録されなかった‘Hold Me Tight’のリメイクが10テイク、レコーディングされ、今回はボツをまぬがれる仕上がりとなった。
10時終了の予定より90分も延長した午後7時から11時30分までのセッションでは、ジョージの‘Don't Bother Me’をさらに10テイク録音して完成させ、さらに‘Little Child’を16テイク、‘I Wanna Be Your Man’を6テイク録音した。
またこの日、‘She Loves You’が全英チャート1位に輝いている。

9月13日(金)
パブリック・ホール
Preston

パブリック・ホールでの公演のあと、ポールは40キロほど車を運転して、ネルソンのインペリアル・ボールルームに向かい、深夜に到着。年に1回催される地元の新聞「ネルソン・リーダー」主催の「ヤング・ワンズ・ボール」の一環として行なわれた「インペリアル・ミス1963」コンテストの審査員として出席するためだった。

9月14日(土)
(ビクトリー)メモリアル・ホール
Northwich

CamScannerでスキャン

ローリング・ストーンズと同じステージに

9月15日(日)
ロイヤル・アルバート・ホール
London

この日の午後、「バレンタイン」「マリリン」「ロキシー」の3誌の主催で毎年行なわれていた印刷業者年金組合のための「グレート・ポップ・プロム」ショーに、メインとして出演。ビートルズのほかに、ローリング・ストーンズをはじめ11組のバンドが出演。司会はDJのアラン・フリーマン。
翌9月16日からビートルズは休暇に出発。ジョンは妻のシンシアとともにパリを訪れ、そこでエプスタインと合流。ジョージは兄のピーターとともに、1954年にイリノイ州ベントンに移住した姉のルイーズを訪問。ポールとリンゴはギリシャ旅行。

9月30日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズのメンバーが休暇で出かけている間、この日アビイ・ロードの第2スタジオでは、午前10時から午後1時15分まで、編集、オーバーダブ、ミキシングが行なわれた。'Little Child'と'Hold Me Tight'を編集し、ジョージ・マーティンが'Money (That's What I Want)'と'I Wanna Be Your Man'にキーボードをオーバーダブ。それから、'All I've Got To Do' 'Don't Bother Me' 'Little Child' 'Hold Me Tight' 'Not A Second Time'のモノ・ミキシングが行なわれた。

ラジオでビートルズ&マージービート特集

10月3日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London
NEMSエンタープライズ
Monmouth Street, London

ジョージを除く3人は10月2日にイギリスに戻った。この日、EMIで午前10時から午後1時にセッションが行なわれたが、ジョージはそのあとに帰国した。セッションでは、リンゴが'I Wanna Be Your Man'に、ジョンとポールは'Little Child'に、それぞれ新たなボーカルをオーバーダブ。
ジョージと合流したビートルズは午後に入ってから、当時もっとも先端をいっていたBBCのラジオ番組「ザ・パブリック・イヤ」の初出演分を収録した。ビートルズはこの日を含めて3回この番組に出演しているが、すべてインタビューのみの出演である。ツアー中、メンバーたちはこの番組を好んで聴いていた。
この日のインタビューはモンマス・ストリート13番地にあるNEMSのオフィスで、番組の名物アシスタントのマイケル・コリーによって収録された。この内容は11月3日の午後3時から4時に放送された番組のなかの、ビートルズとマージービート・ブームを特集した約12分のコーナーで使用された。この特集ではビートルズのほかに、ビル・ハリー、ピート・ベスト、ミリー・サトクリフ(故スチュアートの母)、ビート詩人のロイストン・エリス(1960年5月にリバプールのジャカランダ・コーヒー・バーでビートルズがバックを務めたことがある)、および一般市民とのインタビューも含めて放送された。特集でのナレーターは、当時のイギリスのレコード業界で人望を集めていたトニー・ホール。トニーはロンドンではビートルズの隣人でビートルズの個人的な知り合いでもあった。
注:「ザ・パブリック・イヤ」は人気番組だったため、「イン・ザ・パブリック・イヤ」としてBBCホーム・サービスでも改訂版が放送されていた。トニーのビートルズへのインタビューの部分は、1964年1月14日の午後9時から9時30分に放送されたこの番組で流された(1964年3月18日も参照)。
インタビューが終わると、リンゴはすぐNEMSを出てサウスエンドまで車を走らせ、オデオン・シネマで行なわれたエバリー・ブラザーズ、ボ・ディドリー、ローリング・ストーンズのパッケージ・ショーを観に行った。

『レディ・ステディ・ゴー!』に初出演

10月4日(金)
テレビジョン・ハウス、第9スタジオ
Kingsway, London

イギリスではあの「スウィンギング・シックスティーズ」と呼ばれた時代の同義語として、また少なくともロンドンでは花の金曜日の同義語でもあったほど人気を集めていたテレビ番組「レディ・ステディ・ゴー!」に初出演。この日の「レディ・ステディ・ゴー!」は、1965年3月26日までのほとんどの放送

CamScannerでスキャン

局アソシエイテッド・レディフュージョン社内のテレビジョン・
ハウス第9スタジオから中継された(ただしいつも口パク)。
この番組はこの年の8月2日から放送が始まったが、最初
の数か月は全国ネットではなかった。
午後のカメラ・リハーサルのあと、ビートルズは'Twist And
Shout' 'I'll Get You' 'She Loves You'の3曲をこ
なした('I'll Get You'はハーモニカの音が聞こえるに
もかかわらず、ジョンも誰もハーモニカを吹いていないため、
口パクであることが一目瞭然)。
演奏中、ビートルズが演奏している小さな台の周囲ではテ
ィーンエイジャーたちが踊りまくっていた。司会のキース・フ
ォーダイスと歌手のダスティ・スプリングフィールドによるイン
タビューも行なわれたが、ジョンがダスティに傷のあとを見
せてくれと言うなど、ビートルズの態度は見るからに生意気
そのもの。番組は午後6時15分から7時に生放送された。
この日の'She Loves You'の映像は、11月8日の同番
組(午後6時15分から7時)で再放送。また、12月31日(午
後11時15分から12時15分に放送)の特別編(サブタイト
ル「ザ・ニュー・イヤー・スターツ・ヒア!」)では、3曲すべて
が再放送される。

デビュー1周年は スコットランド公演初日

10月5日(土)

コンサート・ホール
Argyle St, Glasgow, Lanarkshire

ブライアン・エプスタインとスコットランドにおける特別契約を交わしたアルバート・ボニチ主催によるスコットランドでの3公演の初日。

10月6日(日)

カールトン・シアター
Arcade Halls, Sinclairtown, Kirkcaldy, Fifeshire

カコルディにあるレイス・ボールルームのマネージャー主催の出演だったが、ビートルズをできるかぎりきちんとした安全な劇場にしか出演させないというブライアン・エプスタインの新たな方針のため、主催者所有のボールルームは使用できなかった。2回のステージにそれぞれ1,500人の観客がつめかけた。

10月7日(月)

ケアード・ホール
City Square, Dundee, Angus

リバプール出身の コメディアンの番組に

10月9日(水)

BBCパリス・スタジオ
London

この日出演したBBCラジオはポップ番組ではなく、リバプ
ール出身のコメディアン、ケン・ドッドによる30分のコメディ
ショー「ザ・ケン・ドッド・ショー」だった。2年前、ビートルズは
マグハルのオルバニー・シネマで開催されたケン・ドッド主
催のチャリティ・ショーに無名のバンドとして出演し、場違
いなロックンロールを騒々しく演奏したことがあった。
ビートルズはドッドのコメディ劇には出演せず、劇のあいま
の歌のコーナーで'She Loves You'を演奏した。収録
は午後10時から11時にパリス・スタジオの観客の前で行
なわれた。ビートルズは午後6時30分からのリハーサルに
も参加。
番組は11月3日午後2時30分から3時に放送(この日BBC
ではこれに続く番組「ザ・パブリック・イヤ」でもビートルズ
のインタビューが放送される。1963年10月3日を参照)。ま
た、この番組は11月6日午後8時から8時30分と、1964年2
月1日午後1時10分から1時40分にも再放送されている。

10月11日(金)

トレンサム・ガーデンズ、ボールルーム
Stone Rd, Trentham, Staffordshire

「ビートルマニア」の誕生

10月13日(日)

ロンドン・パラディアム
Argyll St, London

イギリスのショー・ビジネス界が誇る仕掛け人、リュー・グレ
イドを社長とするITVのアソシエイテッド・テレビジョンの番
組に初出演。しかも、同局の最高視聴率を誇るエンターテ
インメント番組「バル・パーネルズ・サンデイ・ナイト・アット・ザ・
ロンドン・パラディアム」でのデビューである。この番組はロ

CamScannerでスキャン

ンドンの名高い劇場から午後8時25分から9時25分という ゴールデン・タイムに生中継され、1,500万人の視聴者が観ていたという番組だった。この日のビートルズもそう感じたように、この番組にメインで出演できることは多くのアーティストたちの夢であり、キャリアの頂点とも言える名誉だったのだが、今となっては、こんな番組への出演になぜそんなにこだわっていたのかわからないという人も多いだろう。
いずれにしても、この日の出演がビートルズにとって特別なものとなったのは確かだ。「スターの殿堂」と言われるロンドン・パラディアムの屋内、そして外でもファンはものすごい絶叫をあげ、会場に入れなかったファンはアーガイル・ストリートの交通を麻痺させ、翌朝の新聞の一面を保証されたカメラマンたちはこの光景に心を躍らせた。そして、このときのこの光景を言い表すためにイギリスの新聞記者によってビートルマニアという言葉が初めて発明された。現在でも通用しているこの言葉は、きっとこの先も死語となることはないだろう。
ビートルズはこの日のショーのメインだったにもかかわらず、通例を破ってショーの幕開けにわずか数秒間ステージに姿を見せた。この瞬間、会場の若いファンは最大限にあおられ、悲鳴が会場に炸裂した。司会のブルース・フォーサイスは「もっと見たいなら、また42分後に戻ってきますから」と客をなだめる始末だった。
ビートルズは1時間番組の最後に再び登場した。フォーサイスがすさまじい歓声に負けじと大声で「5、4、3、2、1」とカウントし、'From Me To You'の演奏が始まった。それに続いて、いつもの手慣れたレパートリーを披露していった(もっとも、それでも前夜にプライベートなリハーサルはしていたのだが)。ポールが次の曲'I'll Get You'を紹介しようとして思わず客の反応にひるんでしまうと、それを見ていたジョンがすかさずそのポールのたじろぎぶりをまねした。続いてのMCはジョン、ポール、ジョージが一緒に話し始めたのだが、猛烈な客の叫びを前にしてすぐに3人は口をつぐんでしまった。そしてまた一緒にMCを始め、結局ジョージひとりが何とか次の曲'She Loves You'を紹介した。最後の曲になってポールが曲名を紹介しようとしたときなどは、ジョンが客に向かって「だまれぇ!」と怒鳴るほどで、これを聞いた客席の大人たちはジョンに拍手を送った。そこでポールが、みんなに手拍子して足を踏み鳴らしてほしいと言うと、ジョンがそれをすぐにおどけてステージでやってみせた。そして、ビートルズは最後の曲'Twist And Shout'を演奏した。
番組の終わりには、いつものように出演者全員(ブルック・ベントン、デス・オコナー、司会のブルース・フォーサイス)が回転式のステージに上がり、レギュラーのジャック・パーネル・オーケストラがテーマ曲の'Startime'を演奏するなか、カメラや観客に向かって手を振った。
ビートルズはまさに社会現象となりつつあった。この日のテレビ出演のもようは、パラディアムのビートルズの楽屋にもカメラを持ち込んでいたITNの夜のニュースでも伝えられた。

10月15日(火)
フローラル・ホール
Southport

公開ラジオ番組はこれで最後

10月16日(水)
プレイハウス・シアター
London

日曜朝のBBCラジオのポップ番組「イージー・ビート」への、4回目にして最後の出演。ビートルズへの驚異的なニーズを考慮し、またメンバーの身の安全を気づかったエプスタインは、BBCにこれを最後にもうビートルズは観客を入れたラジオの収録番組には出演させないと通告した。同様の理由で、コンサートに関しても固定席のある劇場か会場でしか行なわないと、エプスタインは決めていた。この方針変更のとばっちりを受けたのが「イージー・ビート」だった。この決定で、12月4日収録で8日放送予定になっていたビートルズ5回目の出演となる「イージー・ビート」は出演取りやめになったからだ(エプスタインはBBCテレビでも、9月15日収録で22日放送の番組「カインドリー・リーブ・ザ・ステージ」の出演契約をキャンセルしていた)。
この日の「イージー・ビート」は、午後4時からリハーサルを開始し、午後9時から10時までプレイハウス・シアターで収録された。ビートルズは、'I Saw Her Standing There' 'Love Me Do' 'Please Please Me' 'Form Me To You' 'She Loves You'を演奏。2曲目からは、それまでに発表されたシングル曲を発表順に演奏している。番組は10月20日の午前10時31分から11時30分に放送。

CamScannerでスキャン

プレイハウスでビートルズはレポーターのピーター・ウッズから、前日明らかになった、王室関係者も足を運ぶ11月4日のロイヤル・コマンド・パフォーマンスへの招待についてインタビューを受けた。ウッズの厳かな調子の質問をメンバーがたくみにかわしているこのインタビューは、この日の夜のメイン・ニュース番組「ラジオ・ニュースリール」(午後7時から7時31分)で放送された。

4トラック・レコーディングの導入、'I Want To Hold Your Hand'を録音 最初のクリスマス・レコードを制作

10月17日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から5時30分までと7時から10時までの2回のセッションで、ビートルズは3種類の仕事をこなした。まず、ニュー・アルバムのレコーディングに手を加え、次に5枚目のシングル用の2曲をレコーディングし、最後に大はしゃぎの「ビートルズ・クリスマス・レコード」を吹き込んだ。これはビートルズが全7枚制作したクリスマス・レコードの1枚目で、12月9日にオフィシャル・ファン・クラブの会員に無料で配布される。

この日のセッションはまた、EMIにおけるビートルズのレコーディング新時代の幕開けとなった。新方式の4トラック・レコーディングの導入により、メンバーはより実験的に機材を使用できるようになったのである。もはやスタジオですべての楽器を同時に演奏する必要はなくなったのだが、その後も、スタジオ・ライブ方式でレコーディングすることも続けた。

ニュー・シングルの2曲はいずれもレノン=マッカートニーの新曲だった。この'I Want To Hold Your Hand'と美しい3部コーラスの'This Boy'を初めて4トラックでレコーディングし、それぞれ17テイクで完成させた。そのあと、やはり4トラックで'You Really Got A Hold On Me'の録り直しを試みたが、テイク12で手を打った。

5枚目のシングルはイギリスで11月29日に発売。その時点でチャートでは、'She Loves You'が2度目のトップの座にいたが、1週間後にはニュー・シングルがトップを奪い、ビートルズはチャートの1位と2位を独占、同様にアルバム・チャートでも1位と2位を占めることとなった。'I Want To Hold Your Hand'は、別な意味でもビートルズにとって非常に重要な曲となった。この曲はビートルズのアメリカ市場での起爆剤となり、1963年のレコード売り上げとビートルマニアの熱狂ぶりをさらにしのぐ1964年への道を開いたからである。

10月18日(金)

グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester

午後早く、グラナダ・テレビのスタジオで、「シーン・アット6:30」を収録。番組はこの日の午後6時30分から7時に放送された。ビートルズは'She Loves You'を口パク。

10月19日(土)

パビリオン・ガーデンズ・ボールルーム
Buxton

テレビ番組で新曲を特別に披露

10月20日(日)

アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston, Birmingham

ABCテレビの番組「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」にメインとして出演。番組はこの日の午後に収録され、10月26日の午後5時50分から6時35分に放送。

この収録でビートルズは、'All My Loving' 'Money (That's What I Want)' 'She Loves You'の3曲をレコードに合わせて疑似演奏で披露。いつもより1曲多く、ほかのゲストよりも2曲多いという異例の曲数だった。最初の2曲は、リリース日の11月22日まで誰も聴くことができないニュー・アルバム"WITH THE BEATLES"の音源が特別に使用された。アルバム収録曲を数曲収録したアセテート盤を入手していた番組プロデューサー、フィリップ・ジョーンズが、ぜひこれを自分の番組で最初に放送させてほしいとエプスタインを説得したおかげだった。

CamScannerでスキャン

10月21日(月)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午前10時から午後1時まで、ジョージ・マーティンにより'This Boy'のモノ・ミキシングと編集と、'I Want To Hold Your Hand'のモノおよびステレオ・ミキシングが行なわれた。ビートルズのメンバーが参加したかどうかは不明。

10月23日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

セカンド・アルバムのための最後のレコーディング。午前10時から午後1時のセッションで、ビートルズは'I Wanna Be Your Man'のテイク16をレコーディングした。その後、メンバーはジョージ・マーティンとノーマン・スミスがこの曲と'Little Child' 'Hold Me Tight'をモノ・ミキシングするのを見学した。
昼食を済ませるとビートルズは初の海外ツアーのためスウェーデンに飛んだ。

スウェーデンで初の本格的海外ツアー

10月24日(木)

カーラプラーンスステューディオン
Karlaplan, Stockholm, Sweden

スウェーデンでのビートルズ最初の仕事は、ストックホルムの中心部にあるスタジオでのラジオ番組の収録だった。番組タイトルは"The Beatles pupgrupp fran Liverpool pa besok i Stockholm"で、「リバプール出身のポップ・グループ、ビートルズ、ストックホルムを訪れる」という、ご丁寧なまでに説明的なものだった。
スウェーデンの観客の前で演奏するという興奮と、(すでにティーンエイジャーの憧れの的となっていたイギリスとは違って)スウェーデンのファンを獲得しようという意気込みに満ちていたビートルズは、すばらしい演奏を披露した。曲目は、'I Saw Her Standing There' 'From Me To You' 'Money (That's What I Want)' 'Roll Over Beethoven' 'You Really Got A Hold On Me' 'She Loves You' 'Twist And Shout'の7曲。'Money'を演奏したあとビートルズは休憩に入り、地元のグループ、ハッセ・ローゼン・アンド・ノースメンが3曲を演奏した。
この番組への出演は、プロデューサーのクラス・バーリングがビートルズを出演させたいと、ブライアン・エプスタインに直接電話をかけたことから実現した。番組はリハーサルなしで午後5時から収録され、11月11日の午後10時5分から10時30分に、スウェーデン国営ラジオ、スベリエス・ラジオ第1で放送。

10月25日(金)

ニーア・アウラン
Sundsta L roverk, Sundstav gen, Karlstad, Sweden

7か月ほど前にストウ校で行なわれた公演同様、この日も文字どおり、学校に逆戻りという感じだった。ひと晩の出演料が140ポンドというスウェーデン・ツアーは、カールスタードの小さな街にある中等学校の新設ホールという意外な場所からのスタートだったのである。
ビートルズは午後7時からと9時からの2回のステージで、'Long Tall Sally' 'Please Please Me' 'I Saw Her Standing There' 'From Me To You' 'A Taste Of Honey' 'Chains' 'Boys' 'She Loves You' 'Twist And Shout'を演奏。このツアーでのほかの公演も同じレパートリーだった。
スウェーデンのビートルマニアによる歓迎はかなり熱狂的だったが、地元カールスタードの新聞「ニーア・Wermlands Tidning」のポップ担当記者「ジョニー」にはなぜかビートルズがあまりお気に召さなかったようだった。彼によれば、ビートルズはひどいもので、音楽性は陳腐だし、リズムははずれていて、観客の歓声のおかげでへたくそな演奏があまり聞こえなかったのはバンドにとって幸運だったということだった。そして、最後に「ジョニー」は、ビートルズにはいかなる音楽的な価値もなく、前座を務めた地元バンド、ファントムズのほうがよっぽどましだったと締めくくっていた。

10月26日(土)

クングリガ・テニスハッレン
Liding v gen, Stockholm, Sweden

午後5時からと8時からの2回のステージというのが、少な

CamScannerでスキャン

くとも当初の予定だった。というのも、ビートルズはジョーイ・ディー・アンド・スターリターズに次ぐ2番手の出演者だったのに、客は圧倒的にビートルズを望んだからだ。

10月27日(日)
シルクス
Lorensbergsparken, G teborg, Sweden

イギリスではゴーセンバーグとして知られている町で、午後3時、5時、8時の3回のステージ。

10月28日(月)
ブロースハッレン
Bockasj gatan, Bor s, Sweden

午後7時30分から1回のみのステージ。午後3時ごろには、ブロースにあるワイデル・レコード店で、30分のレコード・サイン会を行なった。

10月29日(火)
スポットハッレン
Hamngatan, Eskilstuna, Sweden

スウェーデン・ツアーの最終公演。その数時間前、アビイ・ロードのEMIスタジオでは、午前10時から午後1時のセッションでジョージ・マーティンの監督のもと、セカンド・アルバムの収録曲すべてのステレオ・ミックスと編集、収録曲の並べ替えが行なわれた。収録曲はジョージ・マーティンが考えた次の順で配置された。'It Won't Be Long' 'All I've Got To Do' 'All My Loving' 'Don't Bother Me' 'Little Child' 'Till There Was You' 'Please Mister Postman' 'Roll Over Beethoven' 'Hold Me Tight' 'You Really Got A Hold On Me' 'I Wanna Be Your Man' '(There's A) Devil In Her Heart' 'Not A Second Time' 'Money (That's What I Want)'。最後の'Money'のみ、さらにもう1回手が加えられることになる。

セカンド・アルバム "WITH THE BEATLES"完成
10月30日(水)
ナッレンテアーテン
Gr na Lund, Stockholm, Sweden

EMIスタジオでは、午後2時30分から5時30分のセッションで、ジョージ・マーティンの監督のもとに'Money (That's What I Want)'のステレオ・ミックスが作り直される。テープからテープへのコピーによる音質の劣化を避けるため、ステレオ・アルバム用にはそれぞれのチャンネルに2トラック、モノ・ミックスが使用された。

この日、完成したセカンド・アルバム"WITH THE BEATLES"は、デビュー・アルバム"PLEASE PLEASE ME"の発売からちょうど8か月後の1963年11月22日に発売された。イギリスでの予約注文数は30万枚という驚くべき数字を記録した。国内セールスはまたたくまに50万枚を超え、1965年には100万枚を突破した。また、1960年代の初めにはLPの売り上げはかなり低く、その一方シングル・チャートでは、サイズを問わずすべてのレコードを対象にしていたため、このアルバムはシングル・チャートにまで顔を出すという快挙まで成し遂げてしまった。

一方スウェーデンでは、ビートルズはストックホルムに戻り、国営テレビのスベリエス・テレビジョンで11月3日の午後7時から7時30分に放送されるポップ番組「ドロップ・イン」への出演分を収録した。

番組の収録は、午後からリハーサルをしたあと、ストックホルムのグレーナ・ルンドという遊園地の中にある小さな劇場ナッレンテアーテンに観客を集めて、午後7時に始まった。当初は'She Loves You'と'Twist And Shout'の2曲のみを演奏する予定だったが、プロデューサーのクラス・バーリングがあと2曲演奏してほしいと説得したため、さらに'I Saw Her Standing There'と'Long Tall Sally'を追加。朝から何も食べていなかったにもかかわらず、ビートルズのメンバーは非常にご機嫌で、番組のクロージング・テーマ'Drop In'の演奏中も元気よく手拍子に参加した。

翌10月31日、ビートルズは午前中のフライトでロンドン空港に戻り、初めて「空港での歓迎」を受けた。

秋の全英ツアー開始
11月1日(金)
オデオン・シネマ
Winchcombe St, Cheltenham, Gloucestershire

この9か月間で4回目にあたる全英ツアー「ビートルズ・オータム・ツアー」の初日。このツアーでの出演料は、ひと晩300

ボンドだった。ツアーでは全公演とも同じレパートリーを演奏。曲目は'I Saw Her Standing There' 'From Me To You' 'All My Loving' 'You Really Got A Hold On Me' 'Roll Over Beethoven' 'Boys' 'Till There Was You' 'She Loves You' 'Money (That's What I Want)' 'Twist And Shout'。
しかし、歓声があまりにすさまじいので、観客はもちろんビートルズ自身にさえ少しの音符しか聴きとれなかった。

11月2日(土)
シティ・ホール
Sheffield

11月3日(日)
オデオン・シネマ
Leeds

この夜の2回のステージのうち1回の数分間は、パフォーミング・ライト・ソサエティがからんだ訴訟で使用されるためにレコーディングされたが、もはやそのテープは現存していない。
翌11月4日はツアーのオフ日で、ロイヤル・コマンド・パフォーマンスに出演。

前代未聞の ロイヤル・コマンド・パフォーマンス
11月4日(月)
プリンス・オブ・ウェールズ・シアター
Coventry St, London

エリザベス皇太后(エリザベス女王の母)、マーガレット王女、スノードン卿が臨席した、かの有名なロイヤル・コマンド・パフォーマンスへ出演。ビートルズは19組のうち7番目の出演だったが、明らかにもっとも注目される存在だった。
10月13日に「バル・バーネルズ・サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム」に出演したときと同様、ビートルズはこれまで練りあげてきた曲目とステージ・パフォーマンスを、ここで披露したのだった。まず、カーテンが開く前に'From Me To You'を演奏し始め、曲が終わるとジョンとポールが同時にマイク・スタンドをステージ前方に移動。2曲目の'She Loves You'の演奏が終わると、いっせいにおじぎ。3曲目の'Till There Was You'を演奏する前に、明らかに緊張しているポールが、ソフィ・タッカー(79歳のアメリカ人女性シンガー/コメディアン)は自分たちのお気に入りのアメリカのグループだとジョークを言った。最後の4曲目の演奏を始める前に、ジョンとポールがマイク・スタンドを元の位置に戻す。そして、拍手がおさまるのを待って、ジョンが伝説の「宝石ジャラジャラ」発言を放つと、'Twist And Shout'になだれ込んだのだった。最後にリンゴがドラムの席から降りてきて、ジョン、ポール、ジョージとともにステージ前方に並ぶと、背後で幕が閉じる。4人はまず観客に、続いてロイヤル・ボックスにおじぎをし、若さを発散させるかのようにステージから全速力で走り去った。
ロイヤル・コマンド・パフォーマンスはBBCとITVが毎年交代でテレビ放送することになっており、この年はITVの番だった。番組は11月10日の午後7時28分から10時30分にATVの全国ネットで放送。ビートルズが演奏した4曲はすべて放送された。しかし、BBCラジオが11月10日午後7時35分から8時30分に放送したこのショーのハイライト番組では、'She Loves You'はカットされていた。

時事問題の番組でインタビュー
11月5日(火)
アデルフィ・シネマ
Slough

昼前に、ビートルズはアソシエイテッド・レディフュージョンのテレビ・スタッフと打ち合わせをした。おもに時事問題を扱う番組「ディス・ウイーク」でのビートルズとビートルマニアの特集に出演するためである。
ビートルズはインタビューに応じ、ロンドンを走るハイヤーの後部座席で撮影が行なわれた。しかし、車がせまくて4人が同時に乗り込むことができなかったため、最初にジョージとリンゴ、次にジョンとポールと、ふたりずつ撮影が進められた。
10分40秒の収録分のうちのちょうど9分間のインタビュー・フィルムが、20枚ほどのビートルズのスチール写真とともに、11月7日午後9時10分から9時40分に生放送。スタジオではビートルズに関する討論も行なわれた(本人たちは出席していない)。
夜の全英ツアーの公演では、スロウの会場で2ステージをこなした。前日ロイヤル・コマンド・パフォーマンスに出演したビートルズは、皇太后から翌日はどこで演奏するのかと

CamScannerでスキャン

聞かれ、スロウですと答えると、皇太后は「あら、私たちのすぐ近くですね」と言った。確かに、スロウはウィンザー城からわずかに3キロしか離れていなかった。
そのころ、エプスタインはニューヨークへ飛び、ビートルズのアメリカ上陸プランを練っていた。

11月6日(水)

ABCシネマ
Northampton

唯一のアイルランドでの仕事

11月7日(木)

ダブリン空港
Dublin, Eire
アデルフィ・シネマ
Middle Abbey St, Dublin, Eire

このときの訪問はビートルズにとって唯一のアイルランドでの活動となった。ダブリン空港に到着したビートルズは、レポーターのフランク・ホールからインタビューを受けた。これは、同日午後7時55分から8時に、RTE(ラジオ・テレフィス・エイリアン)で放送される報道テレビ番組「イン・タウン」用の取材だった。
5か月後にタイトルが決まるビートルズ初の主演映画"A HARD DAY'S NIGHT"が形になり始めたのもこの日からだった。ビートルズ側の提案で、プロデューサーのウォルター・シェンソンから脚本の執筆を依頼された脚本家のアラン・オーウェンが、3日間ビートルズの密着取材をして、日増しにわけがわからなくなってくる生活ぶりを観察することになったのだ。オーウェンはビートルズと一緒にロンドン空港からダブリンに飛び、9日のイースト・ハムの公演が終わるまで行動をともにした。

11月8日(金)

ブロードキャスティング・ハウス、第8スタジオ
Ormeau Ave, Belfast
リッツ・シネマ
Fisherwick Place, Belfast

ダブリンからベルファストに向かう途中、北アイルランドとアイルランドとの国境近くで、ビートルズはアルスター・テレビ(北アイルランドのITV系列放送局)のレポーター、ジミー・ロビンソンからインタビューを受けるため、あらかじめ約束されていたところで車を止めた。このときのもようはこの日の午後6時25分から6時35分に「アルスター・ニュース」で放送された。
午後2時にベルファストに到着したビートルズは、今度はBBCの地元スタジオ、ブロードキャスティング・ハウスを訪れ、「アルスター・ニュース」のライバル番組で、やはり同じ時間帯の午後6時10分から6時31分に放送される「シックス・テン」用の取材をサリー・オーグルから受けた。インタビューは午後3時に収録。ビートルズは1曲、口パクする契約になっていたが、結局しなかった。

'I Want To Hold Your Hand'は予約だけで100万枚

11月9日(土)

グラナダ・シネマ
East Ham, London

公演が始まる前に、楽屋を訪れたジョージ・マーティンはEMIからの最新ニュースを告げた。ビートルズのニュー・シングル'I Want To Hold Your Hand'が、予約注文だけで100万枚を超える見込みだということだった。実際にその後、このシングルは予約だけで100万枚の売り上げを突破し、イギリスでは史上初の画期的な記録となった。

11月10日(日)

ヒッポドローム・シアター
Birmingham

ポールがインフルエンザでダウン、公演は延期

11月12日(火)

ギルドホール
Portsmouth(延期)

ポールがインフルエンザで腹をこわし、この夜のポーツマスでの公演は延期になり、ハンプシャーのティーンエイジャーたちを悲しませた。振替公演は12月3日になった。
しかし、サザン・テレビの番組「デイ・バイ・デイ」出演の約束は、延期ではなく中止になった。番組はこの日の午後にサウサンプトン・スタジオで収録し、午後6時5分から6時45分に放送される予定になっていた。その代わりに、ビートルズは夜の公演会場であるギルドホールの楽屋で、レポータ

CamScannerでスキャン

ーのジェレミー・ジェイムズとの短いインタビューに応じ、これが同番組で放送された。

また、この日は午後6時10分から6時30分のBBCのテレビ番組「サウス・トゥデイ」でも、ビートルズのインタビューが放送された。これはこの日早くにロイヤル・ビーチのサウスシー・ホテルで、レポーターのジョン・ジョンストンと一緒に収録されたものだった。

11月13日(水)
ウェストウォード・テレビジョン・スタジオ
Derry's Cross, Plymouth, Devonshire
ABCシネマ
George St, Plymouth, Devonshire

プリマスにいたビートルズは、ウェストワード・テレビ(イギリス南西部のITV系列局)からの取材申し込みに応じ、司会者スチュアート・ハッチスンの短いインタビューを受けた。これは、11月16日の午後5時15分から5時45分に、地元のティーンエイジャー向け番組「ムーブ・オーバー、ダッド」で放送された(「若者の鼓動に焦点をあてた新しくて明るいショー」というのがこの番組の触れ込みだった)。

しかし、ABCシネマを取り巻くファンの混乱がすさまじいため、楽屋で缶詰になっていたビートルズはまず裏口からこっそり抜け出し、隣のアシーニアム・シアターに裏口からまたこっそりと入らなければならなかった。じつはウェストワード・テレビはこのアシーニアム・シアターを予備スタジオとしてよく使用しており、ここからの地下連絡通路を使えばデリーズ・クロスにある局のメイン・スタジオに直接つながっていることも局側はよく知っていた。ビートルズはこの通路を通ってスタジオに駆けつけ、「ムーブ・オーバー、ダッド」への出演分を収録して、来たときと同じようにABCシネマに戻り、この夜の2回のステージをこなした。

11月14日(木)
ABCシネマ
Exeter

11月15日(金)
コールストン・ホール
Bristol

ビートルマニア、海外で報道される

11月16日(土)
ウィンター・ガーデンズ・シアター
Exeter Rd, Bournemouth, Hampshire

ビートルマニアのニュースは海外にも知れわたるようになっていた。この日の公演には、北米の主要テレビ局であるNBC、ABCおよびCBSの3局がそれぞれ取材チームを送り込み、ビートルズの演奏とヒステリックに叫ぶファンの様子を撮影した。この日の取材内容は、11月18日、19日、21日、そして12月7日に、アメリカの各ニュース番組で報道された。

CBSの放送ではレポーターのアレクサンダー・ケンドリックがとくに冷淡で、ビートルズのファンについては「文字を書ける女の子もいるようですね」と語り、ビートルズについては「皿洗いモップのようなヘアスタイルです」と言いきった。ビートルズの映像は、ウィンター・ガーデンズ・シアターに入場するところと、ステージで'She Loves You'を演奏している場面が放送された(音声はレコードのもの)。同局のもうひとりのレポーター、ジョシュ・ダルサは、ジョンとポールへの短いインタビューも行なったが、ケンドリックは高慢な物言いで次のようにレポートを締めくくった。「ビートルズはヒーロー不在の20世紀を象徴する存在と言えるのではないでしょうか。なぜなら、ビートルズの音楽には音楽性がなく、髪にもヘアスタイルがなく、マージーらしいもの(「幸運」という意味のマーシーとひっかけている)は何ももたらしていないからです」

11月17日(日)
コベントリー・シアター
Coventry

発売前のアルバムもシルバー・ディスクに

11月19日(火)
ゴーモント・シネマ
Wolverhampton

11月18日はパッケージ・ツアーのオフ日だったが、ほかの出演者とは違って、ビートルズにとっては休日ではなかった。ロンドンのEMI本社で行なわれた祝賀パーティーに出席

し、贈呈用レコードを何枚も授与された。まずは、EMI社長のサー・ジョゼフ・ロックウッドからアルバム"PLEASE PLEASE ME"と、まだ発売前の"WITH THE BEATLES"の2枚のシルバー・ディスクを授与。そして、ジョージ・マーティンからはEP"TWIST AND SHOUT"のミニチュア・シルバーEPがメンバー各自に授与された。さらにポップ週刊誌「ディスク」の編集者ジェラルド・マークスからはEP"TWIST AND SHOUT"のシルバーEPと'She Loves You'のシルバー・シングルを授与された。授与式のあと、会議室で、EMIの重役と特別の招待客のカクテル・パーティーおよび昼食会が行なわれ、ビートルズはこれにも出席した。

ニュース映画
"THE BEATLES COME TO TOWN"

11月20日(水)

ABCシネマ
Stockport Rd, Ardwick Green, Ardwick, Manchester, Lancashire

売り上げの一部をビートルズに譲ることで映像独占使用権を取りつけたパセ・ニュースは、この日の公演の1回目のステージで'She Loves You'と'Twist And Shout'の2曲を撮影した（演奏以外の場面では'From Me To You'のレコードがBGMとして使用された）。楽屋でのシーン、ヒステリー状態のファン、そしてジョークを交えたメンバーのコメントなどもあわせて編集された"THE BEATLES COME TO TOWN"は、8分間のカラー・ニュース映画として、12月22日から1週間、イギリスの特定の映画館で上映された（2年後、パセはこの映像を含めた"POP GEAR"というタイトルの70分の映画を製作。イギリスでは1965年4月18日から一般公開された。ちなみにアメリカでの同映画のタイトルは"GO GO MANIA"だった）。

ただ、この日、ABCシネマにはグラナダ・テレビの撮影チームも駆けつけていて、パセとほとんど同じ楽屋シーンを撮影している。グラナダはステージ場面の代わりにビートルズへの独占インタビューを取りつけ、このなかでビートルズは翌年2月に初めてアメリカを訪れる予定だと語った。この日の収録分は、1964年1月6日の「シーン・アット6:30」で午後6時30分から7時にかけて放送。

楽屋を訪れた報道関係者はほかにもいた。BBCラジオのマイケル・バートンである。彼が収録した2分間のインタビューは、この日の午後6時10分から6時30分の間にBBCノース・ホーム・サービスの番組「ボイス・オブ・ザ・ノース」で放送された。さらにバートンはリバプールとハンブルクのロック・シーンの関係を特集した番組「ワッカー、マック・シャウ（坊ちゃん、ショーをやれ）」のために、ジョージに独占インタビューを行なった。この番組は、11月27日の午後6時から6時30分にBBCノース・ホーム・サービスで放送。

11月21日(木)

ABCシネマ
Carlisle

11月22日(金)

グローブ・シネマ
High St, Stockton-on-Tees, Durham

この日、セカンド・アルバム"WITH THE BEATLES"がリリースされた。

11月23日(土)

シティ・ホール
Newcastle-upon-Tyne

11月24日(日)

ABCシネマ
Ferensway, Hull, Yorkshire

11月25日(月)

グラナダ・テレビ・センター、第4スタジオ
Manchester

11月27日の予定がこの日に変更になり、ビートルズは午前いっぱいをグラナダ・テレビで演奏シーンとインタビューの収録をして過ごした。収録分は、11月27日午後1時45分から2時にローカル番組「レイト・シーン・エクストラ」（「シーン・アット6:30」の制作チームによる番組）で、それに12月20日午後6時30分から7時に「シーン・アット6:30」で放送された。

「デイリー・エコー」紙の架空の見出しを拡大したステージ・セットの前で、ビートルズは'I Want To Hold Your Hand'と、このシングルのB面の'This Boy'の2曲を口

パクした（前者は11月27日に、後者は12月20日に放送）。同じセットで撮影されたインタビューは、番組の司会であるゲイ・バーンとコメディアンのケン・ドッドも参加して行なわれた。ドッドはコメディアンらしさを発揮して、会話をおもしろい方向にもっていった。ドッドが、自分がバンドを作ったときのために、何かぴったりのバンド名はないかと聞くと、ジョージは間髪入れず（司会者の名前「ゲイ」にひっかけて）「ホモ、だね」と答えた。この部分は11月27日の番組でも、'This Boy'を含むビートルズ出演分の再放送を含む12月26日の「シーン・アット6:30」（午後6時30分から7時）でもカットされなかった。

11月26日（火）

リーガル・シネマ
Cambridge

2回のステージが始まる前、ビートルズは地元のBBCテレビのニュース番組「イースト・アット・シックス・テン」に生出演。ビートルズはリーガル・シネマの楽屋でレポーターのジーン・グッドマンからインタビューを受けた。番組は午後6時38分から7時1分という妙にずれた時間帯に放送された。

11月27日（水）

リアルト・シアター
York

11月28日（木）

ABCシネマ
Saltergate, Lincoln, Lincolnshire

11月29日（金）

ABCシネマ
Market St, Huddersfield, Yorkshire

2回のステージのあいまに、ABCシネマの楽屋にハダースフィールド・テープ・レコーディング・ソサエティの代表者が訪ねてきた。その協会が地元のいくつかの病院の有線放送で流していた月1回の番組「ミュージック・ボックス」のためにメンバーそれぞれにインタビューし、レコード・リクエストを読みあげてもらったのだった。おとなしく謙虚な代表者ゴーデン・ケイは、20年後にラネイという芸名でコメディ番組「アロー・アロー！」のスターとなり、イギリスで絶大な人気者となる。

この日、シングル'I Want To Hold Your Hand/This Boy'がリリース。

11月30日（土）

エンパイア・シアター
Sunderland

12月1日（日）

ド・モンフォール・ホール
Leicester

翌12月2日は、ツアーのオフ日。

テレビ番組でユーモアを発揮

12月2日（月）

エルストゥリー・スタジオ・センター、Cスタジオ
Eldon Ave, Borehamwood, Hertfordshire
グロブナー・ハウス・ホテル、ボールルーム
Park Lane, London

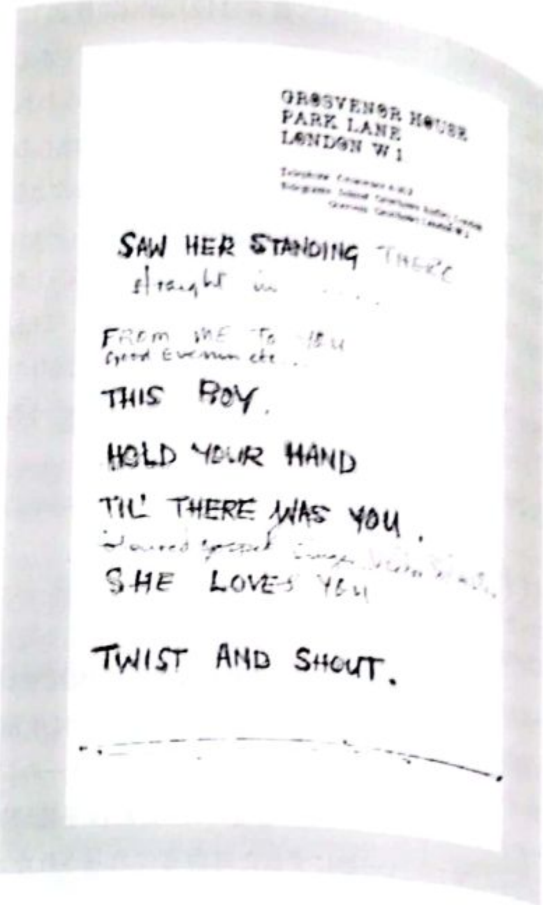
午前中から夕方まで、アソシエイテッド・テレビジョン（ATV）のエルストゥリー・スタジオ・センター（主演映画が製作されたエルストゥリー・フィルム・スタジオの近くにあるがそれとは別のスタジオ）で、人気の高いコメディ・デュオ、エリック・モーカムとアーニー・ワイズが司会を務める番組「モーカム・アンド・ワイズ・ショー」のリハーサルと収録に参加。好評を博したこのときの出演は、1964年4月18日の午後8時25分から9時にATVで放送。1965年7月24日の午後9時20分から10時の「ベスト・オブ・モーカム・アンド・ワイズ」でも再放送される。

わずかなスタジオ見学者の前で、ビートルズは最初に'This Boy'と'All My Loving'を生演奏し、エリックとアーニーによるコメディ劇のあと、再登場して3曲めの'I Want To Hold Your Hand'を演奏した。

歌い終わると、ジョン、ポール、ジョージは楽器を置いてモーカムとワイズが控えていたステージ前に歩み寄っていった（リンゴはドラム・セットに座ったまま）。そのあとがおかしかった。モーカムは長髪の3人を「ケイ・シスターズ」（1950年代終わりに活躍したイギリスの女性トリオ）とからかい、リンゴに向かって「ハーロー、バンゴ！」と叫んだ。それから、とくにジョンとのやりとりがおかしいものとなった。ウイットと

CamScannerでスキャン

12月2日、グロブナー・ハウスでの様子。ステージがないフロア・ショー・スタイル。ポールの手書きによるセット・リストには、当時ビートルズのコンサートMCの定番ジョークのさわりも記されている


GROSVENOR HOUSE
PARK LANE
LONDON W 1

SAW HER STANDING THERE
FROM ME TO YOU
THIS BOY.
HOLD YOUR HAND
TIL THERE WAS YOU.
SHE LOVES YOU
TWIST AND SHOUT.

アドリブを交えたひと幕が始まった。ひとしきり会話が終わって、ワイズとビートルズは、一緒に1曲歌おうということになった。そこで、ビートルズはカンカン帽に縞のジャケットというでたちで、44秒間の'Moonlight Bay'（1912年のマデンとウェンリッチ作による曲で、1951年に映画"ON MOONLIGHT BAY"でドリス・デイが歌って有名になった）を演奏し、その一方でモーカムはビートルズかつらをかぶり、えりなしジャケットを着て「Yeah yeah yeah」とわめきながら登場し、「I Like It!」（ジェリー・アンド・ペースメイカーズのヒット曲のタイトル）と叫んでオチをつけたのだった。これで番組は終了。最後のクレジットが流れるところでは、ようやくドラム・セットから解放されて降りてくるリンゴの姿が大写しになった。ビートルズは多数のコメディアンと共演しているが、もっともおかしな内容となったのは間違いなくこの日の出演だった。

夜のグロブナー・ハウスへの出演はかなり妙なものだった。秋季ツアーの一環ではなく、ロンドンの由緒あるホテルで行なわれた、正装した客を前にしての（痙性脳性麻痺患者へのチャリティを目的とした）フロア・ショーだった。

CamScannerでスキャン

12月3日(火)
ギルドホール
Portsmouth

11月12日予定だった公演がこの日に延期された。翌12月4日から6日まではオフを満喫した。

4か月ぶりのリバプール／休むまもなくコンサート、テレビ、ラジオのインタビュー
12月7日(土)
エンパイア・シアター
Liverpool
オデオン・シネマ
London Rd, Liverpool

4か月ぶりのリバプールでのコンサート。異常な熱気と興奮に包まれた1日となった。午後にエンパイア・シアターで、特別公演として、北部地区のファン・クラブの会員2,500人の前で演奏。ただ、BBCテレビが初めての試みとしてこの公演を収録し、その日の夜に30分の特別番組「イッツ・ザ・ビートルズ!」として放送したので、全国のファンがこの公演を見ることができた。

エンパイア・シアターではこの公演に先立って、やはりファン・クラブのメンバーを動員して、BBCの「ジューク・ボックス・ジュリー」の特別編を収録した。審査員はビートルズの4人。この番組も同日中に放送された。BBCとは、イギリス放送協会ならぬ、ビートルズ放送協会（Beatles Broadcasting Corporation）の略ではないかと言う人々もいた。

「ジューク・ボックス・ジュリー」は午後2時30分から3時15分に収録され、その日の午後6時5分から6時35分に放送。全国の2,300万人がこの番組を観た。いつものようにデビッド・ジェイコブズが司会を務め、13枚のニュー・シングルの審査が行なわれた。対象となったのは、チャンツの'I Could Write A Book'、エルビス・プレスリーの'Kiss Me Quick'、スウィンギング・ブルー・ジーンズの'The Hippy Hippy Shake'、ポール・アンカの'Did You Have A Happy Birthday?'、シャーリー・エリスの'The Nitty Gritty'、スティーブ・アンド・エイディの'I Can't Stop Talking About You'、ビリー・フューリーの'Do You Really Love Me Too?'、ボビー・ビントンの'There! I've Said It Again'、オーキッズの'Love Hit Me'、マージービーツの'I Think Of You'、シャーリー・ジャクソンの'Broken Home'、ジーン・ビンセントの'Where Have You Been All My Life?'、バチェラーズの'Long Time Ago'だった。しかし、最後の3曲分は放送では時間切れのためカットされた。審査員のビートルズは、ポール・アンカ、シャーリー・エリス、ボビー・ビントン、オーキッズの曲以外は、すべてヒットすると判定した。

「イッツ・ザ・ビートルズ!」用のコンサートは午後3時45分から4時30分に収録された。ビートルズは、オープニングに'From Me To You'のショート・バージョン、そして'I Saw Her Standing There' 'All My Loving' 'Roll Over Beethoven' 'Boys' 'Till There Was You' 'She Loves You' 'This Boy' 'I Want To Hold Your Hand' 'Money (That's What I Want)' 'Twist And Shout'、最後に'From Me To You'をもう1回演奏した。番組は午後8時10分から8時40分に放送された。

しかし、残念ながら、この日に放送された2本の番組はBBCにとっては悲惨なものとなった。リハーサル時間が非常に短かったため（「ジューク・ボックス・ジュリー」は15分、「イッツ・ザ・ビートルズ!」は20分）、技術面で不備があったばかりか、さらに悪いことに観客のすさまじい歓声にかき消され、カメラマンや録音担当者はディレクターからの指示を聞くことができなかったのである。BBC上層部はこの結果に狼狽した。ビートルズを全国に独占放送するという名案が、明らかな技術不足という恥ずかしい結果に終わったからである。

さらに、ビートルズはこの日にBBCラジオのインタビュー収録も行なった。クリスマスに放送予定の90分の特別番組「トップ・ポップス・オブ・1963」（午後6時から7時30分にBBCラジオで放送）で使用する2分間の短いものだった。DJのアラン・フリーマンが1963年にチャートでナンバーワンに輝いたシングルをかけ、あいまにアーティストたちのインタビューを放送するという内容だった。

エンパイアでのコンサートと収録を終えたビートルズは、警察に厳重に閉鎖してもらったバッジー・ストリートを250メートルほど走り、オデオン・シネマに向かい、秋季ツアーの・

環である2回のステージをこなした(この日の公演はあとから日程に追加されたもの)。

12月8日(日)
オデオン・シネマ
Lewisham, London

12月9日(月)
オデオン・シネマ
Southend-on-Sea

ビートルズの楽屋に、今度はBBCのテレビ・ニュースのスタッフがインタビューに訪れる。もはや、楽屋でのインタビューは日常茶飯事になっていた。

ジョンが詩を朗読
12月10日(火)
ゴーモント・シネマ
Doncaster

イギリス駐在のオーストラリア人放送記者、ディブス・メイザーのインタビューに楽屋で応じる。インタビューの行なわれたゴーモント・シネマの楽屋は、外で叫び声をあげたり歌ったりするファンの騒音がうるさく、ビートルズのメンバーは時折、大声を張り上げなければならなかった。このインタビューはイギリス国内では放送されず、BBCのトランスクリプション・サービス(海外転送サービス)により海外でのみ放送された。ジョンが、3か月後に出版される初めての著書「イン・ヒズ・オウン・ライト」にも含まれていた'Neville Club'という詩を朗読しているところまで収録したこの興味深いインタビューは、「デイトライン・ロンドン」の第61回、また「コーリング・オーストラリア」の第453回の一部として編集されて、BBCと業務提携しているオーストラリアのラジオ各局を通じて放送された。

12月11日(水)
フューチャリスト・シアター
Foreshore Rd, South Bay, Scarborough, Yorkshire

12月12日(木)
オデオン・シネマ
Nottingham

この日、'I Want To Hold Your Hand'が'She Loves You'に代わり全英No.1に。同じアーティストの曲が1位で入れ替わるという初めてのケースとなった。

12月13日(金)
ゴーモント・シネマ
Southampton

11月1日にチェルトナム公演から始まった長い「オータム・ツアー」の最終日。

金網を張ったコンサート
12月14日(土)
ウィンブルドン・パレ
High St Merton, Wimbledon, London

前週土曜日のリバプール公演と同様の特別公演で、今回は南部地区のファン・クラブの会員のために演奏。午後の公演を終えたあと、ビートルズはパレスのバーのカウンターの中に並んで、3,000人の熱狂的なファン全員と握手を交わしたが、握手したファンがビートルズの前から離れようとしないため、ファンの列は整然と言うにはほど遠かった。テレビと劇場用ニュースのカメラがこの日のイベントのもようを撮影した。

パレスの経営者は、騒ぎまくるビートルマニアの突撃で大切なステージが破損するのを恐れ、ビートルズ用に間に合わせの簡易ステージを作り、ファンを寄せつけないように周囲に金網を張りめぐらせた。ビートルズはこの措置にあまり感心しなかったが、それでもファンが金網に押しつぶされている様子を目撃したジョンは、「もう少し強く押されたら、みんなマッシュ・ポテトになっちまうぜ」と笑い出してしまった。

『ラッキー・スターズ』マージー特集第2弾
12月15日(日)
アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston, Birmingham

CamScannerでスキャン

6月29日放送の「ラッキー・スターズ（サマー・スピン）」のリバプール特集が好評だったため、ABCテレビは通常の「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」で放送する特集第2弾を企画した。出演者はマージーサイド出身者ばかりで、「スピン・ア・ディスク」というレコード・レビュー・コーナーには、キャバーン・クラブのDJボブ・ウーラーも登場した。番組はこの日の午後アストンのスタジオで収録され、12月21日午後5時50分から6時35分に放送された。
（2回のサマー・スピンも含めて）今回で8回目になる「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」への出演では4曲も口パクし、これまでではもっとも多い曲数となった。その内容は'I Want To Hold Your Hand' 'All My Loving' 'Twist And Shout' 'She Loves You'。また、2枚のゴールド・ディスクがビートルズに授与されるシーンも放送された。
この回は、1964年4月にスイスのモントルーで開かれた国際エンターテインメント・テレビ番組コンテストへのITVからの出品番組として選ばれたが、優勝作品にはならなかった。

クリスマス特番にひっぱりだこ

12月17日（火）
プレイハウス・シアター
London

BBCのラジオ番組「サタデイ・クラブ」にメインとして出演。リハーサルおよび収録は、この日の午後3時から6時30分に行なわれ、12月21日の午前10時から正午にBBCラジオで、クリスマス特番として放送された。
ビートルズは、'All My Loving' 'This Boy' 'I Want To Hold Your Hand' 'Till There Was You' 'Roll Over Beethoven' 'She Loves You'の6曲を演奏したほか、'All I Want For Christmas Is A Bottle'（同じ番組に共演していたスーザン・モーガンも歌った、ドーラ・ブライアンのヒット曲'All I Want For Christmas Is A Beatle'の替え歌）をスキャットで披露した。さらに、'Love Me Do' 'Please Please Me' 'From Me To You' 'I Want To Hold Your Hand'と最後にクリスマス・ソングである'Rudolph The Red-Nosed Reindeer'を一気に29秒で歌いきるメドレー'Chrimble Medley'を演奏した。
この番組の午前10時31分から10時59分までの後半の一部はBBCの海外放送で同時放送され、'All My Loving'と'This Boy'が流れた。

12月18日（水）
BBCパリス・スタジオ
London

夏には15回にわたるビートルズ自身のBBCラジオ番組が制作されたが、この日収録された特別番組は、これに勝るとも劣らない画期的なものとなった。この番組は最初からビートルズをメインに据えて企画された2時間の休日向け番組だったからだ。番組はクリスマス翌日の休日（ボクシング・デイ）、つまり、1963年12月26日の午前10時から正午に放送された。
企画段階では「ビートルタイム」という仮題がついていたが、収録に先立って「フロム・アス・トゥ・ユー」というタイトルに決定した。1960年当時のポップ番組にはテーマ曲が必要だったため、リハーサルを含んだ午後7時から10時30分までの収録でビートルが最初に試みたのは、ナンバーワン・ヒットとなった'From Me To You'の歌詞を少し書き直した'From Us To You'をテーマ曲としてレコーディングすることだった。55秒間のこのバージョンは番組のオープニングと、2時間後の番組のエンディングに使用された。
番組では、'She Loves You' 'All My Loving' 'Roll Over Beethoven' 'Till There Was You' 'Boys' 'Money (That's What I Want)' 'I Saw Her Standing There' 'I Want To Hold Your Hand'を演奏。番組の司会は、年末のクリスマス・ショーでもビートルズと共演することになっていた、オーストラリア人のタレント、ロルフ・ハリス。ビートルズはロルフとともに、彼の1960年のヒット曲'Tie Me Kangaroo Down Sport'のビートルズ・バージョンを歌った。一方、ロルフはこの曲にビートルズのヘアスタイルのこととグループの名前について歌う新しい詞をつけていた。
この日収録された「フロム・アス・トゥ・ユー」は、向こう18か月にかけてBBCラジオが制作した5回の休日用ビートルズ特番の第1回となった。番組は5回のうち4回が同じタイトルで放送された。しかし、ビートルズの番組ではあったものの、この当時のこの手の番組の例にもれず、ほかの出演

者も登場した。初回の出演者は、スーザン・モーガン、ジニ
ー・ラム、ケニー・リンチ、ジョー・ブラウン・アンド・ブルバーズ、
ケニー・サーモン・セブン、アラン・エルズドンズ・ジャズバン
ド・ウィズ・ディック・エマリー、そしてロルフ・ハリスだった。
注：これに対抗すべくラジオ・ルクセンブルクのイギリス向
け放送は12月23日から毎週月曜の午後9時から9時15分
にかけて15分番組「イッツ・ザ・ビートルズ」を開始し、3月
30日まで15回続いた。司会はピーター・カーバー。しかし
ビートルズがこの番組のためにインタビューに応じたり演奏
を収録したことはなく、レコードのみを流す番組だった。

クリスマス・ショーのプレビュー

12月21日（土）

ゴーモント・シネマ
Bradford

「ビートルズ・クリスマス・ショー」の北部での2回にわたる特別プレビューの初日。といっても、ビートルズはステージで演奏しただけで、凝った衣装やコメディ劇などの余興、そして豪華なステージ・セットもだった。セットはまだロンドンで制作中だった。

12月22日（日）

エンパイア・シアター
Liverpool

「ビートルズ・クリスマス・ショー」のプレビュー2回目。やはり演奏のみのショー。

盛りだくさんのクリスマス・ショー

12月24日（火）～31日（火）

アストリア・シネマ
Seven Sisters Rd, Finsbury Park, London

ブライアン・エプスタインの企画、主催による「ビートルズ・クリスマス・ショー」は、いかにも彼らしく、コメディ、パントマイム、音楽を一堂に会したものだった。このショーは、1日2ステージずつ16夜にわたり、アストリア・シネマで開催された。ただし、12月24日と31日は1ステージのみ。また、12月25日と29日、および1月5日にはショーはなく、最終日は1964年1月11日だった。30ステージ分の10万枚のチケットは10月21日に売り出され、11月16日までにすべて売り切れた。
ビートルズのこのショーでの演奏レパートリーは、'Roll Over Beethoven' 'All My Loving' 'This Boy' 'I Wanna Be Your Man' 'She Loves You' 'Till There Was You' 'I Want To Hold Your Hand' 'Money (That's What I Want)' 'Twist And Shout'だった。また、いくつかのコメディやパフォーマンスにも参加し、観客を大いに喜ばせた。
ショーの出演者は、ほとんどがブライアン・エプスタインのNEMSエンタープライズに所属しているアーティストだった。ビートルズをはじめとする北部出身の出演者は、12月24日の夜遅くリバプールに飛行機で戻り、家族とクリスマスを過ごしたあと、26日の朝ロンドンに戻った。

CamScannerでスキャン

Introduction
1964

CamScannerでスキャン

年明けから「ビートルズ・クリスマス・ショー」の後半にあたる10夜のショーをこなし、ATVの生番組『パル・パーネルズ・サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム』に再び出演したビートルズは、1月14日、オランピア・テアトルでの連続公演のためパリに向かった。リバプールの濃霧で立ち往生したリンゴだけは、ニール・アスピノールとともに1日遅れて出発したが、オランピアでの連続公演にそなえてベルサイユのシネマ・シラノで行なわれたドレス・リハーサル（観客を入れたリハーサル）には間にあった。

しかし、この夜の結果は、はっきり言ってさんざんなものだった。フランス側の段取りも自分たちの演奏も、4人が満足するにはほど遠いレベルだった。翌1月16日のオランピアでの初日公演はそれに輪をかけてひどい結果を生んだ。ステージではアンプが3回も故障し、ジョージはそのうちの1回はフランス側関係者の手抜きだったのではと疑った。おまけに初日の客はほとんどがドレスアップしたパリ社交界の人々で、リバプールからやってきた4人とのあいだには、互いを思いやる態度がまるで欠けていた。客の反応は冷ややかなもので、参集していたフランス報道陣のレビューも似たようにまるで気持ちの入っていないものだった。新しくビートルズの広報担当となったブライアン・サマビルは、何とかしてパブリシティ効果をあげようと、わざとらしい騒動を楽屋で起こしたほどだった。

念願のアメリカ進出

目覚ましい勢いで成功を手にしてきたビートルズは、フランスのこの意外な冷淡さに多少は気落ちしたものの、さほど気に病むことはなかった。その夜、ジョルジュ・サンク街にあるホテルのスイートルームに戻ると、思わぬ朗報が届いていたからである。それは、アメリカの2大レコード業界誌のうちのひとつである『キャッシュボックス』の翌週のシングル・チャートを知らせる情報で、'I Want To Hold Your Hand'が、43位からいきなり1位に躍り出たというものだった。

これこそブライアン・エプスタインとビートルズが何よりも待ち望んでいた突破口だった。ごくまれなケースを除いて、それまでアメリカのチャートでチャンスをモノにしたイギリスのバンドなど存在しなかったからだ。しかし、'I Want To Hold Your Hand'は発売から3日目にしてアメリカじゅうで25万枚を売った。1月10日には100万枚を突破、1月13日にはニューヨーク市だけで1時間に1万枚も売るという勢いだった。しかも、アメリカではキャピトルのほかにビー・ジェイとスワンというふたつのレーベルも同時にビートルズのシングルをリリースしていたのだ（おまけにビー・ジェイにリリース権が渡る前にリバティ・レーベルとローリー・レーベルが'Please Please Me'を却下していたので、この勢いを目の当たりにして地団駄踏んだレーベルが少なくともふたつはあったことになる）。その結果、1963年にビートルズが制作した3枚のシングルと2枚のアルバムのすべてが、いきなりこの時期に猛烈な勢いでアメリカのチャートを邁進するという事態になった。

さらに、この盛り上がりに突然火がついたのは、ビートルズがアメリカ全国ネットのテレビ番組『エド・サリバン・ショー』出演のためニューヨークを訪れる数日前のことだった。番組への出演が決まったのは3か月前だったから、これは本当に偶然でしかなかったが、それにしても、いくらすばらしいと言っても足りないほどのお膳立てがそろってしまっていたわけだ。

一方、ビートルズを時代のヒーローとして書きたてたイギリスのマスコミは、これまでの例にもれず、今

CamScannerでスキャン

度は4人をゴシップ・ネタの餌食として狙い始めていた。アメリカのマスコミは若者の心をとらえたこのイギリスのポップ・グループの情報を手に入れようとやっきになり、ビートルズの情報なら何でも受け入れるようになっていた。レポーターたちはビートルズとの取材の約束を取りつけるために、大挙してわざわざパリまで飛んできた。

ブライアン・エプスタインにも、アメリカからの来訪者があった。ニューヨークの劇場手配エージェント、ジェネラル・アーティスツ・コーポレーション（GAC）のノーマン・ワイスである。彼はオランピア・テアトルでビートルズと共演していたトリニ・ロペスのマネージャーとしてパリに来ていた。そしてワイスは、GACでの同僚で、独立プロモーターとしてもシアター・スリー・プロダクションズという会社を切り盛りしていたシド・バーンスタインが、ビートルズをニューヨークのカーネギー・ホールにどうしても出演させたがっているという知らせを伝えてきた。しかも、すでに2月12日に会場を押さえているという。タイミングのいい時期が来るまではダメだと、これまでエプスタインはそのホールへの出演契約をなるべく避けて通ってきていた。しかし、今こそ契約のときだ。ワイスはバーンスタインの代理人として、その契約をパリでエプスタインと交わした。カーネギー・ホールでの2回の出演料は7,000ドル。さらに、GACを代表してワイスは2月11日のワシントンDCでの1回の出演契約も結んだ。やがて、盛り上がりに欠ける3週間のパリ公演もまもなく終わろうとしていた2月2日、ビートルズはパリのアメリカ大使館に赴き、アメリカで公演するのに必要なビザを取得した。2月5日、メンバーはいったんイギリスに帰った。

その2日後の2月7日、4人を乗せたパンナム101便ボーイング707は、ニューヨークにある、名前を変えたばかりのジョン・F・ケネディ国際空港に、現地時間の午後1時20分に到着した。空港での歓迎ぶりは、イギリスのすさまじいビートルマニアよりもさらに激しかった。3,000人のファンからの悩ましい絶叫にさらされた4人は、自分たちがどうしてこんなにもてはやされるのか不思議でならなかった。アメリカには大スターなんかごろごろいるはずじゃないか。そもそも自分たちにインスピレーションをもたらし影響を与えてきた音楽を生み出したのは、このアメリカだった。ビートルズとしては、自分たちはアメリカにすでにある音楽をまた投げ返してみたにすぎないと考えていたのだ。

しかし、ケネディ大統領の暗殺以来、暗い気分を引きずっていたアメリカがこの歓迎すべき明るい話題を両手を広げて待ち構えていたということを、ビートルズは理解していなかった。今考えるとばかばかしい現象のように思われるだろうが、アメリカの全国民は全身全霊を込めてビートルズに飛びつこうとしていたのだ。

2月9日、728人の熱狂するニューヨークのティーンエイジャーたちを前に、ビートルズは初めて「エド・サリバン・ショー」で演奏を披露した。ACニールセン社の調べでは、およそ2,324万世帯、人数にすると約7,300万人がこの放送を観て、視聴率世界最高記録を樹立した。その2日後、およそ大混乱以外のなにものでもなくなったワシントン・コロシアムのステージに立ったビートルズは、アメリカで初めてのライブ・コンサートを行なった。さらにその24時間後には、由緒あるカーネギー・ホールでもやはり熱狂の渦が待ち構えていた。会場には2回のショーを行なったビートルズの身の安全を考えて362人もの警官が出動しなければならないというほどの騒ぎだった。

2月21日にアメリカを離れたとき、ビートルズがあとに残してきたのは、まさに興奮で何もわからなくなっ

CamScannerでスキャン

てしまった国だった。それは、現実にはありえないような出来事だった。しかし、エプスタインはこのアメリカ訪問をまったく独自な着眼から現実のものにすることに成功したのだ。その着眼とは、それまでどんなマネージャーも考えつかなかった発想だった。宣伝効果を出演料よりも優先させるのである。そしてその発想からエプスタインは、アメリカから怒濤のように舞い込んできた再訪問の依頼を臆することなくすぐに断っていった。つまり、ビートルズの過剰露出を危ぶみ、また、ファンのニーズをあおる別な手法をすでに練っていたのだ。そのせいで、ビートルズが再びアメリカを訪れるには、半年後の8月まで待たなければならなかった。

1963年がビートルズのイギリス制覇の年だったとすれば、1964年は世界制覇の年だった。本国での人気は不動のものとなったため、エプスタインは国外に目を向け始めた。3月9日、(意識してロンドン・パラディアムの隣に移転した) 新しいNEMSのロンドン・オフィスの机で、エプスタインはオーストラリア、ニュージーランド、オランダ、デンマーク、香港、スウェーデンでの出演契約書を吟味していた。ほかにもイギリスのプロモーター、アーサー・ハウズからも国内ツアーの熱心な誘いがあった。また、エプスタインは2度目のクリスマス・ショーを計画していた。結局、この年のビートルズはそれをすべてこなし、さらに2枚のアルバムとシングルをレコーディングして、おまけに映画まで1本作ったのだ。

初の主演映画

アメリカから帰国して9日後の3月2日、ビートルズは映画“A HARD DAY'S NIGHT”の撮影に入った。これまでアメリカ、イギリスを問わず製作されてきたポップ・スター主演の映画は、どれもくだらないものというのが定説だった。低予算で手っとり早く稼げるだけ稼ごうという発想で作られる映画は、大抵は知性のかけらもない内容だった。しかし、このビートルズの映画は内容のあるものとして太鼓判を押され、やることなすことすべてがその後の手本となった。どうせ荒稼ぎをもくろんだポップ映画だろうと踏んだスポンサーの映画会社(ユナイテッド・アーティスツ)が提供した予算は18万ポンドと例にもれず低予算。しかも、わずか8週間で製作されたにもかかわらず、セミ・ドキュメンタリー・タッチで作られた“A HARD DAY'S NIGHT”は、時代性をとらえたすぐれた芸術作品となり、この種の映画ではスタンダードとなった。

ブライアン・エプスタインがスタイル、洞察力、ナイーブさ、献身の4つを理想的な割合で兼ねそなえた、ビートルズにとって最高のマネージャーだったのと同様に、ジョージ・マーティンもまたクリエイティブで、実験心に富み、何でも聴いてみる寛大さを持ち合わせ、音楽については専門的に詳しいのにロックやポップスには染まっていないので先入観もなく、コメディ・レコードの効果音に精通しているという、これ以上言うことのないプロデューサーだった。また、成功を求めながらも、実の親戚のように目をかけて世話をしてくれるディック・ジェイムズもビートルズには理想的な版権管理代理人だった。このように人に恵まれてきたビートルズは、いよいよ映画製作というとき、まったく無名なリチャード・レスターという監督に出会うこととなった。そして、観察力が鋭く、ウイットに富み、シュールリアリズムと意外性を好むレスターもやはりこの映画にはうってつけの人材だった。実際、“A HARD DAY'S NIGHT”におけるレスターの演出は、かなりすぐれたものとなった。それと同様に、エプスタインとビートルズの勧めで脚本を担当した、テレビ、ラジオ、劇場で大活躍していたリバプール出身のシナリオ・ライター、アラン・オーウェンの仕事ぶりもすば

CamScannerでスキャン

らしかった。数年後、ジョンはこの映画のキャスティングはじつにいきあたりばったりで陳腐だったと批判しているが、映画そのものは最初から最後までまったく飽きることなく楽しめて、おもしろくて機知に富んだ愉快な作品だった。

撮影中のビートルズの仕事ぶりは、作曲からレコーディング、記者会見、コンサート、ラジオやテレビへの出演と信じられないような多忙さをきわめたが、それだからといって仕事がいいかげんになることは決してなかった。そして、3月20日、ニュー・シングル 'Can't Buy Me Love' がリリースされた。発売3日前、EMIは今回イギリスだけで予約注文が100万枚を超えたことを発表した。アメリカでの予約注文はなんと210万枚に達していた。大西洋の両側で、ビートルズがまたもや何週間もナンバーワンを奪うことは確実だった。そして 'Can't Buy Me Love' はビートルズにとって、ついこの前までイギリスのバンドにはまったくたちうちできなかったアメリカのチャートの完全支配をさらに強固なものにするシングルとなった。アメリカのもうひとつの主要レコード業界誌「ビルボード」の1964年4月4日付ホット100シングル・チャートでは、ビートルズは1位、2位、3位、4位、5位、31位、41位、46位、58位、65位、68位、79位にランクインしていた。その翌週、ビートルズはさらに2枚のシングルをチャートに加え、アルバム・チャートでも1位と2位を独占した。さらにほかのイギリスのバンドも続々とアメリカに進出し始めていた。ビートルズは、今やアメリカの音楽ファンに、これまでとは違った視点でイギリスを見る機会を与えたのだ。

世界制覇

しかし、ビートルズのチャート支配はイギリスとアメリカに限ったことではなかった。オーストラリアでは、1964年4月3日、シドニーのシングル・チャートのトップ6すべてをビートルズのレコードが占めた。映画 "A HARD DAY'S NIGHT" と同名のアルバムが完成すると、ビートルズはそのオーストラリアに向けて旅立った。

その途中でデンマーク、オランダ、香港での公演を行なってからオーストラリアに向かったこのツアーは、振り返ってみると、ビートルズにとってあまり楽しいものではなかった。まず出発の前日6月3日、リンゴが扁桃腺炎と咽頭炎で倒れてしまったのだが、ツアーをキャンセルするにはもう遅すぎた。解決策はひとつしかなかった。臨時ドラマーを雇うことだ。しかし、ジョージが強硬に反対し、リンゴが参加できないなら自分もツアーを降りると言い出した。エプスタインとジョージ・マーティンは何とかジョージをなだめ、出発時間が迫るなかでエプスタインは、絶対にリンゴ脱退などという変な噂の原因になりえないような、存在感のない、無名のドラマーを探してこなければならないと考えた。そこでエプスタインとジョージ・マーティンが思いついたのが、パイ・レーベルと契約していたシャブダブズのリーダー、ジミー・ニコルだった。数年前から活動を続けてきていたニコルは、ブージー・アンド・ホークスのドラム修理工としてこの世界に入り、ドラマーとしてはジョージィ・フェイムのブルー・フレイムズなどと演奏を重ねていた。また、このころセッション・ミュージシャンとして、エプスタインがマネージメントをしていたトミー・クイックリーのバックを務めたこともあり、弱小レーベルのトップ・シックスからリリースされた "BEATLEMANIA" というカバー・アルバムでもドラムを叩いていた。少なくとも、ビートルズのレパートリーを叩くのに問題はなかったわけだ。

その日の昼近く、ジョージ・マーティンはさっそくニコルに電話をかけ、午後3時からのグループとの練習

のためEMIスタジオに呼んだ。6曲ほどリハーサルし、それから18時間後、ジョン、ポール、ジョージそしてニコルは、デンマークへ飛び立った。そこからオランダ、香港、オーストラリア、ニュージーランドへと移動することになっていた。

オーストラリアでの歓迎ぶりは、4か月前のアメリカよりもさらに盛大だった。ツアー中は、4人がどこへ行こうと熱狂的な騒ぎが待ち受け、やがてそれは常にビートルズにつきまとうようになった。24時間体制で繰り広げられる混乱状態のなかで、大勢の人がケガをした。ビートルズの目の前を、市長や町の名士たち、空港での歓迎、記者会見、街頭でのファンの歓迎、そして絶叫するオーディエンスが延々と来ては通り過ぎていった。その間、4人はひっぱられ、押しやられ、揺すられ、つかまれ、そして目の前で悲鳴をあげられるという体験を繰り返し味わった。たまには楽しいひとときもあったが、ツアーの間じゅう繰り広げられるこのばか騒ぎに、4人はほとほと嫌気がさした。アデレイドでは、メンバーがバルコニーに姿を現すのではないかと、ビートルズの泊まっていたホテルの前に30万人のファンが押し寄せた。メルボルンでも25万人がホテルの前に集まった。こうした様子があまりにナチス・ドイツの集会のようだったので、ジョンはヒトラーの口髭のように黒い櫛を鼻の下にあて、ものまねをしてふざけると、みんなもすぐにナチス式敬礼のまねをしてそれに応じるのだった。

6月14日、メルボルンでリンゴがビートルズに合流した。（最終的には12月2日に切除することになる）扁桃腺の炎症が一時的にひいたリンゴは、11日の朝ロンドンの病院を退院し、サンフランシスコ、ホノルル、フィジー、シドニーを経由して駆けつけた。そのため、短い間だったがビートルとして臨時ドラマーを務めたニコルはお役ご免となった。しかし、ビートルズの臨時ドラマーというなにものにも替えがたい名誉を得たニコルは、報酬として500ポンドと必要経費を受け取ったうえ、「ビートルズとブライアン・エプスタインからジミーへ、感謝を込めて」と刻まれたエターナマティックの金の腕時計をもらった。

オーストラリア・ツアーは総額20万ポンド以上の収益をあげ、約20万人の観客動員数を記録し、各地で観客動員記録を塗り替えた。しかし、ビートルズは再びオーストラリアを訪れることはなかった。

ロンドンに戻ったビートルズは、7月6日、ロンドン・パビリオンでの“A HARD DAY'S NIGHT”のロイヤル・ワールド・チャリティ・プレミアに出席した。ビートルズの姿を拝みたいと1万2,000人のファンがつめかけるものと予測した警察は、ピカデリー・サーカスと周辺の道路を封鎖した。映画は各方面から絶賛を浴び、B級映画を見せられるものとたかをくくっていた硬派の新聞すら、ほめ言葉を並べたてた。4日後の7月10日、今度はリバプールで北部でのプレミア・ショーが開かれた。ビートルズはリバプール空港からあらかじめ決められたルートで町の中心部に向かい、タウン・ホールでのリバプール市主催のレセプションに出席し、それから上映会に足を運んだ。リバプールの全人口の4分の1以上にあたる20万人が、車に乗ったビートルズが通る道路に並び、タウン・ホールの外にはさらに2万人以上が集まった。

映画の公開と同時に、サウンドトラックの7曲とそれ以外の6曲が収録された同名のアルバムが発売された。絶えまないビートルマニアとツアーの混乱のなかで、レノン＝マッカートニーのコンビは13曲ものすぐれた新曲を書きあげていたわけで、これは驚くべき仕事ぶりだ。アルバムと同時発売のシングルは、あっというまに世界じゅうでチャートのトップを飾った。

イギリス国内でいくつかのステージに出演し、2度目のスウェーデン・ツアーを行なったあと、ビートルズ

CamScannerでスキャン

は8月に初めてのアメリカ巡業を開始した。1963年11月から12月にかけてのイギリス・ツアーがいつまでもイギリスのファンの記憶に残るものとなったように、このツアーはアメリカのファンにとって、もっとも思い出深いビートルズのツアーとなった。そして、ビートルズ自身にはこれはまさしく巡業とも言える内容のものだった。というのも、34日間のうちに24都市で26公演を行ない、32回のステージをこなさなければならなかったからだ。こんな強行軍はイギリス国内ではごくあたりまえだったが、広大なアメリカではとんでもないことだった。ビートルズはほとんどの時間を飛行機かホテルかリムジンで過ごし、公演地ごとに記者会見を行ない、町や会場では人目につかないよう出入りしなければならなかった。ツアーは確かにビートルズに一財産を作り出したが(おかげでアメリカ国税庁から目をつけられるほどだった)、ツアー中はほとんどいつも自分たちがどこからどこへ移動しているのかすらわからない状態だった。また、このツアーのときのビートルマニアの様子にしても、泣いたりわめいたりの騒動がひっきりなしに続くばかりだったので、それをすべて正確に記述することなど当然不可能である。それでも、アメリカを回った34日間にビートルズを取りまく混乱ぶりがどれほどすごかったかを物語る逸話はいくつか残されている。

たとえば、8月18日、ビートルズはサンフランシスコからアメリカに上陸したが、空港には9,000人の熱狂的なファンがつめかけていた。滑走路でリムジンに飛び乗った4人は50メートルほど離れた、ファンが近づけないようにフェンスを張りめぐらせた敷地に乗り込んだ。敷地は写真撮影のために設置されたものだった。しかし、9,000人のファンはそこへ駆けつけるとフェンスを取り囲み、前へ前へと誰もが押し寄せて、そのおしくらまんじゅう状態のなかで多くのファンが気絶したほどだった。やがてフェンスは金切り声をあげるファンにとうとう倒されて、踏みつけられてしまったが、そのわずか数秒前にビートルズは現場から逃げ出すことに成功した。明らかに動揺を隠せなくなった一行はヒルトン・ホテル15階の豪華なスイートルームへ一目散に向かったが、ここもファンに取り囲まれていた。しかし、取り囲んでいるのはファンばかりでなく、大勢の武装警官や警備員もいた。それなのに、この日ホテルの6階では、中年の女性が暴行強盗にあうという事件があった。彼女は殴打され金品を奪われたが、助けを求めた彼女の必死の叫びは無視された。誰もが、またビートルズ・ファンが泣きわめいているとしか思わなかったからだ。

サンフランシスコ滞在中、エプスタインのもとに野球チーム、カンザスシティ・アスレチックス(現在はオークランド・アスレチックス)のオーナーで大富豪のチャールズ・O・フィンレーが訪ねてきた。フィンレーは、ビートルズの公演スケジュールにカンザスシティが入っていないのがとても残念で、自分は何とかしてビートルズの公演を実現させると市民に約束してきたのだと切り出した。そして、エプスタインに1回の公演の出演料として5万ドルを、その次に10万ドルを提示したが、エプスタインはこれを断った。公演するとなれば9月17日しかなかったが、この日はニューオリンズでの休養日にあてておきたかったからだ。しかしフィンレーはあきらめず、数日後にロサンゼルスまでやってきて、エプスタインの目の前で10万ドルの小切手を破いて灰皿に放り投げると、新たに15万ドルの小切手を書いたのだった。1回の公演の出演料としてはアメリカ新記録だった。エプスタインは、「あの子たち(ボーイズ)」と相談してくるから少し待ってくれとフィンレーに頼んだ。そして、延々とトランプに興じていた4人の目の前に、15万ドルの小切手を差し出した。「どうする?」というエプスタインの問いかけに、ポール、ジョージ、リンゴは黙ってうなずいた。ジョンは小切手を見ようともせず、肩をすくめて「何でも仰せのとおりにやるまでさ」と答えた。エプスタインはフィ

CamScannerでスキャン

シレーのところに戻り、申し出を引き受けた。その公演当日、ビートルズはいやいやながら演奏をして、1分につき4,838ドルを稼いだ。キャバーン・クラブに最後に出演してからまだ13か月後のことだった。

カンザスシティを離れると、ビートルズが宿泊したホテルのマネージャーは、メンバーが使用した16枚のシーツと8枚の枕カバーをシカゴのふたりのビジネスマンに750ドルで売りさばいた。これらは洗濯されずに8センチ四方にカットされ、台紙に固定されたうえで、ビートルズが使用したという証明書とともに1枚10ドルで販売された。8月23日のハリウッド・ボウルのコンサート直後にメンバーが顔を拭いたタオルも、同様にカットして売られた。ニューヨークでは、「ビートル・ブレス（ビートルの息）」なる缶詰が売られ、ビートルズが使った風呂の湯や髭そりフォームを入手したいというリクエストまで殺到した。一方、楽屋には車椅子に乗った身体障害者がやってきて、リバプール出身の若者を救世主のようにあがめ、手をあてて治療してくれと頼むことも何度かあった。これにはさすがの4人もぎょっとした。ラスベガスのコンベンション・センターでの2回のステージのあいまには、爆弾をしかけたという脅迫電話があり、4人はいつ爆発が起こるかわからない恐怖のなかで演奏した。さらに、的中率の高いことで有名な占星術家が飛行機事故を予言し、新聞の見出しをにぎわせていた。エプスタインがツアーのために3万7,950ドル50セントも出してチャーターした飛行機が、フィラデルフィアからインディアナポリスに向かう途中で墜落し、生存者はいないだろうと予言したのだ（この予言はわずかな違いで当たった。ビートルズが利用したのと同じ飛行機が1966年4月に墜落し、80人以上の兵士の命を奪ったからだ）。

そして、このツアーは9月20日のニューヨーク・シティでのチャリティ・コンサートを最後に幕を閉じた。この最後のコンサートでは、大声を張り上げるティーンエイジャーにはさまれた優雅な装いの社交界の人々が怒りをあらわにした。その一方でステージのビートルズは、アンプがこれまでで最悪のものが用意されていたことがわかり、すっかり嫌気がさしていた。翌日、一行はロンドンに戻った。ビートルズは8月18日以来、63時間以上におよぶ移動時間で、3万6,397キロも移動したことになった。そのうち飛行機では3万6,107キロ、陸上では290キロになる。さすがのビートルズも、その後こんなツアーに携わることは二度となかった。

成功したゆえの悩み

しかし、帰国してから19日後の10月9日、1964年に行なわれた唯一のイギリス・ツアーがまた始まった。イギリスのビートルズ・ファンをなだめるために4月に発表されていたこのツアーは、33日間で25都市を回り、27公演で54回のステージをこなすというスケジュールだった。そして、スケールこそアメリカより小さかったが、やはりビートルマニアは同じように手がつけられなくなっていた。それにどこに行っても、4人の「監禁されている」という思いもアメリカのときと変わらなかった。とにかく、今度のイギリス・ツアーでも、ビートルズはイギリスの主要都市をほとんどすべて回り、ゴーモント、ABC、グラナダ・シネマなどの会場に出演した。しかしこういったシネマなどの多くは、3,000人以下しか収容できず、数多くのファンがチケットを入手できずに嘆くことになった。

そして、ビートルズが世間を大騒ぎさせた1964年も幕切れを迎えようという年の瀬になると、今度はビートルズの新曲'I Feel Fine'が世界中のシングル・チャートのトップを占め、アルバム・チャートでは、

さまざまな仕事のあいまを縫ってレコーディングされていた"BEATLES FOR SALE"がトップの座につ
いていた(1964年から1970年までに本国イギリスでリリースされたアルバムは12枚であるが、アメリカの
キャピトルはシングル曲を利用して18枚のアルバムを制作。この"BEATLES FOR SALE"のアメリカ
盤は"BEATLES '65"というタイトルで発売された)。
　年末からは、ロンドンのハマースミス・オデオンで「アナザー・ビートルズ・クリスマス・ショー」に出演し
なければならなかった。9月7日に発売された13万2,240枚のチケットもすべて売り切れていた。
　この1年は確かにビートルズにとってものすごい年ではあった。しかし、4人にしてみれば、こんな1年は
もうまっぴらだった。

ビートルズの本拠地、EMI第2スタジオのコントロール・ルームから
スタジオへ続く20段の階段の途中でポーズをとるジョージ

CamScannerでスキャン

新年はクリスマス・ショー後半から

1月1日(水)~11日(土)

アストリア・シネマ
Finsbury Park, London

1964年に入り、アストリア・シネマでは1963年12月24日に開幕した「ビートルズ・クリスマス・ショー」が引き続き10夜にわたって行なわれた(1月5日は休演日)。

ジョージとリンゴのラジオ出演

1月5日(日)

Green Street, London

ジョージとリンゴは1月12日のBBCのラジオ番組「ザ・パブリック・イヤ」(午後3時から4時に放送)へのちょっと変わった出演分を収録した(時間は不明、場所はロンドン中心部のグリーン・ストリートをはさんで向かい合っていたトニー・ホールか、ジョージとリンゴの部屋のいずれか)。「エア・メイル」というリスナーからの投書を紹介するこの番組のレギュラー・コーナーにジョージとリンゴが手紙を書き、それを読みあげてテープに録音し、そのテープをオン・エアするという設定だった。手紙の内容は、12月29日に放送されたこの番組で、ふたりの友人でもあるホールが、ビートルズも好きな音楽、とくにアメリカのR&Bをリスナーのみんなにも聴いてほしいと話したことに関連するものだった。
ジョージとリンゴはそんなホールの気持ちに共感して出演することにしたので、ふたりで1曲リクエストすることになっていた(ミラクルズの'I've Been Good To You'が選ばれた)。このときのふたりのやりとりは少なくとも2テイク収録された。打ち合わせでは、ジョージが「メアリー・ウェルズ、ミラクルズ…、マービン・ゲイは言うまでもないけどね」と好きなアーティストをあげたら、そこへリンゴがボケを入れるはずだった。リンゴが「マービン・ゲイ?」とツッコミを入れ、ジョージが「言うまでもないって言ったんだから、言うなよ!」とオチをつけるはずだったのだ。ところが、最初のテイクではリンゴがボケるのを忘れてしまい、大笑いされてやっと気がついた。2回目のテイクは打ち合わせどおりいった(1月12日の放送では最初のテイクが使用され、2回目のテイクは1972年、BBCラジオ1のドキュメンタリー番組「ザ・ビートルズ・ストーリー」でようやく放送される)。

1月7日(火)

プレイハウス・シアター
London

この日はメンバー全員で通常のBBCラジオ収録。ビートルズがアメリカに行っている間の、2月15日の午前10時から12時までの「サタデイ・クラブ」の放送分である。リハーサルも含め、収録は午後2時30分から4時までプレイハウス・シアターで行なわれた。そのあと4人はアストリア・シネマに駆けつけ、クリスマス・ショーの2回のステージをこなした。
「サタデイ・クラブ」の収録では、'All My Loving' 'Money (That's What I Want)' 'The Hippy Hippy Shake' 'I Want To Hold Your Hand' 'Roll Over Beethoven' 'Johnny B Goode' 'I Wanna Be Your Man'の7曲を演奏した。最初の2曲は、午前10時31分から10時59分までのBBC海外同時放送分に含まれた。

2度目のパラディアムで
アルマ・コーガンと共演

1月12日(日)

ロンドン・パラディアム
London

大好評だった1963年10月13日の初出演に続き、ATVの「バル・パーネルズ・サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム」に再び生出演。初出演時の出演料は250ポンドだったのが、今回は1,000ポンドにはねあがっていた。リハーサルに参加したので4人は1日の大半をパラディアムで過ごしたことになった。午後8時25分から9時25分までの生放送では、ビートルズはメインとして出演し、司会のブルース・フォーサイスと一緒にお笑いコーナーにも登場した。そして、番組最後に'I Want To Hold Your Hand' 'This Boy' 'All My Loving' 'Money (That's What I Want)' 'Twist And Shout'の5曲を演奏した。
共演者は、歌手のアルマ・コーガン(1966年に亡くなるまでビートルズと親しかった)、アイルランド出身のコメディアン、デイブ・アレン(1963年2月のヘレン・シャピロのパッケージ・ツアーで司会を務めたときにビートルズと知り合っていた)。恒例のフィナーレでは、ビートルズ、フォーサイス、コーガン、

CamScannerでスキャン

アレンが回転台の上に乗り、'Startime'に合わせて観客に手を振った。

フランスで初仕事

1月15日(水)

シネマ・シラノ
Rue Rameau, Versailles, France

フランスでの最初のステージは、パリのオランピア・テアトルでの3週間公演にそなえて、出演者全員が参加してのウォームアップ公演だった。集まった観客は2,000人。
1月13日は久しぶりのオフだった。翌14日には、ジョン、ポール、ジョージがロンドン空港からパリに向かった。ル・ブールジェ空港では60人のフランスのティーンエイジャーが出迎えた。リンゴは1日遅れて出発。
この日、キャピトル・レコードが、イリノイ州シカゴで、ビー・ジェイ・レコードに対する今後のビートルズの作品販売禁止命令を認められた（ビー・ジェイ・レコードはビートルズの作品をアメリカで初めてリリースしたレコード会社だったが、バンドがのちにキャピトルと契約したため）。

パリ公演、本格的に開始

1月16日(木)～2月4日(火)

オランピア・テアトル
Boulevard des Capucines, Paris, France

1日2回、ときには3回もステージに立たされることがあった、18日間にわたるオランピアでのマラソン公演では、毎回9組の出演者が参加していた。ビートルズのほかに、フランスの女性歌手シルビー・バルタンや'If I Had A Hammer'で有名なアメリカの歌手トリニ・ロペスが出演していたが、そのうち誰がメインなのかは明らかにされなかった。もっとも、毎回最後に登場したのはビートルズで、'From Me To You' 'Roll Over Beethoven' 'She Loves You' 'This Boy' 'Boys' 'I Want To Hold Your Hand' 'Twist And Shout' 'Long Tall Sally'を演奏した（昼の部では曲数を減らして短いセットにすることもあった）。
3週間のうち、休みは21日と28日の2回の火曜日だけだった。28日には、ジョンとジョージが数時間ほどロンドンに戻った。
1月19日の昼のショーの一部は、フランスのラジオ局ヨーロッパ1の「ミュージコラマ」という番組で午後1時から2時の間に生放送された。リスナーが聴けたのは、トリニ・ロペス、シルビー・バルタン、そしてビートルズの5曲、'From Me To You' 'This Boy' 'I Want To Hold Your Hand' 'She Loves You' 'Twist And Shout'だった。
翌1月20日、ヨーロッパ1はビートルズの短いインタビューを放送。おそらくロベール・マーシーの番組（正午から12時30分）で使われたと思われる（詳細までは解明できず）。
1月22日には、午後8時30分から9時15分放送のフランスのテレビ番組「アージュ・タンドル・エ・テート・ドゥ・ボワ」に出演するかもしれなかった（当時フランスにはテレビ局がひとつしかなかった）。「テレラマ」というテレビ雑誌には、ビートルズの出演が仮決定と書いてあり、要確認ということになっていた。しかし、結局ビートルズは出演しなかった。
1月24日、パリのスタジオでAFN（American Forces Network：米軍放送）のラジオ・インタビューを収録。これは、翌日放送の「ウイークエンド・ワールド」という番組に使われて、西ドイツ駐留米軍向けに放送された（イギリスでも344メガヘルツで同放送を受信することができたが、ただし午後6時以降だけだった。あいにくこの番組は午後6時以前に放送された）。

ドイツ語バージョンのレコーディング

1月29日(水)

パテ・マルコーニ・スタジオ
Rue de Sevres, Boulogne-sur-Seine, Paris, France

24日、午前10時から10時45分にかけてロンドンのEMIスタジオでは、1963年10月17日にレコーディングした'I Want To Hold Your Hand'のテイク17からリズム・トラックを、バランス・エンジニアのノーマン・スミスがテープにコピーした。ノーマン・スミスとジョージ・マーティンは、このテープを持ってフランスに赴き、イギリスの外でのEMI用セッションが行なわれた。そして、1月29日の昼前後に（詳細な時間は不明）、ビートルズはフランスのレコーディング・スタジオで、当時ビートルズの作品のなかでもっとも有名だった2曲をドイツ語でレコーディングした。
EMIの西ドイツ支社であるエレクトローラ・ゲゼルシャフトは、以前からエプスタインとジョージ・マーティンに、ドイツ語でなければ莫大なレコードの売り上げは期待できないと主

CamScannerでスキャン

張し、ビートルズにドイツ語でレコーディングしてもらいたいと申し入れていた。ビートルズは当初渋っていたが、やがて同意して、この日に'Sie Liebt Dich（シー・ラヴズ・ユー）'と'Komm, Gib Mir Deine Hand（抱きしめたい）'をレコーディングした。エレクトローラはビートルズのためにドイツ語の通訳を連れてきたが、1960年から1962年にかけてハンブルクに長く滞在していたので、ジョン、ポール、ジョージは比較的ドイツ語に慣れていた。

'Komm, Gib Mir Deine Hand'は、1963年10月17日のリズム・トラックにドイツ語のボーカルを11テイク録音して完了。マスター・テープはテイク5とテイク7を編集して作られた。'Sie Liebt Dich'はリズム・トラックを含めて最初からレコーディングし直し、14テイクで完成した。2曲のレコーディングはかなり順調に進んだので、1月31日に予約されていた2回目のセッションがキャンセルされただけでなく、この日の時間内にもう1曲、今度は英語でポールの'Can't Buy Me Love'がレコーディングされた。'Can't Buy Me Love'は4テイクで完成したが、2月25日にアビイ・ロードで、ジョージがリード・ギターを、ポールがボーカルをさらにオーバーダビングしている。

2月5日午後1時、ビートルズはル・ブールジェ空港からロンドン空港に到着。空港では、明らかに学校をずる休みした100人ぐらいの女の子から、熱狂的な出迎えを受けた。

アメリカへの第一歩

2月7日（金）～22日（土）

アメリカ各地
various US locations

パンナムの飛行機でジョン・F・ケネディ国際空港に降りたった直後から、ビートルズは1964年の時点で存在していたすべてのメディアの対象となった。ジャーナリスト、カメラマン、ラジオ局やテレビ・ニュースの取材陣が、ビートルズの一挙一動をくまなく追い、ほとんどが生で報道された。ありとあらゆる人々が、ほんの数秒でもビートルズの気をひこうと、面と向かって、あるいは電話を使って、そうでなければ考えつくあらゆる手段を使って騒ぎたてた。

さらに、ブライアン・エプスタインとビートルズから特別取材許可を得ていた撮影スタッフが同行して、ビートルズの初めてのアメリカ訪問の様子を舞台裏からの視点という絶好の条件のもとで記録していた。このドキュメント・フィルム製作の事情は少々複雑だ。イギリス北部のITV系列局グラナダ・テレビが一部を出資して、エプスタインのNEMSが編集に発言権を持ち、アルバート・メイスルズとデビッド・メイスルズがメイスルズ・フィルムズ社の作品としてこのドキュメンタリー映画を製作することになっていた（5年後にアルバートとデビッドはローリング・ストーンズの"GIMME SHELTER"で製作の指揮をとる）。この驚きの連続だったアメリカ訪問の2週間、メイスルズはビートルズが行くところにはどこへでもカメラを持ってついて行った。ケネディ空港はもちろん、ビートルズが宿泊したプラザ・ホテルのスイートルームやリムジンの中、セントラル・パークでのフォト・セッション現場、「エド・サリバン・ショー」のニューヨークでのリハーサル現場、ペパーミント・ラウンジ・ナイト・クラブの店内、ワシントンDCに向かう列車の中、そしてマイアミ・ビーチまでと、つぶさに撮影した。また、仕事中のブライアン・エプスタイン、ニューヨークのラジオ局1010WINSのビートルズ狂いのDJ、マレー・ザ・Kのオン・エア中の様子、さらには「エド・サリバン・ショー」に初出演したビートルズをテレビで見ているニューヨークの家族の様子までカメラに収めたのだ。フィルムの製作に出資したグラナダ・テレビは手っとり早い資金回収を試み、最初の数日分のフィルムをすぐにイギリスに持ち帰り、2月12日にただちに放送した。「イェー!イェー!イェー!ザ・ビートルズ・イン・ニューヨーク」（または「イェー!イェー!イェー!ニューヨーク・ミーツ・ザ・ビートルズ」）というタイトルのついたこの36分25秒分の映像は、午後10時25分から11時5分までの40分枠で放送されることになった。グラナダ・テレビのこの番組が急遽全国ネットできるように、ITVの全系列局でもただちに番組変更が行なわれた。

メイスルズはその後も撮影を続けていたが、イギリスの視聴者はその先の映像を拝むことはできなかった。しかし、アメリカでは1964年11月13日、CBSテレビがキャロル・バーネット司会のドキュメンタリー・シリーズ番組「ジ・エンターテイナーズ」で、「ザ・ビートルズ・イン・アメリカ」というタイトルで放送した（「ワッツ・ハプニング!ビートルズ・イン・ザ・USA」や「ザ・ビートルズ・イン・ニューヨーク」としても知られている）。ビートルズが到着してから2月22日にイギリスに帰国するまでの全行程を記録したこの45分間（コマーシャルを含む）の番組は、EST午後8時30分から9時30分に放送された。

CamScannerでスキャン

メイスルズが記録した映像のなかでも最初のほうで、2月7日の午後6時ごろ、プラザ・ホテル12階のスイートルームにいるビートルズがBBCのラジオ司会者ブライアン・マシューから電話インタビューを受けるというシーンがある。マシューが電話をかけているイギリスのブロードキャスティング・ハウスではもう午後11時で、おまけにマシューの「サタデイ・クラブ」の放送はまだまだ12時間先のことだった。しかし、どれだけ彼が疲れていようと眠かろうと問題ではなかった。ビートルズが、イギリスのアーティストにはこれまで例のなかったすさまじい歓迎をアメリカで受けているということは、それだけ大ニュースだったのだ。したがって、マシューは深夜までかかって、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの電話インタビューをとり、それを翌朝の放送で使うことにした。このときのインタビューは電話の向こうのイギリスで録音されていただけでなく、メイスルズによって撮影もされ、さらにBBCラジオのもうひとりの特派員マルコム・デイビスまでも録音していたことを考えれば、このときのビートルズがメディアにとってどれだけ魅力的な取材材料だったかわかるというものだ。ちなみにデイビスが録音した分のテープは、伝送するのに時間がかかるが音質は劣化しない回線で、再びニューヨークからロンドンに送られた。ロンドンにいたマシューはその後、その音声を受け取り、翌朝自分の番組に使うインタビュー部分を録音し直し、番組をさらに音質のいいものに仕上げたのだった。

これらのインタビューとマルコム・デイビスの別のレポートは、2月8日の「サタデイ・クラブ」で放送された（デイビスの担当分は、ケネディ空港やプラザ・ホテルの現場の様子、ファンやマレー・ザ・Kへのインタビュー、そしてマシューの電話インタビューの抜粋から構成されていた）。正午までのこの番組で、インタビューの全貌はこの特集の目玉としてノーカットで午前11時まで放送され、海外向け放送でも同時に流された。また、デイビスのレポートは2時間番組の最後にあたる11時50分から正午までの時間帯に使われた。イギリスの全人口の5分の1にあたる約1,100万人がこの放送を聴いていた。

2月8日（土）
スタジオ50
Broadway and West 53rd St, New York City, New York, USA

数回にわたって行なわれた「エド・サリバン・ショー」のスタジオ・リハーサルの1回目。ラジオ局をはじめ多数の報道陣にとって、ビートルズに接触する絶好の機会ともなった。リハーサルは午後1時30分から開始。このリハーサルと翌日の2回のパフォーマンスはすべて、マンハッタンのミッドタウンにあるCBS テレビのスタジオ50で行なわれた。

エプスタインがニューヨークの代理人ウォルター・ホファーにアメリカ滞在時に届いたファンレターの処理を依頼。第1回分は大きな袋が37にもおよんだ。

驚異の『エド・サリバン・ショー』

2月9日（日）
スタジオ50
New York City, USA

午前中、もう1回「エド・サリバン・ショー」のリハーサルが行なわれた。しかし、ジョージは体調が悪かったため、このリハーサルには参加しなかった。そのため、カメラ・リハーサルで4人のポジションを決めるときは、アシスタントのニール・アスピノールがジョージの代役に立った。

午後に入り、この日の夜の「エド・サリバン・ショー」初出演に先立って、帰国したあとの2月23日EST午後8時から9時に放送される予定の3度目の出演分を収録した。ビートルズは夜のショーとは別の客を前にして、'Twist And Shout' 'Please Please Me'、セットを変えて'I Want To Hold Your Hand'の3曲を演奏した。そして、演奏が始まる前にアーティスト紹介をするサリバンは、スポットライトを自分のところに呼ぶと、独特の大げさな口調でビートルズ初訪米のアメリカ側の反応を、訪米2日目にして総括してみせたのだった。

「関係者、出演者一同、まったく残念で心から口惜しく思うのは、今夜のビートルズは3回目にして最後の出演となってしまうからです。このリバプールの青年たちの姿、そしてこちらに来てからの振る舞いは、すぐれたプロの歌手としてはもちろん、じつに気持ちのいい若者像として、ビートルズに出会えた私たちの心に深く刻まれることになるはずです…」

この収録分の共演者は、キャブ・キャロウェイ、ゴードン＆シーラ・マクリーだった。番組は1964年8月23日の（EST午後8時から9時）に再放送される。

夜になると、「エド・サリバン・ショー」への2回の生出演の

CamScannerでスキャン

うち、もっとも有名な第1回のものが行なわれた。スタジオ50に集まった観客は728人。そして、アメリカ全土の2,324万世帯、およそ7,300万人がEST午後8時から9時に放送されたこの生番組を見た。いとも軽く当時のアメリカの最高視聴率が塗り替えられた。

ビートルズは、番組の前半に'All My Loving' 'Till There Was You' 'She Loves You'の3曲を、後半セットを変えて'I Saw Her Standing There'と'I Want To Hold Your Hand'の2曲を演奏した。4人は緊張しながらも、自信に満ちた演奏を披露した。難をつけるとすれば、サウンドのバランスに少し乱れがあったくらいだった。'Till There Was You'の演奏中にはメンバーひとりひとりのショットになり、画面にそれぞれのファースト・ネームが映し出されたが、ジョンのときは「残念、ジョンは結婚しています」というテロップが加わった。

それにしても、ビートルズを抜きにしても、この日の「エド・サリバン・ショー」は明らかにイギリス寄りの内容だった。たとえば、ほかの出演者は、歌手でバンジョー奏者のテシー・オシェア、イギリスのライオネル・バートのミュージカル「オリバー!」のニューヨーク・キャストの主演役者ジョージア・ブラウンと、アートフル・ドッジャーを演じていた、のちにモンキーズの一員となるデイビー・ジョーンズなどがいた(もうひとりのゲストはのちにテレビ番組「バットマン」に出演するアメリカのものまね芸人のフランク・ゴーシン)。

語りぐさとなったこの日の「エド・サリバン・ショー」は、1964年7月12日(EST午後8時から9時)に再放送される。また、ビートルズの演奏シーンのハイライトは1969年12月21日(EST午後8時から9時)に放送、1960年代にこの番組に出演した音楽関係の記録を集めたCBSの特別番組「エド・サリバン・ショー:スウィンギング・ソウルフル・シックスティーズ」でも放送される。

アメリカで最初のコンサート

2月11日(火)

ワシントン・コロシアム

Third and M St North East, Washington DC, USA

この日、列車でニューヨークからワシントンDCに向かったビートルズは、午後8時31分、8,092席のワシントン・コロシアムのステージに立ち、北米で初めてのコンサートを行なった。ビートルズは30分にわたって、熱狂的な観客の前で、'Roll Over Beethoven' 'From Me To You' 'I Saw Her Standing There' 'This Boy' 'All My Loving' 'I Wanna Be Your Man' 'Please Please Me' 'Till There Was You' 'She Loves You' 'I Want To Hold Your Hand' 'Twist And Shout' 'Long Tall Sally'を演奏した。

ブライアン・エプスタインの承諾を得て、CBSはこのコンサートのもようを撮影した。そして、このフィルムは3月14日と15日の昼に2回ずつ、ビーチ・ボーイズとレスリー・ゴーアのフィルムと併せてナショナル・ジェネラル・コーポレーションの手配で、アメリカ全土の映画館で特別上映される。'Long Tall Sally'は編集段階でカットされてはいるものの、会場の興奮状態をこれほどリアルにとらえているビートルズのコンサート・フィルムはめずらしい。また、ビートルズがお粗末なステージ・セットと格闘している姿をこれほどユーモラスにとらえているフィルムもほかにない。このフィルムは、ビートルズがステージに華々しく登場したものの、リンゴが懸命にドラム・セットの配置を変えようとするところから始まる。オープニング・ナンバーの最初の一節を歌ったあと、ジョージはマイクが故障しているのに気がついて交換するが、換えたマイクもまた壊れていた。3曲目が終わると、メンバーはいきなり180度振り返ってうしろを向いてしまい、マル・エバンズがリンゴのドラム・セットを回した。ステージ背後の席の客と向かい合うためだった。6曲目が終わると、また同じ作業を繰り返してもとの向きに戻したが、9曲目の終わりには、今度は45度だけみんなで向きを変えた。最後は横の席の客にサービスするためである。ステージにはジョージが好物と言ったためにジェリー・ビーンズが投げ込まれているのも確認できる。

公演後はイギリス大使館のパーティーに出席。アメリカ大統領リンドン・B・ジョンソンは、イギリスの前首相アレック・ダグラス=ヒュームに「君の国の先発隊は気に入ったが、髪を切る必要があるね」と語った。

クラシックの殿堂でロックンロール

2月12日(水)

カーネギー・ホール

7th Ave and West 57th St, New York City, New York, USA

この日、ビートルズは再び列車でニューヨークに戻り、出構

CamScannerでスキャン

あるカーネギー・ホールのステージに立ち、午後7時45分と11時15分に34分間の演奏を2回披露した。客席は2,900席用意された。1月27日に劇場窓口で前売りが始まったチケットは翌日には完売していた。あまりにも需要が多いため、ステージの両サイドと背後にも客席が用意されたほどだった。

キャピトル・レコードはこの2回の公演をレコーディングしようと計画していたが、ミュージシャンのための労働組合であるアメリカ・ミュージシャン協会(AFM)に阻止されてしまった。この後、時間をかけてAFMと折り合いをつけたキャピトルは、1964年8月23日と1965年8月29日、30日に行なわれたハリウッド・ボウルでのコンサートのレコーディングをAFMにも同意させるのに成功する(各日のダイアリーを参照)。

マイアミへ飛ぶ

2月14日(金)

ドービル・ホテル
Collins Ave, Miami Beach, Florida, USA

「エド・サリバン・ショー」への2回目の生出演は、マイアミ・ビーチのドービル・ホテルから放送される予定だったため、2月13日、ビートルズは飛行機でニューヨークからフロリダに向かった。驚くほど入念に何度も行なわれたテレビ・リハーサルのあいまに、4人は少しでもいいからビーチでひと息入れられるのではと期待していた。この日、最初のリハーサルはホテルで行なわれた。楽しみにしていたビーチでの休息は、ビートルマニアのせいで、とうてい不可能だった。

2月15日(土)

ドービル・ホテル
Miami Beach, USA

午後いっぱい、「エド・サリバン・ショー」のリハーサル。

この日、ABCテレビのディック・クラークの長寿番組「アメリカン・バンドスタンド」で、ビートルズへの電話インタビューが放送された(EST午後12時30分から1時)。この番組にビートルズが実際に登場することは一度もなかったが、2か月後の4月18日(EST午後12時30分から1時)にもビートルズへの電話インタビューが放送されている。ただ、番組「ニュー・アメリカン・バンドスタンド」のためになら放送用にインタビューを収録していて、1964年10月10日に「オール・ビートル・プログラム」という触れ込みで放送された(EST午後1時30分から2時30分)。しかし、このインタビューの収録日や場所は不明。

マイアミから「エド・サリバン・ショー」の生放送

2月16日(日)

ドービル・ホテル
Miami Beach, USA

この日の夜(EST午後8時から9時)、マイアミ・ビーチのドービル・ホテルにつめかけた3,500人の客を前に、「エド・サリバン・ショー」2回目の出演が生放送された。意外にもメインはビートルズではなく、ミッチ・ゲイナーだった。しかし、それでも2,244万5,000世帯、7,000万人がこの番組を観たと推定されていて、この高視聴率を支えたのはもちろんゲイナーマニアではない。もうひとりのゲストはマイアラ・コーエン。

午後2時、テレビ放送に先立って、ドレス・リハーサルが行なわれた(これも収録はされたが放送されていない)。ゲネプロでも本番でもビートルズは、'She Loves You' 'This Boy' 'All My Loving' 'I Saw Her Standing There' 'From Me To You' 'I Want To Hold Your Hand'を演奏した。

この日の「エド・サリバン・ショー」は、1964年9月20日(EST午後8時から9時)に再放送される。マイアミで数日「息抜き」をしたあと、ビートルズはニューヨークに少し立ち寄ってからイギリスに帰国。2月22日午前8時10分、予定より30分遅れてロンドン空港に到着した。

帰国も大イベントに

2月22日(土)

キングズフォード・スミス・スイート
London Airport, Heathrow, Middlesex

劇的なアメリカ初訪問を終えてビートルズが帰国するというニュースは、国民的な関心事だと考えられたため、BBCは土曜の午後1時から5時15分までのスポーツ番組「グランドスタンド」の途中で、ビートルズがロンドン空港に到着したときのもようとメンバーへのインタビューの映像を臨時放送することにした。番組がスポーツ枠だったため、インタビューはBBCのトップ・スポーツ・コメンテーターのデビッド・コ

CamScannerでスキャン

ーキマンによって行なわれた。
この特報は13分23秒もあったので、とても臨時の穴埋めとは言えないが、競馬中継、エディ・ウォーリング解説によるハンスレットからのラグビー・リーグ中継、カーディフでのアマチュア・ボクシング、サッカーの試合結果などとともに放送された。
この日の帰国はBBCにかぎらず、ほとんどのテレビ局と映画会社でも大々的に報じられた。パセ・ニュースは、映画館での上映用に"BEATLES WELCOME HOME"というタイトルでこの映像をまとめた。このニュース・フィルムでは「クラッシュ・バリア(群衆整理用の柵)などなんのその、このサウンド・バリア(音の障壁)までをも打ち破るビートルズ・ファンの嬌声!」といった調子の、パセ特有の語呂合わせの多いナレーションをボブ・ダンバーズ=ウォーカーがかぶせた。ラジオ局ももちろんこのニュースを報じた。到着後まもなく、ロンドン空港で1台の電話のまわりに集まったビートルズの4人は、ブライアン・マシューから電話インタビューを受けた。この4分20秒のインタビューは、BBCラジオの「サタデイ・クラブ」(午前10時から正午)の最後の20分の間で放送された(そして、インタビューのあとで、まもなく21歳の誕生日を迎えるジョージのためにリクエストされたミラクルズの'Shop Around'がかかった。リクエストしてきたのはジョージの母親だった!)。
もちろん、ラジオのニュース番組でも4人の帰国は報じられた(ただし、そうした一般報道については本書では対象外にしている)。あるニュース番組で放送されたネビル・バーカーによるジョージへのインタビューの抜粋が、3月8日午後3時から4時に放送の「ザ・パブリック・イヤ」「ビートルマニア」特集で再録されている。

2月23日(日)

テディントン・スタジオ・センター、第1スタジオ
Teddington

帰国早々、多忙をきわめるスケジュールをこなさなければならなかったビートルズには、時差ボケを回復させる暇さえ与えられなかった。この日は朝からABCテレビのテディントン・スタジオ・センターに入り、バラエティ番組「ビッグ・ナイト・アウト」への2回目の出演分を収録。リハーサルのあと、夕方から観客を入れて本番の収録が行なわれ、ビートルズがやっと解放されたのは午後10時30分だった。番組は2月29日の午後6時35分から7時25分にはほとんどのITV系列局で放送されるが、ロンドン近辺だけは3月3日の午後時から8時55分に放送(番組の正味時間は同じなのに5分長いのはおそらくコマーシャルと番組予告のためだろう)。ビートルズのほかに、ビリー・デインティ、ジャッキー・トレント、ライオネル・ブレアがゲストとして出演した。
ビートルズは司会のマイク・ウィンターズとバーニー・ウィンターズ兄弟とともに3つのコントに加わった。ひとつは、今やすっかり有名な出来事となったビートルズのアメリカからの帰国をパロディにしたものだ。4人はボートでテムズ川を下り、スタジオの近くで船から降りて、オープン・カーに乗ってスタジオ周辺をぐるぐるドライブし、「税関」と書かれたドアに入る。税関検査官のかっこうをしたウィンターズ兄弟が4人のスーツケースの調べると、中には札束がぎっしりつまっていたというオチ。
音楽では、'All My Loving' 'I Wanna Be Your Man' 'Till There Was You' 'Please Mister Postman' 'Money(That's What I Want)' 'I Want To Hold Your Hand'を口パクした(ただし'Money'はアメリカ人であるベリー・ゴーディが作曲者であるため、番組を海外に転売する際に著作権関係が面倒になるのでカットされた)。
注:この日、ITNのニュース・カメラはコントでビートルズがテムズ川でボートに乗っているシーンを撮影、夕方(午後6時5分から6時15分)の定時ニュースで放送した。その際、ジョージは毎年恒例のオックスフォード対ケンブリッジのボート・レース解説者として有名なジョン・スナッグのものまねでコメントした。

主演映画のためサウンドトラックのレコーディングに入る

2月25日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

翌週の月曜日からビートルズ初の主演映画の撮影が始まる予定になっていたため、多数のレノン=マッカートニーの新曲を書いてレコーディングする必要があった。サウンドトラックに使用する分は映画製作の前に完成させる必要があり、同時発売のアルバムに収録する残りの分は映画製作後にレコーディングすることになった。そういうわけで、ジ

CamScannerでスキャン

ョージの21歳の誕生日であるこの日、映画のための最初のレコーディング・セッションが行なわれた。
しかし、その前に、ギターとボーカルのオーバーダビング作業をまだしていなかったニュー・シングルを完成させることが先決だった。午前10時から午後1時30分までのセッションで、‘Can't Buy Me Love’にボーカルとギターを重ね、B面収録曲、ジョンの‘You Can't Do That’を9テイク、レコーディングしてシングルは完成となった。
続いて午後2時30分から5時30分のセッションでは、映画用の2曲、ポールの‘And I Love Her’(2テイク)とジョンの‘I Should Have Known Better’(3テイク)をレコーディング。ただし2曲とも、翌日やり直すことになる。

‘Can't Buy Me Love’完成

2月26日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アビイ・ロードでの長い1日は、午前10時から午後1時までの3時間のモノ・ミキシング・セッションから始まった。イギリスとアメリカ用に、ニュー・シングル‘Can't Buy Me Love/You Can't Do That’のマスターを仕上げるためだ。アメリカでは3月16日、イギリスでは3月20日リリースのこのシングルは、もはや世界的現象となったビートルマニアをいっぺんに魅了し、膨大な売れ行きを示して、各地のチャートのトップを飾った。アメリカでは、キャピトルが1週間以内に200万枚以上出荷しただけでなく、発売当日にゴールド・ディスクに輝くという前代未聞の快挙を達成した。イギリスでも予約注文だけで100万枚を超えた。
午後2時30分から5時30分までと、午後7時から10時15分までのセッションでは、‘I Should Have Known Better’(テイク4〜22)と‘And I Love Her’(テイク3〜19)を録り直した。しかし‘And I Love Her’はまだ完成にいたらず、再びリメイクされることになる。

2月27日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アビイ・ロードで、午前10時から午後1時までと午後2時30分から7時15分までの2回のセッションをした。2度目のリメイクとなった‘And I Love Her’は2テイク録音し、やっ

と全員が満足するように仕上がった。続いて、映画用の曲をもう2曲レコーディング。どちらもほとんどジョンが書いたもので、‘Tell Me Why’を8テイク、すばらしいバラード‘If I Fell’は15テイク録音し、2曲とも完成した。

ラジオ番組『フロム・アス・トゥ・ユー』第2弾

2月28日(金)
BBCピカデリー・スタジオ、第1スタジオ
London

1963年12月26日に放送された特別番組『フロム・アス・トゥ・ユー』が好評だったため、BBCは休日用ビートルズ・スペシャルの第2弾を企画した。番組は同じタイトルで、3月30日のイースター(復活祭)の午前10時から12時に、BBCラジオで放送された。この日、リハーサルを含めて午後6時30分から9時に、ロンドン中心部のピカデリー201番地にあるBBCのスタジオで、その収録が行なわれた(おそらくビートルズの勧めでBBCが予約したゲストは、アッカー・ビルク、スウィンギング・ブルー・ジーンズ、ビンス・ヒルだった。ゲストの収録は別のセッションで行なわれた)。
番組は前回と同じように音楽と気のきいたおしゃべりで構成されていた。ビートルズは司会のアラン・フリーマンとくったくのないやりとりをし、‘You Can't Do That’ ‘Roll Over Beethoven’ ‘Till There Was You’ ‘I Wanna

CamScannerでスキャン

Be Your Man' 'Please Mister Postman' 'All My Loving' 'This Boy' 'Can't Buy Me Love'を収録した。さらに、番組のオープニングとエンディングに流れるテーマ曲として特別にアレンジされた55秒の'From Us To You'も、1963年12月18日に収録されたバージョンを使用せずに、この日新たにレコーディングした(1964年5月1日と7月17日に収録された「フロム・アス・トゥ・ユー」では、この日の'From Us To You'が使用されている)。

この番組への反応はさまざまだった。BBCの聴取者アンケートでは、評価が両極端に分かれていたことを指摘されている。たとえば、警備員をしているある男性は「ビートルズは過大評価されている。演奏は素人並みだし、エンターテインメントとしての価値は皆無だ」としている一方で、「20歳以上」と自己申告している事務弁護士は「ビートルズを好きにならない人はいないだろう。音楽は陽気でのびのびとしている。何よりもビートルズ自身が人生を楽しんでいる」という意見を寄せていた。

またこの日、ピーター&ゴードンがレノン=マッカートニーの書き下ろした新曲'A World Without Love'をリリース。

日曜日もレコーディング

3月1日(日)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

EMIで初めての日曜セッション。午後7時から10時までの3時間で3曲もレコーディングした。まず、ジョンがジョージ用に書いた'I'm Happy Just To Dance With You'を4テイク、レコーディング。続いて、最終的にはアルバムではなくEPに収められる'Long Tall Sally'と'I Call Your Name'をレコーディングした(現存する資料によれば、この2曲、あるいは少なくとも後者はこの段階ではサウンドトラックに使用される予定だった)。

'Long Tall Sally'のレコーディングは完璧だった。以前、ジョンが'Twist And Shout'を1テイクで完成させたように、みごとなまでにリトル・リチャードのボーカル・スタイルを消化したポールは、全力を注いで'Long Tall Sally'を歌いきり、1テイクだけで完成させた。ピアノを弾いたジョージ・マーティンも含めて、バックも完璧で、テイク2をレコーディングする必要などまったくなかった。

'I Call Your Name'もかなりよい仕上がりをみせた。ジョンが書いたこの曲は、サビの部分でスカ・ビートが取り入れられていた。じつはこの曲は、以前ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタスがレコーディングしていた。同じくジョンが書いて、1963年8月にナンバーワン・ヒットとなった'Bad To Me'のB面にも収録されていた曲だった。ビートルズは7テイクをレコーディングし、テイク7がベストのものとなった。ただし、スカ・ビートのソロはテイク5がいちばんよかったため、ミキシング段階でテイク7にオーバーダビングされた。

映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影開始

3月2日(月)〜6日(金)

ロンドンから西部地方の各ロケ地
London to West Country

1964年3月2日、パディントン駅のプラットホームで、撮影の直前に俳優組合に加入したビートルズの4人はこのとき初めて映画俳優になった。まだタイトル未定のビートルズ初の主演映画で脇を固める共演者のウィルフリッド・ブランベルとノーマン・ロッシントンが、組合加入の推薦人および後見人になってくれた。

出演者たちがわざわざパディントン駅に集合したのにはもちろんそれなりの理由があった。というのは、この週の月曜から金曜まで、そして翌週の月曜の計6日間は、列車の中での撮影に費やされることになっていたからだった。ユナイテッド・アーティスツからこの映画の製作を請け負った、プロデューサーのウォルター・シェンソンが経営するプロシニアム・フィルムズにとっては、11600ポンドという列車と線路の賃貸料金はかなり出費だったが、結果としてはそれだけの価値のある出費となった。

撮影初日の午前8時30分、パディントン駅にビートルマニアが群がるなか、列車は5番ホームから西部地方に向けて出発した。最初の3日間の目的地はマインヘッド、後半の目的地はトーントンとニュートン・アボットだった。運転中の列車というせま苦しい雰囲気は、熱狂的なファンのせいでせまいところに閉じ込められてしまったビートルズという、この映画のいちばん特徴的なモチーフにはうってつけだった。しかし、パディントン駅では実際の撮影は行なわれなかった。ロンドンの駅でという設定で撮影されたオープニング・ショットは、じつはメリルボーン駅で撮影された(4月5日、12

日参照)、また初日の撮影のあとで、ほかの駅ならよっぽど目立たず列車に乗れるだろうと判断したビートルズは、以後の5日間の撮影ではロンドン西部のアクトン・メイン・ライン駅から列車に乗っている。撮影後もビートルズはパディントンには戻らず、アクトン・メイン・ライン、ウエスト・イーリング、ウエストボーン・パーク、ヘイズ&ハーリントンといった途中の郊外の駅で降り、あらかじめ手配していた車に迎えにきてもらっていた(パディントン駅は西部地方へのロンドンのターミナル駅だった)。

3月4日にもサマセット州のクローコムの駅で、列車にからんだシーンが撮影された。ゆっくり走る列車とならんで、ビートルズがプラットホームを走りながら、列車の乗客の上流階級ふうの紳士(リチャード・バーノン)に向かって「おじさん!ボール返してよ」と叫んでからかう場面だ。

撮影初日、列車内のシーンで登場するふたりの女子学生役に監督のリチャード・レスターが抜擢した女性のひとりがパティ・ボイドだった。レスターは以前、スミス社のポテト・チップスのテレビ・コマーシャルでパティと仕事をしたことがあった。ジョージ・ハリスンはすぐにパティが気に入って、まもなくデートを重ねるようになった。そして、1966年1月21日、ふたりは結婚する。

一方、映画撮影中も、アビイ・ロードのEMIスタジオではジョージ・マーティンがビートルズのレコーディング作業を進めていた。3月3日の午前10時から午後1時45分まで、第1スタジオで'I Should Have Known Better' 'If I Fell' 'Tell Me Why' 'And I Love Her' 'I'm Happy Just To Dance With You' 'I Call Your Name'のモノ・ミックスを制作した。しかも、今回この完成テープを受け取るのはEMIだけでなかった。撮影の際、音と映像をシンクロさせるためにもユナイテッド・アーティスツ側も必要としていたからだ(ちなみに'And I Love Her'はのちにイギリス盤のアルバム収録用にリミックスされている。1964年6月22日参照)。さらに3月4日の午前10時から11時に、今度は第3スタジオで'I Call Your Name'のモノ・ミックスを制作した。これは、アメリカ盤LP"THE BEATLES' SECOND ALBUM"とカナダ盤LP"LONG TALL SALLY"に収録される。

3月9日(月)

ロンドンからニュートン・アボットまでの各種ロケ地
London to Newton Abbot

列車撮影の最終日。ロンドンから出発して、デボンシャーのニュートン・アボットへ。前の週からの列車走行距離は、およそ4,000キロにおよんだ。撮影は基本的に月曜から金曜までで、週末はオフ日となっていたが、必要な場合には例外もあった(4月5日、12日参照)。

リンゴだけ撮影 外部のドラマーが レコーディングに参加?

3月10日(火)

タークス・ヘッド
Winchester Rd, St Margaret's, Twickenham, Middlesex
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

映画"A HARD DAY'S NIGHT"のハイライトのひとつは、リンゴの長いソロ・シーンである。ウィルフリッド・ブランベル演じるポールのおじいさんにグループなんか見捨てろとそそのかされたリンゴは、いろいろな冒険を試み、ほとんどみじめな結果に終わる。

まず、パブに行ったときのシーンを撮影。サンドイッチはまずそうだし、運悪くビール・グラスが割れ、ダーツをやれば的の近くに置かれていたオウムに危うくケガをさせそうになる。この日の撮影は、ウィンチェスター・ロードにあるパブ、タークス・ヘッドで行なわれた。この映画製作の拠点となり、スタジオ撮影が行なわれたトゥイッケナム・フィルム・スタジオの近くにある。

この日アビイ・ロードでは、ジョージ・マーティンが、'Can't Buy Me Love' 'Long Tall Sally' 'I Call Your Name' 'You Can't Do That'のステレオ・ミックスと、'Long Tall Sally' 'Komm, Gib Mir Deine Hand' 'Sie Liebt Dich'のモノ・ミックスを作った。じつは1991年に初めて公開されたEMIの興味深い資料には、この日の午前10時から午後1時までの'Can't Buy Me Love'のセッションに、誰か「ドラマー」が参加したと思わせる文書が残されている。もし本当だとすると、その彼が何かしらのオーバー

CamScannerでスキャン

ダビングを請け負ったとしか考えられない。ちなみに、初期のビートルズはレコード印税とは別にセッション報酬を受け取っていたが、この資料から判明したのは、このドラマーにもミュージシャン組合から5ポンド15シリングのセッション報酬が支給されていたことである。しかし、ドラマーの名前は明らかではない。
この資料により、'Can't Buy Me Love'のドラムがモノとステレオではわずかに違っているという、コアなファンを長年悩ませてきた謎が解けたことになる。しかし、それと同時に、このドラマーはいったい誰なのかという新たな疑問も生まれてしまった。映画の撮影スケジュールから考えて、この日リンゴ自身がアビイ・ロードを訪れた可能性はきわめて薄い。

3月11日（水）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
The Barons, St Margaret's, Twickenham, Middlesex

この日、ビートルズは初めてトゥイッケナム・フィルム・スタジオで撮影を行なった。のちにこのスタジオでは、"A HARD DAY'S NIGHT"ばかりでなく、映画"HELP!"（1965年）、何本かのプロモーション・ビデオ（1965年、1968年）、"GET BACK／LET IT BE"（1969年）も製作されることになる。またリンゴはソロとしての出演作品"THE MAGIC CHRISTIAN"（1969年）でも、このスタジオで撮影を行なっている。
撮影はいつも朝早くから行なわれたが、この日も朝8時から午後10時までの仕事。ビートルズは車掌車のセットでトランプをしているシーンを撮影し、'I Should Have Known Better'を口パクした。これはのちに列車内のシーンに組み込まれる。

3月12日（木）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's Twickenham

「ホテルの部屋」でのシーンを撮影。ニール・アスピノールとマル・エバンズをモデルにして、ノーマン・ロッシントンとジョン・ジャンキンが演じるロード・マネージャーのノームとシェイクが、ビートルズに部屋から一歩も出ずにファンレターの返事を書くようにと命じる（が、ビートルズはこっそり抜け出してクラブに繰り出す）。ホテルに戻ると、衣装ダンスの中にスーツをはぎ取られたウェイターを発見する。
この日、EMIスタジオでは午前10時から正午までのセッションで、ジョージ・マーティンがドイツ語バージョンの2曲、'Komm, Gib Mir Deine Hand'と'Sie Liebt Dich'のステレオ・ミックスを作った。コピーしたテープは、リリース用に西ドイツのほかアメリカにも送付。

3月13日（金）

ガトウィック・エアポート・サウス
Surrey

ロンドンから約44キロ南にある空港で、この映画のもっとも重要なふたつの場面を撮影。午前10時にガトウィックに集合するために、ビートルズはかなりの早起きを強いられた。
最初の撮影は、映画の最後のシーンだった。画面の外から走ってきたビートルズがヘリコプターに飛び乗ると、ヘリコプターはただちに空に舞い上がり、空の上からビートルズの宣伝用の写真がばらまかれる。
昼食後、ヘリコプターの離着陸台のまわりで4人がはしゃぐシーンを撮影（上空からヘリコプターで撮影）。4月22日と23日に撮影されるシーンとともに、これは'Can't Buy Me Love'のシーン「解放」で使用される。

3月16日（月）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

「スタジオの食堂」のシーンを撮影。ウィルフリッド・ブランベルがリンゴに、本など読むのはやめて、仲間のことも見捨てて遊びに行けとそそのかす場面。
この日、ほかの3人の撮影はなかったので、ジョージはブライアン・エプスタインと「サタデイ・クラブ」に出演するシラ・ブラックの番組収録の様子を見学した。

3月17日（火）

レ・ザンバサドゥール
Hamilton Place, London

ロンドン中心部のパーク・レインの近くにある豪華なプライベート・クラブ、レ・ザンバサドゥールで、ビートルズはこの日と4月17日の2回、映画の撮影を行なった。
この日撮影したのは、ビートルズが「ル・サークル・クラブ」

CamScannerでスキャン

でギャンブルをしているポールのおじいさんを発見するシーン。撮影中、BBCのベテラン・キャスター、ジャック・ド・マニオがレ・ザンバサドゥールを訪れ、まもなく出版界にデビューしようとしていたジョンにインタビューした。ジョンの本「イン・ヒズ・オウン・ライト」が3月23日に発売されることになっていた。このインタビューは翌日の3月18日午前7時15分から7時45分に（ド・マニオが担当する）BBCラジオのニュース番組「トゥデイ」で放送。また、午前8時15分から8時40分の番組後半にもう1回放送される。

3月18日（水）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

「楽屋」のシーンを撮影。

トゥイッケナム・スタジオでの撮影待機中には、BBCラジオ番組「ザ・パブリック・イヤ」のためにいくつかの会話を収録した。これは3月22日の午後3時から4時に放送され、英国軍放送サービス（BFBS）を通じて西ドイツでも同時放送される。ビートルズはBBCの記者からインタビューを受けずに自分たち自身でインタビューを行なったので、この番組の洗練された内容と品格を維持しながら、ユーモアが冴え渡っていた。

この日の番組のオープニングもまた新鮮だった。じつは「ザ・パブリック・イヤ」宛てに、ビートルズが出演するときにはファン同士で連絡を取り合ってできるだけ多くのファンが聴けるようにしたいから必ず事前に知らせてほしい、という手紙が届いていた。番組冒頭でこの手紙が読みあげられると、続いてリンゴがいきなり登場して、「というわけで僕たち今日、もう少したったら出てくるから、忘れないで、電話をかけまくってみんなで聴いてね！」とアナウンスしたのだ。

そのビートルズの出番では、BBCのインタビュアー役を務めるジョージが上品なアクセントをまねして、ジョンの本「イン・ヒズ・オウン・ライト」についてリンゴとやりとりし、続いて著者であるジョンに話を聞くと、ジョンはそのまま本のなかから'Alec Speaking'を朗読した。次にジョージは、ポールと映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影秘話をめぐってあれこれと世間話をする。そしてコーナーの締めくくりとして、途中リンゴが加わりながら、ジョージは映画のキャストとスタッフのクレジットを読みあげた。プロデューサーのところではジョン・フォーシット・ウィルソンの名前と一緒に、共同プロデューサーとして自分たちの名前もつけ加えていた。

注：このインタビューの抜粋をはじめ、ビートルズが「ザ・パブリック・イヤ」に初出演したときの抜粋（1963年10月13日参照）、ビル・グランディによるブライアン・エプスタインへのインタビュー、エドワード・グリーンフィールドによるジョージ・マーティンへのインタビュー、さまざまなビートルズのレコードなどはBBCの30分番組「ザ・ビートルズ－フー・アー・ゼイ?」で再録されている。この番組は、「ザ・タイムズ」紙の音楽評論家のウィリアム・マンが構成してナレーションを加えたものだった。番組は、1964年6月24日午前10時30分から11時、6月25日午後7時から7時30分、6月26日午前1時30分から2時に、BBCの海外放送を通じて海外同時放送された（すべてグリニッジ標準時）。

バラエティ・クラブから賞を授与される人気テレビ番組『トップ・オブ・ザ・ポップス』に初出演

3月19日（木）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham
ドーチェスター・ホテル
Park Lane, London
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's
テレビジョン・シアター
London

朝と夕方、2回にわたりトゥイッケナム・スタジオで、テレビ局の「廊下」のシーンを撮影。このシーンは翌日も引き続き撮影される。また、スタジオでビートルズは映画評論家のピーター・ノーブルからBBCラジオ番組「ムービー・ゴー・ラウンド」用のインタビューを受けた。この日のインタビューと、翌日リンゴがひとりだけで受けたインタビューは、4月12日午後3時から4時に放送される。

昼ごろ、ビートルズはロンドン中心部のパーク・レインにあるドーチェスター・ホテルに赴き、第12回バラエティ・クラブ・オブ・グレート・ブリテン昼食会に出席。野党党首のハロルド・ウィルソンから1963年度最優秀ショー・ビジネス・パーソナリティ賞を受賞した。いくつかのテレビ局やニュース映

CamScannerでスキャン

両会社がこのもようを取材しに来ていた。とくにBBCは、3月20日午後10時30分から11時に、30分番組「バラエティ・クラブ・オブ・グレート・ブリテン・アワード・フォー・1963」という番組枠でこの授賞式の様子を放送した。
夜、ビートルズはロンドン西部のシェパーズ・ブッシュにあるBBCのテレビジョン・シアターへ。リハーサルを含めて午後7時から8時30分まで、1964年元日から始まったイギリスでもっとも人気のあるポップ番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」への初出演分を、観客を入れずに収録。当時、番組はマンチェスターから放送されていたが、ビートルズは特別にロンドンで録画して出演することを許され、ニュー・シングルの両面 'Can't Buy Me Love' と 'You Can't Do That' を口パクした。番組は3月25日午後6時35分から7時に放送され、'Can't Buy Me Love' は4月8日に再放送（時間帯は同じ）。
注:「トップ・オブ・ザ・ポップス」ではビートルズが出演収録した映像がない場合、あるいは出演後その曲の契約放送回数が終了してしまった場合は、BBCが所有している映像でとくにその曲とは関係のないものを流すか、曲に合わせてスタジオで踊る観客の姿を流すという処置がとられていた。この形式は1970年代初めまで変わらなかった。

3月20日（金）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's Twickenham
テレビジョン・ハウス、第9スタジオ
London

昼前から午後にかけて、トゥイッケナム・スタジオでさらに「廊下」のシーンを撮影。リンゴは、BBCのラジオ番組「ムービー・ゴー・ラウンド」用にレポーターのリン・フェアハーストからインタビューも受けた。これは4月12日放送分で、前日のピーター・ノーブルによるビートルズへのインタビューに続けて放送された（前日の項を参照）。
夕方、ビートルズはアソシエイテッド・レディフュージョンの本社とスタジオがあるロンドン中心部のテレビジョン・ハウスへ。リハーサルをすばやく済ませ、午後6時15分から7時放送の「レディ・ステディ・ゴー!」に生出演。この番組への2度目で最後の生出演となった。3回目の、そしてビートルズとして最後の出演は録画されたものだった（1964年11月23日を参照）。

ビートルズは、'It Won't Be Long' 'You Can't Do That' 'Can't Buy Me Love'（この日シングル発売）を口パクし、ユーモラスなファッション・パレードにも参加。さらに司会のキース・フォーダイスから、シングル・チャートの1位から3位までを独占したことを表彰する「ビルボード」誌特別賞を授与された（しかし、このあと4位まで、さらに5位までも独占する）。続いて、もうひとりの司会者キャシー・マクゴワンからインタビューを受けた。
この日放送された 'Can't Buy Me Love' は2回再放送される。最初は1964年4月24日午後6時10分から7時放送の「レディ・ステディ・ゴー・トゥ・モントルー!」。これは、国際エンターテインメント・テレビ番組コンテスト開催中にスイスのモントルーのカジノで収録された特別編である（1963年12月15日参照）。2回目は1965年7月15日放送の「ピック・オブ・ザ・ソングス」（詳細は1965年7月13日参照）。

ジョンの本
『イン・ヒズ・オウン・ライト』出版

3月23日（月）

スカラ・シアター
Charlotte Street, London
ライム・グローブ・スタジオ
London
エンパイア・ボールルーム
Leicester Square, London

ロケ地をロンドン中心部にあるスカラ・シアターに移して、映画の撮影がこの日から4月2日まで7日間行なわれた。この映画のストーリーにとって、ビートルズがテレビ番組に出演するというのは非常に重要なモチーフだった。そこでスカラ・シアターを「ユナイテッド・テレビ・ハウス」に設定して、映画の演奏場面のフィナーレであるシーンが、3月31日にここで撮影される。
この日はまた、ジョンの初めての著書「イン・ヒズ・オウン・ライト」の発売日でもあった。ジョンはプロモーションのために、午後7時から7時35分にBBCテレビの番組「トゥナイト」に生出演するため、ロンドン西部にあるBBCのライム・グローブ・スタジオに入った。司会のクリフ・マイケルモア、レギュラー出演者のデレク・ハートとケニス・オルソップのそれぞれが本の一部を朗読したあと、ジョンはきっかり4分間、す

ルソップからインタビューを受けた。
ビートルズはこの夜遅く、ロンドン中心部のレスター・スクエアにあるエンパイア・ボールルームで開催された毎年恒例のカール・アラン・ボールルーム・ダンシング・アワードに出席。エジンバラ公(フィリップ殿下)から、1963年度の音楽での業績に評価する賞がふたつ授与された。テレビ局とニュース映画社はこのもようを撮影、BBCは午後10時25分から11時15分に「ザ・カール・アラン・アワード」という特別番組で生中継した。

3月24日(火)～26日(木)

スカラ・シアター
London

スカラ・シアターで引き続き映画撮影。24日の休憩時間に、ジョンはイギリス在住のオーストラリア人キャスターで俳優でもあるディブス・メイザー(1963年12月10日参照)から、本についてのインタビューを受けた。これはBBCの海外転送サービスの番組「デイトライン・ロンドン」用だったので、海外のラジオ局にのみ提供され、イギリス国内では流れなかった。
木曜の撮影を終えたあとは、イースターを含み4連休となった。ジョンとシンシアは、ジョージとガールフレンドのパティ・ボイド(3月2日を参照)を連れて、アイルランドのクレア州にあるドローモラン城へ。ポールはロンドンで休暇を過ごし、リンゴは友人たちとベッドフォードシャーにあるカントリー・ハウス、ウォウバーン・アビイでイースターを過ごした。撮影は翌週の火曜日から再開。

映画のクライマックス、ステージ・シーンを撮影

3月31日(火)

スカラ・シアター
London
プレイハウス・シアター
London

"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影中、おそらくもっともエキサイティングで有意義な1日。この日、映画のクライマックスであるビートルズのテレビ出演のシーンが撮影された。撮影はスカラ・シアターで、歓声をあげる350人のファンを集めて行なわれた。映画組合の規定によって、叫び声をあげたキャストにもひとりひとり報酬が支払われたが、多くのファンにしてみれば、ただでも喜んで叫びたかったことだろう(350人の客のなかには13歳の子役がいた。のちにジェネシスのメンバーとして、またソロ・ミュージシャンとして世界的に有名になるフィル・コリンズである)。
完成した映画では、ビートルズはこのシーンで4曲を口パクしている。曲は、'Tell Me Why' 'If I Fell' 'I Should Have Known Better' 'She Loves You' である。しかし、撮影ではほかの曲も演奏していて、'You Can't Do That'も未使用となった1曲だ(4月17日参照)。
'Tell Me Why'の演奏中には、ヒッチコックがよく自分の映画に一瞬だけ出ていたように、監督のリチャード・レスターがステージのうしろから客席を見上げる短いシーンが撮影された。
熱気に包まれた1日を締めくくったのは、プレイハウス・シアターでのBBCラジオ番組「サタデイ・クラブ」のための長いセッションだった。この日の収録分は4月4日午前10時から12時に放送。また、休憩時間に、ジョンは別のBBCラジオ番組のためのインタビューをこなした。
リハーサルを含めて、午後7時から10時30分まで行なわれた収録で、ビートルズは司会のブライアン・マシューとおしゃべりし、'Everybody's Trying To Be My Baby' 'I Call Your Name' 'I Got A Woman' 'You Can't Do That' 'Can't Buy Me Love' 'Sure To Fall (In Love With You)' 'Long Tall Sally'を演奏。最後の3曲はBBCの海外放送を通じて海外同時放送でも流された。
午後9時から9時30分までの休憩時間に、ジョンは再びブライアン・マシューからインタビューを受けたが、それは「ア・スライス・オブ・ライフ」という番組用だった。5月2日の午後4時から4時30分に放送されるこの番組のテーマは「趣味」で、ジョンのインタビューはベストセラーになった自分の本について語る3分間足らずのものだった。

4月1日(水)～2日(木)

スカラ・シアター
London

またスカラ・シアターでの撮影。4月2日にはプレス・パーティーのシーンを撮る。これは2月11日ワシントンDCコロシアムで行なわれたコンサートのあと、イギリス大使館で実際

CamScannerでスキャン

に開かれたレセプションのもようを、アラン・オーウェンがだいたいのところを再現したものだった。実際のプレス・パーティーでは、ぶしつけな質問を次々に浴びせかけられたビートルズはだんだんいらだち、リンゴの髪が一房、突然断りもなく誰かに切り取られると、4人はたまらなくなって会場を出ていった。

映画の予告編を作る

4月3日(金)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

この日トゥイッケナム・スタジオでは、映画のシーンのほかに予告編が撮影された。これは、ジョンとジョージ、そしてリンゴとポールがそれぞれ隣り合った乳母車に座って足を外に投げ出しているという変わったもの。ジョンはタイプライターを打ち、ポールがしゃべり、ジョージがむにゃむにゃとわけのわからない言葉を発する。リンゴが2回電話を受けて「ジョン、電話だよ」と言うが、ジョンは2回とも「ふにゃふにゃするなよ」と答える。この予告編がどれだけ宣伝効果があったかは今もって不明だが、とにかく映画館ではこれが上映された。

そのあとビートルズは、めずらしくイギリス北東部のITV系列局、タイン・ティーズ・テレビの番組収録をした。「スター・パレード」というこの映画番組では、視聴者からビートルズへの質問を募集していた。そしてこの日、寄せられた質問のなかからおもしろそうな質問を、番組の司会者エイドリアン・ケアンズがビートルズのメンバーにぶつけた。4人はカメラに向かって質問に答えた。番組制作側は地元のニューカースルで質問を考えた女の子たちが実際に質問している映像を収録し、それをロンドン郊外のスタジオで答えるビートルズの映像に編集段階でつないだ。しかし、本当の会話のやりとりではないし、セットも違ううえに、各自がカメラに真正面に向いて話すという設定は、かなりぎこちないものだった。これはエイドリアン・ケアンズによるビートルズへの短いインタビューとともに6分間にまとめられ、4月9日午後10時10分から10時40分の「スター・パレード」で放送。

映画のオープニング・シーンを撮影

4月5日(日)

メリルボーン駅
Great Central St, London

日曜であるにもかかわらず、この日の午後、映画のオープ
ニング・シーンのためにメリルボーン駅で撮影が行なわれ
た(撮影は翌週の日曜日にも行なわれる)。日曜に撮影が
決まったのは、平日は混雑するロンドン中心部にあるこの
ターミナル駅が日曜日は閉鎖されているからだった。2回に
わたる日曜の撮影では、ビートルズがメルカム・プレイスを横
切って駅に駆け込むシーン、駅にある電話ボックスと3分間
写真のブースのシーン、掲示板を飛び越えるシーン、変装
したポールがウィルフリッド・ブランベル演じるおじいさんと
ともに中央広場のベンチに腰かけているシーン、4人が長
い1番ホームを走り、動き始めた列車に飛び乗るシーンが
撮影された(このあと映画は3月2日から9日までに撮影さ
れたシーンに続く)。この撮影には、7ポンド10シリングの報
酬で、悲鳴をあげながらビートルズを追いかけるという特権
を授かった100人以上のファンが参加した。そして、さらに
多くのノーギャラのファンも加わっていた。

ジョン、ジョージ、リンゴはまた、メリルボーン駅近くの通り、
ボストン・プレイスで同じ熱狂的なファンのエキストラに追い
かけられながら、カメラに向かって走るという場面も撮影し
た。このシーンは映画のいちばん最初のタイトル・クレジッ
トのバックで使われている。

4月6日(月)～7日(火)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

トゥイッケナムでの2日間の撮影。6日の午前中にはメイクアップ・ルームのシーンを、6日の午後と7日には警察署内のシーンを撮影した(警察署の屋外シーンは4月16日のロケで撮影される)。

4月8日にもトゥイッケナムで撮影があったが、ビートルズは参加していない。この日はシュトラウスのオペレッタのシーンが撮影された。

4月9日(木)
テムズ川沿い
Kew, Surrey

リンゴのソロ・シーンの撮影。テムズ川沿いの道、南側の土手、キュー・ブリッジの西側で、川沿いのシーンを撮影した。ほかの3人のメンバーは撮影には参加していない。

4月10日(金)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

スタジオに戻り、「プロダクション・オフィス」のシーンを撮影した。
この日、アメリカで"THE BEATLES' SECOND ALBUM"がリリースされる。

4月12日(日)
メリルボーン駅
London

メリルボーン駅での2回目の撮影。今回はファン抜きで、映画のオープニング・シーンを撮影。

バスルームのシーン

4月13日(月)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

午前中はジョージのソロ・シーンを撮影。新製品のシャツのモデルと間違えられてアパレル会社のマーケティング部長のところへ連れていかれる場面。ジョージはそのシャツを見て、「グロッティ(グロテスク)だな」と言う。
午後もジョージがフィーチャーされ、バスルームの鏡の前で髭をそるシーンが撮影された。バスタブでは'Rule Britannia'をハミングしながら潜水艦のおもちゃで遊んでいたジョンが、排水口に消えていく。
ポールとリンゴはこの日撮影に参加していない。もしスタジオに来ていれば、ロイ・オービソンに再会していただろう。イギリスを訪れていたオービソンは、前回イギリス・ツアーに同行したビートルズにとても会いたがっていた。
3日前にリリースされたばかりの"THE BEATLES' SECOND ALBUM"がゴールド・ディスクを獲得。

映画で使われなかったシーン

4月14日(火)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham
アーリントン・ロード
St Margaret's, Twickenham

この日、スタジオとロケで撮影されたシーンは最終的には映画からカットされている。交通渋滞に巻き込まれたビートルズが別の車に乗っている人から悪態をつかれるというシーンだった。ビートルズの車の運転手役は、喜劇俳優のフランク・ソーントンが演じた。撮影はスタジオ近くの通りで行なわれた。現場は自由党の議員選挙に立候補した政治家ケン・ルイスの家のすぐそばで、彼は選挙向けのキャンペーン・バスを交通渋滞のシーン用にスタッフに貸した。

ポールが初単独テレビ出演

4月15日(水)
スカラ・シアター(屋外)
London
テレビジョン・センター、第4スタジオ
Wood Lane, London

ロンドン中心部のスカラ・シアターでの撮影。ただし、撮影は建物の外で行なわれ、スカラ・ストリート、トテナム・ストリート、シャーロット・ミューズでロケが行なわれた。
夜、ポールが初めてひとりでテレビ出演。イギリスの新進の若手テレビ・スター、デビッド・フロストによる1回かぎりのバラエティ番組でインタビューを受けた。「ア・ディグリー・オブ・フロスト」というタイトルのこの番組は、5月18日午後10時15分から11時にBBC1で放送(1964年4月20日に開局したBBC2と区別するため、従来からあった局はBBC1となった)。9月1日午後8時から8時45分に再放送される。
番組は、ロンドン西部のオフィス街にあるBBCのテレビジョン・センターで、午後8時30分から観客を前にして収録されたが、リハーサルは8時間前の午前10時30分から行なわれた(スカラ・シアターでの撮影があったポールは遅れてスタジオ入りしたはず)。プロデューサーはジョー・マッグラス。彼はのちに、何度かビートルズ(ソロまたはグループ)の映画やテレビの製作に関わる。

CamScannerでスキャン

映画のタイトル曲をレコーディング

4月16日(木)
ノッティング・ヒル・ゲイトのロケ地
London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の大半は、ノッティング・ヒル・ゲイトで警官との追い
かけっこシーンを撮影。映画のなかの「警察署」は実際に
はクラレンドン・ロード83番地のセント・ジョンズ中学校だっ
た(署内のシーンはすでにトゥイッケナムで撮影されていた。
4月6日~7日参照。しかし、この日ビートルズはほとんどファ
ンから身を隠すためにこの学校を利用した)。また、近くの
袋小路(ヒースフィールド・ストリート)や、最終的にはカット
されてしまうが、ポートランド・アームズというパブでのシー
ンも撮影された。
このパブのシーンは、店のポートランド・ロード側の入口か
ら駆け込んですぐに反対の扉からペンザンス・プレイスに
出ていくというものだった(この映画で使用しなかったため、
リチャード・レスターは次の監督作品"THE KNACK"で
同じ場所での同様のシーンを使うことができた)。
撮影はほぼ完成に近づいていたが、映画のタイトルはまだ
決まっていなかった。しかし、リンゴが長い1日の撮影を終
えたあと(一説では3月19日と言われている)、「ハードな1
日(it's been a hard day)」とつぶやいたところです
でに外が暗いのに気がついたため、最後に「…の夜だっ
たなぁ('s night)」とつけ加えた。このフレーズは映画の
雰囲気を完璧にとらえていたので、さっそく"A HARD
DAY'S NIGHT"というタイトルが決まり、4月17日にその
タイトルがプレスに発表された(リンゴはその前にジョンの
本を読んでいたのかもしれない。そのなかの'Sad Michael'
というストーリーにこのフレーズが出てくるからだ)。
映画のタイトルはめでたく決まったものの、ジョンとポールに
は新たな難題がふりかかった。タイトルに合わせた曲を書
かなければならない。しかし、ふたりは期待を裏切ることな
く、2、3日のうちに曲を仕上げた。そしてこの日の夜、EMI
スタジオにやってきたビートルズは、午後7時から10時まで
のセッションでこの曲を9テイク、レコーディングし、完成させ
た。
"A HARD DAY'S NIGHT"は、映画のタイトルだけ
でなく、当然サウンドトラック・アルバムのタイトルにもなった。
レノン=マッカートニーによる全13曲が収録されたこのアル
バムは1964年7月10日にEMIからリリース。同日、やはり同
じタイトルのニュー・シングルがイギリスでリリースされる。

エド・サリバンが インタビューにやってくる

4月17日(金)
レイ・アンバサダー
London

レイ・アンバサダーのギャリスン・ルームで映画のディスコの
シーンを撮影。ビートルズは'I Wanna Be Your Man'
と'Don't Bother Me'に合わせて踊った。
じつはこの2日前の4月15日、ビートルズにとってアメリカに
おける最大の後見人エド・サリバンが突然イギリスにやっ
てきた。その翌日にロケ地でビートルズにインタビューする
ためだった。しかし、16日は4人ともただでさえ忙しいのに
それに輪をかけて忙殺されていたため、1日延期になり、こ
の日インタビューが行なわれた。
しかし、このインタビューが、わざわざアメリカからやってき
たうえ1日待たされたことに見合うだけのものだったかどう
かは疑問だ。クラブの中庭で行なわれたインタビューは非
常に短く、5月24日の「エド・サリバン・ショー」(CBSネット
ワークで午後8時から9時EST)で放送された分はわずか
1分34秒しかなかったからだ。しかし、サリバンはインタビ
ューと抱き合わせにユナイテッド・アーティスツから映画の
クリップというおみやげをもらった。その内容は3月31日に
スカラ・シアターで撮影された、ビートルズが'You Can't
Do That'を口パクしている「ライブ・パフォーマンス」の
シーンだった。おまけにこのシーンは映画からカットされた
わけだから、結果的に、サリバンの番組だけが世界独占
でこの映像を使えたということになった。といっても、まだワ
ールド・プレミアから6週間も前なので、サリバンがそれに気
がつかなくても当然だった。
この日、ビートルズの映画のタイトルは"A HARD DAY'S
NIGHT"であるとマスコミに発表された。

CamScannerでスキャン

「アラウンド・ザ・ビートルズ」の収録始まる

4月18日(土)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham
ホール・オブ・リメンブランス
Flood St, London

午前中は、映画の必要な部分に声のアフレコや吹き替え作業。午後は、映画とは関係なく、テレビのビートルズ特番の仕事にとりかかった。

そもそもロンドンのITV系列局レディフュージョン(4月6日にアソシエイテッド・レディフュージョンから改名)による、ビートルズの1時間特別番組の制作の話をエプスタインが引き受けたとき、映画はまだ製作中だった。おまけに悪いことに、このふたつの製作期間は結局重なってしまった(ただ当時は1時間特番といっても、メインのほかにも共演者がいるのがふつうだった。この番組にもビートルズのほかに、P・J・プロビー、バーノンズ・ガールズ、ロング・ジョン・ボールドリー、ミリー、アメリカのダンス・グループのジェッツや、その他のNEMSのアーティスト、たとえばシラ・ブラック、サウンズ・インコーポレイテッドが出演していた)。当初この番組は「ジョン、ポール、ジョージ、アンド・リンゴ」というタイトルが用意されていたが、昔のシェイクスピア劇のように円形ステージで演奏されたため、「アラウンド・ザ・ビートルズ」と変更になった。

「アラウンド・ザ・ビートルズ」の出演契約では、ビートルズは4月17日から27日までに5日間のリハーサルに参加することになっていた(一部の共演者のリハーサルは4月13日から始まっていた)。リハーサルは26日まではチェルシーのホール・オブ・リメンブランスで、27日には翌日本番が収録されるレディフュージョンのウェンブリー・スタジオで行なわれる予定だった(放送日は収録日の4月28日参照)。しかし、映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影スケジュールがつまっていたビートルズは、5日間のリハーサルのうち3日間、この日と25日、27日にしか参加できなかった。

エプスタインはかなり有利な条件でこの番組への出演契約を交わしていた。そのなかのひとつに、プロデューサーとディレクターをビートルズ側で指名できるという条項があった。そこでビートルズ陣営はプロデューサーに「6.5スペシャル」や「オー・ボーイ!」など初期のイギリスのポップ番組を手がけたベテラン、ジャック・グッドを選び、ディレクターにはグッドの長年のパートナーであるリタ・ギルスピーを選んだ。そして、ビートルズはこの年の後半、アメリカのテレビ番組「シンディグ」に出演したときもグッドと仕事をすることになる(10月2、3日を参照)。

4月19日(日)
IBCスタジオ
Portland Place, London

「アラウンド・ザ・ビートルズ」では、出演者が生演奏するという体裁にはなっていた。しかし、実際にはこの番組のために収録したテープに合わせて口パクするというものだった。その関係でこの日、番組の出演者全員がロンドン中心部にあるIBCというスタジオに集まり、午前10時から午後8時30分までそのテープ収録が行なわれた。このときのセカンド・エンジニア兼テープ・オペレーターは、のちにビートルズのアルバム"GET BACK/LET IT BE"でエンジニア兼プロデューサーを務めるグリン・ジョンズだった(この日のバランス・エンジニアはテリー・ジョンソンだった。音楽担当のプロデューサーはいなかった)。番組のメインという特権からビートルズのレコーディングは最後だったため、4人は夕方IBCスタジオに入った。ほかの共演者はすでに収録を終えていた。レコーディングした曲目はかなり興味深いもので、いつもの'Twist And Shout' 'Roll Over Beethoven' 'I Wanna Be Your Man' 'Long Tall Sally' 'Can't Buy Me Love'を収録したほかに、それまでのヒット曲メドレー'Love Me Do~Please Please Me~From Me To You~She Loves You~I Want To Hold Your Hand'を演奏し、さらに最後に、有名になってからは演奏していなかった1959年のアイズレー・ブラザーズの曲'Shout'の強烈なバージョンをレコーディングした。

4月28日には、この日収録したサウンドトラック・テープに合わせて口パクし、番組の放送時には観客の歓声がかぶさった演奏が流れた。歓声なしのもとのサウンドトラックも現存している("ANTHOLOGY 1"収録)。

未公開のポールのソロ・シーン

4月20日(月)

ジャック・ビリングズ・テレビ・スクール・オブ・ダンシング
Goldhawk Rd, London

映画"A HARD DAY'S NIGHT"で、まだソロ・シーンを撮っていないのはポールだけだった。この日と翌日、長いポールのソロ・シーンのリハーサルと撮影が行なわれた。行方不明のリンゴを外で探していたポールが、リハーサル・ルーム(実際にはロンドン西部にあるダンス・スタジオ)を見つけて中に入り、そこでひとりでセリフの練習をしていた女優(アイラ・ブレア)と長い会話をするというシーンだった。アラン・オーウェンのオリジナル脚本にポールとリチャード・レスターが手を加え、2日がかりで撮影したにもかかわらず、このポールのシーンは完成した映画ではカットされている。そのため、映画ではポールのソロ・シーンはなかった。

一方、アビイ・ロードでは午後2時から3時15分まで、ジョージ・マーティンが'A Hard Day's Night'のモノ・ミックスおよびステレオ・ミックスを制作していた。テープはユナイテッド・アーティスツに渡された。

4月21日(火)

ジャック・ビリングズ・テレビ・スクール・オブ・ダンシング
London

前日に続いて、ポールとアイラ・ブレアのリハーサル・ルームでのシーンを撮影。この日も、ほかの3人のメンバーは撮影には参加していない。

4月22日(水)

オデオン・シネマ
Queen Caroline St, Hammersmith, London
そのほかのロンドンのロケ地
Other London locations

早朝、ハマースミス・オデオン・シネマの裏階段をかけ下りるシーンを撮影。「もうやーめた!」のシーンと「廊下」のシーン(3月18日、19日にトゥイッケナムで撮影)につながるこのシーンは、'Can't Buy Me Love'のオープニング部分に使用された(3月13日、4月23日を参照)。やがてビートルズは1964年のクリスマス・ショーで、このオデオン・シネマの屋内に戻ることとなる(12月22日、12月24日、1965年1月16日参照)。

午後の撮影は、やはりロンドン西部にあるロケ地、ノッティング・ヒル・ゲイトのセント・ルークス・ロードで、再び警官に追いかけられるシーン(その間ジョン・ブルタルが警官を演じる)。次にランカスター・ロード付近でリンゴのソロ・シーンを撮影。ミルク瓶の写真を撮ろうとして立ち止まってから、ファンの女の子ふたりに追いかけられたリンゴはセコハン・ショップ(オール・セインツ・ロード20番地)に逃げ込んで変装して外に出る(通りがかりの女の子に話しかけても無視されたので変装は大成功)。さっそうとオール・セインツ・ロードを歩き始めるが、それを警官が不審そうに見ているというシーンを撮影した。最後に、ポールがシェパーズ・ブッシュのゴールドホーク・ロードを歩き、「テレビ・リハーサル・ルーム」という看板がかけられたドアを開けて入っていく。ここは本当はジャック・ビリングズ・テレビ・スクール・オブ・ダンシングだった。

4月23日(木)

ソーンベリー・プレイング・フィールズ
Bridge Rd, Isleworth, Middlesex
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Can't Buy Me Love'に合わせて、ビートルズがヘリコプターの離着陸台ではしゃぐ場面(3月13日にガトウィック・エアポート・サウスで空中撮影)がいまひとつだと考えたリチャード・レスター監督は、この日の朝早くロンドン空港近くのアイズルワースにあるソーンベリー・プレイング・フィールズにビートルズを呼んだ。今回はにせの離着陸台を作って地上で撮影。前回と同じようにはしゃいで遊んでいるシーンを撮影したほか、レスターはジョン、ポール、ジョージにはしごから飛び上がるように指示。できるだけ高いところから飛んでいるように見せるため、カメラマンは地面に寝そべって撮影した。

昼近くになると、ジョンは主賓として呼ばれた文学昼食会に出席するためドーチェスター・ホテルへ向かわなければならなかった。そのため、その後の撮影はジョン抜きで行なわれた('Can't Buy Me Love'のシーンの最後、管理人が「君たち、ここは私有地だよ」と叫んでジョージが「ごめん。あんたの土地を痛めつけちゃった」と皮肉っぽく答える場面では、ポール、ジョージ、リンゴの3人しか出て

いない)。
アイズルワースでの撮影は午後1時に終わった。したがって、メンバーたちは午後4時30分から5時45分までアビイ・ロードで行なわれたミキシング・セッションに顔を出しているかもしれない。このセッションでは、'A Hard Day's Night'のモノ・ミックスが作られた。

映画の撮影終了

4月24日(金)

エッジヒル・ロード
West Ealing, London

この日午前中のリンゴのソロ・シーン撮影で、映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影はすべて終了した。リンゴの最後のソロ・シーンは、歩いている婦人のために、リンゴが道路の水たまりの上にわざわざ自分のコートをかけ、歩きやすくしてあげるという場面。ところが、最後の水たまりはじつは道路工事の大きな穴で、中では作業員が仕事をしていたため、リンゴの親切は悲惨な結果に終わる。撮影はウエスト・イーリングの住宅地の道で行なわれた。午後、ビートルズを含めた出演者とスタッフ全員が、セント・マーガレッツにあるパブ、タークス・ヘッド(3月10日参照)の裏手にある私設ホールに集まり、撮影の打ち上げパーティーが開かれた。イギリスで最高の音楽映画のひとつ、そして、最高のポップ映画であるこの作品は、わずか8週間で撮影されたのである。この映画のワールド・プレミアは、7月6日の夜、ロンドン中心部のピカデリー・サーカスにあるロンドン・パビリオンで行なわれ、ビートルズのメンバーも出席する。

注:"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影中、ユナイテッド・アーティスツの指示で監督のリチャード・レスターのメイン・カメラにより、映画のシーンとは関係ない4人の映像もかなり撮影された。そこには撮影のあいまのビートルズや、アビイ・ロードのEMIスタジオでサウンドトラック用の曲をレコーディングしている様子が記録されていた(無声フィルムのため、どの曲をレコーディングしているのか、またいつ撮影したのかも明らかになっていない)。やがて、ユナイテッド・アーティスツはBBCにその映像のイギリスでの独占放送権を譲った。BBCはこの映像を「フォロー・ザ・ビートルズ」という28分間のすばらしいドキュメンタリー・フィルムにまとめ、1964年8月3日、午後7時50分から8時20分にBBC1で放送される。番組は評論家のロバート・ロビンソンによる解説から始まった。ユナイテッド・アーティスツが提供したフィルムの内訳は、35ミリ・フィルムが5分、無声16ミリ・フィルムが約21分だった。無声フィルムの映像には、ジョージ・マーティン、リチャード・レスター、プロデューサーのウォルター・シェンソン、脚本のアラン・オーウェン、俳優のウィルフリッド・ブランベル、ノーマン・ロッシントン、ライオネル・ブレアが映っていて、テレビ放送分では、「ビートルズと仕事をするのはどんな経験だったか」という話題についてのコメントが全員の映像に重ねられた。
(ATVも別のアプローチからこの映画をめぐるドキュメンタリーを制作している。当初タイトルは「ザ・ロード・トゥ・ビートルマニア」だったが、7月29日の放送時には「ファンズ!ファンズ!ファンズ!」に変更。この番組は全編ビートルズに対するファンの熱狂ぶりを追ったもので、ビートルズのフィルムはまったく使われていない)。

4月25日(土)

ホール・オブ・リメンブランス
London

「アラウンド・ザ・ビートルズ」のリハーサル(4月18日参照)。

ポールウィナーズ・コンサートのメイン・アクトに

4月26日(日)

エンパイア・プール
Wembley

午後、15週間ぶりにイギリスのステージに立つ。毎年春に開催される「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌主催の1963/64年ポールウィナーズ・オールスター・コンサートに、ビートルズはメインで登場した。1万人の観客の前で、'She Loves You' 'You Can't Do That' 'Twist And Shout' 'Long Tall Sally' 'Can't Buy Me Love'を演奏。
ABCテレビはコンサートのもようを収録し、特別番組「ビッグ・ビート'64」として2回に分けて放送。ビートルズの演奏は、5月10日の午後4時5分から5時35分の第2部で放送される。ロンドンを除く一部の地域では、11月8日午後3時15分から4時40分に再放送されている。この第2部では、ビートルズが俳優のロジャー・ムーアから人気投票第1位の

CamScannerでスキャン

賞を受ける場面も放送。共演者はローリング・ストーンズ、ホリーズら。
夜、ビートルズはロイ・オービソンの28歳の誕生パーティーに出席。

4月27日(月)
ウェンブリー・スタジオ、第5A/Bスタジオ
Wembley

夜、エンパイア・プール沿いの通りにあるレディフュージョンのウェンブリー・スタジオに設置された本番セットで、観客を入れて、「アラウンド・ザ・ビートルズ」のリハーサルが行なわれた。
この日、シングル'Love Me Do'がトリー・レコードからアメリカでリリースされる。

『アラウンド・ザ・ビートルズ』本番

4月28日(火)
ウェンブリー・スタジオ、第5A/Bスタジオ
Wembley

リハーサルもサウンドトラックのレコーディングも終えて、午後9時から10時15分まで、テレビ特別番組「アラウンド・ザ・ビートルズ」の本番収録が、観客を入れて行なわれた。ビートルズは最終リハーサルのために午前11時にスタジオ入りし、本番までの間に、スウェーデンのラジオ局から長いインタビューも受けた。インタビュアーはそのラジオ番組の司会者クラース・ブールリング。
「アラウンド・ザ・ビートルズ」には大勢の出演者が参加したため、番組のなかでビートルズが登場したのは2回だけだった。ひとつは演奏(詳細は4月19日参照)で、もうひとつは番組の最初に行なわれたシェイクスピアの「真夏の夜の夢」のユーモアあふれる幕間劇(第5幕第1場)だった。劇では4人とも衣装をつけ、ジョンが美しい女性ティスベー、ポールがピラムス、ジョージがムーンシャイン、リンゴがライオンの役を演じた。また、この劇とは別に番組冒頭では、ジョン、ポール、ジョージがトランペットのファンファーレを吹きまねし、リンゴが旗を掲げて、大砲を放った。4人はまた、P・J・プロビーの演奏の紹介もしている。
この60分番組は、レディフュージョンで5月6日の午後9時45分から10時45分にかけてネットワーク放送。さらにビートルズ以外の部分を一部編集したものが、6月8日午後6時8分から7時に一部の地域で再放送される。NEMSはこの番組の海外売却権を獲得していたため、完成テープを14もらった。エプスタインは、アメリカではABCテレビにこれを売り、ABCはこれを1964年11月15日午後7時30分から8時30分(EST)に放送する。

4月29日(水)
ABCシネマ
Lothian Rd, Edinburgh, Midlothian

アルバート・ボニチとブライアン・エプスタインの共同主催による、大成功をおさめた2夜のスコットランド公演の初日。ビートルズはABCの楽屋で、BBCスコットランド・ラジオのレポーター、ビル・エイケンヘッドからインタビューを受けた。これは同日の午後6時10分から6時32分のBBCラジオの番組「スコティッシュ・ニュース」で放送された。

4月30日(木)
ローマン・キャンプ・ホテル
Callander, Perthshire
シアター・ロイヤル
Glasgow
オデオン・シネマ
Glasgow

午後早く、パースシャーのカランダーにあるビートルズが宿泊していたホテルに、BBCスコットランドの取材陣が訪れ、レポーターのエブリン・エリオットによる2分38秒間のインタビューを収録。このもようは、この日の午後6時10分から6時31分にBBC1の報道番組「シックス・テン」で放送された。
夕方、グラスゴー・オデオンでの2回のステージを行なう前、ビートルズは前にも訪れたことのあるスコティッシュ・テレビのシアター・ロイヤル・スタジオ(1963年1月8日参照)へ向かった。5月5日午後5時から5時55分に放送分の「ラウンドアップ」への出演分を収録するためだった。演奏はしなかったが、番組の「パーソナリティ・パレード」というコーナーでふたりのレギュラー司会者から長いインタビューを受けた。最初にジョンとポールがモーラグ・フッドと、次にジョージとリンゴがポール・ヤングと話し、最後にメンバー4人と司会者ふたりが一緒になって、グループ全体の話題について語った。

メンバー4人がそろうと雰囲気はかなりくだけて、ジョージがおどけた様子でジョンの首を締めつけようとする場面も見られた。

5月1日(金)

BBCパリス・スタジオ
London

BBCラジオの休日ビートルズ・スペシャル番組「フロム・アス・トゥ・ユー」の3回目の収録をした。放送は5月18日のウイット・マンデイ(聖霊降臨祭の翌日)の午前10時から12時。リハーサルを含めて午後6時30分から9時30分に、ロンドン中心部のパリス・スタジオで収録された。ビートルズは、'I Saw Her Standing There' 'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!' 'I Forgot To Remember To Forget' 'You Can't Do That' 'Sure To Fall (In Love With You)' 'Can't Buy Me Love' 'Matchbox' 'Honey Don't' (EMIのレコーディングではリンゴがリードボーカルをとっているが、このときはジョンが歌った。1964年10月26日参照)、以上8曲を演奏した。前回と同様に、番組のオープニングとエンディングに、'From Me To You' をアレンジしたタイトル曲が流れた。今回は、2月28日に収録し直したバージョンを使用。番組ではいつものように司会者(前回に引き続いてアラン・フリーマン)とのくったくのないやりとりを交わしてはリクエストを読み、'Happy Birthday' の替え歌 'Whit Monday To You' を2回、即興で歌った。

この日の演奏曲目を見ると、やはりビートルズがまだ有名になる前にステージでよく演奏していた曲をやりたがっていたのがよくわかる。こういった曲は、短いステージ時間のせいでレコード発売済みの曲のみを演奏するようになってからは、ステージのレパートリーからはずされていったものだ。8曲のうち4曲は、サン・レーベルから発表された曲のカバーである。

5月2日、ビートルズは休暇に向かった。ジョンとジョージは5月26日に帰国、ポールとリンゴはその翌日に帰国。この間に「フロム・アス・トゥ・ユー」の第3回が放送され、ラジオ・ルクセンブルクの日曜の夜の番組「ディス・イズ・ゼア・ライフ」(1952年以降アメリカで放送されたテレビのポップ番組のラジオ版)でもビートルズをフィーチャーしたものが2回放送された。この番組はピーター・オールダスリーの司会で、毎週午後9時から9時15分に放送されており、ビートルズは5月10日と5月17日にとりあげられる。また5月2日には、アメリカで"THE BEATLES' SECOND ALBUM"が"MEET THE BEATLES"に代わってNo.1に輝く。

5月22日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズのメンバーがまだ海外での休暇を楽しんでいたこの日、ジョージ・マーティンはEMIの第2スタジオで、午前10時から11時までオーバーダビング・セッションをしていた。マーティンは 'You Can't Do That' のテイク9にピアノを追加したが、これは結局ボツになる。

休暇から戻り、ステージへ

5月31日(日)

プリンス・オブ・ウェールズ・シアター
London

1963年11月4日にあの「ロイヤル・コマンド・パフォーマンス」が行なわれた会場に再び出演。この日のコンサートは、エプスタインが同会場で主催した7週連続の日曜夜のポップ・ショー「ポップス・アライブ!」の第5夜。毎回2回行なわれたステージには6組の共演者、ケニー・リンチ、クリフ・ベネット・アンド・レベル・ラウザーズ、バーノンズ・ガールズ、ローン・ギブソン・トリオ、シャンツ、ハーレムズが出演した。
ビートルズは 'Can't Buy Me Love' 'All My Loving' 'This Boy' 'Roll Over Beethoven' 'Till There Was You' 'Twist And Shout' 'Long Tall Sally' を演奏した。

アルバムとEPのレコーディング再開 カール・パーキンスがスタジオ訪問

6月1日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

映画が完成して長期休暇もとって、ビートルズは再びEMIスタジオへ。3日間にわたってアルバム"A HARD DAY'S NIGHT"のサウンドトラック以外の曲と、EP"LONG TALL SALLY"に収録する曲をレコーディングした。EPのタイトル曲 'Long Tall Sally' と 'I Call Your Name' はす

CamScannerでスキャン

でに完成していた。

この日は、午後2時30分から7時15分までと、午後8時から11時15分までの2回のセッションが行なわれた。まず最初、EP収録曲の'Matchbox'を5テイク、次にアルバム収録曲の'I'll Cry Instead'を2パートに分けて、最初のパートを6テイク、後半のパートを2テイク、レコーディングした(のちに両パートを編集)。さらに、EP収録曲の'Slow Down'を6テイク、アルバム収録曲の'I'll Be Back'を16テイク、レコーディングした。

この日最初のセッションのとき、ビートルズに大きな影響を与えたカール・パーキンスがEMIスタジオを訪れた。アメリカからプロモーション・ツアーのためにイギリスに来ていたパーキンスは、ビートルズが彼のオリジナル曲'Matchbox'をレコーディングするところを見学した。

6月2日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から午後1時までと午後2時30分から5時30分までの予定で2回のセッション。どちらも予定より15分ぐらい長びいた。この日レコーディングされた曲は、ジョンの'Any Time At All'と'When I Get Home'(いずれも11テイク)、そしてポールの'Things We Said Today'(3テイク)。3曲ともアルバムのB面用。

リンゴが入院
ジミー・ニコルがリハーサルに参加

6月3日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日はEMIスタジオで、午後3時から4時まではリハーサル、午後5時30分から9時30分まではレコーディングという性格の違う仕事をふたつこなした。

リハーサルは、当初2時30分から5時30分まで予定されていたレコーディング・セッションをエプスタインが急遽変更したもの。セッション・ドラマーのジミー・ニコルをスタジオに呼び、ビートルズのメンバーと演奏させ、グルーヴを合わせるためだった。ロンドン西部のバーンズにある自宅でくつろいでいたニコルのもとに、エプスタインに代わってジョージ・マーティンから電話がかかったのはリハーサルのほんの数時間前だった。マーティンはニコルに、一時的にビートルズにならないかと誘った。じつはその日の午前中(くしくもバーンズで)行なわれたフォト・セッションから急に具合が悪くなったリンゴは入院することになり、翌朝出発するツアーに参加できなくなった。そのための代理ドラマーとしてニコルが緊急に指名されたのである。

ニコルはEMIスタジオに駆けつけ、レコーディングを返上して行なわれたリハーサルで、リンゴ以外の3人とステージ・レパートリーのなかから6曲、'I Want To Hold Your Hand' 'She Loves You' 'I Saw Her Standing There' 'This Boy' 'Can't Buy Me Love' 'Long Tall Sally'を練習した。このリハーサルからわずか27時間後には、ジョン、ポール、ジョージ、ニコルの4人は、コペンハーゲンで初めてのステージに立っていた。

ニコルが帰ったあと、ジョン、ポール、ジョージはスタジオに残り、レコーディングを行なった(この日レコーディングが行なわれたという事実とその詳細は、1991年に公開された資料で初めて明らかになった)。リンゴが不在のため、3人はそれぞれの新曲のシンプルなデモ・テープを作った。午後5時30分から9時30分までのセッションを切り出したのはジョージで、'You'll Know What To Do'という曲のデモ・テープを録音。この曲は前日の6月2日付でジーブ・ミュージックが著作権を管理していたが、ビートルズにも誰にもとりあげられることはなく、1995年に"ANTHOLOGY 1"がリリースされるまで未発表だった(ジーブ・ミュージックはディック・ジェイムズとエプスタインが設立した音楽出版権管理代行事務所で、ジョージはそのクライアントだった)。

次にポールが、シラ・ブラックのリリース用に特別アレンジし直した'It's For You'のデモを録音した(セッション記録にはポールが録音したのは'You're My World'であると手書きで記されているが、これはEMIの記録スタッフの思い違いだろう。この曲は当時イギリス・チャートでナンバーワンだったシラ・ブラックの曲で、ポールは作曲もレコーディングもしていない)。'It's ForYou'は間違いなくポールの曲で、シラはEMIスタジオで4月10日に初めてレコーディングし、6月29日、このアレンジを変更したリメイクを録音している(さらに7月2日、2回目のリメイクをレコーディングし、ポールがピアノを弾いている)。

注:1964年7月号の『ビートルズ・ブック』に掲載されている

CamScannerでスキャン

ポールにインタビューした氏名不詳のライターの記事によると、ポールは5月末の休暇中に2曲作曲し、どちらもツアーから帰国後にレコーディングしたと語っている。その2曲は'Things We Said Today'と'Always And Only'だった。しかし、EMIのセッション資料には'Always And Only'という曲がビートルズまたはほかのアーティストによってレコーディングされたという記載はない。さらに、リリースされるか否かを問わず、ディック・ジェイムズがすべてのビートルズの新曲を登録していたことはジョージの'You'll Know What To Do'の例で明らかだが、'Always And Only'というタイトルの作品で著作権登録されているポール・マッカートニーの作品は存在しない。したがって、'Always And Only'はそのライターが'It's For You'と勘違いして記したものと考えられなくもない。

この日録音された3本目のデモ・テープは、ジョンの新曲'No Reply'である。この曲はこの年の終わりにリリースされるアルバム"BEATLES FOR SALE"に収録(本格的にレコーディングされたのは9月30日。同日の項を参照)。ジョンがデモ・テープを切ったのは、同じNEMSに所属するトミー・クイックリーにこの曲をシングル・リリースさせることになっていたからだった。クイックリーはこのデモ・テープをもとにレコーディングし、8月7日の発売日まで決定していたにもかかわらず、レコードはなぜかリリースされなかった。

午後9時30分ごろ、ジョン、ポール、ジョージは4トラック・レコーディングの作業に戻り、'Any Time At All'と'Things We Said Today'にオーバーダブをほどこした(何の楽器をオーバーダブしたのかは不明)。

ワールド・ツアー、デンマークから開始

6月4日(木)

KBホーレン
Peter Bangsvej, Frederiksberg, Copenhagen, Denmark

デンマークを皮切りに、オランダ、香港、オーストラリア、ニュージーランドを回る27日間のビートルズ・ワールド・ツアーが開始。この日は午後6時と9時30分からの2回のステージで、それぞれ4,400人の観客が入った。ツアー初日から5回目の公演まで、つまり、コペンハーゲンからアデレイドの公演までジミー・ニコルがリンゴの代理ドラマーとして参加した。

コペンハーゲンからシドニーまでの10公演の演奏曲は、'I Saw Her Standing There' 'I Want To Hold Your Hand' 'You Can't Do That' 'All My Loving' 'She Loves You' 'Till There Was You' 'Roll Over Beethoven' 'Can't Buy Me Love' 'This Boy' 'Long Tall Sally'というものだった。'Twist And Shout'が'Long Tall Sally'の前に、または代わりに演奏されることもあった。また、この日のコペンハーゲンでの1回目のステージだけは、'I Want To Hold Your Hand'がオープニング曲で'I Saw Her Standing There'が2曲目だった。

(ロンドンの病院に入院中のリンゴは別として)ビートルズが国外にいるあいだ、EMIではジョージ・マーティンとバランス・エンジニアのノーマン・スミスはビートルズのレコーディングの仕上げに取り組んだ。この日は午後2時30分から7時まで、'Long Tall Sally' 'Matchbox' 'I Call Your Name'のモノ・ミックスを制作した。さらに、ジョージ・マーティンが'Slow Down'にピアノをオーバーダブしたあと、同様にモノ・ミックスをし、EP"LONG TALL SALLY"用の4曲を完成させた。このEPは6月19日、イギリスでEMIよりリリース。続いて、アルバム"A HARD DAY'S NIGHT"のサウンドトラック以外のモノ・ミキシングを開始し、午後7時までに'When I Get Home' 'Any Time At All' 'I'll Cry Instead'が完成した。

オランダで2日間公演

6月5日(金)

カフェレストラン・トレスロング
Vosselaan, Hillegom, The Netherlands

午後1時にアムステルダムに到着し、スヒポール空港で記者会見を行なったあと、オランダでの初仕事となるVARAテレビの番組収録に参加。これは最高におかしなテレビ出演のひとつとなった。空港から南に車で向かい、午後4時ごろ、ハールレム近くのヒルゴムの町に到着。テレビ局がよく使用していた劇場完備のレストランで、ビートルズは午後5時30分からリハーサルを、8時から収録を開始した。

2部構成の番組の前半では、ファンとビートルズの質疑応答が行なわれた。まず、150人の観客のなかにいる中継アナウンサーのヘレマン・ストックに、ファンがビートルズへの質問を言う。ストックはその質問をマイクで、劇場のバーで

ビートルズと一緒に座っているヘッドホンを付けたベレンド・バウドベインに伝え、バウドベインがこれを英語でビートルズに質問し、ビートルズが答えるのだ。

演奏はビートルズの演奏。ビートルズは口パクすることになっていたが、マイクが入力されていたため、気分次第で生のボーカルを加えることもできた(ギターもコードが差し込んであったがアンプはなく、とくに目新しい音が重なっている様子はなかった)。ビートルズはまず'Twist And Shout'を、続いて'All My Loving'と'Roll Over Beethoven'を演奏。やがて、次の曲'Long Tall Sally'の演奏中に、一部の客がステージの近くで踊り始めた(ほとんどは男性)。そして、'She Loves You'が始まるとその客はさらにビートルズに接近。'Can't Buy Me Love'を歌い始めるころには、ジョン、ポール、ジョージはすっかり観客の海に取り囲まれてしまっていた。マル・エバンズをはじめ、ニール・アスピノール、デレク・テイラーが観客を遠ざけようとするが、もはや不可能だった。ニールはビートルズの3人にステージから降りるように指示し、3人はそれに従ったが、口パクだったため、3人のいないステージでは曲だけがひたすら流れ続けるありさまだった。一方、ステージに残されたジミー・ニコルは、何が何でも代理ドラマーを務めるんだといった様子で、ひとり黙々とドラムを叩き続けた。

この日の収録分は、翌日アムステルダム周辺の運河の遊覧船で遊ぶビートルズのニュース映像とともに、6月8日午後8時30分から9時10分に、VARAは「ザ・ビートルズ・イン・ネイデアラーント」と題してネイデアラーント1テレビで放送。また、7月18日午後3時50分から4時30分に再放送される。

6月6日(土)

フェイリンハル・オブ・ホープ・ファン・ゼーハン

Veilingweg, Blokker, The Netherlands

アムステルダムから40キロ北にあるブロッカーのオークション会場で、2回のステージ。午後2時30分からの昼のステージには2,000人のファンしか入らなかったが、午後7時からの夜のステージは7,000人の完売となった。ビートルズは8組の共演者が出演したあと、昼の部では午後4時30分から、夜の部では午後10時5分からステージに登場し、それぞれ25分間ほど演奏。当時のビートルズのコンサートの多くがそうであるように、この日も夜のステージがフィルムに収められた。この日はテレビ・ニュースとニュース映画会社によって撮影された。

香港で1日だけの公演

6月9日(火)

プリンセス・シアター

Un Chau St, Kowloon, Hong Kong

九龍にある1,700席のプリンセス・シアターで、2回のステージ。大半の観客はイギリス人だったとはいえ、香港でもビートルマニアは確実に存在していた。しかし、ステージは2回とも満席ではなかった。おもな要因は、エプスタインの知らないうちに地元のプロモーターがチケットを異常に高く売りさばいていたからだった。4ポンド10シリングに相当する75香港ドルというその料金は、当時の香港男性の平均的な週給と同じだった。

6月7日の朝にアムステルダムを出発したビートルズは、いったんロンドン空港に戻り、4人を待って出発を遅らせていた飛行機に乗り継ぎ、香港へ飛んだ。飛行機は給油のため、途中、チューリヒ、ベイルート、カラチ、カルカッタ、バンコクに立ち寄った。どの空港のターミナルにも、昼夜を問わず、またメンバーが全員降りようとひとりだけ降りようと、とにかくそのたびにビートルマニアの爆発が起きた。そして、香港の啓徳空港に到着すると、1,000人以上のファンがビートルズを出迎えていた。

この日イギリスでは、午後2時から5時45分まで、ジョージ・マーティンが'A Hard Day's Night'と'Things We Said Today'の新たなモノ・ミックスを制作。また、アメリカのキャピトル・レコードとユナイテッド・アーティスツ・レコードに送るため、アルバム収録曲'I Should Have Known Better' 'If I Fell' 'Tell Me Why' 'And I Love Her' 'I'm Happy Just To Dance With You' 'I'll Cry Instead' 'Can't Buy Me Love' 'A Hard Day's Night'のモノ・ミックス、2セットをコピーした。

6月10日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ

London

EMIの第2スタジオで、午前10時から11時にかけて、'I'll Be Back'の新しいモノ・ミックスが作られた。もちろん、ビートルズは不参加。

オーストラリアの4都市で公演

6月12日(金)～13日(土)

センテニアル・ホール
Showgrounds, Wayville, Adelaide, South Australia, Australia

6月11日、ビートルズは香港からの直行便でオーストラリアに到着した。途中マニラで給油する予定だったが、フィリピンの空港側が猛暑のためにこれを禁止したため、オーストラリアのノーザン・テリトリーの首都ダーウィンで給油することになった。都市部から離れたダーウィン空港には、午前2時35分という時間にもかかわらず、空港の滑走路脇に400人ものファンが集まっていた。この状況は、これから直面するオーストラリア主要都市でのビートルマニアの壮絶さを予感させるものだった。ダーウィンに少し止まったあと、飛行機はシドニーに向かった。シドニーは暴風雨のまっただなかだった。この天候でいちばんひどい目にあわされたのは、空港にすしづめになっているファンや展望台にいるファンのためにトラックの上でパレードさせられたビートルズ自身だった。アムステルダムで4人がせっかく買ったお気に入りのコートは、あっというまに縮んで台なしになってしまった。シドニー市内に着いてからは、いつものように大勢のファンに取り囲まれ、ホテルから一歩も外に出られなかった。一方、リンゴはロンドンの病院を退院。

この時点ではシドニーでコンサートは行なわれず、12日の朝、一行はシドニーからオーストラリアでの最初の公演会場センテニアル・ホールのあるアデレイドに飛んだ。ビートルズはこの会場に2夜続けて出演し、4回のステージを行なった。演奏曲目はデンマーク、オランダそして香港で披露されたものと同じ。計1万2,000枚のチケットに、5万人の購入希望者が殺到した。

相当な額の出演料と交換に、NEMSは12日の2回のショーのうち1回をラジオ放送用に収録することを許可した。この収録分は、「ビートルズ・ショー」といういたってシンプルなタイトルで6月15日の夜に放送。洗剤メーカーのサーフ提供のこの番組は、地域ごとに放送局も放送時間も異なる。たとえば、アデレイドでは5DN局で午後8時30分から9時30分、メルボルンでは3UZ局で午後8時から9時に放送される。

メルボルンからリンゴ復帰

6月15日(月)～17日(水)

フェスティバル・ホール
Dudley St, Melbourne, Victoria, Australia

6月14日、ビートルズはメルボルンのエッセンドン空港に到着。15日から3日間、1日2回ずつのステージが行なわれた。このメルボルンでの1回目のステージから、リンゴが復帰したため、ジミー・ニコルはイギリスに戻った。6回のショーには、合計4万5,000人の観客がつめかけた。

メルボルンでの最後の公演は、オーストラリアのチャンネル9によってテレビ放送用に収録され、1時間番組「ザ・ビートルズ・シング・フォー・シェル」(石油会社のシェルがスポンサー)として編集され、7月1日午後7時30分から8時30分に放送。ビートルズの演奏時間は30分にも満たないため、番組ではオーストラリア内外のほかのアーティストのステージも紹介された。

この番組でビートルズが演奏しているのは、'I Saw Her Standing There' 'You Can't Do That' 'All My Loving' 'She Loves You' 'Till There Was You' と'Roll Over Beethoven'(この曲とその前の曲に関しては映像に多少乱れがある)、'Can't Buy Me Love' 'Twist And Shout' 'Long Tall Sally'の9曲。最後の曲の演奏中に、客席からひとりの男がステージに走り寄ってきて、ジョンと握手した。

エプスタインは当初、ビートルズの演奏のテレビ放送時間は12分間以内にかぎると主張していたが、コンサートの1時間後に収録されたノーカットのビデオ・テープを観て大満足し、20分(実際には22分)まで許可した。

6月18日(木)～20日(土)

スタジアム
Rushcutter's Bay, Sydney, New South Wales, Australia

メルボルンから再びシドニーへ。シドニーでは3夜で6回のにぎやかなステージが繰り広げられ、各ステージともシドニーのポップ・コンサートでは当時最高の観客動員数である1万2,000人がスタジアムを埋めた。

それまでの例にもれず、シドニーでのステージの一部もニュース映画用のカメラに収録された。しかし、今回異例だ

CamScannerでスキャン

ったのは、このフィルムから「ビートルズ・アット・ザ・スタジアム」という劇場映画が製作され、「独占シネマ・サウンド!」という触れ込みで6月25日からシドニーのワインガード&ステート・シアトレッツで公開されてしまったことだった。宣伝文句には「'She Loves You' 'Love Me Do' 'I Want To Hold Your Hand'などの5大ヒット曲の一部をまとめて聴こう」とあるが、ビートルズはシドニーはもちろん、このツアーでは'Love Me Do'は一度も演奏していない。

6月20日、シドニーのホテルの部屋で、ビートルズはイギリスからの電話インタビューに応じた。これはBBCラジオ番組「ラウンドアバウト」のためのもので、4人は番組司会者のコリン・ハミルトンと話をした。番組では計5分間のインタビューが3つに分けて放送される。放送は6月27日、午後5時から6時30分。

ニュージーランドの4都市で公演 リンゴのボーカル復活

6月22日(月)および23日(火)

タウン・ホール
Cuba St, Wellington, North Island, New Zealand

6月21日、シドニーからニュージーランドに飛行機で移動。7日間滞在したニュージーランドでの最初の公演会場は、2,500席のタウン・ホール。ここで2日間、2回ずつのステージが行なわれた。扁桃腺炎から回復したリンゴは、ここでの最初のステージから、自分のボーカル曲'Boys'を歌い始めた。これで、ビートルズの演奏曲数は通常の11曲に。

一方、イギリスのEMIスタジオでは6月22日に、プロデューサーのジョージ・マーティン、バランス・エンジニアのノーマン・スミス、セカンド・エンジニア兼テープ・オペレーターのジェフ・エメリックの3人が、ビートルズのレコーディング曲のモノおよびステレオ・ミックスの作業を集中的にこなした。第1スタジオで、まず午前10時から11時30分まで、'Any Time At All' 'When I Get Home' 'I'll Be Back' 'And I Love Her'のモノ・ミックスを作ったのち、午前11時30分から午後1時までと午後2時30分から5時30分までのセッションで、'And I Love Her' 'When I Get Home' 'Any Time At All' 'I'll Be Back' 'If I Fell' 'A Hard Day's Night' 'I Should Have Known Better' 'I'm Happy Just To Dance With You' 'I Call Your Name' 'Can't Buy Me Love' 'You Can't Do That' 'Tell Me Why' 'Things We Said Today' 'Matchbox' 'Slow Down' 'Long Tall Sally' 'I'll Cry Instead'のステレオ・ミックスを制作した。

さらに第2スタジオに移り、午後5時45分から9時まで'Slow Down'と'Matchbox'のモノ・ミックスと'Things We Said Today'のステレオ・ミックスのコピーを制作し、長い1日の作業を終えた。

6月24日(水)~25日(木)

タウン・ホール
Moray Place, Dunedin, South Island, New Zealand

2日間で4回のステージ。集まった観衆は合計1万人。

6月26日(金)

タウン・ホール
Moray Place, Dunedin, South Island, New Zealand

客席4,000のタウン・ホールで2回のステージ。

オークランドからダニディンまでのフライトは不安に満ちたものだった。飛行機に「細菌爆弾」をしかけたという匿名の脅迫電話がかかっていたのである。

6月27日(土)

マジェスティック・シアター
Manchester St, Christchurch, South Island, New Zealand

公演の翌日の6月28日、ビートルズはクライストチャーチを出発し、オークランド経由でオーストラリアのシドニーへ向かった。

シドニーでさらに飛行機を乗り継ぎ、真夜中すぎ(6月29日)にブリスベンに到着した。

オーストラリアでワールド・ツアー終了

6月29日(月)~30日(火)

フェスティバル・ホール
Charlotte St, Brisbane, Queensland, Australia

興奮に包まれた南半球でのツアーの最終公演地。2日間で4回のステージを行ない、各5,500人の観客が入った。

CamScannerでスキャン

7月1日の早朝、ビートルズはブリスベンを出発してシドニーへ。シドニーでカンタス航空の飛行機に乗り換え、シンガポール、フランクフルト経由で、7月2日の午前11時10分、ロンドン空港に到着した。

映画のプレミア・ショーから テレビ収録へ

7月7日(火)

ライム・グローブ・スタジオ、Eスタジオ
London
テレビジョン・ハウス
London

ニュー・シングルをリリースしたので、「トップ・オブ・ザ・ポップス」に出演することになった。この日ビートルズは、ニュー・シングルの2曲'A Hard Day's Night'と'Things We Said Today'、そしてEPのタイトルソング'Long Tall Sally'の3曲を口パクで収録した。

当初エプスタインは7月8日の放送の数時間前に収録をマンチェスターで行なうことに同意していたが、急に変更することにした。そしてこの日、ロンドン西部のライム・グローブ・スタジオで、午後2時から5時に観客を入れずに収録が行なわれた(午後2時から4時までリハーサル、4時から4時15分までセッティング、4時15分から5時までが本番)。前の夜に映画"A HARD DAY'S NIGHT"のプレミアとパーティーに出席したビートルズは、このBBCのスタジオに遅刻してきた。疲れていた4人は、明らかに本調子ではなかった。

この日収録された'A Hard Day's Night'と'Long Tall Sally'は7月8日BBC1で午後7時35分から8時までの放送分に含まれた。7月22日(午後7時35分から8時)には'A Hard Day's Night'が、7月29日(午後7時10分から7時35分)には'Things We Said Today'が再放送。さらに、クリスマス・イブの12月24日午後7時25分から8時25分に放送された年末特別編「トップ・オブ・ザ・ポップス'64」でも、'A Hard Day's Night'が流れる(この特別編では、11月16日に収録される'I Feel Fine'と、12月22日に新しく収録されるビートルズへのインタビューも放送。各日付の項を参照)。

ライム・グローブ・スタジオでの収録が終わると、ビートルズはすぐにロンドン中心部にあるレディフュージョンのスタジオ、テレビジョン・ハウスへ。そして、今にも、つまり、午後6時30分から始まろうとしているグラナダ・テレビの番組「シーン・アット6:30」用の数分間のインタビューを、なぜかわざわざ録画した。収録分はそのまますぐに番組中で放送された。このインタビューで、ビートルズは映画"A HARD DAY'S NIGHT"について語った(番組では映画の断片も放送)。

また、おそらくテレビジョン・ハウスにいるあいだ、「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌のニュース欄担当編集者クリス・ハッチンスによるジョンへのインタビューも行なわれた。ハッチンスは毎週木曜の夜(午後9時30分から10時放送)にBBCラジオの新シリーズ番組「ザ・ティーン・シーン」も担当していて、このインタビューはこの番組用だった。ジョンが映画"A HARD DAY'S NIGHT"について語った3分27秒のこのインタビューは、7月9日に放送された(「ザ・ティーン・シーン」は2月27日にパイロット版が編集され、BBCに収まるまでしばらく番組の買い手を求めていた。そのパイロット版には、2月7日から21日までアメリカを訪れたビートルズに同行していたハッチンスがNME誌の取材として行なったインタビューも含まれていた。現在のところ未放送)。

リバプールでの大歓迎

7月10日(金)

リバプールの各地
Liverpool

大スター、ビートルズが地元リバプールに凱旋。スピークにあるリバプール空港で記者会見を行なったのち、町の中心まで車で華々しく向かった。通りではあふれんばかりの観衆がビートルズに拍手と歓声を送った。4人はタウン・ホールで行なわれたリバプール市主催のレセプションに顔を出したのち、夜はオデオン・シネマでの映画"A HARD DAY'S NIGHT"の北部プレミア・ショーに出席した。この日、20万人以上のリバプール市民がビートルズを町のどこかで歓迎したわけで、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴにとってはこれこそが最高のレセプションだった。

1日中テレビ・カメラがこの歓迎ぶりを追い、その映像は世界各地のニュース番組で紹介された。BBC1の夜のローカル・ニュース番組「ルック・ノース」(午後6時10分から6時35分)では、ビートルズが空港に到着した様子を流し、さらに記者会見の映像、レポーターのジェラルド・ハリスン

CamScannerでスキャン

による独占インタビューを合わせて4分間の特集を放送した。また、グラナダ・テレビの「シーン・アット6:30」(午後6時30分から7時)は、空港到着の様子、空港での独占インタビュー、タウン・ホールのバルコニーに姿を現した4人を見ようと集まった観衆の前で、ドイツ式敬礼のポーズをとるジョンの姿などを放送した。またこの日、映画と同名タイトルのアルバムとシングルが同時リリースされた。

7月11日(土)
テディントン・スタジオ・センター
Teddington

ABCテレビの番組「ラッキー・スターズ(サマー・スピン)」にめずらしく生出演。この番組や通常シーズンの「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」は、放送の6日前に収録するのがふつうだった。今回も、当初は7月5日にバーミンガムのアストンにあるアルファ・スタジオでの収録が予定されていたが、たまたまITV技術スタッフがストライキを起こして中止になったため、めずらしい生出演が実現したのだ。
映画"A HARD DAY'S NIGHT"の北部でのプレミア・ショーのあと、ビートルズは午前1時30分にリバプールを出発、午前3時にロンドン空港に到着した。数時間眠ったあと、ロンドン中心部に再び集合し、ボートに乗ってテムズ川を下り、ABCのテディントン・スタジオ・センターへ。スタジオ所有の船着き場に午後1時45分に到着したビートルズは午後のリハーサルのあと、5時50分から6時35分までの番組に生出演し、'A Hard Day's Night' 'Long Tall Sally' 'Things We Said Today' 'You Can't Do That'を口パクした。

7月12日(日)
ヒッポドローム・シアター
Brighton

海辺のリゾート地で行なわれたこのコンサートはビートルズの帰国後1回目、そして5週にわたり日曜日に行なわれた夏の海浜リゾート・コンサート・シリーズの1日目だった(テレビ収録用の海浜リゾート・コンサートも1回行なわれた)。1963年にはリゾート地で47ステージもこなしていることを考えると、1年で大きな違いである。
この日の共演者のなかには、ビートルズの代理ドラマーを務めたジミー・ニコルのバンド、シャブダブズがいた。このときは同じ公演に出演したが、ビートルズとニコルが直接接触することはなかった。

新しいラジオ番組『トップ・ギア』に出演
7月14日(火)
ブロードキャスティング・ハウス、B7/S2スタジオ
London

ティーンエイジャー向けのポップ・ミュージックは、次第にヤング・アダルトのロック・ミュージックに変貌し、海賊ラジオ局から派手で魅力的なポップ・ロック番組がどんどん流れ込んでくるという状況のなかで、BBCラジオの幹部らもそうした番組編成戦略を取り入れるしかないと自覚せざるを得なくなった。その結果、まず登場したのが、1964年7月16日から放送が開始された週1回の夜の番組「トップ・ギア」である。「サタデイ・クラブ」のコンビ、プロデューサーのバーニー・アンドリュースと司会のブライアン・マシューと顔ぶれこそは新しくなかったかもしれないが、この番組の放送時間は午後10時から11時55分(初回放送分のみ)で、まったくこれまでとは対照的なものだった。以来「トップ・ギア」は1975年9月まで、最新の音楽を流すBBCラジオ1(1967年にライト・プログラムが改編)の看板番組となった。
ビートルズはこの番組の第1回目の放送にメインで出演し、この日の午後7時から11時までロンドン中心部にあるブロードキャスティング・ハウスのS2スタジオで収録を行なった(リハーサルも含む)。ビートルズは'Long Tall Sally' 'Things We Said Today' 'A Hard Day's Night'(ギター・ソロに問題があり、この曲にかぎりその部分にレコードがオーバーダブされている)、'And I Love Her' 'I Should Have Known Better' 'If I Fell' 'You Can't Do That'の7曲を演奏し、いつものようにブライアン・マシューとおしゃべりやジョークを交わした。
この新番組に大きな関心を持ち、プロデューサーのバーニー・アンドリュースとも親しかったビートルズは、ジョンを除く3人で番組の予告編をいくつか収録した。その予告編は、7月16日の放送開始日とその数日前からBBCラジオで流された。この収録はプライベートに行なわれたもので、場所はブライアン・エプスタインの仕事上の仲間でありビートルズとも仲のよかったテリー・ドーランとアンドリュースが一

CamScannerでスキャン

緒に住んでいたメイフェアのシェパード・ストリートにあるアパートだったようだ。
「トップ・ギア」の収録前、午後6時15分から7時までに、B7スタジオではBBC海外放送の番組「ハイライト」のマイケル・スミーによるポールの単独インタビューが約13分間行なわれた。7月18日の午後11時15分から12時(GMT)にこの番組でこの収録分のうち5分45秒分が放送され、また、12月22日午前7時30分から7時45分には「ア・ビートルズ・アイ・ビュー」と題して11分11秒のバージョンが海外放送された。このインタビューはBBCの国内番組では放送されていない。

7月17日(金)

BBCパリス・スタジオ
London

パリス・スタジオでリハーサルを含めて午後2時15分から6時15分まで収録が行なわれた。番組は4回目の休日ビートルズ・スペシャル番組「フロム・アス・トゥ・ユー」。これは8月3日の午前10時から12時に放送。第4回の司会は、ラジオ・ルクセンブルクの司会者として名をあげ、現在(1991年)ではアメリカのレコード界の要人であるドン・ウォーデル。
番組はいつもどおりの構成で、ホストとおしゃべりし、リスナーからのリクエストを読み、8曲を演奏した。今回のレパートリーは、'Long Tall Sally' 'If I Fell' 'I'm Happy Just To Dance With You' 'Things We Said Today' 'I Should Have Known Better' 'Boys' 'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!' 'A Hard Day's Night'。番組のオープニングとエンディングには、すっかりおなじみになった'From Us To You'が流れたが、最後のクレジットはめずらしくジョンが読んでいる。

7月19日(日)

ABCシアター
Blackpool

バラエティ番組「ビッグ・ナイト・アウト」の夏版「ブラックプール・ナイト・アウト」に生出演。番組は、午後8時25分から9時25分にブラックプールにあるABCシアターから、ABCテレビを通して全ITV系列局に中継された。司会はいつものようにコメディアン兄弟のマイクとバーニー・ウィンターズ。ビートルズをメインとし、チタ・リベラ、フランク・ベリー、ジミー・エドワーズ、ライオネル・ブレアが出演した。
前日に飛行機でブラックプールに来ていたビートルズは、この日曜日の朝からABCシアターで行なわれたリハーサルに参加した。'A Hard Day's Night' 'And I Love Her' 'If I Fell' 'Things We Said Today' 'Long Tall Sally'の5曲を演奏したほか、コントもこなした。ひとつはジョン、ポール、ジョージとウィンター兄弟がリンゴの手術をするというもの。また、別のコントで4人はゴミ収集人を演じた。

7月23日(木)

ロンドン・パラディアム
London

コンバインド・シアトリカル・チャリティーズ・アピールズ・カウンシルという劇場関係者で組織されたチャリティ団体主催の真夜中のショー「ザ・ナイト・オブ・ア・ハンドレッド・スターズ」に出演。サー・ローレンス・オリビエやジュディ・ガーランドなど、ショー・ビジネス界のあらゆる分野の有名人が出演した。ビートルズはポップ・ミュージック界を代表して出演し、第1部ではステージ上につりあげられた状態で空中バレエ劇('I'm Flying')を演じ、第2部では短い演奏を披露した。
またこの日、シングル'A Hard Day's Night'が全英No.1に輝く。

7月25日(土)

テレビジョン・センター、第4スタジオ
London

1963年6月22日にジョンがひとりで出演したように、今度はジョージとリンゴがひとりずつBBC1の土曜のレコード・レビュー番組「ジューク・ボックス・ジュリー」に審査員として出演(ビートルズの4人は1963年12月7日にも全員審査員として出演している)。
この日は最初にジョージがリハーサル(午後4時30分から5時10分)を行ない、音声と映像のテスト(5時10分から5時40分)を経て午後5時40分から6時5分までの番組に生出演。夕食をとったあと、リンゴがリハーサル(午後7時30分から7時45分)と音声と映像のテスト(7時45分から8時15分)を行なったあとに、1週間後の8月1日午後5時40分

から6時5分の放送分を収録（8時15分から9時まで）した。両方とも、司会はいつものデビッド・ジェイコブズだった。
生出演したジョージと一緒に審査員を務めたのは、女優でモデルのアレキサンドラ・バースティード、喜劇俳優のレグ・バーニー、歌手のキャロル・アン・フォード。審査の対象となった曲は、ナチュラルズがカバーしたビートルズ・ナンバー'I Should Have Known Better'、ケニー・リンチの'What Am I To You'、シュガー・パイ・ド・サントの'Soulful Dress'、（エプスタインがマネージャーを務める）フォアモストの'How Can I Tell Her'、デビッド・ネルソンの'Heart'、（やはりエプスタインのバンドである）サウンズ・インコーポレイテッドの'Spanish Harlem'、クリスタルズの'All Grown Up'、ゾンビーズの'She's Not There'、トニー・クラークの'Ain't Love Good, Ain't Love Proud'。9曲のうち、5曲は「ヒットする」、4曲（ナチュラルズ、ケニー・リンチ、デビッド・ネルソン、クリスタルズ）は「ヒットしない」と評価された。
リンゴとともに審査員を務めたのは、テレビのパーソナリティで1年前にジョンと一緒に出演したキャサリン（ケイティ）・ボイル、女優のジュディ・コーンウェル、歌手のレイ・マーティーン。審査対象曲は、デイブ・クラーク・ファイブの'Thinking Of You Baby'、チャド・スチュアート・アンド・ジェレミー・クライドの'A Summer Song'、オーバーランダーズの'Don't It Make You Feel Good'、シラ・ブラックの'It's For You'（彼女が特別にもらったレノン=マッカートニー・ナンバー。6月3日参照）、サイモン・スコットの'Move It Baby'、バチェラーズの'I Wouldn't Trade You For The World'、サミー・デイビス・ジュニアの'Not For Me'。チャド・スチュアート・アンド・ジェレミー・クライドとサミー・デイビスの2曲以外は、すべて「ヒット」と評価された。収録ではジョニー・ダンカンの'Dang Me'とジョディ・ミラーの'The Fever'も対象曲に入っていたが、放送では時間切れのためカットされた。

7月26日（日）
オペラ・ハウス
Church St, Blackpool, Lancashire

2回目のスウェーデン公演

7月28日（火）〜29日（水）
ヨハネスホブス・イーススタディオン
Sandstuvagen, Stockholm, Sweden

9か月ぶりのビートルズ2回目のスウェーデン公演。2日連続で午後6時45分からと10時からの1日2回のステージを、収容人数8,500人のアイスホッケー場で行なった。しかし、4回のうち2回は満席にならなかった。最初のショーでは、マイクがアースされていなかったためポールが軽く感電し、ジョンも衝撃を感じた。
7月28日午前10時10分にロンドン空港からスウェーデンに到着したビートルズは、30日の午後3時45分に再びロンドンに帰った。

8月2日（日）
ゴーモント・シネマ
Bournemouth

この日のビートルズの共演者は、「ロンドンの無名の新人グループ」と紹介されたキンクス、マイク・ベリー、歌手で喜劇女優のエイドリエン・ポスター（のちにポスタと改名）。

8月9日（日）
フューチャリスト・シアター
Scarborough

4枚目のアルバムに着手

8月11日（火）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム"A HARD DAY'S NIGHT"が発売されてから2か月しかたっていなかったが、ビートルズは1年に2枚のアルバム・リリースというペースを守るため、早くもニューアルバムのレコーディングにとりかかった。このアルバムはクリスマスに合わせてリリースされることになっていた。アルバム・タイトルは発売日の見通しが確定するまで未定だったが、最終的には"BEATLES FOR SALE"として発表される。
午後7時から11時まで、いつにも増して精力的なレコーディングが行なわれた。ジョンの'Baby's In Black'を14

CamScannerでスキャン

ルをオーバーダビングして完成。さらに、オープニングのギターフレーズを完璧にしようと、この部分だけ別に13テイクが録音された。しかし完成バージョンにはいずれも使われていない。

レコーディングを始める前に、BBCテレビの『トップ・オブ・ザ・ポップス』の撮影班がスタジオに来て、ビートルズの演奏風景を撮影。これは「ワイルドトラック」(画面と音をあえて一致させない撮影)で、音のない映像を編集してそこにレコードの音をのせることが目的だったので、ビートルズが何を演奏していようと、あるいは別に演奏していなくてもかまわなかった。今回のこの場合には映像に'A Hard Day's Night'のレコードの音を合わせて、それを『トップ・オブ・ザ・ポップス』で流す予定だった。しかし、撮影はされたものの、ビートルズの出演料をめぐってBBCとエプスタインとが折り合わなかったため、この日のフィルムは一度も日の目を見ずに、その後廃棄された。

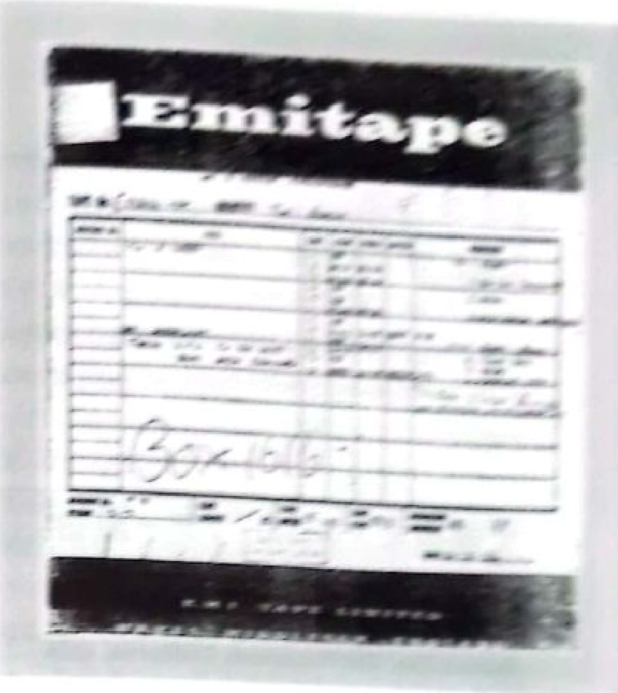
8月12日(水)
ウェイドン・ハウス
William Mews, London

この日の夜、ブライアン・エプスタインが自宅(ウェイドン・ハウス)で開いたホーム・パーティーで、リンゴはNMEの記者クリス・ハッチンスからBBCラジオのシリーズ番組『ザ・ティーン・シーン』用のインタビューを受けた。おもに目前にせまった北米ツアーについて語っているこのインタビューは、翌日の8月13日に放送(午後9時30分から10時)。

未発表曲
'Leave My Kitten Alone'
8月14日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム'A HARD DAY'S NIGHT'が完成してからまだ日も浅かったせいで、レノン=マッカートニーが驚異的な作曲チームであったことは事実だとしても、アルバム1枚分の新曲を準備するには、あまりにも時間の余裕がなかった。最終的に8曲しか新曲はそろわなかったので、それ以外の収録曲については以前のステージ・レパートリーから選ばなければならなかった。

この日の夜レコーディングした3曲のうち、レノン=マッカートニーによる曲は'I'm A Loser'のみ。ほとんどジョンが書いた曲だが、それまでの単純なラブ・ソングから、ボブ・ディランの影響を受けた自伝的で内省的なものに向かうという方向性の転換がよくわかる。午後7時から9時までのセッションでこの曲を8テイク、ドクター・フィールグッド・アンド・インターンズの'Mr. Moonlight'を4テイク、レコーディングした。



午後9時から10時に、レコーディングした2曲のモノ・ミックスを制作。この2曲はのちにもっと手の込んだバージョンが制作されているため、おそらくこのときのモノ・ミックスはジョンが個人的に使う目的で制作されたものと思われる。事実、ジョンは1980年に他界する直前まで、スタジオでその日にレコーディングした曲のラフ・ミックスを家に持ち帰るのを好んでいたようで、通常は7.5ips(テープの速度)のオープン・リール・テープにして持ち帰っていた。

午後10時、スタジオの予約時間が終了したが、ビートルズはもう少しレコーディングを続けることにした。ジョニー・プレストンの'Leave My Kitten Alone'を5テイク、レコーディングし、ベストとなった最後のテイクに一部オーバーダビングもした。午後11時15分までの75分間のレコーディングの結果にあまり満足しなかったためであろうか、ジョンはこの曲のラフ・ミックスは頼まなかった。以後、ビートルズは再びこの曲に手をつけることはなかった。'Leave My Kitten Alone'はミックスされることもなく、その4トラック・テープは未発表のままEMIの保管室に眠るが、1995年に'ANTHOLOGY 1'に収録され、日の目を見ることとなった。

CamScannerでスキャン

8月16日（日）
オペラ・ハウス
Blackpool

共演者のなかに、「新人R&Bグループ」と紹介されたハイ・ナンバーズがいた。このバンドはまもなく名前をザ・フーに変える。

大規模なアメリカ・ツアー開始

8月19日（水）
カウ・パレス
Geneva Ave, San Francisco, California, USA

25公演におよぶ「ザ・ビートルズ・ファースト・アメリカン・ツアー」が開幕。確かにアメリカ全土を大々的に巡業するという意味では初めてだったが、ビートルズのアメリカ公演はこれが2回目であるため、正確にはこのツアー・タイトルは適当ではない。しかも、このツアーにはアメリカだけでなく1回のカナダ公演も含まれていた（あとでチャリティ・ショーとしての26回目のショーも追加された）。

このツアーのステージでは12曲を演奏した。通常のレパートリーは、'Twist And Shout' 'You Can't Do That' 'All My Loving' 'She Loves You' 'Things We Said Today' 'Roll Over Beethoven' 'Can't Buy Me Love' 'If I Fell' 'I Want To Hold Your Hand' 'Boys' 'A Hard Day's Night' 'Long Tall Sally' というものだった。ときどき 'She Loves You' をカットしてオープニングに 'I Saw Her Standing There' を演奏し、'Twist And Shout' で締めくくることもあった。前座として演奏したのは、ビル・ブラック・コンボ、エクサイターズ、ライチャス・ブラザーズ、ジャッキー・デシャノン（出演順）。この日の1回のサンフランシスコ公演では、1万7,130枚のチケットが完売、チケットの売上は9万1,670ドルに達した。ビートルズは総収益のうち4万7,600ドルを手にした。

CamScannerでスキャン

8月18日の正午にロンドンを出発したビートルズは、途中ウィニペグとロサンゼルス（2,000人のファンが出迎えていた）を経由して、午後6時25分に9,000人のティーンエイジャーが悲鳴をあげるサンフランシスコ国際空港に到着した。

8月20日（木）
コンベンション・センター
Paradise Rd, Las Vegas, Nevada, USA

サンフランシスコのカウ・パレスでの公演が終わると、ビートルズはただちに飛行機でラスベガスに向かい、午前1時に到着。ラスベガスでは午後4時からと9時からの2回のステージを行ない、合わせて1万6,000人の観客を集めた。2回のうち1回のステージでは、'Till There Was You' がレパートリーに加えられた。

8月21日（金）
コロシアム
Harrison St, Seattle, Washington, USA

29分間の1回のステージに、1万4,720人の観客が集まった。

カナダで初めてのコンサート

8月22日（土）
エンパイア・スタジアム
Exhibition Park, Vancouver, British Columbia, Canada

ビートルズ初のカナダでのコンサート。1回のステージで2万261人の観客が入った。また、地元のラジオ局CKNWがこの公演のもようを生放送した。公演終了後、ビートルズはただちに飛行機でアメリカに戻り、午前3時55分にロサンゼルスに到着。

録音されたハリウッド・ボウル公演

8月23日（日）
ハリウッド・ボウル
North Highland Ave, Los Angeles, California, USA

キャピトル・レコードは2月12日に行なわれたカーネギー・ホールでのビートルズのコンサートを収録する予定だったが、このときはアメリカ・ミュージシャン協会の反発もあって実現できなかった。そして6か月後のこの日、許可を得たキャピトルは、1万8,700人のファンが歓声をあげるハリウッド・ボウルでのステージを収録した。当時キャピトルは、収録したライブをアルバムにし、アメリカのみで発売する計画だった。いくらビートルズと名のつくものなら何でも欲しがるイギリスのファンでも、目新しさはライブ録音であるだけですでに持っている曲を集めたアルバムなど買いたがらないだろうと思ったからだ。

29分の演奏すべてを収録したテープはミックスされるが（8月27日参照）、音質が悪いためキャピトルもビートルズもリリースに同意せず、テープはそのまま保管室に眠ることになる。しかしそれも1977年1月まで、つまりこの3トラック・テープが発掘され、歴史的なライブ・アルバム"THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL"が発売されるまでの話だ。ジョージ・マーティンとバランス・エンジニアのジェフ・エメリックの技量によってみごとに編集されるこのアルバムには、1964年のこの日の録音から6曲、1965年8月30日の同会場での録音から7曲収録（キャピトルは1965年8月29日のハリウッド・ボウルでのステージも収録するが、マイクの状態が悪くて使いものにならない）。2年分の異なるライブ公演を1枚に編集したこのアルバムは、コンサートやツアーにすでに嫌気がさし始めていたビートルズの、常軌を逸したステージ・パフォーマンスがどんなものだったかが非常によくわかる。イギリスで1977年5月6日にEMIからリリースされる"THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL"は、録音から13年たつにもかかわらず、6月18日にアルバム・チャートのナンバーワンに輝く。

この日のハリウッド・ボウル公演の一部始終は、アマチュアの女性カメラマン（映像は悪いが音声はかなりよい）と、ニュース映画会社（音声は悪いが映像はかなりよい）によっても撮影されている。

公演終了後、翌日から2日間、ビートルズはベル・エアのある個人の邸宅で休息をとった。8月24日の午後、ビートルズのために、そしてチャリティ目的で開かれたプライベート・パーティーに出かけたほかは、ずっとその邸宅で過ごした。

CamScannerでスキャン

8月26日（水）
レッド・ロックス・アンフィシアター
Lawrence St, Denver, Colorado, USA

野外劇場で行なわれた1回のステージには、7,000人の観客しか入らず、2,000席が空席のままだった。

ハリウッド・ボウル公演のミキシング

8月27日（木）
シンシナティ・ガーデンズ
Seymour Ave, Cincinnati, Ohio, USA

シンシナティでは1万4,000人のファンの前で1回のステージを行ない、終了後すぐにニューヨークに飛び、午前2時55分に到着した。空港では2,000人のファンがビートルズを待ち受けていた。

一方、この日キャピトルのプロデューサーであるボイル・ギルモアとバランス・エンジニアのヒュー・デイビーズは、日曜にハリウッド・ボウルで収録したコンサート・テープを、イコライザーやリバーブ・ユニット、リミッターを使いながら2トラックにミックス・ダウンしてステレオ・ミックスを作った。このテープには、司会者によるイントロダクションに続いて、'Twist And Shout' 'You Can't Do That' 'All My Loving' 'She Loves You' 'Things We Said Today' 'Roll Over Beethoven' 'Can't Buy Me Love' 'If I Fell' 'I Want To Hold Your Hand' 'Boys' 'A Hard Day's Night' 'Long Tall Sally'が収録されていた。1977年にライブ・アルバムが出るまで、このテープで聴くことができたのは、1964年11月23日にアメリカでリリースされたアルバム"THE BEATLES STORY"に収録されている'Twist And Shout'の抜粋の48秒間だけだった。

8月28日（金）～29日（土）
フォレスト・ヒルズ・テニス・スタジアム
Tennis Place, Forest Hills, New York, USA

この2日間は、それぞれ1回ずつコンサートが行なわれ、各1万6,000人の観客が入場。ビートルズが宿泊するデルモニコ・ホテルに、ボブ・ディランがマリファナを持って訪れたのはこの日。

8月30日（日）
コンベンション・ホール
Mississippi Ave and The Boardwalk, Atlantic City, New Jersey, USA

コンベンション・ホールで行なわれた1回のショーには、1万8,000人のティーンエイジャーがつめかけた。ちょうど1週前、同会場ではアメリカ民主党全国大会が開催されていた。新聞は、ビートルズはリンドン・B・ジョンソン大統領の受諾演説よりもずっと華々しく歓迎されたと報じた。

9月2日（水）
コンベンション・ホール
34th St and Curie Ave, Philadelphia, Pennsylvania, USA

ビートルズのコンサートが行なわれる数日前、フィラデルフィアでは人種暴動が起こっていた。公民権運動を支持していたビートルズのメンバーは、1万3,000人の観客がすべて白人であるのを見て、嫌気がさしたという。この日のコンサートは地元のラジオ局により生放送された（詳細は不明）。

9月3日（木）
インディアナ・ステート・フェア・コロシアム
State Fairgrounds, East 38th St, Indianapolis, Indiana, USA

この日は2回のショーを行ない、計2万9,337人の観客を動員。コンサートの純益は8万5,232ドルにおよんだ。

9月4日（金）
ミルウォーキー・アリーナ
West Kilbourn Ave / West State St, Milwaukee, Wisconsin, USA

1回のコンサート。
この日、インドネシアでは、政府がビートルズ・ヘアカットを禁止した。

9月5日(土)
インターナショナル・アンフィシアター
42nd St / South Halsted St, Chicago, Illinois, USA

1回のコンサート。

9月6日(日)
オリンピア・スタジアム
Grand River Ave / McGraw Ave, Detroit, Michigan, USA

自動車産業を象徴するデトロイトで2回のコンサート。ここはまた、タムラ・モータウン・レコードの本拠地として、ポピュラー音楽界では有名な地域である。モータウン・ミュージックは、当時のビートルズがとても気に入っていた音楽のひとつ。

9月7日(月)
メイプル・リーフ・ガーデンズ
Carlton St, Toronto, Ontario, Canada

再びカナダ入り。ひと晩で2回ショーを行なって、計3万5,522人の観客を動員。

9月8日(火)
フォーラム
St Catherine Street, Montreal, Quebec, Canada

フォーラムで2回のショー。2万1,000人の観客を動員した。コンサートのあと、ビートルズは飛行機でフロリダ州ジャクソンビルに向かったが、ハリケーン「ドラ号」がジャクソンビルを直撃する恐れがあったため、飛行機はフロリダ南端のキー・ウエストに急遽回避した。飛行機は9月9日午前3時30分、キー・ウエストに到着したが、空港では、(予知能力が備わっているとしか思えない)ティーンエイジャーがやはり数百人つめかけて悲鳴をあげていた。ハリケーン「ドラ」は、予報どおりジャクソンビルを直撃し、かなりの被害をもたらした。そのため、ビートルズは9月11日の午後3時ごろ、ようやくジャクソンビルに飛行機で向かった。

9月11日(金)
ゲイター・ボウル
East Adams St, Jacksonville, Florida, USA

この公演にあたり、ビートルズは黒人客と白人客の隔離をやめることを地元のプロモーターが保証するまでは演奏しないと主張した。
ハリケーン「ドラ」の被害にみまわれたため、3万2,000枚のチケットが売れていたにもかかわらず、9,000人が会場まで来ることができなかった。

9月12日(土)
ボストン・ガーデン
Causeway St, Boston, Massachusetts, USA

1回のコンサート。

9月13日(日)
シビック・センター
West Baltimore St, Baltimore, Maryland, USA

2回のコンサートで、計2万8,000人のファンを動員。

9月14日(月)
シビック・アリーナ
Auditorium Place, Pittsburgh, Pennsylvania, USA

1万2,603人のファンの絶叫を前にして1回のコンサート。

観客がステージに上がって中断

9月15日(火)
パブリック・オーディトリアム
East Sixth St, Cleveland, Ohio, USA

1回のコンサート。コンサートの途中で、ファンの一団が警官の非常線をうまく突き破り、ステージによじ登りかけた。警察は演奏中のビートルズにステージから降りるように指示。秩序が回復されないかぎりショーは中止になってしまうというデレク・テイラーからの嘆願と同じ内容の警察からの警告がアナウンスされて、やっと会場は落ち着きを取り戻し、演奏も再開された。

9月16日(水)
シティ・パーク・スタジアム
City Park, New Orleans, Louisiana, USA

1万2,000人の観客を前に1回のコンサート。

CamScannerでスキャン

カンザス・シティで'Kansas City'

9月17日(木)

ミューニシパル・スタジアム
23rd and Brooklyn, Kansas City, Missouri, USA

世界記録となる出演料15万ドルを受け取った有名なカンザスシティでの追加公演。リトル・リチャードのメドレー'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'をレパートリーに加え、観客からとくに盛大な歓迎を受けた。しかし、このコンサートでも、ビートルズは途中で演奏を中断しなければならなかった。コンサート中止の警告を受けた観客がおさまってから(と言ってもほんの少しだけ)、演奏が再開された。

9月18日(金)

ダラス・メモリアル・オーディトリアム
South Akard St, Dallas, Texas, USA

1回のみのコンサート。
9月19日にはビートルズはミズーリ州にある人里離れた田舎の牧場で休暇をとった。

チャリティ・コンサートでアメリカ・ツアーは幕

9月20日(日)

パラマウント・シアター
7th Ave / Times Square, New York City, New York, USA

「アン・イブニング・ウィズ・ザ・ビートルズ」と題されたこのスペシャル・コンサートは、ニューヨーク市の小児麻痺と知恵遅れの子どもの救済団体へのチャリティとして開催された。これがビートルズのめまぐるしかった北米ツアーの最終公演となった。最高100ドルのチケット代を支払った3,682人の観客の前で、ビートルズをはじめとする出演者は無償で演奏を提供した。また、ボブ・ディランが楽屋を訪問。
ビートルズは翌9月21日にアメリカを出発し、午後9時35分にロンドン空港に到着した。

リンゴがバンド大会を審査

9月27日(日)

プリンス・オブ・ウェールズ・シアター
London

ロンドン中心部にあるプリンス・オブ・ウェールズ・シアター
飢饉救済の慈善団体と知られるオックスファムが主催し
全国ビート・グループ大会決勝戦に、リンゴが審査員とし
参加した。ほかの審査員は、実行委員長のデビッド・ジェ
イコブズ、シラ・ブラック、ブライアン・エプスタイン、フォトグ
ストのビリー・ハットン、「ファビュラス」誌のベティ・ヘイル
アラン・フリーマン、リンダ・ルイスという顔ぶれ。9時45分か
ら10時35分までの大会の後半は「イッツ・ビート・タイム」と
題してBBC2より生中継された。
この決勝戦には、全国11地区から勝ち抜いてきたバンド
サザンズ、コナスーズ、スターファイアーズ、アパッチズ、フォ
ーミュラ・ファイブ、ダウン・ビーツ、バイプロズ、カウントダウン
ズ、ロイ・スチュアート・アンド・サイクロンズ、ダニー・クラーク・
アンド・ジャガーズ、クルセイダーズが出演した。1960年代
半ばらしい、いいバンド名ばかりだが、どのバンドもこの決
勝戦で1回テレビ出演しただけで、それ以上は成功しなか
った。

9月29日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

北米ツアーは大成功のもとに終わったが、次にはイギリス
ツアーが控えていた。そのため、ビートルズはレコーディン
グをして1964年2枚目のアルバムを完成させることに集中
した。この日はアビイ・ロードでレノン=マッカートニー・ナン
バーを3曲レコーディングした。午後2時30分から6時30分
までのセッションでは、'Every Little Thing'を4テイク
(ジョージは遅れてきたのでここまでのテイクには参加して
いない)、'I Don't Want To Spoil The Party'を
テイク録音した。
午後7時からのセッションでは、'I Don't Want To Spoil
The Party'をさらに12テイク、レコーディングして完成さ
せた。そのあと、'What You're Doing'のリズム・トラッ
クを7テイク録音して、午後10時45分にセッション終了。

9月30日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から5時30分までのセッションで、'Every
Little Thing'を前日に引き続き5テイク録音し、計9テイ

CamScannerでスキャン

ァで完成させた。午後6時30分からのセッションでは、'What You're Doing' の8テイクから始めて11テイクまでレコーディングした(テイク11がベストとなるが10月26日に結局録り直した)。

ビートルズはさらに精力的にレコーディングを続行し、午後10時30分のセッション終了時には、ジョンが6月3日にスタジオでデモ・テープを作った 'No Reply' のレコーディングを開始し、わずか8テイクで完成させた。

アメリカの人気番組『シンディグ』

10月2日(金)

グランビル・スタジオ
Fulham Broadway, London

1960年代半ばのアメリカの2大ポップ・テレビ番組のひとつ、ABCネットワークの「シンディグ」のリハーサル。アメリカの番組だが、リハーサルはロンドンで行なわれ、プロデューサーもイギリス人だった(2大ポップ番組のもう一方、NBCの「ハラバルー」はビートルズのプロモーション・クリップが放送されただけで出演はしていない。ただ、エプスタインはこの番組のイギリス・コーナーで、最初の1シーズンだけ司会を務めていた)。

「シンディグ」のプロデューサーはハリウッドに移住していたイギリス人のジャック・グッド(1964年4月18日参照) で、エグゼクティブ・プロデューサーはセルマー・プロダクションズのレオン・ミレル。1965年8月、ミレルは"THE 5TH NATIONAL JAZZ AND BLUES FESTIVAL"を製作するために、ビートルズが理事を務めるサバフィルムズと関わることになる。

北米ツアーですっかり消耗して帰国したばかりのビートルズが、「シンディグ」の収録のためだけに再びアメリカに行くことを承諾するはずはなかった。そこでジャック・グッドは故郷に戻って、自分が担当するこの番組のイギリス特集編を収録することにしたのだった。この特別編には、ビートルズをメインとして、サンディ・ショー、P・J・プロビー(アメリカ人だがイギリスで仕事をしていた)、カール・デンバー・トリオ、トミー・クイックリー、サウンズ・インコーポレイテッド、リン・コーネル(バーノンズ・ガールズの元メンバーで、初期ビートルズのセッション・ドラマーを務めたアンディ・ホワイトの妻)が出演した。ただ、アメリカのテレビ番組だったため、BBCやITVのスタジオを使用するわけにはいかなかったので、ロンドン西部にあるビクトリア朝時代のミュージック・ホールを改築したグランビル・シアター内のインディペンデント・スタジオ、グランビル・スタジオが使われた。

この日はリハーサルのみで、本番収録は翌日行なわれた。

10月3日(土)

グランビル・スタジオ
London

午後からグランビル・スタジオで「シンディグ」の本番収録。スタジオには、ロンドンのビートルズ・ファン・クラブのメンバーを特別招待し、出演者は生演奏を披露した。ビートルズは、'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'(番組冒頭で放送)、'I'm A Loser' と 'Boys'(この2曲は1曲目から間をおいて放送)の3曲を演奏した。また、4人はカール・デンバー・トリオを中心とするフィナーレにも参加した。

この番組は、1964年10月7日、アメリカのABC系列で午後8時30分から9時(EST)に放送された。イギリスでは放送されていない。

10月6日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後3時から6時45分までと、7時から10時までの2回のセッションで、'Eight Days A Week' を13テイク、レコーディングした。セッション中、この新曲のオープニングとエンディングの方法がいろいろと試みられた。フェイド・インで始まりフェイド・アウトで終わるという斬新な方法に決まり、これはのちのミックス作業で調整することになった。レコーディングはほぼ完了したが、10月18日に少し編集が加えられた。

この日のセッション・テープでは、まだ試作段階の 'I Feel Fine' を聴くこともできる。'Eight Days A Week' のテイクのあいまにジョンがこの曲の特徴あるギター・リフを弾いているのだ。

10月8日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日は、アルバム用の曲ではなく同時発売のシングル用の曲、ポール作のブルージーな 'She's A Woman' をレ

CamScannerでスキャン

コーディングした。午後3時30分から5時30分までのセッションでベーシック・トラックを7テイク録音して、午後7時から10時までのセッションでオーバーダビングし、この1日目で完成させた。このころから、ポールは目立って多様な音楽スタイルに手をのばすようになり、しかも、いとも簡単にそれらを自分のものにしているのがよくわかる。

ジョンの誕生日から イギリス・ツアー開始

10月9日(金)

ゴーモント・シネマ
Bradford

ファンが待ちに待っていた、1964年唯一のイギリス・ツアー開始。1963年2月のヘレン・シャピロとのツアーや同年の「クリスマス・ショー」のときと同じく、ブラッドフォードで幕を開けた。

このツアーでは1日2回のステージを行ない、出演料は1日850ポンド。今回のレパートリーは、'Twist And Shout' 'Money (That's What I Want)' 'Can't Buy Me Love' 'Things We Said Today' 'I'm Happy Just To Dance With You' 'I Should Have Known Better' 'If I Fell' 'I Wanna Be Your Man' 'A Hard Day's Night' 'Long Tall Sally' だった。

10月10日(土)

ド・モンフォール・ホール
Leicester

10月11日(日)

オデオン・シネマ
New St, Birmingham, Warwickshire

10月12日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ツアーのオフ日。アビイ・ロードでは、ジョージ・マーティンとノーマン・スミスが、午後10時から10時30分までのセッションで'She's A Woman'のモノとステレオ・ミックスを作り、午後2時30分から3時までのセッションで'Eight Days A Week'のモノ・ミックスを制作(この時点では、'Eight Days A Week'が次のシングルのA面として考えられていた)。

ビートルズのメンバーもこのセッションに参加したかもしれない。

10月13日(火)

ABCシネマ
Station Rd, Wigan, Lancashire

10月14日(水)

第4スタジオ、グラナダ・テレビ・センター
Manchester
ABCシネマ
Ardwick, Manchester

午後、ビートルズはめずらしくマンチェスターにあるグラナダ・テレビ・センターを訪れ、'I Should Have Known Better'を口パクで収録した。10月16日の午後6時30分から7時に「シーン・アット6:30」で放送。この放送日はグラナダ・テレビの番組「ピープル・アンド・プレイシズ」でビートルズがテレビ初出演した日から数えて、あと1日でちょうど2年という日である。

また、ABCシネマの楽屋では、マンチェスターのテレビ・レポーター、デビッド・ティンダルからインタビューを受けた。このインタビューは、この日の夕方、地元BBC1の報道番組「ルック・ノース」(午後6時35分から7時)で放送された。また、このインタビューの音声は10月17日には、BBCのノース・ホーム・サービスのラジオ番組「ザ・ウイーク・イン・ザ・ノース」(午後9時30分から10時)で放送。

10月15日(木)

グローブ・シネマ
Stockton-on-Tees

ビートルズが初めてストックトン・オン・ティーズを訪れたのは、1963年11月22日、ケネディ大統領が暗殺された日だった。ビートルズがこの北東部の街を訪れるのはこれで2回目、そして最後となった。この日はちょうどイギリスの総選挙があり、13年間続いた保守党政権が破れ、ハロルド・ウィルソン率いる労働党が勝利をおさめた。ビートルズはストックトンのホテルの部屋で、地元のITV系列局タイン・ティーズ・テレビの取材陣からのインタビューを収録。さまざまな質問に混じり、選挙についても聞かれた。このインタビューは、翌10月16日、報道番組「ノース・イースト・ニュースビュー」(午後6時35分から7時)のなかで放送。

CamScannerでスキャン

10月16日(金)

ABCシネマ
Hull

ビートルズがこの夜の公演のためにハルに向かっているころ、EMI第1スタジオでは、午後2時30分から5時30分までのセッションで、ジョージ・マーティンにより'No Reply'のふたつのモノ・ミックスが作られた。この日の公演のあと、翌17日と18日はツアーのオフ日。

シングル'I Feel Fine'のレコーディング

10月18日(日)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

日曜ではあったが、ツアーのオフ日を利用してレコーディングが進められた。9時間にわたる集中レコーディングで、ニュー・アルバムの6曲とニュー・シングルのA面の曲を完成させた。

翌日の夜はエジンバラで2回のステージがあったが、午後2時30分から11時30分までと、いつもより遅くまでセッションが行なわれた。最初に、'Eight Days A Week'のオープニング部分(結局使われなかった)とエンディング部分(これは採用)を録音し、10月6日にレコーディングした分の'Eight Days A Week'に編集してこの曲を完成させた。続いて新曲にとりかかる。

6曲の新曲のうち、レノン=マッカートニー・ナンバーは2曲だけで、そのうち1曲は数年前の作品だった。残りの4曲は、有名になる前にステージで演奏していたレパートリーからひっぱり出してきたものだ。最初に録音されたのは、リトル・リチャードのメドレー'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'で、わずか2テイクで終わり、テイク1がベストとなった。次に8月14日にレコーディングしたドクター・フィールグッド・アンド・インターンズの'Mr. Moonlight'のリメイクをさらに4テイク録音した。その次がニュー・シングルとなったジョンの'I Feel Fine'(9テイク)、1950年代末のポールの曲'I'll Follow The Sun'(8テイク)、カール・パーキンスの'Everybody's Trying To Be My Baby'(1テイクのみ)、チャック・ベリーの'Rock And Roll Music'(1テイクのみ)、バディ・ホリーの'Words Of Love'(3テイク)をレコーディングした。

ビートルズのニュー・シングル'I Feel Fine'は、11月27日にリリースされる(B面は'She's A Woman')。曲の冒頭に入っている、ギューンというフィードバック音は、レコーディング・スタジオを駆使した実験的なサウンドの時代が確実に到来しつつあることを告げていた。

10月19日(月)

ABCシネマ
Edinburgh

スコットランドでの3夜連続公演の初日。

10月20日(火)

ケアド・ホール
Dundee

2回のうちの最初のステージが始まる前、スコットランド北東部のITV系列局グランピアン・テレビの撮影班がケアド・ホールの楽屋を訪れ、ジューン・シールズによるインタビューを収録した。撮影班はインタビューのほかに、ビートルズの実際のステージを含めたコンサート関連の映像を撮影した。これらをまとめた5分余りの映像は、10月23日午後6時10分から6時45分に放送される「グランピアン・ウイーク」のなかで、シールズにより紹介。

10月21日(水)

オデオン・シネマ
Glasgow

何百人ものファンを巻き込んで暴動(ガラス窓が割られ、車がひっくり返されるなど)を起こしたとして、9人の若者が逮捕される。

ジョージ・マーティンらはアビイ・ロードで制作作業を続行。この日、午後2時30分から5時45分のセッションで、'I Feel Fine' 'I'll Follow The Sun' 'She's A Woman' 'Everybody's Trying To Be My Baby'のモノ・マスターが作られた。シングル曲の'I Feel Fine'と'She's A Woman'のテープは、翌日ハリウッドのキャピトル・レコードに発送された。

10月22日(木)
オデオン・シネマ
Leeds

午前11時から正午にかけて、EMIの第1スタジオで、ジョージ・マーティンは'I Feel Fine'の別のモノ・ミックスを制作。ビートルズはリーズで2回のコンサートを行なった。

10月23日(金)
ゴーモント・ステート・シネマ
Kilburn, London

10月24日(土)
グラナダ・シネマ
Walthamstow, London

10月25日(日)
ヒッポドローム・シアター
Brighton

この日、アイバー・ノベロ賞で5部門受賞し、その後に公演を行なう。
この公演のあと、26日と27日はツアーのオフ日。

1964年のクリスマス・レコードを録音

10月26日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ツアーのオフ日だが、この時期のビートルズにとってはオフ日は休日ではなかった。午前10時から12時45分のセッションで、'I Don't Want To Spoil The Party' 'Rock And Roll Music' 'Words Of Love' 'Baby's In Black' 'I'm A Loser' 'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'のモノ・ミックスの制作作業にビートルズのメンバーも加わった。
午後12時45分から1時5分まで、わずか20分間に、ビートルズはジョージ・マーティンらが'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'をステレオ・ミックスするところを見学した。
ゆっくりと休憩したのち、アルバム"BEATLES FOR SALE"用の曲のレコーディングを開始。午後4時30分から6時30分までは、リンゴがリード・ボーカルを担当して'Honey Don't'を5テイク録音した。午後7時30分から10時までは、'What You're Doing'を7テイク(テイク13～19)録音し直した。
最後に、ビートルズは1964年のクリスマス・レコード'Another Beatles Christmas Record'を制作した。足音だけのテイクも含め、収録した5テイク分を編集して、セッションの終わりにテープは完成。12月、オフィシャル・ファン・クラブのメンバーにこのソノ・シートが配送される。

10月27日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から午後12時30分の間は、'What You're Doing' 'Honey Don't' 'Mr. Moonlight' 'Every Little Thing' 'Eight Days A Week'のモノ・ミキシング。また、必要な部分には編集が加えられた。続いて午後12時30分から1時には、'Eight Days A Week' 'Every Little Thing' 'What You're Doing' 'Honey Don't'のステレオ・ミキシングと編集作業が行なわれた(アルバム"BEATLES FOR SALE"に収録されたこれら4曲のステレオ・ミキシングがわずか30分で終わっていることから、1964年にはモノラルのほうが重視されていて慎重に作られていたことがよくわかる)。

10月28日(水)
ABCシネマ
Exeter

10月29日(木)
ABCシネマ
Plymouth

10月30日(金)
ゴーモント・シネマ
Bournemouth

10月31日(土)
ゴーモント・シネマ
Ipswich

11月1日(日)
アストリア・シネマ
Finsbury Park, London

CamScannerでスキャン

11月2日(月)
キングス・ホール
Showgrounds, Balmoral, Belfast

当初この日はツアーのオフ日だったが、プロモーターのアーサー・ハウズは、ぎりぎりになって北アイルランドでの公演をつめこんできた。これはファンの要望がとくに強かったため。午後、一行は飛行機でロンドンを出発し、オールダグローブ空港に到着。

アルバム "BEATLES FOR SALE" 完成

11月4日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London
リッツ・シネマ
Gordon St, Luton, Bedfordshire

午前10時から午後1時までの3時間のセッションで、アルバム収録曲の残りのステレオ・ミキシングと編集作業が行なわれた。ビートルズのメンバーも夜の公演があるルートンに車で向かう前に、スタジオに立ち寄っていた可能性もある。'I'll Follow The Sun' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Rock And Roll Music' 'Words Of Love' 'Mr. Moonlight' 'I Don't Want To Spoil The Party' 'I'm A Loser' 'Baby's In Black' 'No Reply'、そして、シングル'I Feel Fine'のマスターの仕上げが行なわれた。
アルバム"BEATLES FOR SALE"は、この2年のうちに制作されたビートルズ4枚目のLPとして、12月4日にEMIからリリースされ、またもやナンバーワンを獲得する。

11月5日(木)
オデオン・シネマ
Nottingham

11月6日(金)
ゴーモント・シネマ
Southampton

1回目のショーが始まる前、ビートルズはゴーモント・シネマの楽屋で、当時サザン・テレビのレポーターで、のちにBBC2のアート番組「レイト・ナイト・ラインアップ」のレギュラーとなったトニー・ビルボーからインタビューを受けた。このもようは、この日の午後6時35分から6時40分の報道番組「デイ・バイ・デイ」で放送された。

11月7日(土)
キャピトル・シネマ
Cardiff

11月8日(日)
エンパイア・シアター
Liverpool

1963年12月22日以来の、地元リバプールでの公演。

11月9日(月)
シティ・ホール
Sheffield

11月10日(火)
コルストン・ホール
Bristol

イギリス・ツアー最終日。

11月14日(土)
テディントン・スタジオ・センター
Teddington

翌週の土曜日(11月21日午後5時50分から6時35分)放送の「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」に出演するため、テディントンにあるABCテレビのスタジオへ。午後1時から5時までのリハーサルと観客なしの収録セッションで、ビートルズはメインとして'I Feel Fine' 'She's A Woman' 'I'm A Loser' 'Rock And Roll Music'の4曲を口パクした。ABCテレビの幹部は、ビートルズがこの番組に再出演してくれたことを喜ぶあまり、この日の収録分を「ラッキー・スターズ・スペシャル」と銘打って放送する。
演奏のほかに、ビートルズは番組冒頭のユーモラスなコントにも出演した。少しおしゃべりしたあとで、リンゴが綱をひっぱって隣に立っていた銅像らしきものをおおっているもののカバーを取り去ると、そこには司会者ブライアン・マシュ

CamScannerでスキャン

ーの実物がいて、すぐに最初の出演者の紹介を始めるという演出だった。また、4人は番組中1回だけはさまれるコマーシャルの直前にも登場。マシューが、ビートルズは番組後半で演奏する予定になっていると言うと4人は親指を立てて同意するが、そのあとでマシューに再び布のカバーを頭からかぶせてしまう。

11月16日(月)
リバーサイド・スタジオ、第2スタジオ
Crisp Rd, Hammersmith, London

(BBCが独占契約していた)ロンドン西部のリバーサイド・スタジオで、『トップ・オブ・ザ・ポップス』のビデオ収録。午後2時から5時までにリハーサルと収録を行ない、ビートルズはニュー・シングルの両面'I Feel Fine'と'She's A Woman'の2曲を口パクした。収録分は、12月3日午後7時30分から8時にかけてBBC1で放送。また'She's A Woman'は12月10日に再放送され(午後7時30分から8時)、'I Feel Fine'はクリスマス・イブの12月24日午後7時25分から8時25分に年末特別編『トップ・オブ・ザ・ポップス'64』で再放送される。この年末特別編では、7月7日に収録された'A Hard Day's Night'と、12月22日にロンドンで収録された新しいインタビューも放送(各日の項を参照)。

BBCラジオ出演50回目を迎える
11月17日(火)
プレイハウス・シアター
London

この日のBBCラジオの収録で、1962年以来ビートルズのBBCラジオの音楽番組への出演回数は50回に達した。この日収録されたのは、11月26日午後10時から12時に放送される新番組『トップ・ギア』への出演分。収録は、リハーサルを含めて、午後7時30分から11時30分までプレイハウス・シアターで行なわれた。
ビートルズは、'I'm A Loser' 'Honey Don't' 'She's A Woman' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'I'll Follow The Sun' 'I Feel Fine'の6曲を演奏して、司会のブライアン・マシューといつものようにユーモアあふれる会話をした。

ダドリー・ムーアの番組にジョンが出演
11月20日(金)
ウインブルドン・コモン
London

このころジョンは、ピーター・クック、ダドリー・ムーアと知り合いになっており、ノーマン・ロッシントンとは映画"A HARD DAY'S NIGHT"で共演していた。そのため、BBCテレビでムーアが主演する新番組が始まることになり、第1回のゲストとしてクックとロッシントンが決まったとき、ジョンに誘いがあってもおかしなことではなかった。11月4日、ルートンのリッツ・シネマの楽屋にロッシントンとこの新番組のプロデューサーであるジョー・マッグラスが訪れ、ジョンを番組に招待した。このときはまだ未定だったムーアの番組のタイトルは、放送間近になって『ノット・オンリー…バット・オールソー』に決定した。その後、クックもこの番組のレギュラーとなり、ムーアとのコンビで1970年まですばらしい番組を作り続けた。ジョンを迎えた第1回は、1965年1月9日午後9時20分から10時にBBC2で放送。
ジョンはこの番組のために、2回の収録を行なっている。この日、11月20日には、ジョンはムーアとロッシントンとともにジョンの著書『イン・ヒズ・オウン・ライト』のなかの'Deaf Ted, Danoota, (and me)'という作品の朗読の際に使用するシュールなフィルムを撮影。撮影ロケ地はロンドン南西にあるウィンブルドン・コモン。撮影が行なわれた正確な時間は不明だが、早朝から始められ、午前9時前には終了していた。
そのほかのジョンの出演分は11月29日に収録。

『レディ・ステディ・ゴー!』に最後の出演
11月23日(月)
ウェンブリー・スタジオ
Wembley

ある意味ではビートルズをめぐる状況を支配していたとも言えるビートルマニアの熱狂で騒動が起こるため、このころにはビートルズが『レディ・ステディ・ゴー!』に生出演する可能性はまったくなくなっていた。そこでこの日の午後、ビートルズはロンドン北部のウェンブリーにあるレディフュー

CamScannerでスキャン

ジョンのスタジオに入り、11月27日の午後6時8分から7時に放送されるこの番組への出演分を録画で、拍手したり踊ったりする客を前にして収録した。ビートルズは'I Feel Fine' 'She's A Woman' 'Baby's In Black' 'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!'の4曲を口パクし、司会のキース・フォーダイスとおしゃべりをした。4人そろってこの番組に出演したのは、これが3回目にして最後となった。

『サタデイ・クラブ』に最後の出演

11月25日(水)

エオリアン・ホール、第1スタジオ
London

BBCのラジオ番組『サタデイ・クラブ』への、10回目の、そして最後の出演分を収録した。リハーサルを含めて午後7時から10時30分に収録され、ボクシング・デイ(12月26日)の午前10時から12時に放送。

番組では、'Rock And Roll Music' 'I'm A Loser'(この2曲は午前10時31分から10時59分にかけてのBBC海外放送でも同時放送)、'Everybody's Trying To Be My Baby' 'I Feel Fine' 'Kansas City/Hey-Hey-Hey-Hey!' 'She's A Woman'の6曲と、いつものように司会のブライアン・マシューとのおしゃべりが放送された。

しかし、6曲のうち4曲、'I'm A Loser' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'I Feel Fine' 'She's A Woman'は、実際には11月17日に『トップ・ギア』用に収録されたものが放送された。いい演奏だからもう1回使いたいとBBCが考えたのか、ビートルズが収録する手間を省くためBBCにそう申し出たのか、詳しい経緯は不明。また、この事実そのものも明らかにされていなかった。

ジョンの新居が取材される

11月28日(土)

ジョンの家
"Kenwood", Wood Lane, St George's Hill, Weybridge, Surrey

12月4日付の『ニュー・ミュージカル・エクスプレス』誌ではジョンがウェイブリッジに購入した新しい家についての特集記事が組まれていた。この記事を書いたNME誌の記者クリス・ハッチンスは、この日その取材のためジョンの家を訪れ、ついでにBBCの取材用にもテープ・レコーダーを持参してきていた。ハッチンスはBBCラジオ番組「ザ・ティーン・シーン」のためにジョンへのインタビューを収録した。新居についてのこのインタビューは、翌11月29日、午後10時45分から11時31分の同番組で放送。

11月29日(日)

テレビジョン・センター、第1スタジオ
London

『ノット・オンリー…バット・オールソー』の第1回放送分へのジョンの残りの出演分は、この日午後8時30分からロンドン西部にあるBBCのテレビジョン・センターで観客を集めて収録された。

番組では、ジョンの著書「イン・ヒズ・オウン・ライト」から、数篇がカメラに向かって朗読された。本の裏表紙に掲載されている自叙伝'About The Awful'はジョンがひとりで読み、'Good Dog Nigel'と'The Wrestling Dog'はジョンとノーマン・ロッシントンのふたりで、'All Abord Speeching'はジョン、ロッシントン、ダドリー・ムーアの3人で読んだ。さらにロッシントンとムーアのふたりが、ジョン抜きで'Unhappy Frank'を朗読。番組最後、ムーアによるテーマ曲'Goodbye-ee'をバックにクレジットが流れている間、ジョンは少し変人っぽく画面を横切る。

12月22日(火)

オデオン・シネマ
Hammersmith, London

12月24日に午後7時25分から8時25分に放送される年末特別編「トップ・オブ・ザ・ポップス'64」では、以前収録した分のビートルズの2曲がすでに用意されていたが(7月7日、11月16日参照)、プロデューサーのジョニー・スチュアートは、特別編のためにビートルズに何か新しい映像を提供してもらいたいと思っていた。そこへ、まもなく開催される「アナザー・ビートルズ・クリスマス・ショー」にこの番組の4人の司会のひとりであるジミー・サビルが出演することを知ったスチュアートは、この日、すぐ近所であるハマースミス・オデオンにカメラ・クルーを送り、リハーサルの休憩時間に短いインタビューを収録することに成功した。しかし、サビルとビートルズの会話が1分23秒間だけ続くという、文字どおり短いインタビューだった。番組では、'I Want To Hold

CamScannerでスキャン

Your Hand'が数小節流れたところでこのインタビューを映し、曲のエンディング近くでインタビューも消えていくという演出になっていて、この曲が実際にはBBCのカメラで一度も収録されていないことを忘れさせてしまう効果があった。

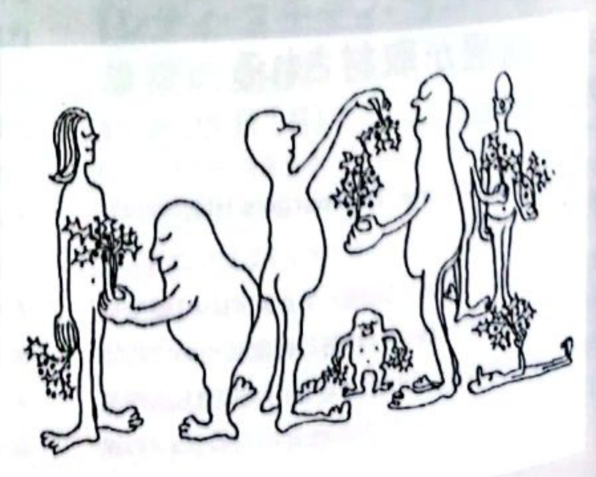
今年もクリスマス・ショー

12月24日(木)~31日(木)

オデオン・シネマ
Hammersmith, London

前年の豪華絢爛なクリスマス・ショーに引き続き、エプスタインは再び「アナザー・ビートルズ・クリスマス・ショー」と題する興行を企画した。会場は、前年のフィンズベリー・パークとは街のちょうど反対側にあるハマースミス・オデオンだった。会場は違っても構成はほぼ前年と同じで、音楽演奏、パントマイム、喜劇などが繰り広げられ、会場はもちろん若い観客からの絶えまない歓声に包まれた。ビートルズはふたつの寸劇を演じ、ひとつではフレディ・アンド・ドリーマーズのフレディ・ガリティと、もうひとつはDJのジミー・サビルと共演した。ショーで演奏したレパートリーは、'Twist And Shout' 'I'm A Loser' 'Baby's In Black' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Can't Buy Me Love' 'Honey Don't' 'I Feel Fine' 'She's A Woman' 'A Hard Day's Night' 'Rock And Roll Music' 'Long Tall Sally'の11曲だった。

12月21日からリハーサルが開始され、公演は1日2回ずつ、1965年1月16日まで20夜にわたり続いた。ただし、12月24日と29日の公演は1回のみだったため、計38回のステージとなる(12月25日、27日、1月3日、10日は休演日だった)。正確な日付は不明だが、第1週目の公演の間に、ラジオ・キャスター兼DJのクリス・デニングがビートルズの楽屋を訪れ、ラジオ・ルクセンブルクの新番組のためのインタビューを収録した。クリスには気の毒だったが、ビートルズはちょうど夕食をとっているところだったので、食事をしながら収録が行なわれた。「ザ・ビートルズ」というタイトルのこの新番組は1965年1月3日から10月17日まで、毎週日曜の夜8時45分から9時まで計42週間放送される。しかしビートルズは、この番組のための演奏の収録は一度もしていないところか、ほとんど関わっていない。したがって、番組としてはデニングが行なったこの日と1965年3月20日、4月29日、6月20日のたった4回の短いインタビューを極力水増しして使わなければならなかった。番組の15分間は、ほとんどがニュースとリスナーからのレコード・リクエストで構成されていた。この番組のインタビューで、ビートルズはリスナーからの手紙を読んだり、家族や友人のために曲を贈ったりしていた。この事実は、4人がどれだけリバプールとのつながりを大切に感じていたかをよく物語っていた。この日の第1回のインタビューでは、ジョンがピート・ショットンとナイジェル・ウォーリーに、ポールがアイバン・ボーン(この3人は元クオリーメンのメンバー)と母校リバプール・インスティチュートの男子生徒たちと、その向かい側に建っていたブラックバーン・ハウスの女子生徒たちに、ジョージが級友のアーサー・ケリーとトニー・ワークマンに、リンゴが友人のロイ・トラフォードとアル・コールドウェル(ロリー・ストームの本名)とアルの両親アーニーとヴィーに、それぞれ曲を贈っている。



クリスマス・ショーのプログラム裏表紙にはジョンのイラストが掲載された

Introduction 1965

CamScannerでスキャン

1965年は、ビートルズにとってさまざまな意味で奇妙な1年だった。前年までにやり遂げてきたことを文字どおりただ繰り返すだけで、1964年の成功と狂乱にさらに拍車をかける1年となったのである。2本目の主演映画“HELP!”を撮影し、2回目の北米ツアーで前年にもまさるビートルマニア騒動にみまわれ、短いがイギリス全国ツアーも行なった。さらにジョンは2冊目の著書まで出版した。

1965年は過渡期でもあり、4人の音楽に対する取り組み方が大きく変化を見せた1年だった。周囲の異常な騒ぎが息苦しくなったこともあるだろうが、4人は人前で演奏することより、本当に自分たちのやりたいことを追求することに専念し始めた。これがもっとも顕著に現れたのは、レコーディングがさらに大きな飛躍を見せたという事実だ。そうして生まれたのがアルバム“RUBBER SOUL”である。また、とどまることを知らない要求に応えようとスタジオからスタジオへと走り回ってわざわざ自分たちの身をすり減らすことなどしなくていいのだと、突然気がついたかのようにビートルズのテレビやラジオへの出演はめっきり減った。今やビートルズは世界じゅうのどのバンドやシンガーよりも、あのエルビスよりも大きな成功と名声を手にしたグループになっていた。このころには、出演依頼する側がビートルズのもとに馳せ参じておうかがいをたて、ビートルズ側はそれが自分たちにふさわしいものかどうか自分で決める立場にあった（大抵ふさわしくないものとして却下される）。

ヘルプ！—4人はアイドル？

映画“HELP!”は、前作“A HARD DAY'S NIGHT”からあまりにもかけ離れた作品だった。というより、違ったものでなければならなかったのだ。もう一度セミ・ドキュメンタリーを作ることに、誰もが、とくにビートルズ自身が意味を見出せなかったからである。まして、レコーディングに関しては、焼き直しなどしたことのないビートルズだったから、変化を望むのはあたりまえだった。“A HARD DAY'S NIGHT”が、ビートルズの実生活にかぎりなく近いフィクションふうだったのに対して、“HELP!”は純粋に、そして単純にフィクションだった。また、“A HARD DAY'S NIGHT”がモノクロでロケ地も地味だったのに対して、“HELP!”はカラーで、ロケ地もロンドンだけにとどまらず、美しいバハマ、そしてすばらしい雪景色のオーストリアだった。

“HELP!”にはあまりにも現実離れしたところがあったものの、楽しい映画で、この作品だけが持つよさもある。しかし、革新性や作品としての完成度の高さという点では、“A HARD DAY'S NIGHT”に遠くおよばなかった。ビートルズもそのことはよくわかっていて、とくにジョンとポールはのちにこう語っている。「2作目は共演者の存在感が強すぎるうえに、とりとめのない脚本のせいで自分たちが自分たちの映画にゲスト出演しているような形になってしまった」と。この不満が解消されることはなく、いつまでも4人の頭から消えなかった。その後2年間、次の映画についてさまざまな憶測が飛びかい、タイトル案や脚本家の名前も数多く噂になったにもかかわらず、ビートルズは自分たち主演のフィクション映画を二度と作らなかった。

“HELP!”公開の7週間前にあたる6月12日、バッキンガム宮殿は女王の誕生日に叙勲される大英帝国勲爵士（MBE）の名簿にビートルズの4人の名があることを発表した。この叙勲は4人がついに体制側にも受け入れられたという事実を華々しく象徴することになったが、ほかの受勲者からはポップ・スターにMBE

を授けることはその勲位を落としめることになるという不満の声があがった。ビートルズもまたこの叙勲にただ驚くばかりだったが、それでも勲章は受け取った(しかし1969年11月、この称号にずっと居心地の悪さを感じていたジョンは、勲爵士としての地位は撤回されなかったものの勲章をバッキンガム宮殿に返している)。

ツアーへの疑問

ビートルズ叙勲が世間で最大の議論の標的となっていたころ、6月20日にビートルズはこの年最初のツアーを開始すべくパリに向けて出発した。2週間でフランス、イタリア、スペインを回ったこのツアーはおおかたのところでは成功をおさめたが、驚いたことに、完売となった会場は1か所もなかった。過去2年間、大きな会場が1、2度だけ完売にならないことはあったが、それが毎度のことになってしまったのは初めてだった。あいかわらず4人は大勢のファンに追いかけられ、いたるところで大混乱が生じたが、ビートルマニアの勢いは1963年に比べると確実に弱まっていた。

また4人はツアーに対して、自分たちが客と同じようにステージを楽しめた1963年以前の状態に戻ることはもう望めないことにも気がついていた。ビートルズはキャバーン・クラブでのランチタイム・セッションをなつかしく思い出すようになった。歓声に埋もれることなくミュージシャンシップを磨けるステージ、自分たちにつかみかかったりせずにリクエスト曲を書きつけた紙きれを懸命に差し出してくれたファン。そのなつかしきよき日々とはまったく対極にあったのが、1965年のアメリカ・ツアーだった。

ブライアン・エプスタインは8月のツアー日程を組むために1月19日にはアメリカに飛んだ。このツアーは、最小限のリスクで最大限の効果を狙っていた。どんなすさまじいチケットの需要にも応えられる最大級のスタジアムを手配し、ビートルズは武装装甲車に乗って登場すると手っ取り早く30分ばかりで演奏を片づけてしまうのだ。そして、再び装甲車に乗り込むと、空港かホテルに向けてすばやく脱出する。途中ステージにファンが押し寄せてきた場合にそなえて、演奏中も装甲車のエンジンはかけっぱなしだった。しかし、ときには作戦が失敗することもあった。

ツアーの幕開けを飾り、いきなりツアーのハイライトともなったのは、史上最高の5万5,600人のファンが歓声をあげ失神したニューヨークのシェア(シェイ)・スタジアムだった。ビートルズのすべての公演のなかでおそらくもっとも有名なこの公演は、彼らのライブ活動のピークを示すもので、幸いテレビ放送用に収録され、記録として残っている。ツアー初日の重要なステージであることと、記念すべき瞬間を意識したことがメンバーに緊張感を持たせ、4人はいつも以上に演奏に熱を入れた。しかし、それ以降のステージからはその情熱が失われてしまったのも確かだった。

音ひとつ聴き取ることすらままならない状態での演奏は、想像以上にミュージシャンシップをダメにしていった。本番前のリハーサルはとっくにやめていたし、驚いたことにツアー前のリハーサルさえやめてしまっていた。リンゴは、4人がステージで突然演奏をやめたとしても観客は誰ひとり気づかなかっただろうと、たびたび口にしてきている。金切り声を張り上げ続けるファンに向かって、これまでよく「うるせぇ!」と威勢よく怒鳴ってきたジョンも、このころになると、その元気も失せてしまったようだった。

しかし、ビートルズが再びアメリカの土を踏んだことを単純に喜んでいたアメリカのファンにしてみれば、

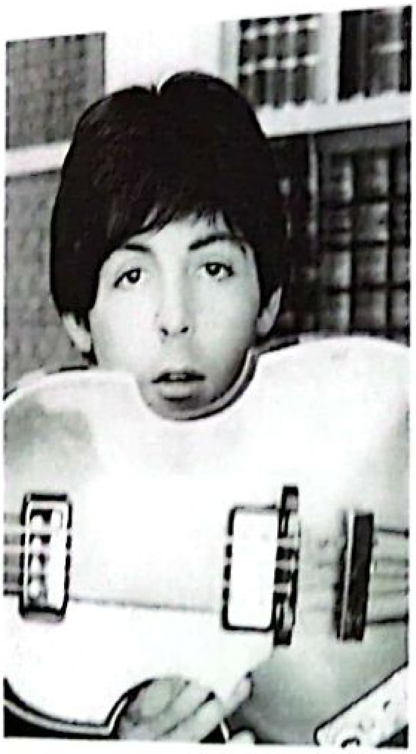
CamScannerでスキャン

前年同様このツアーは純粋にエキサイティングで記念すべきものだった。はるか遠い客席まで埋ったビートルマニアのために聞こえもしない音楽を演奏することへの不満が4人につのりつつあることなど、世界各国のファンはもちろん、アメリカのファンも少しも気がついていなかったのだ。1965年アメリカ・ツアーのコンサート・テープや都市ごとに行なわれた（くだらない質問が次々に飛びかう）記者会見のテープから浮かびあがってくるビートルズの姿は、ひどくいらだち、退屈し、欲求不満に陥ったグループで、あの「いつも行きあたりばったりでごきげんなファブ・フォー」の姿は消えてしまっていた。

9月1日、ビートルズは100万ドルもの大金を稼いでイギリスに戻ってきた。しかし、メンバーの心にはひとつの決心が芽生えていた。つまり、もうツアーは放棄しなければならないということだ。秋から冬にかけてのイギリス全国ツアー、ロイヤル・コマンド・パフォーマンスへの2度目の出演、そして3回目のクリスマス・ショーの計画をエプスタインが持ってきたとき、4人はもうステージに出たくないとエプスタインに強く訴えた。すでにマネージャーを屈服させるだけの力を持ち始めていたビートルズは、とくにロイヤル・コマンド・パフォーマンスとクリスマス・ショーの話についてはきっぱりと断った。

しかし、イギリス・ツアーについてはエプスタインも意見を曲げなかった。説得にかなり時間はかかったものの、最終的には4人ともツアーに同意した。NEMSは8月2日に「今年ビートルズはイギリス・ツアーを行なわない」と発表していたが、9月1日に「やはりイギリス・ツアーを敢行する」と訂正した。ビートルズ、エプスタイン、ツアー・プロモーターのアーサー・ハウズは長い間言い争ったが、その間ビートルズは、ツアーをやるとしても短期間でなければだめだということは頑としてゆずらなかった。そして、12月に行なわれる形ばかりの9日間ツアーの日程が10月11日に発表された。

イギリスで初めてひと晩1,000ポンドものギャラを稼ぎ出すアーティストとなったビートルズにとって、この9日間が最後のイギリス・ツアーとなった。もちろん、二度とやる気がないということはまだ4人だけの秘密で、世間には公表されていない。グラスゴーで始まったツアーの初日、つまり、12月3日はちょうどビートルズのニュー・アルバム“RUBBER SOUL”の発売日にあたった。このアルバムでビートルズは、レコーディング・スタジオという静かな閉鎖された空間で、時間的には厳しい制約があったにもかかわらず、それまでライブ活動に費やしていたエネルギーのすべてを、よりすぐれた音楽を作り出すこととサウンド作りの実験を重ねることに傾けたのだった。これがビートルズの新しい発散であり、将来的な方向となった。新曲ばかり14曲を収めた“RUBBER SOUL”は、歌詞も演奏もそれまで発表したビートルズのアルバムのなかでもっとも野心的な内容を誇っていた。しかし、ツアーで披露した新曲は、'Nowhere Man' と 'If I Needed Someone' のたった2曲だった。



1月1日(金)～16日(土)

オデオン・シネマ
Hammersmith, London

1964年12月24日に開幕した「アナザー・ビートルズ・クリスマス・ショー」の後半。1月3日と10日を除き、14夜の公演を行なった。

9枚目のシングルをレコーディング

2月15日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

新しい年を迎え、ビートルズは新たな映画製作とレコーディング・セッションの日々に追われるが、それでもなお音楽業界からの要求はつのる一方だった。この日午後2時30分からのセッションでは、ジョンの'Ticket To Ride'を2テイク録音し、午後5時45分にはミキシングの準備ができていた。この曲は、4月9日発売のニュー・シングルのA面となるとともに、また撮影を控えたビートルズの2本目の映画のサウンドトラック・アルバムに収録される。'Ticket To Ride'は2テイクで終わったとはいえ、実際にはかなりの作業が行なわれていた。というのも、この年から、マルチトラック・テープへのオーバーダビング作業に以前のようにテイク数を付けなくなったからだ。つまり、この日、ビートルズはまずリズム・トラックを2テイク録音（テイク1はオープニングを失敗、テイク2がベスト・テイクとなる）。それからボーカルをはじめとして、必要だと思われるものは何でもあきトラックにオーバーダビングしていったことになる。しかし、ダビング回数についてはレコーディング記録にその詳細が残されていない。
午後7時から10時30分までのセッションでは、ポールの'Another Girl'（1テイクと編集用パート10テイク）と、ジョージの'I Need You'（5テイク）を録音。どちらも翌日のオーバーダビングを経て完成する。

2月16日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

EMIスタジオでの6日連続のレコーディング・セッションの2日目。午後2時30分から5時までのセッションでは、'I Need You'にジョージのボーカル、カウベル、トーン・ペダル・ギターをオーバーダビング。'Another Girl'にはジョージのボーカルとギターを重ねて2曲とも完成させる。
午後5時から10時までのセッションでは、3声のハーモニーがすばらしいジョンのバラード'Yes It Is'を14テイク録音して完成させた。ジョン、ポール、ジョージによるボーカル・ハーモニーが'This Boy'を連想させる。しかし、この美しい曲は、アルバム"HELP!"のサウンドトラック面（A面）にも、その裏面にも収録されず、ニュー・シングルのB面に収まるだけ。それほど当時のビートルズは作品に恵まれていたのだ。

2月17日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

映画のサウンドトラックとして、ポールの曲'The Night Before'とジョージの曲'You Like Me Too Much'をレコーディングした。しかし、ジョージの曲は最終的にアルバム"HELP!"のサウンドトラックではない面（B面）に収録される。'The Night Before'は午後2時から7時までに2テイクで完成し、'You Like Me Too Much'は午後7時から11時までの間に8テイクで完成した。

初めて外部のミュージシャンを迎える

2月18日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日はまず、午前10時から午後1時までに、'Ticket To Ride' 'Another Girl' 'I Need You' 'Yes It Is'のモノ・ミックスを作ることから始まった（さらに2回のレコーディング・セッションのあいまの午後5時15分から6時までに、'The Night Before'と'You Like Me Too Much'のモノ・ミックスも仕上げた）。
午後3時30分から5時15分までのセッションでは、ボブ・ディランの影響が強く感じられるジョンのバラード'You've Got To Hide Your Love Away'のアコースティック・パートを9テイク録音する。じつは、このときのセッションは、ビートルズが初めてレコーディングにセッション・ミュージシャンを迎えた機会となったので、彼らのレコーディングの変遷という視点からみると、この曲は記念すべき作品だ（初期のレコーディングで'Love Me Do'と'P.S. I Love You'に

CamScannerでスキャン

ドラマーのアンディ・ホワイトが雇われたこともあるが、このときはあくまでもリンゴの代役を務めているのであって、今回のようにグループ全体の演奏を補うためのセッション・ミュージシャンという意味合いはない。1962年9月11日参照)。呼ばれたのはアレンジャー兼フルート奏者のジョニー・スコット。彼はテナー・フルートとアルト・フルートを演奏し、6ポンドのセッション報酬を受け取っている(が、ジャケットに名前はクレジットされていない)。

リンゴはビートルズのアルバムで、"A HARD DAY'S NIGHT"を除いて、1枚1曲ずつリード・ボーカルをとっているが、まだリンゴの自作がなかったころは、いつもリンゴに最適の曲がそのときどきで選ばれていた。"PLEASE PLEASE ME"ではシュレルズの'Boys'、"WITH THE BEATLES"ではジョンとポールがリンゴのために書いた'I Wanna Be Your Man'、"BEATLES FOR SALE"ではカール・パーキンスの'Honey Don't'、またEP"LONG TALL SALLY"ではやはりパーキンスの'Matchbox'を歌っていた。では、今度のニュー・アルバムでリンゴが歌うのはどんな曲か。ジョンとポールがリンゴのために書いたのはいかにもロックっぽいタイトルの'If You've Got Trouble'という曲だった。しかし、この曲はアルバムに収録されることはなかった(1996年、"ANTHOLOGY 2"に収録)。その理由は簡単だった。レノン=マッカートニーの作品として決していい仕上がりではなかったし、この日午後6時30分から10時30分までのセッションの前半で録音された1テイク(とオーバーダビング)も、あまりぱっとしないものだったからだ。セッションの後半では、ポールの'Tell Me What You See'を4テイク録音して完成させた。この曲は、ジョージの'You Like Me Too Much'と同様に、当初は映画のサウンドトラックの候補だったが、のちにアルバムのサウンドトラックではない面に収録曲される。

2月19日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後3時30分から6時20分まで、1回のみのセッション。ジョンの'You're Going To Lose That Girl'を2テイク録音し、オーバーダビングして完成。のちにこの曲にはさらにオーバーダビングが試みられるが(3月30日参照)、そのバージョンは結局採用されず、アルバム"HELP!"にはこの日完成したバージョンが収録される。

2月20日(土)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズがレコーディングした曲で未発表に終わったものは少ないが、不思議なことにこの3日間に、日の目を見ない曲が2曲も生まれている(1996年、"ANTHOLOGY 2"に収録)。1曲は'If You've Got Trouble'だが、これにはさほど録音の手間はかかっていない。そして同じ運命をたどるもう1曲が、レノン=マッカートニーの'That Means A Lot'だ。映画のために書かれたこの曲は、この日の正午から午後5時15分の間に2テイク、そして3月30日と、計2回レコーディングが試みられている。しかし、最終的にこの曲は放棄され、P・J・プロビーに独占的に提供される(プロビーは1965年4月7日にロン・リチャーズのプロデュースでこの曲を録音)。

この日はまた、午前11時から正午までに'If You've Got Trouble' 'Tell Me What You See' 'You're Going To Lose That Girl'のモノ・ミックスが、午後5時15分から6時までのセッションでは'That Means A Lot'と'You've Got To Hide Your Love Away'のモノ・ミックスが作られた。2月15日から20日までのセッションで、ふごとに11曲のモノ・ミックスが完成したわけだ。11曲のステレオ・ミックスは、2月23日午前10時から午後1時にEMIの第1スタジオで、バランス・エンジニアのノーマン・スミスの指示のもとに行なわれる。

2作目の映画、バハマで撮影開始

2月23日(火)～3月9日(火)

ニュー・プロビデンス島、バハマ
New Providence, Bahamas

映画"A HARD DAY'S NIGHT"とはまったく毛色の違う作品を作るべく、ビートルズはバハマで撮影を開始する。前作は、ガトウィック、ノッティング・ヒル・ゲイト、ハマースミス、ウエスト・イーリングといった地味な街並みを背景に、どんより曇った空のもとモノクロで撮影されたものだったが、映画"HELP!"(この時点ではまだタイトルは未定)はカラー撮影で、ロケ地も明るいバハマのビーチ、きらきらと輝くオーストリアの山脈、そしてロンドンでもアスプレイズやクリ

CamScannerでスキャン

ーブドンといった比較的美しい街並みが選ばれた。

しかし、この映画のロケ地にわざわざバハマが選ばれたのには、ほかにもちゃんとした理由があった。それはビートルズの経理顧問であったウォルター・ストラック経済学博士が、ビートルズの税金対策のために口座をバハマに開設していたからだった。この口座開設の準備のために余儀なく1年間もバハマに滞在していたストラックは、当時はまだイギリスの直轄植民地だったバハマ当局への気配りのためにも、ビートルズがバハマで映画を撮影するのがいいのではないかと提案したのだ。したがって、じつはこの企画には「あるいは」ということはなかった。監督のリチャード・レスターとプロデューサーのウォルター・シェンソンという前作と同じ顔ぶれの製作チームにまず伝えられたのは、とにかく撮影はバハマで開始される、ということだけだった。

どちらにしても、イギリスではまだ寒い2月に西インド諸島で撮影を行なうことに異を唱える者などいなかった。それでビートルズは2月22日にバハマに飛び、ケーブル・ビーチに近い豪華なバルモラル・クラブ内のロッジに宿泊することになった。

バハマでの撮影はすべて、大勢の観光客が見守るなか、全長約34キロのニュー・プロビデンス島で行なわれた。見物人のなかには、海外からのジャーナリストも数人混じっており、ビートルズはロケ先でアメリカのラジオや雑誌向けのインタビューに応じた。

2月23日の晴れた午後、まだ荷物の整理もロケ地の下見も終わっていなかったが、早くも第1回の撮影がスタート。まずは、マッキー・ストリート近くの埠頭でリンゴがほら貝を耳にあてるシーンを撮影(このシーンは撮影されたが最終的に使用されなかった数多いカットのひとつ)。次に、ウエスト・ベイのナッソー・ビーチ・ホテルのプールで、4人が洋服を着たまま泳ぐシーンを撮影した。

24日、午前8時30分から午後5時30分まで丸1日の撮影が行なわれた。朝早くから夕方までというスケジュールは、撮影期間中ずっと続く。この日は空港近くのインターフィールド・ロードをサイクリングするシーンを撮影。このシーンはこれ以降も何度か撮影される。

25日、再びインターフィールド・ロードで撮影。リンゴとジョンはバハマ・ソフトボール・アソシエーションのスタジアム近くで、ポールは石灰岩の洞窟でソロ・シーンを撮影。

26日、とくに忙しい1日。ヨット・ハーバーとベイ・ストリートの郵便局の前でリンゴのソロ・シーンを撮影したあと、ロイヤル・ビクトリア・ホテルの庭にあるカポックの木の上に作った家でジョージとリンゴのシーンを撮影。さらに、ジョンが「リンゴ!」と叫びながら図書館から走り出すシーンを撮影した(また、レイク・カニンガムの沼地では、ビートルズ以外の出演者による四人宿舎のシーンが撮影された)。

27日、バルモラル島で、'Another Girl' の演奏シーンを撮影(バハマでは2回の週末も返上して撮影が続けられた)。

28日、この日はパラダイス島のキャベッジ・ビーチで撮影を行なう。翌3月1日もこの島に戻り、カフェ・マルティニークというフランス料理レストランでのシーンを撮影。3月1日には沖合に停泊させたスクーナー船上で、リンゴ、プロフェッサー・フット(ビクター・スピネッティ)、アルジャーノン(ロイ・キニア)、アーメ(エリナー・ブロン)による撮影も行なわれた。

3月2日から4日まで、キャベッジ・ビーチとビクトリア・ビーチで撮影。3日には、リンゴが砂浜の杭に縛りつけられるという映画の最後のシーンが撮影された。

5日、島内のあちこちのロケ地および修道院で、ジョン、ポール、ジョージが「リンゴ!」と叫びながら探しまわるシーンを撮影。

6日、ナッソー国際空港で飛行機のタラップを下りながら、狂ったように互いの写真を撮り合うシーンを撮影。

7日と8日、映画の設定では寺院、実際には閉鎖された陸軍キャンプかと思われた場所で撮影(その後、この場所がじつは身体障害の子どもと老人のための病院だと判明し、そのあまりのひどさにビートルズは憤慨する)。

最終日の9日、ビートルズはパラダイス島に戻り、いくつかのシーンを撮影。

3月10日、バハマをあとにしたビートルズは11日の朝7時5分にロンドン空港に到着した。

アルプスで7日間の映画撮影

3 月 14 日 (日) ～ 20 日 (土)

オーバータウエルン

Obertauern, Austria

バハマから戻って2日後の3月13日、ビートルズと撮影スタッフは再び海外のロケ地に出発した。今度はオーストリアの雪山だ。午前11時ロンドン空港発のフライトでザルツブルクに到着し、4,000人のファンと大勢のオーストリアの記

CamScannerでスキャン

者に出迎えられた。ニュース映画やテレビの報道陣向けに近くのホテルで記者会見を開いたのち、ビートルズは22日に帰国するまで宿泊するオーバータウエルンのホテル・エーデルワイスにチェックインした。撮影はすべてこの街で行なわれた。

3月14日、ホテル正面玄関前で撮影を開始し、映画には使用されなかったが「ハイヤーのリュージュ」のシーンを撮影。さらに別の場所に移動して、4人が雪のなかで背中から倒れるシーンを撮影した。初日のこの日は、ビートルズの代役も馬ぞりに乗るシーンを撮影した（代役はすべてロンドンの役者で、クリフ・ディギンズ、ミック・ディロン、ピーター・チーバース、ジョー・ダンが務めた）。

3月15日、ビートルズとその代役はスキーのリフトと斜面でのシーンを撮影。ロンドンのEMIスタジオではノーマン・スミスが'Ticket To Ride'の新しいモノ・ミックスを制作し（午前10時から11時に第2スタジオで）、ニュー・シングルのマスター・テープとしてキャピトル・レコードに、また、映画会社のユナイテッド・アーティスツに渡している。

16日、前日に引き続きリフトのシーンの撮影。

17日、ビートルズはカーリングのシーン、そして森林でのシーンを撮影した。この日初めて、映画のタイトルが"EIGHT ARMS TO HOLD YOU"だと発表された。このタイトルは1か月ほどそのまま。

18日、この日も忙しい撮影となった。オリンピック競技場のジャンプ台でのシーンと、山腹でのシーン、アフター・スキーのパブでのシーンを撮影した。19日には、テラスと雪のなかでさまざまなカットを撮影。

最終日の20日、ビートルズと代役は再び雪の斜面へ出かけ、'Ticket To Ride'のシーンを撮影した。ビートルズに要求されたのは、基本的に「ふざける」ことだった。最後に、リンゴと彼の代役との屋外レストランでのやりとりを撮影（映画には含まれない）。

21日、ビートルズを残して撮影スタッフはオーバータウエルンを出発し、ラートシュタット駅およびザルツブルクに向かうトンネルの中で、代役を使って撮影を行なう。この日の夜、一行はザルツブルクに宿泊。一方、ビートルズは22日にオーバータウエルンを出発し、ザルツブルクから飛行機でロンドンに向かい、夕方帰国した。

ビートルズはオーストリア滞在中に少なくとも2本の電話インタビューを受けた。1本は3月19日のBBCによるインタビューで、ブライアン・エプスタインが前回BBCラジオに番組を許してからじつに3か月近くもたってやっと実現した取材だった。その間、演奏の収録もインタビューも行なえなかったBBCは、公共放送団体であるにもかかわらず、国内最大の人気スターを出演させられない事実にいらだちをつのらせていた。やがて、エプスタインはBBCの圧力に負け、ホテル・エーデルワイスからの電話インタビューに応じたのだ。

電話は現地時間の午後8時（イギリス時間で午後7時）に、ロンドンのブライアン・マシューからかかってきた。この内容は翌3月20日の午前11時過ぎに「サタデイ・クラブ」で放送された（番組はいつものように午前10時から正午まで放送され、10時31分から10時59分までの内容は海外放送でも同時に流れた）。

また、3月20日の夜の同じ時間帯に今度はロンドンのクリス・デニングから電話があり、ラジオ・ルクセンブルクの番組「ザ・ビートルズ」（1964年12月24日参照）のためにジョンとリンゴの電話インタビューが行なわれた。比較的短いインタビューで、ジョージとポールは参加していない。

イギリスで映画撮影が始まる

3月24日（水）～26日（金）
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

いよいよイギリス国内での撮影が始まった。撮影場所は、1964年のちょうど同じころに映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影で使用した、ロンドン郊外にあるおなじみのトゥイッケナム・フィルム・スタジオ。

午前8時30分から午後5時30分までというスケジュールで、ビートルズは5月9日まで、このスタジオと近辺のロケ地で撮影を続ける。バハマおよびオーストリアでの撮影を含め、この2作目の映画の製作には、オフ日を除くとのべ11週間かかっていて、前作より3週間以上も多くの日数がかけられたことになる。

最初の数日間のスタジオ撮影では、（設定がバハマになっている）寺院の内部のシーンの撮影が行なわれ、ジョン、ポール、ジョージが寺院の祭壇から水中に飛び込む（2月23日のナッソー・ビーチ・ホテルのシーンにつながる）場面を撮影した。

CamScannerでスキャン

「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」に最後の出演

3月28日(日)

アルファ・テレビジョン・スタジオ
Aston, Birmingham

ABCテレビのウイークリー・ポップ番組「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」への最後の出演を収録。1963年1月にビートルズを全国テレビに初出演させたこの番組は、人気が低迷し始めていた（1966年6月25日の放送終了時にはITVの全国ネットからも一部はずされていた）。このときはまだ全国放送で、ビートルズはテレビ初出演をはたしたバーミンガムのアルファ・テレビジョン・スタジオで、熱狂的なスタジオ見学者たちの前で、'Eight Days A Week' 'Yes It Is' 'Ticket To Ride' の3曲を口パクした。また、ポールとリンゴは司会のブライアン・マシューからインタビューを受けた。収録分は4月3日午後5時50分から6時35分にかけて放送。

3月29日(月)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

トゥイッケナムでの2週目のスタジオ撮影の初日。この週にはプロフェッサー・フットとアルジャーノンとの研究室のシーン、鉄道の駅構内のシーンを撮影する。

3月30日(火)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

撮影が終わったあと、ビートルズはロンドンに戻り、EMIスタジオでレコーディングをするが、実りある結果にはならなかった。午後7時から9時までの予定が10時まで延長されたこのセッションでは、まず 'That Means A Lot' のリメイクを5テイク（テイク20〜24）録音するが、うまくいかずあきらめる。次に 'You're Going To Lose That Girl' のベスト・テイクにオーバーダビングする予定のパートをレコーディング。EMIのセッション記録にはどの楽器を録音したのかは記録されていないが、この日レコーディングされたパートは結局使われずに終わる。

3月31日(水)〜4月1日(木)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

映画 "EIGHT ARMS TO HOLD YOU" のスタジオ撮影を続ける。

4月2日(金)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

ビートルズがトゥイッケナムで撮影をしている間、EMIスタジオでは、ジョージ・マーティンが3月30日のオーバーダビングを使った 'You're Going To Lose That Girl' のステレオ・ミックスを制作していた。しかし、このバージョンは最終的にボツになる。

4月5日(月)〜4月9日(金)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

最初の2日間は、スタジオ内にセットを作り、ラジャハマ・レストランの客席と厨房のシーンを撮影。6日には撮影の休憩中に、ビートルズはラジオ・キャロラインのベル賞をDJのサイモン・ディーから授与され、このもようはニュース映画の取材陣にも撮影された。ディーはまた、この海賊ラジオ局のためにビートルズへのインタビューを収録（放送日は不明だが、トゥイッケナムで傍受できたのはこのころだと思われる。また、ビートルズはイギリスの別の海賊ラジオ局ラジオ・ロンドンからのインタビューにも応じている）。

7日、パブの地下室のシーンを撮影。落とし穴にひっかかって階下に転落したリンゴを、有名なベンガルの人食い虎、ラジャが待ち構えているというシーン。

8日は、4シーンを撮影し、ビートルズはそのうちの2シーンに出演した。4人は、ハンド・ドライヤーから極度に熱い熱風が吹き出て大あわてになるという洗面所のシーンを撮影。そのあとで、トイレでのリンゴのソロ・シーンを撮影したが、これは映画には使用されない。撮影後、ポールはピックウィックにできた新しいクラブ、ダウンステアーズのオープニングに出かける。

9日には、倉庫のセットでビートルズ、グラック警視（パトリッ

ク・カーギル)、7人の警官、クラング(レオ・マッカーン)とそ
の手下の12人の暴漢によるシーンが撮影されたが、これ
も最終的には使用されず。
この日、シングル'Ticket To Ride/Yes It Is'リリー
ス。

最後のBBCテレビ・スタジオ

4月10日(土)

リバーサイド・スタジオ、第2スタジオ
London

ニュー・シングルが発売され、「トップ・オブ・ザ・ポップス」放
送用の収録が必要となったので、ビートルズはこの番組用
の演奏シーンをレコードの音に合わせて収録することにな
り、最後のBBCテレビ・スタジオ入りをした。リハーサルを含
めて収録は午後1時30分から行なわれ、いつものようにシ
ングルの両面2曲、'Ticket To Ride'と'Yes It Is'を
演奏した。4人は、翌日のNME主催のコンサートや有名な
シェア・スタジアム公演(8月15日参照)でも着用するアー
ミー・ジャケットをこの日初めて着て出演した。
収録した2曲は、4月15日午後7時30分から8時の「トップ・
オブ・ザ・ポップス」で放送される。また、'Yes It Is'は翌
週(4月22日)に、'Ticket To Ride'は4月29日と5月6日
に再放送される(すべて午後7時30分から8時)。
注:この番組以外でも、このときの'Ticket To Ride'の
映像は使われ、じつは短い(25秒間の)バージョンが週1
回の子ども向けSF番組「ドクター・フー」のなかでも登場
する。これは1965年5月22日の午後5時40分から6時5分
にBBC1で放送。6回にわたる「チェイス」というストーリー
の第1回「エクセキューショナー」と題された回だった。博
士の優秀な助手であるビッキー(モーリン・オブライエン)
が、「タイム・アンド・スペース・ビジュアライザー」マシンにつ
いて説明する場面で、彼女はマシンを指さしながら「地球
上で起こった出来事はすべて、光ニュートロンに記録され
ています。このマシンはその光ニュートロンのエネルギー
を電気信号に変換します。つまり、歴史上のすべての出
来事をここに映し出して観ることができるということです!」
と語る。そこで博士(ウィリアム・ハートネル)が試しにマシ
ンのスイッチを入れて適当にチューニングしてみせると、そ
の画面のなかで、小さな丸いステージに乗って'Ticket To
Ride'を演奏しているビートルズが映るというもの。

またこの日、シェア・スタジアムでのコンサートの前金10万
ドルを支払うため、シド・バーンスタインがニューヨーク滞在
中のブライアン・エプスタインを訪問している。

今年もポール・ウィナーズ・コンサートに出演

4月11日(日)

エンパイア・プール
Wembley
テディントン・スタジオ・センター、第1スタジオ
Teddington

「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌による1964/65年
度ポール・ウィナーズ・オールスター・コンサートが開かれた。
ビートルズがこの週刊音楽誌主催のコンサートに出演す
るのは、これで連続3回目。この日の午後、ビートルズは1万
人の観客の前で、'I Feel Fine' 'She's A Woman'
'Baby's In Black' 'Ticket To Ride' 'Long Tall
Sally'を演奏。
このコンサートのもようはABCテレビの85分間の特別番組
「ポール・ウィナーズ・コンサート」でも2回にわたって放送
される。ビートルズが出演した1回目は4月18日(イースター・
サンデイ)で、ロンドン近辺では午後4時10分から5時35分、
ほかの地域では午後3時15分から4時40分にかけて放送。
番組では、ビートルズがアメリカの歌手、トニー・ベネットか
ら賞を受け取る場面も見られる。
NMEのコンサートに出演したあと、ビートルズはすぐにABC
のテディントン・スタジオに向かい、午後6時30分に到着し
た。夕食をとって着替えたあと、午後7時30分から8時30分
のカメラ・リハーサル、8時45分から9時30分のドレス・リハ
ーサルに続き、生放送の「イーモン・アンドルース・ショー」
(11時5分から11時50分)に出演した。
番組で、ビートルズは3つのセクションに出演。最初に、ジョ
ンがイーモンとともに司会者のデスクにつき、リンゴとジョー
ジがソファに、ポールが回転椅子に腰かけて、オープニン
グから10分間、全員で世間話に興じる。新しい主演映画
のこと、ビートルズがなぜ成功したのか考えてみたことが
あるかどうか、解散したらその後ソロとして仕事を続ける
ことはありえるのか、などといったことが話題となった。コマ
ーシャルをはさんだあと、'Ticket To Ride'と'Yes It
Is'を口パクした。最後に、18分35秒にわたる番組のメイ

CamScannerでスキャン

ン・ディスカッションに、新聞コラム記者のキャサリン・ホワイトホーン、作家で評論家のウルフ・マンコービッツとともに参加した(このコーナーでは、ポールとジョンがイーモンのデスクに、マンコービッツとリンゴとジョージがソファに、ホワイトホーンが回転椅子に座っていた)。

4月12日(月)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

バッキンガム宮殿内を装ったセットでの撮影。廊下を走っていたビートルズが、プロフェッサー・フットの相対性カデンザ装置によって、急に身体の動きがスローモーションになってしまうシーンだ。

映画のタイトル曲 'Help!'

4月13日(火)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前中に、前日からの廊下を走るシーンの撮影を完了。午後からはビートルズの出番はなかったが、スタジオでは、プロフェッサー・フット、アルジャーノン、クラング、ブフタ(ジョン・ブルータル)、暴漢たちのシーンが撮影された。ビートルズもそのままスタジオに残り、BBCラジオのライブ・インタビューに応じた。

BBCラジオでは、イースターの月曜(4月19日)の放送用に、また休日のビートルズ・スペシャルを制作できるものと見込んでいて、BBCとしては、メンバーにそれぞれ選んでもらったお気に入りのレコードをかけるという、前回までの4回とは少し違う内容の特集を予定していた。しかし、BBC側のもくろみは打ち砕かれ、エプスタインが提示できたのは、昼の音楽トーク番組「ポップ・イン」用の短いインタビューだけだった。それで、この日の午後1時から1時55分にかけて放送されるこの番組で、トゥイッケナム・フィルム・スタジオからのインタビューが生放送されることになった。ビートルズはスタジオの駐車場に止めたBBCラジオ中継車の中でインタビューを受ける。これは午後1時45分ごろから'Ticket To Ride'をBGMにして放送された。

一方映画のタイトルに関して、リチャード・レスター監督は当初"BEATLES 2"を考えていたが、リンゴが"EIGHT ARMS TO HOLD YOU"を提案し、とりあえずこのタイトルに決まっていた。しかし、何日かして、このタイトルもじつは誰も大して気に入っていないことがわかった。とくにジョンとポールにいたっては、こんな面倒なタイトルの曲は書きたくなさそうだった。そこで、(おそらくレスターにより)"HELP!"に変更され、ジョンとポールはこのタイトルの曲を作らなければならなくなった。最終的に、'Help!'はほとんどジョンがひとりで書いた曲になった。ジョンはのちに、「誰かこの状況から助けてほしい」と懇願するこの曲は、まぎれもなく自分にとって最初のリアルなメッセージ・ソングになったと語っている。この曲はこの日の午後7時から11時15分までの1回のセッションでレコーディングされ、テイク12にいろいろなオーバーダビングを加えて作品を完成させた。

4月14日(水)
エルザ・アベニュー
St Margaret's, Twickenham, Middlesex

映画"HELP!"のなかで最初にビートルズが登場する場面を撮影。郊外の住宅街でロールス・ロイスから降りた4人が、(スタジオから近い)エルザ・アベニュー沿いに隣接して建っている4軒のテラス・ハウスにそれぞれ入っていく。リンゴが5番地、ジョンが7番地、ポールが9番地、ジョージが11番地の家である。道路の反対側にいたふたりの女性が、あまりにもふつうであるビートルズの姿を見て手を振ろうかどうかとまどってしまうというシーンだ。

ただ、その家の内部が巨大な共同住宅になっていたということは、まだビートルズの4人も誰も知らなかった(もちろんその内部はトゥイッケナム・スタジオのセット)。この日、エルザ・アベニューではほかのシーンもいくつか撮影された。ビートルズは翌15日の撮影には参加していない。そのあと製作スタッフはイースターの週末に連休をとり、4月20日にスタジオで撮影を再開する。

ジョンとジョージだけ『レディ・ステディ・ゴー!』に出演

4月16日(金)
ウェンブリー・スタジオ、第1スタジオ
Wembley

当時アーティストがニュー・シングルを宣伝するためには、レディフュージョン・テレビの「レディ・ステディ・ゴー!」に出演するのがいちばん効果的だった。しかし問題は、ビートルズはもうこの番組に生出演したり、(1964年11月23日のように)収録をするつもりもなくなってしまったということだった。苦肉の策でひねり出されたとりあえずの解決策は、ジョンとジョージだけがレディフュージョンのウェンブリー・スタジオへ出かけて、この日の午後6時8分から7時までの生放送に出演し、'Ticket To Ride'を流したあとに司会のキャシー・マクゴワンからインタビューを受けるというものだった。ほかにゲストとして、アダム・フェイス、ドリス・トロイ、キンクス、ハーマンズ・ハーミッツが出演。

じつはこの番組は、4月2日から番組名を「レディ・ステディ・ゴー!」から「レディ・ステディ・ゴーズ・ライブ!」に変更し、場所もキングズウェイの第9スタジオからより大きなウェンブリーの第1スタジオに移し、基本的に生演奏のみを放送するという方針を打ち出していた。当時すでに番組は18か月めに入って下り坂を迎え、新規巻き返しをはかるため番組名を変更したのである。しかし、1965年から66年にかけてあいかわらず番組打ち切りの噂は絶えず、1965年6月4日にはもとの「レディ・ステディ・ゴー!」に番組タイトルを戻す。その後1966年12月23日を最後に番組は終了するが、最終回の番組タイトルは「レディ・ステディ・ゴーズ!」。

4月18日(日)

EMIスタジオ、第65室
London

午前10時から午後12時30分までに、'Help!'の最初のモノおよびステレオ・ミックスと、'The Night Before'のステレオ・ミックスが制作された('Help!'は6月18日にもモノおよびステレオ・ミックス制作が再度試みられる)。

ビートルズ、アニマルズ、スペンサー・デイビス・グループ、ビリー・J・クレイマー、ハーマンズ・ハーミッツが出演する映画"POP GEAR"がイギリスで公開。

4月20日(火)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

イースター休日が終わり、撮影再開。この日は、リンゴがポストに手紙を投函したところを暴漢たちがリンゴを襲って指輪をはずそうとするシーンを撮影(この場面のロケ地でのシーンは5月9日に撮影される)。

またこの日、ブライアン・エプスタインがジョージの音楽出版社ハリソングス・リミテッドの取締役に就任。

4月21日(水)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

スコットランド・ヤードのセットでの撮影。ビートルズがグラック警視のオフィスを訪問するシーンである。

'Help!'の演奏シーンを撮影

4月22日(木)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

"HELP!"の冒頭のシーンではビートルズがテレビ出演してタイトル曲を演奏しているが、この日トゥイッケナム・スタジオで撮影されたのがそのシーンである(イギリスのテレビがカラー放送を開始するのは1967年12月なので、もちろんモノクロ撮影)。また、この演奏場面を家庭用映画スクリーンに映して、それに向かってクラングがダーツの矢を投げるシーンも撮影された(これはカラー)。

NEMSはこの日撮影した演奏シーンのみの(つまりクラング役のマッカーンとダーツの矢が映っていない)モノクロ・フィルムをユナイテッド・アーティスツから受け取り、7月23日発売のシングル盤'Help!'のプロモーション・フィルムとして各テレビ局に提供した。この映像は、7月29日(午後7時30分から8時)と8月19日(午後7時25分から8時)のBBC1の「トップ・オブ・ザ・ポップス」などで放送される(8月19日にはやはりユナイテッド・アーティスツが用意した'Another Girl'のフィルムも流れる)。一方ITVでは、ダーツなし・クリップとして業界内に知れわたったこのフィルムを7月17日の午後5時50分から6時30分にABC系列で全国ネットの「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」の200回記念番組、「ラッキー・スターズ・アニバーサリー・ショー」で放送したほか、7月26日午後5時から5時25分まで放送されるTWW系列の「ディスクス・ア・ゴーゴー」でも使う。

この日はまた、映画では採用されていない長いシーンも撮影された。ビートルズは、演劇の先生サム・アハブ役を演じたイギリスのコメディアンのフランキー・ハワードと、アハブ

の弟子レディ・マクベスを演じた当時無名の女優ウェンディ・リチャード(のちにBBCのコメディ「アー・ユー・ビーイン・サーブド?」でミス・ブラームス役やBBCのメロドラマ「イーストエンダーズ」でポーリン・フォウラー役もやった)と共演した。
この日、'Ticket To Ride' がイギリスのシングル・チャートで1位を獲得。

4月23日(金)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

フランキー・ハワードとウェンディ・リチャードとともに、演劇学校のシーンをさらに撮影。この日は、クラングとアーメも参加している。

4月24日(土)
シティ・バージ
Strand-on-the-Green, Chiswick, London

ロケ地に出かけ、(4月7日に撮影した)リンゴが人食い虎のいる地下室に閉じこめられるシーンの前後を撮影。現場はチズウィックという小さな村で、まずは全員で郵便局前のせまい路地を歩き、テムズ川の引き船道に出てくる。しかし、そこで(バグパイプ奏者のかっこうをした暴漢たちに襲われ)身の危険を感じた4人は、シティ・バージ・パブに逃げ込む(パブの店内のシーンはトゥイッケナム・スタジオで撮影。4月28日参照)。次に、(この過程で地下室に落ちた)リンゴを除く3人はパブの正面のガラス窓を突き破って引き船道に戻ってくる。
この撮影のあと、ジョンとポールの出番はなくなる。ジョージとリンゴは別のロケ地に行き、通りのシーンと電話ボックスのシーンを撮影(ロケ地不明、映画には使用されていない)。続いて、ビートルズ抜きで、ナイツブリッジのハロッズ・デパートの食品売り場で撮影が行なわれる(これも映画には使用されず)。月曜には撮影がないので、次回の撮影は4月27日となる。
タイムズ紙、ビートルズの音楽出版社ノーザン・ソングスの最近の株式発行はこの年の「類を見ない急落」と報道。それまで7シリング9ペンスだったのが、6シリング6ペンスになったとのこと。

4月27日(火)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

映画"HELP!"で最高におもしろいシーンのひとつが(スタジオ・セットを使ってこの日撮影された)バハマに向かう前の空港ターミナルでの、大変装したビートルズの姿である。どこがおもしろいのかといえば、4人のうち3人が数年後にこの変装どおりの容貌になってしまったところだ。長くてたっぷりある顎髭と丸眼鏡のジョンは、1969年夏のジョンの姿がそのまま現れている。頬髭をつけたジョージは1967年春("SGT. PEPPER"のジャケット写真撮影のころ)のようだし、リンゴの短くカットした髪と顎髭は、まさに1970年代半ばの彼のイメージである。
この日はまた、数日後に訪れるソールズベリー平原(軍の演習地がある)での撮影と関連した、戦車の砲塔の上でのアーメとのシーンを撮影する。

グラミー初受賞

4月28日(水)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

午前中に、ビートルズ、フランキー・ハワード、ウェンディ・リチャード、レオ・マッカーン、エリナー・ブロンの顔ぶれでの演劇学校シーンの撮影を完了。2日間にわたって撮影されたこのシーンは結局カット。午後は、土曜日にシティ・バージで撮影したシーンの続きとなるパブ内のシーンを撮影し、リンゴがドアの落とし穴にひっかかったところで撮影は終了。

パブのセットでは、もうひとつ別の撮影もあった。この日、全米レコーディング・アート科学アカデミー(NARAS)を代表して、ピーター・セラーズが栄えあるグラミー賞を手にトゥイッケナムを訪れたのだ。セラーズはグラミーを「グランマ(おばあちゃん)」賞ともじっていた。"A HARD DAY'S NIGHT"でビートルズは1964年度のボーカル・グループ部門のベスト・パフォーマンス賞に輝いたのだ。そこでこの受賞の瞬間を非常におかしく仕立てた映像が撮影された。このなかでジョンはでたらめなフランス語をやたらと話し、やがてジョンが「イザ・ロングワ」と口にすると、ほかのメンバーも「タ・ティップ、ア・ラリ」と応じ、最後に全員でもう一度その言葉を続けて口にすると「イザーロングワーターティップーアーラリー＝イッツァ・ロング・ウェイ・トゥ・ティッパラリ」＝'It's A Long Way To Tipperary'という曲(第1次大戦時に歌われた有名な行軍歌)のタイトルになった。そこで全員でこの曲の一節を歌った。

この映像は、1965年5月18日午後8時30分から9時30分ESTに、アメリカNBCテレビのグラミー賞特別番組「ザ・ベスト・オン・レコード」のなかで、映画"A HARD DAY'S NIGHT"からの'I'm Happy Just To Dance With You'のクリップの前に放送。

4月29日(木)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

ナイトクラブのトイレで、リンゴの指から指輪を取り戻そうともくろむクラングの暴漢たちのしわざにより、熱風ハンド・ドライヤーが送風せず逆に猛烈に空気を吸い込んでしまうというシーンを撮影。このシーンは4月8日に撮影されていたが、明らかにやり直しが必要だった。

また、リンゴがビートルズのレコーディング・スタジオ(4月[illegible]日参照)の階下にある倉庫のテーブルで押さえつけられ、指輪を取ろうとクラングが電気のこぎりのスイッチを入れ、リンゴの指を切り落とそうとするシーンも撮影。このあとリンゴはアーメに助けられ、廊下から逃亡する。

この日、ラジオ・ルクセンブルクの日曜夜の番組「ザ・ビートルズ」(1964年12月24日参照)の司会クリス・デニングがスタジオを訪れた。ジョン、ポール、ジョージの3人は一緒に、リンゴは(撮影中だったため)ひとりで別に番組用のインタビューを収録した。ただ、インタビューは大した内容ではない。ビートルズの受け答えは、この番組に関わってしまったことを後悔しているかのように、落ち着きがなくてよそよそしかった。この手の番組は、1965年ではなく1963年に制作されるべきだったのだ。

また、オーストラリア・ツアーでリンゴの代役を務めたジミー・ニコルがこの日、破産宣言。

4月30日(金)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

アスプレイズの宝石商(ピーター・コプリー)がリンゴの指輪を鑑定したあと、これをはずそうとするシーンを撮影。また、リンゴの指から指輪を奪うための作戦第1も撮影した。リンゴとジョンが乗っていたエレベーターが突然磁石となり、あらゆる金属製品が壁や天井に吸いつけられてしまう(が、リンゴの指輪は吸いつけられない)。

しかし、この日の大半は作戦第5の撮影に費やされた。フィルム・スタジオ内に再現されたEMIスタジオで'You're Going To Lose That Girl'をレコーディングしていると、ぼんやりしているリンゴのドラム・セットの周囲の床が、知らないうちに下から切られていき、やがてリンゴは床とともに、(前日撮影した)階下の倉庫に落ちてしまう。

5月3日(月)～5日(水)

ナイトン・ダウン
Larkhill, Wiltshire

3日間にわたり、風の強い寒々としたソールズベリー平原で撮影が行なわれた。ビートルズは前日の夜11時20分に現地のホテル、アムスベリーのアントロバス・アームズに到着

CamScannerでスキャン

し、6日の午後まで滞在する。このロケ地ではかなりのシーンが撮影された。(ソールズベリー平原で演習を行なっていた)実物の陸軍第3師団の砲兵、機関砲兵、屋外で騎馬砲兵隊までが出動して見守るなか'I Need You'を演奏するシーンなどである。

5月7日(金)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

トゥイッケナム・スタジオに戻り、"HELP!"に登場するポールのおもなソロ・シーンを撮影する。体が小さくなる薬を間違って注射されたポールは、巨大化した日常の必需品に囲まれて、刺激的な冒険を楽しむというもの。

5月9日(日)
ロンドンおよびセント・マーガレッツのロケ地
London and St Margaret's

ロンドン周辺での撮影は、騒ぎも面倒も少なくてすむ日曜がいちばん都合がよかった。最初のロケ地は、ニュー・ボンド・ストリート。ビートルズは、ウォッチズ・オブ・スイッツランド時計店を通りすぎ、道路を渡ってちょうど真向かいにあるアスプレイズの宝石店に駆け込む(店内のシーンは4月30日にトゥイッケナムで撮影済)。

次に、マンチェスター・スクエア20番地のEMIレコード本社に近いブランドフォード・ストリートのドルフィン・レストランで、ラジャハマ・インド料理レストランの屋外シーンを撮影(店内のシーンは5月5日と6日にスタジオで撮影済み)。

続いて、ジョンとリンゴはセント・マーガレッツ地区で撮影。ここはトゥイッケナム・スタジオがある地区であり、映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影で使ったパブ、タークス・ヘッドにも近いところだったのでわりとなじみのある場所だ。ふたりはサウス・ウエスタン・ロードを歩き、リンゴがポストに手紙を投函するシーン(4月20日の撮影シーンに続く)を撮影した。そのあと、リンゴだけが作戦第3のシーンを撮影。公衆体重計の上で、体重がプリントアウトされるのを待っているあいだに手首を切り落とされそうになるというシーンだ。これはウィンチェスター・ロードの雑貨店の前で撮影された。

撮影終了後、ロイヤル・アルバート・ホールで行なわれたボブ・ディランのコンサートを観に行く。

5月10日(月)
クリーブドン・ハウス
Cliveden, Maidenhead, Berkshire
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

"HELP!"には、(5月12日に撮影される)バッキンガム宮殿の外観も登場するが、もちろんビートルズが宮殿内で撮影することは許可されなかった。そこでビートルズは、1850年から51年にかけて樹木の多いバークシアのテムズ川沿いに建てられた豪奢なクリーブドン・ハウスで撮影を行なう。現在この建物はナショナル・トラスト(イギリスの名勝史跡保護団体)によって所有管理されている。

ビートルズはここで2日間にわたって、建物の東側の窓から外を眺めるシーン、フランスふうのダイニング・ルームでトランプに興じるシーン、映画の「休憩時間」用の短いが魅力的なクリーブドンの広大な敷地内にあるブルーベル・ウッドでのシーンなどといった場面を撮影した。

夕方、ビートルズはEMIでのレコーディング・セッションのためにロンドンに戻る。この日は特別にアメリカの市場向けに、ジョンの強い要望に応えて、大好きなアメリカ人ロッカー、ラリー・ウィリアムズの'Dizzy Miss Lizzy'と'Bad Boy'の2曲を録音。午後8時から11時30分までにレコーディングを完了し、午後11時30分から午前1時15分までかかってモノおよびステレオ・ミックスを仕上げた。ジョージ・マーティンによって翌日ハリウッドに送られたこのテープは、5週間後にはキャピトルが編集したアルバム"BEATLES VI"に収録され、店頭に並ぶ。このような、有名になる前によくとりあげていた曲はすっかり演奏させてもらえなくなっていたため、ビートルズはこの2曲をスタジオでライブ演奏し、オーバーダビングは最小限にとどめた。'Dizzy Miss Lizzy'は4トラックのうち3トラックのみを使用して、7テイクで完成させた。'Bad Boy'は4テイクで完成。

この2曲は当初、音楽誌の口調を借りれば、この年の後半に発売されるイギリス盤EPに収録されるのがせいぜいだ、という見通しだった。実際には、'Dizzy Miss Lizzy'はアルバム"HELP!"に収められる。しかし'Bad Boy'は1966年の編集アルバム"A COLLECTION OF BEATLES OLDIES"に収録されるまで、イギリスでは発売されない。

CamScannerでスキャン

映画 "HELP!" の撮影終了

5月11日(火)

クリーブドン・ハウス
Cliveden, Maidenhead

クリーブドンでの最後の撮影は、実質的にはビートルズ2作目の映画の最後の撮影でもあった。実際には、翌5月12日も製作スタッフはロンドンの各ロケ地で撮影を行ない、それが最後となったが、ビートルズの出番は11日で終了した。2日間にわたったクリーブドンでの撮影中に、ビートルズは美しい庭園のまわりでリレー競争をしないかともちかけられている。"HELP!" の撮影スタッフはこの様子を家庭用8ミリ映画で撮影したが、そのフィルムは今も現存している。ビートルズは、電気技師、道具係とカメラ・クルー各6人ずつの3チームと対戦。ビートルズのチームには、ニール・アスピノールと運転手のアルフ・ビックネルが加わった（驚いたことに、優勝したのは絶対に運動音痴だと予想されていたビートルズ・チーム）。

5月18日(火)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

映画 "HELP!" の撮影は終わったものの、まだ音声の吹き込み作業がかなり残っていた。ビートルズは、ふつうの会話から、意味のないつぶやき、「ホホー」といった何ともなしに発する声までアフレコしなければならなかった。（5月9日に撮影した）ジョンとリンゴが郵便ポストまで歩いてくるシーンの会話を録音するにあたって、ふたりはジョンの著書『イン・ヒズ・オウン・ライト』のなかの 'I Sat Belonely' のくだりを吹き込んでいる。

5月25日(火)

カンヌ
France

この日ジョンは、アメリカのテレビ・レポーター、マーティン・アグロンスキーによる短いインタビューに応じる。このときのもようは1週間後の6月1日、CBSテレビの番組『マーブ・グリフィン・ショー』のなかで紹介される（EST午後11時から午前12時30分）。このインタビューが収録されたのは、カンヌの海辺に近い場所だった。ジョンは妻のシンシアと一緒にカンヌ映画祭を観るため、おしのびでフランスに行っていたのだ。この日は短い滞在の最後の日で、ふたりは午後イギリスに帰国した。

BBCラジオの番組に最後の出演

5月26日(水)

BBCピカデリー・スタジオ、第1スタジオ
London

BBC初出演から3年余り過ぎて、ビートルズはBBCラジオ
のためだけに演奏を収録することを望んだり、必要を感じ
たりすることはなくなってしまっていた。そして、この日の52
回めの音楽番組収録はその最後の出演となった。この日
収録したのは、タイトルも新しくした休日のビートルズ・スペ
シャル、「ザ・ビートルズ（インバイト・ユー・トゥ・テイク・ア・チ
ケット・トゥ・ライド）」である。6月7日のウィット・マンデイ（聖
霊降臨祭）の休日に、いつもより15分長い午前10時から12
時15分に放送される。1963年春以来のグループの発展
を考えると、「フロム・アス・トゥ・ユー」というタイトルはもう似
つかわしくなかったため、ビートルズのほうからタイトル変更
を申し出てつけられた新タイトルだった。しかし、ビートルズ
が提案したあまりにも安直なこのタイトルは、もうメンバーが
こうした番組出演に対してさしたる重要性を感じていなか
ったことをよく表している。

リハーサルを含めて午後2時30分から6時までに収録され、ビートルズは、'Ticket To Ride' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'I'm A Loser' 'The Night Before' 'Honey Don't' 'Dizzy Miss Lizzy' 'She's A Woman' の7曲を演奏した（'Ticket To Ride' は番組中2回流す。1回目はオープニングで37秒間流してフェイド・アウト。2回目は番組のエンディングに使い、これは曲の最後まで放送）。番組中ビートルズは、ミュージシャンでもある司会者デニー・ピアシーとふざけてひょうきんな会話を繰り広げた。しかし、BBCがその後行なった調査では、リスナーの多くがビートルズの番組であるのにビートルズの出番があまりにも少なかったと感じていたことがわかった（2時間15分の番組にはいつものように多数のゲストが出演していた）。

エプスタインは1965年3月12日に行なわれたBBCとのミーティングの席上で、年内にまた休日スペシャルの収録を行なうこと、8月30日と12月26日放送分は必ず収録することを

CamScannerでスキャン

発表した。BBCラジオでこのことが予告されてしまったにもかかわらず、結局エプスタインはこの約束を守れなかった。ただし、8月30日には、ビートルズ特別番組が放送されている(8月15日参照)。

6月8日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から10時30分まで、アビイ・ロードではノーマン・スミスにより'I Want To Hold Your Hand'の新しいステレオ・ミックスが作られた。このテープはオーストラリアとオランダのEMI支社が編集したビートルズ・アルバムに収録された。

MBE受勲決定が報道される

6月12日(土)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

6月11日の夜、女王誕生日の叙勲者リストの内容が解禁になったため、ビートルズがMBE(大英帝国勲位)を受勲するというニュースがこの日の新聞各紙朝刊のトップ記事を飾った。トゥイッケナム・フィルム・スタジオで、映画"HELP!"のラフ・カットを初めて観ていたビートルズのもとに、世界じゅうの新聞、ラジオ、テレビの報道陣が押しかけ、急遽記者会見が開かれた。このときのインタビューのもようはこの日の夕方から夜にかけて世界中のニュース番組で紹介された。

そのひとつであるジョージ・イエイトマンが取材したインタビューは、映画や演奏シーンとともに編集され、6月30日にニューヨークの教育チャンネルWNDT(チャンネル13)の番組「ブリティッシュ・カレンダー:ニュース」で放送される(EST午後8時15分から8時30分)。

解禁になった11日の夜には、ポールはBBCの放送記者ロナルド・バーンズから電話インタビューを受け、1分40秒にわたったその内容は「レイト・ナイト・エクストラ」(午後10時35分から11時30分)で放送された。またこの番組では、ピーター・ヘイによるブライアン・エプスタインへの電話インタビューも紹介された。ポールは前日ジェーン・アッシャーと休暇から帰国したばかり。結婚の噂を否定した。

またこの日、ビートルズ叙勲のニュースを見て、前イギリス空軍中隊少佐ポール・ピアスンが抗議のため勲章を返還。

音楽性の広さを証明するレコーディング

6月14日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

まったく趣の異なる3曲をレコーディングし、作曲者そしてシンガーとしてのポールの卓越した才能が十二分に発揮された1日。また、今もこれから先も、ポールの最高の曲のひとつだと言われ続けるであろう'Yesterday'のレコーディングが始まったのもこの日だった。

しかも、'Yesterday'はレコーディングに弦楽四重奏を初めて導入し(6月17日)、これ以降のビートルズのまったく新しいレコーディング期の幕を開けるきっかけとなったという意味でも画期的な曲となった。以後、活動が終わるまで、ビートルズはごくふつうにストリングスやオーケストラを使いこなすようになる。とくにこの曲の弦楽パートの作り方は、ポールの意見を参考にしながらジョージ・マーティンがスコ

アを用意し、さらにあちこちにポールが手を加えるという、マーティンとビートルズの仕事のやり方として典型的なものだった。

午後7時から10時30分までのセッションで、ポールはひとりでアコースティック・ギターとボーカルによる 'Yesterday' を2テイク録音。ひとまずレコーディングを済ませたこの4トラック・テープには、さらに17日に手を加えることになる(当時のタブロイド紙は、ポールひとりだけでレコーディングし、ほかの3人はスタジオにさえいなかったと大げさに騒ぎたてた。しかし、"ANTHOLOGY 2" を聴くと、ジョンとリンゴはわからないが、少なくともジョージは明らかにスタジオにいたことがわかる)。

さらに驚きなのは、ポールが喉もはりさけんばかりに歌うスタイルで、ソウルっぽいロックンロール 'I'm Down' をレコーディングしたすぐあとで、このメロディアスなバラード 'Yesterday' を歌いあげていることだ。'I'm Down' はこの日の午後2時30分から5時30分までの最初のセッション中に7テイク録音された。この時間帯のセッションでは、まず最初にポールのフォーク・ロック調の 'I've Just Seen A Face' を6テイク録音していた。

6月15日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム "HELP!" のB面を完成させるため6月半ばに3回行なわれたアビイ・ロードでのレコーディングの2回目。この日は、午後2時30分から6時15分までのセッションで、ジョンのアコースティック・バラード 'It's Only Love' を6テイク録音して完成させる。

ジョンの2冊目の本

6月16日(水)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham
NEMSエンタープライズ
Sutherland House, Argyll St, London

トゥイッケナム・スタジオで、映画 "HELP!" のアフレコをさらに重ねる(5月18日も参照)。この作業をもって、ビートルズ2作目の主演映画のための4人の作業はすべて終了。1作目と同様に、"HELP!" もピカデリー・サーカスにあるロンドン・パビリオン・シネマにて1965年7月29日にロイヤル・ワールド・プレミア・ショーが行なわれる。予告編は1本目と違って特別に作ることはせず、映画の抜粋フィルムを編集して作られた。ただし、予告編には映画には使われなかった部分も含まれている。バハマでジョージが身を隠す透明なプラスチック・ルーフの車を、地元民たちがいっせいに叩くというシーンである。

詩と散文を集めたジョンの2冊目の著書「ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス」が6月24日に発売されることが決まり、ジョンは再び本のプロモーション活動にも乗り出した。この日の午後8時から8時30分まで、ジョンはロンドンのNEMSのオフィスでウィルフレッド・ディアスからインタビューを受ける。この取材のもようは7月3日午後10時10分から10時40分に、BBCのどちらかと言えばお堅い番組「ザ・ワールド・オブ・ブックス」で放送される。

しかし、非常に興味深い内容のインタビューで、インタビューは異例の15分という長さにおよび、実際の放送分はジョンの 'The Fat Budgie' の朗読を含んで12分以上あった。また、7月5日午後10時35分から11時15分にかけて放送されるディアス制作の番組「ザ・ティーン・シーン」では、このインタビューの5分余りの抜粋を放送し、7月10日午後3時15分から4時の「ピック・オブ・ザ・ウイーク」でも3分30秒の抜粋を放送する。さらに、BBC転送サービスは、このインタビューを「ジョン・レノン—ブックビートル」と題したレコードにして海外の契約放送局に送った。

この日の夜、ジョンはさらにBBCのティム・マシューズによるインタビューも収録、'The National Health Cow' から2行朗読した。このときの収録分はニュース番組「トゥデイ」の6月21日午前7時15分から7時45分までの、その日の第1回放送分と午前8時15分から8時40分までの第2回放送分で、いずれもトップの話題として紹介される。

'Yesterday' に弦楽四重奏を入れる

6月17日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時から4時までのセッションで、6月14日にレコーディングした 'Yesterday' のテイク2にポールの追加ボーカルと、弦楽をオーバーダビングして完成させた。参加した弦楽器奏者は、トニー・ギルバート(第1バイオリン)、シドニー・

CamScannerでスキャン

ャックス(第2バイオリン)、フランシスコ・ガバーロ(チェロ)、ケネス・エセックス(ビオラ)である。驚くほどシンプルな曲として完成したこの作品はこの日、モノ・ミックスされた。
2月18日に録音した'If You've Got Trouble'がボツになったということは、まもなく完成するアルバム"HELP!"用にどうしてもリンゴのボーカル曲を早急に決めなければならないことを意味していた。そこで、カントリー・アンド・ウエスタン・ファンのリンゴは、バック・オーウェンスの'Act Naturally'のカバーを希望した。この曲は午後4時から5時30分までのセッションで、ジョージのアコースティック・ギターが印象的なリズム・トラックを13テイク録音。テイク13にリンゴのリード・ボーカルとポールのハーモニーをオーバーダビングした。
午後7時から9時30分までの(予定より30分早く終わった)セッションでは、レノン=マッカートニーの新曲'Wait'をレコーディングした。ギター、ドラム、ベース、ジョンとポールのふたりによるリード・ボーカルを4テイク録音。しかしこのテープは、1965年11月11日、アルバム"RUBBER SOUL"に急遽もう1曲必要となり、このテープにさらに磨きをかけてアルバムに収録するまで、テープ・ライブラリーで眠ることになる。

6月18日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London
NEMSエンタープライズ
London
ライム・グローブ・スタジオ
London

EMIスタジオでは、午前10時から午後12時30分までに、'I've Just Seen A Face' 'I'm Down' 'It's Only Love' 'Act Naturally' 'Wait' 'Help!'のモノ・ミックスが作られた。さらに午後12時30分から1時30分までに、'I've Just Seen A Face' 'I'm Down' 'Yesterday' 'It's Only Love' 'Act Naturally'のステレオ・ミックスが作られた。'Help!'のミックスは出来があまりよくなかったため、午後2時30分から3時30分までは'Help!'1曲だけのミキシング・セッションが行なわれた。その結果、この曲のモノ・ミックスとステレオ・ミックスは違うテイクから作られたように聞こえるように仕上がった。しかし実際には、(シングルとモノラル・アルバムに収録されている)モノ・バージョンも、(ステレオ・アルバムの)ステレオ・バージョンも、同じテイク12から作られている。ジョンのリード・ボーカルが違って聞こえるのは、ジョージ・マーティンとノーマン・スミスによるたくみな編集のせいである。
数日後に初めてイタリアを訪れることになっていたビートルズは、BBCヨーロッパ放送管轄内のイタリア語放送のために15分間のインタビューに応じることにした。取材はこの日の午後3時30分からNEMSのオフィスで行なわれた。この内容はビートルズがイタリアに到着する前日の6月23日に、ロンドンのBBC本部から番組「ロンドラ・ウルティマ・オーラ」でイタリア向けに放送される(イギリス時間で午後11時から11時30分まで)。
イタリア語サービスのインタビューのあと、ジョンはロンドンを横断して今度はBBCテレビのライム・グローブ・スタジオに向かい、リハーサルに続いてBBC1のテレビ番組「トゥナイト」(午後7時から7時35分)の最終回に生出演した。ケネス・アルソップからインタビューを受けて、ジョンは著書「ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス」を宣伝し、本のなかの2章'We Must Not Forget The General Erection'と'The Wumberlog (Or The Magic Dog)'から抜粋して朗読した。

14日間のヨーロッパ・ツアー始まる 唯一アンコールに応えたパリ公演

6月20日(日)

パレ・ド・スポール
Place de la Portes de Versailles, Paris, France

短いヨーロッパ・ツアーの開幕。初日はパリのパレ・ド・スポールで午後3時と9時からの2回公演を行なった。各公演に集まった6,000人の客とビートルズの関係は、1964年1月の公演に比べると、かなり血の通ったあたたかいものになっていた。
14日間にわたるヨーロッパ・ツアーでのビートルズのレパートリーは、'Twist And Shout'(ショート・バージョン)、'She's A Woman' 'I'm A Loser' 'Can't Buy Me Love' 'Baby's In Black' 'I Wanna Be Your Man' 'A Hard Day's Night' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Rock And Roll Music' 'I Feel Fine' 'Ticket To Ride' 'Long Tall Sally'

CamScannerでスキャン

だった。

昼の公演はフランスのラジオ局ヨーロッパ1によって収録され、6月27日午後1時から2時放送の番組「ミュジコラマ」で放送される。同じくヨーロッパ1局から、夜の公演が「レ・ビートルズ(アン・ディレク・デュ・パレ・ド・スポール)」と題して、午後9時から11時にかけて生中継された。

また、フランスのテレビ局チャンネル2もこの夜の公演を収録し、10月31日午後7時30分から8時にかけて、「レ・ビートルズ」とじつにシンプルに題された番組で放送する。テレビではステージで演奏した12曲のうち11曲が観られるが、曲順は変えられる。放送される曲目と曲順は、'Twist And Shout' 'She's A Woman' 'Ticket To Ride' 'Can't Buy Me Love' 'I'm A Loser' 'I Wanna Be Your Man' 'A Hard Day's Night' 'Baby's In Black' 'Rock And Roll Music' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Long Tall Sally'となる。最後の'Long Tall Sally'は、ビートルズのコンサートではめずらしくアンコール曲として演奏されたもの。'I Feel Fine'も収録されていたが、放送ではカットされる。

ビートルズは、6月20日午前9時55分にパリのオルリー空港に到着し、22日午後1時15分にリヨンに向けて出発するまでパリに滞在した。パリでは前に来たときと同じホテル、ジョルジュ・サンクを宿にしていたが、ここでは、クリス・デニングによるラジオ・ルクセンブルクの番組「ザ・ビートルズ」用の最後のインタビューを収録した。前年の12月に放送した回のように、デニングがメンバーにそれぞれ誰かに曲を捧げてもらおうとすると、ジョンはすかさず(労働党党首で当時の首相)ハロルド・ウィルソンにと言い、ポールは評論家のバーナード・レビン、ドナルド・ゼック、ウルフ・マンコービッツと自分の家族に、リンゴはポップ・ジャーナリストのドン・ショート、ジュディス・サイモンズ、ファン・クラブのスタッフのフリーダ・ケリー、そしてリバプールのすべての湾岸労働者に、ジョージは「それなら」とスカンソープのすべての坑夫たちに、それぞれ曲を捧げるというありさまだった。ニール・アスピノールも誰かに曲を捧げるようにと言われ、ビートルズのメンバーはマル・エバンズがいいんじゃないかと言った。

6月22日(火)

パレ・ディベール・ド・リヨン

Rue Louis Guerin, Villeurbanne, Lyon, France

午後8時からと10時からの2回の公演には、それぞれ3,500人の観客が入った。23日の夕方、ビートルズは列車でミラノへ移動する。

イタリア3都市で公演

6月24日(木)

ベロドローモ・ビゴレッリ

Via Arona, Milan, Italy

ビートルズ唯一のイタリア公演は3都市で行なわれ、その最初を飾ったミラノ公演は、ベロドローモ・ビゴレッリという客席数2万2,000の野外劇場で、午後4時30分からと9時30分からの2回のショーが行なわれた。各回とも満席にはならなかったが、夕方の公演には7,000人、夜の公演には2万人の観客が集まった。2回とも会場には700人の警官、400人の警備員、30人の消防士が出動し、ビートルマニアの騒動に待機していた。

この日の公演は、イタリアのラジオ局によって収録されたかもしれないが、詳細は不明。

6月25日(金)

パラッツォ・デロ・スポルト

Piazza Kennedy, Genoa, Italy

客席数2万5,000のアリーナで、午後4時30分からと夜9時30分からの2回の公演を行なった。午後の公演には5,000人の観客しか集まらなかった。

ビートルズはこの日の朝ミラノから陸路でジェノバに到着したが、2回目の公演が終わるとすぐにチャーター機でローマに向かった。

6月27日(日)～28日(月)

テアトロ・アドリアーノ

Piazza Cavour, Rome, Italy

ローマでは、この両日午後4時30分からと9時30分からの2回ずつ、計4回の公演を行なう。当初は日曜日の公演だけ予定されていたが、あとから月曜の公演が追加された。しかし、4回の公演とも客席のほぼ半分はあいていたことを考えると、なぜ追加したのか首をひねらざるをえない。6月29日の午前11時35分、ビートルズはニースに向けて出発した。そして、ブライアン・エプスタインが何も告げず、この日から5日間行方をくらます。

CamScannerでスキャン

再びフランス公演

6月30日(水)

パレ・デ・ゼクスポジシヨン
Esplanade Marechal de Lattre de Tassigny, Nice, France

午後9時からの1回だけの公演。7月1日の午後3時45分、ビートルズはマドリードへ飛んだ。

スペインの2都市でヨーロッパ・ツアー終了

7月2日(金)

プラザ・デ・トロス・デ・ラス・ベンタス
Plaza Las Ventas, Madrid, Spain

闘牛場で午後8時30分からの1回の公演。翌日の午後2時45分、ビートルズはバルセロナに向かう。

7月3日(土)

プラザ・デ・トロス・モニュメンタル
Avenue de les Corts Catalanes, Barcelona, Spain

ヨーロッパ・ツアーの最終公演。また闘牛場が会場になり、午後10時45分開演だった。7月4日、ビートルズはイベリア航空でバルセロナを出発、2時間後の正午にロンドン空港に到着する。

授賞式も小さな出来事

7月13日(火)

サボイ・ホテル
The Strand, London

昼食時にポールはひとりでロンドンのサボイ・ホテルに出かけ、ビートルズを代表してビリー・バトリン卿からアイバー・ノベロ賞の5部門を受賞する。しかし、この授賞式のことをすっかり忘れていたポールは遅刻し、出席するはずだったジョンにいたっては顔も出さなかった。ポールの受賞と受賞スピーチを含む昼食会のもようはレディフュージョン・テレビによって収録され、7月15日午後10時33分から11時5分の番組『ビック・オブ・ザ・ソングス』で放送される。番組では「レディ・ステディ・ゴー!」で収録したクリップを使って受賞者たちの演奏も紹介され、ビートルズの分は1964年3月20日に収録(疑似演奏)した'Can't Buy Me Love'が使われる。

7月30日(金)

サビル・シアター
Shaftesbury Avenue, London

8月1日に、1年以上も遠ざかっていた生放送のテレビ番組に出演することになったビートルズは、この日サビル・シアターでリハーサルを行なった。ここは1965年4月1日からブライアン・エプスタインが他界するまで、NEMSエンタープライズが管理してさまざまな興業に貸していた劇場だった。リハーサルのあいまに、ビートルズは前日7月29日の夜に公開された映画"HELP!"についておもに語ったBBCラジオのインタビューを2件受け、最初の取材はディブス・マザー(1963年12月10日と1964年3月24日参照)によるもので、長くてウイットに富んだインタビューになった。しかし、非常に不可解なことに、BBCはこのテープをBBC転写サービスを通じて、海外でのイギリス文化の普及を推進する団体、ブリティッシュ・カウンシル(英国文化振興会)の情報サービス部門(BIS)に提供している。レコードと合わせて編集され「ザ・ビートルズ」と題されたこのテープは、ニューヨークのブリティッシュ・カウンシルから、指定されたアメリカのラジオ局に放送用テープとして渡されている。次の取材は、イギリスのエンターテイナーで音楽俳優のランス・パーシバルによるインタビュー。翌日の正午から12時29分までの彼の音楽番組「ランス・ア・ゴーゴー」で、インタビューの抜粋が2分間放送される(1967年、パーシバルはアニメ映画"YELLOW SUBMARINE"のプロデューサーに声優として採用される)。

ひさびさの生番組で、ポールがソロ演奏

8月1日(日)

ABCシアター
Blackpool

映画"HELP!"のプロモーションのための唯一のテレビ出演として、ABCテレビのバラエティ・ショー「ブラックプール・ナイト・アウト」に生出演。これ以外の番組は、すべて映画の抜粋フィルムを使用して間に合わせなければならなかった(4月22日参照)。この番組は、この日の午後9時10分から10時5分まで、ITV系列の1局だけを除き、ABCシアター

CamScannerでスキャン

から生中継で全国ネットワークされた。いつものように番組の司会はマイクとバーニーのウィンター兄弟、ゲストはビートルズを筆頭に、テディ・ジョンソン・アンド・パール・カー、ジョニー・ハート、ライオネル・ブレアが出演。出演者は全員、午後いっぱいかけてリハーサルをした。

ビートルズは、'I Feel Fine' 'I'm Down' 'Act Naturally' 'Ticket To Ride' 'Yesterday'（ポールのソロ演奏で、ほかの3人はステージから離れる。曲が終わると、ジョンが「ありがとうリンゴ、すばらしかった」と言いながら、3人ともステージに戻る）、そして最後に'Help!'を演奏。今回、ビートルズはコントには参加しなかった。

8月9日（月）

IBCスタジオ（ロンドン）
London

ジョンがザ・シルキーの'You've Got To Hide Your Love Away'をIBCスタジオでプロデュース。ポールがギターを弾き、ジョージがタンバリンを担当。

2回目のアメリカ・ツアー 1年半ぶりの『エド・サリバン・ショー』

8月14日（土）

スタジオ50（ニューヨーク・シティ）
New York City, USA

いよいよビートルズ3度目の北米訪問、そして2回目の本格的なアメリカ・ツアーがスタート。8月13日の正午、しんみりというより激しい別れのあいさつを1,000人ものファンに送られ、ビートルズはロンドン空港から飛び、現地時間の午後2時30分にニューヨークに到着した。マンハッタンのウォーリック・ホテルに泊まり、17日の朝までここに滞在する。

恒例の記者会見を済ませてからとりかかった最初の仕事は『エド・サリバン・ショー』の収録だった。1964年の8月から9月にかけてのアメリカ・ツアーではテレビの仕事はいっさいしなかったため、日曜夜の高視聴率バラエティ番組『エド・サリバン・ショー』に出演するのは1964年2月の3度の出演以来、1年半ぶりだった。

この日の午前中に、ビートルズは輝かしい『エド・サリバン・ショー』のデビューを飾ったその現場、ブロードウェイ西53番街にあるCBSテレビのスタジオ50に再び足を踏み入れた。午前11時から午後2時までのリハーサルのあと、午後2時30分から700人の観客の前でドレス・リハーサル（ゲネプロ）を行ない、午後8時30分からやはり観客の前で本番収録を行なった。曲目は（2週間前の「ブラックプール・ナイト・アウト」とまったく同じで）、'I Feel Fine' 'I'm Down' 'Act Naturally' 'Ticket To Ride'（メンバーそれぞれのプロフィールを画面で紹介するため長いイントロがついた）、'Yesterday'（3台のバイオリンによる収録テープをバックにポールがソロで歌う。終わるとジョンが「ありがとうポール、まるでポールみたいだったよ」と言って戻る）、そして最後が'Help!'だった。'Act Naturaly'のあと収録に休憩が入り、最後の3曲はセットを変えて演奏した。収録分は、9月12日の午後8時から9時EST、秋シーズン最初の『エド・サリバン・ショー』のメインとして放送される。ほかのゲストは、シラ・ブラック（この日ビートルズと一緒に収録した）をはじめ、スーピー・セイルズ、アレン・アンド・ロッシ、それと奇術師ファンタジオだった。

歴史的なコンサート、シェア・スタジアム公演

8月15日（日）

ウィリアム・A・シェア・ミュニシパル・スタジアム［シェア（シェイ）・スタジアム］
126th St and Roosevelt Ave, Queens, New York City, USA

野球チームのニューヨーク・メッツの本拠地シェア・スタジアムで、ビートルズ初の、そして記念すべきコンサートとなった。5万5,600人の観客が集まったこの公演では、観客動員数でも総収益でもポップ・コンサートの世界記録を樹立した。チケット総売上30万4,000ドルのうちのビートルズの分け前も当時最高の16万ドルにおよんだ。

シェア・スタジアムに直接ヘリコプターで着陸するという壮大な筋書きはニューヨーク市当局から拒否されたため、ビートルズはウォーリック・ホテルからリムジンで川沿いのヘリポートに向かい、そこからニューヨーク・シティの上空を飛んでワールド・フェア・ビルの屋上に着陸。スタジアムまでの最後の約90メートルほどはウェルズ・ファーゴの装甲トラックで移動した。最後に4人は球場のトンネルを走り抜け、午後9時16分、耳をつんざくような歓声が壁のようになって押し寄せるなか、2塁の上に設置されたステージに上がった。

CamScannerでスキャン

この公演を含むアメリカ・ツアー中のビートルズのレパートリーは、'Twist And Shout'(ショート・バージョン)、'She's A Woman' 'I Feel Fine' 'Dizzy Miss Lizzy' 'Ticket To Ride' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Can't Buy Me Love' 'Baby's In Black' 'Act Naturally'(公演によっては'I Wanna Be Your Man'に変更)、'A Hard Day's Night' 'Help!' そして'I'm Down'。ツアーの前座は出演順に挙げると、ブレンダ・ハロウェイ、キング・カーティス・バンド、キャニバル・アンド・ヘッドハンターズ、そしてサウンズ・インコーポレイテッドだった。このシェア・スタジアム公演では、特別にヤング・ラスカルズも出演した。

ヘリコプターや楽屋のシーンを含むこのコンサートのもようは、(エド・サリバンの会社である)サリバン・プロダクションズ、NEMSエンタープライズ、そして(ブライアン・エプスタイン、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴ——リチャード・スターキーが理事を務める)サバフィルムズの3社によって共同撮影され、1時間(コマーシャルなしで48分間)のカラーのテレビ用特別番組に編集される。この番組は1966年3月1日午後8時から8時50分にBBC1で世界初公開され、1966年8月27日午後6時15分から7時5分にもBBCで再放送されるが、2回とも白黒放送だった。アメリカではかなり遅れて、1967年1月10日の午後7時30分から8時30分(EST)にABC系全国ネットでカラー放送される。このほかにもBBCは2回このフィルムを抜粋して放送する。1回目は1966年2月28日午後11時から11時45分、BBC2のアート番組「レイト・ナイト・ラインナップ」で'Ticket To Ride'が1分50秒分放送され、そのあとに司会のデニス・トゥーイによるエプスタインへの10分間のインタビューが流れた。2回目は1969年12月31日午後10時35分から11時50分にかけて放送される1960年代のポップ・ミュージックを回顧するBBC1の特別番組「ポップ・ゴー・ザ・60's」で、アップル・コープスはこのフィルムから'I Feel Fine' 'Help!' 'Can't Buy Me Love'の7分にわたる映像の放送を許可する。

「ザ・ビートルズ・アット・シェア・スタジアム」は、この記録破りのコンサートの興奮だけでなく、まさに百聞は一見にしかずという当時のファンのものすごい熱狂ぶりをも伝える価値あるフィルムである。また、12台ものカメラを駆使し、ニューヨークを目指すヘリコプターから下を見おろそうと首をのばしたり、出番まで楽屋で時間をつぶすメンバーの様子など、ステージ以外の4人の表情をよくとらえている。

このフィルムは、予想に反してステージの最後の曲'I'm Down'の映像から始まる。それからヘリコプターのシーンとスタジアムでのステージの準備風景が紹介されると、ひとまず達の前座出演者の演奏が続く。ニューヨークのDJ、マレー・ザ・Kのおかしなしぐさやキング・カーティス・バンドの演奏に合わせて踊るダンサーたち、ブレンダ・ハロウェイ、サウンズ・インコーポレイテッドのテンションの高いステージ。最後に、エド・サリバンが登場し、ビートルズをステージに呼ぶのだ。

ただ、このフィルムにはシェア・スタジアムでのビートルズの演奏のすべてが収められているわけではなくて、'She's A Woman'と'Everybody's Trying To Be My Baby'はカットされる。そして、映像に収録された曲についてはのちにロンドンで音に手を加えることになる(1966年1月5日参照)。さらに、フィルムのところどころにアメリカのテレビ記者ラリー・ケインが録音したビートルズの話し声がダビングされる(録音日は不明)。

これはビートルズにとって初めての北米ツアーというわけではなかったのに、イギリスをはじめ世界中がこのツアーのなりゆきに高い関心を持って注目していた。そして、いきなり初日のシェア・スタジアムで史上最高の観客動員数を達成したことは、このツアーの意味をいっそう重要にした。そこでBBCはすぐにエプスタインにかけあって、エプスタインの仕事仲間でもあったBBCのレギュラー司会者、ブライアン・マシューを8月20日までツアーに同行させ、ビートルズへのインタビューや各地でのドキュメンタリーを収録し、それらの素材をすぐにでもBBCで放送できるように許可を得た(その一方でマシューは、BBCテレビの「トップ・オブ・ザ・ポップス」と同じタイトルだが内容はまったく違うBBCラジオの番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」をアメリカで売り込むという使命もあって、その目的のためだけに何度もアメリカのラジオに出演する)。

マシューがシェア・スタジアムの現場で収録した最初の現地報告は、翌朝(8月16日)のニュース番組「トゥデイ」(午前7時15分から7時45分および8時15分から8時40分まで)の2回の放送で流され、また同じ日の午後の番組「ラウンドアバウト'65」(午後5時31分から6時45分)でも放送される。8月21日に帰国したマシューは、さっそくその日の午前10時から正午までの(この日、代役でサイモン・ディーが司

会をしていた）「サタデイ・クラブ」に自分が持ち帰ってきたテープを流し、話もしたいと制作側に相談。午前11時25分から番組に出演し、海外同時放送が始まる11時30分直前に話を終える。番組の最後の30分は、（1965年5月1日付でジェネラル・オーバーシーズ・サービスから）ワールド・サービスと名称を変えていた海外放送部からやはり同時放送される。

しかし、マシューのテープの核心部分、とくに楽屋およびホテルの部屋で収録したビートルズへの独占インタビューは、「ザ・ビートルズ・アブロード」という45分間のドキュメンタリー番組として編集され、休日の8月30日に午前10時から10時45分にかけて放送される。ただし、番組中のビートルズの曲はライブ・コンサートやBBCセッションの演奏ではなくレコードの音だった。イギリス、ウェールズ、北アイルランド、チャネル諸島と休日制度が違っていたスコットランドのリスナーは、1966年1月3日（午前11時から11時45分）までこの休日スペシャルを聴くことができない。それだけなく、1963年から65年にかけて放送された休日のビートルズ・スペシャルはスコットランド国境以北では放送されなかったため、スコットランドのリスナーは毎回聴くことができなかった。

注：マシューは8月21日に帰国するが、BBC転送サービスのアメリカ人スタッフ、ジェイ・ピープルズがツアーの後半も引き続き取材を続け、ラジオ番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」や特別番組「ザ・ビートルズ・イン・ニューヨーク」用にレポートをまとめてはロンドンに送る。

コンサートが終わったあと、ワーウィク・ホテルでボブ・ディランと交流（翌日も）。

ミュージシャン仲間の訪問

8月17日（火）

メイプル・リーフ・ガーデンズ
Toronto, Canada

屋内会場で2回にわたって行なわれた27分間の公演には、各回とも1万8,000人の観客がつめかけた。ビートルズはこの日の午前中、ニューヨークからトロント入り。前日16日は1日中、ボブ・ディランやシュープリームスなど、ホテルの部屋にぞろぞろと訪れる客を相手するのに費やされた（ローリング・ストーンズのミック・ジャガーとキース・リチャードもシェア・スタジアム公演を観に来ていた）。また、アメリカのオフィシャル・ファン・クラブであるビートルズ・（USA）リミテッドの代表者たちにも会った。

8月18日（水）

アトランタ・スタジアム
Capitol Avenue South West, Atlanta, Georgia, USA

客席数5万5,000の新しい野球場での1回の公演、3万の客が入った。

8月19日（木）

サム・ヒューストン・コロシアム
Bagby Street, Houston, Texas, USA

客席数1万2,000の会場で2回公演を行なって、ビートルズは純利益8万5,000ドルを得た。午前2時にヒューストンに到着したビートルズを出迎えたビートルマニアの騒動はそらくそれまででも史上最大で最悪のもの（この2回の公演は地元のラジオ局によって放送されたようだが、詳細は不明）。

8月20日（金）

ホワイト・ソックス・パーク
35th and Shields, Chicago, Illinois, USA

シカゴで午後3時からと8時からの2回の公演。昼の回には2万5,000人、夜の回には3万7,000人の観客が入った。チケット総収益のうち、ビートルズの分け前は15万5,000ドル。

8月21日（土）

メトロポリタン・スタジアム
Cedar Ave, Bloomington, Minneapolis, Minnesota, USA

客席数4万5,000のスタジアムで1回公演。2万5,000人の観客が入った。

ジョージは地元の楽器店「Bシャープ・ミュージック」から、リッケンバッカーの12弦ギターをプレゼントされる。

8月22日（日）

メモリアル・コロシアム（ポートランド）
North Wheeler Ave, Portland, Oregon, USA

2回の公演に計2万人の観客が集まる。公演のあいまには、

ビートルズの楽屋にビーチ・ボーイズのカール・ウィルソンとマイク・ラブが訪れた。

エルビス・プレスリーとの会見

8月28日(土)

バルボー・スタジアム
Russ Boulevard, San Diego, California, USA

(ロサンゼルスに到着した)8月23日の午前中からこの日の公演前まで、ビートルズはハリウッドのベネディクト・キャニオンにある巨大な邸宅で、厳重な護衛のもと、純然たる休暇を楽しんだ。

8月27日の夜、ビートルズはビバリーヒルズのベルギア・ウェイまで車を走らせ、かつてあこがれだったエルビス・プレスリーに会った。プレスリーのマネージャーであるトム・パーカー大佐がアレンジしてくれたもので、ビートルズもエプスタインもとても楽しみにしていた。しかし、この会見は期待はずれに終わる。それでも、エルビスとビートルズは短いジャム・セッションをしている。以来、このときの音質の悪いテープがどこかに残っていると噂されてきたが、今も裏付けはまったくとれないので、残念ながら事実ではないとしか考えられない。

じつは、ポールだけは以前にもプレスリーと話をしたことがあった。1964年8月31日、アトランティック・シティのホテルからメンフィスに電話したときのことで、このとき、すでに魅力をすっかり失ったエルビスのパーソナリティにも触れていた。

再び録音されたハリウッド・ボウル

8月29日(日)～30日(月)

ハリウッド・ボウル
Los Angeles, USA

ハリウッド・ヒルズにある野外会場で、両日とも2回ずつの公演を行なう。15万6,000ドルにおよんだ総収益から、ビートルズは9万ドルを手にした。

前年に同会場で録音したビートルズのコンサート・テープは結局日の目を見ずに埃をかぶる一方だったが、それでも、キャピトルは再びレコード・リリース用に両日の公演を収録した。

しかし、日曜の収録は技術的な欠陥が発覚してボツになる。とくにポールのマイクの状態が悪く、最初の4曲ではポールの曲紹介もボーカルもまったく入っていない。月曜の録音は、やはりステージでの演奏よりも客の歓声のほうが圧倒的に勝っているとも言えるが、それでもうまくいったほうだった。このなかから、'Twist And Shout' 'She's A Woman' 'Dizzy Miss Lizzy' 'Ticket To Ride' 'Can't Buy Me Love' 'A Hard Day's Night'、そして 'Help!' が1977年発売の "THE BEATLES AT THE HOLLYWOOD BOWL" に収録される。'I Feel Fine' 'Everybody's Trying To Be My Baby' 'Baby's In Black' 'I Wanna Be Your Man' 'I'm Down' はレコードには収録されない。しかし、この1965年のテープは1977年まで待つことなく、じつはもっと早い時期にも利用されることになる(1966年1月5日参照)。

アメリカ・ツアーの最終公演 6週間の休暇へ

8月31日(火)

カウ・パレス
San Francisco, USA

1964年のツアーの最初の公演会場だったカウ・パレスで、1965年アメリカ・ツアー10日目、そして最後の2回の公演を行なう。昼の公演には1万1,700人、夜の公演には1万7,000人の観客が入った。ビートルズは9月1日の夜にアメリカを離れ、2日の朝にロンドン空港に到着。そのあと約6週間、いっさい仕事を入れずに休暇を楽しむ。

10月11日(月)

デッカ・スタジオ
Broadhurst Gardens, London

ポール、ロンドンのデッカ・スタジオで行なわれたマリアンヌ・フェイスフルの 'Yesterday' のレコーディングに参加。

6枚目のアルバム・レコーディング開始 シタールを導入

10月12日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

1963年と1964年にそれぞれ2枚ずつアルバムを発表していたビートルズは1965年にも同じようにもう1枚アルバム制作するように強いられた。しかし、問題は手持ちの新曲がほとんどないということだった。おまけにしめきりもせまって

いた。この状態から始めて12月初旬にニュー・アルバムを店頭に並べるには、まずジョンとポールとで12曲以上の新曲をひねり出し、ジョージとリンゴも加わった猛烈なレコーディング・セッションの嵐をこなさなければならなかった。そしてそのレコーディング・セッションは、この日、10月12日になってようやく始まったのだった。

皮肉なことに、大急ぎで完成したアルバム“RUBBER SOUL”は当時も現在も高い評価を受けているのだが、それはひとえにこの作品が内容的にそれだけの評価に値するものを誇っているからだ。ビートルズの作風とレコーディング・テクニックという観点からみれば、この作品はかなり高度な内容を誇るものであると同時に、ビートルズのキャリアにとって一大転機となる作品でもあった。この“RUBBER SOUL”が、ポップ・アルバムとも言える“HELP!”と実験的なアルバム“REVOLVER”をつなぐ、しっかりとした足場となったことは今ではもうよく知られている。

のちにジョンは、このアルバム用に急いで曲を書かなければならなかったので、ほかのレコードからアイデアを拝借してきたことを認めている。確かにこの日初めてレコーディングされた‘Run For Your Life’には‘Baby Let's Play House’（1955年のエルビス・プレスリーの曲）と同じ歌詞が2行見られる。ビートルズは午後2時30分から7時までのセッションで5テイク録音して、この曲を完成させた。

このあとビートルズは夕食もとらずに、続けて新曲にとりかかった。ジョンがかなりよくできたと自慢していた曲で、実際に自慢したくなるだけのことはあった。この段階では‘This Bird Has Flown’と名づけられていたこの曲は、9日後、録り直しの段階で‘Norwegian Wood (This Bird Has Flown)’と改題される。ふつう、録り直しというと当初のレコーディングに不備があったのだろうと思うが、‘This Bird Has Flown’のテープからはそうした印象は受けない。‘This Bird Has Flown’の仕上がりは作曲者であるジョンがイメージしていたものからはズレていたのかもしれない。実際に聴いてみると、アルバム収録バージョンとはかなり違った感触があるが、それに勝るとも劣らない魅力的な響きに満ちたすばらしいレコーディングである。

午後7時から11時30分までのセッションではこの曲を1テイク、それと多数のオーバーダビング用の音が録音された。ジョージのシタールでの演奏（ダブルトラックで）はポップ・レコードでは初めての試みだった。この日の1テイクは、録り直しをするまではとりあえずベスト・テイクだった（10月21日参照）。

深夜のレコーディング

10月13日（水）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日は、ビートルズが初めて深夜12時すぎまでレコーディングを続けた画期的なセッションとなった。1965年5月1日のセッションも12時すぎまで行なわれたが、そのときはミキシングだけで実際にレコーディングをしたわけではない。しかし、やがてビートルズのセッションは12時をすぎないほうがめずらしくなる。午前12時15分まで録音していたのは、“RUBBER SOUL”のオープニング曲となる‘Drive My Car’だった。午後7時からレコーディングを開始し、3時間かけて4テイクを録音。最終テイクがベストとなった。

11枚目のシングル

10月16日（土）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

1966年のインタビューで、ジョンとポールは、‘Day Tripper’はシングル曲の必要にせまられてむりやり書いた曲だったと認めている。この曲は次の両A面シングルに収録され、アルバム“RUBBER SOUL”と同時に12月3日に発売される。

午後2時30分から7時までこの曲のリズム・トラックのリハーサルとレコーディングを行ない、テイク3を最終テイクとした。午後7時から12時までのセッションでは、ジョンとポールによるリード・ボーカルとバック・ボーカルをオーバーダビングし、こうしてまたも数時間のうちにビートルズは歴史に残る1曲を完成させてしまった。

まもなく深夜になろうというころ、ビートルズはジョージの新曲‘If I Needed Someone’のベーシック・リズム・トラックを1テイク録音した。ボーカルとほかの楽器のオーバーダビングは翌日に持ち越しとなった。

10月18日（月）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から5時45分までの最初のセッションでは、ジョージの'If I Needed Someone'の録音がまず優先された。前日の夜に録音したテイク1のリズム・トラックに、ジョージのリード・ボーカル、ジョンとポールのバック・ボーカル、リンゴのタンバリンを重ねる。

残りの時間は、ジョンの自伝的な内容の'In My Life'のレコーディングに費やされた。テイク3がベストとなったが、間奏部分をどうするか決まらず、空白のまま持ち越しとなる。空白は、10月22日にイメージ豊かな間奏で埋められることになる。

10月20日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から6時30分までと、7時から11時45分までの2回のセッションで、次のシングルで'Day Tripper'とA面を分ける'We Can Work It Out'のレコーディングを開始し、(10月29日にわずかにオーバーダビングが加えられているが)実質的に完成させた。またしてもこの曲でレノン=マッカートニーは2分間ポップ・ソングにおける先[illegible]技を見せつけていて、この曲はすぐれたミュージシャンシップと新しい歌詞の方向性とが組み合わさった、1965年当時のビートルズの特色が如実に現れた典型になっている。

ベーシック・トラックはわずか2テイクで作業が終わり、その上にジョンの印象的なオルガン・パートを含め、無数のオーバーダビングが加えられた。

10月21日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から7時までのセッションで、'This Bird Has Flown'から改題した'Norwegian Wood (This Bird Has Flown)'を最初から最後まで3テイク録り直した。さらに、夕食もとらずに、ジョンの'Nowhere Man'の録音を開始。深夜までのセッションで2テイクを録音するが、未完成に終わり、翌日録り直す。

10月22日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

最初のセッションが午前10時30分から11時30分まで行なわれたが、おそらくビートルズのメンバーは参加していない。'In My Life'の空白の間奏にジョージ・マーティンがバロック調の美しいピアノ・ソロを挿入した。イメージしていた質感を音に表すために、マーティンは半分の速度で演奏し、それを倍速でプレイバックしたものをダビングしている。午後2時30分から11時30分まで続けたセッションにはもちろんビートルズもいて、'Nowhere Man'に取り組み、3テイク録音して完成させた。

10月24日(日)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

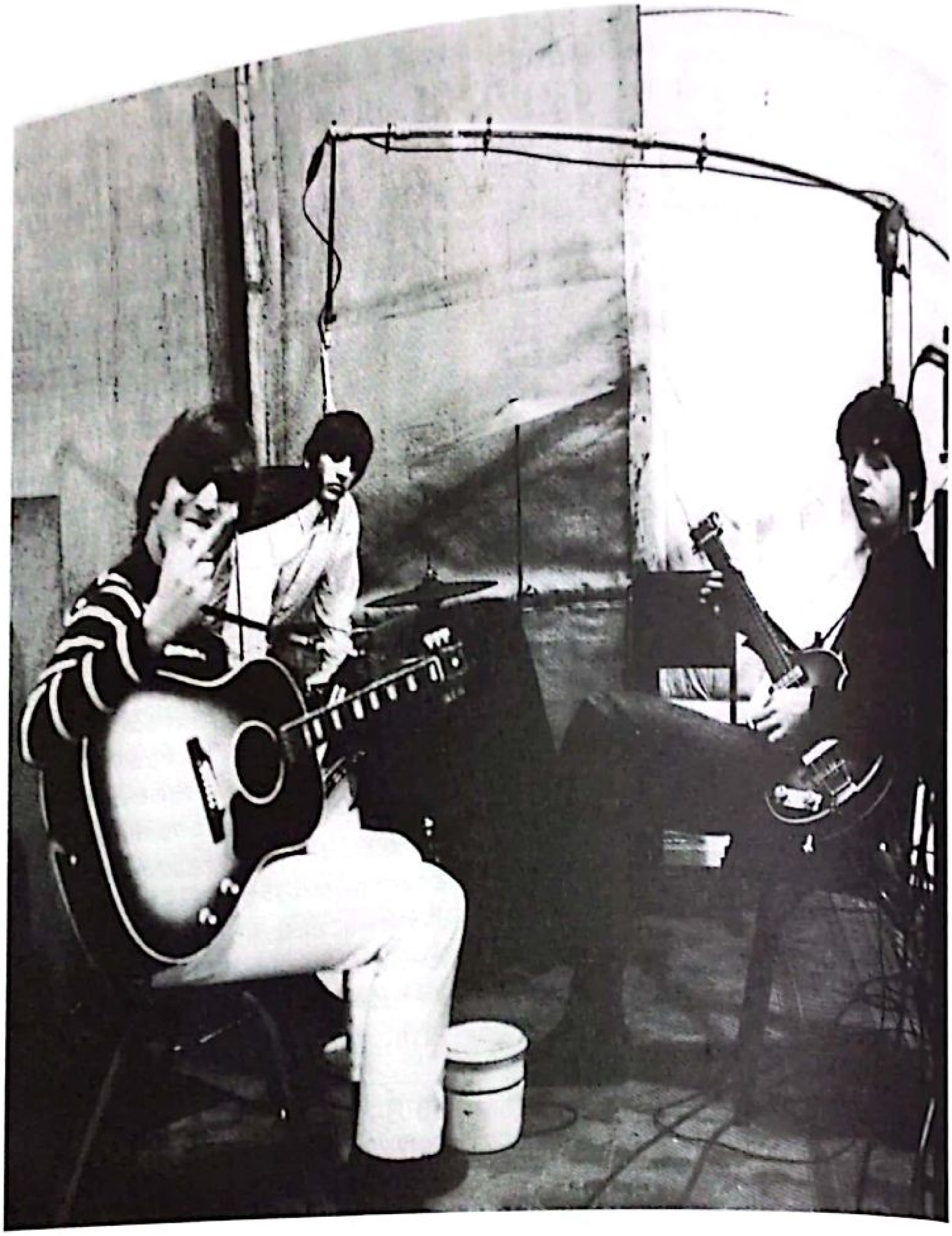
いろんな可能性を秘めた曲でありながら、ポールの新曲'I'm Looking Through You'はなかなかうまく形にならなかった。合計9時間行なったこの日のセッションの前半の午後2時30分から7時までは、この曲のリズム・トラックを1テイク録音し、オーバーダビングを試みた。さらに午後11時までの後半のセッションでボーカルを重ねていった。セッションが終わるころには、ふつうならかなり周到に作り込まれたいい曲だと考えるような作品に仕上がっていたが、ビートルズは納得せず、結局11月6日に録り直し、さらに11月10と11日にまた録り直す。

10月25日(月)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午前10時から午後1時までのセッションで、ジョージ・マーティンのプロデュースで'Drive My Car' 'In My Life' 'If I Needed Someone' 'Day Tripper' 'Norwegian Wood (This Bird Has Flown)' 'Nowhere Man'のモノ・ミックスが作られた。ビートルズのメンバーはおそらく参加していない。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

MBE勲章授与式の日

10月26日(火)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午前10時から午後12時30分まで、EMIの第1スタジオで、ジョージ・マーティンにより'Drive My Car' 'Day Tripper'(オーストラリアとアメリカ盤アルバムに収録)、'In My Life' 'If I Needed Someone' 'Norwegian Wood (This Bird Has Flown)' 'Nowhere Man'のステレオ・ミックスが作られた。

このころにはビートルズもミックス・セッションに参加するようになっていたが、この日はスタジオに来ているほうがおかしい。4人はバッキンガム宮殿で女王からMBE勲章を授与されて、そのあとサビル・シアターで記者会見を開いていたからだ。もちろん、この記者会見はニュース映画、テレビ、ラジオでかなり報道された(BBCのウィリアム・ハードカッスルが司会の、ニュースと時事問題を扱う堅苦しい番組『ザ・ワールド・アット・ワン』でさえ、宮殿の外から2回、中から1回、さらにビートルズがサビル・シアターに到着したときに1回と、このニュースについて計4回のレポートを放送していた)。

10月28日(木)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午後5時から5時30分まで、'We Can Work It Out'のラフ・モノ・ミックスが作られた。これはレコード用ではなく、『ザ・ミュージック・オブ・レノン・アンド・マッカートニー』というテレビ番組の疑似演奏収録用の音として使用するためのものだった(11月1日、2日を参照)。

このテレビ用のミックスを聴いたビートルズは、初めてボーカル・トラックに手直しが必要だと気がついた。そこで翌10月29日に再度ダビング作業を行ない、この日制作されたミックスは1日でボツになる。

10月29日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時から4時までのセッションで、'We Can Work It Out'のテイク2にボーカルをさらにダビングした。そのあと5時まで、この曲と'Day Tripper'のモノ・ミックスを、レコード用と11月1日、2日のテレビ収録用に2種類ずつ作った。

レノン=マッカートニー作品に焦点をあてる番組

11月1日(月)～2日(火)

グラナダ・テレビ・センター、第6スタジオ
Manchester

ビートルズのバンドとしての成功とは別に、世間ではレノン=マッカートニーの作曲活動にも大きな関心が注がれていた。ふたりの若いイギリスのポップ・ミュージシャンがこれほどにもすぐれた曲を書いて演奏しているという事実は、当時としてはかなりめずらしくて斬新なことだったからだ。そこで1965年夏、グラナダ・テレビはジョンとポールの音楽に焦点をあて、かなりの予算をかけて、国際的に有名なトップ・ミュージシャンにレノン=マッカートニー作品を歌わせながら、あくまでもビートルズを番組のメインに据えるという特別番組をブライアン・エプスタインにもちかけた。

この魅力的な企画はさっそく進行し、50分の特別番組『ザ・ミュージック・オブ・レノン・アンド・マッカートニー』のリハーサルと収録が2日間にわたってグラナダ・テレビの特製のセットを背景にして行なわれた。番組は12月17日午後9時40分から10時35分にかけて、ロンドン以外のイギリス全国で、ロンドンではその前日の同じ時間帯に放送される。

ビートルズは'Day Tripper'と'We Can Work It Out'を口パクしたが、結果的にこれはニュー・シングルのプロモーションには絶好の機会となる。'We Can Work It Out'では、ジョンはギターではなく、グラナダのスタジオにあったハーモニウムを弾いた。ビートルズ(とほかの出演者)は収録の際、、スタジオに観客がいるふりをして、おじぎをしたり、拍手に応えるしぐさをしなければならなかった。実際には観客はひとりもいなくて、笑い声や拍手はあとでオーバーダビングされるのだ。さらに、シェイクスピア劇でのローレンス・オリビエのものまねをしながらピーター・セラーズが歌った抱腹絶倒の'A Hard Day's Night'などは、ここマンチェスターではなくロンドンで収録されていた。

ジョンとポールは、建築現場の骨組みのようなセットのあちこちに顔を出しては、多数のゲストを紹介したり、ビートルズの曲の外国語バージョンについて語ったり(この間'Sie Liebt Dich'の一部が流れた)、シラ・ブラックとふざけた

りしている。また、ポールがひとりで'Yesterday'を22秒間演奏し、それ以後の映像と音はマリアンヌ・フェイスフルの歌う'Yesterday'に切り替わるという演出もあった。この番組での演奏曲と演奏アーティストは次のとおり。メドレー（ジョージ・マーティン・オーケストラ）、'A World Without Love'（ピーター・アンド・ゴードン）、'I Saw Him Standing There'（ルル）、'From Me To You'（アラン・ヘイブン・アンド・トニー・クロムビー）、'She Loves You'とメドレー（フリッツ・スピーゲルズ・アンサンブル）、'Day Tripper'（ビートルズ）、'Yesterday'（ポール・マッカートニー、続いてマリアンヌ・フェイスフル）、'She Loves You'（アントニオ・バーガス）、'Things We Said Today'（ディック・リバースのフランス語バージョン）、'Bad To Me'（ビリー・J・クレイマー・ウィズ・ダコタス）、'It's For You'（シラ・ブラック）、'Ringo's Theme (This Boy)'（ジョージ・マーティン・オーケストラ）、'If I Fell'（ヘンリー・マンシーニ）、'And I Love Him'（エスター・フィリップス）、最後に'A Hard Day's Night'（ピーター・セラーズ）、'We Can Work It Out'（ビートルズ）。

「ザ・ミュージック・オブ・レノン・アンド・マッカートニー」は、1966年モントルー・フェスティバル（4月22～30日）で審査結果が発表されるゴールデン・ローズ・オブ・モントルー賞の候補番組としてITVから公式出展されるが、受賞にはいたらない。

11月3日（水）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から11時30分までの9時間のレコーディングで、ポールの新しいバラード'Michelle'を録音し、完成させた。午後2時30分から7時までにリズム・トラックを1テイクで完成させ、7時からは4トラックすべて使いきってしまったこのテープをミックスして3トラックに収め、1トラック分をあけてこれをテイク2とした。そして、このテイク2のあきトラックに、ボーカルとギターをオーバーダビングした。

11月4日（木）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ニュー・アルバムの発売予定日まで1か月足らずだというのに、収録予定数のうちまだ半分しか作品は完成していないし、さらに数曲を新たに書く必要があった。こうした状況でビートルズはふたつの行動を起こした。まず、それまで深夜までなだれ込むことがあったセッションを、意図的に深夜まで行なうことにした。それで、この日のセッションも、最初から午前3時までが予約されてあった（実際に終了したのは3時30分）。もうひとつは、この日や11月11日のように、今までボツにしてきた曲を掘り起こしてみることだった。

'What Goes On'は、当初1963年3月5日にレコーディングが予定されていたのに、時間がなくて録音できなかった作品だった。ここで再びとりあげられたこの曲は、アルバム1枚につき1曲と、なかば決まりとなっていたリンゴのボーカル曲として選ばれた（最終的にリンゴはこの曲の共作者にもなる）。この曲は1テイクで録音し、リンゴのリード・ボーカルと、ジョンとポールのバック・ボーカルをオーバーダビングした。

深夜すぎ、ビートルズはめずらしいことを試みた。おそらくアルバム収録を考えてだろうが、'12-Bar Original'というインストゥルメンタル曲をレコーディングしたのだ。この曲のタイトルは12小節のブルースを延々と演奏していくという意味では正確なものだったが、しかし、このモチーフはブッカー・T・アンド・MG'sの典型的な持ち味だったので、あまりオリジナルとは言えなかった。ただ、これまでビートルズが試みてきたもののなかでは例を見ないものだったことは確かである。しかも、これはただ即興演奏を漫然と続けるという性格のものではなかった。テイク1でやろうとしたのに途中で失敗した内容を、テイク2でもまったく同じように再現し、こちらでは完成させたのである。完成した6分36秒という異例の長さのテイク2は、オーバーダビングなしでライブ収録されている。ジョージのトーンペダルを効かせたリード・ギターとジョージ・マーティンのオルガンが印象的で、ジョンのリード・ギターとポールのベース、そしてリンゴのドラムで音の厚みを出している。

11月6日（土）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'I'm Looking Through You'の2回の録り直しのうちの1回目。午後7時から午前1時までのセッションで、ビー

トルズは2テイク、レコーディングした（10月24日のテイク1に続くものとして2と3の番号が振られた）。そして、テイク3のほうに必要なサウンドをオーバーダビングした。最後にはかなりイメージに近いものが出来あがったが、まだ十分ではなかった。

11月8日（月）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

しめきりがせまっているのはニュー・アルバムだけでなく、ファン・クラブの会員に送る恒例のクリスマス・レコードもあった。
その目的で、4人が何かジョークを飛ばした瞬間を逃さないように、ジョージ・マーティンは、この日の午後9時から午前3時までのセッションのうちの早い時間に行なったジョージ・ハリスンの'Think For Yourself'のリハーサルもしっかりレコーディングしていた。あいにくクリスマス・レコード用の素材は何も拾えなかったのだが、テープがスクラップにされないようにマーティンは「発表の予定あり」とテープの箱に書きつけておいた。そして、このテープは1967年にアニメ映画"YELLOW SUBMARINE"のプロデューサーに貸し出され、ジョン、ポール、ジョージが'Think For Yourself'のボーカル・ハーモニーを練習するシーンで実際に6秒間使用されるのだ。
ちなみに、この時点では、この曲のタイトルはまだ'Think For Yourself'ではなかった。最初は'Won't Be There With You'というタイトルだったが、この日の遅い時間になって'Think For Yourself'というタイトルが持ち上がった。この曲は1テイクだけレコーディングされ、そこにオーバーダビングが加えられた。ファズをかけたベースが印象的な曲となった。
午前3時近くになってクリスマス・レコード用メッセージの録音を始めるころには、メンバーはすでに疲れきってしまっていた。リハーサルなしの世間話をつっかえながら3テイク収録し、それからとんでもなく調子はずれに'Yesterday'を歌い、のべつまくなしに世間話を続け、そのなかでジョージ・マーティンがどうせ編集するんだからと、もうどうでもいいというジョークまで飛ばした（事実、収拾がつかなくなったのでマーティンはこの録音のつじつまを合わせる作業を避けられなくなり、12時間後に編集とミキシング作業にいそしんだ）。

11月9日（火）
EMIスタジオ、第65室
London

午後2時30分から5時30分まで、'Michelle' 'What Goes On' 'Run For Your Life' 'Think For Yourself' 'The Beatles' Third Christmas Record'の（編集も兼ねる）モノ・マスター、それと'Think For Yourself' 'Michelle' 'What Goes On'のステレオ・マスターが制作された。ビートルズはおそらく参加していない。

11月10日（水）
EMIスタジオ、第65室／第2スタジオ
London

午後2時30分から5時30分まで第65室でミックス・セッションが行なわれ、'Run For Your Life'と（制作中の"RUBBER SOUL"用ではなく、オーストラリア盤とアメリカ盤アルバムのための）'We Can Work It Out'のステレオ・マスターが制作された。ビートルズはこのミックスには参加せず、午後9時から午前3時（実際に終わったのは午前4時）まで、第2スタジオでレコーディングをした。最初にジョンの'The Word'を3テイク録音して完成させる。この曲の歌詞は、2年後に発表されて全世界的なヒットとなる'All You Need Is Love'の原型とも言えるような作品だ。次に、ポールの'I'm Looking Through You'の2度目の録り直しを試みる。1テイク（テイク4）を録音し、これがリズム・トラックのベスト・テイクとなった。

しめきりギリギリのレコーディング

11月11日（木）
EMIスタジオ、第65室／第2スタジオ
London

午後4時から5時30分まで、第65室で、'The Word'のモノおよびステレオ・ミックスが制作された。ビートルズはおそらく参加していない。4人がレコーディングを開始したのは予定より1時間早い午後6時、そして終了時刻は予定の午前3時を4時間延長してしまったが、とにかく、4人はほとんど休憩なしで13時間におよぶアルバム"RUBBER SOUL"の最終セッションを行なった。もう期限がきてしまい、どうし

CamScannerでスキャン

てもこの日に完成させる必要があることは4人にはわかっていた。また、あと3曲をレコーディングしなければならないのもわかっていた。そこでポールが1曲、ジョンが1曲を持ち寄って、残りの1曲はアルバム"HELP!"でボツになった'Wait'をひっぱりだして、多少手を加えてニュー・アルバムに収録できるようにした。1965年当時は、バランスさえよければすべてよしとされたので、計14曲のアルバムに片面7曲ずつ収録されていれば、とりあえずそれだけで安心できたのだ(それにしても、これほど切迫した状況に追い込まれても、ニュー・シングル'We Can Work It Out/Day Tripper'の2曲あるいは1曲でもアルバムに収録してしまおうとは誰も考えなかった)。

ポールの曲'You Won't See Me'とジョンの曲'Girl'は、それぞれ2テイクずつ録音して完成した。次に5か月前の'Wait'のテイク4に、トーンペダルを効かせたギター、タンバリン、マラカス、とさらにボーカルも加える。それが終わると、前日の夜録音した'I'm Looking Through You'のリズム・トラックにボーカルを重ねた。そしてセント・ジョンズ・ウッドの夜明けの小鳥のさえずりとともに、4人はようやくニュー・アルバムが完成したことを知った。

アルバム"RUBBER SOUL"完成

11 月 15 日(月)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午後2時30分から5時30分まで、アルバム"RUBBER SOUL"の最終作業が行なわれた。'I'm Looking Through You' 'You Won't See Me' 'Girl' 'Wait' 'Michelle'のモノ・ミックスが作られ、続いて'Wait' 'I'm Looking Through You' 'You Won't See Me' 'Girl'、(11月11日のバージョンを改善した)'The Word'のステレオ・ミックスが作られた。

11月16日、ジョージ・マーティンは収録曲の曲順を吟味し、決定するとアビイ・ロードに連絡する。11月17日、19日、23日に原盤のカッティングが行なわれ、原盤から起こしたラッカー盤がプレス工場へ送られ、大至急でジャケットが印刷され、完成したアルバム"RUBBER SOUL"は、12月3日には店頭に並ぶのだった。

これだけ時間に追われ、自分の作品に最大限の配慮を注ぎ込みたいという気持ちとの葛藤を考えれば、1年につき新曲を集めたアルバムを2枚単位で発表するというリズムが1965年をもって終わったとしても、さして驚くようなことではないだろう。

プロモーション・クリップを作る

11 月 23 日(火)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

ニュー・シングルを発表するたびにテレビ番組に出演しなければならないのに嫌気がさしていたビートルズは、いっそのこと自分たちで独自のプロモーション・クリップを制作して、それをテレビ局に配給してしまえばいいと決めた。この方針は来たるべきMTV時代の幕開けを告げるものになる。

それまでも数か月ごとに、イギリス国内や海外のテレビ局から同じような出演依頼があいかわらず延々と舞い込んでいたことを考えると、どうしてもっと早くこのアイデアを思いつかなかったのかと腑に落ちない向きもあるかもしれない。しかし、グラナダ・テレビでの「ザ・ミュージック・オブ・レノン・アンド・マッカートニー」の収録を経て、初めてこうしたやり方も可能かもしれないと4人は自覚したのだった。自分たちでクリップを製作すれば、最小限のわずらわしさや労力と引き替えに「トップ・オブ・ザ・ポップス」や「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」だけでなく、アメリカ、オーストラリア、さらには日本、要するにもうどこのテレビ番組にもいとも簡単に映像を流すことができる。しかも、それで手堅く利益を確保することもできるのだ。

クリップの撮影はNEMSエンタープライズの出資で行なわれた(ので、作品は必然的にNEMSが所有することになった)。そこでジョー・マックグラスに監督を依頼し、ヨーロッパ初のインディペンデント・ビデオ制作会社として有名なインター・テル(VTRサービス)に制作スタッフを派遣してもらうことになった。「レディ・ステディ・ゴー!」のニコラス・ファーガソンがセットをデザインし、撮影にはハリー・ストーリー、テリー・ヒースと、あとふたり(BBC社員で、社外の仕事をしていたため匿名を希望している)、計4人のカメラマンが担当。また、照明担当、音声担当のほか使い走り(のちにすぐれた監督となるデビッド・マレット)までそろっていた。そして、現場の指揮はNEMSを代表してトニー・ブラムウェルとビビアン・モワイニアン(元アソシエイテッド・レディフュ

CamScannerでスキャン

ージョンの社員だった)が受け持った。

映画"A HARD DAY'S NIGHT"と"HELP!"の撮影は、トゥイッケナム・スタジオにある3つのステージのすべてを使って行なわれたが、このプロモーション・クリップは第3ステージのみで撮影が行なわれた。セットは撮影の2日前から準備にかかって完成していた。ビートルズはこの日の午後の遅い時間にスタジオ入りし、翌日の朝方まで撮影を続けた。レコーディングと同じように精力的に仕事をこなしたビートルズは、10本のクリップを撮影し、そのうち9本がテレビ放送される(とくにイギリスの特定のテレビ番組に関しては、相互に独占権を持たせるためライバル番組同士には異なるバージョンのクリップが提供される)。この日、2インチのモノクロ・ビデオ・テープに収録されたプロモーション・クリップは次の10種類(何本かはのちにテレビ用に16ミリに変換)。

We Can Work It Out:3バージョン。3本ともジョンがオルガンの前に座っているが、終わりに近づくにしたがって4人の動作は明らかにそれぞれに違ってくる。もちろん3本を区別するためにそういう作りになったのであるが。このうちの1本は、ひまわりをまぶたの上にのせているジョンのスチールで始まる。また別の1本では、シェア・スタジアムで着用したスーツを着ている。

Day Tripper:3バージョン。やはりシェア・スタジアムのスーツを着ている最初の1本では、ジョージとリンゴが列車のセットの向こう側に立つ(リンゴはドラムスティックを捨てると、のこぎりを取り出して列車を切り始める)。ジョンとポールは少し離れた1920年代風の飛行機の切り抜きの前に立っていた。ほかの2本はそれぞれに同じ内容だが、この最初の1本とは内容がまったく違う。そして、最初と最後のリンゴの動作が少し違っている。この残りの2本のクリップでは3本のギターとドラムという通常の楽器構成で映像に登場している。

Help!:1バージョン。ビートルズは作業ベンチにまたがって座り、前後に揺れたり飛び上がったりしながら演奏シーンを撮影した。しかし、ベンチの上にドラムを置くのはとうてい無理だったため、リンゴは白い傘をさしているだけ。クリップの最後に作り物の大雪を降らせたため、リンゴの白い傘は重宝した。

Ticket To Ride:1バージョン。バスや列車のチケットを拡大したものを配置したセットの前で撮影。

I Feel Fine:2バージョン。1本目では曲が始まってから数秒後にジョン、ポール、ジョージが歩いて登場。ジョージはボクシングのトレーニング用パンチボールに面と向かいながら歌い、ジョンとポールは(周囲のジム用具は使わず、足もとにバーベルとエキスパンダーを置いたまま)カメラに向かって歌う。リンゴは38秒後に登場し、エクササイズ自転車に乗る。もう1本も同じセットで撮影された(ただし最後にジョージがエクササイズ自転車に乗る以外は運動器具は使用されない)。こちらのクリップではビートルズは曲の間中、新聞に包まれたフィッシュ・アンド・チップスをひたすら黙々と食べ続ける(トゥイッケナムでこの日制作された10本のうち、この1本だけテレビ局に売られなかったが、それはエプスタインがこの仕上がりにひどく不満だったからだという)。

プロモーション・ビデオの配給はすぐに開始された。NEMSへの1,750ポンドの支払いと引き替えにBBCはいくつかのフィルムを何度か「トップ・オブ・ザ・ポップス」(BBC1)で放送することができた(全10本の撮影に要した制作費は計750ポンド)。たとえば、12月2日午後7時30分から8時までの「トップ・オブ・ザ・ポップス」では'We Can Work It Out'と'Day Tripper'を、12月9日には'We Can Work It Out'を放送する。クリスマスの12月25日午後10時35分から11時50分に放送、翌12月26日午後12時15分から1時30分に再放送される「トップ・オブ・ザ・ポップス'65」では'I Feel Fine' 'Help!' 'Ticket To Ride' 'Day Tripper'が流れる。また、12月30日午後7時30分から8時までの「トップ・オブ・ザ・ポップス」では'We Can Work It Out'を放送。さらに1年後の1966年12月26日午後6時15分から7時に放送される、1966年1月から6月までのナンバーワン・ヒットを集める「トップ・オブ・ザ・ポップス'66―パート1」では、'Day Tripper'と'We Can Work It Out'を放送する。

また、イギリスでのごく早い時期の放送例として、ABCテレビが1965年12月4日午後5時15分から5時55分放送の「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」で'We Can Work It Out'と'Day Tripper'を流す。アメリカでは、1966年1月3日午後7時30分から8時(EST)に、NBC系全国ネット番組「ハラバルー」で、'Day Tripper'と'We Can Work It Out'が初めて放送される。

CamScannerでスキャン

11月29日(月)
エオリアン・ホール、第1スタジオ
London

ロンドンにあるBBCのエオリアン・ホールで、午後2時15分から2時45分まで、ブライアン・マシューによるインタビュー収録が行なわれた。このインタビューは、クリスマスの午前10時から11時30分までBBCラジオで放送される「サタデイ・クラブ」で、3部に分けて紹介される。

いつものようにマシューとジョークを言い合っているうちに、ビートルズは突然、ふだんはテッド・ヒース・アンド・ヒズ・オーケストラかトニー・オズボーン・アンド・ヒズ・ジャズ・グループが演奏しているインストゥルメンタルの番組テーマ曲 'Saturday Jump' を、ボーカル・バージョンで手っ取り早くやってみせると提案した。そのため、クリスマスの朝にこの番組を聴くリスナーは、オープニングでヒースのオーケストラによるテーマ曲のレコードがかかる前の15秒間、ビートルズがこの曲をスキャットで歌っているのを聴くことができる。

ジョージ・マーティンの独立

11月30日(火)
NEMSエンタープライズ
London

ジョンとジョージは、午後からアーガイル・ストリートにあるNEMSのオフィスに行き、BBC転送サービスによる海外契約局向けの番組「ポップ・プロフィール」用に、ブライアン・マシューによる個別インタビューを収録した（放送日の詳細は不明）。このテープはイギリスでは放送されていない。ポールとリンゴは、1966年5月2日に、この番組のためにインタビューを収録することになる。

最初にジョージが午後4時30分から15分間、インタビューを受け、次に午後5時からジョンがインタビューを受けた。これらはそれぞれ8分間に編集され、番組のテーマ曲を入れた9分間の番組として、1966年3月、転送サービス専用の7インチ・ディスクにされ、海外に郵送された。

一方EMIスタジオでは、アルバム "RUBBER SOUL" には収録されず、とくにリリースの予定もなかった '12-Bar Original' のモノ・ミックスが午後4時45分から5時にかけて作られた。ミックスが制作されたのはビートルズのプライベート・コレクション用のアセテート盤用だった。バランス・エンジニアのノーマン・スミスがビートルズの仕事に参加するのは、このセッションが最後となる。1962年6月6日にビートルズが初めてアビイ・ロードを訪れたときから一緒に仕事をしてきたスミスは、1966年2月にプロデューサーに昇進し、マンチェスター・スクエアにあるEMI本社のA&R部門に転属になったのだ。1972年に、そのスミスがハリケーン・スミスという名前でシングル 'Oh, Babe, What Would You Say?' を出してアメリカでナンバーワンに輝くが（「キャッシュボックス」誌）、そのときスミスに最初に祝電を打ったのはジョンとヨーコだ。

スミスがEMIのプロデューサーに昇進した背景には、1965年8月の時点でEMIのプロデューサー三羽烏、ジョージ・マーティン、ロン・リチャーズ、ジョン・バージェスの3人がそろって退社したという事情があった。この3人はデッカをやめたピーター・サリバンとともに、AIRの名で知られるインディペンデント制作会社アソシエイテッド・インディペンデント・レコーディングス・（ロンドン）・リミテッドを設立した。もちろん、マーティンは退社したため、EMIはビートルズに別のプロデューサーを任命することもできたのだが、これは実現しなかった。マーティンとビートルズの関係は非常にうまくいっていて、エプスタインもメンバーもこの話に承知するはずがなかったからである。そして、この独立はとくにマーティンにとってよい結果を呼んだ。なぜかというと、これ以降のすべてのビートルズの作品については、プロデューサーとしての報酬を印税としてEMIから受け取ることになり、ビートルズと自分の仕事のおかげで今までになく業績を伸ばしている会社から実入りの少ない給料をもらうだけで済まされることはなくなったからだ。

最後のイギリス・ツアー開始

12月3日(金)
オデオン・シネマ
Glasgow

1965年に行なわれた唯一の、そしてビートルズ最後のイギリス・ツアーは、10日間で（8都市）9会場を訪れ、1会場につき2回ずつの公演をこなすというものだった。ツアーでのレパートリーも少なく、'I Feel Fine' 'She's A Woman' 'If I Needed Someone' 'Act Naturally' 'Nowhere Man' 'Baby's In Black' 'Help!' 'We Can Work It Out' 'Yesterday'（ポールがオルガンで伴奏する）、

'Day Tripper' 'I'm Down'の11曲だった。
この日、グラスゴーのオデオン・シネマの楽屋で、ビートルズは新設された海賊ラジオ局、ラジオ・スコットランド用にお祝いのメッセージを収録した。また、日付は不明だがこのツアー中に、ラジオ・キャロラインのためのクリスマス・メッセージを収録。またポールは、やはりラジオ・キャロラインの2月26日放送の「ポップス・ハプニング」のためインタビューに応じた。
この日、シングル'Day Tripper/ We Can Work It Out'とアルバム"RUBBER SOUL"リリース。

12月4日(土)
シティ・ホール
Newcastle-upon-Tyne

最後のリバプール公演

12月5日(日)
エンパイア・シアター
Liverpool

ビートルズ最後のリバプールでのコンサート。エンパイアの客席数は2,550しかないというのに、2回の公演には4万人がチケットを申し込んだ。
2回目の公演では、ポールが前座のクーバスのステージに登場し、彼らが演奏する'Dizzy Miss Lizzy'でドラムを叩いた。
'Day Tripper/ We Can Work It Out'はイギリスのシングル・チャートで、"RUBBER SOUL"はアルバム・チャートで1位を獲得。

12月7日(火)
ABCシネマ
Ardwick, Manchester

12月8日(水)
ゴーモント・シネマ
Barker's Pool, Sheffield, Yorkshire

12月9日(木)
オデオン・シネマ
Birmingham

12月10日(金)
オデオン・シネマ
Hammersmith, London

12月11日(土)
アストリア・シネマ
Finsbury Park, London

12月12日(日)
キャピトル・シネマ
Cardiff

ビートルズにとって最後のイギリス・ツアーの最終公演。

Introduction
1966

「俺たちのろう人形でもステージに立たせておけば、客はきっと満足してくれるさ。もうビートルズのコンサートは演奏内容とは関係のないものになっちまった。ただのくだらない、部族儀式みたいなもんだ」。1966年、ジョン・レノンはそう語った。コンサートは本気で終わりにしなくてはならないと、すでに1965年12月のイギリス・ツアーが終わった時点でビートルズは決めていた。そして、1966年夏の海外ツアーで現実離れしたさまざまな経験をするにおよんで、8月にはその決心に少しの迷いもなくなっていた。

1966年に入ってから、ビートルズは5月1日までステージに立つことはなかった。クオリーメン時代から、これほど長くライブから遠ざかったことはもちろんない。そして、5月1日にひさしぶりに立ったステージにしても、恒例の『ニュー・ミュージカル・エクスプレス』誌のポールウィナーズ・コンサートで、わずか15分程度のものでしかなかった。しかし、これはビートルズがイギリスで行なった実質的に最後のコンサートとなった。2月の時点でNEMSは「ビートルズは夏には日本、アメリカ、西ドイツでツアーを行ない、年末にはイギリスでツアーを行なう」と発表していたが、夏のツアーが終わった段階で、年末のイギリス・ツアーは永久にキャンセルされたのだった。

レコーディングでの進歩、ツアーへの嫌悪

3か月もの長期休暇を楽しんだビートルズは、4月6日からニュー・アルバムのレコーディングを開始した。アルバム・タイトルは未定だったが、完成後、"REVOLVER"というタイトルがついてリリースされた。ツアー時代とスタジオ時代のはざまの、創作意欲が高く安定していた時期に制作されたこの"REVOLVER"では、トゲもある力強くシンプルな歌詞を果敢にスタジオで試みたサウンドと組み合わせ、ビートルズの創作活動のひとつのピークを見せてくれる。今聴いてもなお、その当時の新鮮さとバイタリティがまったく失われていない、まれにみる1枚である。要するに"REVOLVER"は、この青年たちがようやく表現と創作についての自由を手に入れ、そして混乱にもまれながらも目を見張るような成長をした結果、生まれた名作なのだ。4人にとって、このころにはレコーディングが活動の最大の関心事となり、動機となっていた。それに、ツアーに出てまたあのばかばかしさに身をまかせることに何の意味があるのだろう。

だからライブはもう断ろうと決めたものの、ビートルズにはまだこなさなければならない契約義務があった。そのひとつはまず、1962年以来訪れていない西ドイツのハンブルクで公演を行ない、その帰りに日本とフィリピンにまで足を伸ばす短いツアーだった。西ドイツ・ツアーは少なくとも平穏無事に済んだと言える。といっても、それはいつもの絶叫のるつぼとビートルマニア、公道での騒乱、偽造入場券をめぐる検挙騒ぎ、それに昔の思い出たっぷりのどんちゃん騒ぎなどを除いての話だった。しかし、ビートルズのショーそのものに関して言えば、この最後のツアーの数か月のうちにライブ・パフォーマーとしてのミュージシャンシップが底をついてしまっており、演奏にはやる気のなさも目立った。そして、レパートリーはわずかに11曲だった。

西ドイツ・ツアーとは対照的に、ビートルズ唯一の日本公演はかなりの騒動を巻き起こした。地元のプロモーター永島達司が3日間5回の公演会場として選んだのは、当時、日本の武道にのみ許された神聖な場であるとまだ広く信じられていた日本武道館だった。1964年の東京オリンピックで日本武道館を使うことにさえ反論があったのに、手のつけられない客を大勢動員して、電化増幅された西洋のポップ・ミュージ

CamScannerでスキャン

ックをここでやろうというのである。当然、ビートルズのコンサート開催への風当たりはかなり強く、反対派によるデモまで行なわれた。そのため4日間の日本滞在中、警察はあらゆる局面に顔を出し、警備に雇われた人間だけでも3万5,000人にのぼった。6月29日、羽田空港に到着したビートルズを、午前3時40分という時間にもかかわらず、1,500人ものファンがひと目見ようとつめかけたが、ファンは機動隊に手荒に扱われただけだった。武道館での5回の公演には、観客1万人に対して3,000人の警官が出動し、いかなる混乱をも阻止しようと、通路の要所要所に警官がふたりずつ待機していた。

ビートルズの身柄の安全を確保するのが使命かと思われた日本の警備陣は、日本に到着してから出発するまで、4人を東京ヒルトン・ホテルの客室にほとんど軟禁に近い状態に追い込んだ。ビートルズがホテルを出るのは時速110キロで飛ばす車の大名行列で武道館との間を往復するときだけだった。ビートルズは18階のスイートルームに押し込められ、エレベーターはすべて17階止まりとなり、あらゆるエレベーター・フロアや階段の踊り場に武装警官が見張りに立ち、客室1部屋おきに警官が待機しているというありさまだった。外出できないビートルズのために、スイートルームにはみやげ屋たちが招かれた。4人はホテルから脱出しようと試みたが、警官につかまってはいたずら小僧のように部屋に連れ戻された。そして、ある朝7時、ついにジョンが単独で脱出に成功すると、混乱に陥った警察はいっさいの警備から手を引かせてもらうと、ビートルズ側に真剣に脅しをかけてきたのだった。

東京を離れたビートルズは、次の公演地であるフィリピンに向かった。そして、4人が到着してから3時間後、恒例の記者会見のときにフィリピンでのビートルズへの悪感情の種がまかれたのだった。取材陣の質問、それも毎度おなじみの「ポール、いつ結婚するの？」とか「ジョージ、この前床屋に行ったのはいつ？」といった質問を軽くあしらうビートルズの態度が記者の目に生意気に映ったこと、そしてフィリピンについて4人が何も知らなかったことが、地元のメディアの反ビートルズ感情に火をつけたのだった。4人はとっくの昔にツアー先の土地の歴史や地理について興味を持つことなど放棄してしまっていた。結局、目に入ってくるのはどこへ行ってもまずは空港、悲鳴をあげる群衆、リムジン、悲鳴をあげる群衆、ホテルの部屋、悲鳴をあげる群衆、コンサート・ホール、悲鳴をあげる群衆、リムジン、悲鳴をあげる群衆、そして最後にまた空港という具合だったから、そんなものに興味を持ったところで何の意味もなかったのだ。

そして、ビートルズの2回の公演が行なわれる前日の7月3日、「マニラ・サンデイ・タイムズ」紙に掲載されたある記事がもとで、とてつもない大騒ぎが起きた。問題の記事は次のようなものだった。

「明日4日のビートルズのマニラ公演に特別招待されているマルコス大統領、イメルダ・マルコス夫人、ならびにマルコス家のビートルズ・ファンである大統領の3人の子女は、予定どおり公演に出席する。これに対してビートルズ側は明日午前11時にマラカニアン宮殿にイメルダ・マルコス夫人を表敬訪問する予定」

ところがビートルズ側はそんな予定などまったく承知していなかった。ビートルズが知っていたのは、地元のコンサート・プロモーター、レイモン・ラモスからあらかじめ渡されていたフィリピンでのスケジュールに、午後(3時)に簡単に宮殿訪問と記されていたこと。しかも、これはきっぱりと断ったということだった。1回目の公演は4時開演のため、少なくとも2時間前には会場入りしたかったからだ。しかし、宮殿側にもビートルズにもいい顔をしたがったラモスはことがこじれるのを恐れて、どちらにも連絡しなかった。そして、翌日、宮殿からの迎えが到着したとき、ビートルズはまだベッドの中だった。ブライアン・エプスタインは4人を

CamScannerでスキャン

起こしたくなかったため、訪問を拒否した。

ビートルズが宮殿に現れなかったことが露見すると、すぐに大問題となった。翌朝の「マニラ・タイムズ」は「イメルダ夫人大立腹」と大見出しをつけ、ビートルズが「大統領夫人と3人の子ども、ならびに大統領家の知人で構成された400人もの招待客を辱めたらしい。無為に何時間も待たせた」と責めたてた。この報道が呼んだ波紋は深刻なものだった。まず、プロモーターが2回の公演収益のうちのビートルズの報酬を支払わないと、手のひらを返したように拒否し、イギリス大使館やビートルズが泊まるホテルのスイートには爆弾や殺害の脅迫電話が相次いで鳴った。

この事態に衝撃を受け、不安と後悔にさいなまれたブライアン・エプスタインは、ホテルにテレビ報道陣を呼び、トニー・バーロウとともに作成した声明文を発表することにした。しかし、この放送が始まり、エプスタインが話し始めたそのとき、不運にもフィリピン中のテレビが電波干渉にあったのだった。妨害はエプスタインの声明全文におよび、電波干渉がブラウン管から解消されたとき、声明はすべて終わっていた。

その翌日、ビートルズのキャリアのなかで最大の危機が訪れた。フィリピンの税務長官が、ビートルズがマニラ公演の報酬にかかる所得税を支払わないかぎり出国は許さないと宣言したのだ（所得税もなにも、全収益はまだラモスの手中にあったというのに）。怒りに満ちたやりとりが繰り広げられ、背後で税務長官の発言の糸を引いているのはラモスだというエプスタインの主張も的をはずしてはいなかったが、最終的には7万4,450ペソの保証金を支払って手を打つことで落ち着いた。契約書の条項など持ち出して議論してみたところでお話にもならなかった。とにかく、この国から脱出するにはその金を払ってしまうのがもっとも手っ取り早い方法だった。

しかし、本当に、物理的に出国は可能なのだろうかという問題が残った。まず、ビートルズの身辺を護衛していた警備スタッフはひとり残らず職務から立ちのいてしまっていた。足蹴にされたり突き飛ばされたりしながらホテルを出た一行は、やっとの思いでマニラ国際空港にたどりついたが、そこで4人を待ち受けていたのはさらなる嫌がらせだった。空港管理当局は、ビートルズに対するいっさいの手助けを空港職員に厳重に禁止した。そして、ビートルズが荷物を抱えて階段をいくつも上らなくてはならないように、わざわざエスカレーターの電源まで切った。そして、空港の2階で200人ばかりの敵意に燃えるフィリピン人はとうとう自分たちの餌食をつかまえ、とっくみあいになって、ビートルズはもみくちゃにされた。「マニラ・タイムズ」によれば、事態は次のようなものだった。

「ドラマーのリンゴ・スターはアッパー・カットをくらって床に転がった。そのまま這って逃げようとするところを群衆から蹴り回された。ジョージ・ハリスンとジョン・レノンは蹴られたり殴打されながら、税関審査まで逃れた。一目散に逃げたポール・マッカートニーは無傷。しかし、群衆の怒りの矛先を向けられていたマネージャーのブライアン・エプスタインは蹴られたうえに床に投げ飛ばされた。その結果、彼は足首をくじき、体を支えられながら、税関へ向かった」

実際にはこの「マニラ・タイムズ」の記事の描写はかなり誇張されている。押しあいへしあいはあったものの、4人は無傷に近かった。しかし、エプスタインは確かに負傷し、マル・エバンズは床に倒されてから脇腹を何度も強く蹴り込まれた。ビートルズの運転手アルフ・ビックネルは脊髄を痛めたうえに、ろっ骨を折

った。ところが、危機はまだ終わっていなかった。げっそりとやつれた一行が出国手続きのカウンターを通過すると、今度はヤジとブーイングの大嵐に襲われ、怒った群衆は、「Beatles Alis Diyan!(ビートルズ、帰れ)」と大声で連発した。一行は狙撃される危険を感じながら、飛行場を力走し、タラップを上り、やっとのことで飛行機の機内に身を隠した。

しかしフィリピン人は、なおもふたつの周到な嫌がらせを仕掛けてきた。離陸直前、管制塔からパイロットのもとに、マル・エバンズとトニー・バーロウの両名を即刻空港ターミナルに戻すようにと指示が入ったのだ。ふたりは神経を高ぶらせながら戻っていった。バーロウはおそらく拘留されるに違いないと覚悟した。しかし、ふたりに伝えられたのは、一行は拘留されるどころか、出国自体が論理的に不可能であるということだった。何とでも言いわけのつくような程度の空港側の不手際により、ビートルズの2日前のフィリピンの入国記録が存在しないため、そもそもビートルズは入国していないことになり、したがって出国もできず、その結果、不法入国者扱いになってしまっていたのだ。機内のビートルズは、出発が遅れている原因もわからず、エバンズとバーロウが必要な書類手続きを済ませて戻ってくるまで、不安なまま44分間待機していた。それから一行を乗せた飛行機はようやく離陸した。

次の嫌がらせは、「ビートルズには大統領夫人もフィリピン政府も愚弄する意図はなかった」というマルコス大統領による声明の発表だった。この声明は、ビートルズが離陸してから数分後に発表された。

飛行機の中でビートルズはこの命が縮むような出来事に激怒し、その怒りをブライアン・エプスタインに向けたあとで、コンサート・ツアーそのものを断罪した。

フィリピンのあとゆっくりくつろぐつもりだったニューデリーでの休日も、驚いたことに膨大な数のインドのビートルマニアが待ち構えていたせいで、台なしになって終わった。ビートルズの忍耐力は急激に限界に達した。2日後、怒りがおさまらないまま、一行はイギリスに戻った。7月8日、ロンドン空港に到着すると、ひとりの記者がジョージにビートルズの次の予定をたずねた。ジョージのそのときのとげとげしい答えのなかには、本人はまだ知る由もなかった近い将来の姿が、痛々しいばかりに、しかもあまりにも正確に暗示されていたのだ。「ああ、2週間ほど休んだら、どうせまたアメリカで袋叩きにされるんだよ」。まさに不吉な言葉だった。

「キリスト発言」の波紋

シカゴのレイクサイドにあるアスター・タワーズ・ホテルの27階で、ジョンは25年間の人生のなかで最悪とも言える局面にさしかかっていた。ロンドンの「イブニング・スタンダード」紙にジョンのインタビューが掲載されてから、5か月と7日が過ぎた8月11日のことだった。じつはこのインタビューで、ジョンは友人として信頼していたライターのモーリーン・クリーブに、宗教を題材にした書物をかなり精力的に読んでいると語った(実際にはこの言葉どおり言ったわけではないが、ヒュー・J・ションフィールド著のベスト・セラー「ザ・パスオーバー・プロット」について熱心に言及したりしている)、さらに「キリスト教はいずれすたれるだろうね。どんどんしぼんで消えていくまでの話だ。まあ、これについて議論の余地はないよ。俺が言ってることは間違ってないし、いずれそれが実際に証明される日も来る。だいたい、今だって俺たちのほうがイエス・キリストより人気があるくらいなんだから」とつけ加えていた。1ページ全面にわたるインタビューのちょう

ど中盤あたりに登場するこのジョンの発言は、当初さして注目されなかった。ジョンのこういった辛辣な言い方はいつものことだったし、あながちでたらめなことを言っているわけでもなかったからだ。

しかし、イギリスではこの記事のことなどとっくに忘れ去られた7月29日、アメリカのティーン雑誌「デートブック」がこの記事の掲載権を取得し、ジョンの「ロックンロールとキリスト教、今じゃどっちが重要なのか俺にはわからない」という発言を表紙に打ったのだった。とたんにこれは大騒動になった。すぐさま、アラバマ州バーミンガムのラジオ局の呼びかけにしたがって、22のラジオ局がいっせいにビートルズの曲の放送を禁止した（なかにはどっちみちビートルズの曲など流したことなどなかったのに、自局の売り込みをはかるため反ビートルズ・教会賛成運動に乗った局もあった）。一部では、ビートルズ関連物焼き打ち集会を企画し、人々を招待して、ビートルズのレコード、本、関連商品を持ち寄ってたき火で燃やし、記者やカメラマンの前でにっこりと笑いながらそれを実況中継するという放送局まであった。

状況がかなり悪化していたため、エプスタインは8月12日に開演がさしせまってきていたアメリカ・ツアーをキャンセルしようとまで考えた。エプスタインが何よりも恐れたのは、メンバーの誰かが狙撃されはしないかということだった。そこで8月6日にニューヨークに飛び、反ビートルズ運動の盛り上がりを押さえ込み、なおかつジョンの発言の真意を釈明すべく、記者会見を開いた。しかし、会見はごくかぎられた効果しかなかった上に、ツアーも中止にならなかった。

シカゴのアスター・タワーズでのツアー開始に先立つ記者会見は、ジョンの「キリスト発言」の話題に集中した。ほんの数分間だったが、ティーンエイジャー向けのばかげた質問がビートルズに対して向けられなかったのはこのときが初めてだった。いつもなら愛想よくごきげんをとりにくるDJもいなかった。そして、ジョンはまな板にのせられ、いわゆる「冒涜発言」をめぐるアメリカ人記者からの質問の矢面にさらされた。ジョンは、自分の発言の論理的根拠を述べ、その真意を限定し、1度ならず2度も言いたかったことを説明した。しかし、記者の焦点はここでジョンが謝罪するかどうかということにしかなかった。そして、ジョンは記者たちを満足させるために、明らかに何に対して謝罪するのかわからないといった表情だったが、とにかく謝罪した。そうやってほとんどでっちあげに近い、徒労に満ちたこの事件は片がついたのだった。つまり、ビートルズは「教訓を学んだ」のだ（ツアーに入ってからジョンは「イギリスじゃ、受け手もそれ相応の加減をしてああした発言を読んでくれてるけどな」と本音をぶちまけ、そもそもアメリカで反ビートルズ運動に乗り出したのは「アルバム・ジャケットを燃やして楽しんでいた、中年DJと12歳ぐらいのガキだけさ」と辛辣につけ加えた）。

当時でもまったくばかばかしいだけだとしか思えなかったこの事件について、今になって考えてみると、ポップ・スターのごく個人的なひと言によって、どうしてここまで世論そのものがあおられてしまったのか、とうてい理解しにくいところがある。しかし、当時すでに、ビートルズとは一介のミュージシャンを超えた存在だったのだ。

最後のコンサート

そして、このあと続いたツアーは、同様にばかばかしい出来事と悪夢のような事態の連続となった。8月14日のクリーブランド球場でのコンサートは、2,500人のファンが悲鳴をあげながらステージと客席のしき

CamScannerでスキャン

りになだれこみ、公演が30分間中断された。8月15日、ワシントンDC公演の開演前には、クー・クラックス・クラン(KKK)のメリーランド支部団員インペリアル・ウィザードに率いられたプリンス・ジョージ支部団員5名が、赤、白、緑に彩られた衣装をまとって会場の外をデモ行進した。8月19日のメンフィス公演では、2回のステージが終わるまでにメンバーの誰か、あるいは全員が暗殺されるという匿名の電話があった。そして、2回目のショーの途中でステージに爆竹が放り込まれた。誰が撃たれたのかと、4人はとっさに顔を見合わせた。8月20日のシンシナティ公演では、野外会場であるにもかかわらずプロモーターが天幕を用意するのを忘れ、おまけに開演直前にどしゃぶりとなり、そのまま演奏すれば感電死しかねないという状況に追い込まれた。会場にはすでに3万5,000人もの観客がつめかけていたが、公演は仕方なく翌日の昼に延期された。また、ロサンゼルスのステージから装甲車で帰るという計画は、メイン・ゲートに鍵がかかっていたためみごと失敗。別の脱出方法が見つかるまで、メンバーはファンに囲まれた装甲車の中で2時間以上も缶詰めになるはめに陥った。

このツアーでビートルズは、最小限の公演で最大限の収益をあげようと、できるだけ収容人数の多い巨大な野外スタジアムで公演を行なっていた。ロサンゼルスでは1964年と1965年に会場として使った1万8,700人収容のハリウッド・ボウルで2回公演を行なう代わりに、ドジャー・スタジアムに4万5,000人のファンを集めて1回公演を行なった。しかし、残念なことにもうビートルズはこういった巨大スタジアムを満員にすることはできなかったし、この最後のツアーでは、完売となった会場はわずかだった。ショー・ビジネス関連の業界新聞「バラエティ」は、「昨年のようなすさまじさや熱狂ぶりはないが、チケットの売り上げは堅調」と評した。確かに前年のあのすさまじい勢いはもはやなかった。8月23日のニューヨーク公演では5万5,600人収容のシェア・スタジアムに1万1,000の空席があった。前年には発売数時間でチケットが売り切れた会場である。

チケットの売れ行きは熱狂的ではなくても、ファンの熱狂ぶりは何も変わっていなかった。1963年から1966年までにビートルズ自身はめざましく成長していたが、ファンはそれにまったくついて行けないでいたのだ。ファンはあいかわらず絶叫し、泣きわめき、「She loves you, yeah yeah yeah」を要求した。しかし、1966年のビートルズにとって、もはやこの曲は童謡に近い響きしか感じられなくなっていた。もう'She Loves You'なんか忘れてくれ!という気分だったのだろう。事実、ビートルズはすでに、奇妙な音がつまって謎めいた、実験的で革新的な"REVOLVER"をレコーディングしていた。ビートルズとしては自分たちの活動はすでに叙情的な'Eleanor Rigby'や、皮肉たっぷりの'Taxman'、サイケデリックのはしりとも言える'Tomorrow Never Knows'を作り、テープを逆回転させたりインド楽器を使用したりするという段階に突入していたのだ。しかし、このアメリカ・ツアーでは、新作"REVOLVER"からはただの1曲も演奏されなかった。それはあたかも、レコーディング・アーティストとしてのビートルズとコンサート・パフォーマーとしてのビートルズとに、人格が完全に分裂してしまったかのようだった。

永遠に鳴りやまないビートルマニアの叫び声の洪水のなかで、ビートルズはひたすら声をしぼり出し、いっさいのユーモアもはさまずに、きっかり33分のステージをまるで怒りを叩きつけるかのようにこなしていった。そしてツアー最終日の8月29日、太平洋からの風が強く吹き抜けるサンフランシスコで、ビートルズはキャンドルスティック・パークのだだっ広いグラウンドの二塁に設置された高さ1.5メートルのステージに

CamScannerでスキャン

たたずんでいた。ステージの周囲には高さ1.8メートルの金網のフェンスが張りめぐらされ、それをさらに取り囲むように警官や警備員たちが待機していた。すぐそばに停車している装甲車はエンジンがかかりっぱなしになっていた。ビートルズは午後9時27分から10時ちょうどまで演奏し、最後の'Long Tall Sally'を歌い終えると、永久にステージを降りた。9年にわたって1,400回以上ものライブ・ステージをこなしてきたビートルズの公演は、この日を最後に2度と行なわれることはなかった。

その夜、サンフランシスコを飛び立った飛行機の中で、ジョージは座席にゆったりと腰かけながら、「僕はもうビートルじゃないんだ」とつぶやいた。ライブ活動をすることがミュージシャンの証であるならば、確かにジョージはもうビートルではなかった。

将来を考える

それぞれに好きなことを追求したいという欲求が高まっていたせいもあり、その後、ビートルズとしての活動は休止状態がしばらく続いた。ちょうどEMIとの契約更新という空白期間を迎えていたこともあって（契約は1967年1月27日に更新された）、ビートルズの気が向かないかぎり、誰もビートルズに新作のレコーディングもリリースも強制できない状態にあった。そこで4人にとっては、実質的にすべてを再検討し、もうツアーをしないのなら、この先の人生に何を望めるのか考え直してみるいい機会となった。実際、ビートルズに「この先」なんてあるのだろうか。ロック・バンドがまったく、あるいは数年ごとにしかツアーをしなくてもやっていける今の時代を考えると信じられない気もするが、1960年代では、ライブがバンド活動のすべてだというのがまだ常識だった。したがって、ライブをしないでビートルズを続けていけるのかどうかというのは深刻な問題だった。だいたい、ライブもやらないで、いったいどうやって毎日を、1週間を、1か月を、1年を費やしていくというのだろう。

1966年の秋、4人の頭はこの問題でいっぱいだった。そんな状態でジョンは単独でリチャード・レスター監督の新作映画"HOW I WON THE WAR"に出演し、しきりに何かをしたがっていたポールはNEMSの依頼で映画"THE FAMILY WAY"の音楽を書いた。リンゴはサリー州の田舎で家族とのんびり過ごした。このとき、人生を真剣に考えていたのはジョージだけかもしれない。1か月インドに滞在し、インドの音楽、文化、宗教に没頭し、人生という大きな構図で考えればビートルズなど小さな問題であることを、わずか23歳にして悟ったのだ。

それぞれ別の方向に向かい始めている4人の姿を見て、世間はビートルズは解散したと思い込んだ。イギリスの『サンデイ・タイムズ』紙は、故人特集版と同じ体裁の特集号を作り、ビートルズの解散理由やビートルズなきあとの動向などを詳細に掲載した。BBCですら、ニュース番組でビートルズ解散の可能性を報じた。おまけに当のビートルズもそうした現場には不在で、噂を否定しなかったし、実際のところ本人たちにも自分たちの将来がどうなるものか、まだよくわかっていなかった。わかっていたのは、もうメディアに派手に振り回されるのはごめんこうむるということだけだった。ブライアン・エプスタインは解散の憶測をできるかぎり否定していたが、否定する以上のことはできなかった。うつ病に悩まされ自殺未遂を犯したエプスタインは、入退院を繰り返していたからだ。

4人が再びロンドンに集合し、レコーディング再開を決めたのは11月も終わろうとしていたころだった。

11月24日、5か月ぶりのEMIセッションで、ビートルズは名曲 'Strawberry Fields Forever' をレコーディングした。その後もレコーディングは続き、数週間、数か月と経過するうちに、コンサートをしなくてもレコーディング活動だけでもバンドとしてやっていけること、しかもそれぞれの興味の赴くままに精力的に探究を続けたり、表現していく時間が持てることもわかったのだ。

新たな方向を見出したビートルズは、長年つきまとっていたビートルヘアのイメージを捨てた。そのころ、本人たちは気づきも望みもしていなかっただろうが、4人はまもなく起こりつつある音楽、ドラッグ、ファッション、カウンターカルチャーなどの大きな変革の中心にいた。1963年に意図せずして若者文化の変動のきっかけを作ったビートルズは、1967年にも再び同様の影響をおよぼそうとしていたのである。

CamScannerでスキャン

Diary1966

シェア・スタジアム公演の音声をテレビ番組用に修正録音

1月5日(水)

CTSスタジオ
Kensington Gardens Square, London

ライブ・アルバムにまったく手が加えられていないと信じ込む純粋な人もいるだろうが、アルバムと同様にライブ・コンサートのフィルム(およびビデオ)も当然、ふつうは手が加えられているものである。ショーの内容もよく、興奮した会場やスタジアムの陶酔した空気とあいまって迫力ある演奏に聞こえたのに、そのときのテープを数週間後、数か月後に冷えきったスタジオや編集室で聴き直してみると、さっぱりよくなくてがっかりすることがままあるからだ。

1965年8月15日の記念すべきシェア・スタジアムでのビートルズのライブについてテープを聴き直して判明したのは、ビートルズの演奏に粗があっただけでなく、会場のあまりの巨大さ、ファンの絶叫のあまりの大きさ、そして1965年当時の最新技術さえ備えていなかった移動録音機材のせいで、かなり難があるということだった。これほど注目を浴びているコンサートを、音声の修正なしでゴールデン・タイムにテレビ放送しても、ビートルズが大きな痛手をこうむるだけだった。

そこでこの日、一応秘密裏にCTSスタジオを訪れたビートルズはテレビ放送用の『ザ・ビートルズ・アット・シェア・スタジアム』のサウンドトラックを修正するためにあらゆる対策を講ずることになった。

まずポールが、'Dizzy Miss Lizzy' 'Can't Buy Me Love' 'Baby's In Black' 'I'm Down'に新しいベース・ラインをダビングし、ジョンがさらに'I'm Down'に新たなオルガンを重ねた。

次にメンバー全員で、'I Feel Fine'(これはとくにジョージ・マーティンの要請で)と'Help!'をまったく新たに収録し直すという大胆な修正が行なわれた。ビートルズはいつものスタジオ・レコーディングとは違うライブ・サウンドを再現しなくてはならず、また、映像の演奏と歌に合うように演奏しなくてはならなかった。ロンドンに初めて出来た映像音声ダビング・スタジオであるCTS(シネ・テレ・サウンドの略)が選ばれたのはそういう理由からだった。

'Act Naturally'の修正は、ビートルズはとくに何もしなかった。この曲については、制作スタッフがレコードの音(1965年6月17日録音の音源)をそのまま映像にかぶせてしまったからだ。観客のカットを挿入したり、曲の一部を飛ばすことまでして、映像と音楽とをシンクロさせた(しかし、リンゴのボーカルが流れているにもかかわらずリンゴが口を閉じているシーンがもれてしまっている)。資料によれば、このCTSセッションではジョンの意向で'Ticket To Ride'も新たに録音されていることもわかるが、映像をつぶさに検証すると、(多少楽器のオーバーダビングは加えたようだが)シェア・スタジアムでのオリジナルが採用されている。

さらにジョージ・マーティンは'Twist And Shout'の録音も希望したが、時間がなかった。そこで制作チームは未発表になっていた1965年8月30日のハリウッド・ボウルでのライブ録音を使ってサウンドを厚くした。しかし、1か所だけジョンのボーカルが重複しているところがある。また、新たに収録し直した2曲にかぶせる観客の歓声を流用するなど、ハリウッド・ボウルでのライブ収録テープはこのセッションで幅広く活用された。

'She's A Woman'と'Everybody's Trying To Be My Baby'にはいっさい修正が加えられていないため、おそらくこの時点で2曲ともすでにフィルムからカットされていたのではないかと思われる。エプスタインが1965年11月5日ごろにサリバン・プロダクションズから受け取った54分のテープにはまだ収録されていたが、1月の時点では、すでにテレビ放送のために48分弱にカットされていた(この放送の詳細については1965年8月15日参照)。

このあとジョンはロンドンのチェルテナム・テラス5番地にあるP・J・プロビーの自宅で開かれたパーティーに参加。

ブッチャー・カバーの撮影

3月25日(金)

写真スタジオ
The Vale, London

1962年6月にNEMSエンタープライズを設立してから、エプスタインはサビル・シアターのリース業(1965年7月30日参照)をはじめとして多数のビジネスに手を広げていた。1964年9月にはリバプールの音楽誌「マージー・ビート」の経営権を買い取り、「ミュージック・エコー」と改名して全国誌展開をさせていた。やがて「ミュージック・エコー」はIPC

CamScannerでスキャン

の「ディスク」誌と合併して、1966年4月23日、誌名を新たに「ディスク・アンド・ミュージック・エコー」とし、エプスタインはこの雑誌の株式の50パーセントを掌握した。雑誌のプロモーションの一環として、一定数のクーポン券と引き替えに、トップ・スターやトップ・グループのインタビューを録音したソノ・シート盤を読者に郵送するというキャンペーンが行なわれた。ソノ・シートは「サウンド・オブ・ザ・スターズ」というタイトルがつけられていた。エプスタインが関わっていた関係で、ビートルズもこのソノ・シート用のインタビュー収録を行なった。

インタビューは、この日の午後3時から3時30分まで、ウエスト・ロンドンのチェルシー地区ザ・ベイルにある撮影スタジオで、ラジオ・キャロラインのDJ、トム・ロッジによって行なわれた(このあとビートルズは、この日の本題であるロバート・ウィテカーによるフォト・セッションを行なった。多数の写真とともに、有名な「ブッチャー(肉屋)・カバー」を撮影した。1966年5月19日も参照)。NEMSのトニー・バーロウが企画制作していた「サウンド・オブ・ザ・スターズ」には、ビートルズのほかに、シラ・ブラック、クリフ・リチャード、ホリーズ、ピート・タウンゼンド、スペンサー・デイビス、ウォーカー・ブラザーズ、サンディ・ショーなどのアーティストのインタビューが収録されている。ビートルズはA面の冒頭とB面の締めくくりに、合計1分37秒間、ふざけた質問にふざけた返答をしている。

7枚目のアルバムのレコーディング開始

4月6日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ

London

非常に重要なアルバムとなる"REVOLVER"のための初セッション。このアルバムの収録曲は、ロック界をゆさぶり、ポピュラー音楽の流れを決定的に変えてしまうことになるのだが、最初にレコーディングしたのは、アルバムの最後を締めくくった画期的な作品'Tomorrow Never Knows'だった。いきなりすごすぎる始まりだ。(この時点では仮タイトル'Mark I'とつけられていた)この曲のベーシック・トラックは、なんと3テイクで完成。しかも、そのうち1テイクは中断されたものなのだ。もっとも、この曲のエッセンスとも言えるのは、このあと無数に試みられたオーバーダビングの結果生まれるものでもある。とにかく、ビートルズは午後8時から午前1時15分までのセッションで、この曲のすばらしいリズム・トラックを3テイク録音した。

1965年のビートルズのレコーディングは着実に進歩していたが、それにしても、あまりにも驚異的な飛躍だと言える'Tomorrow Never Knows'は、ビートルズの音楽的進歩が誰も肩を並べられないものであったことをよく物語っていた。そして、ある種の限界を見きわめたらそれを何としてでも突き破ろうとする、全員の意志がよく反映された曲だ。

しかし、この作品や、以降のアルバムの特徴でもあるビートルズの進取の気性はビートルズだけのものではなかった。そのプロセスでは進取の気性に富み、新しいサウンドを飽くことなく追求し、そして、ビートルズが具体的にうまく説明できないイメージを往々にしてよく理解してくれていたジョージ・マーティンのはたした役割が今まで以上に大きかった。そして、そのマーティンを支えていたのが、ノーマン・スミスの後任のバランス・エンジニアのジェフ・エメリックだった。1963年からビートルズのセッションのセカンド・エンジニア兼テープ・オペレーターを務めてきたエメリックはまだ20歳と若く、ビートルズに負けず劣らず新しいレコーディング技術を試すことに熱心だった。やがて、ビートルズ、マーティン、エメリックはチームとして一体化し、向こう3年間に数あるロック・レコーディングのなかで最高にすばらしい作品群を生み出していくのである。

アルバム"REVOLVER"はまた、アーティフィシャル・ダブル・トラッキング(ADT)が初めて採用されたことでも有名だ。この技術は、アビイ・ロードのテクニカル・エンジニアだったケン・タウンゼンドがビートルズの要請に応えて考案したもので、現在では世界中のスタジオで採用されている。ADTにより、ビートルズは同じ効果を得るためにボーカルや楽器を二重に録音するという面倒がなくなった。また、'Tomorrow Never Knows'にはADTだけでなく、テープ・ループやレスリー・スピーカー(発明者ドナルド・レスリーの名をとった)に音声を通すという技術も使用されている。

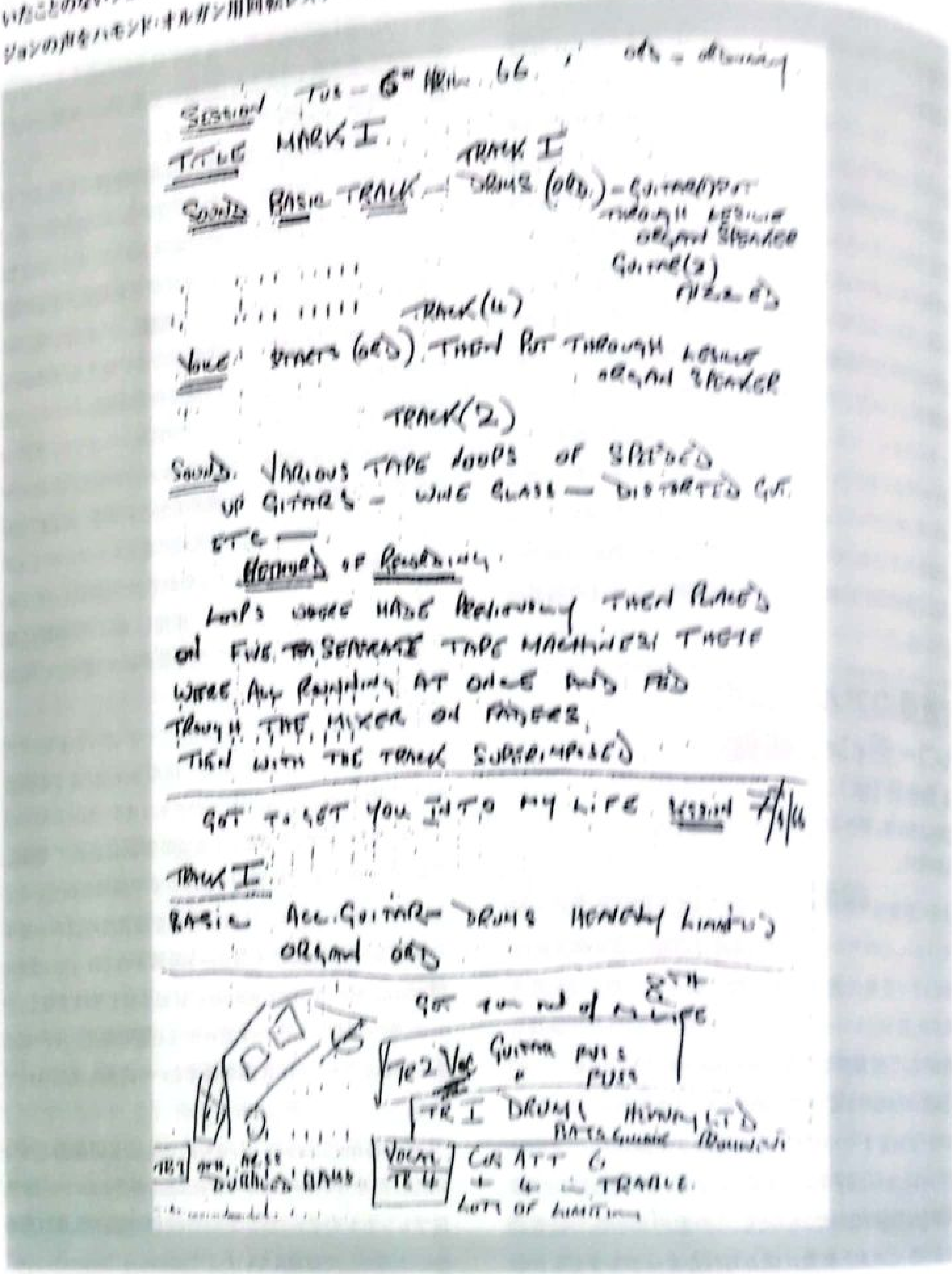
'Tomorrow Never Knows'でもっとも印象的なサウンドは、おそらくテープ・ループによるものだ。メンバーは全員ブレンネルのテープ・レコーダーを持っていて、暇になるとループを作っては遊んでいた。'Tomorrow Never Knows'

CamScannerでスキャン

のカモメの鳴き声のような音はディストーションをかけたギターの音で、ほかの何だかよくわからないようなサウンドは、逆回ししたギターの音やワイン・グラスの音をEMIスタジオのレコーダーを使って同時にミキシングしたものだ。

また、'Tomorrow Never Knows'にはこれまでに聴いたことのないジョンのボーカルが収録されている。これはジョンの声をハモンド・オルガン用回転レスリー・スピーカーの電気回路に通したもの。この技法は、4000人の僧侶がバックで合唱するなか、高い山の頂上で歌っているような雰囲気にしたいという作者ジョンの要望に応えて、ジョージ・マーティン、エメリックのチームが発案したもの。

'She Loves You'のレコーディングから3年もたたないうちに、ビートルズの音楽はここまできてしまっていたのである。



4月7日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から7時15分までのセッションでは、'Tomorrow Never Knows'のテイク3に前述したようなさまざまな効果を重ねるのに費やされた。午後8時15分から午前1時30分までのセッションでは、タムラ・モータウンの影響の濃いポールのすばらしいナンバー'Got To Get You Into My Life'を5テイク録音した。この曲のレコーディングは6月17日まで断続的に続けられ、最終的なアルバム収録バージョンに達するまでに多数の変更がある。

4月8日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から9時までのセッション。'Got To Get You Into My Life'をさらに3テイク録音し、リズム・トラックを完成させる。テイク8が、のちにボーカル、ギターおよび印象的なホーン・セクションが重ねられるベスト・テイクとなった。

ジョージ、本格的なインド音楽に挑戦
4月11日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から7時までのセッションでは、まず'Got To Get You Into My Life'にギターをオーバーダビング。次に、ジョージ初のインド指向の曲'Love You To'のレコーディングを開始した(最初この曲のタイトルは未定で、のちにりんごの品種にちなんだ'Granny Smith'という仮タイトルになるが、アルバム・リリース間近に'Love You To'に変更される)。

午後のセッションで3テイク、午後8時から午前12時45分にかけてのセッションで3テイクの合計6テイクを録音したが、1テイクごとに内容は複雑になっていった。ベストとなったテイク6のベーシック・トラックには、ジョージのアコースティック・ギターと仮ボーカル、ポールのベースが録音され、そこにシタールとタブラが重ねられた。"REVOLVER"のジャケットにはタブラ奏者としてアニール・バグワットの名前がクレジットされているが、シタール奏者の名前はない。ジョージ自身が弾いたのかもしれないが、新しく発見されたセッション資料によれば、バグワットと同じようにジョージの友人アヤナ・デーバ・アンガーディのつてで、北ロンドンのエイジアン・ミュージック・サークルからシタール奏者が紹介されたとも考えられる。

午前12時45分から1時までにこのレコーディングのラフ・モノ・ミックスを作り、ジョージがそれを持って帰った。

12枚目のシングル・レコーディング開始
4月13日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日はまったく趣の違う2回のセッションが行なわれた。午後2時30分から6時30分までのセッションでは、ジョージの作品'Granny Smith'('Love You To')のテイク6をリダクション・ミックスして(4トラック分を3トラックに圧縮して)テイク7とし、そこにジョージの新たなリード・ボーカル、リンゴのタンバリン、そしてポールのハーモニー・ボーカル(これは最終的に削除される)を重ねた。これでひとまず完成とみなされたため、6時30分までにモノ・ミックスを3種類作って、さまざまな編集処理が行なわれた。

8月にリリースされるアルバム"REVOLVER"とは別に、ビートルズは6月10日にニュー・シングルを出す。午後8時からのセッションでは、そのA面となるポールの'Paperback Writer'のレコーディングを開始した。午前2時30分までにリズム・トラックを2テイク録音したが、ちゃんとした形で最後までできたのはテイク2だけだった。これをベスト・テイクとして、翌日ここにオーバーダビングを加えることにする。

4月14日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から7時30分までのセッションで'Paperback Writer'を完成させた。前日の夜に録音したテイク2に、ポールのリード・ボーカル、フランス語の授業を思い出させるジョンとジョージの'Frére Jacqes'(フランスの童謡)のバック・ボーカルなど、多数のオーバーダビングを加えた。

午後7時30分から8時までに、完成したレコーディングからモノ・ミックスを作った。

CamScannerでスキャン

30分休憩したあと、午後8時30分から 'Paperback Writer' のB面収録曲 'Rain' のレコーディングを開始した。この曲には、リミッター、コンプレッサー、ジャングル・ボックス、レスリー・スピーカー、ADT、テープの逆回転、テープのスピード操作やボーカルのピッチ操作など、"REVOLVER" のレコーディング・セッションで駆使された最新の技術がふんだんに使われている。

午前1時30分までに5テイク録音し、リズム・トラックとボーカル・トラックを完成させた。'Rain' は次のセッションで完成することになる。

4月16日（土）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前1時30分まで11時間も続いたセッションで、タンバリン、ベース、ボーカルをオーバーダビングし、テープをリダクション・ミックスして、さらにオーバーダビングを加え、'Rain' を完成させた。セッション終了までに4種類のモノ・ミックスが作られ、3番目のバージョンがベストとなる（'Rain' のステレオ・ミックスは1969年12月2日まで作られない）。

4月17日（日）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から10時30分までのセッションで、ジョンの新曲 'Doctor Robert' のベーシック・トラックを7テイク録音した。この曲は、マンハッタンの病院から友人のところに幻覚剤を持ち出していたと噂されていたニューヨークの医者のことを歌ったもの。

4月19日（火）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

テイク7にボーカルをオーバーダビングし、'Doctor Robert' を完成させる。午後2時30分から12時までのセッションの最後にはこの曲のラフ・モノ・ミックスを作った。

4月20日（水）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前2時30分までのセッションで、新曲を2曲レコーディングしたが、のちにどちらもやり直し、12時間にわたるセッションの中心となったのは、ジョンの 'And Your Bird Can Sing' だった。2テイク録音し、ベストとみなされたテイク2のモノ・ミックスも作られるが、結局4月26日に録り直すことになる。

次に、ジョージの 'Taxman' のリハーサル・リズム・トラックを4テイク録音したが、翌日最初から全面的にレコーディングし直す。

4月21日（木）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前12時50分までのセッションで、ジョージの風刺がうまくきいた 'Taxman' のリズム・トラックを11テイク録音して、テイク11にオーバーダビングを加え、実質的に完成させた。

あとはイントロのカウント、イギリスの有名なふたりの政治家の名前を世界的に広める「ミスター・ウィルソン、ミスター・ヒース」というリフレイン、カウベル、エンディングのギター・ソロをオーバーダビングすれば最終バージョンになる（このギター・ソロは実際には間奏ソロのコピーで、6月21日の最終モノおよびステレオ・ミックス作業で編集される）。

4月22日（金）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から11時30分までのセッションで、'Taxman' にさらにオーバーダビング。カウベルと「ミスター・ウィルソン、ミスター・ヒース」のパートを重ねた。また、まだ 'Mark I' という仮タイトルのままだった 'Tomorrow Never Knows' にシタールとボーカルをオーバーダビング。

4月25日（月）

EMIスタジオ、第65室
London

CamScannerでスキャン

午前10時から11時までに、アセテート盤カット用に'Got To Get You Into My Life'のラフ・モノ・ミックスが2種類作られた。ただし、エコーは加えられず、ビートルズのメンバーも参加していない。

4月26日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

スタジオの予約は午後2時30分から5時30分までと午後7時から10時までだったが、ビートルズは午後2時30分から翌朝の午前2時45分までずっとジョンの'And Your Bird Can Sing'を録り直した。リズム・トラックを新たに11テイク録音し、ベストとなったテイク10にオーバーダビングした(リード・ギターの即興とポールのベース・フレーズがからむエンディングはテイク6がベストだったため、のちにこの部分がテイク10にリミックスされる)。

ミックスに深く関わり始める

4月27日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ビートルズはミックス・セッションに参加するようになっただけでなく、ミックス・セッションでの存在感も大きくなってきたことがこの日のスタジオの記録からわかる。この日は午後6時から11時30分までのセッションで、'Taxman'と'And Your Bird Can Sing'のミックスを1バージョンずつ、'Tomorrow Never Knows'を9バージョン作ったが、いずれも最終的には使用されない。
午後11時30分から午前3時までのセッションでは、ジョンの幻想的な新曲'I'm Only Sleeping'のレコーディングを開始した。アコースティック中心のベーシック・トラックを11テイクを録音した。この曲へのオーバーダビングは、4月29日、5月5日と6日に行なわれる。

再びポールとストリングスの曲

4月28日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日やった曲も'Yesterday'同様に情感豊かで美しかった。この曲もまた(バック・コーラス以外は)ポールとセッション・ミュージシャンだけを使い、ほかのビートルズは演奏しなかった。そして、この曲でもジョージ・マーティンはアレンジを手がけた(その報酬として15ポンド受け取る)。しかし、比較が成り立つのはそこまでで、'Eleanor Rigby'は決して'Yesterday'の焼き直しではなかった。
午後5時から午前2時までの長いセッションで、この曲のベースともなる弦楽器のパートを録音した。ポールとジョンが第2スタジオのコントロール・ルームに座り、トークバック・システムを通して、スタジオでミュージシャンたちを指揮するジョージ・マーティンとやりとりしながら録音を進めた。この日は、弦楽四重奏2組分となる計8人のミュージシャンが呼ばれていた。
第1バイオリン奏者はトニー・ギルバート、その他のバイオリン奏者はシドニー・サックス、ジョン・シャープ、ユルゲン・ヘス、ビオラはスティーブン・シングルズとジョン・アンダーウッド、チェロはデレク・シンプソン、ノーマン・ジョーンズだった。8台の楽器は、1トラックに2台ずつ、4トラック・テープのすべてを使って録音された。そのためセッションの最後にベストとなった最終テイクのテイク14を圧縮したテイク15を作り、ポールのリード・ボーカルとジョンとジョージのバック・ボーカルをオーバーダビングするためのあきトラックを用意した。

4月29日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後5時から午前1時までのセッションでは、'Eleanor Rigby'にボーカルをオーバーダビングするのがおもな作業となった。レコーディングが完成したと判断すると、モノ・ミックスが作られた(しかし6月6日に再びオーバーダビングが行なわれたためこのミックスは不要となり、最終的には6月22日に改めてミックスされる)。
そのあと、録音済みの'I'm Only Sleeping'にジョンのリード・ボーカルを加えた。この曲は3回にわたってオーバーダビングが行なわれるが、この日はその1回目。

イギリスで最後のコンサート出演

5月1日(日)
エンパイア・プール
Wembley

CamScannerでスキャン

Diary1966

「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌主催の人気投票優勝者オールスター・コンサートへの4回目にして最後の出演。1965/66年度のこのコンサートは、日曜の午後、1万人の観客の前で行なわれた。このコンサートはまた、ビートルズのイギリスでの最後のライブ出演でもあった。ビートルズは、'I Feel Fine' 'Nowhere Man' 'Day Tripper' 'If I Needed Someone' 'I'm Down'を演奏した。1964/65年度のオールスター・コンサートのときと同様に、コンサートのもようはABCテレビがビデオ収録したが、ABC側とビートルズ、ローリング・ストーンズのマネージメントとの間の契約交渉が折り合わなかったため、両バンドが演奏するときだけカメラの電源が切られてしまった。ただし、ビートルズが人気投票優秀賞のトロフィを、ジョンが個人賞のトロフィを受賞する場面は収録され、5月15日午後3時50分から5時まで2回にわたって放送されるABCの70分番組「ポール・ウィナーズ・コンサート」の第2部で紹介される。この番組はビートルズとローリング・ストーンズの演奏が省かれているため、一部のITV系列局を除き、ロンドンを含む大半のITV局では放送されない。

5月2日(月)
プレイハウス・シアター
London

BBCラジオの収録。ただし演奏はしていない。最初に収録したのは、6月4日午前10時から正午までBBCラジオで放送される「サタデイ・クラブ」400回記念番組用の、ブライアン・マシューとのインタビューだった。収録は午後5時からプレイハウス・シアターで行なわれ、ビートルズは制作中のアルバムのことや8月に予定されているアメリカ・ツアーについて語るが、メディアの露出や公演が減っていることについての質問はたくみにかわしている。このインタビューの32秒間の抜粋が番組冒頭に使われ、午前10時30分から11時までには3分34秒間分、さらに11時31分から11時59分までの海外同時放送分でも1分24秒間と35秒間の2回の抜粋が放送。35秒間のほうは番組のエンディングにも使われ、ビートルズは番組のテーマ曲 'Saturday Jump' を鼻唄で歌ってハミングし、そのままトニー・オズボーン・アンド・ヒズ・ジャズ・グループによるレコード・バージョンに移るという構成だ(1965年のクリスマス放送分のこの番組では、ビートルズはこのテーマ曲を鼻唄ではなくちゃんと歌った。1965年11月29日参照)。

そのあとポールとリンゴだけが残り、今度はひとりずつ［…］ユーからインタビューを受けたが、これはBBC転写サービスが海外向けに制作している番組「ポップ・プロフィール」用の収録だった。1965年11月30日にジョージとジョンの個別インタビューが行なわれたのと同じシリーズの番組だ。リンゴは午後5時から、ポールは午後5時30分から［…］始まった(当初このインタビューは4月29日の午後に［…］スタジオで収録される予定だった)。インタビューはそれぞれ15分ずつ収録されたが、3分に編集され、「ポップ・プロフィール」のテーマ曲を加えた［…］の7インチ・レコードになり、5月末に世界各地の契約ラジオ局へ発送される。

5月5日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日'I'm Only Sleeping'のテイク11にギターの逆回転の響きを重ねることにした。気に入ったフレーズを決め、それを終わりのほうから弾く。それをテープを逆さまにした状態であきトラックに録音し、通常の回転で録音したものとミックスすると、逆回転ギターの不思議な響きが出来あがる。午後9時30分から午前3時までのセッションで、ジョージはこの作業にかかったが、1パートだけでなく2パートも録音し、その2種類のソロをさらに重ねていった。

5月6日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前1時まで行なわれたセッションでは、'I'm Only Sleeping'にさらにボーカルをオーバーダビングし、あきトラックを作るためにテイク11をリダクション・ミックスしてテイク13とした。そのあと午前2時15分まで、このテープのモノ・ミックスを作った。

5月9日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から11時までのセッションで、ポールのバラードの傑作 'For No One' のピアノとドラムを10テイク録音した。

続いて、ポールがジョージ・マーティンの会社AIRから5ギニーで借りたクラビコードと、リンゴがシンバルとマラカスをテイク10に追加。'For No One'のレコーディングにはジョンとジョージは参加していない。
ポールは5月16日にリード・ボーカルをオーバーダビングし、さらにその3日後、すばらしいフレンチ・ホルンのソロを録音する。

アメリカ盤用に新しい曲をミキシング

5月12日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

アメリカ盤のアルバム"HELP!"にはビートルズのオリジナル曲が7曲しか収録されず、"RUBBER SOUL"も12曲(そのうち2曲はイギリス盤"HELP!"の収録曲)に削ってあったので、キャピトル・レコードにはアメリカ未発表曲がすでにアルバム1枚分近くたまっていた。手もとには8曲あり、あと3曲ほどあると理想的だったため、キャピトルがニュー・アルバム"REVOLVER"の収録曲3曲を先にもらえないかと打診したところ、EMIは了承した。そこで、さっそくこの日の午後1時45分から3時30分までに、'Doctor Robert''I'm Only Sleeping''And Your Bird Can Sing'の3曲のモノ・ミックスと編集作業が行なわれた(ステレオ・ミックスは5月20日に用意される)。
キャピトルはこの3曲を加えてアルバム"YESTERDAY AND TODAY"を6月20日にリリース。しかし、この3曲はイギリス盤の"REVOLVER"に収録するにあたってミックスし直されることになり、アメリカ盤の収録バージョンとは微妙に違う。

5月16日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前1時30分までの長いセッションで、オーバーダビングとミキシング、さらにマスター・テープを作るためこれまでにレコーディングした曲のベスト・ミックスをコピーする作業にいそしんだ。'Taxman'は最後のダビングをして(イントロの「1, 2, 3, 4」というカウント)、それからモノ・ミックスが作られた。また、ポールは'For No One'にリード・ボーカルをオーバーダビングした。

5月18日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前2時30分までの12時間にわたるセッションで、4月7日にレコーディングを開始した'Got To Get You Into My Life'を完成させた(ただし6月17日に最後のちょっとしたオーバーダビングも行なわれる)。この曲の印象的なホーンもこの日レコーディングされたものだ。レコーディングに呼ばれたホーン・セクションは、ジョージィ・フェイムのバンドのブルー・フレイムズにいたエディ・ソーントン(スーパー・オールド・トランペット)とピーター・コー(テナー・サックス)のふたりと、フリー・ミュージシャンのイアン・ヘイマー、レス・コンドン(ともにトランペット)、アラン・ブランズカム(テナー・サックス)という顔ぶれで、テイク8へオーバーダビングをした。ホーン奏者にはそれぞれ18ポンドの報酬が支払われただけでなく、このセッションの詳細が音楽誌に絶えずレポートされていたため、ほかのアーティストからも依頼が殺到するようになった。
これで4トラック分いっぱいになったが、前に録音したボーカルがしっくりこなくて、テープをリダクション・ミックスしながらボーカルを消去してテイク9とした。これに、ポールのリード・ボーカルとジョンとジョージのバック・ボーカルを新たにオーバーダビングし、さらにギターを加えた。セッションの最後に、モノ・ミックス2種類が作られた。

'Paperback Writer'のプロモ・クリップ

5月19日(木)

EMIスタジオ、第1スタジオ/第3スタジオ
London

1966年6月16日のテレビ出演を除いて(6月16日参照)、ビートルズはニュー・シングルのプロモーションのためにテレビ出演することはやめていた。1965年11月23日にトゥイッケナム・スタジオで始めたプロモーション・クリップの制作がビートルズのプロモーション・パターンとして定着したからで、これは1969年まで続く。したがって新曲'Paperback Writer'のリリースをアメリカで5月30日に、イギリスでは6月10日に控えていたビートルズは再びプロモーション・クリップの撮影をする必要にせまられた。

CamScannerでスキャン

11月の撮影と同じように、アメリカ向け、イギリス向け、そして各テレビ番組向けの、それぞれバージョンが違うクリップが撮影された。ビートルズは2日間で'Paperback Writer'を4種類(カラー2種類とモノクロ2種類)、B面の'Rain'を3種類(カラー2種類とモノクロ1種類)を撮影した。初日であるこの日は、慣れ親しんだアビイ・ロードのEMI第1スタジオで、プロモーション・クリップを撮影した(翌日はロケ地でフィルム撮影)。

前回のように、スタッフと機材はインター・テル(VTRサービス)に依頼し、監督は両日とも「レディ・ステディ・ゴー!」の演出を担当し、ビートルズからも演出が想像力豊かだと評価が高かったマイケル・リンゼイ=ホッグが担当した。その後ビートルズとリンゼイ=ホッグは、'Hey Jude'と'Revolution'のプロモーション・クリップ(1968年9月4日参照)、映画"LET IT BE"へと発展する"GET BACK"プロジェクト(1969年1月2日以降参照)でも手を組むことになる。

この日は午前10時からカメラ・リハーサルを始め、10時40分から'Rain'の最初のカラー・クリップを撮影した。続いて撮影したばかりのビデオを再生し、内容をチェック(この便利さがビデオで制作することにした大きな理由のひとつでもあった)。午後1時10分から2時までは'Paperback Writer'のカラー・クリップを撮影したが、カラー・クリップは両方ともアメリカのテレビ局向けだった(イギリスのテレビ局がカラー放送を開始するのはこれより1年半後のことである)。このカラー・クリップ2本はCBSテレビの「エド・サリバン・ショー」で6月5日午後8時から9時(EST)に、ビートルズからエド・サリバンと視聴者へのメッセージ・ビデオとともに独占的に放送される。'Paperback Writer'のビデオの前に挿入されたメッセージはこの日の午後6時15分から6時30分の間に撮影され、3月25日の「ブッチャー」フォト・セッションでロバート・ウィテカーが撮影したカラー・ポジを、ビートルズが顔の前で透かして見るシーンから始まる('Paperback Writer'のクリップもポールが同じカラー・ポジを吟味しているシーンで始まっている。注目されるのは、この2日間に撮影されたクリップでは、ポールの顔つきがいつもと違うこと。じつはバイクで事故を起こして前歯を折っていたのだ)。

昼食のあと午後3時30分から6時15分まで、再び第1スタジオで'Paperback Writer'のモノクロを2種類、'Rain'のモノクロを1本撮影した。'Paperback Writer'の1本めのモノクロ・クリップは、6月25日午後5時50分から6時35分にABCテレビの番組「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」の最終回「グッドバイ・ラッキー・スターズ」で放送(ただし、すべてのITV系列局がこの番組を放送するわけではない)。2本目のモノクロの'Paperback Writer'とモノクロの'Rain'のクリップは、6月3日午後6時7分から6時[illegible]分のレディフュージョンの番組「レディ・ステディ・ゴー!」で放送される。基本的に自局のスタジオで制作した素材のみを放送するというポリシーを通してきた「レディ・ステディ・ゴー!」が、初めて妥協を強いられることになる。

第1スタジオでのビデオ収録のあと、ポールは第3スタジオに移り、午後7時から11時まで'For No One'にすばらしいフレンチ・ホルン・ソロをオーバーダビングするところに立ち会って、必要に応じて指示も出した(ほかのメンバーの行動は不明)。

ジョージ・マーティンがこのために連れてきたのは、フィルハーモニア・オーケストラの第一ホルン奏者、アラン・シビルだった。シビルはソロを何度か演奏したが、いずれもその前のテイクとはまったく趣の違うものになった。これが最高だろうとポールとマーティンが判断した時点でソロのレコーディングは終了。シビルには50ギニーという破格の報酬が支払われ、"REVOLVER"のジャケットにも名前がクレジットされた。以後シビルは、多くの人々にとってはクラシック界での輝かしい経歴よりビートルズのアルバムに貢献したという事実のほうがよっぽど重要なのだということを知ることになる。

5月20日(金)
チズウィック・ハウス
Burlington Lane, Chiswick, London

ビートルズ、プロモーション・クリップ監督のマイケル・リンゼイ=ホッグ、そしてスタッフは、ロンドン西部にあるチズウィック・ハウスという18世紀初めに造られた美しい庭園に出かけ、撮影をした。目的はプロモーション・クリップをもう2本フィルムで(ビデオ・テープではなく)撮影することだ。ここで'Paperback Writer'と'Rain'を1本ずつ撮影した。どちらも演奏シーンは一部だけで、広い庭園で散歩したりくつろいだりしている4人の姿が撮影されている。

'Rain'では、壁に囲まれた庭園や温室で撮影したり、木立のなかで演奏したり、杉の枝に腰かけたりする(その一連の流れで、リンゴは彫刻のない大理石の台座の上に自

分が代わりに座ってみせる)。'Paperback Writer'では、温室の前にあるベンチに座っているシーンと影像がたくさん並んだ庭園で演奏するシーンを撮影した。

2本ともカラー35ミリ・フィルムで撮影されたというのに、白黒だったBBC1の「トップ・オブ・ザ・ポップス」で、'Paperback Writer'が6月2日と6月23日に、'Rain'は6月9日(すべて木曜の午後7時30分から8時)に放送される。前日撮影した白黒放送にふさわしいモノクロ・クリップはこの番組では使わない。

一方、EMIスタジオでは午前11時から午後12時30分まで、ジョージ・マーティンが"REVOLVER"のセッションが始まってから初めてステレオ・ミキシングと編集作業にとりかかった。5月12日にはすでにキャピトルの"YESTERDAY AND TODAY"のために3曲('And Your Bird Can Sing' 'Doctor Robert' 'I'm Only Sleeping')のモノ・ミックスを作っていたので、この日はこれら3曲のステレオ・ミックスを2セット制作した。ひとつはキャピトル用、もうひとつはイギリス向け"REVOLVER"のマスター用だった(しかし、このステレオ・ミックスの到着が間に合わなかったのか、"YESTERDAY"...AND TODAY"の初回プレスでは、モノ・マスターから作った疑似ステレオ・バージョンが収録されている)。

5月26日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

どんな年ごろの子どもにも楽しんでもらえるようにと、ほとんどポールがひとりで書いた'Yellow Submarine'は、"REVOLVER"に収録されるだけでなく、アルバムと同時発売されるシングルにも収録されてナンバーワンになる。午後7時から午前1時までのセッションで、この曲のベーシック・トラックとリンゴのリード・ボーカル、そしてジョン、ポール、ジョージによるバック・ボーカルを5テイク録音した。

食中毒で体調を崩したジョージ・マーティンは、この日のセッションに参加できなかった。(マーティンのはからいで、ビートルズのスタジオ作業を手伝うようにと彼の婚約者となっていたジュディ・ロックハート=スミスがスタジオに来ていたが)マーティンの代役はエンジニアのジェフ・エメリックが務めた。

ボブ・ディランのドキュメントにジョンが参加

5月27日(金)

ウェイブリッジ〜ロンドン
Weybridge to London

この日、ボブ・ディランとジョン・レノンを撮影した長いフィルムからは、この当時、無邪気なポップ・ミュージックがアーティストの主張が前面に打ち出されたロック・ミュージックへと変貌しつつあったことがよくわかる。

ディランはそれまでのフォーク・イメージを捨て、のちのザ・バンドをバックに従えたエレクトリック・サウンドへ転向して初めて演奏する記念すべきコンサート・ツアーのためイギリスを訪れていた。ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでディランのコンサートが行なわれたのもこの日の夜のことで、ジョンとジョージはディランをなじる観客に混じってディランに声援を送っていた。

そして、この日の早い時間に、サリー州のウェイブリッジにあるジョンの家からロンドン中心部のストラットン・ストリートにあるメイ・フェア・ホテルまで移動する運転手付きのリムジンの車中でディランとジョンの撮影が行なわれた。しかし、この映像には台本もなければ、ふだんの自分のままでいるようにという以外にとくに演出の指示もなかったため、冗長で、支離滅裂で、何が言いたいのかわからない映像になっている。しかも悪いことに、ディランは(おそらくディランほどではないがジョンも)明らかに薬で飛んでいた。わけのわからないことをしばらくしゃべり続けたあとで、ディランは突然、気持ちが悪くなったから吐きたいと白状した。運よく、車はすでにパーク・レイン・ホテルに到着した。

じつはこのフィルムは、ディランのヨーロッパ・ツアーをドキュメントふうに追っていく「イート・ザ・ドキュメント」の一部として撮影されたもので、ディランは演出をD・A・ペンベイカーにまかせていた。アメリカのテレビ・ネットワークABCはスポンサーとして出資していたが、内容についてはディランがアーティスティック・コントロールを完全に握っていて、アメリカに帰国してからもザ・バンドのロビー・ロバートソンと編集を行なう。しかし、ABCは出来あがった映像のラフ・カットを突き返し、ディラン自身も悪名高いオートバイ事故を起こすという不運が重なり、「イート・ザ・ドキュメント」はしばらくお蔵入りになってしまう。このフィルムは1969年にニュ

ーヨークの小さな映画館で1週間上映、またニューヨークの教育チャンネルWNDT-TVで1回だけ放送され、その後まったく公開されていない。完成したフィルムでは、この日撮影したディランとジョンのシーンは短く編集されている。また、監督のD・A・ペンベイカーは、このヨーロッパ・ツアーのフィルムをまとめて純粋なプライベート作品"YOU KNOW SOMETHING IS HAPPENING"を制作している。これには車のシーンが6分間含まれていたが、やはり公開はされていない。

大騒ぎのレコーディング、'Yellow Submarine'

6月1日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日のレコーディング・セッション以上に風変わりなレコーディングなどそうざらにないだろう。午後2時30分から午前2時30分までの'Yellow Submarine'の音響効果ダビング・セッションでビートルズとその大勢の助っ人は、大騒ぎしながらありとあらゆる音をマルチ・トラック・テープにぎゅうぎゅうにつめこんだのだった(しかし、レコードではせっかく録音したこの効果音はところどころにしか使われていない)。

ジョンはバケツに水をはってアブクをたて、第2スタジオに隣接するエコー室から「Full speed ahead Mister Captain(全速前進します、艦長!)」と叫んだ。ブライアン・ジョーンズ、マリアンヌ・フェイスフル、ジョージの妻パティ、ジョージ・マーティン、ビートルズのアシスタントのニール・アスピノールとマル・エバンズ、残りのビートル、アビイ・ロードのスタッフのジョン・スキナーとテリー・コンドンがこの楽しいセッションに参加し、あらゆるおかしな物音を鳴らしてみては、どんどん暴走していくコーラスに合わせて声を張り上げていった。レコーディングが終わったあとも、バス・ドラムを胸に抱えたマル・エバンズのあとに全員が1列に並んで「We all live in a yellow submarine」と歌いながらスタジオ内を行進した。

一方、これとは対照的に、緻密にそして念入りに作られた秀逸な、あるオーバーダブ用のセクションも、残念なことにまったく使用されずに終わる。これは曲の冒頭につながっていくリンゴの語りで、およそ31秒間あるものだった。これひとつのために少なくとも4回の録音が行なわれたはずで、リンゴの声を前面に押し出しながら、また同じ内容を語るジョン、ポール、ジョージの声もミックスされる。テーマは、イギリスの南西端のランズ・エンド岬からスコットランドの北東ジョンオグローツまで(つまりブリテン島全土)を行進するのも辞さないというもの。「And we will march to free the day to see them gathered there, from Land O'Groats to John O'Green, from Stepney to Utrecht, to see a yellow submarine(そして僕らは行進する。あそこに集まった人々をこの目で見る、その日が来るまでは。ランド・オグローツからジョン・オグリーンまで、ステップニーからユトレヒトまで、あの黄色い潜水艦を見るために)」と繰り返すリンゴの語りには、「石炭を入れたダンボール箱をゆすって作った」行進の足音の効果音が重ねられている。かなりの労力を注ぎ込んだオーバーダビングであるにもかかわらず、ビートルズはこれをボツにする(1996年、シングル'Real Love'のカップリングとして収録)。

曲のタイトルを決められないジョージ

6月2日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズのアルバムの14曲中3曲という、これまででいちばん多くの作品を提供することになったジョージは、いつも曲のタイトルをなかなか決められずにいた。りんごの品種からつけられた'Granny Smith'は、最終的に'Love You To'に決まったものの、歌詞にはこの言葉はいっさい使われていなかった。'I Want To Tell You'のときもまた同じ悩みでジョージは苦しんだ。最初にマーティンが曲のタイトルをたずねたときなど、ジョージは「I don't know(わかんない)」と答えたほどだった(このせいでしばらくは'I Don't Know'が仮タイトルになっていた)。とりあえず、またしてもりんごの品種にちなんで仮タイトルを'Laxton's Superb'とし、ジェフ・エメリックがこの曲のダビングを担当した。しばらくして'I Want To Tell You'というタイトルが決まる。この日午後7時から午前3時30分までのセッションでは、'Yellow Submarine'のラフ・モノ・ミックスを作ったほか、'Laxton's Superb'のリズム・トラックを5テイク録音し、そのうちのテイク3にオーバーダビングした。さらにこれをリダクション・

ックスしたものを、翌日のオーバーダビング用のテイク4とした。

6月3日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'I Want To Tell You'への最後のオーバーダビングとして、ポールのベースを加えた(ベースをあきトラックに個別に録音すると、ミキシング段階でかなりいろいろな処理が可能になるからだ)。午後7時から午前2時30分までのセッションの最後に、この曲のモノ・ミックスを4種類と'Yellow Submarine'のモノ・ミックスを5種類作った。

6月6日(月)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後7時から12時まで、'And Your Bird Can Sing' 'For No One' 'I'm Only Sleeping' 'Tomorrow Never Knows'のテープ・コピーとモノ・ミックスが行なわれた。午前12時から1時30分まで、ポールが'Eleanor Rigby'に最後のボーカルをオーバーダビングした。

6月8日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム"REVOLVER"の収録曲のなかでもっとも手っ取り早くレコーディングが終わったのはポールの'Good Day Sunshine'だった。リリースされるバージョンは、なんとテイク1なのである。とは言っても、多数のオーバーダビングが加えられるため、もちろん1963年や1964年当時のライブ一発録りとは比較にならない。実際には、午後2時30分から午前2時30分までのセッションで、ビートルズはこの曲のリズム・トラックを3テイク録音しているが、ポールのリード・ボーカルとジョンとジョージのバック・ボーカルはテイク1にオーバーダビングされた。また、6月9日にもさらにオーバーダビングされる。

午後1時から2時までは、ジェフ・エメリックが6月6日に作った'And Your Bird Can Sing'の2種のモノ・ミックスをひとつに編集した。

6月9日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から8時までのセッションで、'Good Day Sunshine'にジョージ・マーティンがホンキートンク・ピアノ・ソロをオーバーダビングし、この曲を完成させた。最後にモノ・ミックスを6種類作り、めずらしく予定終了時刻10時より2時間も早くセッションを終えた。

6月14日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ポールは美しいバラードを作曲する才能をすでに開花させていたが、なかでも'Here, There And Everywhere'は出色の仕上がりだった。この曲のレコーディングは3日間にわたって行なわれる。

午後7時から午前2時までの1回目のセッションでは、リズム・トラックを4テイク録音したが、最後まで録音できたのはテイク4だけ。これにボーカルをオーバーダビングする。

10か月ぶりのテレビ出演 テレビで最後の生演奏

6月16日(木)

テレビジョン・センター、第2スタジオ
London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

「トップ・オブ・ザ・ポップス」のプロデューサー、ジョニー・スチュワートは忍耐強い人物だった。オンエア開始から2年半の間に、イギリスのポップ・テレビ番組のトップとしてのステイタスをすでに築いていたものの、肝心のビートルズは「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」や「レディ・ステディ・ゴー!」、それにアメリカの「エド・サリバン・ショー」にまで生出演していながら、この番組にだけはただの一度も生出演していないという恥をしのんでいた。さらに番組開始当初はBBCのスタジオでビートルズの演奏を独占的に収録していたのに、ニュー・シングルが出るたびにプロモーション・クリップを渡され、ビートルズにどんどん手が届かなくなるという逆境にも耐えていた。そこで6月13日、スチュワートはブライア

ン・エプスタインに手紙を書き、次の木曜の番組にビートルズに出演してくれるよう説得してほしいと懇願した。そこでエプスタインが14日の'Here, There And Everywhere'のセッション中にメンバーにこの話をすると、どういう風の吹きまわしか、その返事はイエスだった。

皮肉なことに、これはこの番組へのビートルズ初の生出演を飾っただけでなく、じつに10か月ぶりのテレビ出演であり、(1967年6月25日の'All You Need Is Love'の世界中継を除き)テレビ番組で生演奏する最後の機会となり、ポップ番組への最後の出演となった。

午後2時30分からのカメラ・リハーサル、写真撮影、記者会見に合わせて、ビートルズはウエスト・ロンドンのホワイト・シティにあるBBCのテレビジョン・センター入りした。午後4時15分から5時30分までと、午後6時30分から7時まで、カメラ・リハーサルを行ない、午後7時30分から8時までBBC1の生放送に出演した。ビートルズは最後に登場し、'Rain'と'Paperback Writer'をこの順序で口パクした。台本どおりの無表情な司会者ピート・マレーでさえ、ビートルズの2曲を紹介できることに、いたく感激しているようだった。

この日の'Paperback Writer'の演奏は、6月30日午後7時30分から8時にBBC1の同番組で放送。さらに12月26日午後6時15分から7時の「トップ・オブ・ザ・ポップス'66・パート1」でも再放送される。また、翌6月17日午後11時5分から11時37分のBBC2の番組「ラインナップ・レビュー」でも、1分22秒の抜粋が放送される。

しかし、このような幸運は往々にして二度と起こらないものだ。それどころか、次の両A面シングル'Yellow Submarine/Eleanor Rigby'の発売時は、ビートルズはもちろんテレビ出演はしないし、プロモーション・クリップさえ制作しないのだ。したがって、「トップ・オブ・ザ・ポップス」ではこの2曲のためにイメージ・ビデオを制作しなければならなくなった。'Yellow Submarine'用には、ブリティッシュ・サブ・アクア・クラブのメンバー11人がスイミング・プールで泳いでいる映像が撮影され、'Eleanor Rigby'用には、BBCの(元俳優の)道具係が牧師のかっこうをしてマンチェスター共同墓地で芝居用のセットを並べて祈っているスチールなどが制作され、番組で使われる。

テレビ生出演を終えたビートルズは、EMIでレコーディング・セッションをするためセント・ジョンズ・ウッドに直行した。予定は午後7時からだったが、スタジオに到着したのは午後8時30分近くだった。午前3時30分までセッションを続け、'Here, There And Everywhere'をさらに9テイク録音し、ベストとなったリズム・トラックのテイク13にオーバーダビングを加えた。さらにリダクション・ミックスしたテイク14に、ポールがリード・ボーカルをオーバーダビング。ポールはテープ・スピードを落とした音に合わせてボーカルをレコーディングした。通常のテープ・スピードで再生すると、ボーカルのピッチがあがるためだ。

6月17日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この午後7時から午前1時30分までのセッションでは、'Here, There And Everywhere'にポールのリード・ボーカルをさらにオーバーダビングして、バック・ボーカルもポールが歌った。また、'Got To Get You Into My Life'にさらにギターを追加。最後に'Here, There And Everywhere'のモノ・ミックスを1種類、'Got To Get You Into My Life'の新しいモノ・ミックスを5種類作った。

6月20日(月)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午後6時から8時30分にかけて、ブラス・サウンドの厚みを2倍にした'Got To Get You Into My Life'の新たなモノ・ミックスを作った。

アメリカではブッチャー・カバーが物議を醸し、"YESTERDAY AND TODAY"が新しいジャケットで再リリースされる。

6月21日(火)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

14曲目、つまり最後のアルバム収録曲をレコーディングし、大量のモノおよびステレオ・ミキシングをこなすという、盛りだくさんの多忙な1日となった。

午後7時から午前3時45分までのセッションで、ジョンの新しい曲'She Said She Said'のレコーディングを開始し、4テイク録音して完成させた。レコーディング開始時にはま

CamScannerでスキャン

定だったタイトルも完成時までに決まる。この曲の歌詞は、ビートルズが前年にアメリカ・ツアーでロサンゼルスを訪れたときに(1965年8月28日参照)、LSDでトリップ中の映画俳優ピーター・フォンダとの尋常ならざる会話から、ジョンがヒントを得て書いたもの。セッションの最後に、モノ・ミックス3種類を作った。

また、この日の午前10時から午後1時までと午後2時30分から6時30分までに、'Love You To' 'I Want To Tell You' 'Here, There And Everywhere' 'For No One' と 'Taxman' のステレオ・ミキシングと編集作業が行なわれ、'Here, There And Everywhere' 'For No One' 'Doctor Robert' 'Taxman' のモノ・ミックスも作られた。

アルバム "REVOLVER" 完成

6月22日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

アルバム "REVOLVER" の最後のモノおよびステレオ・ミキシングは、午後7時から午前1時30分という遅い時刻に行なわれたことから考えて、ビートルズが直接関与していたことは明らかだ。'Eleanor Rigby' 'She Said She Said' 'Good Day Sunshine' のモノ・ミックスと、'Eleanor Rigby' 'She Said She Siad' 'Good Day Sunshine' 'Yellow Submarine' 'Tomorrow Never Knows' 'Got To Get You Into My Life' のステレオ・ミックスが作られた。このアルバムはイギリスで8月5日にリリースされる。

ただ、"REVOLVER" というタイトルはビートルズがあげていた多数のタイトル候補のひとつにすぎなかった。7月2日、日本に滞在中のビートルズが電報で知らせてきた最終決定でようやく決まる。ほかにも "ABRACADABRA" も有力候補だったが、これはすでにほかのアーティストが使っていた。さらに "MAGIC CIRCLES" や "BEATLES ON SAFARI" などのタイトルが候補にあがっていた。

この日、新しいクラブ「シビラス」がロンドンにオープン。ジョージとサー・ウィリアム・ピゴットブラウンの共同経営。ビートルズとローリング・ストーンズのメンバーがオープニングに現れる。

ミュンヘンからワールド・ツアー開始

6月24日(金)

サーカス・クローネ・バウ
Marsstrasse, Munich, West Germany

ビートルズは6月23日にミュンヘンへ飛び、24日の午後5時15分からと9時からの2回の公演を行なって、短いワールド・ツアーを開始した(西ドイツのエンターテインメント誌「ブラボー」が主催したこの国の公演は「ブラボー・ブリッツトゥルネー」と冠されていた)。このツアーでのビートルズのレパートリーは、'Rock And Roll Music' 'She's A Woman' 'If I Needed Someone' 'Day Tripper' 'Baby's In Black' 'I Feel Fine' 'Yesterday' 'I Wanna Be Your Man' 'Nowhere Man' 'Paperback Writer' 'I'm Down' だった。

2回目の公演は西ドイツの国営テレビ局ZDFの5人編成の撮影スタッフによって収録され、7月5日午後8時から8時45分にチャンネル2の「ディー・ビートルズ」で放送される。この45分番組は、まずクリフ・ベネット・アンド・レベル・ラウザーズ、ラトルズ(Rattles)、ピーター・アンド・ゴードンの前座から始まり、ビートルズが演奏した全11曲のうち、'If I Needed Someone' 'Day Tripper' 'I Wanna Be Your Man' 'Paperback Writer' の4曲を除いた7曲の演奏が放送される。

ツアー前にまったくリハーサルをしていなかったことは、'I'm Down' の演奏の前にステージ上で、ジョン、ポール、ジョージの3人が1番の歌詞について打ち合わせをしなければならなくなった姿に表れていた。にもかかわらずポールが間違えたので、2番と3番の歌詞もめちゃくちゃになってしまった。またジョージも、今回のステージでは(ギターとドラムを含め)全員で演奏した 'Yesterday' を、アルバム "BEATLES FOR SALE" に入っている曲と紹介する始末だった。

6月25日(土)

グルーガハッレ
Norbertstrasse, Essen, Nordrhein-Westfalen, West Germany

前年にエリザベス女王が西ドイツを公式訪問したときに利用したという特別列車に乗り、ビートルズはミュンヘンからエッセンまで移動した。ビートルズの4人とスタッフ5人には、

CamScannerでスキャン

それぞれ車内に個室のスイートルームが用意された。
グルーガハッレで2回の公演を終えると、一行はすぐにまた駅に戻って列車に乗り、次の目的地ハンブルクに向かった。
この日、'Paperback Writer' がイギリスとアメリカで同時にNo.1を獲得。

3年半ぶりのハンブルク

6月26日(日)

エルンスト・メルック・ハッレ
Jungtusstrasse, Hamburg, West Germany

6月26日午前6時すぎ、ビートルズを乗せた列車はハンブルクの中央駅に到着した。4人がハンブルクに足を踏み入れるのは、1963年1月1日、まだ無名に近かった自分たちがスター・クラブで2週間にわたるクリスマス公演を終えて、この町をあとにして以来のことだった。
駅や公演前のエルンスト・メルック・ハッレの楽屋には昔なつかしい顔が続々と訪れ、アストリット・キルヒヘル、ト・ケンプフェルトをはじめ、金髪でグラマーなスター・クラブの女バーテン、ベッティーナ・ダーリーンまで来ていた。
各回5,600人の観客を集めた2回の公演のあと、会場の外で、若者が警官に催涙ガスの入った筒などを投げるといった暴動騒ぎが起こり、44人が逮捕された。夜になるとジョンとポールは抜け出してレーパーバーンまでのノスタルジックな真夜中の散歩に出かけることに成功し、なじみの店やなつかしい友人のところへ顔を出した。
6月27日、ビートルズはいったんロンドン空港に戻るが、数時間後、今度は日本に向けて出発。しかし、台風が近づいていたため、ビートルズが乗った飛行機はアラスカのアンカレッジで9時間も足止めされる。用心を重ねてビートルズは地元ホテルの1フロア丸ごと借り切って待機したものの、30分もたたないうちにビートルズがホテルにいるという噂が広まり、ラジオ局の報道陣がホテルの前に押しかけてビートルズが出発するまで分刻みで中継報告を続ける騒ぎになる。
6月30日の午前3時40分、一行はようやく東京の羽田空港に到着する。

日本武道館で初公演

6月30日(木)〜7月2日(土)

日本武道館大ホール
東京都千代田区代官町

日本武道館大ホールで6月30日に1回、7月1日と2日に2回ずつ、計5回の公演を行なった。各回とも1万人の観客が入った。
6月30日の初回公演と7月1日の1回目の公演は、日本テ

ビ(NTV)がカラーでビデオ収録した。この2本のテープは
今でも完全に残っていて、1本目の黒のスーツ、そして2本
目の白のスーツというビートルズのステージ衣装が特徴だ。
この2回の公演のハイライトを編集したテープは、7月1日の
午後9時から10時まで、NTVの1時間番組「ザ・ビートル
ズ日本公演」の後半30分間に放送された。番組前半では、
日本のミュージシャンの内田裕也と尾藤イサオのステージ、
ビートルズが羽田空港に到着したときの様子や東京ヒル
トン・ホテルで開かれた記者会見のもようがカラーで放送
された。
7月3日午前10時40分、ビートルズは日本を離れ、香港の啓
徳空港のVIPラウンジで70分待ったのち、フィリピンに向か
う。

フィリピンの事件でツアーを終える インドに立ち寄ってイギリスへ

7月4日(月)

リザル・メモリアル・フットボール・スタジアム
Vito Cruz St, Manila, Luzon, The Philippines

嵐の前の静けさとはこのことか。といっても、昼の公演に3
万人、夜の公演に5万人、計8万人もの観客がつめかけた
2回の公演を静けさと呼べるならの話だが。
7月5日午後4時45分、ビートルズはやっとの思いでマニラ
国際空港を離陸し、バンコク経由でインドのニューデリー
に向かった。なぶりものにされてきた4人は、少し息を抜い
てインド音楽に触れてみたいと期待していたが、空港には
600人のファンが押し寄せ、ホテルも例のごとく取り囲まれ
てしまう。結局イギリスに帰ることになり、一行は7月8日午
前6時にロンドン空港に到着。空港では簡単な記者会見
が開かれ、ジョージとリンゴはBBCのレポーター、トム・マン
ゴールドの短いインタビューに応じる。この2分45秒のイン
タビューは、同日午前中(午前7時15分から7時45分と8時
15分から8時40分まで)のBBCホーム・サービス・ラジオの
ニュース番組「トゥデイ」で放送される。

ポール、ラジオ単独出演

8月1日(月)

ブロードキャスティング・ハウス、B15スタジオ
London

ポールはかつてデビッド・フロストのテレビ番組(「ア・ディヴ
リー・オブ・フロスト」、1964年4月15日参照)にひとりで出演
したことがあったが、今回もBBCのラジオ番組「デビッド・
フロスト・アット・ザ・フォノグラフ」への単独出演を承諾した。
これは、新旧のさまざまなレコードをかけながら、フロストが
出演者にインタビューしたり、日常の出来事について話を
してもらうというシリーズ番組だった。番組は、ポールの「生
出演」を含めて、この日の午後8時30分からブロードキャス
ティング・ハウスの地下1階にあるスタジオで収録され、8月
6日の正午から午後1時30分に放送される。

レノン=マッカートニーの番組第2弾

8月6日(土)

キャベンディッシュ・アベニュー
London

グラナダ・テレビ制作のドキュメンタリー「ザ・ミュージック・
オブ・レノン・アンド・マッカートニー」(1965年11月1日、2日
参照)は、ふたりの作詞作曲の才能に焦点をあて、スタジ
オで多数のアーティストにふたりの曲を演奏させるという番
組だった。それから9か月たって、ジョンとポールは再び同
じ主旨の番組に出演することになる。今度は、BBCの1時
間にわたるラジオ番組「ザ・レノン・アンド・マッカートニー・
ソングブック」だった。前の番組との違いは、ペギー・リー、
エラ・フィッツジェラルド、ママス・アンド・パパス、アイルラン
ド近衛兵楽隊('She Loves You'を発表していた)な
どによってすでに発売されているレノン=マッカートニーの
カバー・バージョン15曲について、ジョンとポールが率直な
感想を述べていることだけだった。
収録はウェイブリッジのジョンの自宅が予定されていたが、
急遽ロンドン北部のセント・ジョンズ・ウッドにあるポールの
自宅に変更になり、そこへBBCのプロデューサー、デレク・
チネリーとインタビュアーのキース・フォーダイスが訪れた。
途中、お茶が運ばれたときと、ポールが飼い始めたばかり
でまだ子犬だった牧羊犬のマーサがクーンクーンと鳴いた
ときを除いて、午後4時から6時まで中断することなく収録
された。番組は8月29日の午後4時30分から5時30分まで
放送されるが、8月29日の夕方というのは、アメリカにいた
ビートルズが最後の公演を始めようとするころだ。
この番組はレコードにもなって、BBC転送サービスを通し
て海外の契約ラジオ局に配布される。こちらの内容は音

楽を省いた13分の番組で、タイトルは「ソングライターズ・エクストラオーディナリー／レノン・アンド・マッカートニー」となっている。

「キリスト発言」騒動に続き、最後のコンサート・ツアーへ

8月12日(金)

インターナショナル・アンフィシアター
Chicago, USA

ビートルズ最後のコンサート・ツアーが始まる。ニュー・アルバムをリリースしていたというのに、新曲のリハーサルをするつもりなどさっぱりなかったビートルズは、西ドイツ、日本、フィリピンでのステージと同じレパートリーを演奏した。唯一違ったのは、ときどき'Long Tall Sally'を演奏したことだけだった。このツアーの前座は出演順に、リメインズ、ボビー・ヘッブ、サークル、ロネッツだった。午後3時からと7時30分からの2回の公演には(満席にわずかに満たない)1万3,000人の観客が入った。

前日の8月11日、ロンドン空港からアメリカに向かったビートルズはボストンで飛行機を乗り継ぎ、午後4時55分にシカゴに到着していた。その晩、1都市1回ずつの恒例の記者会見を開いたが、ジョンの「イエス・キリストより人気がある」発言のために、いつものようなマンネリの会見にはならなかった。ジョンはほかの3人に助けられながら、すっかり有名になってしまったこの発言についてアメリカ人を何とかなだめようとした。ふつう、ビートルズの記者会見は地元のラジオ局やテレビ局によって収録されていたが、このシカゴでの会見は世界中の人が注目していたので、このときの会見の抜粋は各国のニュース番組で報道された。アメリカでは、NBC、CBS、ABCの3大テレビ・ネットワークがこの件についてそれぞれ特別番組を組んだ。イギリスではITNがこの記者会見と今回のアメリカ・ツアー全体の映像をまとめて、「レポーティング'66」という番組にして8月25日に放送する(ロンドンでは午後6時7分から6時35分)。

8月13日(土)

オリンピア・スタジアム
Detroit, USA

午後2時からと7時から、2回公演を行なった。この屋内スタジアムには計2万8,000人の観客が入ったが、どちらの公演も満席にはならなかった。午前11時にデトロイトに到着したビートルズは、2回目の公演を終えるとすぐにグレイハウンド・バスに乗り、午前2時30分にクリーブランドに到着した。

この日、アルバム"REVOLVER"がイギリスでNo.1になる。

8月14日(日)

クリーブランド・スタジアム
West 3rd St, Cleveland, Ohio, USA

午後7時30分からの1回の公演。クリーブランドでは1964年9月15日にパブリック・オーディトリアム公演が行なわれたが、そのときと同じく途中でステージが30分間中断された。4曲目の'Day Tripper'をビートルズが演奏しているあいだ、クリーブランド・インディアンズ(野球チーム)の本拠地であるスタジアムのフィールドに、スタンドの2万人のファンのうち2,500人が侵入してしまったためだ。ビートルズは月曜の午後までクリーブランドに滞在し、そのあとワシントンDCへ飛んだ。

8月15日(月)

DCスタジアム
East Capitol St, Washington DC, USA

午後8時からの1回の公演。3万2,164人の観客が入った。公演のあと、一行はそのままバスでフィラデルフィアに向かった。

8月16日(火)

ジョン・F・ケネディ・スタジアム
Broad St and Patterson Ave, Philadelphia, Pennsylvania, USA

午後8時からの1回の公演。客席数6万の野外スタジアムに入った観客は2万1,000人だった。ほとんど絶えまなく雷がとどろき、公演は台なしになった。雨だけはまぬがれたものの、公演が終了して10分後にどしゃぶりとなった。しかし、そのときにはビートルズはすでにグレイハウンド・バスに乗り、カナダへ飛ぶため空港に向かっていた。

8月17日(水)
メイプル・リーフ・ガーデンズ
Toronto, Canada

1万8,000人収容の会場で、午後4時からと8時からの2回の公演を行なった。1回目は1万5,000人、2回目は1万7,000人の観客が入った。木曜の朝、ビートルズは再びアメリカに飛行機で戻った。

競馬場でコンサート

8月18日(木)
サフォーク・ダウンズ・レーストラック
Waldemar Ave, East Boston, Massachusetts, USA

午後8時からの1回の公演に2万5,000人の観客が入った。ここはビートルズの公演会場としてはもっとも変わった場所で、競馬場の中央の芝生にステージが設置されていた。翌日の午前11時30分、ビートルズはボストンを離れ、飛行機で南のメンフィスに向かった。この日、両A面シングル'Yellow Submarine/Elenor Rigby'がイギリスでNo.1に。

爆竹が投げ込まれてひやり

8月19日(金)
ミッド・サウス・コロシアム
South Fairgrounds,Early Maxwell Boulevard, Memphis, Tennessee,USA

1万3,300席の会場で、午後4時からと8時30分からの2回公演を行なった。昼の公演には1万人、夜には1万2,500人の観客が入った。キリスト発言に抗議し、生ゴミなどがステージに投げられ、爆竹事件が起きたのもこの日の夜の公演(1966年イントロダクション参照)。公演が終わると、ファンがおとりのリムジンを追いかけている間にビートルズはコロシアムを抜け出して、グレイハウンド・バスでメトロポリタン空港に戻った。そこからオハイオへ飛び、午前1時35分に到着する。

8月20日(土)
クロズリー・フィールド
Findlay St at Western Ave, Cincinnati, Ohio, USA (延期)

野外会場で午後3時30分から始まる予定で、アメリカで連続9日目、13回目になるはずだったこの日の公演は、大雨のため日曜の昼に延期された。

8月21日(日)
クロズリー・フィールド
Cincinnati, USA
ブッシュ・スタジアム
Stadium Plaza, St Louis, Missouri, USA

前日のシンシナティでの公演が延期されたため、この日は約550キロ離れた2都市で公演を行なうことになり、1962年や1963年の殺人的な忙しさを彷彿させた。午後8時30分からのセントルイスでの野外公演では2万3,000人の観客が入ったが、この公演もまた大雨に見舞われたため、ビートルズは防水シートの天幕の下で演奏した。
公演が終わると、ビートルズは早々とニューヨークに飛び、午前3時50分に到着する。2日間ほとんどウォリック・ホテルの中で過ごし、月曜に2回の記者会見を行なう。

2度目のシェア・スタジアム

8月23日(火)
ウィリアム・A・シェア・ミューニシパル・スタジアム
[シェア・スタジアム]
New York City, USA

午後7時30分からの1回の公演。チケット発売日の5月31日にはチケット売場が開く前に2,000人のファンが並んだものの、5万5,600枚のチケットは売り切れず、1万1,000席が空席のままとなった。しかし、この事実はこの日のコンサートが1965年の記録破りの公演に比べて熱気に欠けていたことを説明する原因のほんの一例でしかない。それでも、コンサート収益は29万2,000ドルにおよび、ビートルズはその65パーセントにあたる18万9,000ドルを受け取った。つまり、1965年に受け取った報酬より多かったのだ。
公演が終わると、ビートルズはただちにロサンゼルスに飛び、8月24日の朝に到着する。ビバリーヒルズで1日の完全休養日を過ごし、25日の午前10時に空路でシアトルに向かう。

8月25日(木)
コロシアム
Seattle, USA

CamScannerでスキャン

1万5,000人収容の会場で、午後3時からと8時からの2回の公演を行なった。夜の公演は満席になったものの、昼の公演には8,000人しか入らなかった。午後11時の便でビートルズは再びロサンゼルスに戻った。

8月28日(日)

ドジャー・スタジアム
Elysian Park Ave, Los Angeles, California, USA

ビバリーヒルズで3日間休養したのち、再びステージに立った。この日の1回の公演では4万5,000人もの観客を動員し、かなり収拾のつかない状態に陥った。ビートルズ一行は翌29日の午後4時にサンフランシスコに飛び、午後5時45分に到着する。

ラスト・コンサート

8月29日(月)

キャンドルスティック・パーク
Jamestown and Harney Way, San Francisco, California, USA

この日の夜、2万5,000人の観客が午後8時からのビートルズ最後のコンサートを見届けた。最後になることがわかっていたため、ジョンはステージにカメラを持ち込み、曲のあいまにほかのメンバーの写真を撮り、また腕を伸ばして自分自身の写真も撮影した。ポールも同じようにカメラ撮影をして、また、NEMSエンタープライズのトニー・バーロウにカセットで自分たちの最後の演奏を録音してくれるように頼んでいた(しかし、バーロウのカセット・テープは片面30分で、裏面に返されなかったため、33分のステージの全部は収録されず、'Long Tall Sally'の演奏の途中で切れている)。

公演が終わると、ビートルズは午後11時にカリフォルニア沿岸沿いに飛行機でロサンゼルスに戻り、午前12時50分に到着。ビートルズとその一行は火曜日にアメリカを離れ、8月31日の午前中にロンドン空港に着く。

ジョン、映画"HOW I WON THE WAR"に出演

9月6日(火)〜14日(水)

西ドイツ各ロケ地
Celle, West Germany

映画"A HARD DAY'S NIGHT"と"HELP!"で監督を務めたリチャード・レスターは、自分の新作映画"HOW I WON THE WAR"のキャスティングで、一兵卒グリップウィード役にジョンを抜擢した。これはジョンにとって初めて(そして結果的には唯一)のビートルズと無関係の映画出演となった。脚本はチャールズ・ウッド("HELP!"をはじめとして、レスターのほかの作品の脚本"THE KNACK""THE BED-SITTING ROOM" "CUBA"も手がけている)。戦争美化をめぐるばかばかしさを茶化した作家パトリック・ライアンの1963年の小説をもとに書き上げたものだ。また、この映画はレスターが初めてプロデュースを手がけた作品でもあった(この場合はユナイテッド・アーティスツ社の出資で)。

ジョンは主役ではなかったため喜んでレスターの依頼を受け、8月31日にこのニュースが発表された。いらいらさせられたアメリカ・ツアーのあと、ビートルズには数か月先まで何も予定が入っていなかったので、メンバーはそれぞれに自分の興味や関心を好きなように広げて探ってみることができるようになった。

第2次世界大戦中と設定した映画"HOW I WON THE WAR"の撮影は2か所のロケ地で行なわれた。まずはハノーバーに近い西ドイツ北部のツェレにあるNATOの戦車演習場で、そのあとは、北アフリカ砂漠という想定を実現するために、地中海をはさんでそのアルジェリアの対岸に位置するスペイン南部のカルボネラスで行なわれた。

9月5日にハノーバーに飛んだジョンは、翌日、一兵卒グリップウィード役のために髪を軍隊規定の形に刈り込んだ。これは世界じゅうで大見出しで報じられた。また、役柄上、国家医療制度配給品の眼鏡をかけることにもなった(英国規格のナショナル・ヘルスの眼鏡をかけた)。撮影のとき以外でも、この丸眼鏡はジョン・レノンのイメージに欠かせない存在となった。

ジョンはすべての撮影に参加したわけではないため、このロケ中に(正確な日付は不明だが)アシスタントのニール・アスピノールとともにハンブルクに出かけ、1960年代の初めにビートルズの面々とよく顔を出した店でショッピングを楽しんでいた。9月15日の夕方、列車でドイツを出発し、ポール、エプスタインとパリで落ち合ったジョンとアスピノールは、そのままそこで週末を過ごす。そして18日、ジョンとアスピノールは、次のロケ地であるスペインに向かう。

CamScannerでスキャン

9月19日(月)〜11月6日(日)

スペイン、ロケ地
Carboneras, Spain

…寒かったドイツ北部とはうってかわって、暑く…スペイン南部に移動したロケ隊は、ここで"HOW I WON THE WAR"の大半を撮影した。ジョンはのち…待ち時間ばかりですっかり飽きてしまったことを認めて…そして、大した役でもないのに、砂漠の中で7週間も…すことにはさしておもしろいことなどなかったが、考え…みれば、それこそ戦争というものかもしれない、と考える…った。撮影は毎日朝早くから始まったため、夜はア…近くのサンタ・イザベルにある住みにくい借家で、…んだり、ゲームをしたり、ときどき作曲したりする以外…ることは何もなかった(そして、ジョンはここで'Strawberry Fields Forever'を作曲する)。

…撮影が終了すると、あとはロンドン周辺での撮影をい…すだけとなったが、そのシーンにはジョンは関わら…い(ただし撮影後の音声吹き込みには参加する。1967年…月11日参照)。ジョンは11月7日に飛行機でマドリード…からイギリスに戻り、その2日後、オノ・ヨーコと出会うことになる。

ジョージ、インドへ

9月20日(火)

タージ・マハール・ホテル
Apollo Bunder, Bombay, India

…ングザリー州で家族とともに過ごし、ジョンが映画"HOW I WON THE WAR"に出演し、ポールはロンドンに残って「アンダーグラウンド」ムーブメントに熱中し、映画"THE FAMILY WAY"のため初めてサウンドトラックの作曲に…しんでいるころ、ジョージはシタール、ヨガ、そしてインドの哲学と文化とを学ぶためにインドに出かけた。内緒で…したジョージは、誰にもわからないようにサム・ウェルズという偽名でボンベイのタージ・マハール・ホテルにチェックインした。しかし、まもなく正体がばれてしまう。

ジョージは、周囲の騒ぎから逃れて再びひとりになるには、記者会見を行なって質問に答え、それから別の場所に逃げるしかないと考えた。そこで、9月19日、ホテルで記者会見を開いた。

その翌日、ジョージはボンベイを離れる前、BBCの報道特派員ドナルド・ミルナーとの独占インタビューに応じ、そのなかで自分のインドや東洋思想への興味について語った。明らかにミルナーはヒット・パレードの話をするより瞑想に近い話や哲学的な会話をするほうが得意だった。19分近くにわたる、どちらかといえば重い内容のこのインタビューのうち、7分以上が12月11日午後4時から4時30分のBBCホーム・サービス・ラジオの番組「ザ・ライブラリー・アーツ」で放送される。このインタビューはかなりおもしろい内容だと好評を得て、1週間のラジオとテレビ放送のハイライトを特集するホーム・サービス・ラジオの番組「ピック・オブ・ザ・ウィーク」でも2分25秒の抜粋が放送される(12月16日午後12時10分から12時55分、12月18日午前11時30分から12時10分に再放送)。

初のベスト・アルバムで活動に区切り

10月31日(月)〜11月10日(木)

EMIスタジオ、第1スタジオ/第53室/第65室
London

ビートルズはこの年のクリスマスに合わせてニュー・アルバムは制作しないし、おそらくシングルも制作しないとブライアン・エプスタインが通達すると、EMIはこれを機会にビートルズのイギリスで初めてのグレイテスト・ヒッツ・アルバムをリリースすると決定した(アメリカでは未発売)。タイトルは"A COLLECTION OF BEATLES OLDIES"、裏ジャケットには"BUT GOLDIES!"という文句が入る。アルバムはモノとステレオの両フォーマットで発売されることになったが、シングルを中心とする1965年までのリリースにはモノ・ミックスしか作られていない曲が多かったので、新たにステレオ・ミキシング作業をすることが必要となった。ビートルズは、誰もこのセッションには参加していない。この日の午後2時30分から4時30分まで、EMIの第1スタジオでこのLPのための最初のセッションが行なわれ、ジョージ・マーティンが'Paperback Writer'のステレオ・ミックスを作った。

11月7日(第1スタジオで午後2時30分から5時30分)には、'I Want To Hold Your Hand'の新たなステレオ・ミックスが作られた。11月8日(第53室で午後4時から5時30分)にはジェフ・エメリックにより'She Loves You'のステレオ・ミックスが作られた(ただし'She Loves You'の

オリジナル2トラックのセッション・テープはかなり以前に破棄されてしまっていて、最善の音源としてモノ・シングルのマスター・テープしか用意できなかったため、本当のステレオではない)。11月10日(第65室で午後2時から4時30分)には、バランス・エンジニアのピーター・ブラウンにより'Day Tripper'と'We Can Work It Out'のステレオ・バージョンが作られた。さらに、アルバム収録予定曲ではないのに、手違いで1963年の'This Boy'のステレオ・ミックスも作られてしまった。

16曲収録したアルバム"A COLLECTION OF BEATLES OLDIES"は、12月9日にリリースされる。イギリスのリスナーにとって新しい収録曲は、1965年6月14日にアメリカ盤でリリースされていた'Bad Boy'だけだった。しかし、この曲を収録したことで、ドイツ語バージョンの2曲を除けば、1962年からこの時点までのビートルズのレコーディング曲はすべて、イギリスおよびアメリカの両方でもれなく入手できることになった。こうして、ビートルズのスタジオ活動の記念すべき最初の段階が、きちんと区切りをつけられたのだ。

レコーディング時代の始まり

11月24日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

そして、ビートルズはそのスタジオ活動における新たな段階を迎えた。もう、いつもきちんとした身なりで、笑顔を絶やさず、ステージでは男の子と女の子の恋愛についてのポップ・ソングを歌う、あのファブ・フォーではなかった。今では、カジュアルな服装で、ときには口髭をはやし、いつもほほえんでいるわけではなく、すさまじいロックのレコーディング作品を作り出し、それでいて自分たちの気分の問題からステージ活動からいっさい手を引いた、あのビートルズだった。ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの4人は、9月初め以来、全員で行動をともにしたことはほとんどなかった。しかし、ここに4人は再び集合し、ニュー・アルバムのレコーディングを開始することになった。最初にレコーディングした曲は'Strawberry Fields Forever'である。この曲は、1967年2月発売のシングル収録曲となり、ビートルズが制作に直接関わらない編集盤を別にして、アルバムに収録されることはない。

'Strawberry Fields Forever'は、ビートルズが過去4年間、とくに1966年のスタジオ経験から学んだあらゆるレコーディング技術、つまり、テープの逆回転や変速、耳慣れない楽器の導入などの手法が注ぎ込まれた作品となった。さらに、薬物の影響下にある(ジョン・レノンの)思考でなければ、生まれ得ない作品でもあった。ちなみに、ストロベリー・フィールド(単数形)とはジョンが育った家の近所の曲がり角の先にあるリバプールの救世軍本部の名称である。夏にここで開かれるチャリティ・バザーにジョンはよく顔を出し、この敷地を囲む一帯の木立をストロベリー・フィールズ(複数形)と呼んでいた。'Strawberry Fields Forever'とは、夢かうつつかという幻覚症状のなかで、こうした幼年の思い出をたぐっていく作品なのである。

また、この曲はビートルズのレコーディングのなかでももっとも複雑なプロセスを経た1曲として知られており、何度もその姿を変えている。この日、午後7時から午前2時30分までの初めてのセッションで収録されたテイク1は、メロトロンのオープニングを除けば最終バージョンとはまるで違っている(シンセサイザーの前身となったメロトロンには、さまざまな楽器の音色が収録されたテープが内蔵されており、たとえばこの曲の場合はフルートの音色を出している)。午前2時30分までに録音されたテイク1はおおかた次のようなサウンドで構成されていた。ポールによるメロトロンとジョンの最初のリード・ボーカルで始まり、ジョージのギター、リンゴの(タムを多用したフィル・インを前面に打ち出した)印象的なドラム、マラカス、一連のスライド・ギター、ジョンのダブル・トラックのボーカルと、ジョン、ポール、ジョージによるスキャット・ハーモニー、というものだ。さらに曲はメロトロンの演奏で完結するという体裁になっていた。テイクそのものは再生時にテンポが速くなるように毎秒53サイクルで録音されたが、それでも録音時間は2分34秒の長さしかなかった。

4枚目のクリスマス・レコード

11月25日(金)

ディック・ジェイムズ・ハウス
New Oxford St, London

真剣なレコーディング作業からいきなり離れて、といっても少しの間だが、ファン・クラブ用の4枚目のクリスマス・レコード'Pantomime : Everywhere It's Christmas'を

CamScannerでスキャン

レコーディングした。場所は、ビートルズの作品の版権管理をしているディック・ジェイムズ・ミュージック社のロンドン事務所の2階の小さなデモ・スタジオ。
セッションは夕方から行なわれているが、詳細は不明。このレコードには10種類のさまざまな録音が入っていて、タイトル曲ではポールのピアノに合わせて4人が短く歌っている。

ジョンの単独テレビ出演

11 月 27 日 (日)

ブロードウィック・ストリート
London

この日、BBC2の人気番組として定着したピーター・クックとダドリー・ムーアの番組「ノット・オンリー・バット・オールソー」に、再びジョンだけが2回目の出演をはたしたが、ジョンの出演時間は合わせて51秒しかない。ジョンはロンドンのトレンディなナイトクラブ「アド・ラブ」(以前ビートルズがよく通っていたアド・リブ・クラブをもじって)のドアマンに扮し、クックが演じるアメリカのテレビ制作者ハイラム・J・パイプサッカー・ジュニアから入場料5ポンドをせしめるのに成功する。おかしいのは、このクラブが地下の男子用公衆便所の中にあるという設定なっていることで(アド・ラブのLuvはトイレの意味のラバトリーの略)、ドアマン役のジョンはトイレにつながる階段の出口のところで撮影を行なった(クラブの中のシーンは12月9日にテレビジョン・センターでジョン抜きで撮影)。
ロケ地は、ロンドンのソーホー地区にある(バーウィック・ストリートとの交差点に近い)ブロードウィック・ストリートの地下男子用公衆便所。もっとも人通りの少ない日曜の朝に撮影された。このコントはクリスマス翌日12月26日の午後9時から9時50分に放送。1967年2月7日にも午後9時5分から9時50分にかけてBBC1で再放送される。
注:番組前半で、ピーター・クックはダドリー・ムーア・トリオに混じってオーケストラと演奏した。曲はシングルとして発表された彼らの新曲 'The LS Bumble Bee' で、ところどころでLSDをほのめかしている。この曲は長年、ジョンが作曲あるいは演奏に関わっていると言われてきたが、実際には関わっていない。

11 月 28 日 (月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Strawberry Fields Forever' のレコーディングを再開。ビートルズは初めて締切のプレッシャーから解放されて作品に取り組めるようになったので、自分たちが満足するまで1曲を作り続けるようにもなった。午後7時から午前1時30分までのセッションで、テイク2から4まで収録、セッションの最後にテイク4からラフ・モノ・ミックスを作った。

11 月 29 日 (火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から8時までのセッションで、'Strawberry Fields Forever' のテイク5と6を収録。テイク6にジョンがボーカルをオーバーダビングし、それをさらにリダクション・ミックスしてテイク7とし、さらにオーバーダビングを加えた。これが一応ベスト・テイクとなり、すぐにラフ・モノ・ミックスが作られたが、9日後に録音し直しとなる。

12 月 2 日 (金)

EMIスタジオ、第53室
London

午前9時から正午にかけて、トニー・バーロウの指示のもとに、'Pantomime:Everywhere It's Christmas' のモノ・ミキシングと編集が行なわれた。最終テープはただちにリントーン・レコードに渡され、ソノ・シート・レコードにプレスされた。

12 月 6 日 (火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

イギリス沿岸の沖合いに停泊させた船から放送している海賊ラジオ局ではあいかわらずビートルズが人気を独占し、君臨していた。2大海賊ラジオ局のキャロラインとロンドンのDJなどは、1966年8月のビートルズ最後のアメリカ・ツアーへの同行報道陣として招待されたほどだ。彼らはビートルズにインタビューし、それを電話で自分たちの局に報告した(キャロラインからはジェリー・レイトンが、ロンドンからは

CamScannerでスキャン

リバプール出身のおちゃらけDJ、ケニー・エベレットが同行している）。

そして、海賊ラジオ局の努力にさらに応えるために、この日の夜、ビートルズは両局のスタッフとリスナーのためにクリスマスと新年のメッセージを録音した（「こんにちは、ジョン・レノンです。みんなに心からのお祝いを贈るよ。そして1967年が幸せな年になるように！」というもの）。最初のテイクはジョンの声だけだった。そのあとで各ラジオ局のテーマ・メロディが入るようになり、さらには、ジョンのバックでほかの3人がスタジオにある楽器を鳴らしまくる音も重ねられた。

一方、'Strawberry Fields Forever' がほぼ完成とみなされたため、4人はニュー・アルバムの次の曲にとりかかった。ボードビル風のポールの作品 'When I'm Sixty-Four' だが、これは新曲ではなかった。じつはキャバーン・クラブ時代にアンプが故障するたびに、さまざまなバリエーションをつけて歌っていた曲だったのだ。午後7時45分から午前1時までのセッションで、リハーサルを重ねたのち、リズム・トラックを2テイク録音した。

12月8日（木）

EMIスタジオ、第1スタジオ／第2スタジオ
London

第1スタジオでの午後2時30分から5時30分までのセッションにはポールひとりが行き、'When I'm Sixty-Four' にリード・ボーカルをオーバーダビングした。午後7時から午前3時40分までの長いセッションでは4人全員が参加した。

'Strawberry Fields Forever' のいわば「オーケストラ・リメイク」が始まったのはこのセッションからである。まずは、リズム・トラックをテイク9から24までレコーディング（ただしなぜかテイク8とテイク19は存在しない）。そのあと、バランス・エンジニアのジェフ・エメリックの指示のもとに、テイク15の前半4分の3とテイク24の最後の4分の1を編集でつなぎ、ここからさらにリダクション・ミックスをしてテイク25を作る作業が始まったが、途中で次の日に持ち越された。

プロデューサーのジョージ・マーティンとエメリックは、この日のセッションに途中から参加した。ふたりはこの日の夜、クリフ・リチャードの主演映画 "FINDERS KEEPERS" のプレミア・ショーに出席していたからだ。このふたりが留守の間、テクニカル・エンジニアのデイブ・ハリーズが一時的にビートルズのコントロール・ルームに入り、本来は立場上やってはいけなかったのだが、プロデューサー兼バランス・エンジニアの代役を務めた。しかし、マーティンとエメリックが戻ってきたことがわかると、一目散にコントロール・ルームから逃げ出した。

12月9日（金）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Strawberry Fields Forever' にはまだかなりのオーバーダビングが必要だったため、午後2時30分から10時までのセッションでは、前夜にテイク15と24をつなげたテープを4トラック・テープのうちの1トラックのみにリダクション・ミックスして、テイク25を作ることから始めた。そこに、シンバルの逆回転からソードマンデル（テーブル・ハープに似たインドの楽器）まで、あらゆるオーバーダビングを加えた。さらにアセテート盤をカットするため、セッションの途中でモノ・ミックスを急いで作った。

12月15日（木）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Strawberry Fields Forever' を作り直す過程で、ジョージ・マーティンとジョンはくっきりとしたホーン・セクションとストリングスが必要だと感じ、マーティンはそれをすばらしいスコアにまとめてきた。そして、それにしたがってこの日、4本のトランペットと3台のチェロによるオーバーダビング用の録音が行なわれた（トランペット奏者は、トニー・フィッシャー、グレッグ・ボーエン、デレク・ワトキンズ、スタンリー・ロデリック。チェロ奏者は、ジョン・ホール、デレク・シンプソン、ノーマン・ジョーンズ）。これらの楽器はテイク25にオーバーダビングされ、これをさらにリダクション・ミックスしたテイク26に、ジョンが2種のリード・ボーカルを加えた。

午後2時30分から12時まで行なわれたセッションが終わるころには、'Strawberry Fields Forever' は恐ろしくなるほど強烈な様相を帯びてきていた。きちがいじみたストリングス、大音響で鳴り響くトランペット、激しいドラム、とりつかれたようなジョンのボーカル2種と、これはアコースティックのテイク1とは似ても似つかないものになっていた。はたしてこれでジョンは満足するだろうか。少なくともこの時点ではこれでベストとみなされ、ラフ・モノ・ミックスがさらに

られた。

ビートルズ解散説を打ち消す

12月20日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前1時までのセッション。ジョン、ポール、ジョージが'When I'm Sixty-Four'にバック・ボーカルを、リンゴがベルの音を重ねていった。ただ、その作業の前に、テイク2をリダクション・ミックスしてテイク3およびテイク4が作られた(テイク4がベストとなった)。

また、世界中のメディアで取り沙汰されていた根も葉もないビートルズ解散説にそろそろ終止符を打とうと、4人はITNのレポーターであるジョン・エドワーズのインタビューに応じた。この内容は1週間の主要ニュースを流す25分間の番組「レポーティング'66」で放送された。「ビートルズ解散スペシャル」となっていた当初のタイトルは、放送前、より正確な「エンド・オブ・ビートルマニア」に訂正され、4人はセッション開始前にEMIスタジオの外で取材を受けたが、4人とも口髭をはやし、ジョージにいたっては顎髭まで伸ばしていた。4人はこうして一緒に活動していること、目下新曲をレコーディングしていることを語った。

「レポーティング'66」は地域によって放送日や放送時間がまちまちだったが、イギリス全域のITV局で放送された。ビートルズが登場した分は12月28日および29日に放送(ロンドンでは、レディフュージョンにより木曜の午後6時8分から6時35分)。番組では、ビートルズへのインタビューのほか、1966年アメリカ・ツアーを中心としたそれまでの映像、ファンへのインタビューなどが放送される。

12月21日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

当初12月15日に予定されていたが時間がなかったため、この日の午後7時から9時までのセッションで、'When I'm Sixty-Four'に3本のクラリネットが加えられた。2本はふつうのクラリネット、1本はバス・クラリネットで、演奏者はロバート・バーンズ、ヘンリー・マッケンジー、フランク・ライディ。午後9時から10時までの間には、アセテート盤カッティングするためにモノ・ミックスが作られた。

午後10時から11時45分のセッション終了時間までには、ジョンが'Strawberry Fields Forever'のテイク26にさらに新たなボーカルとピアノを加えた。

'Strawberry Fields Forever'の奇跡

12月22日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Strawberry Fields Forever'のきわだって違う2種のバージョンについてジョンが頭を抱えていたのは、どちらも気に入ってしまったことだった。最初のオリジナル・バージョンについては、とくに冒頭の1分くらいが、そしてよりテンションが高くてブラス入りのバージョンについては、後半部分が気に入っていた。いっそのこと、ジョージ・マーティンに何とか2種のバージョンをつなげてもらえないだろうか。しかしマーティンの返事は、それはとうていできないということだった。なぜかというと、キーも違えば、テンポも違っていたからだった。「だったら、キーもテンポも合わせちゃうことぐらいできるんじゃないの?」とジョンは返した。そこでジョージ・マーティンとジェフ・エメリックは、この日の午後7時から11時30分までスタジオにこもり、ジョンの希望をかなえることができるかどうか試してみることにした。

やってみたら、なんとできたのだ。テイク7の新たなミックスの速度をあげ、テイク26の新たなミックスの速度を落としたところ、奇跡が起きたのだった。テンポとキーが同時に一致し、マスター・テイクを作ることができたのだ。自分で確かめてみたい読者のために断っておくと、リリースされたバージョンではこのつなぎ目は、曲の冒頭から60秒のところにある。11月24日にレコーディングを開始した'Strawberry Fields Forever'は、ようやくみごとにその完成をみた。

'Penny Lane'のレコーディング

12月29日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ/第2スタジオ
London

午後2時30分から5時45分まで、ジョージ・マーティンによって、'When I'm Sixty-Four'のモノ・ミックスと、'Strawberry Fields Forever'のモノおよびステレオ・ミックスが作られた。

CamScannerでスキャン

一方、1965年11月1日、マンチェスターのグラナダ・テレビ・センターで「ザ・ミュージック・オブ・レノン・アンド・マッカートニー」の収録のあいまに行なわれたインタビューでポールは、「ペニー・レイン」という名前の詩的な響きが好きなのでこのタイトルの曲のアイデアを練っているんだ、と語っていた(ペニー・レインとは、リバプール中心部の南、ビートルズが育った場所に近い郊外の通りの名前である)。ポールが実際にその曲を形にできるまでそれから1年近くかかったが、歌詞に店の名前や人々の様子や「郊外の青い空(blue suburban skies)」というくだりが登場するポールの'Penny Lane'は、ちょうどジョンの'Strawberry Fields Forever'に呼応する作品となっている。
この日、午後7時から午前2時15分まで、ポールは第2スタジオでひとりで'Penny Lane'のベーシック・トラックを録音する。この曲の要となる各種のキーボード・トラックには、とくに細心の注意が払われた。これらのキーボードといろいろな変わったパーカッション効果を6テイク録音し、最後に2種類のラフ・モノ・ミックスが作られた。

12月30日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

イギリスおよびアメリカ用のベスト・テイクとして12月29日に作られた'When I'm Sixty-Four'のモノ・ミックスに、ポールは満足しなかった。ポールはそれまでのミックスをすべてボツにして、半音あげた速度で新しいミックスを作りたいと提案。半音違うだけで、曲のイメージは大きく変わる。
午後7時から午前3時までのこの日のセッションでは最初にこの作業が行なわれた。そのあと、前日の午後に作った'Strawberry Fields Forever'のモノ・ミックスのベスト・バージョンをテープ・コピーした。
セッションの残り時間は'Penny Lane'にあてられた。テイク6をリダクション・ミックスしてテイク7を作り、ポールのリード・ボーカルとジョンのバッキング・ボーカルをオーバーダビングした。この収録を終えるころにはかなり遅い時間になっていたため、この曲のためのオーバーダビングの予定は次回に、それも1967年にまで持ち越されることになった。
とりあえず1966年のうちにできることは、アセテート盤カッティング用に'Penny Lane'のラフ・モノ・ミックスを作ることだった。

CamScannerでスキャン

Introduction 1967

CamScannerでスキャン

1967年はビートルズにとって1963年と同様に非常に重要で、波乱に富んだ年となった。4人の創造力が最盛期を迎え、ツアーという束縛からもようやく解放され、誰もが認める空前の人気グループとなった一方で、幸いにしてビートルマニア現象はやっと静まりつつあった。今やビートルズのメンバーはそれぞれが、落ち着いた、確かな収入のある4人の青年であり、若者の代弁者だった。メンバー自身まだ若いのは驚きで、次のアルバムのレコーディングが再開された1967年1月の時点で、ジョンとリンゴは26歳、ポールは24歳、そしてジョージは23歳だった。

“SGT. PEPPER”がもたらしたもの

静寂とプライバシーを求めて、公にも最低限にしか姿を現さないためイギリスの音楽業界を当惑させていたビートルズは、1967年初頭の冬から春にかけて、EMIスタジオにこもりながらレコードを少しずつ完成に近づけていた。このレコードはロック・ミュージックにおいて、アルバムというフォーマットが持つ意味をすっかり塗り替えてしまうことになる。そしてこの年、4人はほかのどの年よりもドラッグにのめり込むことにもなり、ただでさえ人並はずれた創造力と感性とをいっそう鋭敏にした。4人はまさに、巨大に波打つ芸術的な創作意欲の頂点をきわめようとしているところだった。

しかし、ポップ・ロック界では今世紀最高とも言うべきシングル‘Strawberry Fields Forever/Penny Lane’を1967年2月にリリースしたのを除けば、ビートルズはアルバム“REVOLVER”を前年の8月にリリースしてから長い沈黙を守っていた。その沈黙を破って、6月1日、もっとも人々に記憶されているあの夏を、サイケデリアが花開いたあの「サマー・オブ・ラブ」の幕を開けるかのように登場したのが、ビートルズ8枚目のアルバム“SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND”だ。EMIで初めてレコーディング・セッションを行なった日から数えて、あと数日で5年という歳月しかたっていないときのことである。

このアルバムについては無数の文章が存在するが、ほとんどが絶賛と賞賛の言葉に満ちたものだ。なかでも、もっとも強調されたのが、ビートルズが5年の間に驚異的な進歩を遂げていたということだった。1962年6月、粗削りで経験の浅いミュージシャンでしかなかった4人が、1967年6月にはポピュラー・ミュージックそのものをすっかり作り変えてしまっていたのだ。驚くほどの名声と賞賛と才能とに助けられて、やれないことは何もないうえ、成功しないはずがないという酔いしれるような雰囲気のなかで、ビートルズは“SGT. PEPPER”を生み出した。ポール・マッカートニーが40人編成のオーケストラを指揮したいと言えば、そんなことは簡単にできた。

“SGT. PEPPER”で、ビートルズは白黒の世界から突然華々しい総天然色の世界に飛び込んだような変化を遂げた。1967年のビートルズのアイデア、イメージ、衣装、映画、音楽に見られる、あでやかで目もくらむばかりの万華鏡のような世界に比べたら、1963年、64年、65年はもちろん、1966年でさえモノクロームの世界にしか見えてこない。レコードそのものも斬新だった。デラックスなカラー・ジャケットと切り抜きイラストに加え、（ロックのアルバムでは初めて）収録曲の歌詞がすべて印刷された。ジャケットの制作費だけで、それ以前までのアルバム全体のレコーディング費を超えてしまっていた。また、1月27日にはビートルズとEMIが9年間有効の新規契約を交わし、その契約にのっとって、このアルバムは全世界でまったく同じ形で発売されることになった。アメリカでも、キャピトル・レコードは初めてビートルズのアルバム

CamScannerでスキャン

をイギリスと同一基準で制作することを強いられた。

しかし、“SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND”はビートルズが4人の力を結集させて制作した最後のアルバムとなった。“SGT. PEPPER”の完成直後の4月の終わりから6月初めにかけてのレコーディングでは、すでにバンドとしての全体性と熱意が欠けているのをさらけ出していたが、それでもまだ、すべての力を“SGT. PEPPER”に注ぎ込んでしまったせいで今度は少し楽にやりたがっているのだろうと思わせるくらいのものだった。しかし、次のアルバム（1968年の“THE BEATLES”）のためにスタジオ入りしたころには、“SGT. PEPPER”を生んだ創造的な空気と強烈な目的意識は完全に失われてしまっていた。

しかし、1967年夏、再び4人の心がひとつになるような誘いがあった。BBCが世界で初めて、新しく軌道に乗せた人工衛星を使って5大陸に同時中継するという衛星テレビ番組を企画し、ビートルズに出演を依頼してきたのだ。テレビ・カメラの入ったEMIスタジオで演奏すると、全世界の3億5,000万人の視聴者にパフォーマンスを届けることになるのだ。

新曲を全世界で同時放送するという前代未聞の提案である。ほかのグループなら、こんなことはありえなかった。これと似た提案が再び実現されるまでには、1985年のライブ・エイドまで待たねばならない。

ある程度の美化は含まれているものの、ポピュラー・ミュージック史上最大の瞬間とも言われるこの日、絶頂期にあったビートルズは、まるでリハーサル・セッションのようにリラックスして、'All You Need Is Love'を演奏した。1957年に食肉業者の社交クラブでスキッフルを演奏していたバンドが、10年後（しかも第3次中東戦争の15日後）には、全世界の3億5,000万人の前で「愛こそがすべてだ」と語りかけているのだ。今考えてみても信じられないような、途方もない飛躍である。

ブライアン・エプスタインの死

とくにライブ活動からまったく足を洗ってしまったこともあって、これまでの2、3年の間に、ビートルズはブライアン・エプスタインの手から日増しに離れていく一方だった。4人はもうレコード会社のA&Rマンやリバプールのダンス・プロモーターに気に入ってもらえるようにマネージメントを必要とする、無鉄砲で経験の浅い少年たちではなかった。大きなツアーに出られることを夢見て、ひたすら幸運を祈る若者でもなかった。さらには、アポイントメントやスケジュール、旅程、テレビやラジオの出演予定を調整する必要すらなくなっていた。

だからといって、決してエプスタインが時代に取り残されたわけではなかった。ビートルズと同じように、エプスタインもドラッグと1967年当時のポップ・カルチャーを喜んで迎え入れていた。そして、エプスタインはその夏にしたためた1通の個人的な手紙も「ラブ、フラワー、ベル、ハッピー、未来への希望」という言葉で結んでいた。しかし、現実には、その未来はエプスタインには訪れないものとなって終わった。8月27日、ビートルズの4人が超越瞑想の師で精神的な指導者と称するマハリシ・マヘシ・ヨギの足もとで座り込んでいたころ、エプスタインはロンドンの自宅で死亡しているのを発見されたからである。ビートルズよりは年上だが、その若さでは大きすぎるほどの成功を実現させていたエプスタイン。享年32だった。

検死官は自殺の疑いをあくまでも否定し、エプスタインの死は事故的なものであり、不注意で度重なる

CamScannerでスキャン

薬物の服用が原因だとした。確かに薬物常用癖のあったエプスタインは、その錠剤の効果よりも、錠剤の色が気に入って服用することもしばしばあったほどで、長く中毒症に陥っていた。

前人未到のセルフ・マネージメント

エプスタインとビートルズとの5年間のマネージメント契約は10月1日に失効を迎えようとしていたが、この契約が更新されるのかどうか確証を得ないまま、エプスタインは死んだ。今となっては推測するしかないが、あえて推測してみれば、おそらく契約は更新されただろうが、以前の契約とはかなり条件も違ったものになっていたことだろう。ビートルズの4人がエプスタインを誰よりも愛し、信頼していたことは確かだ。しかし、1967年のビートルズをめぐる状況が1962年とは比較にならないほど変わってしまったことをメンバー自身も自覚していたし、おそらく自分たちだけでもやっていけるのではないかと考えるようになっていただろう。そして、エプスタインが他界してしまうと、ビートルズは実際に自分たちだけでやっていけるのか、はっきり確かめてみることにした。つまり、新しいマネージャーは雇わず、自分たち自身でマネージメントを手がけることになったのだ。

エプスタインが亡くなったあと、まもなくビートルズは4月に企画したまま延期になっていた自主製作のテレビ映画"MAGICAL MYSTERY TOUR"の製作にとりかかった。この映画は、このころからビートルズが解散するまでの数多くのアイデアや企画と同じように、ポールが提案したものだ。ジョン、ジョージ、リンゴは仕事がきついからという理由で仕事を嫌がったことはなかったが(それは本書をざっと読んだだけでもじゅうぶんに明らかなはずだ)、ここにきてやっと自分たちでやりたいことを選べるようになったからには、なるべく忙しくないほうがいいというのが3人の考えだった。逆にポールだけは業界に猛烈に攻勢をかけた。エプスタインから仕事を引き継いだわけでもなかったが、自然にポールがほかの3人に、活動する方向へとけしかける存在になっていった。

しかし、エプスタイン不在による悪影響は、映画"MAGICAL MYSTERY TOUR"の撮影開始とともにすぐに現れ、経営管理については初めから最後まで悪夢のような様相を示した。自分たちだけでも何でもできる、それもきわめてうまくできると信じていた4人は、映画の企画を立て、台本を書き、出演し、音楽を書き、演出し、編集し、外部からいっさいの指導や助言を受けずにやり遂げようと決めていた。

ビートルズの考えにはふたつの致命的な欠陥があった。ひとつは、ビートルズはアーティストであり経営管理者ではなく、プロジェクトの企画の立て方や手配についての知識はほとんど持ち合わせていなかったということ。ふたつ目は、ビートルズは確かにすぐれた能力を持ってはいたが、その能力の使い方を習得するときにはいつも支えてくれる存在がいたのであり、しかもその存在が必要だということを、ビートルズ自身が忘れかけていたことだ。たとえば、このころにはジョージ・マーティンがいなくてもビートルズはスタジオで独自にレコーディングすることなど楽にできただろう。しかし、それはプロデュースとはまた違う分野だった。したがって、映画という分野に踏み込むにあたって、うしろだてとなるしっかりした存在が必要だったのではないかと、"MAGICAL MYSTERY TOUR"については、思ってしまう部分もある。たとえば、映画を作るにあたって、絵コンテはおろか、そのほか必要となる詳細な書類は何ひとつそろっていなかった。ビートルズは「スポットライト」(毎年発行される俳優と女優の写真入りリスト)から適当にキャストを選び、

CamScannerでスキャン

バスを借り、3人のカメラマンを雇ってロケに出かけた。計画では、（ポールが1959年にジョージとヒッチハイクをして訪れてから一度も行っていないという理由で選んだ）デボンシア州とコーンウォール州で1週間撮影し、シェパートン・スタジオで1週間撮影し、そのあと1週間でフィルムを編集して仕上げてしまうとなっていた。それが済んだら、瞑想の修業に全員でインドへ出かけることになっていた。

しかし西部地方での撮影は、疲労困憊する、かなりやっかいなものとなった。あげくのはてに、シェパートンで撮影することはできなくなった。というのは、スタジオは数か月前に、少なくとも数週間前には予約しなければならないことをビートルズは知らなかったのだ。予定していた週はもういっぱいだった。さらに、10時間のフィルムを52分の映画に編集して画面と声とを合わせるのには、1週間どころか11週間もかかることになり、インド行きは1968年の2月まで延期しなければならなかった。撮影開始から映画の完成まで、"MAGICAL MYSTERY TOUR"の製作はビートルズがビジネスや組織だった仕事においていかに未経験であるかをはっきりさせる結果しかもたらさなかった。そして、この未熟さの程度は、1968年のアップル・コープスの設立によって、より具体的な形で明らかになる。

この映画は、ふつうは家族向けの映画やフロア・ショーが放送されるのが定例となっているクリスマス翌日のゴールデン・タイムに初めて放送され、しかも、カラーが重要な要素を占める作品にもかかわらず白黒で放送されてしまうという段取りの悪さが重なったため、イギリスのプレスと視聴者からもさんざんにこきおろされることとなった。ビートルズがこれほどあからさまな悪評を受けたのは初めてのことだった。もちろんすばらしいシーンもあるし、機転のきいたユーモアやアイデアが織り込まれているので、現在ではこの映画に対する評価は1967年よりずっとよくなったとも言える。それでも、よく言われるように、この作品が当時の先端を行っていたということにはならない。

ばら色で始まった1967年は、こうしてかなりきわだった汚点を残して幕を閉じた。"MAGICAL MYSTERY TOUR"は、ビートルズでも失敗するし、みんなと同じ人間なのだということを証明した。ブライアン・エプスタインは亡き人となってしまい、ジョン、ポール、ジョージ、リンゴの4人の個人的な興味はそれぞれ違う方向に向かいつつあり、共存し得ない相違が水面下で形を取り始めていた。

ビートルズはまれに見る強い絆と結束力に支えられていたグループだった。しかし、のちに世界中の人が知ったことは、これほどまでに強い絆で結ばれていても、瓦解してしまうこともあるということだった。

Diary1967

1月4日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズの1967年は、'Penny Lane'のレコーディング再開から始まった。午後7時から午前2時45分までのセッションで、テイク7にピアノ(ジョン)、リード・ギター(ジョージ)、ボーカル(ポール)をオーバーダビングする。
前日の1月3日には'When I'm Sixty-Four'と'Strawberry Fields Forever'のテープのコピーが作られ、アメリカに発送された。

ポール中心にアバンギャルドなテープを作る

1月5日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ポールが'Penny Lane'に別のボーカルをオーバーダビングし、前日のテイクと交換した。そのあと、この日の本来の仕事に入り、午後7時から午前12時15分まで、「カーニバル・オブ・ライト・レイブ」というアンダーグラウンド・イベントのためのエフェクト・テープを制作した。このイベントは1月28日と2月4日の土曜の夜にロンドンのラウンドハウスで開催されることになっていた。ロンドン市内に貼られたイベントのポスターには、「ポール・マッカートニーとデルタ・ミュージック・プラスによる音楽」と告知されていた(後者はどうやらポールまたはビートルズの変名ではなく、まったく別のバンドのことだったと思われる)。
この夜は、コンポーザーであるポールが中心になって、テープ・ループやらディストーションやらエフェクトをつめ込んだテープ(当時のプレスの言葉を借りれば「電子的な騒音」ばかりをつめ込んだテープ)を制作した。この日作ったテープの内容はさすがのビートルズもまだ試みたことがなかったほど過激なもので、ジョンは1968年11月にリリースされる2枚組アルバム"THE BEATLES"収録の'Revolution 9'でこの手法を繰り返すことになる。この日作ったテープの時間は13分48秒と、ひと続きのレコーディングとしては、ビートルズのトラックのなかではもっとも長いものとなった。
基本となるトラックに、無数のオーバーダビングを加えたこのテープには、ディストーションをかけた単調なドラムとオルガンの音、ディストーションをかけたリード・ギター、パイプオルガンといった、さまざまなエフェクト(たとえばうがいをする音などまで)が含まれていた。なかでももっとも強烈なのは、ジョンとポールの発狂したようなわめき声と、「Are you alright?」とか「Barcelona!」とか思いついた言葉をやたらと大声で怒鳴っている部分だ。
ほぼ14分間のこのテープは、最後にポールがコントロールルームに向かって「プレイバックしてくれる?」と叫ぶ声で終わっている。テープを聴き返し、ラフ・モノ・ミックスを作った。
ポールからこのテープを受け取った「カーニバル・オブ・ライト・レイブ」の主催者は、ビートルズが自分たちのためにこれほどアバンギャルドなサウンドを作ってくれたことに大喜びだった。

1月6日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

さらに'Penny Lane'用のオーバーダビング作業を続け、ポールのベース、ジョンのリズム・ギター、リンゴのドラムを録音。さらにジョンがコンガを加えた。テープの4トラックがまたいっぱいになってしまったので、新たにリダクション・ミックスをして、テイク7からふたつのあきトラックを含むテイク8を作った。これに手拍子、ジョンとジョージ・マーティンのピアノ、のちにホーン・セクションが加えられるパートに、ジョン、ポール、ジョージのスキャット・ハーモニーをオーバーダビングした。午後7時から午前1時までのセッションの最後に、さらにリダクション・ミックスしてテイク8からテイク9を作り、あきトラックをふたつ作った。

1月9日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

フルート4本とトランペット2本を'Penny Lane'にオーバーダビング。その6人のうち3人のミュージシャンには、さらにピッコロ2本とフリューゲルホルン1本を演奏してもらった。フルート奏者はレイ・スウィンフィールド、P・グッディ、マニー・ウィンターズ、デニス・ウォルトンだった。トランペット奏者はレオン・カルバートとフレディ・クレイトン。また、誰も気づいていなかったのだが、この日、ジョンはテイクのあいまにミュージシャンたちの会話を録音し、プライベート・コレクションに

CamScannerでスキャン

していた。2種類のラフ・モノ・ミックスを作り、午後7時から午前1時45分までのセッションを終える。

1月10日(火)

EMIスタジオ、第3スタジオ

London

午後7時から午前1時40分までのセッションで、サウンド・エフェクトの試行錯誤を繰り返したうえで、'Penny Lane'のテイク9に、スキャット・ハーモニーとハンド・ベルをオーバーダビング。

1月12日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ

London

'Penny Lane'への2回目のクラシック楽器のオーバーダビング。トランペット2本、オーボエ2本、コーラングレ(イングリッシュ・ホルン)2本、ダブル・ベース1台を録音した。トランペット奏者は、バート・コートリーとダンカン・キャンベルだった。コーラングレも担当したオーボエ奏者は、ディック・モーガンとマイク・ウィンフィールド。ベース奏者はフランク・クラーク。新たにふたつのラフ・モノ・ミックスを作り、午後2時30分から11時までのセッションは終了。

'Penny Lane'のハイライト

1月17日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ

London

'Penny Lane'にまだ何かもの足りなさを感じていたポールは、1月11日の夜、BBC2のテレビ番組「マスターワークス」で、ニュー・フィルハーモニア・オーケストラのデビッド・メイソンがギルフォード大聖堂で英国室内楽団との共演で、バッハの「ブランデンブルク協奏曲第2番ホ長調」を演奏し、ピッコロ・トランペットを吹いているところを見かけた。その翌朝、早速電話で誘われたメイソンは、この夜の午後7時から午前12時30分までのセッションに参加すべく、アビイ・ロードを訪れた。メイソンは9本のトランペットを持参してきたが、ポールやジョージ・マーティンと検討したすえ、Bフラットのピッコロ・トランペットが選ばれた。当然、メイソンのパート用の楽譜はなく、ポールがそのパートを口ずさんでジョージ・マーティンがそれを採譜していった。メイソンは最終的に2種のオーバーダビング用の録音をした。間奏のソロと、エンディングの華やかな部分だ。メイソンには27ポンド10シリングという特別謝礼が支払われた。

'Penny Lane'は制作が始まってから3週間後にようやく完成した。3種類のモノ・ミックスを作り、ベストとなったミックス11をコピーして、さっそくアメリカに送られた。

またこの日、ビートルズの友人でギネスの相続人であるタラ・ブラウンがウェスト・ロンドンで車の衝突事故を起こし死亡。「デイリー・メール」紙に掲載された彼の死に関する検死官のレポートに触発され、ジョンは'A Day In The Life'を書き始める。

ポール、アンダーグラウンドを語る

1月18日(水)

グラナダ・テレビ

Upper James St, London

この当時のものとしては希少なインタビューのために、この日の午後、ポールはロンドン中心部(アッパー・ジェイムズ・ストリート3番地)に事務所を構えるイギリス北部向けの放送局グラナダ・テレビを訪れた。1階にある小さなスタジオで、ロンドンで流行し始めたアンダーグラウンド(またはカウンターカルチャー)・ムーブメントについての特別ドキュメンタリー番組で使われるインタビューの撮影をした。アンダーグラウンドについて大きな影響力を持っていたのはポールだった。

インタビュアーはジョー・ダーデン=スミス。グラナダ・テレビの深夜番組「シーン・スペシャル」(夕方の「シーン・アット6:30」の特別版)のために、29分間のすばらしい番組を企画、制作した人物である。この番組のサブタイトルは「イッツ・ソー・ファー・アウト・イッツ・ストレート・ダウン」というものだった。ディレクターのジョン・シェパードは、1987年に"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"を題材に、「イット・ワズ・トゥエンティ・イヤーズ・アゴー・トゥデイ」という2時間のドキュメンタリーを制作することになる。このインタビュー番組は、3月7日、イングランド北部のみ、グラナダ・テレビで放送される(午後10時25分から10時55分)。しかし、ほとんどのロンドンっ子にさえ騒々しく珍妙に思われる流行について共感した番組を観て、北部の視聴者は何を思っただろうか。番組の冒頭からいきなり登場し、それからもあちこちで顔を出したポールは、こぎれいなかっこ

CamScannerでスキャン

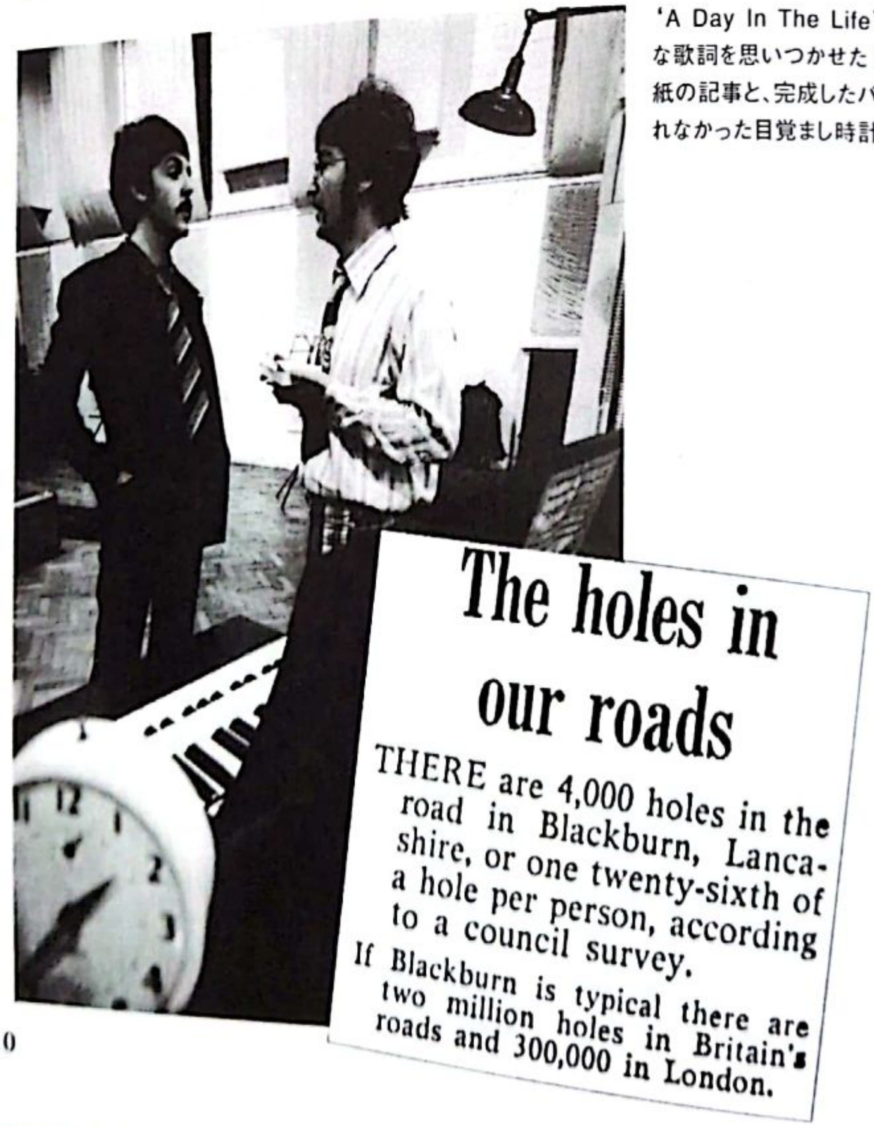
うで口髭をはやし、脚を組んで椅子に座り、ムーブメントの意図をできるだけ丁寧に説明した。「まともな人間こそアンダーグラウンド・ムーブメントを受け入れるべきなんだよ。それは自由を象徴しているからね。これは奇妙なものじゃなくて、ただ単に新しいものだ。わけのわからないものじゃなくて、今起こっているものなんだ」と。

ダーデン=スミスはまた、「インターナショナル・タイムズ」の編集会議の様子、インディカ・ブックショップの内装、UFOクラブで'Interstellar Overdrive'を演奏するピンク・フロイド、当時最先端のラウンドハウスで行なわれたパフォーマンス、ピカデリー・サーカスで起きたハプニングも撮影していた。さらに、アレン・ギンズバーグ、エイドリアン・ミッチェル、ローレンス・ファーリンゲッティによるロイヤル・アルバート・ホールでの詩人の集いの様子も伝えた。ある意味で、ポールのインタビューは、往々にして珍奇なものにしか見えないこうした映像を受け入れやすくし、それなりの正当性を与えるために使われたとも言えるだろう。

1月19日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズの次のアルバムでフィナーレを飾る曲となる'A Day In The Life'のレコーディングを開始。午後7時30分から午前2時30分までのセッションで、4テイク録音した。この時点では、曲の間奏部分に何かを入れることになるだろうということしかビートルズにもわかっていなかった。ただ、テープのなかで見当をつけるために、マル・エバンズに1から24まで小節をカウントしてもらった。マルの声にはエコーがかけられ、バックにはお遊び程度のピアノを入れた。さらに、目覚まし時計の音でこのセクションの終わりをマークした。



The holes in our roads

THERE are 4,000 holes in the road in Blackburn, Lancashire, or one twenty-sixth of a hole per person, according to a council survey.

If Blackburn is typical there are two million holes in Britain's roads and 300,000 in London.

'A Day In The Life'でもっとも印象的な歌詞を思いつかせた「デイリー・メール」紙の記事と、完成したバージョンからも消されなかった目覚まし時計

CamScannerでスキャン

1月20日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前1時10分までのセッションでは、まず'A Day In The Life'にリダクション・ミックスをして、オーバーダビング用のあきトラックを作った。テイク6がベストということになり、さらにジョンがリード・ボーカルを、ポールがベースを、リンゴがドラムを追加した。また、初めてポールのボーカルも入れた。この曲はレノン=マッカートニーの曲作りにおける共同作業がそもそもどうやって始まったのか思い出させてくれる典型的な作品だ。つまり、ジョンが書いた作品には初めと終わりの部分になりそうなものはあるが、まんなかの部分が欠けている。一方、ポールの曲はまんなかだけで初めと終わりがない。しかし、その両方をくっつけると、完璧にひとつのイメージとなって、まるで最初から意図してそう書きあげたような印象を与えたのだ。その印象は、目覚まし時計の音のすぐあとで、ポールが「Woke up, fell out of bed（目を覚まし、ベッドから落ちた）」と歌い始めているのでなおさら強くなる。ちなみにこの目覚し時計の音は当初、24小節分の空白部分の最後を示すために録音されたものである。しかし、この偶然を利用して、目覚まし時計の音は最後まで残されることになった。

ポールは2月3日にもう1回ボーカルを録り直す。1月20日バージョンのボーカルは、ラフなガイド・ボーカルといったもので、ボーカルをとちったりしたので、ポールは歌い終わると悪態をついたりしている（"ANTHOLOGY 2"に収録）。

1月25日(水)

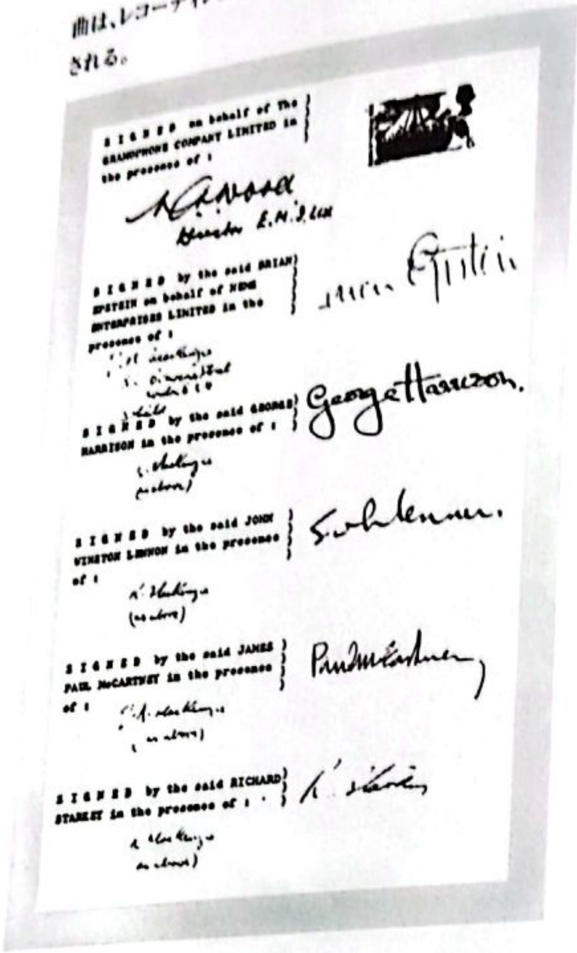
EMIスタジオ、第1スタジオ
London

1月23日には、'Penny Lane'のマスター・モノ・ミックスにもなったリミックス11のコピーが、アメリカのプレス用にとキャピトル・レコードに送られていた。しかし、もっとよくなると考えたポールは、この日の午後6時30分から8時30分までにさらに3種類のモノ・ミックスを作り、新たなマスター・テープとなるリミックス14を仕上げた。リミックス14とリミックス11の大きな違いは、曲のエンディングに入っているデビッド・メイソンのトランペットが一部削られたことだ。午後9時から10時まで、アメリカ盤用のリミックス14のコピーを作った。イギリスでは新旧のリミックスをうまく差し替えることができたが、アメリカにはすでにリミックス11でプレスされたシングル盤が、発売前のプロモーション用、あるいは先行放送用コピーとしてラジオ局に配られてしまっていた。とはいえ、キャピトルからの一般リリース用には正規のミックスが使われる。

シングル'Strawberry Fields Forever/Penny Lane'は、イギリスでは2月17日に発売される。ビートルズがリリースした4枚の45回転両A面シングルの3枚目となる。この2

CamScannerでスキャン

曲は、レコーディング中の次のアルバムの収録曲からはずされる。


SIGNED on behalf of The GRAMOPHONE COMPANY LIMITED in the presence of :

SIGNED by the said BRIAN EPSTEIN on behalf of NEMS ENTERPRISES LIMITED in the presence of :

SIGNED by the said GEORGE HARRISON in the presence of :

George Harrison.

SIGNED by the said JOHN WINSTON LENNON in the presence of :

SIGNED by the said JAMES PAUL McCARTNEY in the presence of :

SIGNED by the said RICHARD STARKEY in the presence of :

1967年1月27日から1976年1月まで9年間ビートルズを、それも結果として個人的にEMIに拘束したレコーディング契約書。4人の署名入り

Strawberry Fields Forever'のプロモ・クリップ

月30日(月)

ール・パーク

venoaks, Kent

ー・シングル'Strawberry Fields Forever/Penny ne'のリリースを控え、ビートルズはプロモーション・クリを撮影しなければならなかった。ただ、前に「トップ・オド・ポップス」とは違う内容のクリップを要求してきた「サユア・ラッキ・スターズ」と「レディ・ステディ・ゴー!」はに放送が終了してしまっていたため、今度の新曲2曲については1種類ずつ作るだけでよかった。

プロモーション・クリップは、ビートルズの映画製作会社2社のうちの1社であるサバフィルムズのトニー・ブラムウェルによって制作され、ロンドンのドン・ロング・プロダクションズのスタッフにより、カラー35ミリ・フィルムで撮影された(アメリカのテレビではカラー放送されるが、イギリスではモノクロ放送)。

ジョー・マッグラス(1965年11月23日参照)とマイケル・リンゼイ=ホッグ(1966年5月19日、20日参照)に続いたクリップの監督は、生まれ故郷のスウェーデンでテレビのポップ番組のディレクターを手がけてきたピーター・ゴールドマン。ゴールドマンをビートルズに紹介したのは、1960年にハンブルクでビートルズが出会ったドイツ人の親友、クラウス・フォアマンだった。フォアマンはその後ミュージシャンとなってブライアン・エプスタインと契約、さらにアーティストとして活動の場を広げ、ビートルズのアルバム"REVOLVER"のジャケットもデザインしたが、この時点ではマンフレッド・マンのベーシストだった。

ビートルズからの要請にしたがって、ゴールドマンは1月の初旬にはイギリスに渡り、ロンドン付近でロケに使えそうな場所を下見をしながら、アビイ・ロードではレコーディングの見学もしていた。ロケ地には2か所が選ばれたが、最初の撮影場所はロンドンから約32キロほど南東にあるケント州セブンオークスのノール・パークだった。鹿が自由に歩き回っているという、ナショナル・トラスト(イギリスの名勝史跡保護団体)が所有し維持しているこの広大な土地では、15世紀に建造された家やゴルフ・コースが残されている。そのノール・パークでは'Strawberry Fields Forever'を撮影するために2回(1月31日も参照)、さらに'Penny Lane'を撮るために1回(2月7日参照)と、計3回の撮影が行なわれることになる。

ロックのプロモーション・クリップを初めて自主制作したことで、この方面ではパイオニアのような存在になっていたビートルズは、ここでもまた新境地をひらくこととなった。これまでは演奏シーンをそのまま映像にしたクリップが多かったなかで、ビートルズは、演奏シーンはいっさい含まない、曲の意味とフィーリングを直接的に、あるいは間接的に発展させたようなイメージをつなぎ合わせたフィルムを、初めて打ち出したからだ。

ノール・パークでの最初の撮影は、この日の夕方、暗いな

CamScannerでスキャン

かで行なわれた。巨大な鳥かごの背後にある、大きくて枯れた樫の木のまわりで、'Strawberry Fields Forever'のいくつかのシーンがフィルムに収められた。
ビートルズがロケに行っているあいだに、EMIスタジオではジョージ・マーティンがアセテート盤をカッティングするために'A Day In The Life'のラフ・モノ・ミックスを作った。

1月31日（火）

ノール・パーク
Sevenoaks

この日の午後、再びノール・パークを訪れたビートルズは、夕方までかかって'Strawberry Fields Forever'のクリップを完成させた。この日撮影されたシーンのひとつでは、ポールが樫の木の高い枝から飛び下りて、ピアノまでうしろ向きに走った。これを逆再生するとポールがピアノから木まで走っていって枝に飛び乗るシーンになる。ちょっとした技を使った撮影だが、当時ビートルズが凝っていたテープの逆回転に触発されたアイデアであったことはまず間違いないだろう。

アルバム・コンセプトを思いつく

2月1日（水）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

“SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND”というアルバム・コンセプトは、'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'という曲が書かれて初めて生まれる。つまり、このアルバムが“SGT. PEPPER”プロジェクトとなったのは、この曲をレコーディングしたすぐあとで、ポールが、ビートルズが実際にサージェント・ペパーのバンドであるかのように振る舞い、アルバム全体をこの架空のバンドのショーにするというアイデアを思いついたからだった。
午後7時から午前2時30分までのセッションで、タイトル曲のリズム・トラックのテイク1からテイク9までを録音した。

2月2日（木）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'に、ポールのリード・ボーカルとグループのバック・コーラスをオーバーダビングした。そのあと、以後のオーバーダビングにそなえて、テイク9をリダクション・ミックスしてテイク10を作った。
午後7時から午前1時45分までのセッションの最後に、アセテート盤のカッティングをするためラフなモノ・ミックスを作った。

2月3日（金）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前1時15分までのセッションでは、'A Day In The Life'のテイク6へのオーバーダビングが行なわれた。ポールがボーカルとベースを録り直す。リンゴは特徴のあるタムを駆使したドラミングを新しく採用することにし、最初に録音したドラム・パートをすべて消去した。

'Penny Lane'のプロモ・クリップを撮影

2月5日（日）

エンジェル・レイン
Stratford, London

'Strawberry Fields Forever'のクリップ撮影を終了したビートルズと監督のピーター・ゴールドマンは、'Penny Lane'の撮影を開始。できるだけリバプール郊外の雰囲気を出したかったにもかかわらず、実際のペニー・レインまで出かけることは不可能だったので、一行はロンドンの（工業地帯である）イースト・エンドにあるストラトフォードまで赴き、正午から午後4時まで、エンジェル・レイン周辺で、白馬に乗ったり歩いたりするシーンを撮影した。
あたかもビートルズがペニー・レインを歩いているかのように見せかけるため、ゴールドマンとドン・ロング・プロダクションズのスタッフは、日付は不明だが、ビートルズ抜きでリバプールまで足をのばし、床屋や、ロータリーにあるバス待合所や、リバプールの有名な緑色のバスなど、曲のなかに登場する光景を撮影した。そのフィルムはこの日撮影したビートルズのシーンと一緒に編集された。

2月7日（火）

ノール・パーク
Sevenoaks

'Penny Lane'のクリップを完成させるため、昼前にノー

ル・パークで最後の2シーンを撮影した。まず、白馬に乗ったビートルズが、廃虚の壁に残っているアーチの下をくぐり、壁の周囲を右回りに走る場面。もうひとつは、かなり寒い日だったにもかかわらず、近くのふたつの池のうち奥にある池のほとりに設置されたディナー・テーブルに腰かけ、かつらをかぶったふたりの給仕(そのうちのひとりはマル・エバンズ)から楽器を受け取るシーンだった。

秀逸に出来あがった'Strawberry Fields Forever'と'Penny Lane'のプロモーション・クリップは、最終的な編集を終えると、ただちに世界中の主要テレビ局に配布、または販売される。

これらのクリップは、イギリスではおもにBBCで放送される。2月11日の「ジューク・ボックス・ジュリー」(BBC1、午後5時15分から5時40分)では、'Penny Lane'のクリップから1分10秒の抜粋が放送される。続く2月16日の「トップ・オブ・ザ・ポップス」(BBC1、午後7時30分から8時)では両方のクリップを放送。同番組はまた、翌週に'Penny Lane'を(2月23日の同時間)、その次の週に'Strawberry Fields Forever'を(3月2日の同時間)を再放送する(しかし、年末にナンバーワン・ヒットを集める同番組の特集では放送されない。BBCのチャートによればこのシングルは最高2位までしか上がらなかったからだ)。ITV系列では、地方局サザン・テレビの番組「アズ・ユー・ライク・イット」の第1回に'Penny Lane'を放送(3月11日午後5時15分から5時40分)。ちなみに、この番組の演出はマイク・マンスフィールド、司会はピート・マレー。

アメリカでは、ABCの「ザ・ハリウッド・パレス」で2月25日(EST午後9時30分から10時)、「クレイ・コールズ・ディスコテック」で3月11日(EST6時から7時30分)、同じ日に「アメリカン・バンドスタンド」で、「ホエア・ジ・アクション・イズ」で3月14日(EST午後4時30分から5時)に放送される。

またこの日、モンキーズのミッキー・ドレンツがプロモーションのためイギリスに到着。ポールと対面する。

2月8日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時15分までのセッションで、イギリスのテレビで放送されていたケロッグ・コーンフレークのコマーシャルを見てタイトルをつけたというジョンの新曲'Good Morning Good Morning'をレコーディングした。かなりベーシックなリズム・トラックを8テイク録音。

アビイ・ロード以外のスタジオを使う

2月9日(木)

リージェント・サウンド・スタジオ
Tottenham Court Rd, London

イギリスでは初めて、アビイ・ロード以外のスタジオでEMIのセッションを行なった。リージェント・スタジオは、当時ロンドンではめずらしいインディペンデント・スタジオのひとつだった。

もうEMIのスタッフではなくなっていたジョージ・マーティンはビートルズに同行することが自由にできたが、EMIの社員だったバランス・エンジニアのジェフ・エメリックとテープ・オペレーターたちは同行できなかった。そのため、このセッションではリージェント・スタジオのチーフ・エンジニア、エイドリアン・イビットソンがエメリックの代わりを務めた。ポールの新曲'Fixing A Hole'を3テイク録音し、テイク2がベストとなった(セッションの開始時刻と終了時刻は不明)。

'A Day In The Life'の1日

2月10日(金)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

1967年がビートルズにとって、あらゆる意味で熱が入った1年だったことは間違いないが、そのなかでもこの日、2月10日はその最たるものだった。

'A Day In The Life'の空白の24小節をどうやって埋めるかについて、最高のアイデアを思いついたのはポールで、オーケストラを90人ほど集めて、それぞれの楽器のいちばん低い音からいちばん高い音まで出してもらうというものだった。そして、この壮大なアイデアを実現するようにまかされたのは、例のごとくジョージ・マーティンだった。マーティンは18ポンドずつ支払うという約束でミュージシャンを集め、24小節の間の演奏について次のような指示を出した。それはまず、

a)それぞれ非常に静かな音から始め、終わりには非常に大きな音になっていること。

b)最初は非常に低い音から始め、いちばん高い音で終わること。

CamScannerでスキャン

c)音階の上げ方については、それぞれ勝手に、周囲の人とは無関係にやること。

というものだった。

この日、実際に集まったミュージシャンは90人ではなく、40人だった。それでもギャラは合計すると367ポンド10シリングとかなりの出費だ。しかし、オーケストラには4回レコーディングしてもらって、これを4トラック・テープのすべてのトラックに入れ(のちにこれはさらに1トラックにミックスされる)、そのため、最終的にはポールが要求していたものよりはるかに多い、160人分の演奏と同じ結果を得ることができた。

参加したミュージシャンは次のとおり。

バイオリン:エリック・グルーエンバーグ(コンサート・マスター)、グランビル・ジョーンズ、ビル・モンロー、ユルゲン・ヘス、ハンス・ガイガー、D・ブラッドリー、ライオネル・ベントレイ、デビッド・マッカラム、ドナルド・ウィークス、ヘンリー・デイティナー、シドニー・サックス、アーネスト・スコット。ビオラ:ジョン・アンダーウッド、グウィン・エドワーズ、バーナード・デイビス、ジョン・ミーク。チェロ:フランシスコ・ガバロ、デニス・ビゲイ、アラン・ダルツィエル、アレックス・ニフォーシ。コントラバス:シリル・マッカーサー、ゴードン・ピアス。ハープ:ジョン・マーソン。オーボエ:ロジャー・ロード。フルート:クリフォード・セビル、デビッド・サンドマン。トランペット:デビッド・メイソン、モンティ・モンゴメリー、ハロルド・ジャクソン。トロンボーン:レイモンド・ブラウン、レイモンド・プレムル、T・ムーア。チューバ:マイケル・バーンズ。クラリネット:ベイジル・チャイコフ、ジャック・ブライマー。バスーン:N・フォーセット、アルフレッド・ウォーターズ。ホルン:アラン・シビル、ニール・サンダース。パーカッション(ティンパニーを含む):トリスタン・フライ。

ジョージ・マーティンとポールは交替でオーケストラを指揮し、ジェフ・エメリックがコントロール・ルームでフェーダーを慎重に操作し、音が次第に強くなっていくようにレコーディングを調整した。さらに、EMIの巨大な第1スタジオにある独特のアンビオフォニックス・システムを用いてレコーディングされた。このシステムは、スタジオの四方の壁に対称的に設置された100個のラウドスピーカーから、それぞれに異なった時間差で音を鳴らすことで残響と共鳴を人工的に増幅させる装置。これで得られるサウンドはアンビオフォニーと呼ばれている。

しかし、こうした技術面だけではこの日のレコーディングのすごさの半分しか語れない。とにかく、この日、午後8時から午前1時にわたって行なわれたセッションは、まさしく一大イベントだった。参加したミュージシャンは、きちんと正装してくるよう言われたうえに、つけ鼻のついた眼鏡など、パーティー・グッズを手渡された。バイオリン奏者のデビッド・マッカラムは、ピエロの赤い鼻をつけ、コンサート・マスターのエリック・グルーエンバーグは弓を持つ手にゴリラの手袋をはめるなど、全員がおもしろい帽子をかぶったり、カーニバルの小道具を身につけたりしていた。ふたりのバスーン奏者の楽器につけられた風船は、演奏に合わせてふくらんだり縮んだりした。

オーケストラの奏者たちが帰ったあと、ビートルズと数人の友人はそのままスタジオに残り、この曲のエンディングを録音した。のちにエンディングは叩きつけるようなピアノ・コードになるが、この時点では長いハミングで終わることになっていた。3回のテイクは途中で爆笑に変わってNGになってしまったが、4回めはうまくいき、4トラック・テープにオーバーダビングされた。これは、2月22日にあのピアノ・コードがレコーディングされるまでは、'A Day In The Life' のエンディングとしてベスト・アイデアだった。

　オーケストラによるこの日のセッションはNEMSエンタープライズによって撮影されていた。トニー・ブラムウェルは7台のハンド・カメラを駆使して、このはちゃめちゃなイベントの様子を記録した。このフィルムはのちにほかの映像(つまりビートルズが登場しない映像)と一緒に編集され、'A Day In The Life' のプロモーション・クリップとして仕上げられる。しかし、このときはイギリスでも、ほかのどの地域でも一度も放送されない(イギリスではどちらにしてもこの曲そのものがBBCで放送禁止処分になってしまう。1967年5月20日参照)。ミュージシャン全員が正装し、眼鏡を逆さにかけたり、プラスチック製の乳首のシールを貼ったり、赤い鼻や作りものの目玉をつけたり、作りものの葉巻をくわえたり、頭にはげのかつらをかぶったり、ハンカチをリボン代わりにしている様子をとらえたこのときの映像は、この夜のセッションの本質をよく描いていて、これ自体がおかしくてたまらない、そして、少しアナーキーな小品になっている。それだけに公開されないのは残念なことだ。また、映像にはジョージの妻のパティやビートルズに特別に招かれたゲストも映っている。そのなかには、ミック・ジャガー、マリアンヌ・フェイスフル、キース・リチャード、マイク・ネスミス、ドノバン、フールというデザイナー・グループのサイモンとマリーケ

CamScannerでスキャン

といった顔ぶれがそろっていた（マリーケがオーケストラのオーバーダビングのときに叩いたタンバリンの音はアルバムにも入っている）。さらに、ニール・アスピノールに閉め出されるファンの女の子たちや、第1スタジオの広い空間にふわふわと浮かぶシャボン玉も映っている。

'A Day In The Life'が放送されずに終わる最大の原因は、これが"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"のテレビ特別番組に組み込まれることになっていたからだ。この番組は、少なくとも1967年いっぱいは十分実現の可能性があった（もしこの企画が実現していれば、1979年のブロンディの"EAT TO THE BEAT"に代表されるビデオ・アルバムのはしりとなる番組になっていたことだろう）。最終的にはあきらめざるを得なくなるものの、ビートルズは1967年秋までこの番組を制作したいという希望を捨て切れないでいたようだ。夏ごろになると音楽誌ではこの話題がまったく扱われなくなり、ビートルズもこの企画を断念したかのような印象を与えた。しかし、実際には"MAGICAL MYSTERY TOUR"製作のまっただなかである9月26日の時点でも、ビートルズに制作依頼を打診されたピーコック・プロダクションズが、この番組の完全な撮影スケジュールを作成している。

企画は結局ボツになり、撮影も始まらないのだが、このスケジュールは読むだけでかなり期待がふくらんでしまうものがある。予算は3万4,000ポンド、撮影期間は1か月（10月21日から11月21日）、最終的なフィルムの長さは52分間、'A Day In The Life'に関連したシーンにはそれだけで19分15秒も割かれていた（もちろん2月10日の撮影分もふんだんに使われる予定だった）。カラー作品で、脚本はイアン・グラス、監督はキース・グリーン、制作はビック・シンとトミー・ウィバーとなっていた。カメラマンは2名（そのうちひとりは"MAGICAL MYSTERY TOUR"の撮影を担当するオーブリー・デュワー）、さらに2,200ポンドをかけて115名のエキストラを雇うことになっていた（子ども役24名、会社員役24名、ロッカーズ風のバイク乗り役12名、モデル風リタ・メイド役12名、モリス・ダンサー12名、牛乳配達屋役1名、瞑想者役1名、気のふれた男役1名、アラブの首長役1名、その他）。

映画"HOW I WON THE WAR"のシングル

2月11日（土）

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

映画"A HARD DAY'S NIGHT"と"HELP!"が製作開始から数か月という早さで完成して公開されたのに対して、"HOW I WON THE WAR"の進行は遅々として進まなかった。1966年の秋に撮影され、ジョンの出演シーンは11月6日には仕事を終えていたにもかかわらず、初公開は1967年10月18日まで待たなければならない（ロンドン・パビリオンで行なわれるプレミア・ショーにはビートルズのメンバー全員が出席する）。

その長い間隔の間、この日から3月3日までは、トゥイッケナムのレコーディング・シアターで、音声と音楽のアフレコなどといった映画の仕上げが行なわれた。正確な日付は不明だが、ジョンもこの作業に少なくとも1回は立ち合い、自分の声をサウンドトラックにオーバーダビングしている。

この映画のプロモーションのために、ユナイテッド・アーティスツは系列レーベルから、えげつないとは言わないまでもあまりにも安直なシングル盤を、初公開の数日前にあたる1967年10月13日にリリースする。それは（ジョンが演じた）グリップウィード一兵卒と第3中隊のクレジットで、'How I Won The War'というタイトルの曲だ。結果的に、このレコードはビートルズの面々を抜きにしたジョン・レノンのシングル、という内容を暗示させるレコードとなる。しかし、実際にはジョンでさえほとんどこのレコードには関わっていない。この曲は、"HELP!"に続きこの映画のスコアを作曲したケン・ソーンによるテーマ曲と、サウンドトラックから抜粋したエフェクトや会話の組み合わせで、ジョンとわかる声は2秒も収録されていない。

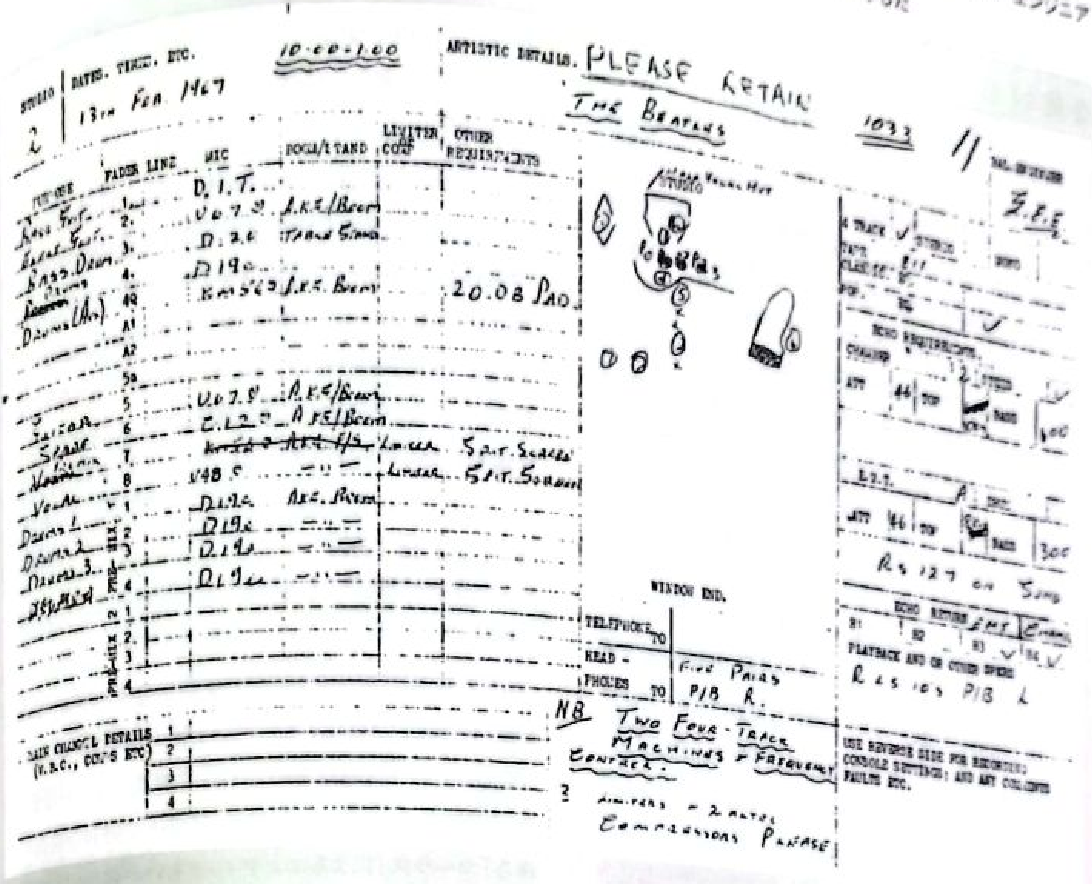
2月13日（月）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後7時から午前3時30分までのセッションは、'A Day In The Life'の新しいモノ・ミックスを4種類作ることから始まった。そのあと、ジョージの新曲'Only A Northern Song'のレコーディングに移った。ジョージは

CamScannerでスキャン

この日のセッションのためにジェフ・エメリックが書いたスタジオ・プラン。マイクの位置が図解されている。テクニカル・エンジニアは、この指示書を見てセッティングした



あいかわらずタイトルが思い浮かばないため、この夜もレコーディングを始めた段階ではタイトルは'Not Known'(タイトル不明)というものだった。

この曲がノーザン・ソングス(当時ビートルズの作品の版権を管理していた会社の名)から出版されることを皮肉ったタイトルとなる'Only A Northern Song'(「ただのノーザン・ソングさ」)は、"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"におけるジョージの曲となる予定だった。しかし、実際にはこの曲は1969年1月にリリースされる映画"YELLOW SUBMARINE"のサウンドトラック・アルバムに収められるまで発表されない。

この日はリズム・トラックを9テイク録音し、テイク3がベストとなった。

2月14日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前12時30分までのセッションで、さらに'Only A Northern Song'の作業を続けた。セッションの最初の作業として、テイク3をリダクション・ミックスして作ったテイク12に、ジョージがリード・ボーカルを2回オーバーダビングする。そのあと、アセテート盤のカッティングができるように、ラフなモノ・ミックスを作る。

2月16日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日、午後7時から午前1時45分までのセッションでは、2月8日にレコーディングされた'Good Morning Good Morning'のベーシック・トラックのベスト・テイクに、ボーカルとベースがオーバーダビングされた。ラフなモノ・ミックスを作ったのち、テイク8をリダクション・ミックスして、テイク9とテイク10を作った。しかし、テイク10へのオーバーダビングは3月13日まで行なわれない。

CamScannerでスキャン

2月17日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

シングル'Strawberry Fields Forever/Penny Lane'のイギリスでのリリース日であるこの日、ビートルズは午後7時から午前3時までのEMIセッションで'Being For The Benefit Of Mr. Kite!'のレコーディングにとりかかった。ジョンはこの曲の歌詞のほとんどを、1843年2月にランカシア州のロックデイル近郊で開催されたサーカスの宣伝ポスターを参考にして書いた。このポスターは、1月31日に'Strawberry Fields Forever'のプロモーション・クリップの撮影のためにセブンオークスに行ったとき、ジョンが骨董屋で見つけて購入したものだった。
7テイクまでは、リズム・トラックのみ(ジョージ・マーティンはハーモニウムを演奏)をレコーディングした。最後のテイクにジョンがボーカルをオーバーダビングし、4トラック・テープをリダクション・ミックスしてテイク8とテイク9を作った。ジョンはテイク9にさらにボーカルをオーバーダビング。セッションの最後に、ラフなモノ・ミックスを作った。

2月20日(月)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

'Being For The Benefit Of Mr. Kite!'のレコーディングを始めたときにジョンがジョージ・マーティンに頼んだのは、実際のサーカスの雰囲気をふんだんに取り入れたいということだった。しかし、古めかしい手動のスチーム・オルガンを見つけてくることが不可能だとわかると、ジョージ・マーティンは、それならばアビイ・ロードの中でそれらしいサウンドを作らなければならないと判断した。そこでマーティンは、スチーム・オルガンでスーザ(「星条旗は永遠に」などのマーチで有名な作曲家)の作品を演奏している昔のテープを探し出すと、ジェフ・エメリックに、テープをこま切れにばらばらにして、それをまた無作為につなげるように指示した。
午後7時から午前2時15分までのセッションの間に、この作業が行なわれた(しかし、3月29日までこのエフェクトはオーバーダビングされていない)。そのあと、アセテート盤カッティング用に'Good Morning Good Morning'のラフなモノ・ミックスが作られた。

2月21日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前12時45分までのセッション。'SGT. PEPPER'のレコーディングのなかではシンプルな曲のひとつである'Fixing A Hole'を完成させた。この日、行なわれた作業は2月9日にリージェント・サウンド・スタジオで録音したテイク2をリダクション・ミックスし、オーバーダビングするというもの。モノ・ミックスをいくつか作り、リミックス3とリミックス6を編集したものをマスターにした。

2月22日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョンの最後のボーカルに続く圧倒的なオーケストラ・セッションのあと、'A Day In The Life'のエンディングをどうするかという問題はあいかわらず解決されないままだった。2月10日のセッションが終わったあとで録音されたいわゆる「コーラス」によるエンディングもいい線はいっていたが、パワーが今ひとつ足りなかった。そこで、午後7時から午前3時45分までのセッションの間に、ジョン、ポール、リンゴ、マル・エバンズの4人が、3台のピアノで同時にEメジャーのコードを叩くという作業が続いた。4人がまったく同時に鍵盤を叩くのがなかなか難しかったため、これだけで9テイク必要とした。テイク9がベストとなり、これのオーバーダビングを3回繰り返し、さらにジョージ・マーティンがハーモニウムを加えて音を厚くし、4トラックがいっぱいになった。この結果、この日出来あがった53秒間(レコードではやや早めにフェイドアウトしている)にわたるピアノによる音の壁は、'A Day In The Life'だけでなく、アルバム全体にとっても完璧なエンディングとなるように仕上がった。
ビートルズは、この曲についてはモノおよびステレオ・ミックスと編集の作業にとくに熱心に関わり、そのあともさらに実験的な曲をレコーディングしたほど精力的だった。これはリンゴが主役の'Anything'という曲で、22分10秒間にわたり、タンバリンとコンガを加えたドラム・ビートが続いている。しかし、結果的にこのレコーディングはまったく使用されないだけでなく、リミックスさえされていない。

CamScannerでスキャン

2月23日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時45分までのセッションではまず、ジェフ・エメリックが'A Day In The Life'のステレオ・マスターを準備した。これが完成したあと、新曲にとりかかる。ポールの'Lovely Rita'のリズム・トラックを8テイク録音し、テイク8をリダクション・ミックスしてテイク9とし、ポールがベースをオーバーダビングした。

2月24日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前1時15分までのセッション。中心となったのは、'Lovely Rita'にポールのリード・ボーカルのオーバーダビングをすることだった。テイク9をリダクション・ミックスして、テイク10とテイク11を作った。この続きの仕上げは、3月7日と21日に行なわれる。

2月28日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

1967年にもなると、ビートルズが「テイク」を録音する前にスタジオで際限なくリハーサルを重ねるのは、ごくあたりまえのこととなっていた。スタジオの使用料が異常に高くなってしまった現在ならびっくりするような行状だが、ビートルズが契約先のEMIでレコーディングする場合にはスタジオ費用は社内経費で落とされていたし、最近のように、スタジオ代がグループの印税から差し引かれることももちろんなかった。
この日の午後7時から午前3時までのセッションでは、ジョンの新曲'Lucy In The Sky With Diamonds'のリハーサルにあまりにも時間がかかってしまったため、結局まともなレコーディングは何ひとつ行なわれず、翌日の夜に持ち越されることになった。この曲のタイトルは、当時3歳だったジョンの息子ジュリアンが保育園から仲間の女の子を描いた絵を持ち帰ったことがきっかけとなっていた。ジョンがジュリアンに、これは何の絵なのと聞くと、ジュリアンは「It's Lucy, in the sky, with diamonds（ルーシーだよ、空にいるんだよ、ダイアモンドとね）」と答えたのだ。

3月1日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時15分までのセッション。'Lucy In The Sky With Diamonds'を7テイク、レコーディングし、このテイク7をリダクション・ミックスして、オーバーダビング用のテイク8を作った。しかし、この夜のセッションで最初に行なわれたのは、'A Day In The Life'のテイク6用に新しいピアノ・トラックを作ることだった。すでにモノとステレオのマスター・ミックスが作られたあとであり、どういう意図だったかは不明だが、いずれにしてもこのオーバーダビングは使用されなかった。

3月2日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Lucy In The Sky With Diamonds'はアルバム"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"のレコーディングのなかでは、もっとも短い時間で完成した曲だ。前日の夜にリズム・トラックをレコーディングし、この日の午後7時から午前3時30分までのセッションでオーバーダビングして、ほぼ完成となった。テープ・スピードを調整したボーカルとインストゥルメンタルを、テイク8に追加した。11種類のモノ・ミックスが作られ、最後のリミックスがベストとなったが、それも次のセッションまでの話である。
この日行なわれた第9回グラミー賞でビートルズは、'Michelle' 'Eleanor Rigby'、それにクラウス・フォアマンが手がけたアルバム"REVOLVER"のアートワークによって3部門を受賞。

3月3日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズはサージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンドが本当の楽隊であるかのように作りあげなければならなかったので、いかにもそれらしいフレンチ・ホルンをタイトル曲に入れるため、ミュージシャンが4人招かれた。その4人は、ジェイムズ・バック、ニール・サンダース、トニー・

ランダル、ジョン・バーデン。ポールはこう吹いてほしいというフレーズをハミングし、ジョージ・マーティンとミュージシャンたちがこれを採譜して、レコーディングしたものはテイク10にオーバーダビングされた。その一方で、1月9日のセッションのときのように、ジョンはミュージシャンたちの会話をこっそりと個人コレクション用のテープに収めていた。ホルン奏者たちが(いつものように)ビートルズからサインをもらって帰宅したあと、セッションはジョージ・ハリスンを中心にして行なわれた。'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'に、ディストーションを効かせたリード・ギター・ソロをオーバーダビングした。そして、午後7時から午前2時15分までのセッションの最後には'Lucy In The Sky With Diamonds'のモノ・ミックスをさらに4種類作った。

3月6日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

"SGT. PEPPER"をよりリアルにするためにポールがさらに思いたったのは、タイトル曲には架空のコンサート会場のサウンドを入れなければならないということだった。つまり、ウォーミング・アップする楽隊の音、観客のざわめき、拍手や笑い声である。午後7時から午前12時30分までのセッションでは'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'のテイク10にこれらのエフェクトがオーバーダビングされた。公演前に音出しをしている楽隊の音はすぐに見つかった。2月10日の'A Day In The Life'のオーケストラ・セッションのときに、そういったさまざまな効果音を収録し、4本のテープが制作されていたからだ。'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'に使われた、それ以外のサウンドはアビイ・ロードで保管されている貴重な音源をもとにした。観客のざわめきは「第28巻:ロイヤル・アルバート・ホールとクイーン・エリザベス・ホールでの観客の喝采とざわめき」というテープから抜粋、拍手と笑い声は「第6巻:喝采と笑い声」から抜粋した。後者のテープは、1961年にロンドンで上演されたレビュー「ビヨンド・ザ・フリンジ」の会場で録音されたものだった(さらに、タイトル曲から'With A Little Help From My Friends'に移行する部分には、当時まだ未発表だったビートルズのハリウッド・ボウル公演の録音テープから観客の叫び声を入れて、ふたつを継いでいる)。セッションの最後に、'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'のモノおよびステレオ・ミックスが作られた。

3月7日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Lovely Rita'にハーモニー・ボーカルとそのほかのさまざまなエフェクトをオーバーダビングした。そのエフェクトには、たとえば、トイレット・ペーパーによる音響効果も含まれていた。これは、かなり多くの種類のなかからいちばん強度が適したものを吟味したうえで、「The Gramophone Company Ltd!」というマークのついたトイレット・ペーパーを、櫛に巻いて吹き鳴らして作った音だった。セッションは午後7時から始まって午前2時30分まで続いた。

3月9日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時30分までのセッションで、ポールの'Getting Better'にとりかかる。リズム・トラックを7テイク録音し、テイク7を5回リダクション・ミックスして、テイク8〜12を作った。テイク12がベストとなり、3月10日、12日、23日のオーバーダビングに使われることになる。

3月10日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前4時までのセッション。'Getting Better'のテイク12にジョージがタンブーラ、ポールがベース、リンゴがドラムをオーバーダビングした。

3月13日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Good Morning Good Morning'のテイク10にブラスをオーバーダビングし、サウンズ・インコーポレイテッド(Sounds Inc)の6人のメンバーが参加した。内訳はサキソフォン3名(バリー・キャメロン、デビッド・グライド、アラン・ホームズ)、トロンボーン2名(ジョン・リーともう1名)、フレンチ・ホルン1名(トム・某、誰も彼の姓を覚えていない)だった。以前は

CamScannerでスキャン

グループ名の表記をSounds Incorporatedとしていた
サウンズ・インコーポレイテッドは、ヨーロッパでアメリカ人の
ミュージシャンのバックを務めるという経験を長く積んだト
ップ・インストゥルメンタル・グループだった。ビートルズとは
1962年4月にスター・クラブで出会い、のちにブライアン・エ
プスタインの斡旋でNEMSとマネージメント契約を結び、ビ
ートルズのいくつかのツアーにも参加したが、そのなかに
は『ザ・ビートルズ・アット・シェア・スタジアム』としてテレビ
で放送された1965年のアメリカ・ツアーも含まれている。午
後7時から午前3時30分までのセッションの報酬として、6
人にはNEMSエンタープライズから201ポンド支払われた。

ジョージと外部参加者で インド音楽を作る

3月15日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Only A Northern Song' に続いて、ジョージが "SGT.
PEPPER" のためにもう1曲、'Within You Without You'
を持ってきた。この段階では例のごとくタイトルは未定だっ
たが、ビートルズのアルバムに登場する曲としてはもっとも
インド色の濃いサウンドの曲となる。しかしこのあともジョー
ジは映画 "WONDERWALL" のサウンドトラックとして、
インドふうの作品を作曲し、レコーディングする(1967年11
月28日、1968年1月12日参照)。

'Within You Without You' のベーシック・トラックと
なったテイク1はこの日午後7時から午前1時30分までのセ
ッションで録音された。北ロンドンに本部があるイースタン・
ミュージック・サークルのナトバー・ソーニがタブラを、アムラ
ート・ガジャールがディルルバを、P・D・ジョーシがソードマ
ンデルを弾き、ジョージとニール・アスピノール、そしてEMI
には名前が残されていないもうひとりのプレイヤーがタンブ
ーラを演奏した。この曲のレコーディングについては、ビー
トルズのほかの3人はレコーディングにいっさい関わらなか
った。セッション後、午前1時30分から2時までにこの夜の
レコーディングのラフ・モノ・ミックスが作られ、ジョージはこ
れをイーシャーの自宅に持ち帰った。

ジョージ・マーティン以外の アレンジャーが参加

3月17日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後7時から午前12時45分までのセッションでは、
ポールの新曲 'She's Leaving Home' のオーケストラ・
セクションを、6テイク録音。スコアを担当したのはいつもの
ジョージ・マーティンではなく、フリーのプロデューサー兼ア
レンジャーのマイク・リーンダー。リーンダーは18ポンドの報
酬と引き替えに、編曲者としてのクレジットはビートルズ側
に譲った。自分が担当しているほかのアーティストのことで
忙しかったジョージ・マーティンにしびれを切らして、ポール
はリーンダーに頼むはめになったのだが、これはマーティ
ンを傷つけることにもなった。

それでも寛大なマーティンは、スタジオでミュージシャンの
指揮を務め、リーンダーの編曲の腕前のほどを認めた。こ
の日のセッションには10人の演奏家が集められた。バイオ
リン:エリック・グルーエンバーグ(コンサート・マスター)、デ
レク・ジェイコブズ、トレバー・ウィリアムズ、ホセ・ルイス・ガル
シア。ビオラ:ジョン・アンダーウッド、スティーブン・シングル
ズ。チェロ:デニス・ビゲイ、アラン・ダルジール。ダブル・ベー
ス:ゴードン・ピアス。ハープ:シーラ・ブロムバーグという顔
ぶれだ。ちなみに、ブロムバーグはビートルズのレコーディ
ングに参加した初めての女性ミュージシャンだ。

アビイ・ロード・スタジオでインタビュー コンサート活動を否定する

3月20日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム "SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND" のレコーディング中、ビートルズは外部の人間との接触は極力避けていたので、この夜、古いラジオ仲間のブライアン・マシューによるジョンとポールへのインタビューが実現したことは、BBCラジオにとって大成功を意味していた。

ビートルズがアビイ・ロードをアトリエとして使うことを新しく試みていると強調していたブライアン・マシューとしては、

どうしてもスタジオでインタビューしなければならなかった。そして、ビートルズが(もちろんEMIも)、スタジオ内でのインタビューを許可したのはこれが初めてのことだった。セッション記録書には、このインタビューは'Beatle Talk'と記されていて、午後7時のセッション開始時から録音されていたこともわかる。

マシューの取材にはふたつの目的があった。いちばん重要な件は、ジョンとポールが1966年度アイバー・ノベロ賞を3部門で受賞したので、その受賞スピーチを収録することだった。なお、次の作品が受賞の対象となっていた。まず、'Yellow Submarine'が「1966年に発売され、1966年1月1日から1966年12月31日までにイギリスでもっとも売れたレコードのA面賞」というやたら長たらしい名前の賞、'Michelle'が「もっとも多く演奏された作品賞」、'Yesterday'が「もっとも多く演奏された作品賞次点」である。この日収録されたスピーチ(それぞれの曲につき2分、1分25秒、1分35秒語った)は、3月27日(イースターの月曜日)の午後2時から3時まで、BBCのラジオ番組「ジ・アイバー・ノベロ・アワーズ・フォー・1966」で放送された。この番組では、3月23日にロンドンのプレイハウス・シアターで業界関係者を集めて行なわれる授賞式のもようが生放送される。ジョンとポールは出席する気がなかったため、NEMSのトニー・バーロウとEMIレコードのマーケティング・サービス部長、ロン・ホワイトが代理で出席し、トロフィを受け取る。授与されるたびに、この日収録されたジョンとポールの「ありがとうございます」スピーチが会場に流され(ラジオでも中継)、それから受賞曲がジョー・ロス・アンド・ヒズ・オーケストラによって生演奏される('Michelle' のリード・ボーカリストはロス・マクマナス。デクラン・マクマナス=エルビス・コステロの父親である)。

1970年までに、ジョンとポールはこのほかにもいくつかのアイバー・ノベロ賞を受賞し、そのたびにBBCラジオで授賞式のもようが放送されているが、ふたりはこの日以降は特別インタビューを録音することはなく、授賞式にも出席しない。代わりにジョージ・マーティンとディック・ジェイムズが出席し、短いスピーチをすることになる。

この日、ブライアン・マシューがEMIスタジオを訪れたもうひとつの目的は、BBCラジオが海外の契約放送局に配給しているウイークリー・ラジオ番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」用に簡単なジョンとポールのインタビューを録音することだった(したがって国内では放送されない)。このインタビューは短いもので、番組ではそのうちの4分間しか使用しなかったが、短い時間でも、ジョンとポールはビートルズがツアーをやめてレコーディングを中心とする方向に転向したことを十分に説明した。とくにジョンは、「もう'She Loves You' はなしだね」という簡潔な言葉で、今後のコンサート・ツアーはありえないことを強調した。

インタビューのあと、ジョンとポールは'She's Leaving Home'のセッションの続きに専念し、前に録音したテイク1をリダクション・ミックスしたテイク9にボーカルをオーバーダビングした。この美しい曲は、ほかのメンバーによる楽器のオーバーダビングはなかったためこの時点で完成した。実際、'She's Leaving Home' でレコーディングした楽器はストリングスだけだった。モノ・ミックスを作り、午前3時30分にセッションを終えた。

ジョンの具合が悪くなる

3 月 21 日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

どちらかといえば、悪名高いレコーディング・セッションとなった日。'Getting Better' を新しくリダクション・ミックスしたテイクにポールとジョージがボーカルをオーバーダビングしているとき、ジョンはLSDトリップを試していた。やがて気分が悪くなってきたジョンは、スタジオ内の階段を上がり、ジョージ・マーティンに相談に行った。

ジョンの具合が明らかに悪そうだと見てとったものの、その原因についてはまったく知らないジョージ・マーティンは、ジョンに新鮮な春の空気を吸わせようと第2スタジオの屋上に連れていった。スタジオの出入口では、ビートルズ・ファンがあいかわらず見張っているからだ。そして、マーティンはジョンを屋上に残したまま、セッションに戻った。一方、ジョンがLSDを飲んでいたのを知っていたポールとジョージは、ジョンの行方を心配していた。そして、手すりも囲いもなく、一歩間違えたらおよそ10メートル下の地面まで転落しかねない屋上にひとりでいることを知ると、大あわてでジョンを連れ戻しにいったのだ。当然のことながら、'Getting Better' のボーカルは別の日にもう1回レコーディングせざるを得なくなった。

また、午後7時から午前2時45分までのこの日のセッション

CamScannerでスキャン

では、'Lovely Rita' のオーバーダブをレコーディングし、テイク11にかぶせたうえで、モノ・ミックスが制作された。

3月22日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョージの 'Within You Without You' に、さらに2台のディルルバと1台のソードマンデルをオーバーダビングした。演奏したのは3月15日のセッションのときと同じ顔ぶれで、それぞれアムラート・ガジャール、P・D・ジョーシ、ナトバー・ソーニ。さらに、テイク1をリダクション・ミックスしてテイク2を作ってから、アセテート盤をカッティングするためにラフなモノ・ミックスを作った。

午後7時から午前2時15分までジョージが第2スタジオでセッションを行なっている間、ほかの面々は午後11時から午前12時30分まで、第1スタジオのコントロール・ルームで、これまでに完成した作品のマスターを聴いた。

3月23日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時45分までのセッションでは、'Getting Better' のテイク14へのボーカル・オーバーダビングに再度挑戦。

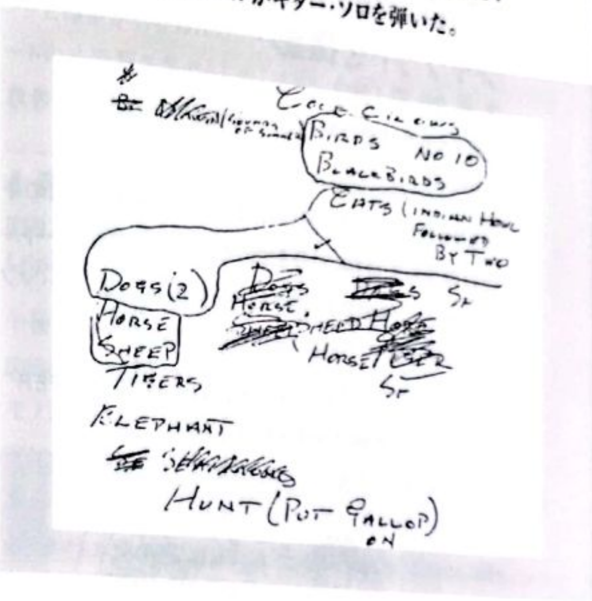
これをリダクション・ミックスしてテイク15とし、それからボンゴをオーバーダビングして、この曲のレコーディングは完了した。セッションの最後にはモノ・ミックスを作った。しかし、レコーディングとミキシングを担当したのはいつものジョージ・マーティンとジェフ・エメリックではなかった。ふたりともこの夜はほかの仕事についていたため、EMIスタジオのもうひとりのバランス・エンジニア、ピーター・ビンスが代行したのだ。

3月28日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョンはこの日の午後7時から午前4時45分までのセッションで、'Good Morning Good Morning' に初めてリード・ボーカルをレコーディングした。そのテイク10をリダクション・ミックスしてテイク11としたあと、ポールのリード・ギター・ソロと、ジョンとポールのバック・ボーカルをオーバーダビングした。

前回のセッションからこの日までの間に、ジョンはこの曲のエンディングに動物の鳴き声を入れようと思いついていた。ジョンの希望は、必ずあとの動物が前の動物を脅かすように、弱い動物から順に鳴き声を編集してほしいというものだった。このエフェクトは、この日のセッションの半ばに、アビイ・ロードで保管されていた2本のテープ「第35巻:動物と蜂」と「第57巻:きつね狩り」から抜粋したものを使って作られた。しかし、4トラック・テープにかぶせる作業は翌日の夜に持ち越された。

セッションの最後に、'Being For The Benefit Of Mr. Kite!' にさらにオーバーダビングをした。ジョージ、リンゴ、マル・エバンズ、ニール・アスピノールがハーモニカを吹き、ジョンがオルガンを、ポールがギター・ソロを弾いた。



3月29日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後7時から午前5時45分までのセッションで、動物の鳴き声の音響効果をオーバーダビングして、'Good Morning Good Morning' はようやく完成した。そのあとの試みは、'Being For The Benefit Of Mr. Kite!' にさらにあきトラックを作ることだった。その上に、2月20日に丹念に編集されたサウンド・エフェクトとともに、ジョージ・マーティンのオルガンとジョージとジョンのハーモニカ・エフ

CamScannerでスキャン

ェクトをオーバーダビングした。

しかし、アルバム"SGT. PEPPER"には、リンゴがボーカルをとる曲がまだなかった。そこで、ジョンとポールがリンゴのために特別に作った曲'With A Little Help From My Friends'を提供した。当初ほんの一時期だけ、この曲には'Bad Finger Boogie'というタイトルがついていた。この曲は、1曲目の'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band'とメドレーで収録されることが最初から決まっていたため、レコーディングはどのテイクも「Billy Shears」と歌うボーカルから始まった。リズム・トラックを10テイク録音したあとリダクション・ミックスしてテイク11とし、3つのあきトラックのうち2トラックに、リンゴがリード・ボーカルをオーバーダビングした。

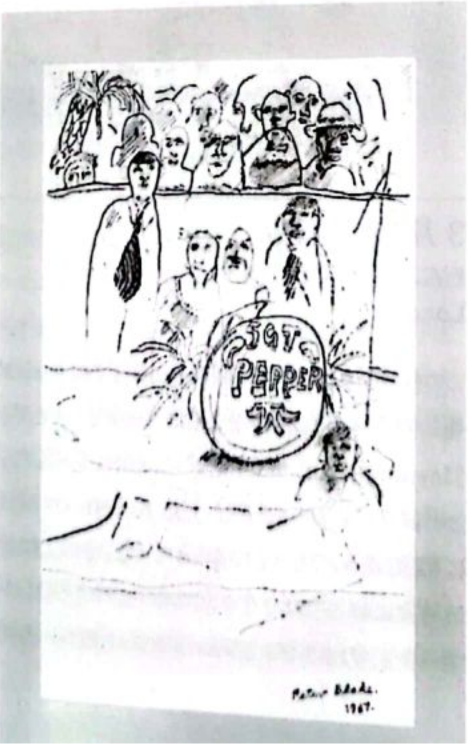
"SGT. PEPPER"のジャケットを撮影

3月30日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

始まりも終わりもかなり遅い時間にずれ込んだこの日の午後11時から午前7時30分までのセッションの前に、ビートルズはチェルシーのフラッド・ストリートにあるチェルシー・マノー・(フォト)スタジオに出かけた。カメラマンのマイケル・クーパーの前でポーズをとり、ピーター・ブレイクのデザインによる"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"のアルバム・カバーと見開きジャケットの内側に使う写真を撮影するためだ。まさに流行を決定づけたフォト・セッションである。

EMIスタジオに到着すると、ビートルズはさっそく'With A Little Help From My Friends'のレコーディングにとりかかった。ギター、ベース、タンバリン、バック・ボーカルをオーバーダビングし、この曲を完成させた。

ピーター・ブレイクによるアルバム"SGT. PEPPER"のためのオリジナル・ラフ・スケッチ



3月31日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時までのセッションで、'With A Little Help From My Friends'と'Being For The Benefit Of Mr. Kite!'の2曲のモノ・ミックスを作った。後者には、リミックスを作る前に、オルガンとグロッケンシュピール(鉄琴)をさらにオーバーダビングした。

リプライズのアイデア

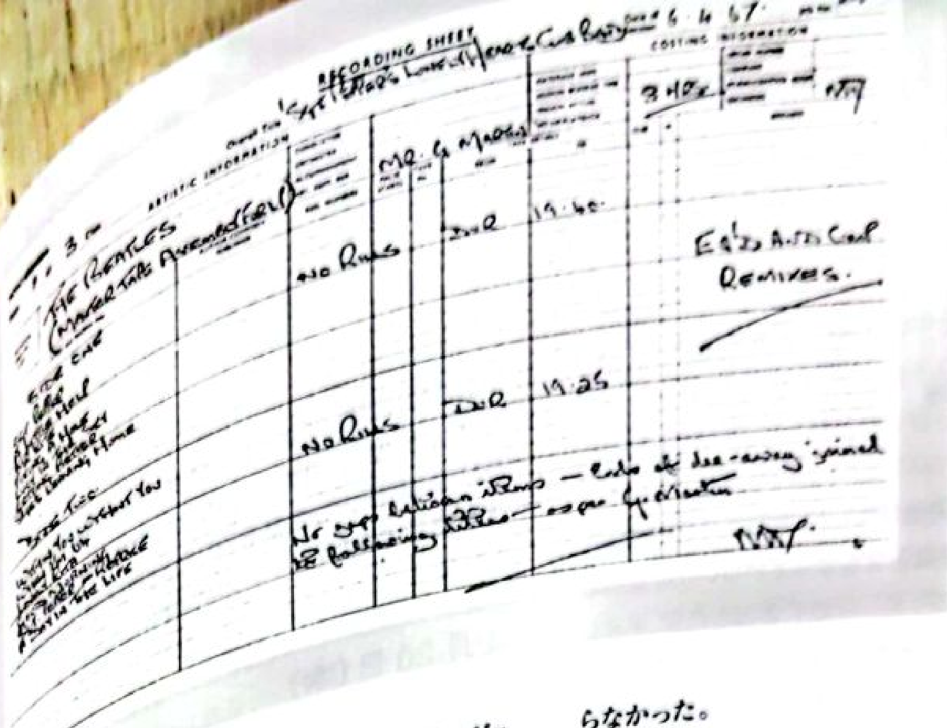
4月1日(土)
EMIスタジオ、第1スタジオ
London

レコーディングを開始してから4か月が過ぎ、アルバム"SGT. PEPPER"はほぼ完成に近づいていた。しかも、ポールは4月3日から12日まで渡米することになっており、EMIにはその間にモノ・マスター・テープを渡す約束になっていたので、アルバムをそれまでに完成させなければならなくなっていた。4月21日に特別に追加されたある特殊効果を除けば、この日がポールにとってボーカルと楽器をオーバーダビングできる最後のチャンスとなった。

そこで"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"がひとつのショーの形式をとっていることから、ポールはこのタイトル曲を最後から2曲目に再登場させることを思いついた。最後にしなかったのは、感動的なラストを迎える'A Day In The Life'が最終曲として確定していたからだ(それに、この曲のあとに別の曲を続けることなどとうてい無理だった)。

こうして決まった'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club

CamScannerでスキャン



ジョージ・マーティンの指示のもとにマルコム・デイビーズが編集したアルバム"SGT PEPPER"の最初のマスター・リールに添付されたインデックス・シート。サイド1の曲順がリリースされたものと違っている

Band (Reprise)'は、オリジナル曲のショート・バージョ
ンでアップビートとなった。午後7時から午前6時までのこの
日のセッションでは、リダクション・ミックスなどはいっさい行
なわずに、この曲を4トラック・テープにそのままレコーディン
グすることに終始した。この曲に関しては飾りつけをする
時間もなかったし、その必要もなかった。リズム・トラックを
9テイク録音、テイク9にメンバー全員によるリード・ボーカル
と各種パーカッション、アビイ・ロードにある効果音のストッ
クから抜粋した観衆のざわめきをオーバーダビングして、モ
ノ・ミックスを作った。

4月3日(月)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

ジョージの'Within You Without You'の最終レコー
ディング。長時間のマラソン・セッションとなるが、ジョージ以
外のメンバーは参加していない。まず午後7時30分から10
時30分までのセッションでは、ジョージ・マーティンがオーバ
ーダビング用に8人のバイオリニストと3人のチェリストを指
揮した。楽譜も、ジョージの要望にしたがって、(33ポンドの
報酬で)マーティンが用意したものだった。参加したバイ
オリニストは、エリック・グルーエンバーグ(コンサート・マス
ター)、アラン・ラブデイ、ジュリアン・ゲイラード、ポール・シャ
ーマン、ラルフ・エルマン、デビッド・ウルフスタール、ジャック・
ロススタイン、ジャック・グリーン。チェリストは、レジナルド・キ
ルビー、アレン・フォード、ピーター・ビーバン(追加のチェロ
が必要になったときに備えて、キルビーだけが次のセッシ
ョンまで残った)。
午後10時30分から午前3時までは、ジョージがリード・ボー
カル、シタール、そして部分的にアコースティック・ギターを
レコーディングした。そのあと、午前3時から午前6時30分
までかかってモノ・ミックスを作ったが、まだ完成にはいた
らなかった。

4月4日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日午後7時から午前12時45分までのセッションで、'Within You Without You'の最終モノおよびステレオ・ミキシングと編集が行なわれた。ジョージの希望により、アビイ・ロードの音響効果集のうちの「第6巻:喝采と笑い声」から、数秒間の笑い声が両方のミックスの最後に追加された。

4月6日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前1時までのセッションで、'Good Morning Good Morning'のモノおよびステレオ・ミックスが作られ、モノLP用のクロスフェイド編集作業(前の曲のエンディングと次の曲の始まりを重ね合わせる手法)も行なった。アルバム"SGT. PEPPER"には2か所のクロスフェイドがある。タイトル曲から'With A Little Help From My Friends'へ移る部分と、タイトル曲のリプライズから'A Day In The Life'に移る部分だ。
さらに、この日にはアルバムのプロト・タイプのマスター・テープが編集されたが、その作業に際してビートルズは曲間に切れ目を入れないようにと、ポップ・アルバムには非常にめずらしいフォーマットを指定した。また、興味深いのは、この段階ではアルバムA面の曲順が実際のレコードの順番と違うことだ。後半5曲の順序は、'Being For The Benefit Of Mr. Kite!' 'Fixing A Hole' 'Lucy In The Sky With Diamonds' 'Getting Better' 'She's Leaving Home'となっていた。

4月7日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム"SGT. PEPPER"のステレオ・ミキシング・セッションに、ビートルズはほとんど立ち合っていない。重要だと考えていたモノ・ミックス作業には必ず参加したが、ステレオについてはジョージ・マーティンとジェフ・エメリックにまかせることで満足していたようだ。この日も、午後7時から午前1時までマーティンとエメリックは、(タイトル曲からクロスフェイドさせる作業も含めて)'With A Little Help From My Friends' 'Being For The Benefit Of Mr. Kite!' 'Fixing A Hole' 'Lucy In The Sky With Diamonds'のステレオ・マスターを制作した。

4月17日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から10時30分までに、'Getting Better' 'She's Leaving Home' 'When I'm Sixty-Four' 'Lovely Rita'をステレオ・ミキシング。'She's Leaving Home'は、モノ・バージョンがわずかにテープ・スピードを速めた事実を無視してステレオにミキシングしたため、モノの長さが3分26秒であるのに対し、ステレオ・バージョンの長さは少しゆっくりめの3分34秒となった。

4月19日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

4月6日に作られた'Good Morning Good Morning'のモノ・ミックスはひとまず完成していたが、次の曲'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)'とのつなぎ目が今ひとつしっくりこなかった。そこで、午後7時から午前12時30分までのセッションで、'Good Morning Good Morning'の再ミキシングを行なった。その結果出来あがったリミックス23の曲の最後のメンドリの鳴き声と、この音に似た感触の'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)'の最初のギターがうまくつながったので、問題はめでたく解決した。
ポールもすでにアメリカから帰国していたので、ビートルズは2月14日に初めてレコーディングしてから保留になっていた'Only A Northern Song'の続きを録音するため、翌日の夜にセッションを予約した。また、それまでの進行状況を把握するために、この曲のラフなモノ・ミックスが作成された。

4月20日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後5時から6時15分まで、'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)'のステレオ・ミックスを作った。ビートルズは午後7時に第2スタジオに到着し、午前2時15分まで、'Only A Northern Song'のオーバーダビングをした。
まず、2月13日のテイク3に戻り、録音されている音の一部を消去して、新たにベース、トランペット、グロッケンシュピール(鉄琴)をオーバーダビングしたテイクを作った。それからテイク3をリダクション・ミックスしたテイク11に、ボーカルをかぶせたテイクも作った。この2種のテイクは、翌21日にシンクロ・ミックスされ、ひとつの完全なレコーディングとなる。

700時間を費やした“SGT. PEPPER”が完成

4月21日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アーティストというものは作品を仕上げる最後の一筆を加える瞬間をどうやって迎えるのだろう。アルバム"SGT. PEPPER"に関しては、'A Day In The Life'で完結することがすでに決まっていた。その最後の部分ではオーケストラがクレッシェンドで行きつくところまで昇りつめ、40秒間も余韻が続く衝撃的なピアノ・コードで締めくくられることになっていた。しかし、アルバムの曲間にまったく沈黙がないのに、最後のコードのあとに沈黙が入ってしまうのはもったいないとビートルズは考えた。そこで、レコードの最後の溝にも何かノイズを入れたらどうかという話になった。そうすれば、オートマチック・プレーヤーなら針が上がる前に瞬間的にその音を聴くことになるし、マニュアル・プレーヤーなら針を上げるまで延々とそのノイズを聴くことになる。しばらく話し合ったあと、スタジオに駆け下りたビートルズ

CamScannerでスキャン

は、2トラック・テープに、おかしな音と無意味なでたらめの
会話を2回吹き込んだ。そしてジェフ・エメリックはこのテー
プを切断してばらばらにつなぎ合わせ、さらに逆回転させ
てモノ・マスターと（その部分をコピーしてから）ステレオ・
マスターに挿入した。

しかし、これでもまだ飽きたらず、ジョンの提案で、最後の
円状の溝の直前の螺旋溝部分、つまり、ピアノ・コードの余
韻と無意味なノイズとの中間に、犬にしか聞こえない15キ
ロサイクルの高周波音の犬笛の音を入れることになった。
これですべての作業が終わり、ついにアルバム“SGT.
PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND”が
完成した。のちにジェフ・エメリックが、このアルバムの制作
にビートルズが費やした時間を計算したところ、700時間
余りにおよんでいた。なんとファースト・アルバム“PLEASE
PLEASE ME”の制作時間の318倍である。この違いは、
アルバムが公式にリリースされる6月1日、全世界の人々の
耳に明らかとなる。

午後7時から午前1時30分まで行なわれたセッションでは、
'Only A Northern Song'の少し複雑なモノ・ミックス
が作られた。ミキシングは将来的なリリースにそなえての
ことだったが、その具体的な期日は未定だった。

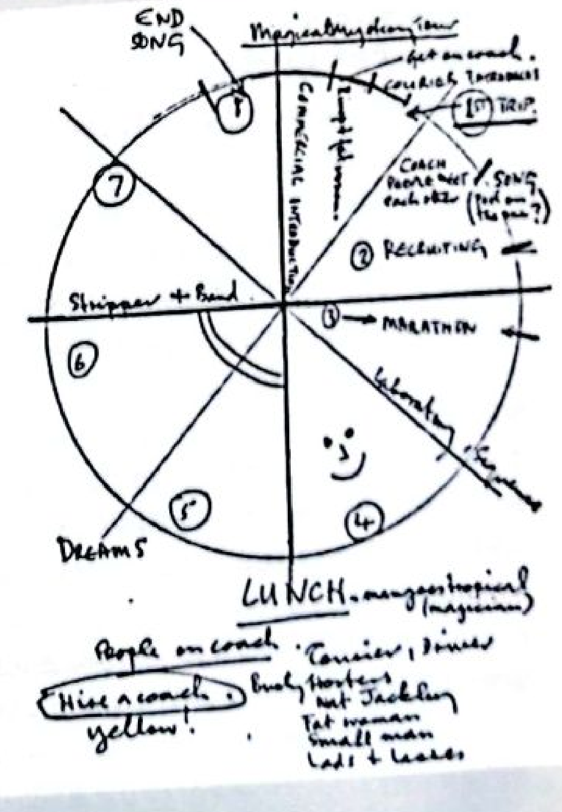
新たなアイデア “MAGICAL MYSTERY TOUR”

4月25日（火）
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ビートルズが大型バスに乗ってミステリー・ツアーをすると
いうテレビ映画用のアイデアをポールが思いついたのは、
4月7日、アメリカを旅行している最中だった。カラフルに塗
りたくったスクール・バスで、カリフォルニアのハイウェイをお
もしろおかしく旅しながら、LSDのすばらしさを吹聴してい
たケン・キージー率いるメリー・プランクスターズのイギリス
版をやってみたらどうかというひらめきだったのだ（ケン・キ
ージーはアメリカの作家で「郭公の巣」がとくに有名。1960
年代中盤から創作を離れ、ヒッピー・カルチャーに接近し
た）。

4月11日の夜、ロサンゼルスからイギリスに向かう飛行機の
中で、客室乗務員から画用紙をもらったポールは、60分間
を表す円を描き、それを曲とシーンごとに区切って、そこに
タイトル曲の歌詞と映画のアイデアをいくつか書き込んで
いった。数日後、ポールがこのアイデアをビートルズのほか
の3人に提示し、しばらく話し合ったのち、その場で映画
“MAGICAL MYSTERY TOUR”の製作が決定した。
撮影が実際に開始されたのは9月11日であり、映画の長さ
も最終的には60分から52分に短縮されたが、この夜初め
て、映画“MAGICAL MYSTERY TOUR”のための
レコーディング・セッションが行なわれた。午後7時から午前
3時45分までのセッションで、ポールのタイトル曲がレコーデ
ィングされた。

この日のセッションで最初に行なったのが、曲のところどこ
ろに入れる大型バスや交通の音響効果の準備だった。こ
れには、アビイ・ロードの音響効果コレクションの「第36巻：
乗りものの音・ステレオ」を使用した。そのあと、ベーシック・
リズム・トラックを3テイク録音、テイク3をリダクション・ミック
スしてテイク4からテイク8まで作った（テイク8がベスト・ベ
ーシック・トラックとなった）。



4月26日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日の午後7時から午前2時までのセッションでは、'Magical Mystery Tour'にベース、マラカス、カウベル、タンバリン、バック・ボーカルをオーバーダビングするという作業にほとんどを費やした。さらに、テイク8をリダクション・ミックスしてテイク9を作った。

4月27日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後7時から午前12時45分までのセッション。'Magical Mystery Tour'にボーカルをオーバーダビングし、アセテート盤のカッティングをするためにラフなモノ・ミックスが作られた。

ジョン、オノ・ヨーコと偶然同じイベントに
4月29日(土)
アレクサンドラ・パレス
Alexandra Park, London

グラナダ・テレビから遅れること数か月(1月18日参照)、BBCもようやく一向に衰えを見せないロンドンのアンダーグラウンド・シーンについて特集することを決定し、BBC2の番組「マン・アライブ」(サブタイトル「ホワット・イズ・ア・ハプニング?」)で取り組むことになった。このときの特集は5月17日(午後8時5分から8時35分)に放送されたが、ゲストの顔ぶれや構成も、グラナダ・テレビの「シーン・スペシャル」で特集された「イッツ・ソー・ファー・アウト・イッツ・ストレート・ダウン」とほぼ同じだった。グラナダ・テレビにはポールが出演してインタビューに答えたが、「マン・アライブ」にはジョンが出演。ただし、インタビューではなく、この日アレクサンドラ・パレスで行なわれたイベント「14・アワー・テクニカラー・ドリーム」に出席したときのもようが録画され、放送される。偶然にも、このイベントにはオノ・ヨーコも参加していた。

5月3日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

'Magical Mystery Tour'にトランペットをオーバーダビングした。演奏者はデビッド・メイソン(ビートルズのセッションに参加するのは3度目)、エルガー・ハワース、ロイ・コープステイク、ジョン・ウィルブレアム。この3人にはギャラとして30ポンドが支払われたが、その内訳は、基本報酬が15ポンドでさらに超過料金分が15ポンドだった。というのも、セッションは午後7時に始まってから午前0時15分までかかったからだ。

5月4日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後7時から11時15分までに、'Magical Mystery Tour'のモノ・ミックスを7種類作った。

5月9日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後11時から午前6時15分までと、長いわりにはまったく非生産的に終わったセッション。ビートルズは、ギター2本(1本にはビブラート・エフェクターをかけて)、ドラム、ハーモニウムによる、タイトルがないうえにキーのはずれた16分のインストゥルメンタル・ジャムをテープに収めただけだった。

アニメ映画のためのレコーディング開始
ミック・ジャガーがスタジオを訪れる
5月11日(木)
オリンピック・サウンド・スタジオ
Church Rd, Barnes, London

再びアビイ・ロード以外でのセッションを、イギリスでも有数のインディペンデント・スタジオであるオリンピック・スタジオで試みた。この日はかなり生産的な成果を生んだ。午後9時から午前3時までの6時間で、'Baby, You're A Rich Man'のレコーディングを始め、この日のうちに完了させ、

CamScannerでスキャン

さらにモノ・ミックスまで仕上げた。プロデューサーはジョージ・マーティン、バランス・エンジニアはキース・グラント（オリンピック・スタジオのマネージャーでもある）、そして、テープ・オペレーターはその後ジミ・ヘンドリックスとすさまじいチーム・プレイを見せることになる、エディ・クレイマーが担当した。この曲は、アニメ映画 "YELLOW SUBMARINE" のために特別にレコーディングされた最初の曲となる。もうひとつの新プロジェクトであったこの映画は、1967年6月7日にその詳細がプレス発表される予定になっていて、それによれば、ビートルズはこのサウンドトラックのために少なくとも3曲の新曲を提供することになっていた。しかし、'Baby, You're A Rich Man' は映画のなかでは使用されたものの、次のシングルのB面に収録されるため、サウンドトラック・アルバムには収録されない。

ビートルズはベーシック・トラックを12テイク録音、それをリダクション・ミックスしたものにオーバーダビングし、さらにリダクション・ミックスしてその上にさらに手を加えた。ちなみに、このセッションの2本のテープ・ボックスのひとつには「+ミック・ジャガー?」と記されていて、ローリング・ストーンズのミックが、曲のエンディングのやりたい放題のコーラスあたりでレコーディングに参加しているのではないかと思われる。いずれにしても、ミックがこの現場に顔を出していたのは確かだ。

5月12日（金）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

前日のオリンピック・スタジオでの猛烈な働きぶりが体の中でくすぶっていたのか、EMIスタジオに戻ったこの日も精力的なセッションとなった。午後7時から午前0時30分まで、6時間を切るたった1回のセッションで、ビートルズは新曲のレコーディングを始め、完成させ、モノ・ミックスまで仕上げてしまったのだ。ジョージ・マーティンは不在だったため、コントロール・ルームを仕切ったのはジェフ・エメリックだった。この日レコーディングしたのは、"YELLOW SUBMARINE" のサウンドトラックのための 'All Together Now' だ。リズム・トラックを9テイク録音し、テイク9にオーバーダビングした。

5月17日（水）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズの曲のなかでも、ジョンの'You Know My Name (Look Up The Number)'ほど奇妙な曲はないだろう。また、これほど長い間発表を差し止められてしまった曲もほかにはない。リリースされるには1970年3月まで待たなければならないからだ（もっとも、マスターが完成するのも1969年11月26日だが）。

この曲のマスターは、それぞれ異なる日にレコーディングした5つのパートで構成されている。その最初のパートが、この日午後7時から午前2時30分までのセッションでレコーディングされたものだ。この日も、ジェフ・エメリックがプロデューサーとエンジニアを兼任していた。14テイクのうち、ギター、ドラム、ベース、手拍子、ボンゴ、ほんの少しのボーカルを入れたテイク10がベストとされた。

ラジオで "SGT. PEPPER" の特集番組

5月20日（土）

新しい自由奔放な環境のなかでは、ビートルズが出演するBBCラジオ番組も、もう従来のように綿密な構成のもとに制作されたりはしなくなった。この日、クリス・デニングが司会を務めるBBCライト・プログラムの番組「ホエア・イッツ・アット」では、ケニー・エベレット（1966年12月6日参照）が "SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND" について独自に取材し、ジョン、ポール、リンゴへのインタビューを含んだ特集番組が放送された。エベレットのあまりにも個性的なおしゃべりで始まったこの特集では、音声がすべて何らかの処理を受けていて、番組の間中、ミキシングされたテープや深いエコーを効かせた音響効果がちりばめられ、しかもその音にはフェイザーやコンプレッサーがかけられていた。特集そのものは前半後半と分けられていて、90分番組（午後4時から5時30分に放送）の冒頭と最後に放送された。ジョンはアルバムのタイトル曲と'Lucy In The Sky With Diamonds'のこと、そしてADT装置をどれだけ重宝しているかについて（「内輪じゃあの装置のことを二重縁どり機って呼んでいるんだよ」とも語る）、

CamScannerでスキャン

リンゴはそれまでの1年のことについて話し、ポールはアルバム制作にどうしてこんなに時間がかかったのかを語っている。
この番組では、アルバムに収録されている曲がすべて冒頭から最後まで紹介されたが、その前日の5月19日にドラッグの使用を助長する恐れがあるとしてBBCが'A Day In The Life'を放送禁止処分にしたため、この曲だけは除外された(ちょうど1か月後、ビートルズとドラッグの関係が大ニュースとなり、ポールは「ライフ」誌に掲載されたLSDの使用を認めた発言の真偽をめぐってITNのレポーターからインタビューを受ける。2分14秒におよぶこのインタビューはその夜の午後8時55分からのITNニュースで放送され、世間から大きな非難を浴びることになる)。

初めて使うレコーディング・スタジオ

5月25日(木)

ド・レイン・リー・レコーディング・スタジオ
Kingsway, London

ジョージ・マーティンはまた不在だったが、ビートルズは初めて使用するロンドンのスタジオで、午後7時から午前2時30分までセッションを行なった。このド・レイン・リー・スタジオは、地下鉄ホールボン駅の向かい側にあるオフィス・ビルの地下にあった。コントロール・ルームを仕切っていたのは、エンジニアのデイブ・シドルとそのアシスタントでテープ・オペレーターのマイク・ウェイエルだった。
このセッションの目的は、ジョージが"YELLOW SUBMARINE"のために書いた、少し混乱した感じの曲'It's All Too Much'(この時点ではタイトルは単に'Too Much')をレコーディングすることだった。十分にリハーサルしたあと、リズム・トラックを4テイク録音した。

5月31日(水)

ド・レイン・リー・レコーディング・スタジオ
London

この日もキングズウェイのド・レイン・リー・スタジオで、午後7時から12時までセッションを行なった(ジョージ・マーティンはまた不在のため、5月26日と同じエンジニアが担当)。'It's All Too Much'を新たにリダクション・ミックスして、ジョージのリード・ボーカル、ジョンとポールのバック・ボーカル、パーカッションと手拍子をさらにオーバーダビングした(「コンプリート・ビートルズ・レコーディング・セッションズ」ではこのセッションの日付に誤りがあり、5月26日となっている)。

アルバム"SGT. PEPPER"の発売日

6月1日(木)

ド・レイン・リー・レコーディング・スタジオ
London

ビートルズのキャリアのなかでも、おそらくもっとも輝かしい日とも言えるこの日こそ、"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"がイギリスで発売された日だ。ビートルズはキングズウェイのド・レイン・リー・スタジオにいた。やはりジョージ・マーティンは不在だったが、午後10時30分から午前3時30分までのセッションで、タイトルもなく、即興の、アマチュアっぽいインストゥルメンタル・ジャムをレコーディングした。アルバム"SGT. PEPPER"で最大限に集約され発揮されたビートルズの偉大な才能と熱意も、少なくともこのときは消え去ってしまったかのようだった。

6月2日(金)

ド・レイン・リー・レコーディング・スタジオ
London

この日の午後7時から午前2時15分までのセッションでは、ジョージ・マーティンがひさしぶりに戻った。表向きには'It's All Too Much'を作るためのセッションだったが、この日もビートルズは前夜と同じような、タイトルがなくとりとめのないインストゥルメンタル・ジャムをテープ2本分も録音した。午後8時から11時まで予定されていたセッションでは、ポール・ハーベイというクラリネット奏者にバス・クラリネットとコントラ・バス・クラリネットを3時間演奏してもらい、さらに4人のトラッペット奏者(そのうちひとりはまたもやデビッド・メイソン)が午後8時30分から11時まで録音に参加するという計画だった。しかし、実際にはセッションは午前2時までかかってしまい、管楽器奏者たちは、漠然として具体性に欠ける要求に応えるのに四苦八苦するだけだった。

6月7日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'You Know My Name (Look Up The Number)'

CamScannerでスキャン

をさらにクレイジーにしたバージョンをレコーディングした。これが高じて、セッションはさらにもっとクレイジーな、タイトルのないインストゥルメンタル・セッションに発展してしまった。素人っぽいフルート(おそらくビートルズの誰かが吹いている)、エレキ・ギター、ドラム、オルガン、タンバリンのテイクをおびただしいほど録音した。

午後7時から午前2時までのセッションが終わると、ジョージ・ハリスンは約20分間にわたるテイク24のラフなモノ・ミックスを家に持ち帰った。

6月8日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後7時から午前1時までのセッションでは'You Know My Name (Look Up The Number)'のさまざまなパートのテイクを多数レコーディングした。ビートルズのメンバーによるピアノ、ドラム、リード・ギター、ベース、ビブラフォンに加えて、ポールに招待されてスタジオを訪れたローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズがアルト・サックスを吹いた。

6月9日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'You Know My Name (Look Up The Number)'が現在知られている形になり始めたのは、この日のセッションからだった。午後7時から11時まで、各種のパートをひとつの作品として編集してモノ・ミキシングを行なった。このミックスはボーカルをオーバーダビングするため、さらに4トラック・テープの1トラックにコピーされた(が、1969年4月30日まで捨て置かれる)。

世界に向けて 'All You Need Is Love'を作る

6月14日(水)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

足もとをすくわれかねなくても、決して尻込みするグループではなかったビートルズは、6月25日の夜に放送される初の全世界同時衛星生中継のテレビ番組に、2組のイギリス代表出演者のうちの1組として出演することになったことを5月18日に発表した(それまでこのニュースは極秘扱いにされていた)。番組当日、このイベントのために特別に作った歌をスタジオでレコーディングしている様子を生中継することをビートルズは承諾したのだ。

その日の放送用にジョンとポールはそれぞれひとつずつ作品を用意し、互いに突き合わせたうえでどちらが適当かを判断した(確かではないがこのときのポールの曲はおそらく'Your Mother Should Know'だ。8月22日参照)。ふたりが選んだのは、1967年の夏をまさに体言していたジョンの'All You Need Is Love'だった。また、この曲は、全世界の視聴者が理解できるようなシンプルな曲にしてほしいというBBCからの唯一の指示にもぴったり合っていた。それにテイク1の時点ですでに冒頭の'La Marseillaise'(フランス国歌)が重要なパートを占めているという、歴史的な放送の国際性を強調する要素を持ち合わせる曲でもあった。

'All You Need Is Love'の最初の33テイクは、この日バーンズにあるオリンピック・サウンド・スタジオで、午後10時30分から午前3時までのレコーディング・セッションでレコーディングされ、ベーシック・リズム・トラックとボーカルが少しだけ録音された。プロデューサーはジョージ・マーティン、バランス・エンジニアはエディ・クレイマーが担当し、ビートルズは通常ならセッション・ミュージシャンにまかせてしまう楽器も自ら弾いた。ジョンは10ギニーでオリンピック・スタジオから借りたハープシコードを弾き、ポールはコントラバス、ジョージはバイオリンを担当したのだ(ドラムはいつものように重要なパートだったため、リンゴはドラムから離れなかった)。午前3時から3時45分までに、ベストとなったベーシック・トラックのテイク10をリダクション・ミックスし、3時45分から4時までには、そこからさらにラフなモノ・ミックスを作った。

6月19日(月)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日は午後7時から午前1時45分までのセッションで、できたばかりの'All You Need Is Love'のテイク10に、リード・ボーカル、バック・ボーカル、ドラム、ピアノ、バンジョーをオーバーダビングした。

CamScannerでスキャン

注:6月20日に予定されていた第2スタジオでのセッションは、結局行なわれなかった。

6月21日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後4時30分から5時まで、第53室で'All You Need Is Love'のモノ・ミックスが作られたが、この作業にビートルズは立ち合っていない。さらに午後7時から午後11時30分まで、今度はビートルズを交えて同じ作業が行なわれた。その後、後者のミックスがアセテート盤にカッティングされ、BBCのスタジオ収録以外の番組制作を担当していたディレクター、デレク・バレル・デイビスに渡された。
注:6月22日に予定されていた第2スタジオでのセッションは、結局行なわれなかった。

6月23日(金)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日の午後8時から午後11時までのセッションでは、'All You Need Is Love'のレコーディングに初めてオーケストラが加わった。テイク10をリダクション・ミックスしたものに何回かオーバーダビングを繰り返した(オーケストラの13名の演奏者と指揮者の詳細については6月25日を参照)。

6月24日(土)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

世紀のイベントの前日にあたるこの日、ビートルズとEMIは、ふだんは部外者に対して堅く閉ざしているアビイ・ロードのスタジオを、100名以上にもおよぶ記者やカメラマンの取材のために開放し、午前中はその対応だけで終わった。午後2時から4時まではBBCのカメラ・リハーサル。これには、ビートルズのメンバーと13人のオーケストラ、そして指揮者が参加した。午後5時から8時まで、'All You Need Is Love'のリズム・トラックにオーバーダビングをした。全世界に衛星生中継されたあと、'All You Need Is Love'のシングル盤をすぐに発売することが決定したため、この日の最後のダビングは非常に重要なものとなった。

全世界生中継番組『アワ・ワールド』

6月25日(日)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

BBCのふれこみを借りれば、この特別番組『アワ・ワールド』は「5大陸を結び、さらに、キャンベラ、ケープケネディ、モスクワ、モントリオール、サマルカンド、ゼーダーフォース、高松、チュニスなど、遠く離れた人と人を結びつける人類史上初めての試み」ということだった。ビートルズにとっても、注目すべきレコーディング・セッションとなることは明らかだった。
もともとこの企画はBBCが発案し、1966年にヨーロッパ放送連合にもちかけたものだった。その後、オーブリー・シンガー(BBC役員)の指揮のもとに準備が進められ、このテレビ放送史上最大の野心的な試みが実現するにいたった。この125分間の(白黒)衛星生中継には世界18か国の国営放送がそれぞれに映像を提供することに同意した。その国と放送局は、オーストラリア(ABC)、オーストリア(ORF)、カナダ(CBC)、フランス(ORTF)、イタリア(RAI)、日本(NHK)、メキシコ(TSメキシカーナ)、スペイン(TVE)、スウェーデン(SRT)、チュニジア(RTT)、イギリス(BBC)、アメリカ(NET)、西ドイツ(ARD)、そしてソ連、ポーランド、東ドイツ、チェコスロバキア、ハンガリーの国家放送網だった。
さらに、ベルギー、ブルガリア、デンマーク、アイルランド、フィンランド、ルクセンブルク、モナコ、オランダ、ノルウェー、ポルトガル、ルーマニア、スイス、ユーゴスラビアの13か国は、映像の提供はしないが、放送することに同意していた。この番組の潜在的な視聴者の数は、事前に5億人と推定されていた。しかし、冷戦時代の当時としてはめずらしくないことで、共産圏7か国が放送数日前になっていっせいに番組から降りてしまった。これにより、およそ1億5,000万人の視聴者が失われただけでなく、ソ連、ポーランド、東ドイツ、チェコスロバキア、ハンガリーからの映像が得られなくなった。ぎりぎりになってデンマーク(DZR)の参加が決まり、そのデンマークのオールフスにある病院がこの特別番組の最初の中継地点となった。
この番組はイギリスではBBC1で午後7時55分から10時(実際には7時57分から9時59分)まで放送された。当然、

世界各地によって放送時間はまちまちだ。日本とオーストラリアでは、放送日は6月26日となり、ビートルズが登場したのはちょうど朝食のころだった。逆に、NET（全米教育テレビ）が113の系列局で放送したアメリカでは、まだ日曜の昼食時だった。

番組はいくつかのセクションに分けられていて（「ディス・モーメンツ・ワールド」「ザ・ハングリー・ワールド」「ザ・クラウデッド・ワールド」「フィジカル・エクセレンス」「アーティスティック・エクセレンス」「ザ・ワールド・ビヨンド」など）、どの番組にも各国ごとに、それぞれの国の言葉で説明するナレーターが配属された。イギリスのキャスターはクリフ・マイケルモアだった。

ビートルズはこの番組に2回登場した。まず番組の冒頭で番組の内容をざっと映像で紹介したとき、5秒ほど画面に登場した。2回目は、「アーティスティック・エクセレンス」セクションの最後の出演者として、午後9時36分（イギリス時間）に登場した。出演時間は6分11秒。演出はデレク・バレル・デイビス、スティーブ・レイスがEMIスタジオからのレポーターを務めた。

無理もないことだが、この日は関係者全員が心から興奮し、生涯忘れられない1日となった。ビートルズは午後2時にスタジオ入りし、'All You Need Is Love'の最後の練習と、第1スタジオでのBBCのカメラ・リハーサル（午後3時から5時）にほとんどの時間を費やした。スタジオに設置されたカメラは、ケーブルによってアビイ・ロードのせまい駐車場に止めた屋外放送車と連結された。そこから、スペース・ブースターのアーリー・バード、ラニ・バード、ATS/Bという人工衛星を通して、映像と音声とが全世界に中継されるのだ。

この放送中に録音されるトラックはテイク58となる予定だった。しかし、オンエア中の失敗を極力避けたいというジョージ・マーティンの配慮から、ビートルズは実際には録音済みのリズム・トラックのテイク10をバックに演奏することになった。とはいえ、ボーカル、ポールのベース、間奏のリード・ギター・ソロ、リンゴのドラム、オーケストラはすべて生演奏である。この演奏をジョージ・マーティンとジェフ・エメリックがその場でモノ・ミックスし、BBCのバンに中継し、それが全世界に放送される。

しかし、テレビで放送された映像は、今見ると何となく古くさいものである。実際、残されたスタジオ・テープからは、いかにも自然発生的に行なわれたかのような演奏が、じつは念には念を入れたリハーサルに裏づけられていたことがよくわかる。放送ではまず、午後5時から生放送が始まるまでの様子を撮影したテープを使って、曲を大ざっぱに演奏して歌ってみているビートルズの姿を、レポーターのスティーブ・レイスが紹介した。次にカメラがコントロール・ルームに移動すると、ジョージ・マーティンがオーケストラを入れようと指示を出した。ミュージシャンが並び、からになったティー・カップを片づけるマル・エバンズの姿も映った。ここまでのシーンは午後9時36分から9時38分までに放送された。9時38分から9時42分までは、もっとも重要な生演奏を届けるべく、カメラもスタジオに戻った。ビートルズが大勢の友人に囲まれながら、'All You Need Is Love'を演奏したのだ。

放送の構成はパーティー形式となり、オーケストラのミュージシャンたちは全員正装し、スタジオの床に脚を組んで座

った友人は、みんな当時流行していた色あざやかな衣装をまとっていた。その顔ぶれは、ミック・ジャガー、マリアンヌ・フェイスフル、キース・リチャード、キース・ムーン、エリック・クラプトン、パティ・ハリスン、ジェーン・アッシャー、マイク・マッカートニー、グレアム・ナッシュと彼の妻、ゲイリー・リーズ、ハンター・デイビスなどであった。紙テープ、風船、ユーモラスなプラカードなどがところせましと飾られるなかで、みんなが声を合わせて歌った。曲の最後には、友人のうち数人が、スタジオの中でコンガを踊った。

白いスーツで粋にきめたジョージ・マーティンは、コントロール・ルームから手が離せなかったため、元マンフレッド・マンのサックス奏者でマルチ演奏家のマイク・ビッカーズが、13人の特別オーケストラの指揮を務めた。この13人は、6月23日と24日にレコーディングとリハーサルのために集まったメンバーと同じだ。バイオリン4名:シドニー・サックス(コンサート・マスター)、パトリック・ホーリング、エリック・ボウイ、ジョン・ロネイン、チェロ2名:ライオネル・ロスとジャック・ホームズ、テナー・サックス2名:レックス・モリスとドン・ハニウィル、トロンボーン2名:エバン・ワトキンスとハリー・スペイン、アコーディオン1名:ジャック・エンブロー、そしてトランペット2名:スタンリー・ウッズ(フリューゲルホルンも担当)と、'Penny Lane'のときと同じピッコロ・トランペットを吹いたデビッド・メイソン、というのがこの特別オーケストラの顔ぶれだった。

世紀のイベントが無事に終わり、テレビ・カメラが消されて、友人たちが帰ったあと、ジョンはボーカルを再度レコーディングし直した。セッションが終わったのは午前1時だった。

皮肉にもソ連の提案で、このイベント「アワ・ワールド」の映像を後世に残すため、一部始終を収めた16ミリ・フィルムが国連に寄託され、現在も保管されている。また、参加した各国の民間放送局と公共放送局もこの番組を保管しているが、ビートルズのシーンを無断放送することは許可されていない。イギリスではBBCがビートルズに追加報酬を支払い、'All You Need Is Love'の演奏シーン(3分40秒)を再放送している。その番組は、7月6日の「トップ・オブ・ザ・ポップス」(BBC1で午後7時40分から8時)、8月3日の「トップ・オブ・ザ・ポップス」(BBC1で午後7時30分から8時)、12月26日の「トップ・オブ・ザ・ポップス'67-パート2」(BBC1で午後5時10分から6時10分)。また、7月5日の「ポインツ・オブ・ビュー」(BBC1で午後7時55分から8時)では、16秒間の抜粋が放送された。このほかにも「トップ・オブ・ザ・ポップス」では3回'All You Need Is Love'を放送しているが、いずれもストック映像、つまりテレビ局の持ちあわせのビートルズとは直接関係のない映像をレコードに合わせたものだ。

6月26日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後4時から午後8時までのセッションでは、'All You Need Is Love'にリンゴのスネア・ドラムをオーバーダビングしたあと、最終モノ・ミックスを作った。そしてB面に'Baby, You're A Rich Man'を収録し、'All You Need Is Love'のシングル盤はイギリスで7月7日にリリースされ、イギリス内外でいとも簡単にナンバーワンを獲得した。「アワ・ワールド」ほどのプロモーションのあとでは、失敗するほうが考えられないことだった。

このシングル盤はアルバム"SGT. PEPPER"のリリースからちょうど5週間後にリリースされるが、アルバムには収録されない。おまけにこのアルバムからはシングル盤はひとつもリリースされていない。ビートルズの作品の内容の濃さとその多作ぶりは、同世代のアーティストにしてみれば羨望の的だった。

7月1日(土)

この日放送されたクリス・デニングが司会を務めるBBCラジオの番組「ホエア・イッツ・アット」(午後4時から5時30分)には、ケニー・エベレットによるポール・マッカートニーへのインタビューが含まれ、そのなかでポールは'All You Need Is Love'について語った。このインタビューが「アワ・ワールド」衛星中継のあとの月曜から金曜までの間に収録されたのは確かだが、正確な日付と場所は不明だ。90分の番組のなかで、'All You Need Is Love'は2回、'Baby, You're A Rich Man'は1回放送された。

閉鎖されるラジオ局にメッセージ

7月31日(月)

ラジオ・ロンドン
Curzon Street, London

ビートルズは最後の最後まで海賊ラジオへの支援をやめなかったが、その黄金時代はついに最期を迎えるにいた

CamScannerでスキャン

った。1967年8月5日、ラジオ・ロンドンは永久に閉鎖されることになった。その6日前にあたる7月31日、カーゾン・ストリート17番地にあったこの局のロンドン・オフィスに、リンゴがひょっこりと顔を出し、リンゴは局長フィリップ・バーチとともに、ビートルズを代表して(11秒の)短いお別れのメッセージを録音した。この録音はラジオ・ロンドンの最後の放送日に流される。

8月22日(火)

チャペル・レコーディング・スタジオ
Maddox St. London

ロンドン中心部で楽器販売と音楽出版を手がけるチャペルのスタジオで行なわれた2日間のレコーディングの1日目。この2日を除けば、ビートルズは6月26日を最後に72日間もレコーディングから遠ざかることになる。

両日とも午後7時からセッションを開始して、ポールの'Your Mother Should Know'をレコーディングした。この曲はのちにEMIスタジオで再度レコーディングされるが、EP "MAGICAL MYSTERY TOUR"に収録されるのはこのチャペル・スタジオ・バージョンである(ただし9月29日にEMIでオーバーダビングする)。(セッションの終了時刻は不明だが、チャペルがEMIに対して発行した請求書によれば、この日のスタジオ使用料は翌23日の2倍で、おそらく22日のセッションはかなり長くかかり、23日は短かったのだろう)。

エプスタインが最後に見届けたセッション

8月23日(水)

チャペル・レコーディング・スタジオ
London

チャペルでの2回目にして最後のセッション。前夜のテイク8をリダクション・ミックスして作った'Your Mother Should Know'のテイク9にオーバーダビングを行なった。

これはブライアン・エプスタインの生前最後のビートルズのレコーディング・セッションとなる。8月27日にはエプスタインが亡くなる。エプスタインは次第にビートルズのセッションには顔を出さなくなっていたが、この日のチャペルでの2日目のセッションには顔を出していた。

8月25日に、ビートルズのメンバーはウェールズ北部のバンゴアまで出かけた。前日の8月24日にロンドンで出会ったばかりのマハリシ・マヘシ・ヨギのもとで、週末の間に超越瞑想の修業を受けるためだ。もともと8月25日にはレコーディング・セッションを行なうつもりで、午後7時からロンドンのドレイン・リー・スタジオを予約していたことから、この修業旅行が急遽決まったことは明らかだ。EMIはスタジオのキャンセル料として45ポンド支払うことになる。

エプスタインの死を乗り越えて…"MAGICAL"のサウンドトラックにとりかかる

9月5日(火)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

ブライアン・エプスタインが他界してから4日たった9月1日、ビートルズの4人はポールの家に集まり、さまざまなことを決めた。そのひとつが超越瞑想の修業のためのインド旅行をしばらく延期して、"MAGICAL MYSTERY TOUR"の製作を進めることだった。さっそく、レコーディング・セッションは9月5日から、撮影は11日から開始することが決まった。

このプロジェクトで'Magical Mystery Tour'と'Your Mother Should Know'の2曲を使用することはもう決まっていた。そこで、この日からビートルズはサウンドトラックの残りと関連レコード用のレコーディングにとりかかった。最初の曲となったのは、ジョンの力作'I Am The Walrus'だった。午後7時から午前1時までのセッションで、リズム・トラックを16テイク録音し、アセテート盤をカッティングするためにラフなモノ・ミックスを試みた。ビートルズの作品のなかでも異色中の異色とも言えるこの秀逸な作品には、のちに何度もオーバーダビングされてさまざまな要素が加わることになる。

9月6日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時までのセッションで、まず'I Am The Walrus'のテイク16をリダクション・ミックスして、テイク17とした。これに、ポールのベース、リンゴのドラム、ジョンの印象的なリード・ボーカルをオーバーダビング、さらにアセテー

CamScannerでスキャン

ト盤をカッティングするため、モノ・ミキシングをした。
'I Am The Walrus'が"MAGICAL MYSTERY TOUR"におけるジョンの代表曲だとすれば、ポールの代表曲は'The Fool On The Hill'だ。この曲のレコーディングを本格的に始めるのは9月25日からだが、この日、ポールはピアノを弾きながらひとりでデモ・テープを録音していた。
それから、ビートルズはジョージの'Blue Jay Way'のリズム・トラックのレコーディングにとりかかり、翌日いっぱいまでこの作品にかかりきりになる。

9月7日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時15分までのセッション。'Blue Jay Way'のテイク1をリダクション・ミックスしたテイク2に、ボーカルをオーバーダビングした。これをさらにリダクション・ミックスしてテイク3とし、さらにボーカルを追加した。

9月8日(金)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

11月までは'Aerial Tour Instrumental'(飛行旅行インストゥルメンタル)というタイトルだった'Flying'のレコーディングを開始した。この曲はEMIからリリースされたビートルズ唯一のインストゥルメンタル・ナンバーだが、それだけでなく、初めてメンバー4人で共作した作品でもある。レコードでは、アルファベット順にハリスン＝レノン＝マッカートニー＝スターキーとクレジットされている。
しかし、このときのテイクの段階では曲の趣がレコードのバージョンとはかなり違っていた。たとえば、午後7時から午前2時45分までのセッションでレコーディングされた6テイクには、曲の最後にタイトル不明のモダン・ジャズ・レコードからそのままコピーしたと思われるジャズっぽいサックスが入っている。テイク6では、まずオルガンが3台分レコーディングされているが、これはオルガンを3回録音したのちにそれぞれ逆回転させて別々のトラックにレコーディングしたものだった。このテイク6をさらにテイク7と8にリダクション・ミックスした(ベストとなったのはテイク8だった)。それに、ジョンのメロトロンと4人のスキャット・ハーモニーをオーバーダビングした。セッションの最後には、4種類のラフなモノ・ミックスを作った。

映画"MAGICAL MYSTERY TOUR"撮影開始

9月11日(月)〜15日(金)

ハンプシア、デボンシア、コーンウォール、サマーセット
Hampshire, Devonshire, Cornwall and Somerset

2週間にわたる"MAGICAL MYSTERY TOUR"のロケのうち、最初のロケを開始する。ビートルズは用意のバスに乗り込み、5日間のロケを行なう西部地方に向けて出発した。
1963年の春にビートルズが行なったような典型的なポップ・バンドのパッケージ・ツアーは、ロンドン中心部のベイカー・ストリート駅の隣にあるオールソップ・プレイスに集合し、バスに乗り込み、機材を積み込むのが普通だった。ポールは、ここから近いセント・ジョンズ・ウッドに住んでいたこともあって、マジカル・ミステリー・ツアーのバスもこのオールソップ・プレイスから出発すべきだと決めた。そこで当日この場所には、ポールと選りすぐられた乗客(関係者、友人、友人の関係者、その関係者の友人、ファン・クラブのスタッフなど)が、午前10時45分の出発にそなえて集まった。ところが、肝心のバスがどこにも見あたらない。そのころ、マジカル・ミステリー・ツアーのバスはまだあわただしくあざやかな色彩で塗りたくられている最中だった。結局、バスは予定より2時間も遅れてやってきた。このプロジェクトのいい加減さが、いきなりその始まりから表れてしまった。
ニール・アスピノールがスタッフ以外の33人の乗客に1週間分の食事代として5ポンド紙幣を渡している間、バスは南西に向かう幹線道路A30に乗って、ロンドン郊外へ向かった(1967年にはイギリス南西部に向かう高速道路がまだできていなかった)。バスはまずサリー州のバージニア・ウォーターにいったん止まると、そこでジョン、ジョージ、リンゴを拾った。バスが再び走り出すと、3人は車両の後部に集まり、それぞれ好きな撮影用衣装を選び、それを5日間着用することになる。
9月11日　乗客がそろうと撮影はすぐに開始。バスの中や、昼食をとったハンプシア州ベイジングストークのウィンチェスター・ロードにあるハイド・パイパー・レストランでの

ブ・シーンなどが撮影された。一行がその日の目的地、ロンドンから約300キロ離れたデボンシア州のティンマスにある3つ星のロイヤル・ホテル・イン・ザ・デンに到着したのは、夜もかなりふけてからだった。このホテルには、ビートルズは電報で前の週の金曜に予約を入れ、この日の朝に確認の電話を入れたばかりだったが、ホテルの入口ではビートルズの宿泊のニュースを聞き出した400人にもおよぶティーンエイジャーが、雨のなか、到着を待っていた。ビートルズは(町の外でバスから乗り換えて)ホテルまで車で乗りつけると、全速力でホテルに駆け込んだ。

到着後、ポールは即席の記者会見を行ない、(あやふやな)撮影プランについてあやふやな発表をした。そのあとすぐにポールはニール・アスピノールと、まったく思いがけなくもちあがった問題、それも今度の撮影を無事に終わらせるためには非常に重要な問題の解決にあたらなければならなかった。それは、誰それと一緒の部屋は絶対に嫌だなどと言い続けるキャストやスタッフの部屋割りを決めることだった。その後ポールとジョンは、テクニカル・ディレクターのピーター・ティボルツと打ち合わせを始め、翌日の仕事を大ざっぱに決めた。この打ち合わせは西部地方にいる間は毎晩続く。

ティンマスでの撮影はまったく行なわれなかった。

9月12日　朝食を済ませた一行はバスに乗り込み、ダートムーアにある風光明媚なウィディカム・イン・ザ・ムーアという村に向かった。ちょうど年に1度のお祭りをやっていたので、ロケ地として選ばれたのだ。村への最短距離の道を使うとかなり渋滞するだろうと予想したバスの運転手、アルフ・マンダースが迂回道を走ったのはよかったが、途中に急な曲がり角があるせまい橋でバスは立ち往生してしまった。後続車がいらだちをつのらせるにつれて、バスの中も険悪な雰囲気になり、一行が悪態をつきまくるなか、カメラマンは撮影を敢行した(が、この映像は使用されない)。バスは仕方なくおよそ800メートルほどバック運転の状態のまま引き返し、ようやくUターンした。この時点でウィディカムのお祭りへ行くのは断念したが、ビートルズがやってくるという噂を耳にしてウィディカムにつめかけていた多くのファンはすっかり落胆した(ビートルズはそんなことは知る由もなかったが)。

ウィディカムをあきらめたバスは再び幹線道路のA38に戻り、およそ40キロほど南西にあるプリマスに向かった。途中、1588年にスペインの無敵艦隊襲来の知らせを聞かされたサー・フランシス・ドレイク提督が平然とボーリングで遊び続けたというホーの丘の近くにあるグランド・ホテルに立ち寄り、一行はそこで昼食をとった。そのあと、オルソップ・プレイスを出発してから20台の車を連ねてずっと一行のあとを追ってきた取材陣のために、ビートルズはホーの丘でフォト・セッションを行なった。また、ここでジョンとポールは、BBCテレビのレポーター、ヒュー・スカリーのインタビューにも応じた。これは、翌日の夜(9月13日午後5時55分から6時15分)にBBC1のローカル・ニュース番組『スポットライト・サウス・ウエスト』のトップ・ニュースとして、4分間放送される。

A38道路に戻ったバスは、大西洋に面したコーンウォール州のリゾート地として有名なニューキーに向かった。途中3か所に立ち寄ったが、最初はリスカードだった(ここでは撮影は行なわれなかったようだ)。そのあと、ダフニ・デュ・モリエール(『レベッカ』などで有名な作家)の小説の舞台として有名になったコーンウォールの湿地帯に近い町ボドミンで2か所立ち寄って、それぞれ撮影を行なった。最初の撮影場所は、ハイアー・ボア・ストリートにあるウエスト・エンド・デイリーという店の外だった。ビートルズやその一行は店のオーナーであるD・G・メドランドから、アイスクリーム、果物、キャンディなどを買った(このシーンは編集段階でカットされる)。次の撮影場所はポール・ロードだった。ここでは添乗員のジョリー・ジミー・ジョンソン(デレク・ロイル)がバスに乗り込み、うれしそうにもみ手をしながら乗客全員にマジカル・ミステリー・ツアーへようこそと歓迎するシーンが撮影された。このシーンは、リンゴとそのおば役のジェシー(ジェシー・ロビンズ)がバスに乗り込む映画の最初のシーンのあとにつなげられる(10月29日参照)。

ニューキーに入り、デイン・ロードにある3つ星のアトランティック・ホテルに到着。ビートルズは当初ここで1泊だけするつもりだったが、このまま毎日新しいロケ地に移動したほうがいいか、しばらく同じホテルを基点としたほうがいいかを慎重に検討し、後者を選んだ。アトランティック・ホテルには3日間、4棟のフラットを借りて宿泊することになった。

9月13日　集中的な撮影。昼前に、ビートルズとキャストの一部(残りの乗客を置いたまま)はバスに乗り込んでB3276道路沿いに北上し、近くのウォーターゲイト・ベイに向かった。ここでジョン、ポール、ジョージ、リンゴがそれぞれ望遠鏡をのぞいているシーン(これも映画ではカット)と、ジェシーおばさんがミスター・バスター・ブラッドベセル(アイバー・カトラー)とトレガリアン・ビーチでロマンチックな旅のひとときを楽しむシーンが撮影された。風変わりでチャーミングなシーンだったが、視聴者の趣向にそぐわないという、これまた風変わりな理由から、"MAGICAL MYSTERY TOUR"の初回放送の際にはBBCはこのシーンをカットする(1979年の再放送時はカットされない)。

撮影を終えると、ビートルズと撮影クルーはアトランティック・ホテルに戻り、2組に分かれて午後の撮影を行なった。ジョンは、ホテル内と(ニューキーの南にある)ホリウェルで撮影。ジョージはホテル内の撮影に立ち合ったが、ホリウェルには行かなかった。一方、ポールとリンゴは大半の乗客を連れてバスに乗り、再びウォーターゲイト・ベイに向かった。途中、ボースに寄ってそこで撮影を行なった。

ジョンは自分が考案したシーンの撮影の演出を担当した。これはハッピー・ナット・ザ・ラバー・マン(ベテラン喜劇俳優のナット・ジャックリーが演じている)が若い女の子たちを追いかけ回すというシーンだったが、まずはアトランティック・ホテルの屋外スイミング・プールで撮影し(おかげで追いかけ回される側は肌寒い天候なのにビキニ姿にならなければならなかった)、それからホリウェルの絶壁の上でも同じようなシーンを撮影した(骨を折ったわりには、このシーンは最終的には映画では使用されずに終わる)。

ボースに向かったポールとリンゴは、途中、バスの中で愉快なアドリブ・シーンを撮影した。リンゴとジェシーおばさんが、大声でケンカするところだ。午後の遅い時間にボースに到着したポールは、カメラマンのリトル・ジョージ(ジョージ・クレイドン)と、砂浜でふたり乗り自転車に乗ったり、歩いたり、海に向かってジェスチャーしたりするシーンを撮影した。

一方、アトランティック・ホテルに残ったジョージは、ミランダ・ウォードによる長いラジオ・インタビューを受けていた。これはBBCが新しく開設する全国ネットのポップ放送チャンネル、ラジオ1の新番組『シーン・アンド・ハード』で使用するためだった。6分22秒にわたるこの日のインタビューの前半部分は、ラジオ1開設日の9月30日、午後6時32分から7時29分の『シーン・アンド・ハード』第1回のなかで放送された(9月30日からBBCは国内放送形態を一新し、それまでラ

CamScannerでスキャン

イト・プログラムと呼ばれていたチャンネルをポップス中心のラジオ1、イージーリスニングのラジオ2に分割した。また、それまでサード・プログラムと呼ばれていたクラシック専門のチャンネルはラジオ3と改称し、音楽は基本的にかけない一般家庭向けチャンネルのホーム・サービスもラジオ4と名称を変える）。6分50秒のインタビューの後半は、翌週10月7日午後6時32分から7時29分に同じ番組で放送される。

インタビュアーのウォードは、ビートルズが出発するまで一緒にニューキーに滞在し、9月14日には、やはり「シーン・アンド・ハード」で放送するリンゴへのインタビューを収録。3分53秒間のこの内容は、10月14日の午後6時32分から7時29分までのラジオ1で放送され、12月23日には19秒間の抜粋が放送される（同じ時間帯）。

9月14日　午前中、バスに乗り込んだビートルズ一行は、ゆっくりと撮影できる静かで人けのない原っぱを探しに出発した。やがて（ニューキーからさほど遠くない）絶好のロケ地を見つけ、カメラをセットしてみると、すぐにヤジ馬の人だかりができてしまい、それに続いて交通渋滞が起きたため警察が交通整理に出動しなければならなくなった。ここでは、ふたつのシーンが撮影された。ひとつは、だぼだぼの赤いジャケットを着たジョージが、とうもろこし畑で瞑想にふけっているシーン（これは映画には使用されない）。もうひとつは、ビートルズと乗客たちが（マジカル・ミステリーという設定と編集の妙技のおかげで）おもちゃのように小さなテントの中にぞろぞろ入っていってしまうシーンだ。さらに、このテントの中は小さな劇場になっていて、'Blue Jay Way'を演奏するシーン（2回目のロケでウエスト・モーリングで撮影）につながるよう編集された。

撮影を終えた一行は、アトランティック・ホテルに戻り、午後4時に遅い昼食をとった。その際、通常なら閉鎖している時間だったダイニング・ルームを特別に開けてもらい、全員がT字形のテーブルのまわりに腰かけ、毎晩ホテルのボールルームに出演している「正統な」ダンス・バンドがその間演奏を提供した。この昼食の様子は撮影されたが、やはり映画では使用されない。

その夜、ポール、リンゴ、ニール・アスピノールと（BBCのミランダ・ウォードを含む）何人かのスタッフは、海岸沿いのペランポースという町にあるパブに出かけた。そこで、休暇で来ていた（スペンサー・デイビス・グループのリーダーである）スペンサー・デイビスとその家族に偶然会った。残念ながらカメラマンは不在だったが、ポールは上機嫌でパブのピアノを弾いて、客の歌に伴奏し、午前2時まで騒いだ。のちにミランダ・ウォードは「ポールはさすがに'Yellow Submarine'は断ったけれど、あらゆるスタンダード・ナンバーを弾いた」と語っている（ちなみに前日の夜、デイビスはニューキーのアトランティック・ホテルでビートルズと顔を合わせている）。

9月15日　朝食のあと、一行はバスの前とホテルの前で短いシーンを撮影した。ビートルズをはじめ、男優、女優、バスの乗客、乱入した見物客が一緒に、みんなカメラの前でうれしそうに手を振るシーンだ。それから一行はニューキーをあとにしてロンドンへの帰路についた。しかし、帰り道にも何度か撮影のために数か所に立ち寄った。最初の撮影場所は、ジェイムズ・アンド・エイミー・スメッドリーが経営するサマーセット州タウントンのローマン・ロードにある小さなフィッシュ・アンド・チップスの店で、昼食時に乗客全員がこの店に押し寄せるシーンを撮影した（このシーンも映画には使用されない）。最初はビートルズが食事を買おうと並んでいるところがカウンターの手前から撮影され、それから場所を店の中央に移して、ビートルズがテイクアウトの昼食をつまんでいるところが撮影された。

もう1か所の撮影は、どこかのカントリー・パブで行なわれた（ホール&ウッドハウスという宿も兼ねていたパブだが、場所は不明で映画には使用されない）。また、バスの中でアコーディオン奏者のシャーリー・エバンズ（10月12日参照）が、'Toot Toot Tootsie' 'When Irish Eyes Are Smiling' 'When The Red, Red Robin Comes Bob, Bob, Bobbin'' 'Along'、オッフェンバックのオペレッタ"ORPHEUS IN THE UNDERWORLD"の挿入歌'Can Can'といったみんなで歌いやすい曲を伴奏し、ビールではしゃぐ乗客たちを楽しませるシーンが撮影された。

出発してから5日目の金曜の夜、ジョン、ジョージ、リンゴはバージニア・ウォーターでバスを降り、ポールとほかの乗客はロンドン中心部のオルソップ・プレイスまで乗っていった。

9月16日（土）

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後7時から午前3時45分までのセッションは、'Your Mother Should Know'の録り直しから始まった。テイ

ク20からテイク30まで11テイク録音。チャペルでのバージョンよりも力強いサウンドとなった。このあとポールは、この曲をさらにどうアレンジしたらよいものかと悩む。
次に'Blue Jay Way'のラフ・モノ・ミックスとそのテープ・コピーを作った。映画"MAGICAL MYSTERY TOUR"の製作チームのひとりがビートルズのふりつけの参考にするため、このテープ・コピー'I Am The Walrus'のテープ・コピーを持ち帰った(完成した映画にはモノ・ミックスのレコードが使われる)。

ロンドン市内で映画撮影

9月18日(月)

レイモンド・レビューバー
Walkers' Court, London

ソーホーにあるストリップ劇場に場所を移して、"MAGICAL MYSTERY TOUR"の1シーンを撮影した。ビートルズとバスの男性客が、当時は無名だったボンゾ・ドッグ・ドゥー・ダー・バンドの'Death Cab For Cutie'の演奏に合わせてジャン・カーソンがトップレスになるショーを見入るくだりだ。
最終フィルムには、カーソンの裸の胸の部分に「CENSORED(検閲済)」の文字が入っている。これは、BBCをはじめとする放送局がこのシーン全体をカットしてしまうのを懸念して、ビートルズ自身が編集段階で処理したもの。

空軍基地での映画撮影

9月19日(火)~24日(日)

ウエスト・モーリング・エア・ステーション
West Malling, Maidstone, Kent
ハイ・ストリート
West Malling, Maidstone, Kent

シェパートンのスタジオも、ほかのロンドンの撮影スタジオも予約が取れなかったため、NEMSエンタープライズは"MAGICAL MYSTERY TOUR"を完成させるべく(少なくともそのつもりで)、1週間ウエスト・モーリング空軍基地を確保した。ロンドンから45キロほど南西にあるこの基地はもともと第2次世界大戦中のアメリカ陸軍航空隊の基地だった。敵の爆撃からアメリカ軍機を守るための32個の巨大なコンクリート壁がそびえているという景観で有名だった飛行場である。ビートルズはこの基地の近くのホテルに宿泊し、6日間にわたって毎朝9時から、屋内および屋外での撮影をした。
1回の例外を除き、屋内のシーンはすべてこの巨大で、がらんとした格納庫で行なわれた。ここで撮影されたのはほとんどが「魔法使いの実験室」と関連したシーンだった。ここで、4人のビートルズとマル・エバンズがバスの乗客に不思議な魔法をかけるシーンを撮影。また、ジョンがジェシーの食卓にスパゲティをシャベルで山のように盛り、一方でバスター・ブラッドベセルがポケットから何度も何度もハンカチを取り出しては彼女に差し出すという、ジョンが考えた「ジェシーおばさんの夢」(10月12日参照)のシーンもここで撮影した。さらに、霧の中でジョージがあぐらをかいて、目の前にチョークで白く描かれた「キーボード」を演奏する'Blue Jay Way'のシーンも撮影した。
撮影最後の日となった9月24日には、格納庫の中に巨大なボールルームのセットを作り、フィナーレを飾る'Your Mother Should Know'のシーンを撮影した。十分なリハーサルのあと、真っ白なスーツと靴を身につけたビートルズが、きらきらと輝く階段を荘厳な雰囲気で下りてくる。ビートルズのまわりでは、ペギー・スペンサーのダンス・チームのメンバー160名、ほかの出演者、さらにウエスト・モーリング空軍基地付きのイギリス空軍女性幹部候補生24人も加わり、華やかに踊りまわった。また、大勢の人が陽気に手を振るシーン(マル・エバンズは参加したが、ビートルズは入っていない)と、全員がリズムを刻むようにして、カメラに向かって近づいて通りすぎていくという映画のラスト・シーンも撮影した(魔法使いの衣装のビートルズも一緒)。
格納庫以外での唯一の屋内シーンは隣接する兵舎を陸軍の新兵徴募事務所のように仕立てて撮影された。ポールは、マッカートニー少佐に扮し、ビクター・スピネッティ(映画"A HARD DAY'S NIGHT"と"HELP!"に出演したベテラン俳優。11月28日参照)は身振りがやたらに大げさな徴兵官の軍曹を演じ、ふたりでリンゴ、ジェシーおばさんとほかのバスの乗客にわけのわからない軍隊用語でたたみかけるというシーンだ。このシーンの締めくくりは外の飛行場に移って(なぜだかわからないが)軍曹が紙粘土製の牛に大声で命令を下しているシーンで終わっている。
ウエスト・モーリングでは、そのほかの屋外での撮影も行なわれた。まず、滑走路と基地内の道路で撮影された「マラソン」のシーンだ。また、写真家のリトル・ジョージが数人を

CamScannerでスキャン

撮影するシーン(ビートルズはいないが、ニール・アスピノールとマル・エバンズはそのなかにいる)。そして、12人の子供たちと組織された教区牧師たちによる綱引きのシーン。さらに、ビートルズとバスの乗客たちの助けを得てアイヴィー・ボルターが古いオルガンを弾きながら歌うシーンも24日に撮影されたが、これは映画には使われない。しかし、なんといっても忘れられないシーンとなるのは、あの'I Am The Walrus'のシーンだろう。ビートルズは飛行場の2か所でこのシーンを撮影していて、とくにコンクリートの爆風防護壁の壮大な景観をじつにビジュアル的な意味でうまく使っている。この爆風保護壁には手をつないだ4人の警官が並んでいるのだが、しばらくすると、ビートルズがその細い壁の上に立って体をゆらす映像になる。さらに、映画の冒頭に使われるシーンも撮影されたが、これは空軍基地内ではなく、地元のハイ・ストリートで行なわれた(撮影は2日間続けて行なわれたが、ジョージが風邪で寝込んだためそのうちの1日には参加できなかった)。9月[illegible]日に撮影されたそのシーンでは、リンゴが店に入ってミステリー・ツアーの参加チケットを(ジョンから)購入する場面を撮影した。ロケ地はメイドストーンの中心部、ハイ・ストリート[illegible]番地にあるタウン・ニュースエージェンシーだった。

映画の編集作業に入る

9月25日(月)

ノーマンズ・フィルム・プロダクションズ
Old Compton St, London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'MAGICAL MYSTERY TOUR'の編集は1週間で終わると見込んでいたビートルズは、ソーホーの編集スタジオを予約し、ロイ・ベンソンにこの作業を依頼した。編集作業には常にビートルズのうちのひとり、またはふたり、もしくは3人、はたまた4人全員が立ち合った。何にしても、常に立ち合っていたのはポールだった。関係者の話では、ポールがある特定のシーンについてある特定の編集を指示すると、ジョンが同じシーンで自分のイメージに合わせた編集やり直しの指示を出すので、編集作業は結局毎日午前10時ごろから午後6時までやって11週間もかかることになってしまう(さらに編集作業のあとにEMIでレコーディング・セッションを行なう日もあった)。その11週間の作業の間に、約10時間のフィルムは52分間にまで切り詰められたが、その過程で、せっかく撮影したシーンをまるごとカットせざるを得なくなることはよくあったし、まったく(無理もなく)トラフィックというバンドが登場してヒット曲'Here We Go Round The Mulberry Bush'を演奏するという奇抜なアイデアも失われてしまった。

オールド・コンプトン・ストリートの編集スタジオでは、音声レコーディングも行なわれた。ジョンはこのスタジオで、コメントのようなナレーションを映像に合わせてあちこちで吹き込んでいる(日付は不明だが、早くても11月の初めと考えられる)。

一方、EMIスタジオでは、午後7時から午前3時までセッションで9月6日にポールがデモ・レコーディングした'The Fool On The Hill'のレコーディングを本格的に開始した。ジョンとジョージのハーモニカを含むベーシック・リズム・トラックを3テイク録音し、(ポールの吹く)リコーダー、ドラム、ポールのリード・ボーカルを(テイク3をリダクション・ミックスした)テイク4にオーバーダビング。セッションの最後には、ラフなモノ・ミックスを作った。

'MAGICAL MYSTERY TOUR'のレコーディングをできるだけ急いで完成させるべく、ビートルズはこの週の月曜から金曜まで午後と夜の両方ともスタジオを予約していた。さらに、水曜から3日間はスタジオを2か所も予約した。予約しても使いきれないことがあったが、先にも触れているように、スタジオ代はビートルズが心配する必要のないことだった。

9月26日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'The Fool On The Hill'をもう1回レコーディングし直した。テイク5とされたそのベーシック・トラックに、多数の楽器をオーバーダビング。これをさらにリダクション・ミックスしてテイク6とし、ボーカルとベースをかぶせた。

この日のセッションは午後7時から午前4時15分までかかったが、プロデューサーのジョージ・マーティンは不在だったので、ビートルズの新しいバランス・エンジニア、ケン・スコットがプロデューサーを兼任した。

9月27日(水)
EMIスタジオ、第1スタジオ／第3スタジオ
London

'I Am The Walrus'へのオーバーダビング用のレコーディングを2回に分けて行なった。午後2時30分から5時30分までのセッションでは、第1スタジオでオーケストラのレコーディングを行ない、続いて午後7時から午前3時30分までは、第3スタジオでボーカル・セッションを行なった。このセッションの結果、ジョンのこの曲はビートルズのレパートリーのなかでもとても魅力的な1曲に仕上がった。

オーケストラはテイク17のリダクション・ミックスにかぶせられることになったが、その際16人の演奏者は、ジョージ・マーティンの卓越したスコアにのっとって演奏した。楽器構成は次のとおり。バイオリン：シドニー・サックス（コンサート・マスター）、ジャック・ロススタイン、ラルフ・エルマン、アンドリュー・マッギー、ジャック・グリーン、ルイス・スティーブンス、ジョン・ジェザード、ジャック・リチャーズ。チェロ：ライオネル・ロス、エルドン・フォックス、ブラム・マーティン、テリー・ワイル。クラリネット：ゴードン・ルーウィン。ホルン：ニール・サンダース、トニー・タンストール、モー（モリス）・ミラー。

それが終わると今度は第3スタジオに移り、マイク・サムズ・シンガーズの16人のメンバーと、午後7時から10時ごろまでセッションする。男性8人女性8人という構成の、イージーリスニング系だがかなりの経験を積んできているこの熟練ボーカリストたちは、「Ho-ho-ho, hee-hee-hee, ha-ha-ha」とか、「Oompah, oompah, stick it up your jumper!（ンパ、ンパ、ジャンパーに突き立てろ）」「Got one, got one, everybody's got one（あるぜ、あるぜ、みんなあるぜ）」のような歌詞を歌わされたうえに、かん高い叫び声をあげるよう要求された。これらはすべて、（オーケストラをかぶせてベストとなったテイク20をリダクション・ミックスした）テイク25にオーバーダビングされた。8人の女性シンガーは、ペギー・アレン、ウェンディ・ホラン、パット・ウィットモア、ジル・アッティング、ジューン・デイ、シルビア・キング、アイリーン・キング、G・マレン。8人の男性シンガーは、フレッド・ルーカス、マイク・レッドウェイ、ジョン・オニール、F・ダクトラー、アラン・グラント、D・グリフィス、J・スミス、J・フレイザー（マイク・サムズ・シンガーズによるセッションは当初9月15日に予定されていたが、その日は行なわれなかった）。

ポールは'The Fool On The Hill'に新たなボーカルを加え、再度モノ・ミックスを作って、午前3時30分にセッションは終了した。

9月28日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

長丁場となったこの日は、第2スタジオで午後4時から5時30分の間に、映画製作会社用の'Magical Mystery Tour'と'Flying'のテープ・コピーを作成することから始まった（前述したように、完成フィルムにはのちにベストとなったミックスが使われる）。それに続くセッションはさらに精力的で、'I Am The Walrus'のテイク25をリダクション・ミックスしたものを、そのもととなっていたテイク17にオーバーダビングすることでひとまずの完成をみた。午後7時から午前3時までのセッションでモノ・ミックスを作り、編集したものがベストとなったが、それも24時間の間だけの話だった。

それから、まだ'Aerial Tour Instrumental'というタイトルだった'Flying'のレコーディングにとりかかった。テイク8にさまざまなオーバーダビングをしたあと、ジョンとリンゴが作った各種のエフェクトと逆回転テープもかぶせられた。最後にラフ・モノ・ミックスを作り、編集した。

ジョンとジョージ、瞑想について語る

9月29日(金)
ウェンブリー・スタジオ、第1スタジオ
Wembley
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズはもうこれまで一般に思われてきたような「いきあたりばったりのお気楽なポップ・スター」ではなくなっていた。それまでのドラッグによる試行錯誤と超越瞑想の経験から、それぞれに、ただのティーンエイジャー向けのポップ・ショーではなく、知的なトーク番組に出演できるだけの視野をそなえていた。

この日ジョンとジョージは、午後10時30分から11時15分までの週3回の深夜テレビ番組「ザ・フロスト・プログラム」に出演、デビッド・フロストと対談した。ふたりは番組の後半に出演し、超越瞑想について語った。この日の午後6時から

CamScannerでスキャン

時まで、ウェンブリー・スタジオの第1スタジオで実際に観客の前で録画され、レディフュージョンにより全国ネットワークで放送された。このスタジオでは、ビートルズは以前に「チューズデイ・ランデブー」という子ども番組に出演したことがあったが、そんな記憶はもうはるか遠い、前時代のような印象すらあった(「ザ・フロスト・プログラム」の前半もテープでは同じで、マハリシ・マヘシ・ヨギへのインタビューが放送された。これは前日にマハリシがイギリスを出発する前にロンドン空港で録画していたものだ)。

録画終了後、ジョンは(そしておそらくジョージも)アビイ・ロードに向かい、午後7時30分ごろ到着。ミキシング・セッションにとりかかった。

この日のビートルズのミキシング・セッションほどユニークで、画期的なものはなかったと言いきれるのだが、その一方で、毎回毎回ジョンが積極的にミキシング・セッションしていたら、そうとは言いきれないかもしれない話である。このセッションの間、'I Am The Walrus'のモノ・ミックスが17種類作られたが、完全なものは2種だけで、これらをさらに編集したものがマスターとなった。「Sitting in an English garden」という歌詞までの曲の前半部分は、リミックス10を採用。もう半分のリミックス22にはラジオからの音声を生で録音し、ラジオ特有のノイズが入っている。

午後10時30分ごろ、ラジオのチューニングをBBCサード・プログラムに合わせると、(8月24日に収録されていた)190分にわたる、ジョン・ギールガッド主演のシェイクスピアの「リア王」が流れていた。レコードに使用したのは第4幕第6場の一部で、グロスターとエドガーの「Now, good sir, what are you?」と「A most poor man, made tame by fortune's blows」というやりとりで始まる。曲の最後にもこのシェイクスピア劇が挿入されており、オズワルドの「take my purse」からエドガーの「Sit you down, father; rest you」までのセリフがはっきりと聞こえる。

しかし、演じていたマーク・ディグナム(グロスター役)、フィリップ・ガード(エドガー役)、ジョン・ブライニング(オズワルド役)の本人たちがビートルズのミリオン・セラーに、自分の声が収録されていることに気がついたかどうかは定かではない。

一方、ポールの'Your Mother Should Know'は、2か月以上も未完成のままにされていた。そこで、ジョンとポールはこの夜にこの曲を完成させることにした。9月16日に試みたリメイクは無視し、8月22日と23日のテイク9を使用。リダクション・ミックスを3種作り、オルガン(ジョン)とベース(ポール)をオーバーダビングした。活気のあるレコーディングとなり、曲は完成。最初のモノ・ミックスを作り、午前3時、やっとセッションを終えた。

10月1日(日)

ウエスト・モーリング・エア・ステーション
West Malling, Maidstone

例のバスで、ウエスト・モーリングへ日帰りのロケへ行った。"MAGICAL MYSTERY TOUR"のさまざまなショットを撮影した。

10月2日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後10時から午前2時30分まで行なわれたセッションの最初の作業は、'Your Mother Should Know'のモノ・ミックスを完璧に完成させることだった。その次に、ポールの新曲'Hello, Goodbye'(この日のタイトルは'Hello Hello')にとりかかった。

この曲は"MAGICAL MYSTERY TOUR"の収録曲ではなくシングル用だったが、アルバムとはほぼ同時に、しかし別途にリリースされるというパターンを踏襲するものになる。ベーシック・リズム・トラックを14テイク録音し、テイク14をリダクション・ミックスしてテイク15と16を作った(テイク16がベストとなる)。

注:10月4日の午後7時から12時までのスタジオ予約はキャンセルされた。

10月4日(水)

ウェンブリー・スタジオ、第1スタジオ
Wembley

前の週の金曜日の出演が好評だったため、ジョンとジョージは前回の出演の次回にあたるこの日の「ザ・フロスト・プログラム」に出演した(この番組の放送日は毎週、水曜、木曜、金曜)。

今回も45分間の番組では超越瞑想が話題となり、デビッド・フロスト、視聴者(からの手紙)、スタジオ見学者からの質問にジョンとジョージが答えた。それから、今回の放送

CamScannerでスキャン

分に出席した瞑想に好意的な知識人や否定的な立場をとる知識人(作家ジョン・モーティマーを含む)との討論に参加した。
前回と同様に、番組は午後6時から7時までに録画され、この日の午後10時30分から11時15分に放送された。

10月6日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時まで'Blue Jay Way'のテイク3にチェロとタンバリンをオーバーダビングし、レコーディングを完了させた(この日のチェロ奏者の名前は記録されていないが、27ポンドの報酬が支払われている)。

ジョンがプロデュースしたレコーディング

10月12日(木)
ド・レイン・リー・レコーディング・スタジオ
London
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

1日に別々のスタジオで、2回のセッションを行なう。午後2時30分から4時30分までは、以前'It's All Too Much'をレコーディングしたホールボンにあるド・レイン・リー・スタジオで、その曲のモノ・ミキシングをした。
2回目のセッションは午後6時30分から午前2時までEMIスタジオで行なわれ(当初はバーンズのオリンピック・サウンド・スタジオを予約していた)、このときジョンが初めてプロデューサーを務め、"MAGICAL MYSTERY TOUR"のためのセッションを監督した。最初に'Blue Jay Way'をモノ・ミックスして編集。お楽しみはそのあとに始まり、アコーディオン奏者のシャーリー・エバンズと彼女のパートナーであるパーカッション奏者のレッグ・ウェイルが、マイク・リーンダーのアレンジしたレノン=マッカートニーのインストゥルメンタル・ナンバー'Shirley's Wild Accordion'をレコーディングした(リーンダーがビートルズの曲をアレンジしたのは7か月前に続き2度目)。リンゴとポールも少しだけ演奏を加え、15テイクを録音。テイク10がベストとなり、シャーリー・エバンズの好意で、さらにアコーディオンをオーバーダビングした。最後にモノ・ミックスを作った。

'Shirley's Wild Accordion'は当初、映画のサウンドトラックの付随音楽として収録する予定だったが、最終的には使用されない。ただし、彼女は映画の終わりのほうに出演し、バスの中でアコーディオンを演奏している(9月15日参照)。シャーリーの曲は収録されなかったが、"MAGICAL MYSTERY TOUR"には別の付随音楽が含まれている。マッカートニー=スターキー=ハリスン=レノンとクレジットされた、かなり風変わりな'Jessie's Dream'で、映画のなかではジョン・レノンがグリースを塗りたくったレストランのウエイターに扮し、ジェシーおばさんに山盛りのスパゲティを出しているシーンで流れる。この曲はEMIスタジオ以外で、ジョージ・マーティンなしでプライベートにレコーディングされたもので、レコーディングの日付と場所は不明。

10月19日(木)
EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午後7時から午前3時30分までのセッション。'Hello, Goodbye'のテイク16に、ギターを2パート、ポールのボーカル、ジョンとジョージのバック・ボーカルをオーバーダビングした。最後に、これをリダクション・ミックスしてテイク17とした。

10月20日(金)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ビートルズはこの日の午後7時から午前3時45分までのセッションで、演奏はしていないが4人とも立ち合っている。午後8時から11時までは、クリストファー・テイラーとリチャード・テイラーの兄弟とジャック・エロリーの3人のフルート奏者が'The Fool On The Hill'に最後のパートを追加。午後11時から午前2時30分までは、ケン・エセックスとレオ・バーンバウムが演奏するビオラを'Hello, Goodbye'にオーバーダビングした。このとき使ったスコアはポールがピアノを適当に弾いているうちに思いついたストリング・パートをジョージ・マーティンがその場で採譜したもの。
またこの日、クリス・バーバー・バンドがポールの作曲によるニュー・シングル'Cat Call'をリリース。

CamScannerでスキャン

10月25日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ようやくレコーディングが完了した'The Fool On The Hill'を午後7時から午前3時までの間にモノ・ミックスして編集した。次に、ポールがいくつか'Hello, Goodbye'のリダクション・ミックスをして、ベースをオーバーダビングし、テイク21がベストとなった。

“MAGICAL”の追加撮影が必要になる

10月29日(日)
アカンサス・ロード/ラベンダー・ヒル
London

映画“MAGICAL MYSTERY TOUR”の編集を開始してから4週間が経過して、プロットをつなげるために追加のシーンがいくつか必要になってきた。そこでこの日から6日間で3シーンを撮影し、これで撮影は完了。
最初のシーンは、この日の午前中、サウス・ロンドンのバタシー地区で撮影された。リンゴとジェシーおばさんが口ゲンカしながらアカンサス・ロードまでせっせと歩いてくる。道路を右折してラベンダー・ヒルに到着するとふたりはジョリー・ジミー・ジョンソンとアシスタント・ガイドのミス・ウェンディ・ウィンタース(マンディ・ウィート)に出迎えられ、そのままバスに乗るというシーンだ(これは9月12日に撮影されたジョリー・ジミーがもみ手をしながら乗客にあいさつするシーンにつなげられる)。

ポールだけフランスで撮影

10月30日(月)～31日(火)
ニース
France

10月20日にレコーディングを完了した'The Fool On The Hill'は映画“MAGICAL MYSTERY TOUR”での重要なパートとなることは確実だった。しかし、この曲に合わせたシーンはまだ撮影されていなかった。
そこで、急遽ポールとカメラマンのオーブリー・デュアーが、10月30日にフランスに飛んだ(ほかのメンバーは同行しなかった)。
映画で白昼夢のシーンとして使用されている数多くのシーンを、ニース周辺のさまざまなロケ地で撮影した。なかでも印象的なのは、岩肌があらわな山岳地帯での風景である。ふたりは11月1日にイギリスに戻る。

11月1日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午前10時から午後1時まで、EMIの第53室では、映画“YELLOW SUBMARINE”のサウンドトラック用に'All You Need Is Love'と'Lucy In The Sky With Diamonds'のモノ・ミックスが新たに作られた。そのあと、作業は午後2時30分から6時までは第3スタジオに場所を移し、まずは(アビイ・ロードにある音源を使って)映画用の拍手喝采の音響効果テープが作られた。あとは当座の作業に戻り、'Hello, Goodbye'のリダクション・ミックスと'The Fool On The Hill'のステレオ・ミックスをした。

16枚目のシングルが完成

11月2日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から6時までのセッションでは、'Hello, Goodbye'の最終オーバーダビングが行なわれ、ポールのセカンド・ベース・ラインが録音された。そのあと、最終モノ・ミックスを作った。A面に'Hello, Goodbye'、B面に'I Am The Walrus'を収録した1967年に入ってから3枚目のシングルは、11月24日にリリースされる。

映画“MAGICAL”の撮影終了

11月3日(金)
サニー・ハイツ
South Rd, St George's Hill, Weybridge, Surrey

“MAGICAL MYSTERY TOUR”の最後の撮影は、ロンドンから30キロほど南西にある、ウェイブリッジのリンゴの邸宅で行なわれた。内容は(ウエスト・モーリングで撮影した部分以外の)ジョージの'Blue Jay Way'のシーンだ。
中心となったのは、ビートルズがリンゴの家の広々とした裏庭で、かわいらしい白いチェロを演奏しているシーン(9月

19日~24日にウエスト・モーリングで撮影した時点では、この曲にはチェロは含まれていなかったが、10月6日のEMIセッションでチェロがオーバーダビングされたため、追加撮影が必要になった)。ジョンが演奏するシーンでは、ほかの3人がサッカー・ボールでふざけながら庭を走り回る。さらに、ジョージが庭の階段を下りるシーンや、チェロから花火が噴き出る場面も撮影された(毎年花火を盛大に打ち上げるガイ・フォークス記念日が2日後なので、花火は簡単に入手できた)。また、たくさんの子どもたちが庭で遊び回っている場面を撮影する。

これを終えると撮影は邸宅内に移り、マル・エバンズが上半身裸になり、ウエスト・モーリングで撮影したジョージの'Blue Jay Way'のシーンを胸に映されている姿を撮影した。また、ビートルズがスクリーンの'Blue Jay Way'を観ているシーンも撮影された。このシーンではジョンが木馬にまたがり、前後にゆらしながら眺めている(木馬はおそらく当時2歳のリンゴの息子ザックのものだ)。

"MAGICAL MYSTERY TOUR"はBBCテレビで2回放送される。1回目は1967年12月26日、クリスマス翌日のボクシング・デイに午後8時35分から9時25分にかけて、BBC1で白黒放送。2回目は1968年1月5日、午後9時55分から10時45分にかけて、BBC2でカラー放送されるが、イギリスではまだカラー・テレビが普及していなかった。また、『トップ・オブ・ザ・ポップス』でも、曲に伴う映画のシーンの抜粋2回放送。12月28日(午後7時30分から8時)には'The Fool On The Hill'が、1968年1月11日(やはり午後7時30分から8時)には、'Hello, Goodbye'のバックに流すために音声を消した抜粋映像が放送される。

11月6日(月)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から6時まで、'Hello, Goodbye' 'I Am The Walrus' 'Your Mother Should Know' 'Magical Mystery Tour'のステレオ・ミキシングが行なわれた。いちばん手がかかったのは'I Am The Walrus'だった。9月29日のラジオ放送はモノ・ミックスにしかかぶせていなかったため、ステレオ・バージョンの後半の2分間、「Sitting in an English garden」以降の部分もモノのままにせざるを得なかった。

サントラ"MAGICAL"の発売形態

11月7日(火)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

EMIでの長いセッションの1日となったが、その前に午後2時30分から5時45分まで、第2スタジオでジョージ・マーティンが'Blue Jay Way'と'Flying'のステレオ・ミキシングと編集をした。そして、午後9時から午前4時30分まで続いたセッションが始まると、'Blue Jay Way'のモノとステレオの両方が再びミックスされた。ポールは'Magical Mystery Tour'のモノおよびステレオ・ミックスに、新しくボーカルとサウンド・エフェクトをオーバーダビングした。それから、完成しているミックスのコピーが作られた。それらは曲によってモノだけだったり、ステレオだけだったり、あるいは両方あったりとまちまちだったが、とりあえずアメリカから訪れていたキャピトル・レコードのボイル・ギルモアに渡された。内容は'I Am The Walrus' 'Your Mother Should Know' 'Flying' 'Magical Mystery Tour' 'Blue Jay Way' 'The Fool On The Hill' 'Strawberry Fields Forever'だった。

この時点では"MAGICAL MYSTERY TOUR"について、ビートルズとEMIが頭を抱えている問題があった。というのは、収録曲6曲ではEPにしては多すぎ、LPにしては少なすぎたからだ。そこでLPの回転数のEPにして6曲つめ込んでしまうという案も出たが、音量も音質も劣化することからこれは却下された。しかし、11月初めに出た名案によって解決された。それまで一度も試みられたことのない2枚組EPというフォーマットにし、丈夫な見開きジャケットに収め、しかも、カラー・ページと全曲分の歌詞を含む28ページのブックレットまで付けるというものだ。この豪華満点のセットは19シリング6ペンスという価格で12月8日にイギリスでリリースされる。

しかし、アメリカではこういう変わったフォーマットのレコードは売れないと思ったキャピトル・レコードは、あくまでもアルバム・フォーマットを守ることにし、"SGT. PEPPER"収録曲以外の1967年にリリースされた5曲を収録することにした。その5曲が'Hello, Goodbye' 'Strawberry Fields Forever' 'Penny Lane' 'Baby, You're A Rich Man' 'All You Need Is Love'だった(ただ、最後

CamScannerでスキャン

の3曲はこの時点ではまだちゃんとしたステレオ・ミックスが用意されていなかったため、デュオフォニックという疑似ステレオ形式で収録された)。'All You Need Is Love'が初めてステレオ・ミキシングされるのは1968年10月29日、'Penny Lane'と'Baby, You're A Rich Man'はそれぞれ1971年9月30日と1971年10月22日のことで、西ドイツで"MAGICAL MYSTERY TOUR"のLPをリリースするにあたって初めてステレオ・ミキシングされた。加えて、'Strawberry Fields Forever'は1971年10月26日に、やはり西ドイツ盤のためにステレオ・ミキシングされる。

とにかく、レコードの形態がEPであれLPであれ、"MAGICAL MYSTERY TOUR"のレコードは、52分のテレビ映画とは正反対の結果に、つまり完璧に成功に終わる。1967年のクリスマスの時点で早くもイギリスでは50万枚以上、アメリカでは100万枚も売れるという記録が、ビートルズにとって思い出深い年、1967年を締めくくるのだ。

'Hello Goodbye'のプロモ・クリップ

11月10日(金)

サビル・シアター
London

"MAGICAL MYSTERY TOUR"は思いつくものは何でもつめ込んでしまえといった感じの映画だったが、次のシングルとなる'Hello, Goodbye'の演奏シーンや映像などは何も含まれていなかった(ただし、映画の最後のクレジットのバックでは'Maori Finale'と呼ばれる曲のエンディング部分が流れている)。そこで、ニュー・シングル'Hello, Goodbye'のプロモーション・クリップを作るため、ビートルズはこの日、ブライアン・エプスタイン亡きあともまだNEMSエンタープライズが管理していたサビル・シアターのステージで観客を入れずに撮影した。"MAGICAL MYSTERY TOUR"の経験を通して映像方面への野心を燃やし始めたポールが、自ら監督を買って出た。

この日の撮影では、衣装も、演出も、セッティングもすべて異なる3種類の35ミリ・カラー・クリップが制作された。最初のバージョンでは、3月29日にアルバム・ジャケットの撮影をしてから一度も着用していなかった"SGT. PEPPER"の衣装をまとい、ポールがベース、ジョージがリード・ギター、(眼鏡をはずした)ジョンがアコースティック・ギターを弾き、リンゴが(バス・ドラムにロゴの入っていない)ドラムを叩いた。バックには、いわゆるサイケデリックな色調の幕がセットされた。このクリップには、ビートルズが1963年のえりなしスーツを着てカメラに手を振っているシーンと、(フラダンス用の腰みのスカートに花のレイをかけて)ハワイふうに着飾った女の子たちが'Maori Finale'の部分でビートルズを取り囲み、楽しそうに踊り回るシーンが挿入されている。

2番目のバージョンも、楽器のラインナップは同じだった(ただし、リンゴのバス・ドラムにはビートルズのロゴが入っている)。今度は、ふだん着のままで、田園風景の絵が描かれた幕の前で演奏した。最後にまたハワイふうの女の子たちが登場する。

3番目は、バージョン1と2のクリップのアウトテイクとバージョン3用に撮影された映像を編集して制作されている。新しく撮影したシーンでは、赤と黄色のひし形や正方形が並べられた模様の幕の前で、4人が、とくにジョンが狂ったようにツイストを踊っている(3番目のクリップ用に撮影されたシーンで使用されるのはこの部分のみ)。

"MAGICAL MYSTERY TOUR"のフィルム編集を担当し、この3種類のプロモーション・クリップも編集したロイ・ベンソンは、のちに独自の判断で"MAGICAL"で使用しなかったフィルムを集めて、4番めの'Hello, Goodbye'のプロモーション・クリップを作る。このクリップは一度も放送されていないが、オリジナルの16ミリ・フィルムの状態のまま現存している。

11月17日、ニール・アスピノールはクリップを持ってアメリカへ飛んだ。アメリカで初めてクリップが放送されるのは11月26日、番組はCBSテレビの「エド・サリバン・ショー」だ(EST午後8時から9時、バージョン1)。サリバンはクリップを紹介する前に、ビートルズが彼に打った電報を読みあげる。さらに翌日の夜、ABCテレビの「ザ・ハリウッド・パレス」(EST午後10時から11時)でもこのクリップが放送される。

しかし、イギリスではやっかいな問題が待ち構えていた。1966年6月から、全ミュージシャンの加盟が義務づけられていたミュージシャンズ・ユニオン(組合)が、シンガーやミュージシャンの口パクによるテレビ出演禁止をあおりたてていたのだ。演奏場面を見せるよりもコンセプチュアルな作品に仕上がっていた'Penny Lane'や'Strawberry Fields Forever'の映像は何ら問題なく放送できるのに、'Hello, Goodbye'のプロモ・フィルムは明らかに演奏場面を見せるものだった。せっかくギターのケーブルや、ボー

CamScannerでスキャン

カル・アンプも映像のなかに映されていたのに、このサビル・シアターで撮影した3種類のクリップでビートルズが口パクをしているのは明らかに事実で（訳注：マイクがない）、その結果イギリスでは、この3本のクリップはBBCでもITVでも一度も放送されずに終わる（詳細は11月21日を参照）。ミュージシャンズ・ユニオンの裏をかこうと、11月15日の午前10時30分から11時まで、ジョージ・マーティンはビオラの音を取り除いた'Hello, Goodbye'のモノ・ミックスを作る。ビオラ奏者が映像に登場していないためである。このミックスがフィルムにダビングされてBBCに渡された。しかし、ビートルズ自身の口パクをごまかすことも、ユニオンの主張を回避することもとうていできることではなく、この試みは徒労に終わる。

注：11月15日には、午前11時から正午にかけてジェフ・エメリックが、'It's All Too Much' 'All Together Now' 'Only A Northern Song'のモノ・テープのコピーを作っていた。映画"YELLOW SUBMARINE"のプロデューサーに渡すためだった。また、エメリックは11月22日にも同じ目的で（午後2時30分から3時30分、第2スタジオで）'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band' 'Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)' 'Nowhere Man'のコピーを作っている。さらに、11月23日には（第13室で、5時間にわたり）、マルコム・デイビーズが、'Yellow Submarine' 'All You Need Is Love' 'Eleanor Rigby' 'A Day In The Life' 'With A Little Help From My Friends' 'Yesterday' 'Strawberry Fields Forever' 'All Together Now' 'Michelle' 'When I'm Sixty-Four' 'Nowhere Man' 'Lucy In The Sky With Diamonds' 'It's All Too Much' 'You Know My Name (Look Up The Number)'（リズム・トラックのみ）、'Help!' 'Love You To'のコピーを作った。すべてではないが、このなかの一部が映画のサウンドトラックに使われる。

11月17日（金）

EMIスタジオ、第53室
London

午前10時から午後1時15分まで、ステレオ・マスターに使う、'I Am The Walrus'前半部分の新しいステレオ・ミックスを作った（このステレオ・マスターとモノ・マスターにはかなり相違点が現れてきていた。もっとも明らかな違いは、曲のイントロのメロトロンがモノでは4小節であるのに、ステレオでは6小節になっている）。

映画の作業風景を撮影

11月21日（火）

ノーマンズ・フィルム・プロダクションズ
London

『トップ・オブ・ザ・ポップス』では、11月23日（午後7時30分から8時）にサビル・シアターで撮影される'Hello, Goodbye'のプロモーション・フィルムを白黒放送することに決めていた。しかし、その週の早い段階で、プロデューサーのジョニー・スチュワートはこのクリップがミュージシャンズ・ユニオンの口パク禁止規定にひっかかると気づき、急遽とりやめた。その代わり、'Hello, Goodbye'の映像としてユナイテッド・アーティスツから入手した映画"A HARD DAY'S NIGHT"の映像を流用し、ビートルズを激怒させた。

ビートルズが憤慨したのは、1967年後半のレコードに1964年のモップ・トップの映像を合わせたという理由だけではなかった。じつは、11月21日の夜、ビートルズはBBCのマイケル・グッドウィンに、"MAGICAL MYSTERY TOUR"の編集室で4人とロイ・ベンソンが作業をしている様子を撮影するのをわざわざ許可していたからだ。この撮影のもくろみは、この映像と'Hello, Goodbye'のクリップのあからさまな口パクシーンを差し替えれば、残りはそのまま放送できるというものだった。NEMSもまた、差し替え用の最新スチールをBBCに提供していた。にもかかわらず、BBCはこの日の映像を使用しなかった理由として、放送前に現像編集するだけの時間的余裕がなかったということをあげている。

11月30日放送の『トップ・オブ・ザ・ポップス』では、'Hello, Goodbye'は流れない。そして、12月7日の放送分（午後7時30分から8時）で、初めて編集室の映像とNEMSから提供されたスチールだけを組み合わせた映像が放送される。ビートルズのサビル・シアターでの撮影は口パクであったと完全に知れわたってしまっていたため、公式のプロモーション・フィルムはまったく日の目を見ずに終わった。編集室の映像とスチールを組み合わせた映像は、12月14日、12月21日、1968年1月4日（すべて午後7時30分から8時）の『トップ・オブ・ザ・ポップス』とクリスマスの『トップ・オブ・ザ・

ポップス'67ーパート1」（午後2時5分から3時）でも放送される。しかし1968年1月11日放送分では、'Hello, Goodbye'の映像として"MAGICAL MYSTERY TOUR"の映像の抜粋が放送された。また、1968年のクリスマスに放送される「トップ・オブ・ザ・ポップス'68ーパート1」（午後1時25分から2時10分）では、この曲に伴う映像として、BBCがストック用に撮影した、ビートルズとは無関係なロンドンからブライトンまでの列車の旅のフィルムが放送される。

11月25日（土）

この日、ケニー・エベレットとクリス・デニングがホスト役を務めるラジオ1の番組「ホエア・イッツ・アット」（午後2時から3時）は、2枚組EP"MAGICAL MYSTERY TOUR"の特集を独占放送した。このなかで、ポールがふたりのホストのために演奏したピアノとボーカルのプライベート・テープが流される。タイトルはついていないが、'All Together On The Wireless Machine（無線機の前にみんな集まれ）'という、ラジオにぴったりの記録が残っている。さらに、ジョンへのインタビューも放送された。アルバム"SGT. PEPPER"を題材にした1967年5月20日の放送と同じように、このときの収録がどこで録音されたのかは不明である（ただ、ポールの曲はおそらく自宅で、ジョンのインタビューはアビイ・ロードのEMIで録音されたと思われる）。同様に、録音された時期も不明（おそらく11月半ばごろ）。

ジョンのインタビューは、インタビューとは呼べないような内容だ。意表をついたタイミングで突拍子もないおふざけをしかけてくるエベレットにけしかけられて、ジョンが返すコメントもほとんど意味がないとしか言いようがない。まるで、デニングがちょっとでもゆずろうものなら、放送を自分たちの独壇場にしようと、ふたりがグルになっているかのようだった（実際、頻繁にそうした）。また、18分余りのインタビュー中、エベレットとデニングはそれぞれ単独で持っている番組の宣伝をジョンに録音してもらった。

この番組では、EP"MAGICAL MYSTERY TOUR"に収録される6曲すべてをかけた。しかし、放送後まもなく、BBCは'I Am The Walrus'の放送を控えた。「you let your knickers down（パンツを脱いじゃう）」という歌詞が聴取者から反感を買うと判断したためだ。実質的には、'A Day In The Life'の「放送禁止」と同じ扱いだったわけだが、BBC側はあえて議論の的となるようなこの言葉を使わなかった。

5枚目のクリスマス・レコードを作る

11月28日（火）

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後6時から午前2時45分までのこの日のセッションでは、ビートルズ5枚目のファン・クラブ向けクリスマス・レコードが制作された。1966年と同様、今回もビートルズはこのレコードにそれなりの時間と労力を費やし、台本まで用意したコントをやって、レノン＝マッカートニー＝ハリスン＝スターキーとクレジットされた'Christmas Time (Is Here Again)'（レコードのタイトルもこれと同じ）という曲を特別に作った。ディスクにもこの曲からの抜粋が使われたが、完全バージョンは6分37秒もあり、ビートルズのほか、ジョージ・マーティンとスタジオにやってきた、友人で俳優のビクター・スピネッティも参加している。セッションの最後に、モノ・ミックスが作られた。

これは、ビートルズの4人が全員一緒にEMIスタジオで制作した最後のファン・クラブ用クリスマス・レコードとなった。1968年、そして最後の1969年のクリスマス・レコードには、4人がそれぞれの自宅、あるいはそのときに居合わせたイギリス内外の場所で個別にレコーディングしたものが収録されることになる。最後の2枚のレコードを編集したのはケニー・エベレットで、1969年のレコードにはモーリス・コールという彼の本名がクレジットされている（プロデューサーはいない）。

注：クリスマス・レコード用のセッションは午前2時45分に終了したが、ジョンは午前4時30分までスタジオに残り、ジョンの2冊の著書「イン・ヒズ・オウン・ライト」と「スパニアード・イン・ザ・ワークス」をもとに作られた演劇"THE LENNON PLAY:IN HIS OWN WRITE"用の音響効果用テープを編集した。ビクター・スピネッティがこの日スタジオを訪れたのは、彼がこの舞台の演出を請け負っていたからだ。EMIで既存のレコードやテープ、または自分たちで特別に作ったエフェクト・テープを編集し制作するセッションは、じつはこれですでに3度目だった。1度目は11月24日（午後7時から午前12時30分、第2スタジオ）、2度目はこの日（11月28日）の早い時間（午後2時から5時、第3スタジオ）で行なわれていた。

CamScannerでスキャン

ビートルズのメンバーのなかで、ソロ・プロジェクトのためにEMIのスタジオを使っていたのは、ジョンだけではなかった。ジョージも映画“WONDERWALL”のサウンドトラックの制作を始めていた。11月22日（午後7時から午前2時、第2スタジオで）、ジョージは‘India’と‘Swordfencing’という仮タイトルのついた2曲を、フルート奏者2名（リチャード・アドニー、ジャック・エローリ）とタブラ奏者1名（名前は不明）を呼んで、レコーディングしている。また、翌23日（午後2時30分から5時45分と午後8時から午前1時、第3スタジオ）にも、オーボエ奏者2名（J・クラックストン、G・モーガン）、トランペット奏者1名（D・クリフト）、フルート奏者2名（1回目のセッションはジャック・エローリとN・ナイト、2回目のセッションではジャック・エローリとクリフォード・セビル）とともにレコーディングを続けている。また、ジョージはキングズウェイのド・レイン・リー・スタジオも利用していた。そのあと1968年1月7日にインドに向かい、ボンベイのEMIスタジオでレコーディングを続ける。しかし、“WONDERWALL”のセッションでジョージ自身はプレイしていない。

11月29日（水）

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

午後2時30分から5時30分まで、EMIの第1スタジオで、ジョージ・マーティンとジェフ・エメリックが1967年のクリスマス・レコードのモノ・ミキシングをして、マスターを完成させた。さらに、リントーン・レコードでソノ・シートをプレスするためにテープ・コピーを作った。

アップル・ブティックの開店パーティー

12月5日（火）

アップル
Baker Street, London

リンゴはイタリアに行ってしまい（12月7日参照）、ポールは17日間の休暇をとってスコットランドにいたため、ロンドン中心部のベイカー・ストリート94番地に開店したアップル・ショップのオープニング記念パーティーには、ジョンとジョージがビートルズ代表として出席した。この日、ショップには大勢の友人たちや有名人が集まり、小売り店経営者となったビートルズを祝して、アップル・ジュースで乾杯した（一般オープンは12月7日）。

パーティーが始まってまもなく、ジョンとシラ・ブラックは、フリーのラジオ・レポーター、ブライアン・カリングフォードからインタビューを受けた。ブライアンはこのテープをすぐにBBCに持ち込んで編集し、その夜のラジオ1とラジオ2の番組「レイト・ナイト・エクストラ」（午後10時から12時）で放送した。インタビューの放送時間は2分42秒で、ジョンのしゃべりは1分46秒。放送ではこのあとすぐに、何となく場違いな‘A Hard Day's Night’がかかった。

リンゴ、映画“CANDY”に出演

12月7日（木）～16日（土）

ローマ
Italy

ジョンの“HOW I WON THE WAR”、ポールの“THE FAMILY WAY”のサウンドトラック、ジョージの“WONDERWALL”に続いて、自分の履歴書にもソロ活動を書き加えたいと考えていたリンゴは、NEMSに、よさそうなソロ活動の口に注意しておいてほしいと打診していた。映画“A HARD DAY'S NIGHT”や“HELP!”を観ても明らかなように、ビートルズのなかではリンゴがもっとも役者としての素質があったから、映画をソロの活動として選択するのはごく自然ななりゆきだった。

リンゴが最初にソロとして出演した映画は、（1960年代のリンゴのお気に入りテレビ番組「ゲット・スマート」を手がけた）バック・ヘンリー脚色の“CANDY”で、テリー・サザンとメイソン・ホッフェンバーグのベスト・セラー小説をもとにしたものだ。

リンゴはサザンの作品がとくに好きで、のちに映画“THE MAGIC CHRISTIAN”にも出演する（1969年2月3日参照）。しかし、“CANDY”についてはどちらかといえば特別出演といったところで、リンゴが演じるのは、毎週土曜日にキャンディの父親のところで働くメキシコ人の庭師で、ほかの出演者と同様にキャンディの肉体に悩みもだえるエマニュエルの役。

フランスとイギリスの合作で、クリスチャン・マルカンド監督がメガホンをとるこの映画は、サザンとホッフェンバーグのどこか荒々しくて破滅的な展開を追う原作を忠実に再現していたが、結果はさんざんなものだった。リンゴをはじめ、マーロン・ブランド、リチャード・バートン、ジョン・ヒューストン、ジェイムズ・コバーン、ウォルター・マッソー、ジョン・オーステ

CamScannerでスキャン

ン、シャルル・アズナブール、エルザ・マルティネリ、さらにはボクサーのシュガー・レイ・ロビンソンという豪華絢爛な顔ぶれをそろえたにもかかわらず、全体が精彩を欠いていた。本質的にこの映画は主人公キャンディ(ルミス・ティーン、スウェーデンのエバ・オーリンが演じた)が、始終服を脱いで相手かまわず、ところかまわずセックスするという、成人向け悪ふざけとでもいった映画でしかなかったからだ。上映時間も119分と長すぎるこの作品は封切りされると(ニューヨークでは1968年12月17日、ロンドンでは1969年2月20日)酷評が酷評を呼び、以後、ほとんどまったくと言っていいほど再上映されていない。批評家のひとりは、もどしたいときにはぜひこの映画を、とまでこきおろした。

リンゴは、この映画の撮影のため、12月3日にロンドン空港からローマに飛んだ。2週間の撮影予定は次のとおり。12月3日、4日、5日、6日、8日、10日は出番がなかった(ただし、4日には、衣装をつけて髪を漆黒に染めて、メキシコなまりを教わった)。

12月7日　午前8時30分から、製作本部のインコム・フィルム・スタジオから通りを少し行ったところの家の庭で撮影をした。

12月9日　午後、インコム・スタジオの防音スタジオ内に設営されたキャンディの家の地下室のセットで、キャンディ(オーリン)およびマクフィスト教授(バートン)と共演。

12月11日・12月12日　午後に9日と同じシーンをインコム・スタジオで撮影。

12月13日　朝から午後8時30分まで、エマニュエルがプールサイドでキャンディとセックスしようとするシーンを撮影。

12月14日　前日のシーンの続きを撮影。ふたりでたわむれているところにキャンディの父親(アスティン)が乱入し、エマニュエルを家の外に放り出すシーン。また、リンゴがキャンディの姉妹(イタリア人女優、マリル・トロ)をオートバイに乗せて走るシーンも撮影した。

12月15日　1日中、野原で80人のヒッピーたちが行なう「ラブ・イン」集会に参加するシーンを撮影。夕方から深夜にかけて、キャンディと彼女の父親をローマ空港まで追いかけていき、彼女が飛行機に乗って去るシーンを撮影した。

12月16日　リンゴの撮影最後の日。前日のローマ空港でのシーンを午後から夜までかけて完了させた。

俳優としての初めてのソロ活動を終えたリンゴは、12月17日にロンドンに帰る。この映画の撮影後の作業には、リンゴはいっさい参加しない。

ポール、映画"MAGICAL"を語る

12月27日(水)
ウェンブリー・スタジオ 第1スタジオ
Wembley

レディフュージョンの番組「ザ・フロスト・プログラム」の公開録画にポールが単独出演した。午後6時から8時までウェンブリー・スタジオに見学者を集めて録画し、この日の午後10時30分から11時15分まで放送された。歌手のブロッサム・ディアリーも、ゲストのひとりとして出演した。

ポールは番組の前半に出演し、デビッド・フロストのインタビューに答えた。話題の中心は、新聞に酷評された映画"MAGICAL MYSTERY TOUR"の手厳しい批評についてだった。ポールは、ビートルズがこの映画を製作した動機、理想としたもの、今後の活動方針などを丁寧に説明した。また、観客からの質問にも答え、戦争、人種、貧困といった話題についても触れた。

CamScannerでスキャン

Introduction 1968

1968年春、ビートルズはインドのリシケシュに滞在し、平穏さと、心の安らぎを見出そうとした。しかしその努力によっても、この時期のビートルズにとっていちばん必要とされていた、互いの調和と理解を生み出すことはできなかった。ビートルズの解散は正式には1970年、非公式には1969年とされている。しかし、解散の予兆が現れたのは1968年だったのかもしれない。

実際、インド訪問は期待されていたほどのものはもたらさなかった。リンゴが滞在したのはわずか11日間、ポールも1か月余りで帰国してしまった。その2か月後、ジョンとジョージもマハリシ・マヘシ・ヨギに幻滅し、逃げるようにインドを離れた。ただ、このときふたりが幻滅したのはマハリシという人間にであって、超越瞑想にではなかったのだが、以後マハリシも超越瞑想も二度とグループ内で話題がもちあがることはなかった。そして、ビートルズは今まで以上に、ほかの人間にとってはきわめてプライベートな問題にすぎない個人的な趣味について、世間一般からあざけられたり、あげ足をとられたりするという事態に耐えることを強いられた。

しかし、実際の活動とは裏腹に、ビートルズのいきあたりばったりでのんきなモップ・トップの4人組というイメージは、1968年の映画 "YELLOW SUBMARINE" の公開によってなおさら助長された。"YELLOW SUBMARINE" という作品そのものは、「必ず今までにないスタイルとレベルとイメージを持つアニメーション映画にするが、決してもったいぶった、大げさなものにはしない」という、最初のラフ・シナリオ案で打ち出されていた狙いがそのまま達成されていて、アニメーションとしては完成度の高い作品だった。この基本路線とラフ・シナリオは、1966年11月にライターのリー・ミノフがポールの協力を得て書きあげたものだったので、ある時点でビートルズがこの映画の製作に直接関わるつもりでいたのは確かだ。しかし、1967年に製作が進められていくうち、4人は "YELLOW SUBMARINE" にある種のいらだちを覚えるようになった。というのも、映画の内容は自分たちの実生活とも作品とも無関係なうえ、まるでビートルマニア時代の名残のようなものにしか思えなくなってきたからだ(これはまんざら間違った印象ではなかった。"YELLOW SUBMARINE" は1965年9月25日から全米でテレビ放送されたビートルズのアニメ冒険番組の続編として、メディア・グループ、ハースト・コーポレーション傘下にあるキング・フィーチャーによって製作された映画だったからである)。

CamScannerでスキャン

ビートルズは映画の最後に実写シーンで出演し、プレミア・ショーに出席して、キング・フィーチャーズに未発表曲4曲を映画用に提供したものの、1968年7月に映画"YELLOW SUBMARINE"が一般公開されたとき、ファンが想像していたほど4人はこの映画に関わっていなかった。ビートルズは一度たりとも、いいかげんな曲を発表したことはないという考えに反対はしないが、この映画のために4人が提供した4曲は、それまでの非の打ちどころのない作品と比べたら、ひどく見劣りするものだった。1967年の'All Together Now'と1968年の'Hey Bulldog'は、両方とも1回のセッションでなにげなくレコーディングされたものだったし、'Only A Northern Song'は最終的にアルバム"SGT. PEPPER"の選考にもれた曲だった。そして、最後の'It's All Too Much'は、1967年春のビートルズのクリエイティブな広がりを考えれば、すぐれた曲と言うには今ひとつ何か足りなかった。

バンドという意識の崩壊

映画"YELLOW SUBMARINE"のプレミア・ショーで、ジョンは初めて、5月半ばから一緒に暮らすようになっていたオノ・ヨーコを連れて公の場に姿を現した。ビートルズひとりひとりの個人的な女性関係については、ほかのバイオグラフィが詳細に扱っているし、本書が主題とするところでもない。しかし、ジョンとオノ・ヨーコの接近は、すでに4人の間に兆候が現れていた不協和音に拍車をかけるだけの間接的な要因にすぎなかったとしても、ビートルズがひとつのグループとして機能するうえでマイナス要因として働くものであったことは確かだ。

とくに、ヨーコはジョンに、自分の活動を広げて試みていくためのやり方はいくらでもあるという自覚を促した。その結果ジョンは、ビートルズのメンバーであることに固執するのは、アーティストとしてのより広い視野や活動を妨げることにしかならないという考えにいたった。ヨーコはジョンに自分の才能をより大きく開花させることを勧め、とくにそれまで公ではあまり見せなかったアバンギャルドな表現への欲求を解放するように促した。

ビートルズの残りの3人は、常識の範囲を越えて常に連れ添っているジョンとヨーコの姿に、すぐに反感を示し始めた。ジョンが自分やヨーコのことをジョン&ヨーコと言い表したように、ふたりは自分たちがもはや分けへだてることのできない、ふたりでひとつのユニットであると考えていた。それまで4人にしか許されなかった領域に、とくにビートルズとしての活動を、このふたりでひとつのユニットが侵食し始めた。ビートルズのレコーディング・セッションには必ずヨーコが顔を出すようになった。そして、ヨーコは、ジョンの耳もとでひそひそと何かをささやいたり、ジョンのアンプに腰かけたり、収録された曲についてあれこれと口をはさんだりした。あるいはヨーコは何もしなくても、ただそこに存在するだけで、それまで外界の狂気の沙汰から避難できる唯一の理想的な環境であったはずのスタジオを、居心地の悪い、落ち着かない場所にしてしまうことにより、3人の敵意を買った。こうしたことが、ツアーをやめて以来、少しずつ進行していたグループの解体とあいまって、セッションは被害者意識がはびこる耐えられないものへと変貌し、怒鳴り合いや癇癪の爆発は日常的になっていった。

実際、セッションの雰囲気があまりにも険悪になった8月22日にはリンゴはビートルズをやめると宣言し、そのまま休暇に出かけてしまい、リンゴなしでセッションは続けられた。もうほかのメンバーとは「気持ちが

通じないから」二度と戻らないと考えていたリンゴは、2週間後、多少なりとも事態が改善したことを認めるとグループに戻った。しかし、いつも冷静で、楽天的で、信頼のおけるリンゴが怒りにまかせて出て行ってしまったことは、グループがかなりまずい局面にさしかかっていたことをよく表していた。リンゴが姿を消したことはいっさい公表されなかった。

1968年の春から夏、そして秋口までかけて行なわれたセッションは、ジャケットが真っ白であることから俗にホワイト・アルバムと呼ばれる2枚組アルバム“THE BEATLES”のためのものだった。市場には、豪華なデザインだった“SGT. PEPPER”の亜流が氾濫していたが、今度のジャケットはそれを完全に突き放すような、ミニマリストふうの趣向になっていた。

この2枚組アルバムには、レコーディングの成果が惜しみなく注ぎ込まれ、全30曲が収録されていた。これは、ビートルズ自身が望んだことで、今やものごとの最終決定権を握っていたのもビートルズだった。しかし、プロデューサーのジョージ・マーティンは、なかには発表に値しない曲もあると言い、もっと厳密に選別して、たとえば14曲程度を収録して、十分に内容を圧縮した1枚のアルバムにするべきだと伝えた。しかし、ビートルズはこの忠告を聞き入れなかった。

アルバム“THE BEATLES”は、バンドとして制作したというよりは、4人のソロ・レコーディングを集めたものだと言われている。各曲のベーシック・トラックは4人が全員参加して制作されたが（それでもこの時点でもうすべてというわけにはいかなくなっていた）、オーバーダビングの多くは、確かにその作曲者がひとりで行なったものである。ジョンとポールの驚異的な創作意欲はあいかわらずとどまるところを知らなかったし、ジョージも確実に作曲態勢に入り、さらにリンゴまでもが曲作りを始めていたため、プールされる曲はかなりあった。しかし、問題は、グループ結成以来初めて、グループとしての目的を達成することが優先されなくなったということだ。つまり、4人のうち誰も自分の曲を犠牲にする気はなかったのだ。ジョージ・マーティンにいたっては、ひょっとするとビートルズは一度に30曲をリリースすることで、1967年から76年までのEMIとのレコーディング契約で定められた発表曲数を、手っ取り早くこなしてしまうつもりだったのかもしれない、と語っている。

しかし、アルバム“THE BEATLES”が、ビートルズ9枚目のアルバムとして見られようが、ソロ作品集として見られようが、最終的に作品の評価を左右するのはその音楽性である。そして、その点ではこのアルバムも大成功だったし、非常におもしろく聴くことのできる内容に出来あがっていた。しかも、それだけでなく、アメリカだけでも発売後1週間で約200万枚も売れ、世界中で膨大なセールスを記録した。さらに30もの曲を収録したアルバムとは別に、手持ちの作品にもすぐれた素材があったので、ビートルズはいつものようにアルバムと同時発売されるシングル‘Hey Jude/Revolution’を用意するだけの余裕もあった。このシングルの両面は、比類ない音楽性と多様性を見せつけたという意味で前年の‘Strawberry Fields Forever/Penny Lane’に並ぶ、音楽史上最高のシングル・カップリングとなった。

アップルとビジネス

“THE BEATLES”はまた、ビートルズがグループ自身のレーベル、アップル・レコードから発売する最初のアルバムともなった（といっても、ソロになってから出すものも含めてビートルズ全員のレコーディン

CamScannerでスキャン

グ作品の多くは、契約上はEMIが独占的に所有していたため、アップル・レーベルというのは見かけ上でのものでしかなかった）。1968年夏、"THE BEATLES" のレコーディングと平行して、ポールとジョージはアップル専属アーティストのレコード制作にも意欲を燃やした。ポールはメリー・ホプキンを、ジョージはジャッキー・ロマックスをプロデュースした。また、ふたりはジェイムズ・テイラーがアップルから出したアルバムのセッションに参加し、さらに、このふたりとリンゴはロマックスのアルバムでも演奏した。これらのセッションは、EMIスタジオか、3月8日にロンドンに新しくできたトライデント・スタジオで行なわれた。こうした活動は、ビートルズにとってさらにわずらわしい時間を増やすことにしかならなかった。この時期のビートルズにとってもっとも必要とされていたのは、ビートルズについて4人全員がじっくり見直す機会を持つことだった。

アップルそのものについては、数冊の本が書けるほどの話題がそろっていて、そういった本も実際に出版されている。そして、この時期のビートルズにとって重要なものとなったのは、グループの見直してはなく、アップルであった。とくに1969年、4人の仲を決定的に決裂させてしまったアップルの経営をめぐる問題が表面化すると、アップルの解決がすべてに優先される問題となってしまった。

アルバム "THE BEATLES" が完成し、リリースの準備が整うと、グループのなかでの調和も交際もほとんどなくなった。ジョンとヨーコが大麻不法所持で検挙されたころ、ポールは明らかにグループへの関心を再度ひとつにまとめるための提案を行なった。それは、2年間中断していたライブ・パフォーマンスを再開しようというものだった。ポールの理由は明解だった。4人を結びつけていたものは、ビジネスではなく音楽だった。そして、今後も4人を結びつけ、ビートルズの創造性と一枚岩のような強さを復活させるものがあるとすれば、それもまた音楽だけだというものだった。やがて、ビートルズが12月半ばにロンドンのラウンドハウスで3回のコンサートを開くと発表された。

しかし、公演初日を目前にして、この計画は延期された。ビートルズのステージ復帰を派手にとりあげるマスコミの影で、ポールがジョン、ジョージ、リンゴの3人を説得しきれずに四苦八苦していたのだ。ライブのフォーマット、会場、あるいはライブ復帰そのものについてさえ合意にいたらなかったビートルズは、それでも、1969年1月2日からリハーサルを開始し、そのもようをフィルムに収録することについてだけは意見の一致を見た。

CamScannerでスキャン

ジョージ、インドでレコーディング

1月12日(金)
EMIレコーディング・スタジオ
Phirozeshah Mehta Rd, Fort, Bombay, India

ひき続き"WONDERWALL"のサウンドトラックを制作するために、ジョージは1月7日にインドへ飛んだ。5日間にわたるEMIボンベイ・スタジオでのレコーディングが予定されていた(出発前の1月5日、午後7時から午前3時まで、ジョージはアビイ・ロードの第2スタジオでもセッションをしていた。また、1月30日にはEMIスタジオでこのサウンドトラックを完成させている)。ボンベイでの地元のミュージシャンとのセッションは、1月9日から13日まで、毎日午前10時ごろから午後7時ごろまで行なわれた。

1月12日までに"WONDERWALL"はおおかたのところ完成したが、スタジオの時間も、せっかく呼んだミュージシャンも無駄にしたくなかったジョージは、ビートルズのレコード用に多数のラーガ(伝統的なヒンズー音楽の形式のひとつ)を録音した。その1曲が、とても美しいメロディとポールが絶賛した'The Inner Light'だった。これは2月6日と8日にアビイ・ロードでオーバーダビングされ、ビートルズの曲としてリリースされる。

この時点では'The Inner Light'のインストゥルメンタル・トラックのみを5テイク録音しただけだった。参加ミュージシャンの正確な詳細は不明だが、ジョージがボンベイで雇ったのはおそらく次のような顔ぶれだったはずだ。アシーシ・カーン(サロッド)、マハプルシュ・ミスラ(タブラ、パッカワージ)、シャラド・ジャデーブ、ハヌマーン・ジャデーブ(シャーナイ)、シャンブー・ダス、インドリル・バータチャリヤ、シャンカール・ゴーシュ(シタール)、チャンドラ・シャケール(スルバハール)、シブ・クマール・シャルマール(サントール)、S・R・ケーンカレ、ハリ・プラサード・チャウラシア(フルート)、ビナヤーク・ボーラ(タール・シェーナイ)、リジラム・デーサド(ドーラク、ハーモニウム、タブラ・タラング)。

注:アルバム"WONDERWALL MUSIC"で、ジョージ自身はいっさい演奏には参加していない。これは、1968年11月1日にイギリスで発売され、アップル・レーベルから最初に発売されるアルバムとなる。映画は5月17日、カンヌ映画祭で初上映され、その際にはジョージとリンゴが出席する。

アニメ映画の実写シーンを撮影

1月25日(木)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

"YELLOW SUBMARINE"はあくまでもアニメ映画であり、それは変わりようのないことだが、映画の最後には、あたかもビートルズの映画であったかのように4人が実写で登場する。この実写を挿入した理由についてはさまざまな理由が考えられるが、要するに、これはビートルズがこの映画の製作に深く関わったと見せかけるためだったのだろう。実際にはそんなことはなかったのだが。

きちんと台本が用意された4人の特別出演の撮影は、この日の午後、台本読みとカメラ・リハーサルに続いて行なわれた。この映画のワールド・プレミアは、1968年7月17日、ロンドン中心部にあるロンドン・パビリオン・シネマで行なわれ、ビートルズも出席。アメリカでは、11月13日にニューヨークで封切られる。

注:"YELLOW SUBMARINE"の大半は、ロンドンのソーホー地区ディーン・ストリートにある、この映画の監督ジョージ・ダニングが経営するTVC(テレビ・カートゥーンズ)社のスタジオで編集された。(正確な日付は不明だが)1967年11月初め、TVCを訪れたビートルズがセル画を吟味している様子は、ユナイテッド・アーティスツから依頼をうけたタロット・アソシエイツというアメリカの代理店によって撮影され、"A MOD ODYSSEY"というタイトルの7分間の短いプロモーション・フィルムに制作されている。このフィルムには、この日(1968年1月25日)にトゥイッケナムで撮影された風変わりなビートルズの映像も含まれている。

"A MOD ODYSSEY"は、1968年10月12日午後9時から11時(EST)にNBC系列で映画"HELP!"の放送のすぐあとに流された。

それ以外のTVCでのビートルズの映像も、わずかながら、映画の予告編で観ることができる。これは、ソファでくつろいでいるビートルズがカメラの背後にある(はずの)スクリーンに映写された"YELLOW SUBMARINE"を観て(楽しんで)いるというもの。

CamScannerでスキャン

1月27日(土)
ケンウッド
Weybridge

この日、サリー州のジョンの自宅にケニー・エベレットがやってきて、日曜朝のBBCラジオ1の番組「ザ・ケニー・エベレット・ショー」のためのインタビューを収録した。これは、8日後の2月4日、午前10時から12時の間に放送される。

2月1日(木)
テレビジョン・リハーサル・ルームズ
Victoria Rd, North Acton, London

ロンドン西部のノース・アクトンにあるBBCのリハーサル室で、リンゴはシラ・ブラックとともにカメラなしのリハーサルをした。2月6日のシラ・ブラックの生放送のテレビ・シリーズに、リンゴがゲスト出演することになったからだ（詳細は2月6日を参照）。

2月2日(金)
テレビジョン・リハーサル・ルームズ
London

前日に引き続きリンゴがシラとリハーサルを行なっている間、ジョージ・マーティンは、正午から午後1時まで、アビイ・ロードで'Only A Northern Song'のボーカル・トラックをコピーした。マーティンが制作し、完成間近だった"YELLOW SUBMARINE"のサウンドトラックに使えるのではないかと考えたからと思われる。

17枚目のシングル'Lady Madonna'

2月3日(土)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

延期されていたマハリシ・マヘシ・ヨギのもとで修業するためのインド訪問が目前にせまっていた。ジョンとジョージは2月15日に、ポールとリンゴはその4日後に出発する予定だった。4人は4月下旬まで帰国するつもりはなかったため、不在中の3月半ばにリリースするニュー・シングルをレコーディングしておくことになった。この日から2月11日まで、その集中的なセッションが行なわれたが、予想していたより順調に進み、4曲の新曲をすぐにリリースできるミックスの状態まで完成させた。

最初にレコーディングしたのはポールの'Lady Madonna'だった。午後2時30分から6時までのセッションで、ピアノとドラムを3テイク録音し、午後7時から12時までのセッションで、これにベース、ファズ・ギター、ドラム、リード・ボーカル、バック・ボーカルをオーバーダビングした。

ファンがコーラスでレコーディングに参加

2月4日(日)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ニュー・シングルのためにジョンが持ってきたのは、哲学的な内容の'Across The Universe'だった。この曲はこの日にレコーディングを開始し、8日に完成させる。午後2時30分から5時30分までのセッションでは6テイクを録音した（テイク3がないのでテイク番号は1から7まである）。午後8時から午前2時までのセッションでは、ジョンがベストとみなしたテイク7にオーバーダビングが行なわれた。

ジョンのボーカルは、録音のときにテープ回転数を落とし、再生はふつうにすることでピッチをあげた。それをレコーディングしたあとで、ジョンとポールはこの曲にはファルセット・ハーモニーが必要だと感じた。日曜の夜に、予約もなしにふたりの女性歌手を見つけることなどふつうなら不可能に近いが、ビートルズならEMIの外に出て、レコーディングのある日には必ずスタジオの前に集まっているファンのなかから、ふたりを招待するだけで解決できる問題だった。そこで、ポールはアビイ・ロード付近に住んでいたブラジル出身の16歳のリジー・ブラボと、ロンドン娘の17歳のゲイリーン・ピースを連れてきたが、ビートルズのレコーディングに参加した唯一のファンとなった彼女たちは、もちろん天にも昇る気持ちだった。

「nothing's gonna change my world」というくだりの高音のハーモニーを録音すると、ふたりはスタジオから送り出され、ビートルズはさらにオーバーダビング作業を続けた。そのなかで、3種類の変わったサウンド・エフェクトを作った。最初は'Hums Wild'と題された15秒のハミングのテイクで、1回レコーディングしたあと、さらに3回オーバーダビングを重ねて4トラック・テープの残りの3トラックを埋めたものだ。ふたつ目はギターで作ったもの、3つ目はハープ

CamScannerでスキャン

に似たサウンドのものだが、このふたつのテープ・ボックスには「逆回転で再生」と注記されている。これらのうち、少なくとも'Hums Wild'とギターの逆回転によるサウンド・エフェクトは、'Across The Universe'にたっぷりとかぶせられ、ジョンは7.5ipsのコピーを作って持ち帰った。
この日、イギリスのカルトなテレビ・シリーズ「ザ・プリズナー」の前編の最終回が放送された。'All You Need Is Love'がサウンドトラックに使われていたので、ビートルズはこの番組を観ていた。番組のスター、パトリック・マグルーハンの演出テクニックに感心していたビートルズは次回映画の脚本と演出を依頼することを決めたが、その企画が実現することはなかった。

2月5日(月)

テレビジョン・シアター
London

2月1日と2日のノース・アクトンでのリハーサルに続き、テレビ番組「シラ」のために、ゲストのリンゴは、ウエスト・ロンドンのシェパーズ・ブッシュ・グリーンにあるBBCのテレビジョン・シアターに場所を移し、午後1時30分から5時30分までと、6時30分から10時までの2回にわたってカメラ・リハーサルをした。
そのころポールは、レスター・アーツ・コミュニティ・フェスティバルに協力するためロンドンのロイヤル・ガーデン・ホテルで行なわれた記者会見に出席。

リンゴ、テレビ番組『シラ』に出演

2月6日(火)

テレビジョン・シアター)
London
EMIスタジオ、第1スタジオ
London

スケグネスのバトリン・レジャー・センターでロリー・ストーム・アンド・ハリケーンズのメンバーとして演奏していたころから6年もたっていなかったが、リンゴはその間にさまざまな経験を積んできていた。この日、50分間のシラ・ブラックの新しい生番組シリーズ「シラ」の第2回にゲスト出演したリンゴは、ショー・ビジネスで十分通用するオールラウンドなエンターテイナーとしてのマルチな才能を余すところなく発揮した(この番組はブライアン・エプスタインが亡くなる直前に準備したものだ。エプスタインに見出されたシラも、キャバーン・クラブやセント・ジョンズ・ホールの時代から長い道のりを歩んできたアーティストだった)。
午前10時30分から午後1時までと午後2時から6時30分までのリハーサルのあと、この生番組は午後8時から8時50分までテレビジョン・シアターからBBC1で中継された。リンゴは数回登場した。まず、カメラがその日のゲストをアップで映した番組の冒頭(リンゴのほかに、スパイク・ミリガン、腹話術師のピーター・ブローと彼の人形である「教え魔」アーチー・アンドリューズなどがゲストだった)。そのあと、リンゴは2題のコントに参加した。最初は、体操着におさげ髪のシラがアリアドネという人形役で、リンゴが彼女をあやつる腹話術師として登場し、'Nellie Dean'を歌い、'Do You Like Me?'をシラとデュエットした。この曲の後半でリンゴはタップ・ダンスをやってみせた(1905年にH・W・アームストロングが書いた'Nellie Dean'は、2回の世界大戦の間に流行したスタンダード・ナンバー。ハーバート・ダーンリー作の'Do You Like Me?'は、1917年のレビュー「ザ・ビング・ガールズ・アー・ゼア」で使われ、バイオレット・ロレインとジョゼフ・コインが歌った曲)。
「シラ」のテーマ曲は、ポール・マッカートニーが特別に彼女に贈った'Step Inside Love'だった。BBCは'Step Inside Love'のプロモーション・クリップらしきものも制作しているが、イギリスでは一度も放送されていない。これは、レコーディング・スタジオでシラがポールのアコースティック・ギターの伴奏に合わせてリハーサルしている風景を撮影したもので、2分間のクリップにはほとんどずっとポールの姿が入っている。撮影された日付は正確には不明だが、おそらくシラがロンドンのチャペル・スタジオで、最初にこの曲をレコーディングした1967年11月21日ではないかと考えられる(その日の夕方、ビートルズは「トップ・オブ・ザ・ポップス」も収録している。しかし、'Step Inside Love'のシングルに収録されるバージョンは、ポールがインド訪問中の1968年2月28日にEMIスタジオで録音されたリメイク・バージョンである)。
BBCでリンゴがシラと仕事をしている間、ほかの3人は、セッションのため12時間近くほとんどEMIスタジオで過ごしていた。セッションは午後2時30分から8時までと午後9時から午前2時までで、明らかに途中で休憩を入れていた。3人は近くのポールの家でリンゴのテレビ生出演を観てい

CamScannerでスキャン

たのだろう。
この日の最初のセッションでは、'The Inner Light'がほぼ完成した。ジョージがボンベイで録音したバック・トラックにボーカルを加えて、モノ・ミックスを作った。午後9時からのセッションでは'Lady Madonna'が完成した。ポールのセカンド・リード・ボーカル、セカンド・ピアノ、手拍子、ポール、ジョン、ジョージの3人によるバック・ボーカル、間奏には管楽器をまねたポールのスキャット・ボーカルをオーバーダビングした。しかし、最後になって、やはりスキャットではなく、本物の管楽器を入れようということになったので、セッション調整係のローリー・ゴールドが急遽4人のサックス奏者をEMIスタジオに集めてきた。呼ばれたのは、バリトン・サックスのハリー・クラインとビル・ジャックマン、テナー・サックスのロニー・スコット(ロンドンのナイト・クラブのオーナーとしても有名)とビル・ポービーだった。
こうして完成した'Lady Madonna'をモノ・ミックスして、セッションを終えた。

チャリティ・レコードへの曲提供が決定

2月8日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'The Inner Light'にジョンとポールの短いボーカルをオーバーダビングして、この曲の最終モノ・ミックスを作ったことを除けば、この日の午後2時30分から9時までのセッションはほとんど'Across The Universe'を仕上げることに費やされ、ビートルズはさまざまな楽器を使って各種のサウンドを試みた。しかし、いろいろ努力してみたものの、作曲者であるジョンはどうしても自分がイメージする感触とは違うと、まだ満足できなかった。したがって、午後10時から午前0時15分までのモノ・ミックス・セッションで次のシングルの収録曲を最終的に決定する際、A面には'Lady Madonna'、B面には'The Inner Light'を入れ、'Across The Universe'はとりあえず却下するという案にジョンも同意せざるを得なかった。'Across The Universe'はそのままライブラリーに保管された。
この日は、ジョージ・マーティンの客としてコメディアンのスパイク・ミリガンがたまたまスタジオに来ていた。ミリガンは世界自然保護基金(WWF)のためのチャリティ・アルバムに'Across The Universe'を収録したいと申し出て、ビートルズは承諾した。そもそもミリガンがWWFのためのチャリティ・アルバムを作ろうと思いついたのは1967年12月ごろだったが、'Across The Universe'の歌詞からとった"NO ONE'S GONNA CHANGE OUR WORLD"というくだりをタイトルに冠したレコードが実際にリリースされるのは1969年12月になってからのことだ。1969年10月2日、このチャリティ・アルバムに収録するために、EMIでのミキシング・セッションではこの曲に野生動物の音響効果が加えられる。しかし、アルバム"LET IT BE"にはこのミックスではなく、1968年2月8日のレコーディングにフィル・スペクターが新たに多数のオーバーダビングを加えたバージョンが収録されることになる(1970年3月23日、1970年4月1日参照)。

'Lady Madonna'のプロモーション・クリップ

2月11日(日)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この時期のビートルズは非常に創作意欲が旺盛だった。4回のセッションであっというまに3曲を完成させてしまったので、2月10日午後2時30分から午前12時に予定されていた第2スタジオでのセッションはキャンセルされてしまった。そして、この日ビートルズがEMIに来たのは'Lady Madonna'のプロモーション・クリップを撮影するためだった。スタジオでレコーディング中の様子を撮影することになっていたが、'Lady Madonna'のセッションをまねするよりも、4人はジョンの新曲'Hey Bulldog'のレコーディングを開始し、これを完成させてミックスまでしてしまった。この曲は、まだ未完成だった'You Know My Name(Look Up The Number)'の代わりに"YELLOW SUBMARINE"のサウンドトラックに収録されることになる(サウンドトラック・アルバムに収録されているが、映画では'Hey Bulldog'のシーンはイギリス初回公開時などを除きカットされていた)。撮影カメラが回っている間に、ビートルズは'Hey Bulldog'のリズム・トラックを10テイク録音し、それにオーバーダビングを加えて完成させた。撮影が終わったあと、午後4時から午前2時までのセッションの締めくくりとしてこの曲のモノ・ミックスをした。

CamScannerでスキャン

クリップの撮影に関しては、新しく設立したアップル・フィルムズのトニー・ブラムウェルが撮影を行なったが、この新会社にはほかに適任者がいなかったため演出も担当した。このときのセッション・フィルムからは、2種類の35ミリのカラー・クリップが編集されたが、この2種は基本的には同じで、ところどころでショットが違っているだけだ。

このクリップは、NEMSエンタープライズがイギリスとアメリカのテレビ局に配布した。1種はイギリスのBBC1で4回白黒で放送される。3月14日と4月4日の午後7時30分から8時放送の「トップ・オブ・ザ・ポップス」、3月15日午後6時40分から7時5分放送の「オース・システムズ・フリーマン」、そしてクリスマスの午後1時25分から2時10分放送の「トップ・オブ・ザ・ポップス'68－パート1」である。アメリカでは、3月30日午後9時30分から10時30分（EST）のABCテレビの番組「ザ・ハリウッド・パレス」で、初めて'Lady Madonna'のクリップがカラーで放送される。

インドに向かう直前にシングル完成

2月15日（木）

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後4時30分から6時までのセッションで、'Lady Madonna'のシングル盤用のモノ・マスターを作った（ステレオ・ミキシングされるのは1969年12月2日）。このシングルは3月15日、イギリスでリリースされる。

アップル設立の正式発表

5月14日（火）

WNDT
East 46th St, New York City, New York, USA
スタジオ6B
Rockefeller Center, New York City, New York, USA

5月11日、1966年8月に最後のコンサート・ツアーを行なって以来初めて、ジョンとポールはアメリカへ飛んだ。しかし、今回の目的は、前回までの音楽活動とはかなり違うものだった。アップル・コープスの事業旗揚げを正式発表するためで、ニューヨーク滞在中にビジネスマンらしい表情を装ったふたりはアップルの宣伝のため、13日、「お堅い」メディアとのインタビューをいくつか（セント・レジス・ホテルで終日かけて）行なった。14日には記者会見を開き（アメリカーナ・ホテルで午後1時30分から）、さらにその夜には、NBCテレビの「ザ・トゥナイト・ショー」に出演した。また、12日の午後には、自由の女神のまわりを巡航する中国のジャンク船の上で、アップル・コープスのビジネス・ミーティングを開いていた。

これらはすべてあらかじめ予定された行動だったが、これに加えてジョンとポールは、レポーターのミッチェル・クラウスから長いインタビューを受けることを承諾した。ニューヨーク市ではチャンネル13にあたる、教育テレビ局WNDTで放送するものだった。このインタビューは14日の午後に収録され（おそらくイースト46thストリートか、または9thアベニューとウェスト55thストリートのいずれかにあるWNDTのスタジオで）、翌5月15日現地時間の午後10時から11時（EST）に「ニュースフロント」という番組で放送。視聴者からの要望が強かったため、インタビューは再放送される。おそらくその翌週、5月24日である。

14日の午後の収録を終えたジョンとポールは、今度はロックフェラー・センターにあるスタジオ6Bで、「ザ・トゥナイト・ショー」への出演を収録した。番組は、その数時間後、ニューヨークでは真夜中の12時から午前1時まで放送された。ブライアン・エプスタインのアメリカでのビジネス・パートナーだった弁護士ナット・ワイスのイースト73thストリート181番地にあるアパートに滞在していたジョンとポールも、この番組を観た。

この日の「ザ・トゥナイト・ショー」は、レギュラー司会者であるジョニー・カーソンの代わりに、メジャーリーグの選手であるジョー・ガラジオラが司会を務めた。出演の様子はかなりぎこちないもので、ガラジオラはふたりのビートルズにどんな話を聞いたらいいものかとまどっていたが、そもそも3人ともこの日初めてアメリカのトーク番組に出演したので、無理もない話だった。しかも、このぎこちなさに輪をかけたのが、ゲストとして ジョンとポールに同席していた66歳のしゃがれ声の女優、タルラ・バンクヘッドだった。バンクヘッドはいきなり番組の焦点をかっさらったこの若造ふたりが気に入らない様子だった（バンクヘッドは番組の最初に登場したゲストで、ジョンとポールが現れるまでは話題の中心だった）。何にしても、番組はしらけたものとなり、一説によるとジョンとポールはナット・ワイスのくつろいだアパートでこの番組を押し黙ったまま観ていたという。

CamScannerでスキャン

また、このニューヨーク滞在中、期日は不明だが、おそらくこの日に、ジョンとポールはもう1回テレビ・インタビューを収録していた。これは、1964年2月のアメリカ初訪問のときからビートルズを熱心に支持してくれていたマイアミのDJ、ラリー・ケインによるものだった。しかし、このインタビューが放送されたという記録はなく、もしかするといまだに未発表であるとも十分に考えられる。

5月15日の夜、ふたりは帰路につき、16日の朝早くロンドンに到着する。

ジョンとヨーコ、“TWO VIRGINS”を共同制作

5月19日(日)

ケンウッド

Weybridge

ジョン・レノンとオノ・ヨーコが初めて結ばれたのは、この日である。1966年11月9日に出会ってからしばしば連絡を取り合っていたふたりが、とうとうこの日カップルとなったわけだ。あまりにも有名なこのときのエピソードをかいつまんで紹介すると、この日の夜、ジョンはヨーコを自宅に招待し(妻のシンシアは海外に出かけていた)、ふたりで各種のサウンド・コラージュをレコーディングし、ふたりの新しい愛を夜明けに成就したのだ。それから半年足らずでジョンはシンシアと離婚、9か月後までにはヨーコも夫(映画監督のトニー・コックス)と離婚、そして10か月後の1969年3月20日、ジョンとヨーコは結婚する。

この夜のエピソードがなぜ本書でも取りあげられるのかというと、ひとえにこの夜レコーディングされたものが、11月29日、ジョン・レノン・アンド・ヨーコ・オノとクレジットされたアルバム“UNFINISHED MUSIC NO.1 : TWO VIRGINS”としてリリースされるからだ。内容はたいがいのリスナーの理解の範疇を越えてしまうような、途切れのない前衛的なサウンド・エフェクトの波といったもので、世界中の誰もが知っているように、ジャケットには前向きのジョンとヨーコの全裸が、そしてその裏にはうしろ向きのジョンとヨーコの全裸の姿が使われていた。発売禁止になり、容赦なくこきおろされ、非難中傷の的となったこのアルバムは、「ビルボード」誌のチャートにはかろうじて124位に入るが、イギリスのチャートにはまったく入れない。といっても、このアルバムにとって、チャートに入ることはさして意味のないことだった。

ジョンとヨーコは“TWO VIRGINS”をきっかけに、これ以降も膨大な量の音楽作品あるいはビジュアル作品をプライベートに制作し続けるが、その多くは正確な制作期日がはっきりわからない。それに、なかにはどちらにしてもそれに興味がない一般のオーディエンスには鑑賞する機会がない作品もある。そういった1968年におけるプロジェクトには(一部には1969年に発表されたものもあるが)、“SMILE”“TWO VIRGINS”“RAPE”などの映像作品、そして“TWO VIRGINS”の第2弾にあたるアルバム“UNFINISHED MUSIC NO.2 : LIFE WITH THE LIONS”などのレコーディング作品がある。

ビートルズという現象を探るドキュメンタリー番組

5月23日(木)

EMIスタジオ

London

かつてくだらない音楽だと言われていたロックやポップスは、このころには全面的にシリアスに受け取られるようになった。その証拠にこの時期になると、まだ若々しいこの社会現象の表層の底には何が流れているのかと探ろうとするドキュメンタリーもいくつか制作され始めていた。最初にこの種の企画を立てたのは、イギリスのプロデューサー兼ディレクターであるトニー・パーマーである。パーマーが制作した「オール・マイ・ラビング」は、1968年11月3日午後10時40分から11時35分にかけてBBC1「オムニバス」というアートについてのシリーズ番組のひとつとして白黒で放送され、1969年5月18日午後9時30分から10時25分にかけてBBC2でカラーで再放送される。野心的なパーマーは9年後にも、ロンドン・ウィークエンド・テレビで、ポピュラー音楽の歴史をたどる各回50分間の17回シリーズの番組を制作する。タイトルはやはりビートルズの曲名からとった「オール・ユー・ニード・イズ・ラブ」である。

この日、「オール・マイ・ラヴィング」のために、ポールとリンゴはアビイ・ロード内の、どのスタジオかは不明だが、コントロール・ルーム内で独占インタビューを収録した。時間と場所は異なるが、ジョージ・マーティン、アップルの広報担当となったデレク・テイラー、ジョージ・ハリスンの師ラヴィ・シャンカールへのインタビューも行なわれている。また、この作品には、インドのリシケシュで撮影されたビートルズのニュース映像、マハ

リシへのインタビュー、1964年以降のビートルマニアの映像、5月14日の「ザ・トゥナイト・ショー」に出演したジョンとポール、2月11日に撮影された'Lady Madonna'のプロモーション・フィルムの抜粋など、さまざまなフィルムが編集された。

ホワイト・アルバム、レコーディング開始

5月30日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

インドでゆっくりと休暇を過ごしているあいだに、多数の新曲が生まれていた。5月の3週目ごろ、ビートルズはサリー州イーシャーにあるジョージの別荘「キンファウンス」に集まり、ジョージのアンペックスの4トラック・マシーンを使って、23曲のデモ・レコーディングをした。そのほとんどが、通称ホワイト・アルバム、正式にはただシンプルに"THE BEATLES"と名づけられる2枚組アルバムに収録されることになる。23曲のデモ・テープがレコーディングされた順序はおそらく次のとおり。かっこ内は作曲者名と関連情報である。

Cry Baby Cry（ジョン）
Child Of Nature（ジョン:ビートルズでは正式にレコーディングされない。1971年、このメロディに新しい歌詞がついて、'Jealous Guy'としてリリースされる）
The Continuing Story Of Bungalow Bill（ジョン）
I'm So Tired（ジョン）
Yer Blues（ジョン）
Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey（ジョン）
What's The New Mary Jane（ジョン:1968年8月14日から1969年11月26日にかけてEMIでレコーディングされ、1996年"ANTHOLOGY 3"に収録される）
Revolution（ジョン）
While My Guitar Gently Weeps（ジョージ）
Circles（ジョージ:ビートルズでは正式レコーディングされない。ジョージが1982年に初めて発表する）
Sour Milk Sea（ジョージ:ビートルズでは正式にレコーディングされない。1968年の夏、ジャッキー・ロマックスに提供される。6月25日参照）
Not Guilty（ジョージ:1968年8月7日から12日にかけてレコーディングされ、1979年にジョージがソロで発表。ビートルズ・バージョンは1996年"ANTHOLOGY 3"に収録される）
Piggies（ジョージ）
Julia（ジョン）
Blackbird（ポール）
Rocky Raccoon（ポール）
Back In The U.S.S.R.（ポール）
Honey Pie（ポール）
Mother Nature's Son（ポール）
Ob-La-Di, Ob-La-Da（ポール）
Junk（ポール:1970年、ポールのファースト・ソロ・アルバムに収録され、ビートルズ・バージョンは1996年"ANTHOLOGY 3"に収録される）
Dear Prudence（ジョン）
Sexy Sadie（ジョン）

ビートルズは、5月20日から7月26日までの10週間、月曜から金曜までの午後2時30分から午前0時までのスタジオ予約を5月14日に入れていた。しかし、ビートルズがこのスケジュールでスタジオを使い始めたのは7月に入ってからだ。予定より10日遅れのこの日（5月30日）、ようやく最初のセッションが行なわれた。

アルバム"THE BEATLES"のために最初にレコーディングした曲は'Revolution'だった。しかし、アルバム発表前にこの曲のリメイク・バージョンが'Revolution'のタイトルで（'Hey Jude'のB面として）リリースされるため、このアルバム・バージョンは'Revolution 1'というタイトルに変更になる。また、アルバムにはサウンド・エフェクトをコラージュした'Revolution 9'が収録されているが、これはこの日のレコーディングの副産物でもある。一方、午後2時30分から午前2時40分まで、'Revolution 1'のリズム・トラックを18テイク録音した。秀逸な出来のテイク18は長さが10分17秒もあり、翌日、やはり秀逸なオーバーダビングが加えられる。

CamScannerでスキャン

ヨーコが初めて参加したセッション

5月31日(金)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から午前0時までのセッションで、'Revolution 1'のテイク18に、ポールのベースとジョンの2種類のボーカルをオーバーダビングした。これをリダクション・ミックスしてテイク19とし、さらにオーバーダビング(ポールとジョージのバック・ボーカル)を加え、そこまでのラフ・モノ・ミックスを作った。

セッションが終わるころには、この10分17秒の後半6分間はまさにレボリューション・サウンドとも言えるような、混沌とした内容となった。不協和音のように各パートが暴走するインストゥルメンタル・ジャム、うなるフィードバック、「alright」と執拗に叫び続けるジョンの声、「you become naked(裸になるのよ)」などと語りかけたり、ジョンと話すヨーコの声、そして、さらに自宅から持ち込んださまざまなサウンド・エフェクト・テープがオーバーダビングされた(ヨーコがビートルズのセッションに参加したのはこの日が初めてで、以後、ヨーコは実質的にすべてのセッションに参加した。ほかの人間からは、ときには控えめに、あるいは露骨に嫌がる声があがったものの、ジョンとヨーコは一緒に居続けた)。

こういう様相を示していたので、この時点では'Revolution'は強烈な曲ではあったものの、とてもではないがシングルには向いていないとジョンは考えていた。しかし、この印象的な最後の6分間はやがて切り離され、'Revolution 9'のベースとなった。

'Revolution'の矛盾

6月4日(火)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日の午後2時30分から午前1時までは、'Revolution 1'にかぶせるための実験的で変わったオーバーダビング作業に費やされた。ジョンはリード・ボーカルを録り直した。「革命は革命でも破壊の話をしているんだったら」というくだりで、自分も関わりたい(「count me in」)という内容と、自分のことは忘れてくれ(「count me out」)という内容の両方を歌い、歌詞を矛盾をはらんだ不可解なものにした。また、ボーカルに変化をつけるため、この作業の間、ジョンは第3スタジオの床に寝そべって歌った。ポールとジョージは10分間にわたるレコーディングの後半から、「Mama Dada Mama Dada Mama Dada」と執拗に繰り返すバック・ボーカルを続けた。さらに、リンゴが折りを見てはパーカッションを加え、ジョンはトーンペダルを効かせたギターを、ポールはオルガンを加えていった。そのあと2本のテープ・ループを作ったが、これらはどちらも使わなかった。

セッションの最後に、(テイク19をリダクション・ミックスした)テイク20からラフなモノ・ミックスを2種作り、ジョンともうひとり(誰かは不明)が持ち帰った。

リンゴがひとりで書いた曲

6月5日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

リンゴが初めてひとりで書いた'Don't Pass Me By'のレコーディングを始めた、記念すべきセッション。不思議なことに、午後2時30分から午前1時30分までのセッションの最初には'Ringo's Tune (Untitled)'だったのが、最後には'This Is Some Friendly'という仮タイトルがついている。なぜ不思議なのかと言えば、1963年の時点でリンゴは自分の曲を書きかけているとBBCラジオのインタビューで語っていて、そのときすでに'Don't Pass Me By'というタイトルだと説明していたからである。

この日はポール(ピアノ)とリンゴ(ドラム)のベーシック・トラックを3テイク録音した。次に、別のピアノと、なぜかクリスマスっぽいソリの鈴の音をオーバーダビングし、4トラック・テープを埋める。2種類のリダクション・ミックスのうち、ベストとなったテイク5にベースを加え、さらにリダクション・ミックスしてテイク6とした。

6月6日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時45分から、リンゴとポールとで'Don't Pass Me By'のオーバーダビングを始めた。最初にスタジオ入りしたふたりはテイク5のふたつのベース・トラックを消し、その代わりにリンゴのリード・ボーカルを2種類録音した。これをリダクション・ミックスしてテイク7とし、そこにポールが新しいベースをオーバーダビングした。残った1トラックには7月12日まで何も録音されない。とりあえず、この日出来あがったテープでラフなモノ・ミキシングをして、持ち帰るために3本のコピーを作った。

この日、セッションの途中のどこかで、ケニー・エベレットがスタジオを訪れた。6月9日に午前10時から正午にかけて放送されるBBCラジオ1のシリーズ番組「ザ・ケニー・エベレット・ショー」の最終回で流すビートルズのインタビューを収録するためだった。しかし、前に彼がビートルズのひとりに会ったときにも増しておかしな会見となり、このインタビューは最初から最後まで手のつけられない内容となった。エベレット自身もそうだが、ビートルズは言いたい放題しゃべりまくるものの、耳を傾けるだけの価値はまったくないおふざけに終始し、あげくのはてには、世にもおかしなパロディをアドリブで演奏した。その曲は、ビーチ・ボーイズの'Cotton Fields'やニルソンの'River Deep, Mountain High'(ジョン)、レイ・ノーブルの1931年のダンス・シャッフル'Goodnight Sweetheart'(リンゴ)だった。また、ポールとジョン、次にポールとリンゴが一緒に、エベレットの番組のお知らせを収録した。

ラジオ1の放送分ではジョージの声は聴くことができないが、収録分のテープにはジョージも確かに参加している。そのテープはアップルにより7インチ・レコードにプレスされ、なぜかプロモーション・レコード'Una Sensazionale Intervista Dei Beatles'としてイタリアで出まわった。ラジオ1の放送は、エベレットがいつものようにエコーとエフェクトをかけすぎていたため、レコードのほうが鮮明に4人の会話を聴くことができる。

収録が終わり、リンゴとポールが再び第2スタジオで'Don't Pass Me By'にとりかかると、ジョンはEMIスタジオの別の場所で、ビクター・スピネッティとのテレビ用インタビューを収録した。これは、6月22日午後10時5分から10時45分までのBBC2のアート番組「リリース」で放送される。午後5時からカラーで撮影され、このふたりはピーター・ルイスと英国国立劇場でスピネッティが演出する芝居"IN HIS OWN WRITE"(6月18日に上演開始が予定されていた)について語った。番組ではこのインタビューは4部(それぞれ7分41秒、4分14秒、1分35秒、18秒)に分けて、6月21日に撮影されるBBCスタジオでの演出指導風景(ジョンは参加していない)の映像などとあわせて放送された。また、ジョンはこのインタビューを利用して、政治についての過激な見解を率直に語った。

この日のセッションは午前2時45分まで続いたが、最後の数時間はほとんど演劇"IN HIS OWN WRITE"の音響効果制作にあてられた。前年からの作業に引き続いて(1967年11月28日参照)、ジョンはこの芝居のためにさらに12種類のサウンド・エフェクト・テープをレコーディングし、これを7.5ipsリールにコピーして持ち帰った。

CamScannerでスキャン

バラバラのレコーディング ジョージはラビ・シャンカールの映画に出演

6月10日(月)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London
ビッグ・サー
California, USA

これまではビートルズのメンバーがレコーディングの進行中にイギリスを離れることなどありえなかった。しかし、ジョージとリンゴが6月7日から18日まで渡米したときも、一部のセッション(6月7日と12日から14日)はキャンセルされたが、とりあえずレコーディングは続行された。6月10日と11日、ジョンは'Revolution 9'のサウンド・エフェクトを編集。同じく11日にはポールも、ひとりで'Blackbird'をレコーディングし、モノ・マスターをミキシングしている。それから、6月20日には今度はポールがアップルの仕事で渡米し、20日、21日、25日のセッションを休む。

この日、午後2時30分から5時45分まで行なわれたセッションでは、'Revolution 9'の輪郭がはっきりし始めた。この曲はアルバムではもちろんビートルズの曲となっているが、実際にはジョンが考案し、ジョンとヨーコだけで(レコーディングしたというより)編集したもので、のちにジョージが多少手伝っているだけだ。ジョンはこの日から数日間にわたって、自作のものやEMIや自分の音源から選んだサウンド・エフェクトのテープやテープ・ループを準備することにほとんどの時間を費やす。

ジョージがアメリカに渡ったのは、シタールの巨匠ラビ・シャンカールの半生を追ったドキュメンタリー映画に出演するためだった。この映画は"EAST MEETS WEST"という仮タイトルで製作されていたが、のちに"MESSENGER OUT OF THE EAST"というタイトルに変更される。さらに、3年後の1971年11月23日にニューヨーク・シティのカーネギー・ホール・シネマでようやく初公開されたときには、タイトルは"RAGA"となっている。またアップルは、ジョージがプロデュースしたこの映画のサウンドトラック・アルバムをリリースしている。

96分のこの映画でジョージが出演しているシーンはほんのわずかで、6月10日と11日に撮影を行なった。ロケ地は、ジョージと(ジョージの出張に便乗した)リンゴがこのアメリカ訪問の前半に滞在していたモントレーから車で45分ほどの、サンフランシスコの南にあるビッグ・サー。目の前に太平洋をのぞむ場所だった。

1日目のこの日は、太平洋を見わたせる芝地に座って、ラビから新しいラーガを教わっているシーンを撮影した。台本もなければ、リハーサルもなかった。カメラの前で、ふたりは30分ほど演奏したり、話したりした。映画に使われるのは、そのうちのほんのわずかである。

6月11日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ/第3スタジオ
London
ビッグ・サー
California, USA

アビイ・ロードではふたつのセッションが同時に行なわれた。第3スタジオでは午後7時から10時15分まで、ジョンが'Revolution 9'の実験的なテープ・ループを作っていた。一方、第2スタジオでは午後3時30分から午前12時15分まで、ポールが新曲のバラード'Blackbird'のアコースティック・ギターとボーカルのテイクを32テイク録音し、モノ・ミックスを作った。

また、この日ポールはアップルの新人であるメリー・ホプキンと、彼女の最初のレコーディングのプレイバックを聴いているところを映像に収めた。トニー・ブラムウェルの演出のもとに撮影されたこの16ミリ・フィルムは、一般公開用ではなくアップル・レコードのプロモーションに使う短いフィルムのためのものだった。このフィルムにはほかにも、ウィグモア・ストリート95番地にあったアップルのオフィスで、ディック・ジェイムズとビジネス関連の打ち合わせをしているビートルズやアレクシス・マーダス(アップル・エレクトロニクスの社長)の姿、EMIスタジオでアコースティック・ギターを手に'Blackbird'を演奏しながら、一瞬だが'Helter Skelter'を披露する姿が編集される(7月18日、9月9日参照)。これらの映像が撮影された正確な日付は残っていない。ブラムウェルは、'Blackbird'のシーンはこの曲がレコーディングされた2日後(すなわち6月13日)に撮影したと語っている。

タイトルもないこのプロモーション用カラー・フィルムが上映されるのは、わずか3回だけだ。1回目は6月21日、キャピトル・レコードの幹部の前で内々に上映されたとき。2回目は

CamScannerでスキャン

同じ日の夜、ポールとブラムウェルが出席し、ロサンゼルスのセンチュリー・プラザ・ホテルで開かれるキャピトルの販売会議の席上で。3回目は8月26日、デレク・テイラーがEMIの販売会議で上映するときである。

一方、この日カリフォルニアでは、ジョージとラビ・シャンカールが再びビッグ・サーのロケ地で映画の撮影をした。ふたりが討論会に参加したり、断崖の上の芝地を歩きながら語り合うシーンが撮影された。

6月16日(日)

ストーンブリッジ・ハウス
Wycombe Rd, Wembley, Middlesex

この日、ポールはとくにアメリカ向けに制作されたテレビ番組の収録に参加した。しかし、アメリカ向けでありながら、イギリス人のテレビ司会者デビッド・フロスト、イギリス人ゲスト(フランキー・ハワード、ポール、メリー・ホプキン)、そしてイギリス人の観客を迎えてイギリスで収録されたものだった。撮影はロンドンの北側に接するウェンブリーにあるストーンブリッジ・パークにあるインターテル(VTRサービス)のスタジオで行なわれた。インターテルは以前ビートルズのプロモーション・フィルムの制作に関わった会社である(1968年12月10日、11日、1969年6月14日参照)。

当初6月2日に収録する予定だったこの番組は、じつはイギリスのタレントをアメリカに売り込むフロストの番組枠で、この日の収録分は、1969年2月23日午後6時から7時(EST)に「デビッド・フロスト・プレゼンツ…フランキー・ハワード」と題して放送される。舞台コメディアンで俳優のフランキー・ハワードは、映画"HELP!"に出演するはずだったが惜しいところでキャンセルになり、アメリカで広く紹介されたのはおそらくこのときが初めてのことだ。ポールはハワードから(あらかじめフロストが考えた)ユーモアに満ちた質問を受け、ファンがどれほどビートルズを信奉しているか、ポールのイメージはどうしてこんなに若々しいのか、そしてアップルのさまざまなプロジェクトなどについて語ったあと、話の流れからアップルの新人であるメリー・ホプキンを紹介した。そのあと、メリーはアコースティック・ギターで2曲歌った。

6月20日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ/第3スタジオ/第1スタジオ
London

午後7時から午前3時30分までのセッションが始まる1時間前に、ポールはアップルのビジネスのためロサンゼルスに出発したが、ポールの不在は当座の作業、つまり'Revolution 9'のマスター・バージョンの素材編集には支障をきたさなかった。

この日は熱の入ったセッションとなり、ジョンが3つの、つまりすべてのスタジオを独占し、無数のテープ・ループを再生したり録音したりという作業の指揮をとった。スタジオでは、2年前の'Tomorrow Never Knows'のセッションと同じように、誰かが鉛筆を使ってテープ・ループをテープ・マシーンに装着する光景があちこちで見られた。しかし、コンソールの前に座ってライブ・ミキシングを行ないながら、フェイド・インやフェイド・アウトの操作を行なっているのは今度はジェフ・エメリックではなく、ヨーコといつもぴったり寄り添っているジョンだった。

'Revolution 9'のなかでももっとも有名なサウンド・エフェクトと言ったら、「number nine, number nine, number nine」と執拗につぶやく、あの無表情な声だろう。これはEMIの保管室にあったロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックの試験テープからとった声だった。ジョンはこの声をエンドレス・テープに録音し、好きなときにマルチ・トラックにフェイド・インさせた。さらにこの日は、メロトロンと、ジョージとヨーコにも参加してもらって多数の話し声をオーバーダビングした。

こうして完成したマスター・レコーディングには、おそらく100種類にもおよぶエフェクト、テープ・ループ、オーバーダビングなどがかぶせられていて、制作されてからこれほどの歳月がたった現在でも、注意して聴くたびに今まで気づかなかった新しいサウンドを発見するほどである。

6月21日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から9時までのセッションで、'Revolution 1'にホーン・セクションをオーバーダビングし、リダクション・ミックスしてさらにリード・ギターを加え、この曲を完成させた。ホーンの参加者は、デレク・ワトキンス、フレディ・クレイトン(以上トランペット)、ドン・ラング(テレビ番組『6.5・スペシャル』での活躍で有名)、レックス・モリス、J・パワー、ビル・ポービー(以上トロンボーン)だった。

CamScannerでスキャン

午後10時から午前3時30分には、'Revolution 1'と'Revolution 9'のステレオ・ミックスが制作された。しかし、2曲とも6月25日に手が加えられる。ジョンは'Revolution 9'のミキシングがすっかり楽しくなってしまい、左右のバランスを極端にすることでそれぞれのチャンネルから鳴る音のイメージが違うようにしてみたり、何分の1秒間隔で「number nine」という言葉が左右に飛びかうようにミキシングを行なった。そのころポールは、ロサンゼルスで行なわれたキャピトル・レコードの販売会議で、今後、ビートルズのレコードはすべてアップルで制作されるが、販売は従来どおりEMIとキャピトルで行なうと発言。

ジョージ、ジャッキー・ロマックスをプロデュースする

6月25日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ／第3スタジオ
London

この日の午後2時から8時までのセッションでは'Revolution 1'の最終モノおよびステレオ・ミックスをして、'Revolution 9'のステレオ・マスターを編集し、1分ほど長さをカットした。この日、アメリカから帰国したばかりのポールは、やはりセッションには参加していない。ジョージはEMIスタジオにはいたが、このセッションには関わらなかった。じつはジョージは前日から第3スタジオでジャッキー・ロマックスの'Sour Milk Sea'のセッションにプロデューサーとして立ち合い、ギターも担当していたのだ(5月30日参照)。

6月26日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日はジョンの'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey'のリズム・トラックをリハーサルし、多数のテイク(テイク数不明)を午後7時から午前3時30分にかけてレコーディングした。しかし、翌6月27日にはこの日のテイクをすべてボツにし、新たにレコーディングし直す。

内部メモ　DATE 1968年6月26日　FROM ザ・ビートルズ
TO みんな　RE: 提案
よりイカしたサウンドをリリースするためのアップルの子レーベルの名称を考えてください。
今までにされている提案:
MAGIC EYE(去年の夏を彷彿させることだからあまりよくない)
I RECORDS(これもいまひとつ)
とにかく、全体像はわかりましたよね。だから、できるだけ多くのアイデアを考えて、提案箱に入れてください

INTERNAL MEMO

DATE　26TH JUNE 1968.
FROM　THE BEATLES
TO　EVERYONE
RE:　SUGGESTIONS.

TRY TO THINK OF SUGGESTIONS FOR A SUBSIDIARY LABEL FOR APPLE WHICH WOULD PUT OUT MORE FREAKY SOUNDS.

SUGGESTIONS SO FAR HAVE BEEN:

MAGIC EYE　(BUT THAT'S NO GOOD BECAUSE IT WAS LAST SUMMER).

I RECORDS　(THAT WASN'T GOOD ENOUGH EITHER).

ANYWAY, YOU GET THE PICTURE, SO THINK OF AS MANY IDEAS AS YOU CAN AND STICK THEM IN THE SUGGESTION BOX.

CamScannerでスキャン

6月27日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey'のリズム・トラックを7テイク録音した。この時点では、この曲にはまだタイトルがなく、この日のレコーディング・シートやテープ・ボックスには'Untitled(タイトル未定)'と記されていた。午後5時から午前3時45分までのセッションの最後に、テイク7をリダクション・ミックスしてテイク8とした。

6月28日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョン・レノンにはふたつの顔があった。ひとつは'Revolution'や'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey'などの激しいロック・ナンバーの作曲者としての顔、もうひとつは'Good Night'や'Julia'といったやさしいバラードの作曲者としての顔である。
'Good Night'は5歳になるジョンの息子ジュリアンのために書いた、ピュアでシンプルな子守歌で、午後7時から午前4時30分までのセッションでレコーディングした。ジョンは、最初からリード・ボーカルをリンゴにまかせることにしていて、リンゴのどこか憂いのあるもの悲しい声が、この曲のムードを完璧なものにした。
何度か練習したあと、ジョンのアコースティック・ギターとリンゴのボーカルを5テイク録音した。

6月30日(日)

エキシビジョン・ロード
Saltaire, Yorkshire

ブラッドフォードの北8キロほどのところにあるソルテアで、ブラック・ダイク・ミルズ・バンドによるアップル・レーベルのためのレコーディングにポールが立ち会った。曲はロンドン・ウイークエンド・テレビジョンのコメディ・シリーズのテーマ曲としてポールが書いた新曲'Thingumybob'と、'Yellow Submarine'の2曲。このとき、ポールはBBCのレポーター、トニー・クリフによるテレビ・インタビューの収録にも応じた。このインタビューはこの日の午前中、ビクトリア・ホールのあるエキシビジョン・ロードで、屋内、屋外の両方で撮影された。
4分22秒間にわたるこのインタビューは、翌7月1日午後5時55分から6時15分にかけて、BBC1のヨークシア州向けのニュース番組「ルック・ノース」で放送される。

7月1日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後5時から午前3時までの10時間にわたるセッションでは、'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey'にベースをかぶせたあと、2回リダクション・ミックスして、そこにジョンのリード・ボーカルをレコーディングした。
この日ジョンはロンドンで開いた初の個展「ユー・アー・ヒア」のオープニングで、オノ・ヨーコと交際中であることを公表したばかり。

7月2日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Good Night'にリンゴのリード・ボーカルとバック・ボーカルを新たにオーバーダビングし、テイク15まで録音した。セッションは午後6時から午前12時15分までで、最後にジョージ・マーティンはテイク15のコピーを2本作り、オーケストラとコーラスのアレンジを考えるために持ち帰った。
また、ポールはこの日、EMI会長のサー・ジョセフ・ロックウッドとロンドンの銀行マンたちとともにアップルの財政に関するミーティングを開く。

7月3日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ポールの'Ob-La-Di, Ob-La-Da'のレコーディングはやや難航した。この日から7月半ばまでのセッションは、ほとんどこの曲のオリジナル・バージョンと2回のリメイクとそれにオーバーダビングする作業に費やされる。この日は午後8時から午前3時15分までのセッションで、ポールとリンゴがリズム・トラックを7テイク録音し、まずテイク7にオーバーダビングしたのちに、考え直してテイク4にオーバーダビングを

CamScannerでスキャン

した。

7月4日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時15分までのセッションで、'Ob-La-Di, Ob-La-Da'のテイク4に、ポールのリード・ボーカルと、ジョンとジョージによる高音のバック・ハーモニーをオーバーダビングした。そのテイク4をリダクション・ミックスして新しくテイク5とし、ポールがさらにリード・ボーカルを加えた。

7月5日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後5時から午前1時30分までのセッションで、'Ob-La-Di, Ob-La-Da'に何度もオーバーダビングをした。午後6時から10時30分までは、3本のサックスとコンガを入れた(サックス奏者は、ジェイムズ・グレイ、レックス・モリス、シリル・ルーベン、コンガはジミー・スコット)。次に、午後10時30分から11時45分までに、ピッコロ(奏者不明)を加えた。しかし、ピッコロはやはり余計だったと判断したポールはすぐにこれをボツにし、その代わり午後11時45分から午前1時に新たにベースを録音した。最後の30分でラフなモノ・ミックスを作り、ポールが持ち帰った。

始めから録り直した'Ob-La-Di, Ob-La-Da'

7月8日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日'Ob-La-Di, Ob-La-Da'を録り直したことで、せっかく外部のミュージシャンを雇っていったん仕上げたレコーディングを全面的にボツにするという経験をビートルズは初めて味わった。午後5時から午前3時までのセッションで、この曲のニュー・バージョンのために、リズム・トラックを12テイクと、ジョンの印象的なピアノのイントロを録音した。さらに、テイク12をリダクション・ミキシングをしてテイク13とし、リード・ボーカル、バック・ボーカル、パーカッションをオーバーダビングした。最後にラフなモノ・ミックスを作り、ポールが持ち帰った。

7月9日(火)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ポールは前日の'Ob-La-Di, Ob-La-Da'のリメイクに、完全に満足しているわけではなかった。というのも、この日午後4時から9時までのセッションで、2回目のリメイクに乗り出したからだ。しかし、わずか2テイク録音しただけで、ポールはやはり前日のリメイク以上のものは望めないと判断した。そこで、午後10時から午前3時30分までのセッションの前半では、テイク13に新たなリード・ボーカル、バック・ボーカル、手拍子、ボーカル・パーカッションをオーバーダビングし、これをリダクション・ミックスしてテイク22とした。
セッション後半は'Revolution'のリハーサルにあてられた。ポールとジョージは、'Revolution 1'があまりアップビートではないことを案じて、次のシングルに入れることをためらっていた。そこでジョンは、雰囲気も(単語ひとつを除いて)歌詞も同じままで、スピードとパワーを増強したリメイクを作ることにした。この'Revolution'が次のシングルのB面に収録されるわけだが、ジョンが考えたとおりのすさまじいレコーディングとなって、'This Boy'と同様に、B面収録曲でありながらA面でも十分すぎるほど通用する曲に仕上がった。

7月10日(水)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

シングルのB面に収録される'Revolution'は、ビートルズのハードロック・ナンバーのなかでもとくにエキサイティングだが、この曲の大部分がこの日の午後7時から午前1時30分までのセッションでレコーディングされた。強烈なリズム・トラックを10テイク録音し、(テイク10をリダクション・ミックスした)テイク13にボーカルをオーバーダビングした。このテイク13を、さらにテイク14、テイク15にリダクション・ミックス。これらのラフなモノ・ミックスを持ち帰ったジョンは、テイク15をベストとして、これにさらにオーバーダビングをすることになる。

ニッキー・ホプキンスが参加

7月11日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後4時から午前3時45分まで、リダクション・ミックスとオーバーダビングに明け暮れるセッションとなった。'Revolution'にはエレクトリック・ピアノとベースが、'Ob-La-Di, Ob-La-Da'には3本のサックスとベースが加えられた。'Revolution'のすばらしいピアノは、名セッション・プレイヤーのニッキー・ホプキンスが、6ポンド10シリングの報酬で演奏したものである。また、'Ob-La-Di, Ob-La-Da'のサックス奏者のうちふたりは、レックス・モリスとロニー・スコットである可能性が高い(が、残りのひとりについては不明)。セッションの終わりに'Ob-La-Di, Ob-La-Da'のラフなモノ・ミックスを作った。

深夜からのセッション

7月12日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

7月22日にさらに多少の編集が加えられるが、'Don't Pass Me By'のレコーディングはこの日の午後3時から6時40分までのセッションでほぼ完了した。バイオリンに続いて、ベース、ピアノをオーバーダビングして、4種類のモノ・ミックスを作り、ベスト・リミックスをコピーしてリンゴが持ち帰った。この日呼ばれたバイオリン奏者はジャック・ファロン。1962年3月31日にストラウドでビートルズが初めてイギリス南部で行なったショーを手がけ、その後もスウィンドン、リドニー、ソールズベリーの公演にビートルズを呼んだプロモーターだった。

'Ob-La-Di, Ob-La-Da'の新しいモノ・ミックスを2種類作り、ベストをジョンとポールのためにコピーして、セッションは午後11時に終わった。

ビートルズのレコーディングが夜行性になっていたとはいえ、真夜中から改めてレコーディングを始めるのはさすがにめずらしいことだった。ところが、この夜は深夜12時から'Revolution'の最後のオーバーダビング・セッションが始まった。ジョンがリード・ギター、ポールがベースを新たに加え、これをモノ・ミックスした。そのベスト・ミックスのコピーをジョンとポールがそれぞれ午前4時に持ち帰った。

7月15日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

週末に'Ob-La-Di, Ob-La-Da'と'Revolution'のコピーを検討したジョンとポールは、2曲ともまだ改善の余地があると感じた。そこで、午後3時30分から8時までのセッションで、ジョンは'Revolution'の新たなモノ・ミックスを2種類作り、ポールは'Ob-La-Di, Ob-La-Da'にさらにリード・ボーカルを加えて、新しいモノ・ミックスを作った。

午後9時から午前3時までのセッションでは、'Cry Baby Cry'のリハーサルをして、30分テープ4本に番号なしの、つまり使うつもりのないテイクを多数録音した。

エメリックが仕事を降りる

7月16日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Cry Baby Cry'のレコーディングを集中的に行なう。午後4時から9時までのセッションで、10テイクを録音し、テイク10をリダクション・ミックスしてテイク12を作った。さらに、午後10時から午前2時までのセッションで、ジョージ・マーティンのハーモニウムとジョンのピアノをオーバーダビング。この日のセッションの途中で、これまでビートルズに忠実につくしてきたバランス・エンジニアのジェフ・エメリックが、ビートルズとの仕事をやめてしまった。日増しに険悪になり、緊張感が高まるグループの雰囲気に耐えられなくなったためだ。ビートルズ解散の経緯をたどっていくと、常に指摘されるのがこのアルバム"THE BEATLES"のセッションである。そして、これらのセッションは確かに危うい空気のなかで行なわれたのだ。

7月18日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

7月17日にはセッションがなかった。ビートルズの面々は、ロンドン・パビリオンで開かれた映画"YELLOW SUBMARINE"のプレミア・ショーとそれに続くパーティーに出席したからだ。1日あけてスタジオに戻ってきたメンバーは、'Cry Baby

CamScannerでスキャン

Cry'のレコーディングを再開した。午後2時30分から9時30分までのセッションで、ジョンの新たなリード・ボーカル、バック・ボーカル、新たなハーモニウム、タンバリン、サウンド・エフェクトをオーバーダビングし、この曲を完成させた。

午後10時30分から午前3時30分までは、ポールの'Helter Skelter'の長いリハーサル・バージョンを3テイク録音した。アルバムに収録されているのは9月9日からとりかかったリメイク・バージョンであるため、この日のバージョンはリリースされていない。テイク1は10分40秒、テイク2は12分35秒、テイク3は27分11秒もの長さで、ビートルズのレコーディングのなかではいちばん長い。どのテイクも、ドラム、ベース、リード・ギター、リズム・ギター、ポールのボーカルという構成でライブで録音され、長いインストゥルメンタルが続くが、タイトではっきりした演奏が繰り広げられるジャム・セッションだった。

マハリシへの皮肉

7月19日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョンの'Sexy Sadie'のオリジナル・タイトルは'Maharishi'だった。この曲の歌詞を吟味してみれば、ジョンが明らかにマハリシへの幻滅を歌い込んでいることがわかるが、問題が起きるのを避けるため、'Maharishi'を'Sexy Sadie'にすりかえたのである(しかも音節の数はどちらも4つである)。EMIでは、最初から'Sexy Sadie'というタイトルでレコーディングされており、5月末にイーシャーのジョージの家でデモ・テープを録音したときも、すでにこのタイトルだった(5月30日参照)。

午後7時30分から午前4時まで、まず何度もジャム・セッションをしてからリハーサル・テイクを21テイク録音した。なかには8分におよぶテイクもあった。しかし、もっと構成のしっかりしたバージョンが、7月24日からリメイクとしてレコーディングされることになる。

7月22日(月)

EMIスタジオ、第1スタジオ
London

この日はリンゴのボーカル曲2曲が完成した。リンゴ作の'Don't Pass Me By'とジョン作の'Good Night'である。ジョージ・マーティンが36ポンドの報酬でアレンジした豪華なオーケストラとコーラスに、26人ものミュージシャンが呼ばれていたので、広い第1スタジオでレコーディングされた。このオーケストラのために呼ばれたのは、バイオリン12名、ビオラ3名、チェロ3名、ハープ1名、フルート3名、クラリネット1名、ホルン1名、ビブラフォン1名、ストリング・ベース1名(各奏者の名前の記録はなくなっている)。さらに、ジョージ・マーティンがチェレスタとピアノを担当した。

'Good Night'はこれまで録音したテイクをすべて白紙に戻し、この日の午後7時から午前1時40分までのセッションで、最初から最後までまったく新しくレコーディングし直された。まずはオーケストラを12テイク録音し、次に午後10時30分から11時50分まで、マイク・サムズ・シンガーズがコーラスをオーバーダビングした。参加者は、イングリッド・トーマス、パット・ウィットモア、バル・ストックウェル、アイリーン・キング、ロス・ギルモア、マイク・レッドウェイ、ケン・バリー、フレッド・ルーカス。そして、午後11時50分から午前1時40分までは、サムズ・シンガーズの生のバック・コーラスとともにリンゴがリード・ボーカルを録音した。

'Don't Pass Me By'は、セッションの最初にピアノのイントロのみを追加して完成させる。編集用の4テイクを録音し、テイク4がベストとなった。

7月23日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時30分までのセッションで、'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey'を完成させる。完成とみなされていたベスト・テイクのテイク10を録音してから、22日がたっていた。ジョンが新たにリード・ボーカルを加え、リダクション・ミックスしてから、さらにバック・ボーカルと手拍子をオーバーダビングした。セッションの終わりに、この曲と'Good Night'のモノ・ミックスを作り、ジョンとリンゴがベスト・リミックスのコピーを持ち帰った。

7月24日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時30分までのセッションで、また'Sexy

CamScannerでスキャン

Sadie'を（テイク25から始めて）23テイク録音し、テイク47をベストとした。それでも、8月13日には2回目のリメイクが行なわれることになる。セッションの終わりに、ビートルズはサウンド・エフェクトをいくつか録音しているが、これにはタイトルがなく、その内容もレコーディング記録に残されていない。しかも、誰かが唯一のテープを持ち帰ってしまっている。

7月25日（木）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

5月30日にアルバム"THE BEATLES"のレコーディング・セッションを開始してから、ジョージは自分の曲がとりあげられるのを辛抱強く待っていた。そして、2か月近くたったこの日、2枚組アルバムに収録されるジョージの4曲のうちの1曲目'While My Guitar Gently Weeps'のレコーディングをようやく始めた。
この日は完全なテイクを録音するというよりはリハーサルに終始し、ジョージは録音した2本のテープを自宅で吟味するため持ち帰った。しかし、午後7時から午前3時15分までのセッションの間に、ジョージは1回だけ正式テイクを作った。ソロ・ボーカルとアコースティック・ギターだけの驚くほどシンプルなものだ。歌詞には、アルバム・バージョンにない、締めくくりとなる最終節も含まれ、エンディングではこのテイクで唯一ギター以外の楽器であるオルガンがオーバーダビングされている。

掟破りのシングル'Hey Jude'

7月29日（月）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

7月26日はセッションがなかった。というのも、ジョンがポールの自宅に行って、'Hey Jude'の仕上げを手伝っていたからだ。しかし、この曲はアルバム"THE BEATLES"収録用ではなく、3月以来となるニュー・シングルのために書かれたものだ。
ビートルズはこれまで、音楽業界における常識やふつうなら限界と考えられてきたことに尻込みするどころか、ことあるごとに平然と覆してきたが、このシングルもまたそのひとつだった。当時、ポップ・レコードのシングル曲は長くても3分までというのがひとつの掟だった。1963年ごろまでは、2分以内の曲がほとんどだった。この壁を最初に破ったのは、リチャード・ハリスの'MacArthur Park'（1968年）である。そして、すぐにビートルズはそれに続いて'Hey Jude'で7分11秒という前代未聞の長いシングル曲をリリースし、シングルに適した長さなどという決まりを粉砕してしまった（当時12インチ・シングルが存在していれば、'Hey Jude'はおそらく通常の3分の曲となり、フル・バージョンは12インチ盤としてリリースされたに違いない）。
この日、ジョージ・マーティンは不在だったため、コントロール・ルームを仕切ったのは、ビートルズの新しいバランス・エンジニアとなったケン・スコットだった。午後8時30分から午前4時までのセッションで、ボーカルとピアノ（ポール）、アコースティック・ギター（ジョン）、エレキ・ギター（ジョージ）、ドラム（リンゴ）という編成で'Hey Jude'をリハーサルし、6テイク録音した。

映画"MUSIC!"の撮影に協力

7月30日（火）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後7時30分から午前3時30分までのセッションで、前日に続き'Hey Jude'のリハーサルとレコーディングをした。テイク23までを録音し、リダクション・ミックスしてテイク25を作った。しかし、ビートルズはまだこの日のうちに完全なテイクを作ってしまおうとは考えていなかった。というのは、'Hey Jude'のレコーディングのために翌日から数日間トライデント・スタジオを予約しており、8月1日にはそこに大編成のオーケストラを呼ぶことにもなっていたからだ（ジョージ・マーティンはオーケストラ用のスコアを書くため、セッションの最後に出来たテイク25のラフなステレオ・ミックスを作り、持ち帰った）。
じつは、このセッションでレコーディングを完成させる代わりに、ビートルズはナショナル・ミュージック・カウンシル・オブ・グレート・ブリテン（全英音楽協議会）との約束をはたすことにした。ジェイムズ・アーチボールドのプロデュースによる、イギリスの音楽のさまざまな形を追ったドキュメンタリー映画用に、ビートルズのセッション風景を撮影したいという依頼を許可したのだ。"MUSIC!"というこのカラー映画には、この日のセッション中に数時間にわたって撮影されたフィ

CamScannerでスキャン

ムから抜粋された、2分32秒と3分5秒のふたつの興味深いシーンが含まれている(といっても使用された映像はほとんどテイク9のものだが)。ビートルズが演奏の準備をしたり、話し合ったり、リハーサルをしている様子などを観ることができる。映画の最後にも、少しだがビートルズの映像が出てくる。しかし、このセッションでは、ピアノ、ドラム、アコースティック・ギターを録音したため、ジョージは何もする必要がなかった。そのため"MUSIC!"のなかでは、第2スタジオのコントロール・ルームでジョージ・マーティンとバランス・エンジニアのケン・スコットとの間に座っているジョージの姿が映っているのだ。

"MUSIC!"は、イギリスでは1969年10月にメル・ブルックスの"THE PRODUCERS"と同時上映で公開される。アメリカでは劇場公開はされず、1970年2月22日の午後4時30分から6時(EST)に、アリステア・クック司会のシリーズ番組「NBCエクスペリメント・イン・テレビジョン」で放送される。

トライデント・スタジオで初めて8トラックの機材を使う

7月31日(水)

トライデント・スタジオ
St Anne's Court, off Dean Street / Wardour St, London

ビートルズがトライデント・スタジオの存在を知ったのは、アップルの契約アーティストたちとの作業を通じてだった。そして、このスタジオの8トラック・テープの設備に食指をそそられたビートルズは自らこの日、初めてここに乗り込んでみたというわけだ。EMIではまだ4トラックを使っていたが、じつは8トラックの設備を持っていないわけではなかった。ただ、まだスタジオにきちんと導入していなかったので、ビートルズもその事実を知らなかったのだ。

午後2時から午前4時までの14時間におよぶセッションで、ジョージ・マーティンは、トライデントのスタジオ・バランス・エンジニアであり共同経営者でもあるバリー・シェフィールドに手伝ってもらいながら、8トラックをむだなく使ってレコーディングをプロデュースした。ビートルズは'Hey Jude'を録り直し、ベーシック・リズム・トラックを4テイク録音したが、結局テイク1がベストとなった。

またこの日、不成功に終わったアップル・ブティックを閉鎖。残った商品を無料で処分する。最後に残ったのは裸のマネキンで、そこには「ジョン・レノン宛」の貼り紙があった。

8月1日(木)

トライデント・スタジオ
London

トライデント・スタジオで午後5時から午前3時までのセッション。5時から8時までは、ポールが'Hey Jude'のベースとリード・ボーカルを、ほかの3人がバック・ボーカルをオーバーダビングした。続いて8時から11時までは、36人編成のオーケストラを使って、ジョージ・マーティンのアレンジ(報酬は25ポンド)でオーバーダビングが行なわれた。このオーケストラは、バイオリン10名、ビオラ3名、チェロ3名、フルート2名、コントラバスーン2名、バスーン1名、クラリネット2名、コントラバス・クラリネット1名、トランペット4名、トロンボーン4名、ホルン2名、ティンパニー1名、ストリング・ベース2名という豪華な編成だった。奏者の名前はスタジオの記録から消されてしまったが、チェロ奏者のひとりがボビー・コックで、'Lady Madonna'でテナー・サックスを吹いたビル・ジャックマンがフルートを担当したことだけがわかっている。

また、オーケストラのミュージシャンたちは、最後のリフレインの部分を力強く盛り上げるために、手拍子と「nah, nah nah nah nah nah, nah nah nah nah, Hey Jude」というバック・ボーカルにも参加するように依頼された。ほとんどのミュージシャンは喜んで応じたが、ひとりだけ「ポール・マッカートニーのくだらない歌のために手拍子したり歌ったり、やってられるか!」と言って出ていってしまったという話である。

8月2日(金)

トライデント・スタジオ
London

午後2時から11時30分までのセッションで、'Hey Jude'にさらにオーバーダビングを加えて完成させた。そのあとステレオ・ミックスを作り、午前1時30分にセッションを終えた。

CamScannerでスキャン

8月6日(火)
トライデント・スタジオ
London
レボリューション
Bruton Place, London

午後5時30分から7時30分までトライデント・スタジオで行なわれたセッションでは、'Hey Jude'のモノ・ミックスを、オリジナルの8トラック・テープからではなく、なぜかステレオ・ミックスのベスト・リミックスから起こして作った。8月7日と8日にはEMIに戻って通常の方法でリミックスされる。
トライデント・スタジオで仕事をしたあと(といっても、ジョンがこの日トライデントに行っていればの話だが)、ジョンはメイフェアにあるディスコ、レボリューションで行なわれたファッション・ショーに出かけた。そこで、ジョンはパティ・ハリスンとファッション雑誌編集者のスージー・メンクスとともに、BBCラジオのフリー・レポーター、マシュー・ロビンソンからインタビューを受けた。この取材テープは大急ぎでBBCに持ち帰られ、この日の午後10時から午前12時のラジオ1およびラジオ2の番組「レイト・ナイト・エクストラ」で放送された。

100テイクを超えた'Not Guilty'

8月7日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アビイ・ロードに戻ったビートルズは、この日、内容がまったく違う2回のセッションをした。資料によれば、午後3時から7時45分までのセッションで、トライデント・スタジオで作った'Hey Jude'のテープ・コピーを作成したとなっている(が、テープ・コピーにこんなに時間がかかるはずはない)。午後8時45分から午前5時30分までのセッションでは、ジョージの'Not Guilty'のレコーディングを開始した。この曲のレコーディングはかなり長丁場なものとなり、ビートルズの曲では初めてリハーサルとテイク数が100回を超えてしまうが、結局リリースされずに終わる。ただ、すべてが完全なテイクだというわけではない。この日のセッションではリズム・トラックを46テイク録音しているが、最後まで演奏しているのはそのうちの5テイクのみである。

8月8日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後6時40分から午前6時30分までのセッションでは、最初に'Hey Jude'のモノ・ミックスを作った。セッションが終わると、ジョージ・マーティンがこのミックスと'Revolution'のモノ・マスターを持って帰った。A面に'Hey Jude'を、B面に'Revolution'を収録したこのシングルは、イギリスでは8月30日に、アップル・レコードから初めてリリースされるビートルズのシングルである。このシングルは世界中で800万枚以上ものセールスを誇ることになる。
この日の12時間にわたるセッションの大半を占めたのは'Not Guilty'のレコーディングで、テイク101にまでいたった。ベストとなったのはテイク99だった。

8月9日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時30分から午前2時までのセッションでは、最初に'Not Guilty'のテイク99をリダクション・ミックスしてテイク102を作った。それから、オーバーダビングを始めるが、この日のセッションで加えたのは、セカンド・ドラム、セカンド・リード・ギター、セカンド・ベースだった。8月12日にさらにオーバーダビングされることになる。
ほかの面々が帰ったあと、ポールはひとりでスタジオに残り、新曲のアコースティック・バラード'Mother Nature's Son'をレコーディングした。のちにホーン・セクションがオーバーダビングされるが、この曲は、すでに録音した'Blackbird'や2枚組アルバムに収録されるもう1曲(8月20日を参照)と同様、ビートルズのほかのメンバーの演奏は想定していない作品だった。この晩ポールは25テイクを録音、テイク24をオーバーダビング用のベスト・テイクとした。

8月12日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Not Guilty'のテイク102への最後のオーバーダビングは、ジョージのリード・ボーカルだった。しかも、ジョージはスタジオ内ではなくスタジオのコントロール・ルームで歌うとい

CamScannerでスキャン

う妙な手法をとった(これに触発されたジョンは、次のビートルズのセッションを第2スタジオのコントロール・ルームの隣の小さな別室で行なうという、さらなる妙案を思いついた)。

ジョージがオーバーダビングしたあと、'Not Guilty' のモノ・ミックスが作られ、午後7時から午前4時15分までのセッションが終わった。そして、マル・エバンズがアセテート盤をカッティングするためにこのテープを持ち帰った。'Not Guilty' はアルバム "THE BEATLES" には収録されないが、ジョージが1978年にこの曲を再度レコーディングして、1979年のソロ・アルバムに収録した。ビートルズのバージョンは1996年の "ANTHOLOGY 3" で発表される。

8月13日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ／別室
London

午後7時から午前5時まで、第2スタジオのコントロール・ルームの隣の小さな別室で、ジョン・レノンの曲を2曲レコーディングした。最初は 'Sexy Sadie' の2回目のリメイク。(テイク100から始めて)テイク107がベスト・リズム・トラックとなり、4回リダクション・ミックスして、テイク111まで作った。

2曲目は 'Yer Blues' だった。リズム・トラックを14テイク録音したあと、テイク6をリダクション・ミックスしてテイク15とし、テイク14の一部をリダクション・ミックスしてテイク17とした。続いて、4トラック・テープそのものを編集するという、ビートルズのセッションでは初めての試みをした(それまで編集は常に1/4インチの2トラック・テープまでいった段階でやっていた)。この作業では、テイク17の冒頭部分をテイク16の終わりにつなげた。このつなぎ目はレコードではっきりとわかる。曲の冒頭から3分17秒のところにあり、以後はフェイドアウトまで同じテープである。

未発表曲
'What's The New Mary Jane'
8月14日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前4時30分までのセッションでは、まずはジョンが 'Yer Blues' にセカンド・リード・ボーカルをオーバーダビングし、(8月20日に録音される短い編集テープを加えるのは別として)この曲をおおかたのところ完成させ、モノ・ミックスを作った。

このころには、ジョンの音楽的なアイデアや発想にはヨーコの影響が明らかに現れてきていた。すでに録音を終え、リリースを間近に控えていたアルバム "TWO VIRGINS" は別にして、たとえば 'Revolution 9' はかなり以前から自宅では取り組んでいたのに、ヨーコの力添えがあってようやく世に出す決心がついたという作品の典型だった。そして、ヨーコも参加したこの日のセッションで、ジョンは奇妙な新曲 'What's The New Mary Jane' のレコーディングを開始した。のちにジョンはこの曲はアレクシス・マーダスと一緒に書いたと言っているが、クレジットはレノン＝マッカートニーとなっている。この風変わりな「曲」は、"THE BEATLES" に収録される予定だったが、ぎりぎりのところではずされ、今も未発表のままだ。とはいえ、ジョンは再びこの曲のリリースを試みてはいる(1969年9月11日、11月26日参照)。

'What's The New Mary Jane' のレコーディングで演奏したのはジョンとジョージだけで、歌っているのはジョンのみ。しかし、この日のセッションで録音した4テイクには、ヨーコとマル・エバンズも参加した。記録ではテイク4がベストとなり、モノ・ミックスが作られている。ジョンはこのテープと 'Yer Blues' のベスト・ミックスを持ち帰った。

8月15日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時までのセッションで、ポールの新曲 'Rocky Raccoon' をレコーディングした。ジョージはコントロール・ルームに残り、ほかの3人でベーシック・トラックを9テイク録音した。これをリダクション・ミックスしてテイク10とし、そこにジョンがハーモニカ、ジョージ・マーティンが酒場の伴奏ふうのピアノ・ソロをオーバーダビングした。さらに、ジョンとポール、そしてコントロール・ルームから降りてきたジョージがバック・ボーカルを加えた。このあと、ジョンとポールはセッションの最後に作ったこの曲のラフなモノ・ミックスのコピーを持ち帰り、ジョージとリンゴは前日の夜に作った 'Yer Blues' のミックスのコピーを持ち帰った。

CamScannerでスキャン

8月16日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日のセッションでは、ジョージの'While My Guitar Gently Weeps'の作業に戻ったが、エレクトリック・バージョンにしたため、7月25日に録音した落ち着いたアコースティックふうのテイク1とはかなり趣の違うものになった。午後7時から午前5時までかけて、リズム・トラックを14テイク録音し、テイク14をリダクション・ミックスして、オーバーダビング用のテイク15を作った。

ジョージはギリシャ旅行へ 残りのメンバーも別々にセッション

8月20日(火)
EMIスタジオ、第3スタジオ／第2スタジオ
London

ジョージが突然、8月17日から21日までギリシャに行くことを決めたため、19日のセッションはキャンセルになった。しかし、この日はジョージなしでふたつのセッションが進められた。午後5時から5時30分までは、ジョンとリンゴが第3スタジオで、'Yer Blues'のためにリンゴの「two, three...」というカウントを録音し、これをベスト・モノ・ミックスに編集して、この曲の最終マスターを完成させた。それからふたりは、ケン・スコットが'Revolution 9'のベスト・ステレオ・ミックスのコピーからのモノ・マスターを作るのを見学した(ジョージ・マーティンは不在だった)。
次のセッションは午後8時から午前4時まで第2スタジオで、ポールひとりで行なった。最初の作業は'Mother Nature's Son'のオーバーダビングを完成させることだった。ティンパニー、セカンド・アコースティック・ギター、ドラム(音質を変えるために廊下に設置した)、さらに25ポンドという割引料金でジョージ・マーティンにアレンジしてもらったトランペット2本とトロンボーン2本をオーバーダビングし、この曲を完成させた(トロンボーンとトランペットの奏者の名前はもう記録に残っていない)。
バランス・エンジニアのケン・スコットは、ビートルズの仲があまりうまくいっていなかったという重苦しい記憶を、次のように回想している。'Mother Nature's Son'のホーン・セクションのオーバーダビング作業はとてもなごやかな雰囲気で進んでいたが、ジョンとリンゴがスタジオに入ってきたとたん、その場は張りつめた雰囲気になってしまった。しかし、ふたりが出ていくと、その緊張感はすっと消えてしまった、というのだ。
そんな調子だったので、この夜ポールがレコーディングした2曲にも、ジョンとリンゴは参加していない。1曲目は'Etcetera'という曲のデモだが、1本しかないこのテープは持ち帰られたまま、その後誰も聴いたことがない。もう1曲は53秒の短い曲'Wild Honey Pie'で、これは"THE BEATLES"に収録された。ベーシック・トラックを1テイクだけ録音し、これにポールがひとりでオーバーダビング(ボーカル、ギター、バス・ドラム)をした。思いついたままにという趣向の作品で、モノ・マスターは仕上げを待つばかりとなった。

8月21日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時30分から午前7時15分までの長時間にわたるセッションで、'Sexy Sadie'に2回のリダクション・ミックスとオーバーダビングをして完成させた。ジョンの新たなリード・ボーカル、オルガン、ベース、バック・ボーカルを2種類、そしてタンバリンを加えた。ジョージがギリシャから帰国したのはこの日の早い時間だったが、夜のセッションに参加したかどうかは定かでない。セッションの最後に、'Sexy Sadie'のモノ・ミックスを作った。

バンドを抜けたリンゴ

8月22日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズのメンバー間のテンションがあまりにも悪くなり、この日のセッションが始まったとき、リンゴはとうとうビートルズをやめてしまった。このことは、内々で知っていた人たちの誰もがかたく口止めされたため、マスコミまで届かなかった。
しかし、リンゴが今後どうするか考えるために国外を旅している間も、セッションは続けられた。ドラマー不在の最初のセッションとなったこの日、3人はポールの'Back In The U.S.S.R.'のレコーディングを開始した。ドラム(ポール)、リード・ギター(ジョージ)、ベース(ジョン)という編成で、ベ

CamScannerでスキャン

ーシック・リズム・トラックを5テイク録音した。
注:理由は不明だが、午後7時から午前4時45分までのセッションが終わると、'Baby You're A Rich Man'のモノ・マスターのコピーが作られ、ジョージ・マーティンがそれを持ち帰った。

8月23日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

意外なことに、リンゴがいなくなってからも3人のビートルズは能率よくレコーディングを進め、午後7時から午前3時までのこの日のセッションで'Back In The U.S.S.R.'を完成させた。
オーバーダビングのあと、リダクション・ミックスして、さらにオーバーダビングを加えた最終マルチ・トラックには次の楽器が加えられていた。まず、ドラムがもう2セット(ジョンとジョージ)、ベースがもう2本(ポールとジョージ)、リード・ギターがもう2本(ジョンとポール)、リード・ボーカルとピアノ(ポール)、ビーチ・ボーイズふうの手の込んだバック・ボーカル(ジョンとジョージ)、それと手拍子である。さらにモノ・ミキシングを行なったあとで仕上げに飛行機の離着陸音も加えられた。この音響効果は曲の冒頭、途中の数か所と、最後にかぶせられている。このサウンドは、アビイ・ロードの音響効果コレクション「第17巻:ジェットとピストン・エンジンの飛行機」から抜粋したもの。
また、'Back In The U.S.S.R.' 'Rocky Raccoon' 'Wild Honey Pie' 'Mother Nature's Son' 'Sexy Sadie'のミックス・コピーを4セット作り、すべてマル・エバンズが持ち帰った。

ジョンとヨーコがテレビ出演 アートについて語る

8月24日(土)
ウェンブリー・スタジオ、第1スタジオ
Wembley

この日ジョンとヨーコは、デビッド・フロストの最新テレビ・シリーズ「フロスト・オン・サタデイ」の第4回に出演した。このフロストとのかなり異色のインタビューで、多くのイギリスの視聴者の前で、ふたりは自分たちの真の姿を思いきりさらけ出したと言ってもよかった。このインタビューは午後6時45分から7時30分にかけて、新しいITV系列局ロンドン・ウイークエンド・テレビ(LWT)のウェンブリー・スタジオから全国に生放送された(番組には、歌手のブロッサム・ディアリーと風刺家のスタン・フレバーグもゲスト出演した)。会話のなかにビートルズという言葉はほとんど出てこなかった。ジョンとヨーコは、フロストと視聴者に「バイブレーション」やアートの表現形態について説明するつもりで出演していたからだ。そのため、ふたりの展覧会に出品していた典型的な作品を具体例にしながら、自分たちの考えを説明した。フロストはジョンとヨーコの話に理解を見せたり、そうでなかったりしながらも、非常に用心深く受け答えしたので、ふたりはますます熱心に話に興じ、議論のボルテージもかなりあがった。このインタビューはその斬新さが好評だったため、1969年5月18日の午後11時20分から午前12時5分、LWTのハイライト番組「ザ・ベスト・オブ・フロスト」で一部の地域でのみ再放送される。
注:この放送時期と前後して、ロンドン地区のITV系列局は大々的な改編を経験していた。平日の番組制作は、経営が思わしくなくなったレディフュージョンがテレビ制作から足を洗ったため、新会社テムズの手に渡り、その一方で週末の番組制作は、ATVから新会社のLWTに移された(しかし、ATVはテレビから手を引いたわけではなく、ミッドランド地区で週を通しての番組放送を続けた)。さらに放送局改編の被害を受けたのは、「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」「ビッグ・ナイト・アウト」「ブラックプール・ナイト・アウト」を制作していたABCテレビで、テムズに合併吸収されてしまった。改編当初、テムズとLWTは自ら業務を引き継いだ制作会社のスタジオを使用していた。テムズは1968年7月30日に、ロンドン中心部にあるレディフュージョンのテレビジョン・ハウスとABCのテディントン・スタジオから、そしてLWTは8月2日にウェンブリー・スタジオから放送を開始した。

8月26日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

リンゴがいないため、これまでおざなりになっていた作業を仕上げることにした。午後4時から5時まで第2スタジオでは、ケン・スコットがステレオ・マスターから調節コピーして'Revolution 9'のさらによいモノ・マスターを作った。翌

日の27日には、同じくケン・スコットが、'Ob-La-Di, Ob-La-Da' 'Blackbird' 'Not Guilty' (以上モノ)、'Revolution 9' (ステレオ)のテープ・コピーを作った。
この日アップル・レコードから最初のシングル4枚(ビートルズの'Hey Jude'、メリー・ホプキンの'Those Were The Days'ほか)が発売。

8月28日(水)
トライデント・スタジオ
London

トライデント・スタジオでセッションを再開したが、まだリンゴはいないままだった。この日の午後5時から午前7時までのセッションでは、ジョンの'Dear Prudence'のレコーディングが始まった。8トラックを駆使して(ジョージとジョンの)ギターと(ポールの)ドラムでベーシック・トラックを1テイクで録音し、楽器をひとつずつ重ねていった。
注目すべきなのは、EMIが、内心は不満もあっただろうが、それでもビートルズの出費に関して寛大だったことだ。アビイ・ロードでセッションをすれば、EMIの内部支出で済むところを、トライデント・スタジオを使用すると、スタジオ賃貸料、エンジニアの超過時間報酬、生テープ代などを合わせて、1回のセッションに431ポンドも支払わなければならなかった。

8月29日(木)
トライデント・スタジオ
London

午後7時から午前6時までのセッションで'Dear Prudence'に、ポールのベース、ジョンの重ね録りしたダブル・トラックのリード・ボーカル、そして、ポール、ジョージ、マル・エバンズ、ジャッキー・ロマックス、ポールのいとこのジョン・マッカートニーによるバック・ボーカルと手拍子とタンバリン、ポールのピアノとフリューゲルホルンをオーバーダビングした。

8月30日(金)
トライデント・スタジオ
London

シングル'Hey Jude'がリリースされたこの日、トライデント・スタジオでは、午後5時から11時までのセッションで、'Dear Prudence'のモノおよびステレオ・ミックスが作られた(ただし、アルバム収録用の最終リミックスはEMIで行なわれる)。

リンゴ復帰
アビイ・ロードで8トラックを試す

9月3日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

マル・エバンズが花をいっぱい飾ったリンゴのドラム・セットに、この日、リンゴが帰還した。しかし、皮肉なことに、この日はリンゴの出番はなかった。そして、リンゴがやっと戻ってきたものの、今度はジョージ・マーティンが休暇をとってしまい、10月1日まで戻らない予定だった。この夜、マーティンの代わりにコントロール・ルームに入ったのはケン・スコット。
その一方で、トライデント・スタジオでのレコーディングですっかり8トラックが気に入ってしまったビートルズは、すべてのレコーディングを8トラックでやりたいと言い出していた。そして、じつはEMIも3M社の8トラック・レコーダーを持っているのだが、それはまだ専門技術者のフランシス・トンプソンのところにあると聞きつけると、ビートルズはぜひこれを「解放」しなければと決心した。その結果、テクニカル・エンジニアのデイブ・ハリーズがその"泥棒役"を引き受けたが、ビートルズはおとがめなしで済んだものの、ハリーズにいたっては危うくクビが飛ぶところだった。
午後7時から午前3時30分までのセッションで、まずジョージがひとりでこの新しい機材に挑戦した。すでにあった4トラック・テープをコピーして8トラック用の新しいテープを作り、そのトラック5に骨の折れる逆弾きのギター・ソロを録音した(訳注:作品は'While My Guitar Gently Weeps')。
セッションが終わる午前3時30分ごろ、'Revolution'のベーシック・トラック(テイク16)からテープ・コピーを作った。数時間後に始まるトゥイッケナムでのプロモーション・ビデオの撮影のためだった。このテープに新しいボーカル・トラックを追加すれば、ミュージシャンズ・ユニオンの口パク禁止令にひっかからなくて済むからだ。

CamScannerでスキャン

'Hey Jude'と'Revolution'のプロモーション・クリップを撮影

9月4日(水)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

ニュー・シングル'Hey Jude/Revolution'のプロモーション・クリップを撮影するため、ビートルズは午後1時30分にトゥイッケナム・スタジオに入り、午後から夜にかけて、3日がかりでセッティングされた第1ステージで撮影を行なった。監督は'Paperback Writer'と'Rain'のクリップ撮影で(1966年5月19日、20日参照)ビートルズと仕事をしたマイケル・リンゼイ=ホッグ。ビートルズがプロモーション・クリップの撮影に名の知られた監督を起用するのは、1967年2月以来のことだ。

この日は1曲につき2本ずつ、計4本のカラー・ビデオを撮影した。最初は'Hey Jude'から撮影。ポールがアップライト・ピアノの前に座り、ジョンとジョージがその隣の台座に座ってギターを弾き、リンゴは3人の背後にあるドラム・セットに座った。

さらに、全員白いタキシードでそろえた36人編成のオーケストラと、20人の学生にビラを配らせて集めたコーラス隊がいた。ティーンエイジャーから年金生活者までや、さらにEMIスタジオの前にたむろしていたところマル・エバンズに招待されたファンなど300人のエキストラからなるコーラス隊は、長いリフレインを歌うために集められたのだ。

'Hey Jude'は少なくとも3回撮影されている。よく見られるバージョンは、テイク1の前半とテイク3の後半を編集したものだ。これらのテイクは、カメラの位置も動きもほとんど同じだが、はっきりと違いがわかる。3テイクとも、ポールはまずメインの歌の部分をすでにレコーディングされた自分のボーカルの上に生のボーカルを重ね、リフレインの部分は完全にライブで歌った(オーケストラやギター・アンプは撮影用の見せかけで、ライブで収録されたのはボーカルだけだが、口パクを禁止するミュージシャンズ・ユニオンを納得させるのには十分だった)。

'Revolution'の2種のクリップはほとんど同じだが、ライティングが多少違う。このビデオはかなり熱の入った内容に仕上がっていて、ビートルズはギター3本とドラムといういつものスタイルで、録音済みのバッキング・トラックに新しいボーカルを加えた。ここでは、シングルB面バージョンのアップビートの演奏に、ホワイト・アルバム収録のスロー・バージョン('Revolution 1')の歌詞をのせている。

'Hey Jude'の映像を世界初公開するのは、9月8日午後9時から10時にかけて(白黒で)放送されるLWTのシリーズ番組「フロスト・オン・サンデイ」の第6回だ。あたかもビートルズがこの番組に独占的に出演したように見せるため、デビッド・フロストはこの日トゥイッケナムを訪れ、'Hey Jude'のセットの前でビートルズを紹介するシーンまで撮影した。最初にフロストの番組テーマ曲(ジョージ・マーティン作曲の'By George! It's The David Frost Theme')が手っ取り早く演奏されたあと、フロストがカメラに向かって話しかける。「すばらしい! 完璧な演奏でしたね! さて、みなさん、この次は世界最高の室内オーケストラをお目にかけましょう。観客の前での演奏はいつ以来のことになるのでしょうか。とにかく、ビートルズです!」(とはいうものの、もちろん観客などいなかった)。ここで、ビートルズは余興でエルビス・プレスリーの'It's Now Or Never'のパロディも演奏したが、これは番組では放送されない。'Hey Jude'のリフレインが延々と続くよう編集されたからだ。

このほかに'Hey Jude'を放送したのはすべてBBCだった(やはり白黒)。9月12日と26日午後7時30分から8時のBBC1の番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」、12月26日午後6時35分から7時15分の「トップ・オブ・ザ・ポップス'68―パート2」でも放送される。'Revolution'のプロモーション・クリップは、イギリスでは9月19日午後7時30分から8時の「トップ・オブ・ザ・ポップス」で1回放送されるだけだ。

アメリカでは、CBSの番組「ザ・スマザース・ブラザーズ・コメディ・アワー」で2週にわたって2曲を放送する。'Hey Jude'は10月6日午後9時から10時(EST)、'Revolution'は10月13日午後9時から9時55分(EST)の同番組で放送される。

じつは、演奏風景を中心に構成するというという'Hey Jude'のプロモーション・クリップは、('Hello Goodbye'のクリップや"MAGICAL MYSTERY TOUR"でもビートルズと一緒に仕事をした)映画編集者のロイ・ベンソンが38シーンもの構成台本を書いたものだった。当初はビートルズもベンソンの企画に積極的に関わるつもりだったが、撮影だけで3日もかかると知ると、別の方法を考えることにした。代案として、トゥイッケナムでビデオ撮影をすることにした。

決まったのは、8月29日の夜になってからのことだった。
このころ、実現されなかった企画がもうひとつあった。アップル・コープスがITVテレビから、11月17日の(夜のニュース番組の直後の)午後9時20分ごろのコマーシャル時間枠を90秒間買い、アルバム"THE BEATLES"発売のCMを流すという話だ。CMでは、音楽の一部を紹介しながら、ポールかリンゴのいずれかが出演するはずだったが、台本まで出来あがった最終段階になってお流れになる。アルバムのテレビCMは今ではよく行なわれていることだが、ビートルズがこれを実現していれば、その先端を行く試みとなったことだろう。

9月5日(木)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時45分までのセッションの前半は、'While My Guitar Gently Weeps'のテイク16に、ジョージが2種類の異なるリード・ボーカルと新たなリード・ギターを、リンゴがマラカスとドラムをオーバーダビングする作業に費やされた。しかし、聴き直してみると、ジョージはまったく満足できず、リメイクすることにした。そこでドラム(リンゴ)、アコースティック・ギターとガイド・ボーカル(ジョージ)、リード・ギター(ジョン)、ピアノまたはオルガン(ポール)という編成で、テイク17からテイク44までのベーシック・トラックを録音した。セッションの最後に聴き返した結果、テイク25がベストとなり、これにオーバーダビングを加えることにした。
この夜も、コントロール・ルームを仕切ったのは、バランス・エンジニアのケン・スコットだった。

エリック・クラプトンがギターで参加

9月6日(金)
アップル・コープス
Savile Row, London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日サビル・ロウにあるアップル本社で、テムズ・テレビがメリー・ホプキンのフィルムを撮影。ポールもこれに少しだけ参加し、メリーのバックでピアノを演奏した。ほかの(ポールなしの)撮影はだいたい午前11時から午後4時30分の間に、アップル本社とロケ地で行なわれた。
ポールの出演場面は3分45秒に編集され、9月10日午後5時10分から5時50分のテムズ・テレビの新しい子ども番組「マグパイ」のなかの6分にわたるメリー・ホプキン特集として、ITV系列局全局で放送される。番組では、3人のレギュラー司会者のひとりであるピート・ブレイディが総合司会を務めた(また、メリーはフィルム放送直後にテディントンの第3スタジオでこの番組に生出演する)。
ビートルズのスタジオ・レコーディングで外部ミュージシャンが参加したもっとも有名な作品となれば、それはエリック・クラプトンが参加した'While My Guitar Gently Weeps'である。この日、EMIでは午後7時から午前2時までのセッションで多数のオーバーダビングが行なわれた。そのひとつが、クラプトンがレスポールで弾いたすばらしいギター・ソロだ。'While My Guitar Gently Weeps'はこのギター・ソロで完成した。この曲にはほかに、ポールがファズ・ベース、ジョージが高音のオルガン、リンゴがパーカッションを加え、最後にジョージがリード・ボーカルをオーバーダビングし、ポールがハーモニーを加えた。コントロール・ルームにいたのは、やはりケン・スコットのみ。

ジョージ・マーティンが長期休暇へ クリス・トーマスが代役に

9月9日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アルバム"THE BEATLES"のセッションには、ジョージ・マーティンのアシスタント募集で採用されたクリス・トーマスがよく顔を出していた。21歳のクリスは、雑用をこなしながら、いつか一流のプロデューサーになることを夢見て、マーティンの仕事ぶりを観察していた(のちに彼はみごとに夢をかなえる)。しかし、この日の朝、休暇から戻ったトーマスは、ジョージ・マーティンからのあまりにも突然な内容の書き置きを手にした。「クリスへ。楽しい休暇を過ごしましたか。さて、今度は私が休みをとりますから、君がビートルズを支えるように。ニールとマルには、君がスタジオに入ると伝えてあります」
この日のセッションからジョージ・マーティンが戻ってくる10月1日まで、クリス・トーマスがビートルズのプロデューサー代理を務めることになった。しかし、その後トーマスが語っているように、ビートルズが彼になじむまではしばらくかか

ったし、そもそもビートルはこのころになるとレコーディングのあらゆる側面まで精通していたので、プロデューサーを必要とすることもほとんどなかった。しかし、重要なレコーディング記録やテープ・ボックスに「プロデューサー」と名前が残されているのは、まぎれもなくクリス・トーマスの名前だった。

この日のセッションは午後7時から午前2時30分まで。'Helter Skelter'の録り直しをすることになったが、このときほどジョージ・マーティンの助言と手助けが必要であったセッションはないだろう。まったく混ざり合わないロック・ミュージックの音のるつぼのようなものを作りたいというポールのもくろみは、かなり異常とも言えるレコーディングを21テイク録音するという結果を生んだ。その内容は、ジョンがベースと明らかに下手なサックスを演奏し、マル・エバンズも同様に素人のトランペットを吹き、さらに、リード・ギターが2本、ヘビーなドラム、ピアノを加え、そのすべてにディストーションとフィードバック処理をし、その上にジョンとジョージのバック・ボーカルと数々の意味不明のつぶやきを重ね、ポールがやかましいリード・ボーカルをがなりあげるというものだったが、ポールが歌っている間、ジョージはアーサー・ブラウンのように火のついた灰皿を頭上にかかげて、スタジオ中を走り回っていた。

9月10日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時までのセッションで、'Helter Skelter'に最後のオーバーダビングをした。

過去のビートルズ・ナンバーを引用した'Glass Onion'

9月11日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョンが書いた'Glass Onion'は、(ほとんどは無意識に書かれた)隠された意味や暗示を解き明かそうとして歌詞を切り刻むように分析する人向けの曲で、歌詞には'Strawberry Fields Forever' 'I Am The Walrus' 'Lady Madonna' 'The Fool On The Hill' 'Fixing A Hole'といったビートルズのそのころの曲からの引用がふんだんに登場する。午後7時から午前3時30分までのセッションは、まずこの曲のベーシック・トラックで始まり、34テイク録音したのち、テイク33がベスト・テイクとなった。

この日、'Hey Jude'がイギリスでもっとも長い演奏時間を持つNo.1シングルとなる。

9月12日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後8時30分から午前1時30分までのセッションで、'Glass Onion'にジョンのリード・ボーカルを入れ、タンバリンをオーバーダビングした。

9月13日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後8時から午前1時45分までのセッションで、'Glass Onion'に追加のドラムとピアノをオーバーダビングした。

クレジットのないアドリブの曲

9月16日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前3時までのセッションで、ポールの新しいバラード'I Will'をレコーディングしたが、この曲のレコーディングにジョージは参加していない。ポールがアコースティック・ギターを弾きながら歌い、リンゴがマラカスとシンバルを担当し、ジョンが金属板をスティックで叩いてビートを入れて、3人で67テイクを録音した。また、ポールはテイクのあいまにアドリブの曲をいくつか吹き込んだ。そのひとつ、「Can you take me back where I came from, can you take me back?」という歌詞の短い曲は、アルバム"THE BEATLES"に収録されている。もともとは2分21秒にわたるもので、そのうちの28秒分が、マスターの'Cry Baby Cry'と'Revolution 9'の間に挿入された。また、'Revolution 9'の冒頭に入っているのは、コントロール・ルームでの会話を録音したもの。アップルのオフィス・マネージャーであるアリステア・テイラーが、クラレット(ボルドー産の赤ワイン)を持ってくるのを忘れたことをジ

ョージ・マーティンに平謝りで詫びている。この会話の録音日は記録されていない。
4トラックでレコーディングされた'I Will'のテイク67は、あとでオーバーダビングするために8トラックにコピーされ、テイク68とされた。
セッションの最後に、8トラックで録音していた'Glass Onion'の'The Fool On The Hill'の歌詞の部分に、オリジナルのパロディとしてリコーダーを2回オーバーダビングした。
注：この日、午後2時30分から5時30分まで、第2スタジオでは作品のタイトルを歌っている部分のみを集めた2本のテープのうちの1本目が編集されている。これは、1962年以降ビートルズが録音した曲のモノ・マスターをすべて借りてきて、歌詞のなかでタイトルが歌われている部分のみを抜粋し、別のテープにコピーしたもの。スタジオの記録からは、この興味深い作業がどうして行なわれたのかわからないが、たとえば著作権関連の作業だったということもあり得る。しかし、経費関係の書類では、このテープは2枚組アルバムの作業の一環として分類されているので、ビートルズが自分の曲のタイトルを歌い続けるというこのテープがホワイト・アルバムに収録されるはずだったという考えも十分にあり得る。
順序は任意に決められたようで、この日は20曲分のタイトルをテープ・コピーした。さらに、9月17日には27曲、9月23日には30曲、24日には22曲のタイトルがコピーされている。テープを四六時中テープ・マシーンにかけて、リールに巻きつけ、サーチし、コピーしていなければならないこの面倒な作業に、ビートルズの誰かが立ち合ったかどうかは不明。いずれにしても、このやっかいな作業はエンジニアのケン・スコットとテープ・オペレーターのマイク・シーディにまかせられ、クリス・トーマスが折りを見ては監督していた。

9月17日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前5時までのセッションで'I Will'を完成させた。ポールがひとりで、バック・ボーカル、バリトン・ベースをまねたボーカル、セカンド・アコースティック・ギターをオーバーダビングした。また、'Helter Skelter'のモノ・ミックスを作った(この日のバージョンは3分36秒の長さがあったが、10月12日のステレオ・ミックスは4分29秒ある)。さらに、'Cry Baby Cry'を4トラックから8トラックにコピーするが、これはさらにオーバーダビングを加えることを考えてのことだろう。しかし、結局この曲にオーバーダビングはもう行なわれない。

ヨーコとパティが参加した'Birthday'

9月18日(水)
アップル・コープス
London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日、アップルの営業時間中に、ジョージは「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌の記者アラン・スミスからインタビューを受けた。スミスは、ロンドンのジャーナリストのなかでは1962年にビートルズを最初に取材をしたうちのひとりだった(さらに彼の妻はアップルで働いていた)。このインタビューの内容は「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌に掲載されるほかに、9月28日午後6時32分から7時30分までのBBCラジオ1の番組「シーン・アンド・ハード」でも、5分26秒にカットされて紹介される。またこの日の放送分は、9月30日午後7時45分から8時44分にラジオ1で再放送され、BBCワールド・サービスでも編集されて(28日午後11時15分から11時45分、29日午前5時15分から5時45分、午後1時30分から2時、すべてイギリス時間)3回放送される。
この日のセッションはレコーディング・シートには午後5時から午前5時までと記されているが、ビートルズの4人、オノ・ヨーコ、パティ・ハリスン、クリス・トーマスは、途中でスタジオを抜けてポールの家まで行き、BBC2で午後9時5分から10時40分にかけて放送されたなつかしいロックンロール映画"THE GIRL CAN'T HELP IT"を観ている。
その日、少し早目にスタジオにいちばん乗りしたポールは、第2スタジオでキャッチーなリフを思いつき、それを強力なロック・ナンバーの'Birthday'にふくらませた。ほかの3人がそろうと、午後8時30分までに4トラックで'Birthday'を20テイク録音し、バッキング・トラックを完成させた。一時中断のあと、11時にセッションに戻ったビートルズは、エディ・コクラン、リトル・リチャード、ジーン・ビンセント、ファッツ・ドミノなどのヒーローを観てさらに力がわいてきたのか、その

まま'Birthday'を完成させてしまった。4トラック・テープから8トラック・テープにコピーしたあと、タンバリン、ピアノ、手拍子(マル・エバンズが参加)、バック・ボーカル(ヨーコとパティが参加)、ポールのリード・ボーカルと部分的に入るジョンのボーカルをオーバーダビングした。それから、午前4時30分から5時まで、完成したテープからモノ・ミックスを作った。

ジョージ、'Something'を作曲

9月19日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ／第1スタジオ
London

ジョージの辛辣な社会風刺とも言える'Piggies'のベーシック・トラックをレコーディングした。この日のセッションは、ふたつのスタジオにまたがって行なわれた。というのは、ビートルズが第2スタジオでリズム・トラックをレコーディングしている間、第1スタジオにふらっと入ったクリス・トーマスが、そこで翌日のクラシック・セッション用にセッティングされていたチェンバロを見つけたからだ。トーマスはこのチェンバロを第2スタジオに持ち込もうと考えたが、ケン・スコットが反対したため、代わりにビートルズが第1スタジオに移ってきたのである。

ジョージがトーマスにチェンバロを弾くように提案したところ(トーマスは子どものころ王立音楽院で音楽教育を受けたことがあった)、トーマスは引き受け、9ポンドの報酬も受け取った。

午後7時15分から午前5時30分までのセッションで、'Piggies'を11テイク録音し、テイク11がベスト・テイクとなった。

'Piggies'のレコーディング中、ジョージはクリス・トーマスに出来たての新曲'Something'を演奏してみせた。トーマスが熱心にほめるので、ジョージはこの曲をジャッキー・ロマックスに歌わせようと考えた。しかし、ジョージが最終的に'Something'を提供するのはジョー・コッカーで、1969年初春のコッカーのレコーディングを手伝うことになる。

"ABBEY ROAD"のためにビートルズがこの曲のレコーディングにとりかかるのはそのあとのことだが、コッカーのバージョンのリリースはかなり先に延ばされ、結局ビートルズのリリースより2か月遅れてしまう。そのほか、1969年にリリースされる曲では、ポールの'Let It Be'と'The Long And Winding Road'も、このころアルバム"THE BEATLES"のために作られた曲だ。

9月20日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から11時までのセッションで、'Piggies'を完成させた。(テイク11を8トラック・テープにコピーしたテイク12に)ジョージのリード・ボーカルと、ジョンがアビイ・ロードの音響効果テープ「第35巻:動物と蜂」を使って作ったぶたの鳴き声のテープ・ループをオーバーダビングした。

9月23日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョンの曲'Happiness Is A Warm Gun In Your Hand'をレコーディングした。このタイトルはまもなく縮められて'Happiness Is A Warm Gun'となる。ジョンはのちに、この曲は3つの異なるパートをつなげて作ったと明かすが、レコーディングのときまでにはアルバムで聴かれる形に仕上がっていた。午後7時から午前3時までのセッションで、ベース、ドラム、ジョンのリード・ギターとガイド・ボーカル、ジョージのファズを効かせたリード・ギターという編成のリズム・トラックを、45テイク録音した。

9月24日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後7時から午前2時までのセッションは'Happiness Is A Warm Gun'のリズム・トラックをテイク46からテイク70まで録音するのに費やされた。テイク53の前半とテイク65の後半がベスト・バージョンとして選ばれたため、8トラック・テープをカットしてつなぎ合わせ、ベスト・テイクを編集した。

9月25日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Happiness Is A Warm Gun'はこの日の午後7時30分から午前5時までのセッションで完成した。ジョンのリ

ード・ボーカル、ジョン、ポール、ジョージによる「bang bang, shoot shoot」という印象的なバック・ボーカル、オルガンとピアノ、チューバ(これはミックス段階でカットされる)、スネア・ドラム、ベース、タンバリンをオーバーダビングした。それから午前5時から6時15分まで、完成したテープのモノ・ミックスを作った。

9月26日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日はアセテート盤をカッティングするため、'Happiness Is A Warm Gun' 'What's The New Mary Jane' 'Glass Onion' 'I Will' のモノ・ミックスを作った。アセテート盤は、翌日休暇から戻るジョージ・マーティンに渡すことになっていた。

'Glass Onion' のモノ・ミックスが何かもの足りないと感じたジョンは、午後7時から午前1時30分までのセッションの残り時間に風変わりなサウンド・エフェクトをつめこんだ4トラック・テープを録音した。ここに電話のベル、オルガンの1音、BBCテレビのサッカー解説者ケネス・ウォルステンホルムが「It's a goal!」と叫んでいる声と群衆の歓声、窓が割れる音を入れた。しかし、苦労して作った2分35秒のこのテープは、ジョージ・マーティンが休暇から戻ったとき、それよりストリングスをオーバーダビングしたほうがいいと勧めたので、結局ボツになってしまう。このバージョンは1996年の"ANTHOLOGY 3"に収録されている。

トライデント・スタジオで気分転換

10月1日(火)

トライデント・スタジオ
London

ビートルズはトライデント・スタジオに入ったが、このころにはEMIでも8トラックを使用していたので、トライデントをまた1週間使うことにしたのは単純に気分転換のためだった。午後4時から午前3時30分までのセッションでは、ポールの'Honey Pie' のベーシック・トラックを、ピアノ(ポール)、ベース(ジョージ)、ドラム(リンゴ)、エレキ・ギター(ジョン)という編成で収録した。テープ・リールを2本、目いっぱい使いきったが、最終的にベストに選ばれたのはテイク1だった。ラフ・モノ・ミックスを作り、金管と木管楽器用のスコアを書くため、ジョージ・マーティンが持ち帰った。

10月2日(水)

トライデント・スタジオ
London

午後4時から午前3時30分までのセッションで、'Honey Pie' にポールのリード・ボーカルとリード・ギターをオーバーダビングした。

10月3日(木)

トライデント・スタジオ
London

ジョージの新曲 'Savoy Truffle' のレコーディングを開始した。この曲は、エリック・クラプトンがチョコレート好きであること、とくにマッキントッシュのグッド・ニュースの箱詰めが大好きだったことにヒントを得て書かれたものだ。午後4時から午前2時30分の間に、ジョージ、ポール、リンゴで、リード・ギター、ベース、ドラムのベーシック・トラックを1テイク録音した。

ポールだけで 'Martha My Dear'をレコーディング

10月4日(金)

トライデント・スタジオ
London

午後4時から午前4時30分までのセッションで、ポールの'Martha My Dear' のレコーディングを開始し、ほぼ完成させた。ストリングスとホルンのオーバーダビングを除けば、この曲のマスター・レコーディングをしたのはポールだけで、ほかの3人は参加していない。最初に、ピアノ、ドラム、ガイド・ボーカルによるベーシック・トラックを録音する。午後9時から12時までは、14人の外部ミュージシャンによるオーバーダビングが行なわれた。この日参加したのは、バーナード・ミラー、デニス・マッコネル、ルー・ソフィア、レス・マドックス(バイオリン)、レオ・バーンバウム、ヘンリー・マイヤースコー(ビオラ)、レジナルド・キルビー、フレデリック・アレクサンダー(チェロ)、レオン・カルバート、スタンリー・レイノルズ、ロニー・ヒューズ(トランペット)、トニー・タンストール(フレンチ・ホルン)、テッド・バーカー(トロンボーン)、アルフ・リース(チューバ)だった。レオン・カルバートはフリューゲルホ

CamScannerでスキャン

ンも演奏した。
また、これより早く、午後6時から9時までの間には、デニス・ウォルトン、ロナルド・チェンバレン、ジム・チェスター、レックス・モリス、ハリー・クライン（サックス）、レイモンド・ニューマン、デビッド・スミス（クラリネット）の7人のミュージシャンが、'Honey Pie'にオーバーダビングをした。
そして、深夜0時から午前4時30分まで、ポールは'Martha My Dear'にリード・ボーカルと手拍子をオーバーダビングした。さらに、'Honey Pie'に古いレコードのような音質の「now she's hit the big time!」のボーカル・ラインを加えた。
注：この'Martha My Dear'の初回レコーディングでは、ジョージ・マーティンが外部ミュージシャンを集めてスコアを提供しているので、おそらくこの日以前の段階でアレンジを考えてもらうために、個人的に録音したデモ・テープをマーティンに渡していたのだろう。

10月5日（土）
トライデント・スタジオ
London

'Savoy Truffle'にジョージがリード・ボーカルを、'Martha My Dear'にポールがベースとエレキ・ギターをオーバーダビングした。続いて'Martha My Dear' 'Honey Pie' 'Dear Prudence'のモノ・ミックスを作った。また、午後6時から午前1時までのセッションの最後に、'Honey Pie'と'Martha My Dear'のステレオ・ミックスを作った。

10月7日（月）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から翌朝の午前7時まで続けられた非常に長いセッションは、ほとんどがジョージの別の新曲'Long Long Long'（この時点では'It's Been A Long Long Long Time'）のベーシック・トラックの録音に費やされた。ジョージの曲をやるときはあたりまえになりつつあったが、ジョンはこの日のセッションには顔を出さず、この曲のオーバーダビングにも参加しなかったので、この曲はジョージのアコースティック・ギターとボーカル、ポールのオルガン、リンゴのドラムという編成で録音された。最後のテイク67がベスト・テイクとなったが、これには、ポールがオルガンのある特定の鍵盤を叩いたときに、レスリー・スピーカーのキャビネットの上でワイン・ボトルがカタカタ鳴る音まで入ってしまった。この音を埋めるために、曲の最後に近いこの部分に、リンゴが速いドラムのフィル・インを追加した。
セッション前半では、トライデント・スタジオで作った'Honey Pie'と'Martha My Dear'のモノおよびステレオ・ミックスをテープ・コピーし、'While My Guitar Gently Weeps'のモノおよびステレオ・ミックスを作った。

16時間ものセッション ヨーコが一部ソロで歌う
10月8日（火）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後4時から午前8時までという16時間にもおよぶ長いセッションになったが、1968年のビートルズのセッションのなかでは、この日ほど生産的な内容はめったにない。ジョンの新曲2曲、'I'm So Tired'と'The Continuing Story Of Bungalow Bill'のレコーディングを始めて、完成させ、同時にジョージの'Long Long Long'のオーバーダビングまでこなした。
最初に始めたのは'Long Long Long'で、ジョージがセカンド・アコースティック・ギターとマニュアル・ダブルトラックのリード・ボーカル、ポールがベースをオーバーダビングした。
'The Continuing Story Of Bungalow Bill'のベーシック・トラックは、わずかに3テイク録音しただけだが、これには多数のオーバーダビングが加えられることになる。"SGT. PEPPER"のころのビートルズとは大違いで、これは行きあたりばったりでがむしゃらなレコーディングで、その場の雰囲気をとらえることを優先しているため、不完全な部分もそのまま残している。実際、この曲のレコーディングは飛び入りもおかまいなしで、スタジオにいる全員が大声で叫んだり、拍手したり、口笛を吹いたり、ジョンのリード・ボーカルをバックアップしたりした。ヨーコは「not when he looked so fierce」の一節をソロで歌ったが、ビートルズのレコーディングで女性がリード・ボーカルを取ったのは、これが最初で最後である。また、リンゴの妻モーリーン・スターキーもコーラスを歌った。クリス・トーマスはこの曲にメロトロンを加えて、また9ポンド稼いだ。

ジョンの誕生日、ポールとエンジニアだけでレコーディング

10月9日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ/第1スタジオ
London

午後7時から午前5時30分までのセッションでは、初めに'The Continuing Story Of Bungalow Bill'のステレオおよびモノ・ミックスを作った。それから'Long Long Long'に移り、ポールがところどころにバック・ボーカルを加えて、クリス・トーマスがピアノをオーバーダビングし、レコーディングを完了させた。また、ポールは7月18日に録音した27分におよぶ'Helter Skelter'のモノ・コピーを作り、プライベート・コレクション用に持ち帰る。

クリス・トーマスがピアノを弾いている間に、ポールはケン・タウンゼンドに第1スタジオに入ってくれと頼んだ。テクニカル・エンジニアだったタウンゼンドは、臨時バランス・エンジニア兼テープ・オペレーターとなり、ポールは短くてきわどい内容の'Why Don't We Do It In The Road'のベーシック・トラックを録音した。翌日の夜リンゴがオーバーダビングするドラムを除けば、これもまた、ポールが4トラックで完成させたソロ・レコーディングのひとつである。この日はリード・ボーカルとアコースティック・ギターを5テイク録音し、テイク5にピアノをオーバーダビングした。

10月10日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ/第3スタジオ
London

午後7時から午前7時15分までのセッションで、'Piggies' 'Glass Onion' 'Why Don't We Do It In The Road'の3曲が完成し、アルバムのレコーディングも終盤に近づいてきた。'Piggies'と'Glass Onion'には、午後7時から10時30分まで2曲とも同じ外部ミュージシャンを8人使って、ストリングスのオーバーダビングを加えて完成させた。参加ミュージシャンは、ヘンリー・デイトナー、エリック・ボウイ、ノーマン・レダーマン、ロナルド・トーマス(バイオリン)、エルドン・フォックス、レジナルド・キルビー(チェロ)、ジョン・アンダーウッド、キース・カミングス(ビオラ)だった。このあと、'Glass Onion'のモノおよびステレオ・ミックスと、'Rocky Raccoon'と'Long Long Long'のステレオ・ミックスを作った。

これらの作業が第2スタジオで行なわれている間、ポールは第3スタジオのコントロール・ルームに再びケン・タウンゼンドを呼び、1分40秒のロック・ナンバー'Why Don't We Do It In The Road'に最後のオーバーダビングを加えた。テイク5に、新たなボーカル、手拍子、ベース、(リンゴの)ドラムを加え、これをリダクション・ミックスしたテイク6に、ポールがエレキ・ギターを加えて完成させた。

この日、ジョージは新しい音楽出版社シングソング・リミテッドを設立。

10月11日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Savoy Truffle'を仕上げるにはもう少し手を加える必要があった。そこで、この日午後3時から午後6時までのセッションで、クリス・トーマスがスコアを書いたサックスがオーバーダビングされ、この作業と同時進行でジョージはコントロール・ルームでこれにディストーションをかけた。6人のサックス奏者は、ロニー・ロス、バーナード・ジョージ(バリトン・サックス)、アート・エレフソン、ダニー・モス、ハリー・クライン、デレク・コリンズ(テナー・サックス)だった。

そのあと、セッションは午前6時まで12時間も続き、'Piggies' 'Don't Pass Me By' 'Good Night'のモノおよびステレオ・ミックスが作られた。

この日、ザ・ボンゾ・ドッグ・ドゥー・ダー・バンドがニュー・シングル'I'm The Urban Spaceman'をイギリスで発売。プロデューサーはアポロ・C・バームースとクレジットされているが、じつはポール。

10月12日(土)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この土曜の夜のミキシング・セッションは午後7時から午前5時45分まで。'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey' 'Mother Nature's Son' 'Ob-La-Di, Ob-La-Da'のモノおよびステレオ・ミックス、'Helter Skelter' 'Long Long Long'のステレオ・ミックスを作った。

CamScannerでスキャン

ジョン'Julia'をレコーディング

10月13日(日)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

いよいよしめきりが近づき、2月11日に'Hey Bulldog'を録音して以来の日曜セッションが行なわれる。アルバムのための最後のレコーディングとなる32曲目は、ジョンの胸を打つバラード'Julia'だった。ビートルズの作品のなかでは、唯一のジョンのソロ・レコーディングとなる。アコースティック・ギターを弾きながら、ボーカルを2テイク録音した。

午後7時から午前6時までのセッションの最後にはミキシング作業が行なわれ、'Julia' 'Dear Prudence' 'Blackbird'のモノおよびステレオ・ミックス、また、'Wild Honey Pie' 'Back In The U.S.S.R.'のステレオ・ミックスが作られた。

リンゴは休暇へ ホワイト・アルバム、レコーディング完了

10月14日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

2枚組アルバムの最終ミキシングと曲順決定をほかのメンバーと制作チームにまかせたリンゴは、この日の朝、2週間の休暇をとってサルジニア島に旅立った。

この日でアルバム"THE BEATLES"のレコーディング・セッションは最後となった。'Savoy Truffle'に、オルガンとエレクトリック・ピアノ(両方ともクリス・トーマス)、セカンド・エレキ・ギター、タンバリン、ボンゴをオーバーダビングして完成させた。この日のセッションは午後7時から午前7時30分まで。残りの時間はミキシング作業に費やされ、'I Will' 'Birthday' 'Yer Blues' 'Sexy Sadie' 'What's The New Mary Jane'のステレオ・ミックス、'Savoy Truffle' 'While My Guitar Gently Weeps'のモノおよびステレオ・ミックス、'Long Long Long'のモノ・ミックスを仕上げた。

10月15日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後6時から午前8時までのセッションで、'Happiness Is A Warm Gun'のステレオ・ミックス、'I'm So Tired'と'Cry Baby Cry'のモノおよびステレオ・ミックスを作った。

24時間のミキシング・セッション ジョージはアメリカへ

10月16日(水)〜17日(木)
EMIスタジオ、第41・第42室／第1・第2・第3スタジオ
London

水曜の午後5時から木曜の午後5時までという、ビートルズにとっては最初で最後の24時間セッション。ジョージは木曜の昼にロサンゼルスに向かったため、アルバム"THE BEATLES"候補曲31曲の収録曲順を決定してモノおよびステレオ・マスターを編集するという難問は、あとに残されたジョン、ポール、ジョージ・マーティン、バランス・エンジニアのケン・スコット、テープ・オペレーターのジョン・スミスに託されることとなった('Not Guilty'はステレオ・ミックスが作られていなかったため、すでに候補曲からはずれていたと考えられる)。このセッションですべての作業を完了することが絶対条件だったため、24時間にわたるこのセッションのある時点では、アビイ・ロードの全スタジオと試聴室で同時に作業が行なわれることになった。

結局、'What's The New Mary Jane'をはずした30曲でおおかたの構成が決まった。ヘビーなロック・ナンバーのほとんど('Birthday' 'Yer Blues' 'Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey' 'Helter Skelter')をC面に収め、動物のタイトルがついている3曲('Blackbird' 'Piggies' 'Rocky Raccoon')をB面に続けて収録し、ジョージの4曲は各面に1曲ずつ入れ、同じ作曲者の曲が続かないようにし、各面とも20〜25分の長さにまとめるというものだ。

クロスフェイドと編集をして("SGT. PEPPER"と同じく"THE BEATLES"も曲間の空白がない)、'Why Don't We Do It In The Road'のモノおよびステレオ・ミックスを作った(また、1967年に録音された'It's All Too Much'も、リリースがさしせまった"YELLOW SUBMARINE"のサウンドトラック・アルバムに収録するためモノおよびステレオ・ミックスが作られた)。

翌日の10月18日には、ジョン・スミスがひとりで(第1スタジ

CamScannerでスキャン

オで正午から午後1時まで)、'Yer Blues'と'Don't Pass Me By'のベスト・モノ・ミックスのコピーをやり直して、マスター・テープをようやく完成させた。
新曲ばかり30曲を一気に収録した驚異的な2枚組アルバム"THE BEATLES"は、11月22日にイギリスでリリースされる。しかも、新曲はまだ残っていた。「ザ・ビートルズ・マンスリー・ブック」誌の1968年11月号には、'Polythene Pam'と'Maxwell's Silver Hammer'は作曲されるのが少し遅くて"THE BEATLES"に収録するのには間に合わなかったと報じている。しかしこの2曲は、アルバムにして2枚分の新曲とともに、1969年にレコーディングされることとなる。

エンジニアだけでアルバム"YELLOW SUBMARINE"のミキシング

10月29日(火)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午前10時から午後1時まで、EMIの第3スタジオで、ジェフ・エメリックがサウンドトラック・アルバム"YELLOW SUBMARINE"収録用に、'Hey Bulldog' 'All Together Now' 'All You Need Is Love' 'Only A Northern Song'のステレオ・ミックスを作った。ただし'Only A Northern Song'は、オリジナルの4トラック・テープからではなくモノ・マスターから作られたため、疑似ステレオ・ミックスとなった。
アルバム"YELLOW SUBMARINE"は映画とほぼ同時に発売されるはずだったが、公開から7か月も遅れて1969年1月17日にようやくリリースされる(ただしアメリカでは11月中旬に公開)。その片面にビートルズの曲(新曲は4曲のみ)が収録され、もう片面には1968年10月22日と23日にEMIでレコーディングされたジョージ・マーティンのオーケストラ・サウンドトラックが収録される(ただし実際に映画に使われたサントラはその前にオリンピック・サウンド・スタジオで録音されていた)。このアルバムのリリースが遅れた最大の理由は、ビートルズがホワイト・アルバムを先にリリースし、どんなに短くてもその後3週間おいてからサウンドトラックを出したかったからだ。
しかし、アルバム"YELLOW SUBMARINE"はふだんのビートルズのコスト・パフォーマンスの高さにおよぶ完成度ではないと、やんわりとした批判を受けた。しかし、それでさえビートルズにはこたえたようで、4人は新たにLPの回転数の7インチ・モノEPをリリースするつもりだったようだ。EMIの保管室には、1969年3月13日付で編集されたこのマスター・テープが残されており、A面に'Only A Northern Song' 'Hey Bulldog' 'Across The Universe'、B面に'All Together Now' 'It's All Too Much'というラインナップになっている(ボーナス曲'Across The Universe'は1969年3月の時点で完成し、収録される予定だった世界自然保護基金のチャリティ・アルバムのリリースを待つばかりになっていた)。しかし、ここまで用意しておきながら、このEPはリリースされなかった。"YELLOW SUBMARINE"の企画には最初から熱心でなかったビートルズは、もはや過去のものは過去のものとして葬ったほうがいいと感じたのだろう。

ジョージ、アメリカのテレビに出演 シンセサイザーを試す

11月15日(金)

CBSテレビ・スタジオ
Sunset Boulevard, Hollywood, California, USA

10月16日にロサンゼルスに旅立ったジョージは、7週間近くアメリカに滞在している。大半の時間は、アップル・レコードのアーティスト、ジャッキー・ロマックスのデビュー・アルバム"IS THIS WHAT YOU WANT?"のプロデュースに費やされた。
この滞在の間に、ジョージはアメリカのテレビ番組に1度だけ出演した。ハリウッドのCBSテレビ・スタジオで毎週金曜日に公開録画され2日後にゴールデン・タイムに放送されていた「ザ・スマザース・ブラザーズ・コメディ・アワー」に飛び入り出演したのだ。ゲストは、ジョージの友人ドノバンだった。この回は11月17日午後9時から10時(EST)に放送される。
カリフォルニア滞在中に、ジョージは電子音楽の専門家であるバーニー・クラウスに紹介され、クラウスはジョージに、開発段階にある新しい楽器ムーグ・シンセサイザーを紹介した(1969年8月5日も参照)。クラウスはロマックスのアルバムでサウンド・エフェクトの一部を担当し、11月中にはジョージと一緒に25分間にわたる長いインストゥルメンタル・

CamScannerでスキャン

ナンバー 'No Time Or Space' をレコーディングしてい
る。1969年5月9日にジョージがリリースするアルバム
"ELECTRONIC SOUNDS" のB面には、この曲のみ
が収録されている。ジョージはこのシンセサイザーを購入
してイギリスに持ち帰っており、同アルバムのA面には、1969
年2月(正確な日付は不明)にイーシャーで録音された19
分のインストゥルメンタル・ナンバー 'Under The Mersey
Wall' も収録されている。

11月20日(水)

キャベンディッシュ・アベニュー
London

"THE BEATLES" のプロモーションのため、ポールは
この日、ラジオ・ルクセンブルクの番組ディレクターで、元オ
ーストラリアのラジオのDJだったトニー・マッカーサーのイ
ンタビューに応じた。セント・ジョンズ・ウッドのポールの自宅
で収録されたこのインタビューは、翌11月21日午後7時30
分から9時30分までの、ホワイト・アルバムを特集した2時間
特別番組のなかで紹介された。放送日はアルバム・リリー
ス前日である。また、別途に収録された「デイリー・エクス
プレス」紙のポピュラー音楽担当記者ジュディス・サイモン
ズのコメントも紹介された。

11月20日ころ、ジョンとヨーコも、有名なオランダ人社会学
者で作家のブラム・デ・スワーンの、ざっくばらんで興味深
い40分にわたるテレビ・インタビューに応じている。これは、
よりによって、ロンドンのナイツブリッジにある歯医者の待合
い室で撮影された。インタビューの前半はジョンが治療を
受けていたためヨーコがひとりで答えている。VARAテレ
ビ・ネットワークが所有するフィルムは、1969年1月15日午後
9時25分から10時5分、オランダ第2局の若者向け番組「ロ
ート・ビット・ブロウ」で放送される。

ジョンとヨーコ、ローリング・ストーンズのテレビ番組で演奏

12月10日(火)

ストーンブリッジ・ハウス
Wembley

12月11日(水)

ブロードキャスティング・ハウス
London

ビートルズの "MAGICAL MYSTERY TOUR" に影響されてか、ローリング・ストーンズもまた5万ポンドもの膨大な予算を使って、独自にカラーのテレビ・スペシャルを制作した。12月10日、ストーンブリッジ・パークにあるインターテル(VTRサービス)のスタジオでリハーサルと部分的な撮影が行なわれ、12月11日には撮影が完了した。この番組のタイトルは「ザ・ローリング・ストーンズ・ロックンロール・サーカス」で、当時はお蔵入りしたが、権利を所有しているストーンズとビートルズの元ビジネス・マネージャー、アラン・クラインは、いずれホーム・ビデオとして発売する計画だと語り、ようやく1997年に発売された。そして、この50分の映像には、ジョン・レノンが出演している注目すべきシーンも収録されている。

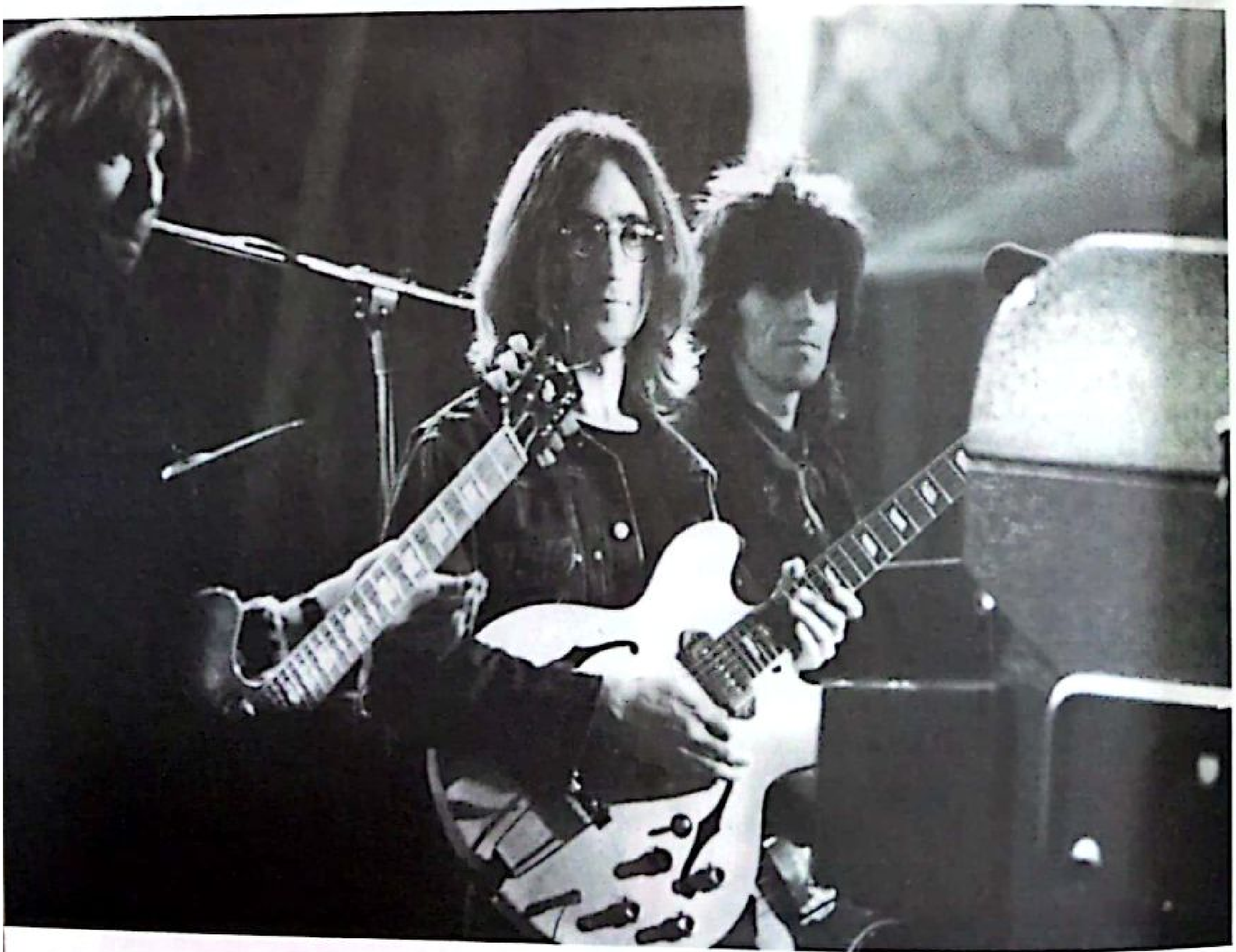
タイトルからもわかるとおり、この番組は音楽にサーカスの趣向を合わせたもので、曲芸師が頭上で空中ブランコに乗り、小男や、火食い男、調教された虎、皿回しなどが続々と登場した。芸人たちはサー・ロバート・フォセット・サーカスから来てもらった団員で、ミュージシャンたちもそれぞれサーカスの衣装を身につけた(ミック・ジャガーは曲馬団長の衣装だ)。監督は、ビートルズ関連ではもうおなじみのマイケル・リンゼイ=ホッグで、カメラマンはトニー・リッチモンドだった。このふたりは、1か月後のビートルズの "GET BACK" プロジェクトで、再びチームを組むことになる(1969年1月2日参照)。

ジョン・レノンのほかにも、エリック・クラプトン(クリームとして招待されていたが、バンドはこの直前に解散してしまった)、ジェスロ・タル、マリアンヌ・フェイスフル、ザ・フー、ミッチ・ミッチェル(ジミ・ヘンドリックス・エクスペリエンスのドラマー)など多数のゲスト・ミュージシャンが出演していた。主演のローリング・ストーンズがもちろん最後の出演者だ

ったが、出番がまわってきたのは翌朝の午前2時で、そのころには、趣向をこらした服で飾り立てて来ていた招待客もほとんど帰ってしまっていた。大テントのセットの中で、ジョンは自分の出番で、ベースにキース・リチャード(本名のリチャーズに戻す前だった)、リード・ギターにエリック・クラプトン、ドラムにミッチ・ミッチェルというメンバーを従え、自分はリズム・ギターを弾きながら、すさまじいライブを披露した。曲はリリースされたばかりのアルバム"THE BEATLES"の収録曲'Yer Blues'だった。その次にジョンはうしろに下がってヨーコにフロントをゆずり、ヨーコとバンドは、バイオリニストのアイブリー・ギトリスも加え、エレクトリック・ジャムを続け、この演奏はのちに'Her Blues'と呼ばれるようになった。マイケル・リンゼイ=ホッグは、この2日間に、ステージ以外でのジョンとミック・ジャガーのやりとりも撮影していた。また、こうしたオフステージのシーンには、出演者全員がサーカス団員のコスチュームを着け、ジョンが曲芸師、ヨーコが魔女に扮した映像なども含まれている。

フィルム撮影と同時に、"THE ROLLING STONES' ROCK AND ROLL CIRCUS"での演奏は、グリン・ジョンズとジミー・ミラーの処理で、移動式4トラックでレコーディングされていた。ストーンズは当初チャリティ目的のサウンドトラック・アルバムを制作する計画だったが、結局実現しなかった。

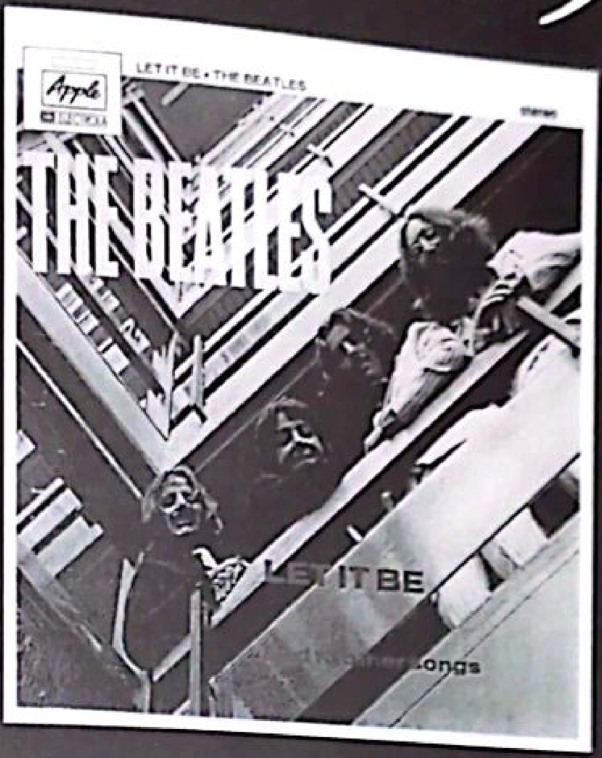
この収録のあと、ジョンとヨーコはロンドンに戻り、午前12時5分から2時にかけてBBCのブロードキャスティング・ハウスからラジオ1とラジオ2で生放送された番組「ナイト・ライド」に出演した。ジョンとヨーコは、ジョン・ピールが司会する番組前半(したがって午前12時5分から1時)に出演し、ふたりのニュー・アルバム"TWO VIRGINS"について語った。深夜だったため、BBCは大胆にもこのアルバムから3分20秒もの抜粋を放送した。



CamScannerでスキャン

Introduction 1969

グリン・ジョンズがプロデュースしたアルバム"GET BACK"の曲順は〈A面〉①One After 909 ②Rocker (Link Track) ③Save The Last Dance For Me ④Don't Let Me Down ⑤Dig A Pony ⑥I've Got A Feeling ⑦Get Back〈B面〉①For You Blue ②Teddy Boy ③Two Of Us ④Maggie Mae ⑤Dig It ⑥Let It Be ⑦The Long And Winding Road ⑧Get Back(Reprise)だった。これはジョンとポールが気に入らなかったためお蔵入りに。そしてジョンがフィル・スペクターにこのアルバムのプロデュースを依頼したことによってオリジナル・アルバム"LET IT BE"が完成した。これに納得のいかなかったポールが中心となり、2003年に"LET IT BE...NAKED"をリリースする。写真のジャケットはアルバム名が"LET IT BE"に定まってからの初版ジャケット校正刷り。まだカバー写真は一時的に"GET BACK"と同じものが使用されている



ゲット・バックしよう

アルバム"THE BEATLES"のレコーディング・セッションは、ビートルズがきわめて張りつめた、困難な時期を迎えたことを証明した。4人の原動力を取り戻すためにポールに思いつく解決策はひとつしかなかった。尽きることのない名声と富が4人の原動力を曇らせる前に4人を結びつけていたもの、つまり、ライブ・パフォーマンスに戻ること(get back)だ。

この提案に沿った計画のなかでもっとも支持されたのは(しぶしぶ同意したメンバーもいたが)、観客の前で8曲ぐらい演奏する1時間のテレビ番組を生放送またはビデオ録画するというものだった。おそらく、1968年9月に行なわれ、全員がとても楽しんでいた'Hey Jude'のプロモーション・ビデオの撮影のようなものを考えていたのだろう。

いかにも1960年代末にありがちな風潮だったが、計画はあちこちに回されるにしたがって、さまざまな現実離れした提案を背負い込まされていった。演奏する場所は、なにもロンドン北部のラウンドハウスである必要はないのではないのか、テムズ川沿いの閉鎖された製粉工場はどうだろう、それなら船上はどうだろう、いっそのことサハラ砂漠のど真ん中にステージを組んでみたらどうだろうか、と。いちばん真剣に検討されたのは、北アフリカにあるローマ時代の屋外円形劇場の史跡で誰も観ていない夜明けから演奏を始め、終わるころにはあらゆる人種や肌の色が劇場を埋めつくしている、というものだった。

しかし、これを実現させるための合意は結局得られなかった。ライブ・パフォーマンスをやるというポールの計画を脚色する壮大なアイデアなら次から次へと出てくるのに、ほかの3人はそもそもライブについて乗り気ではなかったからだ。あるとき、かなり暗い空気を漂わせていたジョンは、この際何もかもやめて、グ

CamScannerでスキャン

ループも解散したらどうかとまで言い出した。ジョージはほかのメンバーが納得するならテレビでの演奏はやってもいいと、仕方なさそうに同意した。リンゴはみんなが決めたとおりに従うことで満足だと言ったが、ただ2月から4月にかけては前年10月に出演契約した映画“THE MAGIC CHRISTIAN”の撮影予定が入っている、と念を押した。

会場をどこにするか、ビートルズは結論を出せないでいたが、この番組のプロデューサーに抜擢されたデニス・オデルは、せめてリハーサルだけでも始めたらどうかと勧め、そこで映画“THE MAGIC CHRISTIAN”(これもオデルがプロデューサーを手がけていた)の撮影がトゥイッケナム・スタジオで始まる2月3日まで、このスタジオでリハーサルをした。また、オデルはリハーサルそのものも16ミリ・フィルムに撮影することを提案し、『ビートルズ・アット・ワーク』という30分間のテレビ・ドキュメンタリーとして、ライブ映像と合わせて放送するか、ライブの放送日に前後して放送することが出来るのではないかと考えていた。

しかし、トゥイッケナムでリハーサルを始めると、すぐにスタジオは険悪なムードに戻った。ビートルズのラインナップにヨーコが加わるし、ポールはグループを仕切りたがり、おまけにジョージの演奏について説教までした。

ビートルズがなるべく早く一堂に集まって、1968年に大きく広がってしまった亀裂を埋めようとするのは、きわめて理にかなったことだった。しかし、はてしなく続くようにも思えたホワイト・アルバムのセッションがやっと終わってからわずか11週間後に集まるのでは、いくら何でも逆効果になるだけだった。

それに、アルバム“THE BEATLES”に30曲も収録したので、ジョン、ポール、ジョージの手もとにはレコーディングしていない曲はそれほど残っていなかった。あることにはあったが、そこへ新しいプロジェクトが急に始まったため、いつものように十分に練りあげられる前に、表に引きずり出されてしまった作品もあった。

そして、テレビ番組を収録するという計画は、1月10日の昼食どきに、トゥイッケナムの食堂で苦々しい形で中止になった。

ポールと口論し、さらに報道によれば、そのあとさらにジョンとも激しいいさかいを起こしたジョージは、テレビ番組のために観客の前でビートルズとして演奏するという興味をすっかり失った。ジョージはほかのメンバーたちに「じゃあな。どこかのクラブでならまた会うこともあるだろう」と言い残し、スタジオから出て行った。そのまま車に乗り込んだジョージを誰も引きとめようとしなかった。ジョージはイーシャーの自宅に戻ると、報道によれば、そのあと数日間、リバプールにいる両親に会いに行ったという。

昼食を終えると、ジョン、ポール、リンゴ(いったんバンドをやめてからまだ5か月しかたっていなかった)の3人は、スタジオに戻ってリハーサルを始めた。カメラは撮影を続けたが、3人は無言で演奏し、ヨーコがジョージのブルーの椅子に腰かけるという象徴的な場面を迎えた。やがてヨーコはセッションに加わると、叫び声をあげ、演奏はヨーコの典型的なセッションへと姿を変え、怒りにまかせたパワフルな音を鳴らすビートルズは、前衛バンドに変身した。演奏が終わると、ビートルズはやはり無言のままそれぞれ帰宅した。

その翌日は週末で休みだったが、休み明けの月曜日、ジョージが来ることを誰ひとりとして期待していなかったにもかかわらず、3人はいつものようにスタジオに集まり、その日から3日間、3人はセットのまわりをぶらぶらしながら、陰険な会話ばかりして、ほんの少ししか演奏しなかった(この時期の映像はどれも使わ

CamScannerでスキャン

れなかった)。

1月15日、ジョージがロンドンに戻ってきた。ほかの3人と長いミーティングをするためで、一説には5時間も続いたと言われる。ここでジョージはグループをやめる用意をしていると宣言した。しかし、次の条件を満たすなら、とどまってもいいとした。それは、ビートルズはライブ・パフォーマンスについての話をいったん放棄し、その代わりテレビ特番用に用意していた曲に新曲を加えてアルバム制作にとりかかる、という条件だった。そこで、トウイッケナムでのリハーサルは中断となり、アップル・ビルの地下に新設されたレコーディング・スタジオにリハーサル場所を移した。この時点になって初めて、テレビ番組『ビートルズ・アット・ワーク』用にトウイッケナムで撮影していたフィルムが、アルバムと同名の映画"GET BACK"製作のきっかけとなった。

アップル・スタジオでの最初の撮影とレコーディング・セッションは、1月20日に予定されていたが、実際に始まったのは1月22日だった。2日遅れたのは、ビートルズが信頼を置いていた友人が経営するアップル・エレクトロニクスというアップル・コープスの子会社に原因があった。ビートルズはその友人「マジック・アレックス」ことアレクシス・マーダスに、サビル・ロウにあるレコーディング・スタジオの設備を用意してくれるように依頼していたのだ。アレックスは夢のようなことばかり約束していた。アビイ・ロードのEMIスタジオはやっと8トラックを導入したばかりだが、アップルには72トラックを設置して、ほかのマイクがドラム・サウンドを拾わないようリンゴのドラム・セットの周囲に設置していたやっかいなバッフル遮断板を使わなくて済むように、同じ効果があって目には見えずじゃまにもならない音バリアー装置を開発すると断言していた。

あまりにも当然すぎることだが、実際にはそんなことは実現せず、おまけにビートルズは丸2日むだにしなければならなかった。当時のスタッフの回想によれば、木片と古いオシロスコープを組み合わせて作ったアレックスのミキシング・コンソールは、どちらかというとB-52爆撃機の操縦席の計器パネルのように見えたという。それでもビートルズはとりあえずサンプル・レコーディングをしてみたが、聴き直すときわめて劣悪な音質だった。結局ジョージ・マーティンがEMIに電話を入れ、アップルの8トラック・テープ・レコーダーにつなげるため、2台の4トラック・コンソールを一時借りなければならないというありさまだった。もっとも、ジョージ・ハリスンに言わせれば、その前から白衣を着たアレックスがクリップボードを手にぶつぶつひとりごとを言いながら、1トラックにつき小さなラウドスピーカーを1個ずつ72トラック分もどう置こうかとスタジオ内をうろうろしている姿を見かけたとき、すでにアップル・スタジオを現実のものとして考えることをあきらめたという。

アップルでのレコーディング・セッションは、トウイッケナムと比べると険悪さにおいて少しはましだった。少しだけでもましになったのは、ジョージがエレクトリック・ピアノとオルガンを担当するビリー・プレストンを連れてきたためだ。プレストンの参加で、すっかりだれてしまっていた気分が高まり、人とのつきあい方も改善された。親密になりすぎた人間が互いのあげ足を取り始めたようなとき、部外者がひとり加われば雰囲気はやわらぐものだが、このときはまさにそういう状況だった。

一方、映画"GET BACK"の監督となったマイケル・リンゼイ=ホッグを不安にさせていたのは、あれほど望みを託されていたテレビ番組の企画がたちどころにして消滅してしまったのだから、この映画もお蔵

CamScannerでスキャン

れになる可能性があるということだった。おまけに、ビートルズのアルバムのレコーディングには通常5か月かかると聞かされていたが、5か月間も撮影につきっきりにされるのではたまったものではない。そこで、1月26日にアップルで行なわれた"GET BACK"のミーティングで、次の木曜日にアップルの屋上でまったく告知せずにライブ演奏をしたらどうかという案を出した。ロンドン中心部の街中に自分たちのサウンドを響かせたらおもしろいだろうし、昼休みなら、近所の会社員や自営業の人たちにも無料で楽しんでもらえる。

じつは、屋上で演奏することは自分が発案したと主張している人は複数いる。それはつまり、このアイデアが関係者全員に受け入れられたということなのだろう。

そういうわけで、結果的にライブはうまくいった。場所はサハラ砂漠でも、ローマ時代の屋外円形劇場でもなく、おまけに建物の下にすぐに群がった大勢の人にはビートルズの姿さえ見えなかったが、とりあえず、ビートルズは最後のライブ演奏をすることができたのだ。この出来事は撮影され、マイケル・リンゼイ＝ホッグは映画"GET BACK"の申し分ないクライマックス・シーンを手にした。

映画"GET BACK"の撮影はその翌日終了した。しかし、製作そのものは完成からは程遠く、結局1年以上も長引いたこのプロジェクトは、ビートルズに重くのしかかった。そして、自分たちでは完成させたつもりだったアルバム"GET BACK"については、オリジナル・バージョンも、修正バージョンもリリースされなかった。どちらもビートルズ自身の手によって差し止められてしまったからで、もともと多少の粗っぽさは残すつもりでいた4人も、自分たちの音はこれほどまでにもささくれだって、荒れてしまったのかと自覚し、さすがに愕然とせざるを得なかった。しかも、こういったことが"SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND"を発表してから2年もたたないうちに現実に起きていたという事実を考えると、グループがどれだけ冷えきっていたか想像に難くない。

対立と奇跡

ビートルズは"GET BACK"の時点で完全に終わっていたと言ってもよかった。事実、アーティスティックな意味で4人の方向性はあまりにも離れてしまい、しばらくの間は互いにまったくとりつく島がなくなってしまった。さらに季節が春から夏に移ると、公にされなかったビジネス上の問題やさまざまな意見の相違が生じ、グループの存続はさらに窮地に追いやられた。とくにビートルズのビジネス・マネージメントを誰に託すかという問題をめぐる決定的な意見の対立は、もっとも大きなひびとなった。それまでビートルズは、問題が起きれば必ず4人で話し合って、全員が納得できる判断を導いてきていた。しかし、アップル・コープスの管理と収益の20パーセントをアラン・クラインに委任するというジョン、ジョージ、リンゴの意見にポールが痛烈に反対したとき、結局解決することのない衝突が生じたのだった。

逆に、ポールが新しい義父と義兄弟（妻リンダの家族）が経営するニューヨークの弁護士事務所イーストマン・アンド・イーストマンに管理を委任するという案を出したときは、ほかの3人が同じように猛烈に拒否した。これ以後、ポールと3人は完全に対立し、いがみ合い、共通の利益に関する問題でも一緒に立ち向かうことはなかった。そのため、ブライアン・エプスタインのNEMSエンタープライズはロンドンの金融街にある投機信託会社に乗っ取られ、ノーザン・ソングスが所有しているビートルズの楽曲の版権管理権は他人の手に渡ってしまい、さらにキャピトルとのレコーディング契約を巧みに更新させられるという大きな

このめずらしいイラストからもわかるように、自分とヨーコだけはうまく現実世界のしがらみから逃れたいと願っていたジョンも、現実にはほかの3人と同様に、ビートルズの息の根を止めた1969年のビジネス上のこみいった問題に悩まされていた

痛手を受けた。

7月になると、こうした危うい空気のなかで、さまざまな衝突はさておき、4人は最後にもう1枚アルバムをレコーディングするために集まった。タイトルはいつものように未定だったが、1962年からほとんどの曲をレコーディングしてきた、ロンドン北部にある緑の多い通りの名にちなんで、ビートルズはこのアルバムを"ABBEY ROAD"とすることにした。

そして、奇跡が奇跡を呼び、このアルバムは出来すぎと言いたくなるほどの作品となり、その驚異的な内容の濃さは、おそらく4人が一緒に作ったもののなかでも最高峰と言っていいものだった。とくに驚いてしまうのは、グループ内でうず巻いていた憎悪がセッションの間はほとんど姿を消し、ビートルズのそもそもの存在理由、つまり音楽のさまたげにはならなかったことである。ジョンの作風とボーカル、長いメドレーで見せたポールの並はずれた音楽的才能、ジョージのすぐれたミュージシャンシップと出色の出来となった2作品、リンゴのみごとなドラミング。このように"ABBEY ROAD"ではビートルズの4人全員がそれぞれの持ち味を存分に発揮した。レコーディング・スタジオのエンジニアたちが語ってきたように、4人が一緒にレコーディングしたのはベーシック・トラックだけで、オーバーダビングはほとんどソロに近い形で行なわれていたとしても、4つのパートが組み合わさるとまだひとつのグループの形になっていた。そして、1968年にほとんど同じような手法でレコーディングされたアルバム"THE BEATLES"に欠けていたのは、この調和という決定的な要素だった。

セッションの間、4人の悪感情がほぼ姿を見せなかったとはいえ、難しい局面にさしかかることは何度もあった。たとえば、誰かが楽器を手荒に扱ったり、スタジオに遅刻して3、4時間もほかの3人を待たせたり、自分のパートをきちんと演奏しなかったことやリハーサルしてこなかったことで、互いに責め合ったりした。ポールが1970年に起こした訴訟では、4人のパートナーシップがすでに法的にも解消したと主張した供述書のなかでポールは次のように述べている。「音楽的な見解の相違が、とくに私とジョンの間できわだってきました。"ABBEY ROAD"のレコーディングのころには、私たちはお互いの音楽をあからさまに批判するようになっていて、ジョンはもう自分の書いた作品以外の演奏に何の関心も示さないようになっていました」

アルバム"ABBEY ROAD"を最後に、ビートルズが4人で一緒に成功を手にすることはなかった。この年の残りと1970年はすべてソロ活動に費やされることになった。ジョンはプラスティック・オノ・バンドを新しい自分の表現の場とし、1969年の時点ですでにコンサートを2回行なった。11月には、リンゴがメンバーのなかで初めて純粋な意味のソロ・アルバムを制作した（ジョージの"ELECTRONIC SOUNDS"とジョンとヨーコの「実験的な」アルバムを除く）。ジョージはデラニー・アンド・ボニーのバック・バンドのメンバーとしてツアーをするという地味な活動に没頭した。ポールはこの先どうするか思案するためスコットランドの農場にこもっていたが、クリスマスごろにはソロ・アルバムのレコーディングを始めた。この時点でビートルズがついに行き着くところまで行ってしまったのは明白だった。

CamScannerでスキャン

1970年とそれ以降は、4人をつなぎ合わせていたねじれたしがらみを、どうすれば解きほぐせるのかという問題だけがビートルズの前に残されているように思われたが、これは予想どおり悪夢のようにもつれてしまっていた。

CamScannerでスキャン

"GET BACK" セッション始まる

1月2日(木)〜15日(水)

(1月4日、5日、11日、12日は除く)
トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's, Twickenham

ビートルズの活動のなかでも、おそらくもっとも混乱して、フラストレーションに満ちた"GET BACK"プロジェクトが始まった。

これから始まる活動が最終的に何をめざすべきなのかよくわからないまま、1月2日、ビートルズはとりあえずトゥイッケナムに集合し、テレビ番組用に新曲のリハーサルを開始した。また、リハーサルそのものを撮影する手はずを整えたが、これをいつ放送するつもりなのかもまったくわからないままだった。マイケル・リンゼイ=ホッグが本編のライブ・コンサート映像と、さらにリハーサル風景を追ったドキュメンタリー・フィルムの両方を監督、ビートルズがエグゼクティブ・プロデューサーで(出資していたから)、トニー・リッチモンドが撮影監督を務めた。さらに、ポールはグリン・ジョンズにサウンド面の監督をするように依頼した。

肩書きはないものの、実質的にはジョンズがサウンド・プロデューサーだった。したがって、トゥイッケナムでの技術的な問題を解決し、適切なサウンド・バランスを保ち、演奏や会話をしっかりテープに収めるのがジョンズに託された使命だった。それもふつうのレコーディング・スタジオにあるマルチ・トラックの設備ではなく、1/4インチの2トラック・テープを使用しての話である(したがって、トゥイッケナムでのセッションはどれひとつとして通常のレコーディングの規格に沿って収録されたことはない。これはレコーディング・セッションではなく、あくまでもリハーサルにすぎなかったからだ。この2週間にわたるトゥイッケナム・テープのなかから、実際にレコードに収録されるのは、ほんのわずかなアドリブの会話だけである)。

初日に、いきなり撮影にとりかかった。マル・エバンズと彼の助手が寒々とした、さもなくばがらんとした第1ステージにビートルズの機材を運び入れる風景を撮影した。ビートルズは午前11時に集合する予定だったが、時間どおりに到着したのはポール以外の3人で、このころロンドンでの移動にバスや地下鉄を使うのを好んでいたポールだけ、遅れて12時半になってやっと姿を現した。

月曜から金曜までというスケジュールで、大抵午前11時から午後1時の間に始めていたセッションで、ビートルズはかなりの時間を身を焼かれる思いで過ごすことになった。すべてがすべて破滅的にだめだとか、憂鬱というわけではなかったが、ほとんどが満足できない結果だった。はっきりした音楽的な方向性もなく、水面下ぎりぎりのところでは互いへの反発が煮えたぎり、怒りが湯気をたてていて、折りを見ては噴き出してしまうという状況のなか、寒々しくて空っぽなステージで仕事を続けるビートルズは、もはや形だけなぞっている、疲労して使いものにならなくなったロック・グループのひとつになろうとしていた。

トゥイッケナムのリハーサルのなかでもかなりまともな部分はほとんど映画"LET IT BE"に収録されている。残りのトゥイッケナムの映像は上映するにはあまりにもしのびない内容だ。このリハーサルで、ビートルズは100曲以上もジャム・セッションしていた。しかし、1曲を完全に演奏することもあれば、1行で終わってしまうものもあり、ほとんどが調子もリズムもはずれた、悲惨きわまりない演奏で、意志的に演奏されている曲などほとんどないと言ってもいい。曲目は'Baa Baa Black Sheep'のような童謡から、'All Shook Up'などのロックのスタンダード・ナンバー、'Help!'などのビートルズ初期の曲、そして将来のソロ曲となる'All Things Must Pass' 'Back Seat Of My Car' 'Child Of Nature (Jealous Guy)' 'Every Night' 'Give Me Some Truth' 'Maybe I'm Amazed' 'That Would Be Something'などとかなり多岐にわたっている。また、その場で作ったような曲もあり、これらは撮影されていたため、著作権登録しなければならなかった(たとえば、'Suzy Parker'はレノン=スターキー=ハリスン=マッカートニー、'Paul Piano Intro'はレノン=マッカートニー、'Jazz Piano Song'はマッカートニー=スターキーの曲となっている)。そうかと思えば、ナンセンスな'Chopsticks'や少年時代にラジオで流れていたような'When Irish Eyes Are Smiling'などといった曲まで演奏した。ともかく、まったくやる気のない2週間のリハーサルだったということを考えれば、これでもまずまずの出来だったと言うべきかもしれない。

しかし、1月10日には、ジョージがリハーサルをやめたうえ、ビートルズのメンバーであることまでやめてしまったので、このプロジェクトはとりあえず方向転換をせまられ、テレビ

CamScannerでスキャン

番組の話は、まだ漠然としていたコンサートの計画(告知なしのものや、即興コンサートも含めて)などと合わせて、すべていったんボツとなった。ただし、撮影はそのまま続行し、今度はアップルの新設スタジオで、アルバム制作風景の撮影をすることになる。

1月21日(火)
エルステッドからロンドンまでの車中
Elstead to London

「デイリー・エクスプレス」紙のポップ・ミュージック担当記者デビッド・ウィグから、BBCラジオ1の週刊ニュース番組「シーン・アンド・ハード」のために、ビートルズは個別にインタビューを受けた。1月25日午後1時から2時までの放送分に、リンゴの6分30秒にわたるインタビューが1回目の取材として使用されるが、これはこの日、サリー州の自宅からロンドンに向かうリンゴのメルセデス・ベンツの後部座席で収録されたものだ。この番組は1月28日午後7時45分から8時44分に再放送される。
1976年に、ウィグはこのころ行なわれたジョン、ポール、ジョージ、リンゴへのBBCインタビューの内容を編集して、それをアルバム"THE BEATLES TAPES"としてリリースした。すでに解散していたビートルズの4人は、このレコードのリリースを差し押さえようとしたが、結局発売されてしまう。

アップル・スタジオでセッションと撮影 ビリー・プレストンの参加

1月22日(水)
アップル・スタジオ
Savile Row, London

"GET BACK"のレコーディング・セッションはシングル'Get Back'の宣伝に使われたビートルズ自身の言葉によれば、「このエレクトロニック時代に、できるだけ自然なぬくもりを残すようにめざし、できるかぎり生の感触を残して、わけのわからないエレクトロニック処理はまったくしていない」ものであった。つまり、完璧主義のようにマルチ・トラック・レコーディングをきわめていたビートルズだが、ADT、テープ・ループ、オーバーダビングなどといった技術的な処理も捨てて、原点に戻ろうとしたのだ。したがって、ビートルズはニュー・アルバムに収録される全曲について完全にライブ録音するつもりで、ミスが生じてもそれはそのまま直さないつもりだった。
グリン・ジョンズは(ジョン・レノンはよく彼のことをイギリスの女優の名をもじってグリニス・ジョンズと呼んでいた)、先にも触れたようにこのセッションでは単なるバランス・エンジニアではなく、実質的なプロデューサーといえるだけの役割を担っていた。とくに"GET BACK"セッションでは、ジョージ・マーティンがどこまで関わっていたかは不明なので、なおさらそう言えるだろう。アップルでのセッション・テープを聴いてみても、ジョージ・マーティンの声が入っているのは一部だけで、そのほかのテープに関しては、ビートルズの面々がジョンズに話しかけたり、何かを聞いたり、要求したり、指示を出したりしているため、マーティンは不在だったと考えてもよさそうだ。同様にミキシングについても、ジョンズがすべてのセッションに参加しているのに対し、マーティンがどれだけ介在していたのかはっきりしない。そういった事情があまりにも込み入った状態で、結局シングル'Get Back'はプロデューサーのクレジットがないままリリースされた。さらに、ジョンズは1969年5月と1970年1月の2回にわたり、ビートルズの強い要請に応じてアルバム"GET BACK"をミキシングしているが、出来あがったものについては2回ともボツにされてしまった。
しかし、このセッションでの新顔はジョンズだけではなかった。1月22日、たまたまアップルの受付の近くにいたアメリカ人のオルガン・プレイヤー、ビリー・プレストンは、いきなりジョージ・ハリスンにつかまり、ビートルズが地下室でやっているセッションに参加させられてしまった。ビートルズの間の張りつめた緊張感をやわらげる存在が必要だったのと同時に、オーバーダビングなしでのレコーディングには、どうしても5人目の楽器奏者が必要だったのだ(じつはジョン、ポール、ジョージとプレストンとは、1962年からの知り合いだった。ビートルズがハンブルクのスター・クラブで演奏していたころ、まだ10代だったプレストンもリトル・リチャードのバック・バンドのメンバーとして、2週間スター・クラブでビートルズと共演していたからだ)。プレストンは500ポンドの報酬で"GET BACK"セッションのほぼすべてに参加し、1月31日にはソロ・アーティストとしてアップル・レコードと契約を交わす。アップルから最初に出るプレストンのアルバムは、5月5日からオリンピック・サウンド・スタジオでレコーディングされ、ジョージ・ハリスンがプロデュースし、グリン・ジ

CamScannerでスキャン

ョンズがすべてをミキシングすることになる。
'GET BACK" セッションについては、のちにジョージが
「史上最悪だった」と言い、ジョンにいたっては「まるで地
獄で…地球上でいちばん悲惨なセッション」とまで語って
いるが、このセッションはその性質上、そもそも計画の立て
ようもなく、かつ即興的な内容にならざるを得なかったこと
を考えておくべきだ。ビートルズは曲をやみくもに変えてひ
っきりなしにジャム・セッションにふけった。その結果、何か
完成することはほとんどなかった。テープが回っている間
も、しゃべったり、ジョークを言ったり、言い争ったりした。
いきなり曲の最初のテイク数が32になってしまうこともあっ
た。なかにはテープの内容を簡単に記述するのさえ難し
く、ポールが暇を見つけて聴き直していき、ラベルに簡単
な注意書きをメモするまでは、タイトルがまったく空白のま
ま放っておかれるテープも多かった。セッションの初日であ
る1月22日のテープには、ジョンの曲 'All I Want Is You'
('Dig A Pony' の仮タイトル)、ポールとジョンの 'I've
Got A Feeling'、ジョンの 'Don't Let Me Down'、
ポールが 'Rocker' と名づけバンド全員で作ったインスト
ゥルメンタル、ポールの 'Bathroom Window' ('She
Came In Through The Bathroom Window' の仮
タイトル)、ドリフターズの 'Save The Last Dance For
Me' のカバー、ポールがキャンド・ヒートについて説明する
ために弾いたキャンド・ヒートの曲 'Going Up The Country'
が収録されている。この日、ビリー・プレストンは4人がポー
ルの 'Bathroom Window' のコード進行を練っていた
とき、エレクトリック・ピアノで初めてセッションに参加した。
この曲は、のちに "ABBEY ROAD" で正式にレコーデ
ィングされることになる。

オペレーターはアラン・パーソンズ

1月23日(木)

アップル・スタジオ
London

この日のセッションには、アラン・パーソンズが初めてビート
ルズのテープ・オペレーターとして参加する。彼はのちにト
ップ・プロデューサーになり、アラン・パーソンズ・プロジェク
トを結成して大成功をおさめる。セッションでは、このプロ
ジェクトを唯一支える存在理由ともなっていたポールの新
曲 'Get Back' を10テイクと、ビリー・プレストンのエレクト
リック・ピアノを中心とした1分ほどのインストゥルメンタル・ジ
ャムを収録した。テープ・ボックスには、このジャムにふさわ
しい 'Blues' というタイトルが記されている。

1月24日(金)

アップル・スタジオ
London

この日のテープには、ポールの曲 'On Our Way Home'
(のちに 'Two Of Us' と改題される)と 'Teddy Boy'
'Maggie Mae'、ジョンの 'Dig It' と 'Dig A Pony'、
ポールとジョンの 'I've Got A Feeling' が収録された。
'Maggie Mae' は有名な夜の女について歌ったリバプ
ールに古くから伝わる歌だが、これは 'On Our Way Home'
のテイクのあいまに、もとの曲にかなり手を加えて38秒間
だけ演奏されたものだ。アルバム "LET IT BE" には「ト
ラディショナル、アレンジ:レノン=マッカートニー=ハリスン=
スターキー」のクレジットで収録されることになる。
ビートルズが演奏した 'Teddy Boy' は "GET BACK"
に収録されるが、このバージョンは1996年 "ANTHOLOGY
3" まで発表されなかった。ポールはこの曲をひとりで録音
し、初のソロ・アルバム "McCARTNEY" に収めて、1970
年4月にリリースする(1970年2月21日参照)。
'Dig It' は2バージョンあり、そもそもジョンが即興で作っ
た曲だが、アルバム "LET IT BE" でのクレジットはレノ
ン=マッカートニー=スターキー=ハリスンとなる。この日収
録された最初のバージョンは発表されないが、曲の最後の、
「That was 'Can You Dig It' by Georgie Wood,
now we'd like to do 'Hark The Angels Come'
(今のはジョージー・ウッドの 'Can You Dig It' でした。
次は 'Hark The Angels Come' をやりまーす)」とい
うジョンによる子どもっぽい語りは、アルバム "GET BACK"
と "LET IT BE" に収録されたバージョンの最後につな
げられる。
スタジオ資料によれば、この日の夕方、グリン・ジョンズはバ
ーンズにあるオリンピック・サウンド・スタジオで90分にわた
るセッションで、何曲か(曲名は不明)のラフなステレオ・ミ
ックスを作った。ビートルズのメンバーは誰も参加していな
い。

CamScannerでスキャン

1月25日(土)
アップル・スタジオ
London

'Untitled Jamming'(非常に短いインストゥルメンタル曲)、1957年のエバリー・ブラザースのヒット曲'Bye Bye Love'をスピード・アップさせたジャム・セッション、それと新曲2曲、ポールの'Let It Be'とのちに'For You Blue'と改題される'George's Blues'をレコーディングした(1970年1月8日参照)。

ジョージのデモ 'Isn't It A Pity'

1月26日(日)
アップル・スタジオ
London

'Dig It'のセカンド・バージョンはこの日のセッションから開始された。しかし、この日のレコーディングでは長さが12分25秒もあったため、アルバム"GET BACK" "LET IT BE"のどちらでも収録するにあたってかなり縮めることになる。"GET BACK"では、8分27秒のところからフェイド・インし始めるバージョンが使われ、"LET IT BE"では8分52秒から9分41秒までの部分しか収録していない。6週間後にはポールの義理の娘となる6歳のヘザー・イーストマンが、曲の前半で印象的なバック・ボーカルを入れ、ジョージ・マーティンがシェイカーを振っている。

それからは長いロックンロール・メドレーとなった。'Shake Rattle And Roll'(1954年のジョー・ターナーの曲)から始まって、'Kansas City'(1959年のウィルバー・ハリスンの曲、ビートルズが"BEATLES FOR SALE"に収録したリトル・リチャードのカバーとはまったく違うアレンジ)、'Miss Ann'(1956年リトル・リチャード)、'Lawdy Miss Clawdy'(1952年ロイド・プライス)、'Blue Suede Shoes'(1956年カール・パーキンス)、'You Really Got A Hold On Me'(1962年スモーキー・ロビンソン・アンド・ミラクルズ、"WITH THE BEATLES"にも収録)と続いた。さらにジョージが中心となって'Tracks Of My Tears'(やはりスモーキー・ロビンソン・アンド・ミラクルズの1965年の曲だが、ヒットしたのは1969年)のほとんどインストゥルメンタルに近いバージョンを録音した。

この日はほかに2曲をレコーディングした。1曲はポールのバラード'The Long And Winding Road'で、この作品はのちにまたとりあげられることになるが、もう1曲の、ジョージがひとりで軽く弾いたリード・ギターとボーカルでレコーディングした未タイトル曲のデモは、この日以降ビートルズが演奏することはない。これはじつはのちに'Isn't It A Pity'というタイトルになるが、ビートルズとしてはレコーディングされず、1970年11月30日にリリースされるジョージの3枚組ソロ・アルバム"ALL THINGS MUST PASS"のなかでも群を抜いた曲となる。

スタジオの記録によれば、この日の夕方も、グリン・ジョンズひとりがオリンピック・スタジオでの90分のセッションで何曲か(数は特定できない)をステレオ・ミキシングした。

1月27日(月)
アップル・スタジオ
London

'Untitled Jamming' 'Get Back' 'Oh! Darling' 'I've Got A Feeling' 'The Walk'をレコーディングした。

'Untitled Jamming'はその名のとおり無題のジャムとなり、10分54秒にもわたって、さしたる構成もないまま延々と続くヘビーな演奏で、ほとんど聴くに耐えない。

このジャム・セッションの大半は、'Get Back'のためのものだったが、どのバージョンも発表できるほどの成果は生まず、わずかにジョンがポールの歌詞を茶化した「Sweet Loretta Fart she thought she was a cleaner but she was a frying pan (かわいいロレッタ・ファート(おなら)、自分が掃除機の吸い込み口だと思っていたのに、ほんとはフライパンだった)」というくだりだけがアルバム"LET IT BE"のなかで使われただけだった。ポールの'Oh! Darling'はのちに"ABBEY ROAD"で正式にレコーディングされるが、この日は通しのリハーサルにとどまった。また、ビートルズは1958年3月にアメリカでヒットしたジミー・マクラクリンの'The Walk'のカバーでジャム・セッションをした。

この日、ジョンは音楽ビジネス・マネージャーのアラン・クラインに会い、財政面の管理を依頼する。

CamScannerでスキャン

19枚目のシングル 'Get Back'

1月28日(火)

アップル・スタジオ
London

この日は、次のシングルに収録される'Get Back'と'Don't Let Me Down'の2曲をレコーディングするという、驚くほど生産的なセッションとなった。また、'Love Me Do'と'One After 909'という初期の2曲を再びとりあげたという意味でも興味深いセッションだった(ほかに、'Dig A Pony' 'I've Got A Feeling' 'Teddy Boy'も録音した)。

'Get Back'と'Don't Let Me Down'については、ビートルズとビリー・プレストンが突如としてみごとなコンビとなって、どちらもすばらしいバージョンとなった。'Get Back'のエンディングはかなり長かったため、シングルではフェイドアウト処理が加えられた。最後はポールの「ho-ho-ho」という声で終わっているが、この最後の部分は未発表の"GET BACK"と映画"LET IT BE"のエンディングにも使用されている。

すべての始まりとなった曲'Love Me Do'の1969年版は非常に魅力的だ。しかし、残念ながら、音質は非常に悪い。ほとんどの"GET BACK"セッションと同じで、この曲もまじめにリメイクを試みたというよりは即興のジャムに近く、スローでややブルージーな演奏で、ポールのボーカルをジョンがサポートした2分20秒の完全バージョンとなっている。しかし、いくら"GET BACK"プロジェクトがビートルズのラフな面を前面に打ち出したものだったとはいえ、これではあまりにもラフすぎた。

'One After 909'は、1963年3月5日にEMIで収録したまま未発表となっていた曲だ。この日はジャム・バージョンを数回収録した。さらに、ビリー・プレストンが4人をミュージシャンとしてうまく使って、2曲のデモ、'Billy's Song(1)'と'Billy's Song(2)'をレコーディングした。2曲ともサザン・スタイルのブルースだが、いずれも発表されていない。

テープには、セッションの最後に、ビートルズの面々がリハーサルにするのかレコーディングにするのかを長い間話し合っている様子が録音されている。いっそのこと、全部やめてしまったらどうか、映画はどうするのか、続けるとすればいつ終わって、どんな曲をやるのか。4人はかなり活発に意見を出し合ってはいるが、会話に出てくる質問や答えとその声色から察して、"GET BACK"プロジェクトが行き詰まっていたことは明らかだ。

また、アラン・クラインはこの日、ビートルズ全員と話し合う。結果、ジョージとリンゴは財政管理を依頼し、ポールは退席する。

1月29日(水)

アップル・スタジオ
London

'Teddy Boy' 'One After 909'、ジョンの'I Want You'(のちに"ABBEY ROAD"のために'I Want You (She's So Heavy)'として再収録される。1969年2月22日以降を参照)、バディ・ホリーの'Not Fade Away'と'Mailman, Bring Me No More Blues'、さらに昔のキャバーン・クラブの客に大ウケして、1962年6月6日に初めてEMIを訪れた際に演奏した4曲のうちの1曲、'Besame Mucho'をレコーディングした。

アップル屋上のライブ

1月30日(木)

アップルの屋上
London

かの有名なアップル屋上ライブの日。1月26日のミーティングで提案されたこのアイデアは、ビートルズとビリー・プレストンによる2回連続の「パフォーマンス」の1回目である。2回目は翌1月31日、地下のスタジオで曲を演奏するという形で行なわれ、これにより"GET BACK"プロジェクトが終わることになる。

この日の仕事はコンサートとは呼べないが、ビートルズ最後のライブ・パフォーマンスとして歴史に残っている。42分間にわたるライブは(このうちの約半分が映画"LET IT BE"の最後に使用されセンセーショナルな締めくくりとなる)、寒風吹きすさぶランチタイムに行なわれ(1月のロンドンの高い屋上がどれほど寒いか想像してもらいたい)、ロンドンの中心部にあたるこの一帯の機能を麻痺させてしまい、警察がショーの中止を要請するまで、続けられた。

42分間の演奏の多くが、映画"LET IT BE"と、アルバム"GET BACK"(未発表)と"LET IT BE"に流用された。ここでは、EMIの8トラック・テープに収録された屋

CamScannerでスキャン

上ライブでの演奏レパートリーと、どうリリースされたかを記しておく。
1. 機材のセッティング。マイケル・リンゼイ=ホッグが「カメラ全部、テイク1!」と叫ぶ。1曲目は'Get Back'のリハーサル。曲が終わると、屋上にいた人々がお行儀よく拍手。ポールはこれを聴いてクリケットの試合を連想し、マイクに向かいテッド・エクスター(当時サセックス州代表とイングランド代表のクリケット選手)について何やらつぶやく。ジョンは「マーティン・ルーサーからのリクエストでした」と言う。
2. 再び'Get Back'を演奏(映画"LET IT BE"では'Get Back'の最初の2バージョンを非常に巧みに編集している)。曲の最後にジョンが「デイジー、モリス、トミーに捧げるリクエストでした」と言う。
3. 'Don't Let Me Down'(映画"LET IT BE"に収録)。そのまま4曲目へ。
4. 'I've Got A Feeling'(映画およびアルバム"LET IT BE"収録)。ジョンが最後に「まいったな…(拍手)…ほんとにしんどいぜ」とつぶやく。
5. 'One After 909'。曲の最後に、ジョンが1913年のスタンダード・ナンバー'Danny Boy'の一節を皮肉っぽく歌っている(映画およびアルバム"LET IT BE"と"GET BACK"に収録)。
6. 'Dig A Pony'。オープニングは1回失敗する(「one, two, three」のあとでジョンが「待った」を入れて鼻をかみ、再び「one, two, three」と始まる)。曲の最後に、ジョンが「ありがとう、みんな…手がかじかんでコードが弾けない」と言う(映画およびアルバム"LET IT BE"で採用。ただし、アルバムではプロデューサーのフィル・スペクターがオープニングと最後の「All I want is」というボーカル・ラインを編集でカット)。この8トラック・テープには曲を始める前の短いリハーサルも収録されており、そこでジョンが歌詞を確認している。映画ではクリップボードにとめた歌詞を持ってジョンの前にひざまずいているアシスタントの姿が映っている。
7. 最初のテープがいっぱいになったため、セカンド・エンジニアのアラン・パーソンズがテープを交換する。待っている間に、ビートルズとビリー・プレストンがイギリス国歌'God Save The Queen'をさっとつま弾く。2本目のテープにはこの演奏が数秒間収録されているが、映画にもアルバムにも採用されていない。
8. 'I've Got A Feeling'の2回目の演奏(映画にもアルバムにも収録されず)。
9. 'Don't Let Me Down'の2回目の演奏(映画にもアルバムにも収録されず)。そのまま次の演奏に続く。
10. 'Get Back'の3回目の演奏。警察から演奏をやめるよう要求され、途中でやめそうになりながらも何とか曲を終え、ポールがアドリブで「You've been playing on the roofs again, and you know your Momma doesn't like it, she's gonna have you arrested!(また屋根で演奏したね。ママはこれが嫌いなのを知ってるだろう。そのうち逮捕されるぞ!)」と最後に歌う。曲が終わるとポールが、熱心な拍手と声援を贈ったリンゴの妻モーリーンに「ありがとう、モー」と言う。うしろに下がっていたジョンはまたマイクのそばに寄り、少しおどけた様子で「グループと自分たちを代表してみなさんにお礼を申しあげます。これでオーディションに合格するといいんだけどな!」と語りかける('Get Back'の演奏自体はアルバムに収録されないが、このポールとジョンのコメントは未発表アルバム"GET BACK"に収録されている。アルバム"LET IT BE"の'Get Back'は、あたかも屋上ライブの演奏のようだが、じつは1月28日の'Get Back'のシングル・バージョンから屋上でのアドリブへ巧みにクロスフェイドさせていったものだ。このバージョンの'Get Back'とアドリブをそのまま鑑賞できるのは映画"LET IT BE"のなかでだけである)。

スタジオ資料によれば、この日の夜、7時半から10時まで、バーンズのオリンピック・サウンド・スタジオで、グリン・ジョンズが何曲か(詳細は不明)のステレオ・ミックスを作っている。ジョンズは自らの意思でこれらのミックスをアセテート盤にカッティングし、ビートルズに渡している。

B面に'Don't Let Me Down'を収録したシングル'Get Back'がリリースされると、アップルは、マイケル・リンゼイ=ホッグが撮影したフィルムをもとに制作した16ミリ・カラーのプロモーション・クリップをテレビ局に配給した。この映像には当然、1月28日にレコーディングされた音は含まれないが、映像と音声は巧みにシンクロされ、1970年5月にようやく公開させる映画"LET IT BE"でも、このクリップの映像とまったく同じにならないように配慮される。'Get Back'は屋上ライブからのフィルムを編集したもの、'Don't Let

CamScannerでスキャン

Me Down' はトゥイッケナムでの映像と屋上ライブのフィルムを組み合わせたものだ。

イギリスでは'Get Back'のみが、1969年4月24日、5月8日、5月15日、5月22日のBBC1の番組「トップ・オブ・ザ・ポップス」(いずれも木曜の午後7時30分から8時)で白黒で放送され、12月25日午後2時15分から3時までの「トップ・オブ・ザ・ポップス'69—パート1」ではカラー放送される。アメリカでは'Get Back'と'Don't Let Me Down'の両方が、1969年4月30日(EST午後7時30分から8時30分)にCBSテレビの「ザ・グレン・キャンベル・グッドタイム・アワー」で放送される。

セッションの撮影完了 'Let It Be' のビデオ・クリップも

1月31日(金)

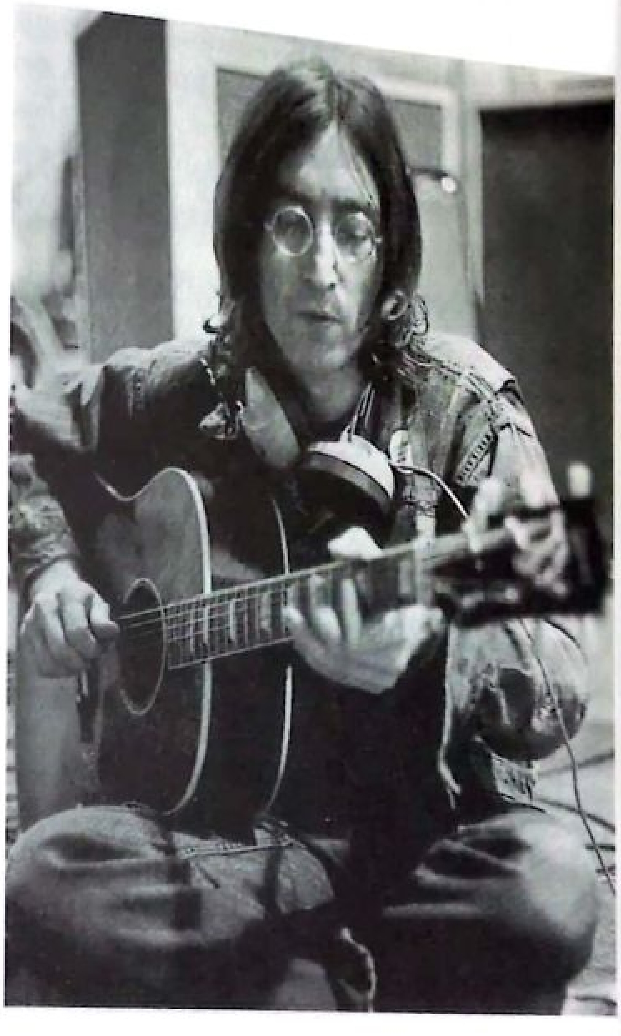
アップル・スタジオ
Savile Row, London

「アップル・スタジオ・パフォーマンス」、つまり屋上のライブにはそぐわなかった作品、ピアノ・ナンバーである'The Long And Winding Road'と'Let It Be'、アコースティック・ナンバーの'Two Of Us'の最終レコーディングを行なう。ビートルズはまた、'Lady Madonna'のジャム・セッションもレコーディングし、のちにグリン・ジョンズがこれをアルバム収録用としてミックスするが、とうていリリースできるようなものではない。

この日のレコーディングで、ビートルズとビリー・プレストンは台の上でステージ演奏をするかのような形をとって、レコーディングにのぞんだ。映画"LET IT BE"を観てもわかるように、すべてポールの曲であるため、焦点はすべてポールに合わせられていた。

このセッションで"GET BACK"の撮影は完了した。しかし、最終的な作品に仕上がるまでには膨大な時間がかかることとなる。

シングル'Let It Be'のプロモーションのために、アップルは、この日レコーディングと撮影をした'Let It Be'の9テイクのうちのひとつ(映画"LET IT BE"に収録された映像とは違うもの)と、'Two Of Us'および'The Long And Winding Road'の演奏シーンを組み合わせた16ミリ・フィルムのカラー・クリップをテレビ局に配給。シングル盤の'Let It Be'の音声をシンクロさせ、さらにオーバーダビングもほどこされる(1969年4月30日参照)。この'Let It Be'のビデオ・クリップは、イギリスでは2回、1970年3月5日と19日、いずれも午後7時15分から8時にかけてBBC1の「トップ・オブ・ザ・ポップス」でカラー放送される。アメリカでは、1970年3月1日午後8時から9時(EST)まで放送されるCBSの「エド・サリバン・ショー」のなかの「ザ・ビートルズ・ソングブック」と題された特集で紹介される。'Let It Be'以外はほかのアーティストによるビートルズのカバーで構成される特集。



CamScannerでスキャン

リンゴ、映画
"THE MAGIC CHRISTIAN"の撮影
2月3日(月)〜5月2日(金)

トゥイッケナム・フィルム・スタジオ
St Margaret's Twickenham
ロンドン周辺ロケ地
London

映画"CANDY"は、撮影後2年と2か月もたっているのにまだ公開されていなかったが(ロンドンでようやく初公開されるのは1969年2月20日)、リンゴはビートルズの外での役者活動に再び乗り出した。今回は、金銭に対する人間の貪欲さを描いた1959年のテリー・サザンの風刺小説の映画化"THE MAGIC CHRISTIAN"で、リンゴは主役のピーター・セラーズの助演という、前よりも大きな役を手中にした。

この映画は基本的にはいくつかのストーリーを集めたもので、エキセントリックな億万長者のサー・ガイ・グランド(セラーズ)が、金と引き替えにどれだけのことを請け負うつもりがあるのか、人々を試していく。リンゴはサー・ガイ・グランドの養子のヤングマン・グランドという役どころで、映画を通して「人間にはみな価格がある」と証明していくセラーズと行動をともにする。この役は原作にはなく、リンゴのため特別に作られたものだが、映画製作に参加していた原作者サザンの許可を得て追加された役だ。また、原作ではアメリカに設定されている舞台はイギリスに変更、おもな撮影は明らかにロンドンで行なわれている。監督はジョセフ(ジョー)・マッグラスで、リンゴをヤングマン・グランドの役にキャスティングしたのも、じつは彼とピーター・セラーズだった。製作はグランド・フィルムズ社のデニス・オデル(アップルでも仕事をしていた)が請け負い、アメリカの金融会社コモンウェルス・ユナイテッド社が出資していた。

原作者のサザンが製作に加わったが、脚本は彼ひとりの筆によるものではなく、脚本クレジットはジョー・マッグラスとの連名で、ピーター・セラーズやまだ無名であったイギリスのコメディ作家ジョン・クリーズとグラハム・チャップマンの2名も脚本執筆に協力している(ふたりは出演もしている)。

この映画はキャスティングにかなり力を入れており、セラーズ、リンゴ、クリーズ、チャップマンのほかに、リチャード・アッテンボロー、ユル・ブリンナー、ロマン・ポランスキー、ローレンス・ハーベイ、クリストファー・リー、デニス・プライス、スパイク・ミリガン、ラクエル・ウェルチ、ウィルフレッド・ハイド・ホワイト、"HELP!"に出演したパトリック・カーギルなど、とくにイギリスではおなじみの俳優が大勢顔をそろえていた。

撮影は月曜から金曜まで、トゥイッケナムの3つのステージすべてを使って、13週間にわたって進められた。リンゴの撮影場面が詳細に記された資料はもはや存在しない。しかし、リンゴはいくつかのロケ地を含めて、13週間を通してほとんどの撮影に参加している。ロケ撮影には、たとえば次のようなシーンが含まれた。

3月13日にはロンドンの南西にあるサリー州のコーバム・コモンでライチョウを撃つシーンを撮影。

3月18日にはテムズ川沿いのパットニーにあるロウアー・リッチモンド・ロードのスター・アンド・ガーター・パブの前で、交通巡査役のスパイク・ミリガンと繰り広げるおかしなシーンを撮影した。

4月1日にロンドン東部のストラトフォードにあるシアター・ロイヤルで、ハムレットのストリップ・ショーのシーンを撮影(この劇場の前で、ビートルズは以前'Penny Lane'のプロモ・クリップを撮影していた)。

4月9日にスター・アンド・ガーター・パブと同じ通りにあるバークレイズ・バンク・ボートクラブでボートレースのシーンを撮影(映画では途中に実際行なわれていたオックスフォード対ケンブリッジのレースが挿入された)。

このほかの詳細はよくわからないが、ハイド・パーク、バッキンガム宮殿の外、オックスフォード大学の中庭、パブリック・スクールのウエストミンスター校の事務所、エルストリー近くの野原、バーンズ駅の駐車場、ニュー・ボンド・ストリートにあるサザビーのオークション・ルームなどといった各種ロケ地での撮影にリンゴは参加している。

映画のクライマックスもロケで、サウスバンクにある、ナショナル・フィルム・シアター(国立映画劇場)付近のテムズ川沿いで撮影された。これはサー・ガイ・グランドの最後の実験のシーンで、家畜のフンでいっぱいになった巨大な槽に何百枚もの紙幣を放り込み、大きなへらでかき混ぜる。しかし、身だしなみのきちんとした町の紳士たちは金に執着し、槽をまたいで飛び込み、フンに浸った紙幣をつまみ出していき、サー・ガイ・グランドを満足させる。当初このシーンはニューヨークのウォール街で撮影するはずだったが、スポンサーであるアメリカの金融会社コモンウェルス・ユナ

CamScannerでスキャン

イテッドが認めなかった。そもそもコモンウェルス・ユナイテッドはこのシーンの存在そのものに反対していたが、このシーンの重要性を主張したピーター・セラーズが自腹を切ってもこのシーンの撮影を敢行するとまで言い出すにおよび、コモンウェルス・ユナイテッドもやっと折れて撮影に同意した。このシーンの撮影はほかの撮影がとっくに終わったあとに行なわれ、おそらくトゥイッケナムで最後の撮影が行なわれた6月23日から26日の間である。

製作は期日内に、しかも予算内で終わったため、コモンウェルス・ユナイテッドは、リンゴ、ピーター・セラーズ、ジョー・マッグラス、デニス・オデルとそれぞれの夫人を、初航海を終えたばかりだったクイーン・エリザベス2世号でニューヨークへ行く船旅をプレゼントした。5月16日にサウザンプトンを出航した彼らは22日にニューヨークに到着。アメリカでは映画"THE MAGIC CHRISTIAN"の撮影はなかったため、全員そのままバハマに向かい、2週間の休暇をとる。

帰国したリンゴとピーター・セラーズは、トゥイッケナムで予告編の音声ダビングなども含む映画の仕上げに入る。映画"THE MAGIC CHRISTIAN"は、12月11日、ロンドン西部のケンジントンにあるオデオン・シネマにて世界プレミアが行なわれ、リンゴと妻のモーリーン、そしてジョンとヨーコが出席する。

さらに1969年12月の映画公開に向けて、リンゴとセラーズはプロモーション活動を開始(リンゴの活動についてはそれぞれの該当日付参照)。セラーズのプロモーションでとくに目立ったのは、この映画の製作ドキュメンタリーだ。プロデューサーはデニス・オデル、監督はトニー・パーマー(テレビ番組『オール・マイ・ラビング』の制作者、1968年5月23日参照)で、12月18日午後9時10分から10時まで『ウィズ・ザ・リアル・ミスター・セラーズ…』と題して放送される。この50分番組では、映画からの短い抜粋シーンに加え、セラーズとリンゴの撮影舞台裏や、5月4日の撮影打ち上げパーティーに出席したジョンとポールの姿も収録される(5月4日参照)。また、ポールは"THE MAGIC CHRISTIAN"のテーマ曲'Come And Get It'を作った。この曲はアップルのグループ、バッドフィンガーによってリリースされる(1969年7月24日参照)。

2月5日(水)

アップル・スタジオ
London

1月30日に屋上ライブでレコーディングした曲のステレオ・ミックスを作り、'I've Got A Feeling'(2バージョン)、'Don't Let Me Down'、'Get Back'(2バージョン)、'One After 909' 'Dig A Pony'がそろった。

2月11日(火)

EMIスタジオ、第53室
London

ジョンとヨーコのアバンギャルドなレコーディングのオリジナル・モノ・マスターから、疑似ステレオのテープを制作する。EMIの資料には、曲名の詳細は記されていない。午後3時から午後5時半までのセッションで、最後にジョンがオリジナル・テープと制作した新しいテープの両方を持ち帰った。

"ABBEY ROAD"収録曲に着手

2月22日(土)

トライデント・スタジオ
London

"GET BACK"セッションがどこで終わり、"ABBEY ROAD"セッションがどこで始まるのか、厳密に区切ることはできない。"ABBEY ROAD"のセッションが本格的に開始されたのは7月になってからだが、それまでにもアルバム収録曲のレコーディングは着実に進んでいた(しかも"GET BACK"のフィルム撮影は1月31日をもって完了していた)。

そんな作品のひとつが1月29日にアップルで初めてリハーサルしていたジョンの'I Want You'で、リリースされるときには'I Want You (She's So Heavy)'となる。この日トライデント・スタジオでの午後8時から午前5時までのセッションで、この曲のベーシック・トラックとガイド・ボーカルを35テイク、初めてまともにレコーディングした。しかし、なぜトライデントを使用し、しかも1月31日から3週間も空白があったのはどうしてなのか。トライデントを使った理由は"GET BACK"の撮影が終了し、アップル・スタジオが設計と設備の全面見直し改築工事に入ったからだが、そうでなくてもビートルズはEMIとは別のインディペンデント・スタジオを

使いたがっていた。さらに、セッションがこの日まで延期されていたのは、2月7日から15日まで、ジョージ・ハリスンが扁桃腺手術のため入院していたからだ。また、2月初めからアメリカに渡っていたグリン・ジョンズとビリー・プレストンもこの日にはロンドンに戻り、セッションに参加した。

2月23日(日)
トライデント・スタジオ
London

午後6時半から12時までのセッションで、'I Want You' のテイク9、20、27を編集し、1本のマスター・テイクを作った。これを8トラックにコピーし、最後にラフ・モノ・ミックスを作ってジョンが持ち帰った。

誕生日を迎えたジョージ、ひとりでデモ録音

2月25日(火)
EMIスタジオ
London

26歳になった自分への誕生日プレゼントのつもりだったのだろうか、この日ひとりでEMIスタジオを訪れたジョージは、コントロール・ルームにケン・スコットだけを入れ、丹念なボーカル、ギター、ピアノによる最新作3曲のデモ・テープをレコーディングした。'Old Brown Shoe' (ビートルズの次のシングルのB面収録曲となる)を2テイク、'Something' ("ABBEY ROAD"およびシングルのA面収録曲となる)を1テイク、そして'All Things Must Pass' (ビートルズとしてはトゥイッケナムでの"GET BACK"セッションで収録されただけだが、のちに1970年11月30日発売のジョージの3枚組アルバムのタイトル曲となる)を2テイク録音した。
どのスタジオで何時から何時までセッションしたのかは記録されていないが、この日のレコーディングは、アセテート盤がカッティングできるようにミックス・ダウンもされている。

ポール、メリー・ホプキンに提供した曲をプロデュースする

3月1日(土)
モーガン・スタジオ
High Rd Willesden, London

数百万枚ものセールスを記録し、大成功をおさめたメリー・ホプキンのデビュー曲 'Those Were The Days' に続く2枚目のシングルが、この日モーガン・スタジオでレコーディングされた。ここはロンドン北部にできた新しいスタジオで、1970年にはポールとリンゴがそれぞれソロ・アルバムのレコーディングに使う。
新曲は(クレジットはレノン=マッカートニーとなっているが、実際は)ポールが彼女のために特別に書いた'Goodbye'である。ポールはB面収録曲のギャラガー=ライル作の'Sparrow'もあわせて、レコーディングのプロデューサーを務めた。セッションにはアップルのトニー・ブラムウェルが参加し、プロモーション・クリップの映像をストックするためにこのときの様子を16ミリ・カラー・フィルムで撮影した。この映像を使って制作されたプロモーション・クリップのひとつでは、ポールとメリーは話したり仕事をしたりしているだけではあるが、イギリスのテレビでは一度も放送されていない。また、セント・ジョンズ・ウッドのポールの自宅の裏庭で、キンポウゲの花のなかで歌っているメリーを撮影した2本目のクリップも放送されていないようだ。

ソロとして初めてジョンがコンサートに出演

3月2日(日)
レディ・ミッチェル・ホール
Sidgwick Ave, Cambridge, Cambridgeshire

ビートルズのメンバーがソロで出演した最初のコンサートは、500人の観客を前にしたケンブリッジ大学のステージだった。しかし、この日のジョン・レノンのステージは、観客が期待していたポップ・ロック・スターの演奏とはほど遠いものだった。ヨーコがステージの前に出て、マイクに向かって、叫び声やうめき声、しゃがれ声を出す一方で、ジョンもそれに合う伴奏を試みた。つまり、ステージのうしろでスポットも浴びることなく、演奏の最初から最後までギターをアンプとフィードバックさせ、ほえるようにけたたましく、耳をつんざくような音を立てることしかしなかったのだ。この煽動的な演奏にはほかには誰も加わらなかったが、最後の最後になってやっとサックスとパーカッションが加わり、この「実験的音楽」へのヨーコの演奏も終わった。
ジョンとヨーコは、これまでのふたりの成り行きからすればごく当然のごとく、この演奏をレコーディングしていて、リリ

CamScannerでスキャン

ースすべきだと判断。アルバム"UNFINISHED MUSIC NO 2: LIFE WITH THE LIONS"の片面全部に収録し、5月9日にイギリスでリリースされる。

グリン・ジョンズ、アルバム"GET BACK"の編集作業に入る

3月4日(火)

アップル・コープス
London

"GET BACK"のレコーディング・セッションが終わってから、はや5週間が経過し、ビートルズとしてはどうやら、いいかげんに"GET BACK"プロジェクトにけりをつけたいと考えていたようだ。そこで3月初旬のある日、ジョンとポールはグリン・ジョンズをEMIに呼び出し、アップルで1月にレコーディングした8トラック・テープの山を示し、自由裁量で完成したアルバムにしてみてくれないかともちかけた。そこでジョンズは、自分の気に入っているオリンピック・サウンド・スタジオを予約して、作業を開始した。

注:1991年にEMIが公開した経理と総務部の資料には、ジョンズがオリンピックで行なった"GET BACK"ミックス・セッションの日付も記録されているが、これは1988年の拙著『ザ・コンプリート・ビートルズ・レコーディング・セッションズ』に記載した内容とは違っている。そこで、ここではその最新情報にのっとって記載する。しかし、ジョンズがどの日にどの曲をミキシングしたのかを確認するのはもう不可能である。とりあえずわかっているのは、4月3日、4月4日、4月7日、5月2日、5月7日、5月9日、5月15日、5月28日に作業をして(時間帯は不明)、その結果、次の曲のミックスがEMIに届けられたことだ。'Get Back'(2バージョン)、'Teddy Boy' 'Two Of Us'(2バージョン)、'Dig A Pony' 'I've Got A Feeling'(2バージョン)、'The Long And Winding Road'(3バージョン)、'Let It Be'(2バージョン)、'Rocker' 'Save The Last Dance For Me' 'Don't Let Me Down' 'For You Blue' 'The Walk' 'Lady Madonna' 'Dig It'(2バージョン)、'Maggie Mae'、そして'Shake Rattle And Roll/Kansas City/Miss Ann/Lawdy Miss Clawdy/Blue Suede Shoes/You Really Got A Hold On Me'のメドレーである(漠然とした資料だが、EMIのいわゆる官僚体質にこういうときは感謝すべきだろう。なにしろ1962年から1970年までのアビイ・ロードでのビートルズ・セッションのすべてが完全に記録されているのだから)。

また3月4日には、ジョージがアップルのオフィスで、BBCラジオ1の番組「シーン・アンド・ハード」用に、デビッド・ウィグからインタビューを受けた。この内容は、3月8日午後1時から2時の放送分で5分13秒間紹介され(3月11日午後7時45分から8時44分に再放送)、4月12日午後1時から2時の間に4分30秒間紹介された(4月15日午後7時45から8時44分に再放送)。

ポールとリンダが結婚 ジョージとパティは検挙され ジョンとヨーコはスタジオ入り

3月12日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ポールがリンダ・イーストマンと結婚するためにメリルボーン登記所に向かっているころ、警察はマリファナ所持の疑いでジョージとパティを検挙した。

一方、ジョンとヨーコはアビイ・ロードで、以前個人的に録音していたテープを聴き直していた。EMIの記録には'Peace Song'という作品名が記されている。午後3時半から午後5時半までのセッションでテープ・コピーを作り、ジョンがオリジナルとコピーの両方を持ち帰った。

3月13日(木)

コーバム・コモン
Surrey

リンゴは映画"THE MAGIC CHRISTIAN"のロケで、ライチョウを撃つシーンの撮影に参加した(2月3日参照)。

3月18日(火)

ロウアー・リッチモンド・ロード
London

この日も、リンゴは"THE MAGIC CHRISTIAN"のロケに参加。撮影はパトニーのテムズ川沿いにあるスター・アンド・ガーター・パブの外で行なわれた。スパイク・ミリガンが交通巡査の役を演じた(2月3日参照)。

ジョンとヨーコ、ハネムーンでベッド・イン

3月25日(火)〜31日(月)

アムステルダム・ヒルトン・ホテル、902室
Apollolaan, Amsterdam, The Netherlands

次のシングル'The Ballad Of John And Yoko'の歌詞によれば、3月20日に「スペインに近いジブラルタル」で結婚したふたりは、数日間「セーヌ川あたりでハネムーン」を過ごし、そこから「パリからアムステルダム・ヒルトンまで車を走らせ」ハネムーンを続け、「1週間もベッドのなかで話をした…少しでも平和を実現させようと思ったから」だった。世界中の人々が目を見開いて注目するなか、新婚のジョンとヨーコはアムステルダム・ヒルトンの9階にあるプレジデンシャル・スイートで、あるイベントを企画し、丹念に実行した。そして、雄弁に語り、数分間でも自分たちのスイートのベッドのかたわらに訪れた数百名におよぶプレス、ラジオ、テレビ、そしてニュース映画の取材陣に対して、平和のメッセージをかかげた。これがふたりの最初の「ベッド・イン」だ。

ジョンとヨーコは、それまでの10か月ほど、表現形態としてのアートというテーマについての試みをさまざまな形で、公の場で提示してきた。そして、このとき、ふたりのさまざまな信念や理想が急速にしぼり込まれ、世界平和というテーマがふたりの活動のいしずえとなったのだ。この世界平和は、とくに翌1970年には、ふたりがあからさまな敵意に対しても、信念を貫いて立ち向かうという態度を示しながら、あらゆる方法を駆使して執拗に繰り返し訴えていくテーマとなった。

またベッド・インは、ジョンとヨーコの異なるアイデアと方向性がひとつとなるときの、その典型のようなものだった。つまりそれは、観る者に対して挑発的で脅威的でさえあるヨーコの前衛的なイベント・コンセプトと、ジョンの愛嬌にあふれるユーモアと人をひきつけるパーソナリティ、それと知名度とがうまく合体したものだった。どっちみちふたりが何をやったところで一面の記事になってしまうのだから、ふたりはそんな状況を逆手にとって、そういう紙面が平和に貢献するように仕向けたのだ。

したがって、ベッド・インの肝心な目標はふたりが自らメディア漬けになること、つまり、1日18時間、7日間にわたって取材を受けることだった。当然、この間のラジオ、テレビ、ニュース映画でのインタビュー収録をひとつずつ追っていくのは不可能だし、記録そのものも何も残されていない。とにかく、このイベントはベルト・コンベア式のパブリシティで、7日間にもわたる記者会見のような状態で、ジョンとヨーコはテープ・レコーダーやノートやカメラを手に寝室を訪れた人なら誰かれかまわず話に応じた。

自分たちの活動を録音、映像など何かしらの形で後世に残そうと、ふたりはこの1週間にわたったイベントのもようをアシスタントに撮影させていて、この映像はのちに"HONEYMOON"というタイトルの60分フィルムに編集される。また、このとき取り交わされた質疑応答などのオーディオ記録は、1969年11月7日にイギリスでリリースされるジョンとヨーコの3枚目の実験的アルバム"THE WEDDING ALBUM"の片面全部に収録されている。

また、この平和のメッセージとともにふたりは「バギズム(袋主義)」というコンセプトを打ち出していた。そこで、3月31日にアムステルダムを出発、オーストリア・テレビでその夜初めて公開されるふたりの映画"RAPE"のプロモーションのため、「電撃的にウィーンに向かった」ふたりは、ホテル・サチャーで記者会見を行ない、真っ白なシーツを縫い合わせた袋に身を包んで姿を現した。4月1日の朝、「早朝の飛行機でロンドンに戻った」(先の歌詞によれば)ジョンとヨーコは空港で記者会見を開いたが、いつもはふたりを敵視していたイギリスの報道陣があたたかく迎えてくれたことに驚いた(空港でのインタビューのほとんどはこの日のニュース番組で放送されたが、イアン・ロスによる2分のインタビューだけ、この日の午後10時から12時にかけてのBBCラジオ1とラジオ2の番組「レイト・ナイト・エクストラ」で紹介された)。

3月26日(水)

EMIスタジオ、第4室
London

このHEMIスタジオの第4室で、ジョージ・マーティンはバランス・エンジニアのジェフ・ジャラットと、'Get Back'のモノ・ミックスを4種類制作した。ベスト・ミックスをシングルとしてリリースするためだ。また、ビートルズに聴かせるため、アセテート盤をカッティングした。

CamScannerでスキャン

ジョンとヨーコ、バギズムを語る

4月1日(火)

テレビジョン・ハウス、第4スタジオ
London
シアター・ロイヤル
Angel Lane, Stratford, London

この日、帰国したジョンとヨーコは、その数時間後にロンドンのキングズウェイにあるテレビジョン・ハウスに向かった。イーモン・アンドリュースがキャスターを務めるテムズ・テレビのニュース生番組「トゥデイ」に出演するためだ。番組は午後6時4分から6時30分にかけて生放送された。

ジョンとヨーコは自分たちの平和メッセージを広めるためなら「世界中から道化と見られるのもいとわない」と何度も認め、ちょうどエイプリル・フールの日だったこともあって、ふざけて見せることをいつにも増して楽しんでいるようだった。アンドリュースのからかい半分のインタビューの主題はバギズムのコンセプトについてだった。白い袋の中から現れたジョンとヨーコは、巧みにアンドリュースもバッグの中に誘い込むのに成功した。

この日リンゴは、ストラットフォードのロケ地で"THE MAGIC CHRISTIAN"の撮影に参加した。俳優のローレンス・ハーベイがハムレットの独白をしながら、ストリップまで始めてしまうというシーンだ(2月3日参照)。

4月3日(木)

ブロードキャスティング・ハウス、スタジオ3B
London
カフェ・ロイヤル
Regent Street, London

ジョージは午前中にBBCでインタビューを収録した。これはBBCラジオ4の昼の時事番組「ザ・ワールド・アット・ワン」(午後1時から1時30分)のなかで紹介された。スー・マグレガーとの会話で、ジョージは偉大なる友人ラビ・シャンカールとの仕事について語った。ユーディ・メニューインもインタビューを収録し、合わせて3分25秒のインタビューが放送された。

この夜、ジョンとヨーコは、イーモン・アンドリュースが司会を務める、前日とは別のテムズ・テレビの生番組に出演した。今回は、週1回のシリーズ番組「イーモン・アンドリュース・ショー」である(ビートルズは1965年4月11日にこの番組に出演していた)。観客はいたものの、めずらしいことにこの日の番組はスタジオからではなく、ロンドンのレストラン、カフェ・ロイヤルからの中継だった。ジョンとヨーコは午後10時に到着。ロルフ・ハリス、ジャック・ベニー、(午前中ジョージと一緒だった)ユーディ・メニューイン、歌手のダイナー・ジョーンズといったほかのゲストとともに、午後11時から11時45分までの生放送に出演。ジョンとヨーコは、インタビューのほかに約17分のディスカッションにも参加した。

一方、この日午後8時半から午前3時まで、バーンズのオリンピック・サウンド・スタジオでは、グリン・ジョンズがあいかわらず"GET BACK"のテープ作業に専念していた。

4月4日(金)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

グリン・ジョンズが'Get Back'とそのB面収録曲となる'Don't Let Me Down'の新たなモノ・ミックスを制作した。バーンズにあるオリンピック・スタジオで午後7時半から11時半まで行なわれたこのセッションでは、アメリカでビートルズ初のステレオ盤シングルのためのステレオ・ミックスも作られた。イギリスでは次のシングル'The Ballad Of John And Yoko'からステレオ盤となった。

'Get Back'土壇場でミックスし直す

4月7日(月)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

4月6日、BBCラジオ1のDJ、ジョン・ピールとアラン・フリーマンは、アセテート盤の'Get Back'を放送し、'Hey Jude'以来8か月ぶりのビートルズのニュー・シングルが4月11日に発売されるとも発表した。しかし、DJの反応も悪く、自らもこのモノ・ミックスにまだ満足できなかったポールは、イースターの休日のこの日、午後1時から8時までオリンピック・スタジオに入り、グリン・ジョンズとともにミックスを作り直した。'Get Back/Don't Let Me Down'は、正式には4月11日にイギリスで発売となっているが、この土壇場でミキシング・セッションが行なわれたということは、店頭には数日遅れて届いたところもあったことになる。このシングルに関してはジョージ・マーティンとグリン・ジョンズが複雑に関わっ

CamScannerでスキャン

ていたため、当然、2曲ともプロデューサー・クレジットはなかった。一方でこのレコードには新しい名前が追加され、レコーディング・クレジットはThe Beatles With Billy Prestonとなっていた。

4月9日（水）
ボートハウス
The Embankment, Putney, London

リンゴが出演する映画"THE MAGIC CHRISTIAN"のロケが再び行なわれた。撮影場所は、ロンドン南西部のパトニーのテムズ川沿いにあるのバークレイズ銀行のボートクラブ。サー・ガイ・グランドが、ケンブリッジ大学を勝たせるために、オックスフォード大学のボート部員に負けてくれるよう買収するというシーンだ（2月3日参照）。

ジョンとヨーコのバラード

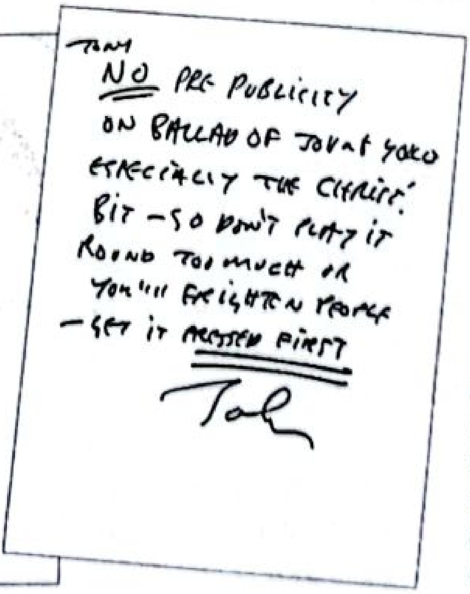
4月14日（月）
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

非常に重要なビートルズ・セッションだったが、それでも参加したのはジョンとポールだけだった。リンゴは映画"THE MAGIC CHRISTIAN"の撮影で出かけていて、ジョージは国内にはいなかったと言われている。いずれにしても、リンゴとジョージはこのセッションのことは知らされていなかった。この日はジョンの曲'The Ballad Of John And Yoko (They're Gonna Crucify Me)'がレコーディングされたが、タイトルに続くかっこ内のサブタイトルはリリース前にカットされる。

この曲は結婚したばかりのジョンとヨーコの身に起きた数週間の出来事を歌ったもの。ジョンはこの年の後半になると、この類の曲を、ジョンのもうひとつのバンド、プラスティック・オノ・バンドでレコーディングするようになる。もし、この時点でバンドが結成されていたなら、'The Ballad Of John And Yoko'もプラスティク・オノ・バンドの曲となっただろうが、このときはまだビートルズだけがジョンの音楽表現の場だった。

しかも、この日はプロデューサーのジョージ・マーティンがコントロール・ルームに戻っただけでなく、バランス・エンジニアのジェフ・エメリックも戻ってきて、ジョンとポールは午後2時半から9時までのセッションでレコーディングは完了し、午後9時から11時までにステレオ・ミックスも完了し、予定よりも1時間も早く全工程を終えるという、かなり生産的な1日だった（というわけで、この曲はビートルズのイギリス初のステレオ・シングルとなり、さらに初めてモノのミキシングがされなかったレコーディングともなった）。

あれほど広く報じられていた、1969年におけるジョンとポールの間のいさかい、意見の衝突、そしてビジネス面での対立と裏腹に、この曲については最初から最後まで、ふたりのスケールの大きい音楽的な相互理解と結束が存分に引き出されていた。作業はまず、ベーシック・トラックを完成させるため、ジョンがアコースティック・ギターとボーカル、ポールがドラムを担当して、11テイク録った。それからテイク



トニーへ。'The Ballad Of John And Yoko'を前宣伝するな——とくに「キリスト」のところは。だからあまり触れまわるな。人々をぎょっとさせてしまうだろうから。リリースさせることが先決だ。ジョン

CamScannerでスキャン

10にベース(ポール)、リード・ギター(ジョン)、セカンド・リード・ギター(ジョン)、ピアノ(ポール)、バック・ボーカル(ポール)、マラカス(ポール)をオーバーダビングし、最後にジョンがアコースティック・ギターの裏側を叩いてパーカッション・サウンドを入れた。

B面にジョージの'Old Brown Shoe'(4月16〜18日を参照)を収録したシングル'The Ballad Of John And Yoko'は、'Get Back'がまだチャートのナンバーワンについていた5月30日にイギリスでリリースされる。テレビ用のプロモーション・クリップとして、アップルは2本の16ミリ・カラー・フィルムを制作した(基本的にはほとんど似ている)。このクリップには、パリ、アムステルダム、ウィーンでのジョンとヨーコの映像、(4月1日の)ロンドン空港での記者会見の様子、ふたりがロールス・ロイスに乗っているイギリスでの映像などが編集されている。これはビートルズのシングルには違いなかったが、ビートルズとしてのグループ・ショットはトゥイッケナムでの1月のリハーサル・セッションでの映像から抜粋された、背後にクリシュナ教の信者がひとり座っている短いシーンが含まれているだけだった。

これらのクリップは、ジョンとヨーコのプライベート・フィルムとともにシネマ・クラブで上映されるほか、1本は1969年6月5日、12日、26日(すべて木曜の午後7時30分から8時)に放送されたBBC1の「トップ・オブ・ザ・ポップス」で白黒で紹介され、12月26日午後6時20分から7時の「トップ・オブ・ザ・ポップス'69—パート2」のなかでカラー放送される。アメリカでは、1969年9月22日午後7時30分から8時15分(EST)に放送される、ABCテレビの番組「ミュージック・シーン」第1回のなかで紹介。

4月16日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

2月25日にジョージがひとりでデモ・テープを収録した'Old Brown Shoe'と'Something'を正式に、グループでレコーディングした。しかし、じつはこの日の午後、ジョージはほかのメンバーより先にスタジオ入りし、午後2時半から5時の間に'Old Brown Shoe'の2本目のデモを作っていた。午後7時から10時までの予定だった夜のセッションは午前2時45分まで続いた。

この日のグループ・セッションのおもな目的は'Old Brown Shoe'のレコーディングをすることだったが、ベーシック・トラックはドラム(リンゴ)、リード・ギターとガイド・ボーカル(ジョージ)、ピアノ(ポール)、リズム・ギター(ジョン)という編成で4テイク収録して完成した。次に、テイク4にベースとリード・ギター、ジョンとポールのバック・ボーカル、ジョージの新たなリード・ボーカルをオーバーダビングした。セッションの最後にはステレオ・ミックスを作った(ただし、4月18日にさらにオーバーダビングが加えられるので、この日のベスト・テイクはボツになる)。

この日はまた、'Something'のベーシック・トラックをポールがベース、リンゴがドラム、ジョージがギター、ジョージ・マーティンがピアノという編成で13テイク収録した。ジョンは参加していない。'Something'は5月2日に録り直しになる。

4月18日(金)

EMIスタジオ、第2/第3スタジオ
London

この日の午後2時半から10時半までのセッションでは、ジョージ・マーティンではなくクリス・トーマスがプロデューサーを務めた。'Old Brown Shoe'にジョージのオルガンと、レスリー・スピーカーを通したジョージの新たなリード・ギターをオーバーダビングし(その過程でジョンのリズム・ギター・トラックが消された)、完成させた。続いて午後10時半から午前1時までに、ステレオ・ミックスを作った。

ここまではEMIの第3スタジオで行なわれたが、午前1時から第2スタジオに移り、2月23日にトライデントで録音した'I Want You'のマスターに、ジョンとジョージがマルチ・トラックで音を重ねたギターをオーバーダビングした。これをリダクション・ミックスしてテイク1を作り、さらにギターをオーバーダビングする。午前4時半までのセッションの最後に、ラフなステレオ・ミックスを作った。

4月20日(日)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日も、クリス・トーマスのプロデュースによるセッションとなり、"GET BACK"プロジェクトで浮上した2曲のレコーディングを行なった。1曲目は'I Want You'で、午後7時から9時15分までに、ハモンド・オルガンとコンガドラムをす

ーバーダビングした。2曲目は、'Oh! Darling (I'll Never Do You No Harm)' で、アルバム "ABBEY ROAD" に収録されるときにはかっこ内のサブタイトルはカットされている。午後9時15分から12時までに、リズム・トラックを26テイク収録し、テイク26にハモンド・オルガンをオーバーダビングした。午前0時から0時45分まで、ラフなステレオ・ミックスを作った。

ジョン・オノ・レノンの改名式

4月22日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョンとヨーコは、ふたりの心臓の鼓動、ジョンが「ヨーコ」と叫び、ヨーコが「ジョン」と叫ぶのをレコーディングした。これは、1969年11月7日にリリースされたジョンとヨーコの3枚目の実験的なアルバム "WEDDING ALBUM" の片面全部を使って収録されている。
このレコーディングのプロデューサーはジョンが務め、午後11時から午前3時45分までレコーディングをして、午前4時半までに22分テープのステレオ・ミックスを作った。また、この日のセッションの前に、ジョンはサビル・ロウにあるアップル本社の屋上で、自分のミドル・ネームにオノを加えるセレモニーを行なった。この日のレコーディングと同様、ジョンとヨーコの絆の強さを表す出来事だった。

4月25日(金)

EMIスタジオ、第4室
London

EMIスタジオで、ピーター・ミューが 'Two Of Us' (この時点ではまだタイトルが 'On Our Way Home')のラフなモノ・ミックスを作った。アップル・レーベルの新しいアーティストで、ポールがこの曲を提供したいと思っていたモーティマーというニューヨークのトリオのために、アセテート盤をカッティングして渡すためだった(しかし、モーティマーによるこのレコーディングは未発表に終わる)。

4月26日(土)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後4時半から午前4時15分までのセッションでは、ポールが 'Oh! Darling' にリード・ボーカルをオーバーダビングした。以後数回にわたって行なわれるが、この日が1回目。そのほかには、リンゴの新曲 'Octopus's Garden' のベーシック・トラックを完成させることに費やされた。"GET BACK" にはリンゴのボーカル曲は1曲もなかったが、映画 "LET IT BE" の1月26日のシーンからもわかるように、リンゴはすでに 'Octopus's Garden' を書きあげていた。プロデューサーはいなかったが、ビートルズはこの曲のリズム・トラックを32テイク収録し、テイク23をオーバーダビング用のベスト・テイクとした。
このセッションの前に、午後2時30分から4時30分まで、ジョンは4月22日にレコーディングしたふたりの叫び声と心臓の鼓動のテープをステレオにミキシングし直した。
この日、'Get Back' が全英シングル・チャート1位を獲得。

4月27日(日)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後3時から6時まで、ジョンがプロデューサーとなり、ジョンとヨーコの鼓動を録り直す。午後6時から8時までに、このテープのステレオ・ミックスを作った。

4月29日(火)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

クリス・トーマスがプロデューサーとなり、リンゴが 'Octopus's Garden' にリード・ボーカルをオーバーダビングした。セッションは午後7時30分から午前1時まで。最後にステレオ・ミックスを作ったが、7月17日と18日、さらにオーバーダビングを加える。
また、セッションの前に、午後2時30分から6時30分まで、クリス・トーマスがこの時期に前後してレコーディングされた曲をマルチ・トラックで聴き直している。

4月30日(水)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

クリス・トーマスがプロデューサーを手がけた非常に興味深いセッション。まず、1月31日に収録した 'Let It Be' のベスト・テイクにリード・ギターをオーバーダビングした。グリ

ン·ジョンズは、ライブ収録のみという鉄則から唯一はずれ
たこのオーバーダビング·バージョンを、自分が手がけた未
発表アルバム"GET BACK"に収録している(シングル
に収録されるのもこの日のソロである)。
午後7時15分から午前2時まであったセッションの残り時間
には、1967年5月から6月にかけてレコーディングされたが、
マスター編集のあと未完成のままだった'You Know My
Name (Look Up the Number)'を再びとりあげた。
ジョンとポールだけで、ボーカルと効果音(マル·エバンズ
も協力した)を、オリジナルの4トラック·テープにオーバーダ
ビングした。しかし、1970年3月になってようやくリリースさ
れる最終バージョンは、この日収録されたオリジナル·バー
ジョンの6分8秒からかなりカットされた4分19秒のバージョ
ンとなる。セッションの最後にはモノ·ミックスを作った。
この日も、セッションが始まる前の午後2時30分から6時15
分まで、クリス·トーマスがプロデューサーとして立ち会い
のもとに、参加したいメンバーだけで最近のレコーディング
を聴き直している。

5月1日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

この日の午後2時30分から7時までは、クリス·トーマスがプロデューサーとなり、'Oh! Darling'のステレオ·ミックスを作った。続いて午後7時から10時45分までは、ジョンがプロデューサーとなって、4月22日にレコーディングしたオリジナルと4月27日に録り直した「ジョンとヨーコ」のテープから、ステレオ·ミックスを作った。
この日、アップルが、実験音楽と朗読を扱う新レーベル「ザップル」設立を発表。

5月2日(金)
ライム·グローブ·スタジオ、Gスタジオ
London
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

オリンピック·スタジオでグリン·ジョンズがまたもや"GET BACK"テープで骨を折っている間、ビートルズはEMIで'Something'のベーシック·トラックを録り直していた。ポールがベース、リンゴがドラム、ジョンがギター、ビリー·プレストンがピアノ、
ジョージがギターという編成で36テイクを録音。このころの
初期のバージョンと8月15日の完成バージョンとの大きな違
いは曲の長さである。たとえば、この日のベストとなったテ
イク36は、ピアノを中心にした4ビートのインストゥルメンタル
部分が終わりを締めくくり、最終的なバージョンが3分しか
ないのに対して、7分48秒もある。クリス·トーマスがプロデ
ューサーを務めたこのセッションは、午後7時から11時まで
続いたあと、2時間の休憩をはさんで、さらに午前1時から
3時40分まで続いた。
セッションの前に、この日の午後12時30分から1時までに
ジョンとヨーコはロンドン西部にあるBBCのライム·グローブ·
スタジオで、BBC1の新しいアート番組「ハウ·レイト·イット·
イズ」第7回の放送分のためのインタビューを収録した。こ
のなかでふたりは自分たちの映画"RAPE"についてマイ
ケル·ウェイルに語った。番組はこの日の午後10時55分か
ら11時35分にかけて放送された。インタビューに合わせて、
アップルから借りてきた映画"RAPE"の映像からの抜粋
が紹介された。

5月4日(日)
レ·ザンバサドゥール
London

映画"A HARD DAY'S NIGHT"の撮影に使ったレ·ザンバサドゥールで(1964年3月17日、4月17日を参照)、映画"THE MAGIC CHRISTIAN"の撮影打ち上げパーティーが内々で行なわれ、リンゴ、ジョン、ポールも出席した。しかし、実際にはこの日以降も一部の撮影が行なわれる。
映画製作側はこのパーティーのもようも撮影し、ポールとリンダへの短いインタビューとジョンの姿が映っているこの映像の一部はBBC1のドキュメンタリー番組「ウィル·ザ·リアル·ミスター·セラーズ…」に含まれる(詳細は2月3日を参照)。

5月5日(月)
オリンピック·サウンド·スタジオ
London

オリンピック·スタジオで4日間にわたって行なわれたレコーディングの初日。この4日間は、グリン·ジョンズがコントロール·ルームに入った。午後7時30分から午前4時までのセッションで、ビートルズは'Something'にオーバーダビング

CamScannerでスキャン

をして、ポールとジョージがそれぞれベースとギターを録り直した。

5月6日(火)
オリンピック・サウンド・スタジオ
London

1月からこのころまでレコーディングされ、アルバム"ABBEY ROAD"という形でまとまることになる曲はどれも、最終的にこのアルバムのA面に集められることとなる。なぜかというと、B面にはメドレーを入れるという案が新しく持ちあがったからだった。このアイデアが具体的にいつ生まれたのかは不明だが、おそらくこのオリンピック・セッションのころかと考えられる。というのは、この日は午後3時から午前4時までのセッションで、アップルの深刻化する経営の混乱を題材にして歌詞を書いたポールのアップ・ビートのバラード'You Never Give Me Your Money'が初めてレコーディングされているからだ。ピアノとガイド・ボーカル(ポール)、ドラム(リンゴ)、ディストーションをかけたエレクトリック・ギター(ジョン)、鳴り響くようなエレクトリック・ギター(ジョージ)という編成のベーシック・トラックを36テイク、レコーディングし(テイク30がベスト)、メドレーにすることが前提となっていたのは明らかである。

セッションは次のように進んだ。午後3時から3時30分までは前日レコーディングした'Something'のモノ・ミックスを作った。3時30分から5時まで'You Never Give Me Your Money'のリハーサル。5時から5時45分まで'Something'のモノ・ミックスを新しく作り、5時45分から6時までこのミックスを聴き直した。6時30分から午前3時15分までは'You Never Give Me Your Money'をレコーディング。午前3時15分から3時30分までは編集。3時30分から4時まで'You Never Give Me Your Money'にオーバーダビングをした。

5月7日(水)
オリンピック・サウンド・スタジオ
London

グリン・ジョンズによる"GET BACK"の作業はさらに続いた。午後8時から午前6時30分までステレオ・ミックスを作り、午前6時30分から7時30分までビートルズと聴き直した。ジョンとポールはマネージャーのアラン・クラインとともに、ビートルズの印税率引き上げ交渉のためEMIのサー・ジョセフ・ロックウッドに面会。ロックウッドはこれを拒否。

5月8日(木)
アップル・コープス
London

BBCのラジオ1の番組『シーン・アンド・ハード』用に、ジョンとヨーコがデビッド・ウィグから長いインタビューを受けた。このインタビューは4分53秒分の抜粋が、5月11日午後3時から4時にかけて番組のなかで紹介され(5月13日午後7時45分から8時45分にかけて再放送)、さらに翌週の5月18日午後3時から4時にかけての放送分のなかでは別の4分32秒の抜粋が紹介される(5月20日午後7時45分から8時45分に再放送)。

アラン・クラインがスタジオにやってくる ポールはスティーブ・ミラーとセッション

5月9日(金)
オリンピック・サウンド・スタジオ
London

この日もグリン・ジョンズによる"GET BACK"のステレオ・ミキシング(午後3時から7時まで)とプレイバック(午後7時から10時と、10時30分から11時まで)がビートルズも参加して行なわれた。

セッションがそのままやっかいなビジネス・ミーティングとなってしまっていたのはこのころのことで、とくにこの日にはアラン・クラインがセッションに参加していた。ポールを除く3人がこの前日に承諾していた、クラインの会社ABKCOをアップルの経営陣として迎え入れ、ひいてはクラインをビートルズのビジネス・マネージャーとして迎えるという契約をその場で飲むように、ポールはかなりのプレッシャーをかけられた。そのうっぷんを晴らすかのように、ほかのビートルズが帰ったあともポールはスタジオに残り、スティーブ・ミラーと夜を徹して'My Dark Hour'という象徴的なタイトルの曲をレコーディングした。

ポールがドラム、ベースおよびバック・ボーカルを担当し、ミラーがリード・ボーカルとほかの楽器を演奏した。この曲は、1960年のジョニー・ジェントルのツアーでポールが使った偽名ポール・ラモーンとクレジットされ、6月16日にアメリカで、スティーブ・ミラー・バンドのシングルとしてリリースされる。

CamScannerでスキャン

またこの日、ジョンとヨーコのニュー・アルバム"UNFINISHED MUSIC NO.2:LIFE WITH THE LIONS"がリリースされる。

5月15日(木)

レンブラント
Heswall, Cheshire

リンダと一緒に休暇で海外に出発する前日、ポールは父親に会うためリバプールに帰った。時間は不明だがその日、ポールは、ヘズウォルにあるポールの実家で、リバプール・インスティチュート時代の級友、BBCの新しい地方局ラジオ・マージーサイドのスタッフとなっていたロイ・コーレットから長いインタビューを受けた。このインタビューは、翌5月16日午後12時31分から1時にかけて放送される番組『ライト・アンド・ローカル』[ポールは「ア・ライト・アット・ザ・ローカル」(地元のパブでビールを一杯)とひっかけていた]のなかで紹介される。

一方、この日、ロンドン南西部にあるオリンピック・スタジオでは、グリン・ジョンズがあいかわらずアルバム"GET BACK"の制作を続けていた。

ジョン、ベッド・インで 'Give Peace A Chance'を録音

5月26日(月)~6月2日(月)

ホテル・レイン・エリザベス1742号室
Dorchester, Boulevard West, Montreal, Quebec, Canada

ジョンとヨーコが2度目にして最後の、平和のためのベッド・インを行なった。当初はニューヨークで実行することを望んでいたが、ジョンの1968年11月の麻薬の前科を理由に、アメリカ当局はジョンのビザを発行しなかった。ふたりは5月24日にバハマに飛んでいたが、あまりにも暑すぎて実行する気にならず、アメリカとの国境に近いカナダのモントリオールを選ぶ。モントリオールからだったら、メッセージをいちばん伝えたいアメリカの国民にも、自分たちの平和のメッセージを簡単に中継できるだろうと考えたからだ。だからといって、カナダそのものはどうでもいいと考えていたわけではなかったようだ。その証拠に、ふたりはこの1年だけでもこれを最初に、3回もカナダを訪れる(9月13日と12月20日を参照)。

この「ベッド・イン」の目的はアムステルダムのときと同じで、1週間ホテルのスイートのベッドに入ったまま、部屋を訪れるテレビやラジオのレポーターやジャーナリスト、そのほかの訪問者たちの質問に可能なかぎり答えるというものだ。ジョンはとくにアメリカのラジオ局と電話で話し合いたいと思っていて、アシスタントや人なつこいモントリオールのDJなどを使って、ジョンがリスナーに平和を説くのを放送で流すのに興味はないかとアメリカのラジオ局に電話で問い合わせてもらっていた。

この1週間のもようはすべて撮影され、"THE WAY IT IS"というタイトルの映画に編集されたが、未公開に終わる。しかし、モントリオールでの一部のシーンは、1988年に映画"IMAGINE: JOHN LENNON"にヨーコによって使用され、また1990年にはこのときの中心的な映像をまとめたビデオ"JOHN AND YOKO: THE BED-IN"が制作されることになる。このどちらの作品においても最高潮を迎えるのは、6月1日の夜に、ジョンが世界中でもっとも聴きやすく、鼻につかない平和賛歌、そしてスローガンでもある、'Give Peace A Chance'を5分ちょうどでレコーディングする風景である。この曲のクレジットはレノン=マッカートニーとなっているが、ジョンとヨーコの平和宣言の本質だけをシンプルでリズミカルな、そしてキャッチーな歌にしてしまうという、実際にはジョンそのものともいえる曲だった。レコーディングはプロ仕様の機材を借りて行なわれ、ジョンがアコースティック・ギターを弾きながら歌い、スイート・ルームをぎっしり埋めた友人や訪問客がコーラスをつけた。

数日後、イギリスに帰国したジョンはごちゃごちゃして曖昧なビートをはっきりさせ、ふぞろいなコーラスを聴きやすくするために、リンゴのドラムと新たなコーラスをオーバーダビングしたと言われているが、これを証明し、その明確な期日や場所を示す資料はどこにも残っていない。プライベートにレコーディングされたヨーコのもの憂げな'Remember Love'をB面に収録した'Give Peace A Chance'は、プラスティック・オノ・バンドのシングルとして収録後まもなく世界的にリリースされるが(イギリスでは7月4日)、これはビートルズのメンバーによる初のソロ・シングルだ。

プラスティック・オノ・バンドは、1969年のジョンとヨーコの典型的なアイデアのひとつで、固定メンバーなしというきわめてコンセプチュアルなバンドだった。このニュー・シングルの

CamScannerでスキャン

広告では、レコーディング機材とロンドンの電話帳の1ページを二重写しにした写真に、「You Are The Plastic Ono Band（君はプラスティック・オノ・バンドだ）」というコピーがついていた。こうしたグループ外でのはけ口こそが、ジョンが長く求めていたものだった。以降数年にわたり、ジョンの音楽活動のすべてがこのバンド名義となり、バンド仲間となる人物は当然のことながらその都度流動的に変わっていく。

'Give Peace A Chance'のプロモーションのため、アップルはベッド・イン・セッションのもようを撮った16ミリ・カラー・フィルムのクリップをテレビ局に配給する。このクリップは、BBC1の「トップ・オブ・ザ・ポップス」で1969年7月10日と7月24日に（いずれも木曜、午後7時30分から8時）、2回とも白黒で放送される。また、ジョンとヨーコによるプライベートなシネマ・クラブ・イベントでも上映。

"GET BACK"一時完成

5月28日（水）

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

いよいよグリン・ジョンズの"GET BACK"の作業についての結論が下される日となった。仕上げも曲順も完成したアルバムのマスター・テープが出来たが、この日これを聴きにくることが出来たのはジョージだけだった。ほかの3人は全員とも海外にいて、ジョンとヨーコはモントリオールでのベッド・インの3日目に突入したばかりだったからだ。

未発表のアルバム"GET BACK"の収録曲（かっこ内は収録日）は次のとおり。A面：'One After 909'（1月30日）、'Rocker'（1月22日）、'Save The Last Dance For Me'（1月22日）、'Don't Let Me Down'（1月22日）、'Dig A Pony'（1月24日）、'I've Got A Feeling'（1月24日）、'Get Back'（1月28日、シングル・バージョン）、B面：'For You Blue'（1月25日）、'Teddy Boy'（1月24日）、'Two Of Us'（1月24日）、'Maggie Mae'（1月24日）、'Dig It'（1月26日）、'Let It Be'（1月31日と4月30日にオーバーダビング）、'The Long And Winding Road'（1月31日）、'Get Back (reprise)'（1月28日）。

ビートルズはアルバム"GET BACK"で初期のレコーディング手法に戻ろうとしただけでなく、アルバムのジャケットも1枚目のアルバム"PLEASE PLEASE ME"を再現させるため、同じカメラマン、アンガス・マクビーンに写真撮影を依頼している。

ビートルズ、とくにジョンは、1963年のジャケットと同じポーズをとることに大乗り気で、ジャケットのタイトルも"PLEASE PLEASE ME"と同じように印刷し、今では伝説的な語りぐさとなった、「with Let It Be and 11 other songs（'Let It Be'ほか11曲を収録）」というコピーを追加しようと考えた。

"GET BACK"は結局未発表に終わるが、このジャケット写真はむだにはならない。EMIから1973年にリリースされるビートルズの2枚の編集アルバム"1962-1966"と"1967-1970"のジャケットに、1963年と1969年に撮影された細部に多少の違いはあるもののまったく同一のポーズ写真が隣合わせに並べられて使われているからだ。これは1960年代の初めと終わりではこのグループがどれほどまでに変わってしまったかを示す、みごとすぎるほどの視覚的なお手本と言ってもいい。しかも、1963年から64年ごろのビートルズが髪が長すぎると世間から非難されていたことを考えると、どこか感慨深いものさえある。

6月14日（木）

ストーンブリッジ・ハウス
Wembley

イギリス国内のみならず海外でもトーク・ショーのホストとしての名声を得たデビッド・フロストは、1969年、ウエスティング・ハウス・グループがスポンサーとなり、全国放送された週刊シリーズのテレビ番組をアメリカで担当することになった。ただ、フロストはロンドンのLWT局の週末番組も担当していたため、毎週大西洋上を行ったり来たりしていた。7月10日（EST午後8時30分から10時）にアメリカのほぼ全域で放送されていた「ザ・デビッド・フロスト・ショー」のゲストは、ジョン・カサビテイ、ピーター・フォーク、ベン・ガザラ、ジュリー・ロンドンの4人のアメリカ人の役者に加え、イギリスで録画したジョンとヨーコだった。録画はこの日、インターテル（VTRサービス）のストーンブリッジ・パーク・スタジオで、観客を入れて行なわれたが、ここはふたりが前年の12月に「ザ・ローリング・ストーンズ・ロックンロール・サーカス」の収録で訪れたところだった。

このころ、フロストの番組とは関係なく、ジョンとヨーコはイ

ギリスのラジオ・ルクセンブルクのインタビューの収録も行ない、おそらく6月22日午後7時から10時にかけて放送された「ザ・デビッド・クリスチャン・ショー」のなかで紹介されている。

"ABBEY ROAD"セッション本格的に開始 ジョンは休暇中に交通事故

7月1日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

アビイ・ロードのEMIスタジオに戻り、再びジョージ・マーティンのプロデュースのもとで、短命ながらビートルズのレコーディングにおけるさらなる新時代が幕を開けたのがこのセッションからだった。"GET BACK"以降の作品は、次のプロジェクトも決まらないまま不定期に録音されていたが、ここにおよんで、すべてのセッションははっきりとした目標を持つことになった。つまり、ニュー・アルバム"ABBEY ROAD"である(この時点ではまだアルバム・タイトルは未定だが)。ビートルズは7月1日から8月29日まで、平日の午後2時30分から10時までの時間帯をすべて第2スタジオで予約し、7月は22日間にもわたってスタジオ・セッションを続けた。
この日スタジオにいたビートルズのメンバーはポールだけで、午後3時から午後7時30分まで、オリンピック・スタジオで収録した'You Never Give Me Your Money'にリード・ボーカルをオーバーダビングした。この日セッションに参加するはずだったジョンは来たくても来られない状態だった。ヨーコ、息子のジュリアン、ヨーコの娘キョーコとの休暇中にスコットランドで自動車事故に巻き込まれ、7月6日まで入院していたからだ。

7月2日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後3時から9時30分までのセッション。アビイ・ロードの近くに住んでいたポールは、たいてい最初にスタジオに到着し、先に作業を始めていた。この日は(ジョンはまだ入院中だったため)ジョージとリンゴが到着するまで、ポールはつなぎとして使えそうな小品を突然思いついて録音した。これは23秒間の'Her Majesty'で、アコースティック・ギターとボーカルで3テイクで完成させ、その場でメドレーのリストに加える。
ジョージとリンゴが加わってから、3人はポールの別の新曲で、自作のメロディに16世紀末のトーマス・デッカーの散文を引用した'Golden Slumbers'のレコーディングを始めた。ピアノとガイド・ボーカル(ポール)、ドラム(リンゴ)、ベース(ジョージ)という編成でベーシック・リズム・トラックを15テイク録音した。アルバム"ABBEY ROAD"のジャケットには'Golden Slumbers'と'Carry That Weight'と区別して表記されているが、この日レコーディングされたテイクにはすべて'Carry That Weight'も含まれていた。この2曲はひとつの連続した作品としてレコーディングされている。

7月3日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Golden Slumbers/Carry That Weight'のテイク13と15を編集し、これにリズム・ギター(ポール)とリード・ギター(ジョージ)、ポールの2種類のリード・ボーカルをオーバーダビングした。さらに、ポール、ジョージ、リンゴの3人がユニゾンで'Carry That Weight'のくだりの歌詞を歌う。午後3時から午後8時30分までのセッションの最後に、リダクション・ミックスを作り、テイク17とした。

7月4日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時45分から午後5時30分までのセッションで、リダクションした'Golden Slumbers/Carry That Weight'に最初のオーバーダビングを加えた(しかし、イギリスのアン・ジョーンズがビリー・ジーン・キングをくだして優勝したウィンブルドンの女子シングル決勝戦があったので、セッションの時間の大半はBBCラジオ2の実況中継を聞いて過ごした)。

ジョージの'Here Comes The Sun'

7月7日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ソングライター、ジョージ・ハリスンの名曲がまたひとつアルバム"ABBEY ROAD"に収録される。この日、'Here Comes The Sun'のレコーディングが始まった。ジョンはまだ療養中だったため、ベース(ポール)、ドラム(リンゴ)、アコースティック・ギターとガイド・ボーカル(ジョージ)の3人編成で、午後2時半から10時45分までのセッションでベーシック・トラックを13テイク収録した。そのあと午後11時45分まで、ジョージはアコースティック・ギターを録り直した。

7月8日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Here Comes The Sun'のテイク13に、ジョージのリード・ボーカルと、ジョージとポールのマニュアル・ダブル・トラックのバック・ボーカルをオーバーダビングした。これをリダクション・ミキシングしてテイク15とし、午後2時半から10時45分までのセッションの最後の30分間にラフなモノ・ミックスを作った。

ジョンが事故から復帰

7月9日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

自動車事故のあとジョンが復帰した最初のセッションは、ポールの曲'Maxwell's Silver Hammer'だった。1968年の10月にはいったん"THE BEATLES"の追加曲として収録されそうになったり、"GET BACK"/"LET IT BE"の撮影中にも1月にトゥイッケナムでリハーサルしたりしていた曲である。そしてこの日、ジョンとますます分け難くなり、片時も離れないヨーコもEMIスタジオに戻ってきた。しかし、ジョンよりも重傷でしかも妊娠中だったヨーコは、アビー・ロードに特別に運び込まれたダブルベッドで休むことになり、EMIの建物中で失笑され、陰口が叩かれた。
午後2時半から8時までのセッションでは、'Maxwell's Silver Hammer'のベーシック・トラックを21テイク録音した。そのあと午後10時15分まで、ギターをオーバーダビングした。

7月10日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時半から9時半までのセッションで、'Maxwell's Silver Hammer'にピアノ(ポール)、オルガン(ジョージ・マーティン)、アンビル(ハンマーで叩く打楽器)(リンゴ)、ギター(ジョージ)、リード・ボーカル(ポール)、バック・ボーカル(ポール、ジョージ、リンゴ)をオーバーダビングした。続いて午後9時半から11時半までかけて、この曲のステレオ・ミックスを作った。

7月11日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から12時までのセッションで、ポールが'Maxwell's Silver Hammer'にギターとボーカル、ジョージが'Something'にリード・ボーカル、最後にポールが'You Never Give Me Your Money'にベースをオーバーダビングした。また、'Something'のラフなステレオ・ミックスを作り、そのリダクション・ミックスも作った。テイク36をテイク37として、長さを5分32秒にカットした。

7月15日(火)

EMIスタジオ、第2/第3スタジオ
London

ふたつのスタジオを使ってのセッション。午後2時30分から6時までは第3スタジオを、午後6時から11時までは第2スタジオを使用した。
'You Never Give Me Your Money'にボーカルとチャイムをオーバーダビングし、ラフなステレオ・ミックスを作った。

7月16日(水)

EMIスタジオ、第2/第3スタジオ
London

この日も、午後2時30分から7時までは第3スタジオ、午後7時から午前12時30分までは第2スタジオと、ふたつのスタ

CamScannerでスキャン

ジオを使用。'Here Comes The Sun'に手拍子とハーモニウムをオーバーダビングを行なった。その次に、すでにリダクション・ミックス・ダウンしてテイク37を作っていたにもかかわらず、'Something'のテイク36にジョージの新たなリード・ボーカル、ポールのバック・ボーカル、ジョージとポールとリンゴの手拍子をオーバーダビングした。これらの新しいオーバーダブを加え、リダクション・ミックスしてテイク39を作った。

7月17日(木)

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

この日は、午後2時30分から6時30分まで第3スタジオを、午後6時30分から11時15分まで第2スタジオを使用した。午後2時30分ちょうどに到着したポールは、ひとりで'Oh! Darling'にリード・ボーカルをオーバーダビングした。ボーカルのある種の感触を狙っていたポールは、1日に1回ずつ、7月17日、18日、22日、23日の4回にわたり満足できるまでボーカルのレコーディングを試みる。

この日は大半の時間が'Octopus's Garden'のレコーディングにあてられた。ポールとジョージのバック・ボーカル、ポールのピアノ、それに効果音をオーバーダビングした。

7月18日(金)

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

午後2時30分から8時までは第3スタジオ、午後8時から10時30分までは第2スタジオを使用。ポールが2回目の'Oh! Darling'のリード・ボーカルに挑戦し、リンゴが'Octopus's Garden'にボーカルとパーカッションを追加した。続いて'Octopus's Garden'のモノおよびステレオの最終ミックスを作ったが、"ABBEY ROAD"はビートルズ初のステレオのみのアルバムとなったため、モノ・ミックスは未使用に終わる。

また、この日、カルロス・メンデスがジョンとポールが書いたニュー・シングル'La Penina'をイギリスでリリース。

再びジェフ・エメリックと組む

7月21日(月)

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

ジョンはこのころのセッションでは控えめで、4月14日の'The Ballad Of John And Yoko'以来ビートルズのための新曲を提供していなかった。しかし、この日、午後2時30分から9時30分までは第3スタジオで、午後9時30分から10時までは第2スタジオで行なわれたセッションで、ジョンは精力的に作業を進め、4トラックに'Come Together'の印象的なベーシック・トラックを、ハンドクラップとボーカル(ジョン)、リード・ギター(ジョージ)、ベース(ポール)、ドラム(リンゴ)という編成で8テイク、レコーディングした。これを8トラックにコピーして、オーバーダビング用のテイク9を作った。

この日はまた、ジェフ・エメリックがビートルズのセッションに戻り、最初から最後までコンソールを担当した日でもある。彼はEMIを退職してアップル・スタジオのチーフ・バランス・エンジニアとなっていた。EMIスタジオに足を踏み入れた初のフリーランス・エンジニアとなったエメリックは、かつての同僚から冷ややかな目で迎えられた。

7月22日(火)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から9時30分までのセッションではポールが'Oh! Darling'のリード・ボーカルをまた試みた。また、'Come Together'に新たなリード・ボーカル、エレクトリック・ピアノ、リズム・ギター、マラカスをオーバーダビングした。

'The End'のレコーディング

7月23日(水)

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

'Golden Slumbers/Carry That Weight'をレコーディングしてから3週間が過ぎていたが、メドレーとして次の曲が続けられるようにオープン・エンディングとしてあったため、この日、これに続く曲をレコーディングした。この時点では'Ending'というタイトルだったが、のちに'The End'となる。これほど適切なタイトルはほかにはないだろう。とい

うのも、ほとんどレコードの終わりの同心円上の溝にずれてしまいそうなくらいにぎりぎりに収録されている23秒の'Her Majesty'を除けば、'The End'はビートルズ最後のアルバムの最終曲となったからだ。

午後2時30分から11時30分までの第3スタジオでのセッションでは、録音を開始する前にかなりのリハーサルが行なわれたに違いない。なぜなら、テイク1からしてかなりタイトな演奏になっていたからで、リード・ギターで演奏が始まってから、ビートルズの作品中唯一のリンゴのドラム・ソロへとなだれ込む構成となっている。ビートルズはこの曲を7テイク試みたが、それぞれドラム・ソロが違い、テイク7では1分20秒のうち16秒ものドラム・ソロが入っている(のちのオーバーダビングで曲の長さは2分41秒となるが、最終的には2分5秒にカットされる)。

午後11時30分に第2スタジオのコントロール・ルームに移動したビートルズと制作スタッフは、午前0時30分までプレイバックを聴いた。'The End'のほかに、ポールがセッションの最初に収録した'Oh! Darling'のベスト・リード・ボーカルと、やはりこの日のセッションでボーカルをオーバーダビングした'Come Together'を聴き直した。

ポール、“THE MAGIC CHRISTIAN”のテーマをデモ・レコーディング

7月24日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

作曲者が自作の曲を特定のアーティストに提供する場合、アコースティック・ギターかピアノでラフ・レコーディングしたデモ・テープをそのアーティストに渡すのが通例だが、レノン=マッカートニーの曲の場合には、大抵プライベートに収録されたデモを、音楽版権管理人のディック・ジェイムズがアセテート盤にカッティングしていた。そこで、新曲'Come And Get It'をアップルのグループであるアイビーズに提供することになっていたポールは、この日、ビートルズのセッションが始まる前の午後2時30分から3時30分まで、EMIスタジオでデモ・テープをレコーディングした。コントロール・ルームにはジョンがいたが、レコーディングはポールひとりが行なった。最初にピアノを弾きながら歌い、次に、ダブル・トラックのボーカル、マラカス、ドラム、ベースをオーバーダビング。さらにステレオ・ミックスを作り、アイビーズに渡すためにコピーした。これらの作業はわずか1時間ですべて完了した(ポールは8月2日、EMIでのアイビーズによるレコーディングをプロデュースするが、実質的にはこの日のデモをそのままコピーした内容だ。さらにポールはバンド名を変更するように勧め、アイビーズはバッドフィンガーと改名する。'Come And Get It'は映画“THE MAGIC CHRISTIAN”のメイン・テーマとしてアレンジされたため、映画のサウンドトラック・アルバムにはバッドフィンガーの名前がクレジットされている。なお、この曲はシングルとしてリリースされ、イギリスではチャートの4位にまでつける)。

午後3時30分から10時30分まで、ビートルズは“ABBEY ROAD”のメドレーのために、2曲でひとつのジョンの作品'Sun King/Mean Mr Mustard'をレコーディングした。この2曲には切れ目はなく、連続した曲としてレコーディングされ、数日後に'Here Comes The Sun-King'というまぎらわしい仮タイトルが付けられるが、ジョージの'Here Comes The Sun'とはまったく関係ない。このメドレー曲のベーシック・トラックを35テイク録音しながら、ビートルズはジーン・ビンセントの'Ain't She Sweet' 'Who Slapped John?' 'Be-Bop-A-Lula'のジャム・セッションを録音した。これが1969年7月ではなく1月のレコーディングだったら、“GET BACK”の有力な候補となっていたはずだ。

7月25日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の午後2時30分から午前2時30分までのセッションの早い時間では、'Sun King/Mean Mr Mustard'(ボーカル、ピアノ、オルガン)と'Come Together'(ボーカル・ハーモニー)へのオーバーダビングが行なわれた。次に、新曲のレコーディングにとりかかる。ジョンの'Polythene Pam'とポールの'She Came In Through The Bathroom Window'(後者は1月22日にアップルでリハーサルしている)で、この2曲をひとつの連続した作品としてレコーディングした。個人的にもビジネス上でもどんなにいさかいがあったとしても、'The Ballad Of John And Yoko'のレコーディングでもそうだったように、ふたりはまだすばらしい音楽を作りあげることができたのだ。

CamScannerでスキャン

2曲を連結して、アコースティック・ギター（ジョン）、ベース（ポール）、リード・ギター（ジョージ）、ドラム（リンゴ）で、ベーシック・トラックを39テイク、レコーディングする。セッションの後半4時間は、テイク39にベース、ドラム、リード・ボーカルのオーバーダビングに費やされた。

7月28日（月）

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

午後2時30分から8時まで、第3スタジオで、'Polythene Pam/She Came In Through The Bathroom Window' に新たなリード・ボーカル、アコースティック・ギター、エレクトリック・ギター、エレクトリック・ピアノ、ピアノ、タンバリンやそのほかのパーカッションをオーバーダビングした。そのあと第2スタジオに移り、午後8時から8時30分まで、テイク39をリダクション・ミックスしてテイク40を作った。

7月29日（火）

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から10時45分までのセッションで、'Come Together' にギターを、'Sun King/Mean Mr Mustard' にボーカル、ピアノ、オルガン、パーカッションをオーバーダビングした。

生き残った'Her Majesty'

7月30日（水）

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

この日は長いセッションとなった。まず、第2スタジオで午後2時から3時30分まで、'You Never Give Me Your Money' のテイク30をリダクション・ミックスしてテイク40とし、新しいベストになった。そのあと第3スタジオでは、午後2時30分から10時30分まで、かなりのオーバーダビングをレコーディングした。'Come Together' にギターを、'Polythene Pam/She Came In Through The Bathroom Window' にボーカル、パーカッション、ギターを、'You Never Give Me Your Money' にボーカルを、'Golden Slumbers/Carry That Weight' にボーカルを、それぞれオーバーダビング。それでも、まだ誰も帰れなかった。

というのは、そろそろメドレーの各レコーディング曲をつなぐため、曲順と必要な追加作業を検討する必要があったからだ。また 'The End' にはボーカルが入っていなかったし、完成している曲はほとんどなかったが、ビートルズと制作スタッフは、'The Long One/Huge Medley' と呼んでいたメドレーに、大きな欠陥がないかどうかを調べるための編集作業を行なった。午後10時30分から午前2時30分まで第3スタジオで、すべての曲のステレオ・ミックスを作り、クロスフェイドと編集をした結果、メドレーの曲順は次のように決まった。'You Never Give Me Your Money' 'Sun King/Mean Mr Mustard' 'Her Majesty' 'Polythene Pam/She Came In Through The Bathroom Window' 'Golden Slumbers/Carry That Weight' 'The End'。

トータルの長さは15分30秒で、'Her Majesty' を除いて全曲がうまくつながった。そこでポールは、テープ・オペレーターのジョン・カーランダーに 'Her Majesty' をカットして捨ててしまうよう指示する。しかし、まだ新人のカーランダーは、カットしたテープを捨てることなどとてもできなかった。それでポールが帰ったあと、このテープを 'The End' から約20秒後のところにつけ足しておいた。翌日、最後に 'Her Majesty' がついたまま、アップルでこのメドレーのアセテート盤がカッティングされた。ところが、こういう形で聴いてみるとポールも気に入って、めでたく抹殺されずに済んだのだ。こういうわけで、完成された "ABBEY ROAD" ではこの曲の前に20秒もの沈黙が入っているのである。

7月31日（木）

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から午前1時15分までのセッションでは、'You Never Give Me Your Money' の（前日リダクション・ミックスをほどこす前の）テイク30に、ポールがベースとピアノをオーバーダビングした。さらに、'Golden Slumbers/Carry That Weight' に、ドラム、ティンパニー、ボーカルを加えた。

CamScannerでスキャン

8月1日(金)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ジョン、ポール、ジョージによる3声部のみごとなハーモニーが印象的なジョンの曲'Because'は、ビートルズの全作品のなかでもとりわけ美しい曲である。この日、午後2時30分から7時30分までのセッションで、ボールドウィンのスピネット電子チェンバロ(ジョージ・マーティン)、エレクトリック・ギター(ジョン)、ベース(ポール)という編成で、この曲のリズム・トラックがレコーディングされた。リンゴもハイハットを静かに刻んでいたが、これはミュージシャンがヘッドフォンで聴いていただけで、テープにはレコーディングされなかった。午後7時30分から10時30分までの作業では、ベストとなったテイク16に、ジョン、ポール、ジョージがハーモニー・ボーカルをレコーディングした。最終的には3声部のコーラスは3種類オーバーダビングされるが、この日レコーディングされたのは最初の1種である。

8月4日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Because'の3声部ハーモニーのレコーディングは、この日の午後2時30分から9時の間第2スタジオで行なわれたセッションで完成した。また、ジョージは自分が担当するボーカルのレコーディングのあき時間を縫って、第3スタジオに場所を移し、午後7時15分から8時45分まで'Something'と'Here Comes The Sun'のラフなステレオ・ミックスを作った。2曲ともまだ追加レコーディングが必要だと感じたジョージは、オーケストラ用スコアを書いてもらうため、'Something'のアセテート盤をジョージ・マーティンに渡した。

ムーグをとり入れる

8月5日(火)
EMIスタジオ、第3・第2スタジオ／第43室
London

自宅でテープ・ループを使って試行錯誤するのは、アルバム"REVOLVER"のセッションで終わったわけではなかった。この日ポールは、自宅で作った10本以上のモノのテープ・ループをビニール袋に無造作につめ込んで持参し、午後は第3スタジオでそのなかのベスト・テープを4トラックにコピーするのに費やした。鐘や鳥のさえずり、泡のはじける音、コオロギの鳴き声などが入った効果音は、この'You Never Give Me Your Money'から'Sun King'へのつなぎにかぶせると完璧なクロスフェイドとして編集できるので、7月30日に持ちあがったこの2曲のつなぎ目の問題はうまく解決した(実際のこの作業は8月14日に行なわれる。ポールはジョージの'Here Comes The Sun'で使うつもりだったテープ・ループもビニール袋に入れてきていたが、これは結局採用されなかった)。
ビートルズは、当時では画期的だった楽器、ロバート・ムーグのシンセサイザーを、出来たばかりのころに使用したポップ・バンドのひとつでもあった。このシンセサイザーにとくに興味を抱いていたジョージは、アメリカで購入して(1968年11月15日参照)、短命に終わることになるアップルの実験的レーベルであるザップルから、シンセイザーの風変わりなサウンドにあふれたアルバム"ELECTRONIC SOUNDS"を1969年5月9日にリリースしていた。ジョージは"ABBEY ROAD"セッションのために、このムーグをEMIに運び、25ポンドのギャラでマイク・ビッカーズをプログラマーとして雇って、ビートルズは"ABBEY ROAD"セッションの後半からこのシンセサイザーを使い始めた。2段のキーボードに異様なまでの束になって配線されていたこのシンセサイザーは、EMIスタジオの第43室に設置され、ビートルズが使用するすべてのスタジオにケーブルでつなげられた。初めてムーグがオーバーダビングされた曲は、'Because'である。午後6時半から10時45分までの第2スタジオでのセッションで、ジョージは第43室でシンセサイザーを演奏し、この曲のレコーディングは完了した。このあと、ビートルズは'The End'に初めてボーカルをオーバーダビングした。以上のセッションと平行して、第3スタジオでは、午後8時から9時半まで、バランス・エンジニアのトニー・クラークとテープ・オペレーターのアラン・パーソンズが、ジョンとヨーコのプライベートな最新録音を収録したカセットを、1/4インチ・テープにステレオ・コピーした。ジョンとヨーコのアシスタント、アンソニー・フォーセットがこのテープを持ち帰った。

CamScannerでスキャン

8月6日(水)

EMIスタジオ、第3・第2スタジオ／第43室
London

すべての曲のベーシック・トラックの収録を終え、あとはオーバーダビングを残すのみとなり、この日以降、EMIスタジオでビートルズの4人がそろうところはほとんど見かけられなくなった。この日は、ふたつのセッションが同時に行なわれた。午後2時半から11時まで、第3スタジオでは、ジョージが'Here Comes The Sun'にアコースティック・ギターをオーバーダビングした。一方、まったく同じ時間帯に(第2スタジオと接続している)第43室では、ポールが'Maxwell's Silver Hammer'をミックス・ダウンしながらシンセサイザーのオーバーダビングもして、テイク21をリダクション・ミックスし、ベストとなるテイク27を作っていた。続いて午後11時から午前1時には、この曲のステレオ・ミックスを作った。

8月7日(木)

EMIスタジオ、第2／第3スタジオ
London

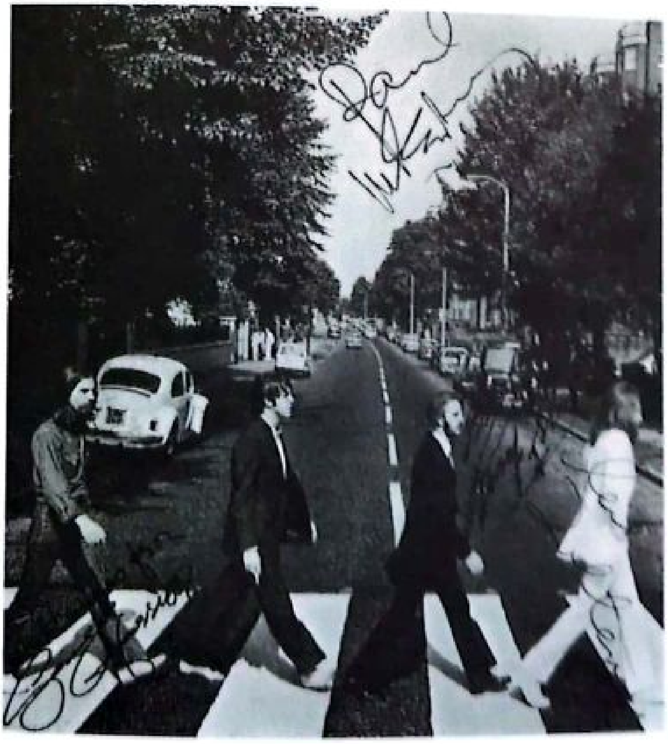
午後2時半から6時まで、第2スタジオで、'Come Together'のステレオ・ミックスを作った。続いて第3スタジオに移り、午後6時から12時まで、'The End'にボーカルと、ジョン、ポール、ジョージが交互にソロをとるという画期的なギター・パートをオーバーダビングした。

"ABBEY ROAD"のジャケット撮影

8月8日(金)

EMIスタジオ、第2・第3スタジオ／第43室
London

セッションの開始予定は午後2時半だったが、ビートルズは別の用件で、それより3時間前にスタジオに集まった。この日の午前11時35分、カメラマンのイアン・マクミランは、アビイ・ロードの通りの中央に脚立を設置し、それに上って、ジョン、リンゴ、ポールとジョージがEMIスタジオのすぐ外にある横断歩道を大股で歩く姿を撮影した。ビートルズが何度か横断歩道を渡っている間、マクミランはすばやく6枚の写真を撮影し、好意的な警官が交通を止めていてくれた。その後、ポールが拡大鏡でカラー・ポジを検討し、6枚のなかからいちばんいい写真を、"ABBEY ROAD"のジャケットに使用することに決めた。
一方、EMIスタジオの中では午後2時半から9時まで第2スタジオで行なわれたセッションで、'The End'にドラムとベースをオーバーダビングし、続いて'I Want You'にリンゴがドラムを、ジョンがホワイト・ノイズ(すべての周波数成分を含んだノイズ。FMラジオのバンド・チューニングが



CamScannerでスキャン

はずれたときの音）発生機で作ったノイズとシンセサイザーをオーバーダビングした（うず巻くような強風の効果音を出すため）。午後5時半から9時45分まで、'I Want You'のオーバーダビングが行なわれている間、ポールは第3スタジオで'Oh! Darling'にリード・ギターとタンバリンをオーバーダビングした。

8月11日（月）
EMIスタジオ、第3・第2スタジオ／第43室
London

この日、午後2時半から11時30分まで第2スタジオで行なわれたオーバーダビング・セッションで、'I Want You'が'I Want You (She's So Heavy)'に改題され、ジョン、ポール、ジョージは4月18日録音のテイク1をリダクション・ミックスしたテープに、「she's so heavy」というハーモニー・ボーカルを加えた。ジョンは、トライデントでのマスターにオーバーダビングを加えたバージョンと、このマスターを4月18日にリダクション・ミックスして異なるオーバーダビングを加えたバージョンのどちらをリリースするか決めかねていたため、両方にこのハーモニーを追加編集した。セッションの最後に、'Oh! Darling'にボーカル・ハーモニーを、さらに'Here Comes The Sun'にギターをオーバーダビングした。
その前に、午後1時から2時まで、バランス・エンジニアのフィル・マクドナルドは、第3スタジオでアセテート盤のカッティングをするために、（未発表アルバム"GET BACK"収録の）'Dig It'と'Maxwell's Silver Hammer'のステレオ・ミックスから、モノのテープ・コピーを作った。

8月12日（火）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後7時から午前2時までかけて、'Oh! Darling' 'Because' 'Maxwell's Silver Hammer'のステレオ・ミックスを作った。

8月13日（水）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から9時15分まで、'You Never Give Me Your Money'のステレオ・ミックスを作った。

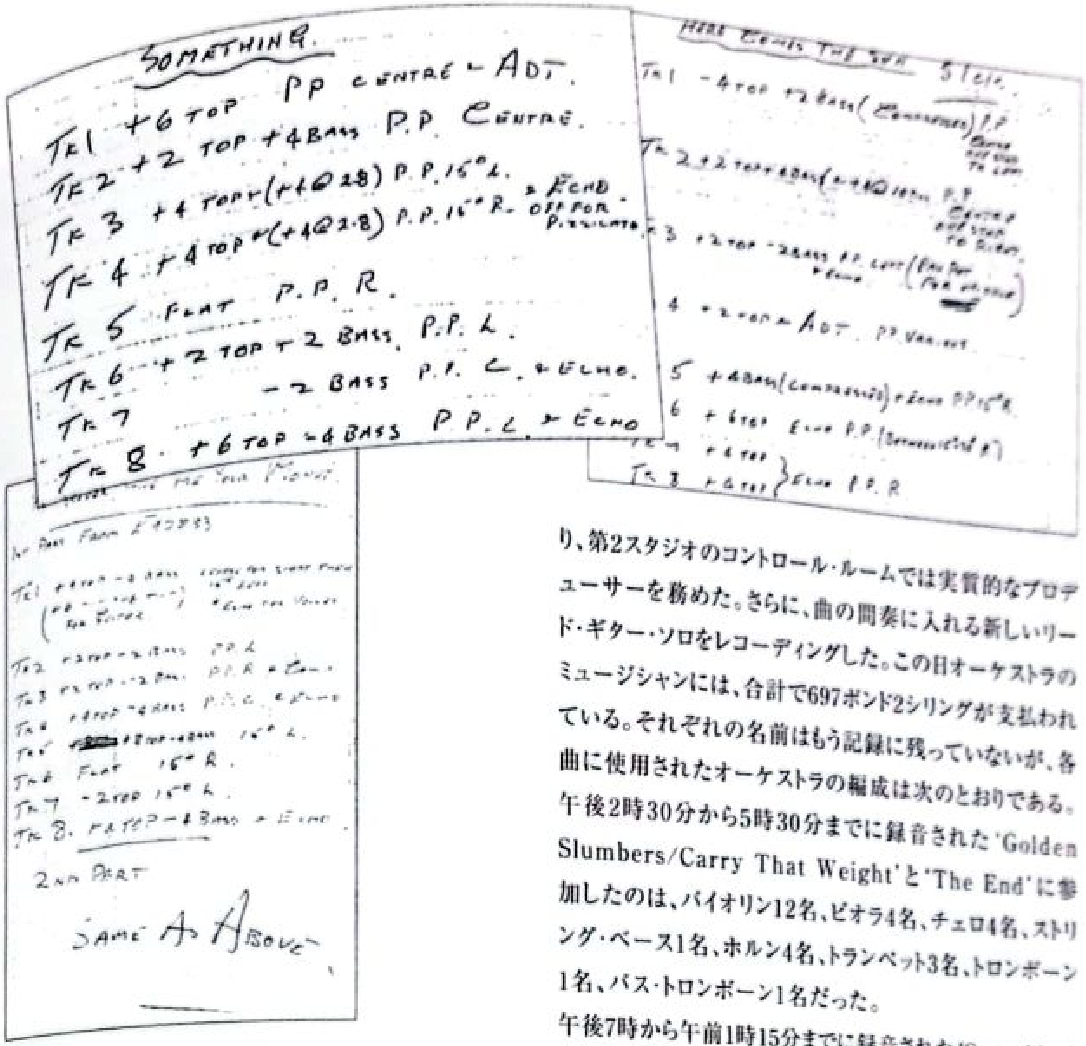
8月14日（木）
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日はメドレー用に仕上がった曲をミキシングして、クロスフェイド処理と編集をした。その結果、'Sun King/Mean Mr Mustard'、'Polythene Pam/She Came In Through The Bathroom Window'、それに'You Never Give Me Your Money'から'Sun King/Mean Mr Mustard'へのつなぎも、すべて午後2時30分から午前2時30分までのセッションで出来あがった。そのほかに、'Maxwell's Silver Hammer'への編集パートのステレオ・ミックスも作った。
この日の唯一の休憩は、DJのケニー・エベレットがジョンにインタビューするために第2スタジオを訪れ、途中でセッションが中断されたときだけだった。スタジオの機材とテープを使って収録されたこのインタビューは、9月20日と9月27日（いずれも土曜、午前10時から12時）にBBCラジオ1の番組『エベレット・イズ・ヒア』で、2回にわたって放送される。

"ABBEY ROAD"の収録曲にオーケストラを入れる
8月15日（金）
EMIスタジオ、第1／第2スタジオ
London

この日の長いセッションでは、アルバム"ABBEY ROAD"の収録曲、'Golden Slumbers/Carry That Weight' 'The End' 'Something' 'Here Comes The Sun'に必要なすべてのオーケストラ・トラックを録音した。150ポンドの報酬でこの5曲のスコアを書いたジョージ・マーティンが第1スタジオでミュージシャンを指揮し、バランス・エンジニアのジェフ・エメリックとフィル・マクドナルド、テープ・オペレーターのアラン・パーソンズがそれを第2スタジオのコントロール・ルームでレコーディングした。この日、両スタジオはケーブルでつながっていただけでなく、初めてテレビ・モニターでもつながった（ただし映像は録画されていない）。
'Something'ではジョージ・ハリスンが大忙しで、スタジオとスタジオの間を飛び回っていた。第1スタジオでは、ジョージ・マーティンと一緒にオーケストラの指揮台に上が

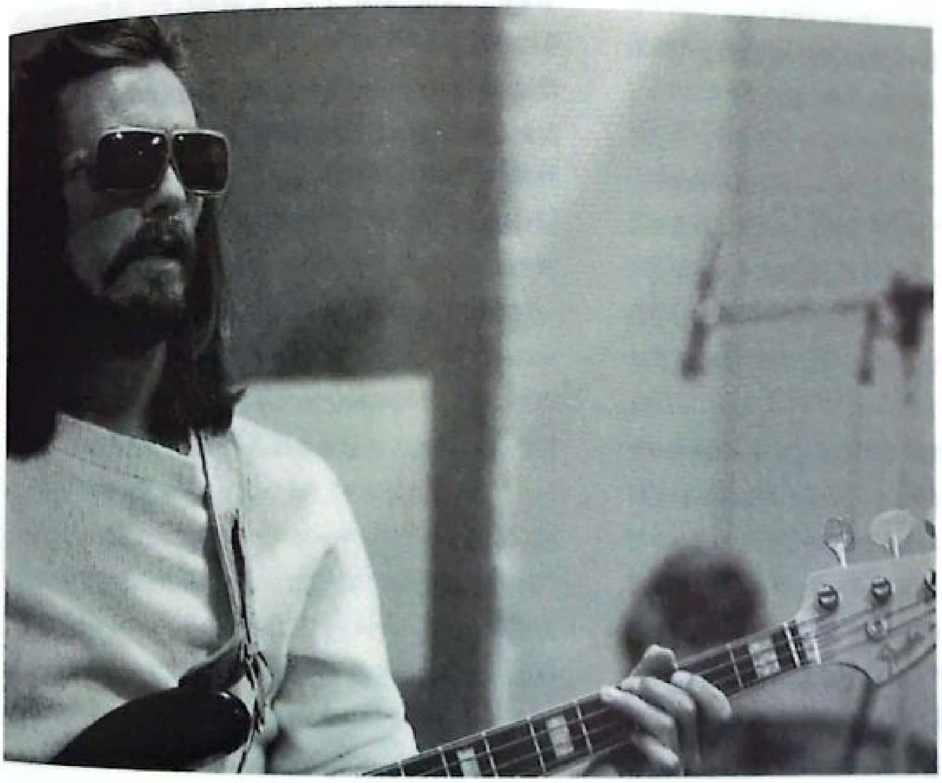
CamScannerでスキャン



り、第2スタジオのコントロール・ルームでは実質的なプロデューサーを務めた。さらに、曲の間奏に入れる新しいリード・ギター・ソロをレコーディングした。この日オーケストラのミュージシャンには、合計で697ポンド2シリングが支払われている。それぞれの名前はもう記録に残っていないが、各曲に使用されたオーケストラの編成は次のとおりである。

午後2時30分から5時30分までに録音された'Golden Slumbers/Carry That Weight'と'The End'に参加したのは、バイオリン12名、ビオラ4名、チェロ4名、ストリング・ベース1名、ホルン4名、トランペット3名、トロンボーン1名、バス・トロンボーン1名だった。

午後7時から午前1時15分までに録音された'Something'に参加したのは、バイオリン12名、ビオラ4名、チェロ4名、



リンダ・マッカートニーが撮影したフェンダー・ジャズ・ベースを弾くジョージ・ハリスン

コントラバス1名。
'Something'と同じ時間帯に録音された'Here Comes The Sun'では、ビオラ4名、チェロ4名、ストリング・ベース1名、クラリネット2名、アルト・フルート2名、フルート2名、ピッコロ2名(EMIの資料にはなぜか、この日のセッションでフルート、アルト・フルート、コントラバスを演奏したW.G.スミスの名前だけが記録されている)。

8月18日(月)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から10時30分にかけてのセッションで、'Golden Slumbers/Carry That Weight'のステレオ・ミックスを作って、'The End'にポールがピアノをオーバーダビングしたあと、この曲のステレオ・ミックスを作った。

8月19日(火)
EMIスタジオ、第2スタジオ/第43室
London

午後2時から午前4時までのセッションで、ジョージの作品を2曲とも完成させた。'Here Comes The Sun'にジョージがシンセサイザーをオーバーダビングし、この曲と'Something'のステレオ・ミックスも作った。さらに'The End'のステレオ・ミックスを作り、'Golden Slumbers/Carry That Weight'から'The End'につながる新たなクロスフェイド編集をした。

アビイ・ロード・スタジオに4人がそろった最後の日

8月20日(水)
EMIスタジオ、第3/第2スタジオ
London

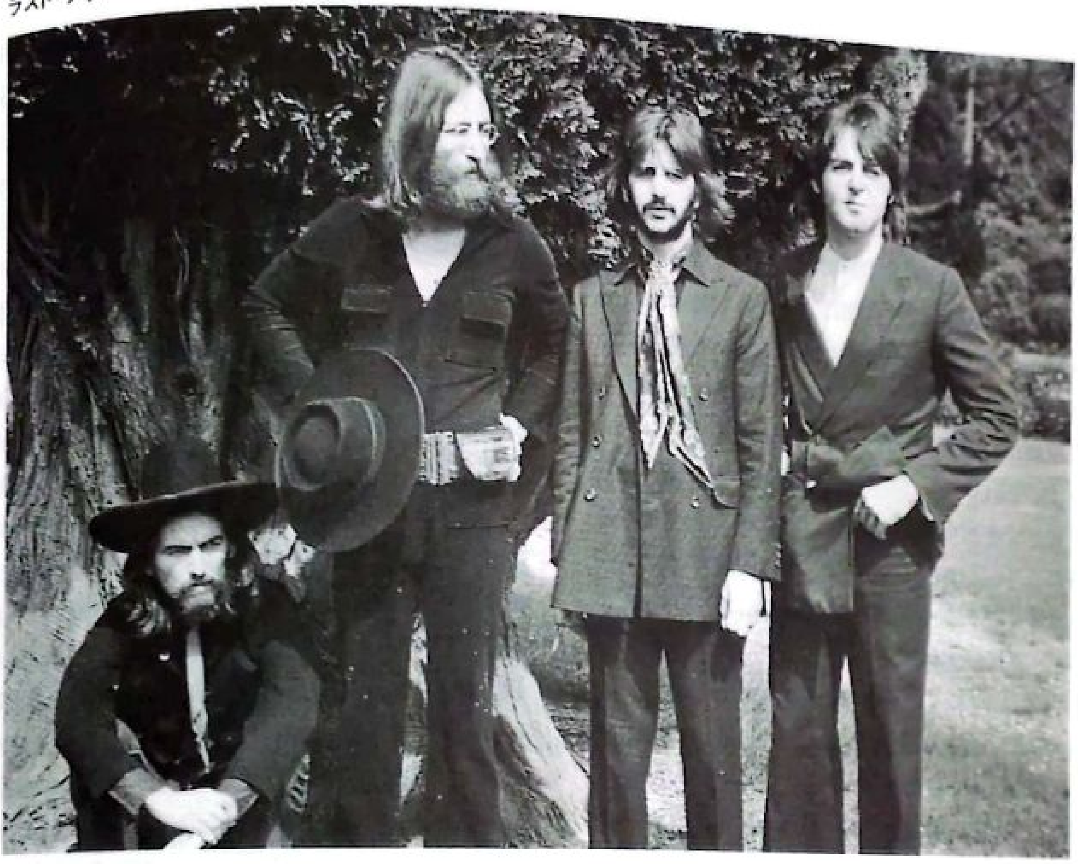
ビートルズのなかでも、非常に複雑なレコーディングのひとつであるジョンの'I Want You (She's So Heavy)'が、第3スタジオで午後2時から午後6時までのセッションでようやく完成した。2月22日と23日のレコーディングにオーバーダビングしたものと、やはりのちにオーバーダビングされた4月18日のリダクション・ミックスを編集してひとつにしたのだ。完成マスターの最初の4分37秒はリダクション・ミックス、後半の3分7秒がトライデントでレコーディングしたオリジナル・テープの音である。7分44秒たったところでフル・ボリュームのまま唐突に終わってしまうので、聴くものにはここで終わりではなく永遠に続くような印象を与える(しかし、もとのテープでは20秒後にしっかり終わる)。
午後6時から午前1時15分までは、第2スタジオに移って、アルバム"ABBEY ROAD"のマスター・テープのプロトタイプが作られたが、この時点では最終的なバージョンと違うところが2点あった。まず、A面とB面が逆になっていて、アルバム全体が'I Want You (She's So Heavy)'の唐突に終わるギター・コードで幕を閉じていたこと。もう1点は、'Octopus's Garden'と'Oh! Darling'の曲順が入れ替わっていたことだ。
この重要な"ABBEY ROAD"セッションには、ビートルズの全員が参加した。しかし、ポピュラー音楽の様相を根底から変えたビートルズが、グループの根城としていたこのEMIの建物内に4人全員で集まったのは、この日が最後だった。

8月21日(木)
EMIスタジオ、第4室/第2スタジオ
London

マスター・テープの仕上げとして、午後1時から2時までは第4室で'The End'を新たに編集した。午後2時30分から12時までは第2スタジオで、'You Never Give Me Your Money'から'Sun King/Mean Mr Mustard'につながる新たなクロスフェイド編集を行なった。

CamScannerでスキャン

8月22日、ジョンの自宅ティッテンハーストで行なわれた
ラスト・フォト・セッションからの1枚



"ABBEY ROAD" が完成
'Something' のプロモ・クリップ

8月25日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

'Maxwell's Silver Hammer' と 'The End' の最終編集。午後2時30分から8時までのセッションでは、'Maxwell's Silver Hammer' のオープニングの効果音がいくつか作られたが、結局使用されなかった。また、"ABBEY ROAD" の最終マスターの保管用コピーを作り、ジェフ・エメリックがオリジナルとコピーの両方をアップルに届けた。アップルでは、やはりEMIスタジオから引き抜かれたマルコム・デイビーズが、コピーをディスクにカッティングした。

ビートルズがほとんどの作品をレコーディングしたEMIスタジオの名前を世界的に有名にしたアルバム "ABBEY ROAD" は9月末(イギリスでは9月26日)にリリース。その5週間後の10月31日、シングル 'Something/Come Together' が発売されるが、ビートルズがアルバム収録曲をシングル・カットするのは、イギリスではこれが初めてのことだ。

しかし、10月にもなると、ビートルズの4人はたとえ数時間の撮影のためでも集まることを嫌がったため、アップルはテレビで流す 'Something' のプロモーション・クリップ用に何か対策を練らなくてはならなかった。そこでニール・アスピノールは、メンバーがそれぞれ妻と一緒に美しい庭園を散歩している映像を編集したクリップを制作する。これは、えも言われぬ魅力と心に響く16ミリ・フィルムとなった。そして、これを通して観ると、衝撃的な事実、つまりグループ・ショットはおろか、4人のうちのふたりでも一緒に映る映像がまったくないという事実に気がつくが、それを巧妙に包み隠すおだやかさに満ちた作品だ。撮影日は不明だが、おそらく10月末ごろだろう。

クリップに撮影ロケ地は記されていないが、ジョンとヨーコはアスコットの新しい自宅ティッテンハーストで、ジョージとパティはイーシャーの自宅で、リンゴとモーリーンはエルステッドで撮影している。ポールとリンダはクリスマスまでスコットランドの農場にひきこもってしまっていたが、アスピノールの顔を立てるためにも、トラクターのうしろにカメラをくくりつけてからカメラの前にまわり込んで自分たちの姿を撮影し、フィルムをアスピノールに送っている。

このクリップは、イギリスでは11月13日午後7時5分から7時50分までのBBC1の「トップ・オブ・ザ・ポップス」で、1回だけ白黒放送される。

注:BBC2のアート番組「レイト・ナイト・ライン・アップ」は、"ABBEY ROAD"のために、これまでのポップ・ロックのアルバムでは前例のなかったようなパブリシティを行なった。リリースの1週間前にあたる9月19日(BBC2で午後10時55分から11時30分)を、番組まるごとこのアルバムの特集にあてたのだ。映像はほとんどビートルズとは関係なかったが、アルバム収録曲は3曲('Oh! Darling' 'I Want You' 'She Came In Through The Bathroom Window')を除いてすべて番組で紹介するほどの力の入れようだった。この番組はさらに10月10日(BBC2で午後11時25分から12時)に再放送。ビートルズは誰も出演していないが、アップルはスチール写真と4分余りの16ミリ・フィルムを提供している。このフィルムの内容は不明だが、おそらく8月22日、4人が最後のフォト・セッションを行なうためにジョンの邸宅ティッテンハーストに集まったときに、家庭用ムービー・カメラで撮ったものかもしれない。

9月11日(木)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ビートルズの'What's The New Mary Jane'は未発表に終わっていたため、ジョンはこれをプラスティック・オノ・バンドのシングルとして発表しようかと考えていた。そこでこの曲を気分一新して聴き直すため、ジョンはマルコム・デイビーズに頼んで、この日の午後2時半から5時半まで、EMIの第3スタジオで、1968年8月14日分のレコーディングを新たにステレオ・ミキシングしてもらった。3種類のミックスを7.5ipsのテープにコピーしてアップルに持ってきてもらい、ジョンはこれを持ち帰った。

プラスティック・オノ・バンド、初ステージ

9月13日(土)
バーシティ・スタジアム
University of Toronto, Toronto, Ontario, Canada

プラスティック・オノ・バンドのデビュー・コンサートとなったこの日のステージは、ビートルズのなつかしき日々は終わったという暗黙の事実を具体的に証明する出来事になった。地元プロモーターのブラウワー・ウォーカーがロックンロール・リバイバル・コンサートという趣旨で企画したこのイベントには、チャック・ベリー、リトル・リチャード、ジェリー・リー・ルイス、ファッツ・ドミノ、ボ・ディドリー、ジーン・ビンセントなどが顔をそろえ、若手ではドアーズ、シカゴ、アリス・クーパーの出演が決まっていたが、当初ジョンの出演は予定されていなかった。しかし、チケットの前売り状況が芳しくなく、かなりの赤字が出そうなだけでなく、中止を余儀なくされるという赤恥をかきそうになったため、ブラウワー・ウォーカーのジョン・ブラウワーはロンドンにいるジョンに電話し、参加してくれないかと頼み込んだ。といっても、ウォーカーは演奏してくれとまで頼んだわけではなく、イベントを司会してもらえば大助かりだと言っただけなのだが、ジョンの答えは、演奏できないくらいなら参加もしないというものだった。もちろん、このときジョンはビートルズとしての出演を考えていたのではない。もうあの時代は終わったのであり、しかも、ジョンはほかの3人に「離婚」したいことを伝えてあった。しかし、アラン・クラインとEMI/キャピトルとの契約交渉は慎重のうえにさらに慎重を期する必要があったため、ジョンのこの声明については外部に対していっさい極秘にされていた。

それで、ジョンは急遽ビートルズの代わりにこの出演にふさわしいプラスティック・オノ・バンドとなるメンバーを集めた。ジョン(リズム・ギター)、ヨーコ(ボイス)、エリック・クラプトン(リード・ギター)、クラウス・フォアマン(ベース)、アラン・ホワイト(ドラム)という顔ぶれで、コンサートの前日にトロントに向かった。時間の余裕がまったくなかったため、選曲とリハーサルは飛行機の中でするしかなく、アンプのないエレクトリック・ギターを使って行なわれた。

この日遅く、プラスティック・オノ・バンドはステージに登場、2万7,000人の観客の前で演奏した。ひとたびコンサートにジョンが出演すると発表されると、チケットは簡単に売りさばくことができたが、ブラウワー・ウォーカーにとって唯一頭が痛かったことがあったとすれば、最初はジョンが出演すると聞いても誰も信じようとしなかったことだった。しかし、実際にステージに立ったジョンとそのバンドは、確かに荒っぽかったが、それでも骨のある演奏を、対照的な2部構成にして合計40分届けた。前半はメンバー紹介とチューニングに続き、リバプールとハンブルク時代の3曲、'Blue

Suede Shoes' 'Money (That's What I Want)' 'Dizzy Miss Lizzy'と、ジョンの作品から選曲した'Yer Blues'、新曲'Cold Turkey'、そして'Give Peace A Chance'の計6曲を演奏した。
この日のライブと平和メッセージを結びつけたがっていたジョンは、'Give Peace A Chance'の演奏の前に、「俺たちがそもそもここに来たのは、これのためなんだ」と宣言。そして、3か月後、ジョンとヨーコがこの日のステージをすべて収録したアルバムをアップルからリリースするとき、そのタイトルも"LIVE PEACE IN TORONTO 1969"とするほどだ(9月25日、10月20日参照)。
ステージの後半では、ジョンはうしろにさがり、(それまで白い袋に入っていた)ヨーコが前面に出て、苦悩に満ちた'Don't Worry Kyoko (Mummy's Only Looking For Her Hand In The Snow)'と13分にわたる'John John (Let's Hope For Peace)'を歌ったが、どちらも演奏はあまりうまくいかなかった。そしてステージの最後は、3月2日のケンブリッジ大学でのコンサートと同じようなスタイルとなり、メンバーはそれぞれギターをアンプに近づけてはフィードバックさせ、ものすごい騒音を残してステージを去った。
ジョンとヨーコは、リリースにそなえてこのライブをレコーディングしていただけでなく、コンサート全体のドキュメンタリー映画を企画していたD・A・ペネベイカーに、撮影の許可も出していた。しかし、1970年9月、映像の編集も終わり、("SWEET TORONTO"というタイトルで)公開を待つばかりとなった時点で契約上の問題が発生し、一般公開は見送りとなる。数回だけ限定上映されたのち、プラスティック・オノ・バンドの部分だけカットされて、編集が全面的に見直され、"KEEP ON ROCKIN'"という新しいタイトルで上映される。カットされたプラスティック・オノ・バンドのフィルムを観るには、結局1989年のテレビ放送とビデオ・リリースまで待たねばならなかった。

9月19日(金)

アップル・コープス
London

BBCラジオ1のシリーズ番組「シーン・アンド・ハード」のために、ポールはデビッド・ウィグからインタビューを受けた。アルバム"ABBEY ROAD"のプロモーションが中心となったこのインタビューは2回に分けて、9月21日に2分45秒、9月28日に4分55秒の抜粋が放送される。放送時間はいずれも午後3時から4時まで。
注:ジョンとリンゴも、"ABBEY ROAD"のプロモーションのために、ラジオ・ルクセンブルクのDJキッド・ジェンセンとの長いインタビューに応じている。リンゴのインタビューは9月26日午前12時30分から2時5分に、ジョンのインタビューは、翌9月27日の同じ時間帯に放送。インタビューはアップルで収録されているが、収録日と時間は不明である。

プラスティック・オノ・バンドがスタジオ・レコーディング

9月25日(木)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

アルバム"ABBEY ROAD"のリリースの前日、ジョンはEMIスタジオで、2回にわたってプラスティック・オノ・バンドのセッションをした。午前10時から午後1時45分までは、トロントのコンサートでレコーディングした演奏のステレオ・ミックスを作った。内容は、キム・フォウリーによるバンド紹介、'Blue Suede Shoes' 'Money (That's What I Want)' 'Dizzy Miss Lizzy' 'Yer Blues' 'Cold Turkey' 'Give Peace A Chance' 'Don't Worry Kyoko (Mummy's Only Looking For Her Hand In The Snow)' 'John, John (Let's Hope For Peace)'というものだった。ジェフ・エメリックはミックスされたテープをアップルに持っていった。
午後7時から午前1時30分までのセッションでは、ジョン(ギターとボーカル)、エリック・クラプトン(ギター)、クラウス・フォアマン(ベース)、リンゴ(ドラム)、ヨーコ(いろいろ)という編成で、'Cold Turkey'のスタジオ・バージョンを初めてレコーディングした。プロデュースはジョンが手がけ、ベーシック・トラックとリード・ボーカルを26テイク録音した。

9月28日(日)

トライデント・スタジオ
London

この日はトライデント・スタジオで、'Cold Turkey'を録り直し。プラスティック・オノ・バンドのメンバーは、前回の木曜のときと同じ(セッションの開始時刻と終了時刻は記録されていない)。

CamScannerでスキャン

9月29日(月)
EMIスタジオ、第4室
London

午後8時から12時まで、ジョンのプロデュースで、録り直した'Cold Turkey'のステレオ・ミックスを作った。

マーティン、チャリティ・アルバム用の'Across The Universe'をミックス
10月2日(木)
EMIスタジオ
London

世界自然保護基金のチャリティ・アルバムのリリースがようやく実現に近づいた。このアルバムにはビートルズが1968年2月4日~8日にレコーディングした'Across The Universe'が収録されることになっていたため、この日、ジョージ・マーティンは午前9時30分から午前11時までかけてEMIスタジオでこの曲のステレオ・ミックスを作った。
このチャリティ・アルバムの"NO ONE'S GONNA CHANGE OUR WORLD"というタイトルの原案となり、アルバムの冒頭も飾った'Across The Universe'には、曲の最初と最後に野生動物のサウンドを入れるべきではないかと、マーティンは思いついた。そこでアビイ・ロードの音響効果音のコレクションから、鳥のさえずり、鳥のはばたきの音、そしてなぜか遊び場にいる子どもたちの声をコピーし、曲の冒頭の20秒間と、曲の最後に短くかぶせた。また、オリジナル・レコーディングよりかなりスピードを速め、曲の長さを10秒ほど短くした。
このアルバムは、10月3日にジョージ・マーティンによってEMIで編集され、12月12日にイギリスでリリースされる。

10月3日(金)
ランスダウン・スタジオ、スタジオA
Lansdowne Rd, London

'Cold Turkey'のB面に収録するため、プラスティック・オノ・バンドは、ヨーコの'Don't Worry Kyoko (Mummy's Only Looking For Her Hand In The Snow)'のスタジオ・バージョンをレコーディングした。この日のメンバーは、ヨーコ(ボーカル)、ジョン(ギター)、リンゴ(ドラム)、エリック・クラプトン(ギター)、クラウス・フォアマン(ベース)である。

10月5日(日)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から午後10時までの、プラスティック・オノ・バンドのセッション。トライデントで録音した'Cold Turkey'のリメイクにオーバーダビングを加え、ジェフ・エメリックのプロデュースでステレオ・ミックスを作った。また、ヨーコの'Don't Worry Kyoko'のステレオ・ミックスも作り、A面にジョンの'Cold Turkey'、B面にヨーコの曲というシングルを完成させた。イギリスでは10月24日にアップルからリリースされる。
'Cold Turkey'のプロモーションのため、アップルはめまぐるしく、また生々しく映像を編集した35ミリ・カラー・フィルムをテレビ局に配給した。モントリオールでのベッド・インのフィルムと9月13日のトロントでのコンサートのフィルムを編集したこのクリップには、途中にさまざまなイメージ映像がランダムに挿入されている。これは、11月6日午後7時5分から7時30分に、BBC1の『トップ・オブ・ザ・ポップス』で白黒放送される。また、ジョンとヨーコのシネマ・クラブでのイベントでも上映される。

10月8日(水)
アップル・コープス
London

ラジオ1の番組『シーン・アンド・ハード』のために、今度はジョージがデビッド・ウィグからインタビューを受けた。ジョージは"ABBEY ROAD"の話だけでなく、アップルでジョージがプロデュースを手がけ、思いがけずトップ20ヒットとなったラダ・クリシュナ・テンプルのシングル'Hare Krishna Mantra'のことなどを含め、最近の話題をいくつか語った。このインタビューは2回に分けて放送され、10月12日の午後3時から4時の間に5分5秒の抜粋が、19日には7分40秒の抜粋が紹介される。

10月20日(月)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

午後2時30分から11時30分までのプラスティック・オノ・バ

CamScannerでスキャン

ンドのセッションで、ジョンはトロントでのライブ・バージョンから'Don't Worry Kyoko'の新たなステレオ・ミックスを作り、9月25日のバージョンをボツにした。また、ジョンはライブ・アルバムのテープに各種のクロスフェイド編集をほどこし、さらに、自宅から持ってきたテープ・ループのコピーをふたつ作った。これで完成したアルバム用マスター・テープはアップルに届けられてカッティングされた。アルバムは12月12日にイギリスでリリースされる。
ジョージはこの日、ラビ・シャンカールのロンドン公演をパティと観に行く。

10月21日(火)

アップル・コープス
London

ジョンがラジオ番組「シーン・アンド・ハード」のデビッド・ウィッグのインタビューを受けた。このもようは、BBCラジオ1で10月26日午後3時から4時までに、5分30秒の抜粋が紹介される。

ポール死亡説の真相を確かめる

10月24日(金)

ポールの農場
Campbeltown, Argyllshire

ポール・マッカートニーがじつは1966年に死亡していたというばかばかしい噂が、アメリカではすさまじい勢いで広がっていた。噂の真相を確かめるべく、BBCの記者クリス・ドレイクはこの日スコットランドの北西部のキンタイア岬にあるポールの農場に出かけた。この日の独占インタビューで、ポールは自分が確かに生きていると断言し、テープを持ってロンドンに飛んで帰ったドレイクは、少なくともイギリス人に対してはこの噂がデマであることを証明できた。このときのポールのインタビューは、10月26日午後1時から2時のラジオ4の番組「ザ・ワールド・ディス・ウィークエンド」で1分、10月27日午後1時から1時30分の「ザ・ワールド・アット・ワン」で3分30秒、さらに27日午後10時から12時のラジオ2の「レイト・ナイト・エクストラ」で3分20秒放送される。

リンゴ、ソロ・アルバムのレコーディングを開始

10月27日(月)

EMIスタジオ、第3スタジオ
London

ジョージ・マーティンをプロデューサーに迎えて、ビートルズのメンバーでは初めてリンゴがソロ・アルバムを作ることになり、この日レコーディングを開始した。のちに"SENTIMENTAL JOURNEY"というタイトルとなるこのアルバムの最初のセッションは、午後2時30分から5時までと、午後7時から10時45分まで、第3スタジオで行なわれた。
このアルバムのコンセプトは、昔なつかしいスタンダード・ナンバーの数々をエルマー・バーンスタインやクインシー・ジョーンズなど、ポピュラー音楽やオーケストラ音楽の畑で世界的に有名な人たちに新しいアレンジをつけてもらって、リンゴが歌うというものだ。この日の午後のセッションでは、17名のオーケストラ奏者の演奏で'Night And Day'(1937年のトミー・ドーシーのヒット曲でチコ・オファリルの新アレンジ)をレコーディングし、夜のセッションではリンゴがこれにボーカルをオーバーダビングした。午後9時30分から10時45分まではこの曲のステレオ・ミックスを作った。

11月6日(木)

ウェセックス・サウンド・スタジオ
Highbury New Park, London

リンゴの"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッション。午後7時から9時までは、18人のミュージシャンにより'Stormy Weather'(1943年のリナ・ホーンのヒット曲、アレンジャーは不明)をレコーディングした。午後9時から10時まで、リンゴがボーカルをオーバーダビング。しかし、この曲はアルバムには収録されず、現在も未発表のままである。

11月7日(金)

ウェセックス・サウンド・スタジオ
London

"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッション。午後7時から10時まで'Stardust'(1929年のホーギー・カーマイケルのヒット曲で多数の有名シンガーがレコーディングしている)のオーケストラ・トラックをレコーディングした。ジョ

CamScannerでスキャン

ージ・マーティンはアレンジ料としてEMIに30ポンドを請求しており、レコーディング資料にもマーティンの名前が記されている。しかし、アルバムのスリーブには、この曲のアレンジャーとしてポール・マッカートニーの名前がクレジットされている。
この日発売された「ライフ」誌の表紙はポールとリンダ。また、ジョンとヨーコの"WEDDING ALBUM"がイギリスでリリースされる。

11月14日(金)
トライデント・スタジオ
London

"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッション。リンゴが'Stardust'にボーカルをオーバーダビングし、'Dream'(1945年のパイド・パイパースのヒット曲をジョージ・マーティンがアレンジ)のベーシック・トラックを録音した。セッション開始は午後4時だったが、終了時刻は不明。
11月18日の午後4時から4時30分には、ジェフ・エメリックがEMIスタジオの第4室で、'Dream'と'Stardust'のラフなステレオ・ミックスを作っていた。

ジョン、MBE勲章を返還

11月25日(火)
アップル・コープス
London

またしても、ジョンをめぐるビッグ・ニュースが発生した日。ジョンはこの事件によってメディアが大騒ぎすることを望み、事実大騒ぎになった。ジョンが以前授与された大英帝国勲位のMBE勲章を、イギリス政府がベトナム戦争に加担していることに抗議し、女王に返還したのだ。実際にはジョンの運転手が、この日の朝バッキンガム宮殿に勲章を届けたという。アップルで待機していたジョンのもとには、ひっきりなしに電話がかかり、ジャーナリストや放送記者たちが続々とつめかけた。ジョンは、平和キャンペーンの見出しをさらに増やすべく、喜んでマスコミの対応をさばいていった。
ニュース番組のインタビューに何本か答えたのに加えて、ジョンはBBCのデビッド・ベランのインタビューにも答えている。これは、翌朝のラジオ番組「トゥデイ」のなかで、午前7時15分から7時45分までと午前8時15分から8時40分の2回放送される。

未発表に終わるシングル

11月26日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

このころジョンにとってどうしても心残りになっていたのは、まだ'What's The New Mary Jane'と'You Know My Name (Look Up The Number)'の2曲がリリースされていないことだった。どちらもビートルズとしてのレコーディングであり、作曲クレジットもレノン=マッカートニーになっていたが、どれも実際にはジョンがひとりで書いた作品だった。そこでジョンは、ビートルズでリリースしないというなら、プラスティック・オノ・バンド名義のシングル曲にしようと考えた。
ジョンとジェフ・エメリックのふたりが共同プロデューサーとなって行なわれたこの日の午後7時から午前3時までのセッションには、目的がふたつあった。まず1969年4月30日に制作した'You Know My Name (Look Up The Number)'のベスト・モノ・ミックスを編集し、シングルA面にふさわしくなるように、6分8秒の長さを縮めることだった(結果的に4分19秒になった)。もうひとつはB面の'What's The New Mary Jane'に新しくオーバーダビングを加えることだった。編集作業は簡単に終わったが、オーバーダビングはかなり面倒なことになり、数種のミキシング、編集、そしてオーバーダビングが行なわれた。午前3時までには、プラスティック・オノ・バンドとしてリリースするシングルの両面が完成した。
すぐにディスクがカッティングされ、アップルは12月5日に緊急リリースし、カタログ番号はAPPLES1002と発表。また、アップルは「現在のショー・ビジネス界では最高峰とも言える顔ぶれ(の演奏に支えられ)」ジョンとヨーコが歌う、といった少し謎めいた宣伝文句をつけるのも忘れなかった。
しかし、どういうわけか(おそらくビートルズのほかの誰かが反対したのだろう)、このシングルは結局発売されなかった。12月1日になると「延期」となり、それが解除されることはなかった。こうして'What's The New Mary Jane'は1996年の"ANTHOLOGY 3"でようやく日の目を見ることになる。この日編集した'You Know My Name (Look Up The Number)'は、ビートルズのイギリスでの最後

CamScannerでスキャン

のシングル'Let It Be'のB面に収録され、1970年3月6日にリリースされる。

11月28日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッション。午後5時から6時30分までに、'Blue Turning Grey Over You'(1930年のルイ・アームストロングのヒット曲で、オリバー・ネルソンの新アレンジ)のテイク1をレコーディングした。午後6時30分から8時30分までは'Stardust'のリダクション・ミックスをして、8時30分から10時まで、これにリンゴのボーカルをオーバーダビングした。10時から12時までには'Stardust'のステレオ・ミックスを作った。

リンゴのテレビ・ドキュメンタリー

12月1日(月)

ロンドンのロケ地
London-area

リンゴ・スターの興味深いドキュメンタリー番組の撮影が行なわれた。BBC2のアート番組「ラインナップ」(「レイト・ナイト・ラインナップ」とも呼ばれていた)の特集で、12月10日午後11時7分から11時30分にかけて放送される。
番組出演の目的は、映画"THE MAGIC CHRISTIAN"のプロモーションだったが、おかしなことに、最終的には番組のなかでこの映画について何も語られず、映画からの映像の抜粋が紹介されるわけでもない。しかし、映画の公開前日に公共放送テレビでこのようなリンゴの特集が放送されるだけでも、十分なプロモーションだった。
この日は1日中ロケ地での撮影に追われ、リンゴは番組の案内役のなかでもっとも人気の高かったトニー・ビルボウからインタビューを受けた。編集が終わった実際の放送分ではサビル・ロウにあるアップルから出てきたビルボウとリンゴが、リンゴのシルバーのメルセデス・ベンツに乗り込み、車がバッキンガム宮殿を抜けて、バターシー・ブリッジを渡り、バターシー発電所を通り過ぎる間、さまざまな話題について知的な会話をするところが撮影された。
次に、ロンドン郊外のどこかで、テムズ川でボートを漕ぐシーンを撮影。リンゴはボートを漕ぎながら語る。リンゴの漕ぐボートに同乗したカメラと、制作スタッフが漕ぐ別のボートの両方のカメラから撮影した。冬の太陽が沈みかける午後4時ごろ、ようやく撮影は終了。

ジョンが1960年代を代表する人物に ジョージはデラニー&ボニーのツアーに参加

12月2日(火)

ティッテンハースト
London Rd, Sunninghill, Ascot, Berkshire
コルストン・ホール
Bristol
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この10年を代表する人物をひとり挙げるように言われて、社会学者で人類学者であるデスモンド・モリス博士がジョン・レノンを選んだ。これは、1960年代という時代についてのモリスの印象をよく反映していた。同じ質問をされた2人の著名人、放送キャスターのアリスター・クックはジョン・F・ケネディを、作家のメアリー・マッカーシーはホー・チ・ミンを選んだ。アソシエイテッド・テレビジョン(ATV)は、この3人が選んだ人物を各20分ずつのドキュメンタリーにした1時間番組「マン・オブ・ザ・デケイド」を制作し、12月30日の午後10時30分から11時30分にかけてATVから全国ネットで放送する。ジョンのドキュメンタリーはいちばん最後で、午後11時10分から11時30分。
モリスはジョンが16歳のころよく観ていたグラナダ・テレビの子ども向け番組「ズー・タイム」の司会者で、ジョンは広く尊敬されていたモリスが自分を選んでくれたことを心から喜んでいた。20分のドキュメンタリーの中心となったモリスのジョンとヨーコへのインタビューは、この日ジョンのティッテンハーストの邸宅の樹木の繁る広大な庭で散歩しながら撮影された(キッチンでも撮影は行なわれたが番組で使用されなかった)。20分の特集には、このほかに、数日前にソーホーの劇場で試写してジョンがモリスと一緒に吟味しながら選んだビートルズ関連やソロとしての映像の抜粋が含まれる。
ジョンが選んだ映像は、キャバーン・クラブで'Some Other Guy'を演奏しているビートルズ、1964年2月7日にケネディ空港を襲ったビートルマニアのニュース映像、映画"A HARD DAY'S NIGHT"から3つのシーン(列車で同乗

CamScannerでスキャン

した男のシーン、記者会見シーン、'If I Fell'の演奏シーン)、映画"HELP!"からパトリック・カーギルと繰り広げるスコットランド・ヤードの場面、"THE BEATLES AT SHEA STADIUM"から'I'm Down'の演奏、「ミュージック!」での'Hey Jude'の演奏シーン、麻薬所持の罰金を言いわたされたあとメリルボーン下級裁判所の外に出てきたジョンの1968年11月28日のニュース映像、アムステルダムでのベッド・インからのクリップ、モントリオールでのベッド・インからのクリップ2種類(ジョンがバークレイの学生に非暴力抵抗を勧めてから続く暴動のシーン、'Give Peace A Chance'のレコーディング・シーン)、それに'Something'のプロモーション・フィルムからの抜粋である。また、番組では、2万5,000人のアメリカのベトナム反戦運動者が1969年11月15日に'Give Peace A Chance'を歌いながらホワイト・ハウスの前をデモ行進している映像も紹介される。
BBCとATVの競合関係を考えると妙な感じがするが、じつはモリスとATVスタッフがジョンへのインタビューを行なっていた様子は、BBCのカメラマンが撮影していた。というのも、この日はBBC制作の特別ドキュメンタリー番組「ザ・ワールド・オブ・ジョン・アンド・ヨーコ」の5日間にわたる密着撮影の初日でもあったからだ。この番組は、12月15日の午後10時30分から11時5分にかけて、デビッド・ディンブルビーが司会を務めるBBC1のシリーズ番組「24アワーズ」の特別編として放送。BBC1は、11月15日からカラー放送を開始していたため、この番組はカラーで放送される。
このドキュメンタリーは、BBCのカメラマンが5日間にわたって、レコーディング・スタジオから、自宅、オフィス、車の中、ホテル、さらには寝室やバスルームまでジョンとヨーコをどこまでも密着取材したものだったので、非常に興味深い番組である。BBCの独占的な撮影に協力する代わりに、ジョンとヨーコはBBCと特別契約を交わし、放送するかどうかに関係なく、撮影した全フィルムを以降自由に使用できる独占所有権を得た。このときの契約のおかげで、19年後にヨーコが製作するドキュメンタリー映画"IMAGINE: JOHN LENNON"では、「24アワーズ」で撮影されたフィルムがふんだんに使用される。

一方、12月2日の夕方、ジョージ・ハリスンは1966年8月にビートルズがツアーをやめてから初めてステージで演奏した。前日12月1日の夜、ジョージはロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで行なわれた、アメリカの白人ソウルのカップル、デラニー&ボニーのコンサートを観に行ったのだが、このツアーのバック・バンドは、エリック・クラプトン率いるフレンズというグループだった。ジョージとかなり親しくなっていたクラプトンは、フレンズの無名メンバーとしてイギリス・ツアーに参加したらどうかとジョージを誘った。ジョージは、これはビートルズの名前をいっさい出さず、まったくスポットライトを浴びず、長髪と髭で自分の正体を隠し、誰にも文句を言われずに好きなように演奏することでコンサート・ステージに戻る絶好の機会だと考え、承諾した。それに、ジョージはデラニー&ボニーの音楽の大ファンで、ビジネス上の問題で実現はできなかったものの、1969年5月には彼らのアルバム"ACCEPT NO SUBSTITUTE"をアップルからイギリス・リリースしようとしていたほど肩入れしていた。もうひとつジョージの心を動かしたのは、ツアーの前座のなかにアシュトン・ガードナー・アンド・ダイクがいたことだ。リバプールのリモ・フォーの元メンバーだったアシュトンとダイクは、ジョージの誘いで映画"WONDERWALL"のサウンドトラック・アルバムで演奏していた。
というわけで、ジョージは1965年以来初めて、イギリスでパッケージ・ツアーを行なうことになった。ツアーの形態は、1965年のときほど出演バンドの数が多くなかったので、その分主演バンドの演奏時間が長く、20分ではなく40分もあることが違うくらいだった。
ジョージは6夜連続でビートルズが1963年から65年にかけて訪れたような会場を回り、ひと晩に2回のステージをこなし、地元のホテルに宿泊した。
さらに、この日EMIスタジオでは、ビートルズのテープのミキシングが行なわれていた。1970年2月26日にキャピトルは1964年から1969年までのビートルズの10曲を集めたアメリカ盤アルバム"HEY JUDE"をステレオでリリースすることになる。しかし、収録曲のなかには、まだステレオ・ミックスが制作されたことのない曲があり、この日の午後2時30分から5時30分までと12月5日にこの作業が行なわれた。この日の午後は、'Lady Madonna'と'Rain'のステレオ・ミックスが作られた。
この日のセッションでは、'Octopus's Garden'のステレオ・ミックスも作られたが、これはアルバムのためではなかった。リンゴは12月14日にヨークシア・テレビが制作したジョージ・マーティンの特別番組「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」の録画に参加し、'Octopus's Garden'

を歌うことになっていて、この日の作業はこのためのものだった。つまり、ミュージシャンズ・ユニオンの当て振り禁止令にひっかからないよう、曲の内容を多少変更することになったのだ。この日は、ベース、ピアノ、リード・ギターを消去した新しいミックスを作り、12月8日のオーバーダビングにそなえた。

12月3日(水)

ティッテンハースト
Sunninghill, Ascot
アップル・コープス
London
タウン・ホール
Birmingham

「24アワーズ」のドキュメンタリー「ザ・ワールド・オブ・ジョン・アンド・ヨーコ」の撮影が続けられる。この日のティッテンハーストで撮影された映像で、最終的な50分番組に使用されたものは、ベッドにいるジョンとヨーコ、メロトロンを弾くシーン、昔にグラナダ・テレビが収録した'Some Other Guy'のクリップをホーム・ムービーのスクリーンに映してジョンが熱心に見入っているシーンである。続いてロンドンに向かう白いロールス・ロイスの後部座席におさまっているジョンとヨーコがアシスタントのアンソニー・フォーセットに1日の予定を指示し、アップルに到着するところが撮影される。番組では、アップルに着いてから、ジョンがフォーセットとビートルズの個人アシスタントであるピーター・ブラウンとミーティングをし、その途中に電話でトロント行きの相談をして、それから「ニュー・ミュージカル・エクスプレス」誌のアラン・スミス、日本から来たふたりの取材記者、DJでポピュラー・ミュージック・コラムニストのスチュアート・ヘンリー、アメリカ人ライターのグロリア・エマーソンと、それぞれからのインタビューに答えるシーンが紹介されている。ジョンは、グロリア・エマーソンとのインタビュー中に痛烈な言い争いになった(かなり興奮する内容となったこのインタビューは、「24アワーズ」の放送日の12月15日、午後10時から12時のBBCラジオ2の番組「レイト・ナイト・エクストラ」のなかで紹介される)。

この夜、ジョージはバーミンガムのタウン・ホールに出演し、デラニー&ボニーのパッケージ・ツアーの2回のステージをこなした。ジョージがこの会場に出演したのは、ロイ・オービソンと一緒にイギリスを回った1963年5月から6月のツアー以来のことだった。

ジョンとヨーコの4枚目の前衛アルバムになるはずだった作品

12月4日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London
シティ・ホール
Sheffield

この日、EMIの第2スタジオでは、ふたつのソロ・セッションが行なわれた。午前9時30分から午後1時までは、リンゴのアルバム"SENTIMENTAL JOURNEY"用にジョニー・スペンスが17名のオーケストラ奏者を指揮し、'Blue Turning Grey Over You'を9テイク録音した。午後1時から2時30分まで、リンゴがこれにボーカルをオーバーダビングし、午後2時30分から4時までにステレオ・ミックスが作られた。

それから3時間後、ジョージがデラニー&ボニーとともにシェフィールドのシティ・ホールで1回目のステージに立つころ、プラスティック・オノ・バンドはBBCの「24アワーズ」が撮影するなかで異色なセッションを開始した。この日のメンバーは、ジョンとヨーコのほかは、ジョン・レノンのEMIセッションに必ず顔を出すような面々、つまり、マル・エバンズ、アンソニー・フォーセット、ジェフ・エメリック、フィル・マクドナルド、マルコム・デイビーズ、エディ・クライン、そのほか大勢である。全員が午後7時から午前1時40分までの長いセッションに参加したが、この日は2種類のテープが録音された。最初は笑い声の長いテープで、参加者は赤鼻をつけて輪になって立つか座るかして、大笑いを続け、思いついたことをめちゃくちゃに叫んだりした。その後、このテープにはパーカッションと歌声がオーバーダビングされた。その次はささやきが延々と続くテープで、参加者は順番にマイクに向かって何かをささやく。しかし、ジェフ・エメリックが「Bill Livy's head (ビル・リビーの頭)」とささやくと、スタジオじゅうが大爆笑になった(ビル・リビーはEMIのテクニカル・スタッフで、頭がはげていた)。

次に、この'Item 1'と'Item 2'のテープをステレオ・ミキシングした。この出来あがったテープは、セッションを通してスタジオとコントロール・ルームの様子を録音していたテープ5巻とともに、マル・エバンズが持ち帰った。ジョンとヨ

ーコは、これらのテープから、"TWO VIRGINS" "LIFE WITH THE LIONS" "WEDDING ALBUM"に続く4枚目のアバンギャルド・アルバムとして、片面に笑い声、もう片面にはささやきを収録したアルバムを制作する予定だと説明した。しかし、のちに気が変わったのか、このレコードは発表されていないし、以後二度と話題にものぼらなかった。結局、何の成果も生まなかったけれど、少なくとも「24アワーズ」を観た人は、ジョンとヨーコのエキセントリックなレコーディングを観ることができたのだ。

ジョンとヨーコの実験映画

12月5日(金)

マーケット・スクエア
Lavenham, Suffolk
ブル・ホテル
Hall St, Long Melford, Suffolk
シティ・ホール
Newcastle-upon-Tyne

この日、「24アワーズ」の制作スタッフは、ロールス・ロイスに乗って雪におおわれたサフォーク州の田舎まで出かけたジョンとヨーコを追い、その道中と、ラベナムの町でふたりが新しい実験映画"APOTHEOSIS 2"を製作する場面を撮影した。頭からつま先まである大きな黒いマントをかぶり、目だけ出したジョンとヨーコは、体をふるわせながらうずくまる。その一方で、ジョンから絶大な信頼を寄せられていた実験的カメラマンのニック・ノーランドが熱気球に乗って、壮大な田舎の雪景色を背景にしてふたりを上空から撮影した(撮影日はあらかじめ予定されていたので、雪は偶然の産物である。これ以前にハンプシア州で行なわれていた"APOTHEOSIS"の撮影は失敗に終わっていた)。

「24アワーズ」では、気球が空に上がるまで辛抱強く待っているふたりの姿や、マントを脱いでロング・メルフォードのブル・ホテルにチェック・インするシーンなどが紹介されていた。

ジョンとヨーコの活動が多忙をきわめた1969年には、ふたりはほかにも3種類の実験的映画を製作しているが、どれも撮影日ははっきりしない。その3作とは"HONEYMOON" "RAPE PART II" "SELF PORTRAIT"だが、"SELF PORTRAIT"はジョンのペニスが勃起するまでのさまざまな過程を42分間、スローモーションで映したもので、上映はプライベートな形で数回行なわれただけだ。このフィルムを製作したジョンの意図はわからないが、ヨーコが「批評家は誰もこの作品には触れようとしなかったわ」と言うように、これに関する批評記事は存在しない。

一方、12月5日の夜、ジョージはニューキャッスル・アポン・タインのシティ・ホールで2回のステージに出演し、デラニー&ボニーの背後で目立たないように演奏した。

さらにEMIスタジオでは、この日の午後2時30分から5時15分まで、キャピトルからリリースされるアルバム"HEY JUDE"のため、'Hey Jude'と'Revolution'のステレオ・ミックスが作られた。

ジョージ、リバプール・エンパイアのステージに立つ

12月6日(土)

ブル・ホテル
Long Melford
ウェンブリー・スタジオ、第1スタジオ
Wembley
エンパイア・シアター
Liverpool

ロンドン・ウイークエンド・テレビ(LWT)の番組「フロスト・オン・サタデイ」では、翌週の木曜に初公開となる映画"THE MAGIC CHRISTIAN"を特集し、主演スター、共演スターそしてゲスト・スターであるピーター・セラーズ、リンゴ・スター、スパイク・ミリガンがそろって出演した。番組は夕方にウェンブリー・スタジオで録画され、この日の午後11時10分から12時00分にカラー放送された。ラジオ・コメディ集団グーンズの再結成を思わせる、セラーズとミリガンという顔ぶれにはさまれて、リンゴは番組では口数が少なかったが、即興で'Octopus's Garden'を少し歌った。番組では映画の映像も紹介された。

ロング・メルフォードのブル・ホテルの客室では、BBCの「24アワーズ」の撮影班が「幸か不幸か」というゲームで遊ぶジョンとヨーコを収録し、「ザ・ワールド・オブ・ジョン・アンド・ヨーコ」の撮影を終了した。

デラニー&ボニーとツアー中のジョージは、この日、すべてのスタート地点となった場所、リバプールのエンパイア・シアターのステージに戻った。リバプールのもっとも有名なス

CamScannerでスキャン

ターの静かな帰還となった。

ジョージ参加のライブが録音される

12月7日(日)

ライム・グローブ・スタジオ、Eスタジオ
London
フェアフィールド・ホール
Croydon

この夜のジョンとヨーコのテレビ出演は、いつもとはまったく趣向が違うもので、BBC1の宗教的な番組『ザ・クエスチョン・ホワイ』で、悪魔をめぐる神学的なライブ討論会に参加した。マルコルム・マガリッジの司会によるこの討論会には、ジョンとヨーコのほかに、ヘンリー・セシル、ジェラルド・コーエン、デビッド・クーパー、ジョン・ハケット陸軍大将、クリストファー・ニール・スミス牧師、ポール・ジール、司教座聖堂参事会員のエドワード・カーペンターが出席した。番組は、午後6時15分から6時50分まで、ライム・グローブ・スタジオから生放送された。

この日はデラニー&ボニーのツアーの7日目、そして最終日である。クロイドンのフェアフィールド・ホールでレコーディングされた最後の2ステージは、ライブ・アルバム"DELANEY & BONNIE ON TOUR WITH ERIC CLAPTON"として、1970年5月29日にイギリスでリリースされる。演奏レパートリーは、新旧のナンバーが入り混じり、ソウルからロックンロールまでと幅広いが、ジョージの作品はない。ライブ・アルバムには、'Things Get Better'、メドレー'Poor Elijah/Tribute To Robert Johnson' 'Only You Know And I Know' 'I Don't Want To Discuss It' 'That's What My Man Is For' 'Where There's A Will There's A Way' 'Comin' Home'、メドレー'Long Tall Sally/Jenny Jenny/The Girl Can't Help It/Tutti Frutti'が収録される。

12月8日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から午後12時15分までのセッションで、ジョージ・マーティンのテレビ番組「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」用の'Octopus's Garden'のトラックに、リンゴの新たなボーカルをオーバーダビングするため、10テイク録音した。さらに、ほかのミュージシャンによるベース、リード・ギター、ピアノを追加した(12月2日と14日参照)。

コペンハーゲン公演でデラニー&ボニーのツアー終了

12月10日(水)～12日(金)

フォーコナー・シアター
Falkoner Alle, Copenhagen, Denmark

ジョージが参加したデラニー&ボニーのコンサート・ツアーが延長され、コペンハーゲンで3日間の追加公演が行なわれた。コペンハーゲンは1964年6月4日にビートルズが代役ドラマーのジミー・ニコルとともに訪れたとき以来だった。あれから5年しかたっていなかったが、ジョージにとっては、人生を1回やり直すくらいの隔世の感があった。

ロンドンのライセアムで開かれるジョンのコンサート(12月15日参照)に参加するのを別にすれば、12月12日がジョージとデラニー&ボニーとの最後の共演日となる。デラニー&ボニーとしては、このうえない人脈ができたことに大満足してアメリカに帰った。

ジョージ・マーティンの特別番組

12月14日(日)

テレビジョン・センター、第4スタジオ
Kirkstall Rd, Leeds, Yorkshire

ジョージ・マーティンの特別テレビ番組「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」が、イギリス北部に(1968年に)新設されたITV系列のヨークシア・テレビのスタジオでカラー収録された(それまで北部全域を担当していたグラナダ・テレビは北西地域のみの担当となり、北東地域は引き続きタイン・ティーズが受け持っていた)。リンゴは自分の出番で新たなボーカルを入れた'Octopus's Garden'のトラックを使ってカメラの前で巧妙に口パクした。

「音楽とコメディを一緒にしたファミリー・エンターテインメント、カラフルでおかしなミュージカル・ショー」という謳い文句がついたこの特別番組は、クリスマス・イブの12月24日から午後6時から7時にかけて、YTVによって放送され、ほとんど全国のITV系列局でも放送された。リンゴのほかには、ダドリー・ムーア、ホリーズ、ブルー・ミンク、「トップ・オブ・ザ・ポップス」のダンサー・チームであるパンズ・ピープル、ルル、スパイク・ミリガンがゲスト出演、ジョージ・マーテ

CamScannerでスキャン

ィン自身も40人からなるジョージ・マーティン・オーケストラを指揮した。番組プロデューサーのデビッド・マレットは、1965年11月23日に初めてビートルズがプロモーション・クリップを制作したときには一介の使い走りにすぎなかったが、このときには飛ぶ鳥を落とす勢いにまでなっていた。

アルバム“GET BACK”の再編集 プラスティック・オノ・バンドのステージにジョージが出演

12月15日(月)

アップル・コープス
London
ライセアム・ボールルーム
Wellington St, London

この期におよんでもまだ、“GET BACK”の行方ははっきりしなかった。1969年6月には、アルバムのリリースが延期になっている理由は、アルバムに添える豪華パンフレットの制作が遅れているためと発表されていた。それからすぐに8月リリースの予定は棚上げとなった。7月末になると“GET BACK”の前に新しいアルバム“ABBEY ROAD”を先にリリースし、“GET BACK”は映画の公開と合わせて11月にリリースされると発表された。しかし、8月にもなると11月のリリースが再度12月に延期された。11月になると、今度はリリースは新年になると発表された。しかし、その間グリン・ジョンズが1969年春に制作したミックスのアセテート盤のコピーをアメリカのラジオ局が入手し、それがもとで、“GET BACK”のブートレッグ盤が出回ることになった。

映画とパンフレットの問題がリリースを遅延させていたのはもちろんだが、それに加え、何とか先延ばしにしたいというこのプロジェクトへのビートルズの態度にも問題があった。あるいは、リリースしたいと少しは思っていたとしても、どうやって出せばいいのかわからなかった。そのうえさらにグリン・ジョンズによる最初の“GET BACK”アルバムの出来には全員が満足できなかった。そこで1969年12月、ジョンズは再び新たなビートルズ・アルバムをミックス・ダウンするよう依頼される。ただし、今度はひとつだけ条件があった。まだ公開されていない映画とタイアップできるような内容にするということだ。

グリン・ジョンズは再びオリンピック・スタジオを拠点として、この作業を開始した。この日の午後1時から2時半までと、12月21日、1970年1月5日、1月8日に作業をして、1月3日と1月4日にはEMIでのセッションに参加する。

一方、ロンドン中心部にあるアップル本社では、リンゴがめずらしいラジオ出演を収録していた。BBCがクリスマスに流すことを慣例としている盲目者基金の募金放送のため、リンゴは2分ものメッセージを録音したのだ。これは、クリスマスにラジオ1で午前10時から12時にかけて放送される番組「ケニー・エベレット・クリスマス・ショー」のなかで、10時15分に流れる(残念ながら集まった基金はわずか175ポンドで、BBCが12月に行なったチャリティ・イベントのなかでは最も少ない金額だった)。

また、この日の夜、EMIはこれまで試したことのない仕事に挑戦した。ロンドン中心部のストランド通りの近くにあるライセアム・ボールルームというダンス・ホールで開かれたプラスティック・オノ・バンドのコンサートをその場でライブ・レコーディングするという試みである。ジェフ・エメリックがプロデューサーを務め、ピーター・ブラウンとジョン・カーランダーがエンジニアとなって、この日のコンサートの一部始終をレコーディングした。録音されたのは、ホット・チョコレート・バンド、パイオニアーズ、ラスカルズ、ジミー・クリフ、ブラック・ベルベットなど共演者の演奏、さらにあいまのDJエンペラー・ロスコによるおしゃべり、そして最後のプラスティック・オノ・バンドによる'Cold Turkey'(7分ほどあった)と、'Don't Worry Kyoko (Mummy's Only Looking For Her Hand In The Snow)'(16分にまでおよんだ)。

UNICEFへのチャリティを目的とした「ピース・フォー・クリスマス」と題するこのコンサートのため、ジョンはわずか48時間前に、のちに自らプラスティック・オノ・スーパーグループと名づけたプラスティック・オノ・バンドのメンバーを集めていた。それが、ジョンとヨーコのほかに、ジョージ、エリック・クラプトン、クラウス・フォアマン、ボビー・キーズ、ビリー・プレストン、キース・ムーン、アラン・ホワイト、ジム・ゴードン、そしてデラニー&ボニーという豪華メンバーであった。また、ビートルズのメンバーふたりがイギリスで同じステージに立つのは、じつに1966年5月1日以来のことだった。このイベントの一部はムービートゥニュース社のカメラが撮影していた。

12月17日午後8時から10時までの間、EMIの第1スタジオ

CamScannerでスキャン

のコントロール・ルームで、ジェフ・エメリックはこの日にレコーディングした4トラックの各バンドの演奏テープと2トラックの観客の歓声を録音したテープを使用して、プラスティック・オノ・バンドのライセアム・コンサートのステレオ・ミックスを制作した(ジョンは再びカナダに行っていたため不在だった)。しかし、このときの演奏は1972年6月になるまでレコード化されなかったが、ジョンとヨーコの2枚組アルバム"SOME TIME IN NEW YORK CITY"に収録するにあたって、この日のミックスは、1970年11月26日にEMIスタジオで4トラック・テープにコピーされ、のちに1971年にニューヨークで録音されるオーバーダビング・テープをさらにかぶせられる。その際、オリジナルのオルガン・トラックを消して、その代わりにニッキー・ホプキンスのピアノがオーバーダビングされる。

ジョンとヨーコ、カナダの首相と会見し、平和を訴える

12月20日(土)

トロント大学、文化・工学部
Tronto, Ontario, Canada
CBCスタジオ
Bay St, Toronto, Ontario, Canada

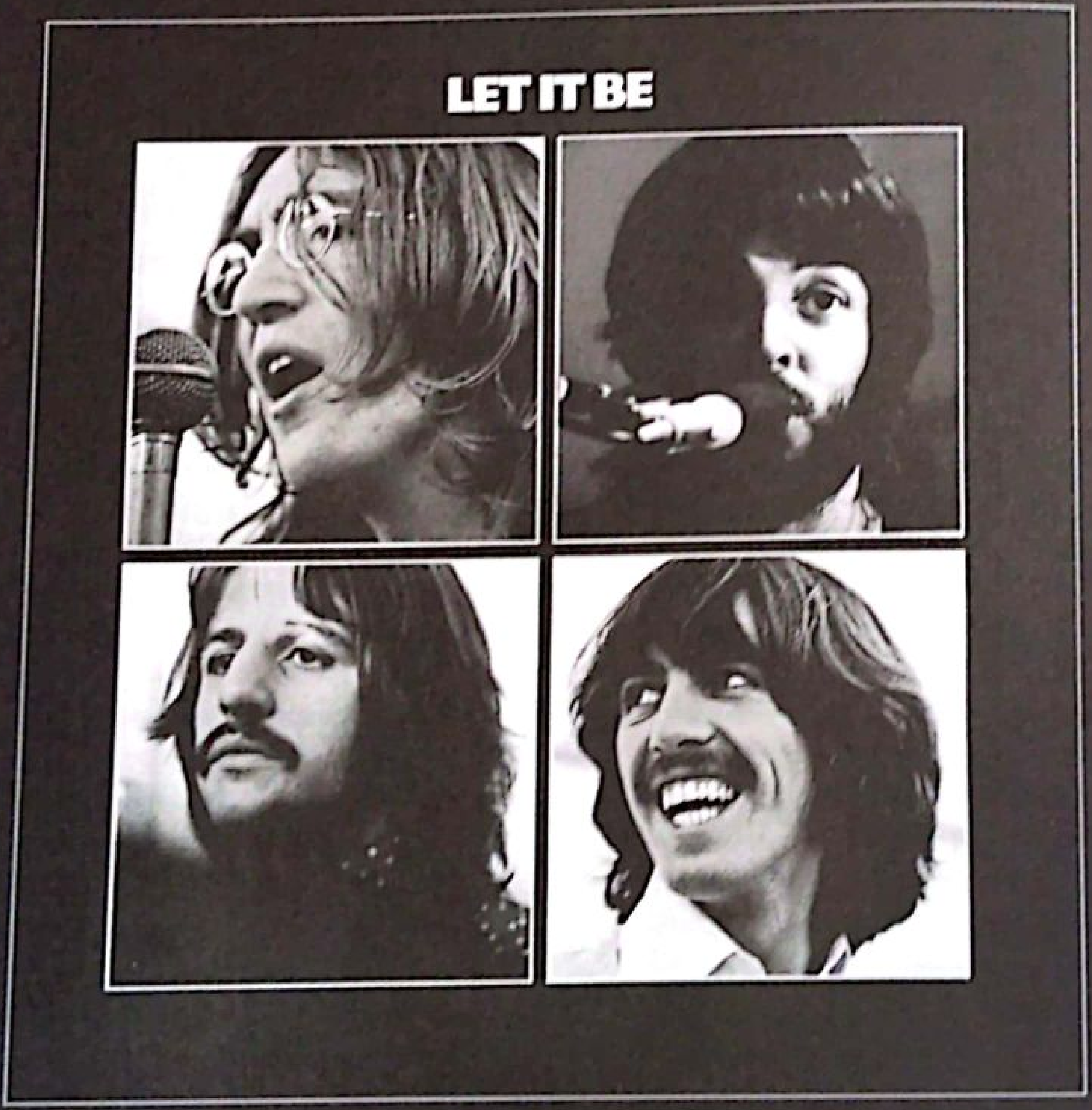
1969年では3回目となった、今度のジョンとヨーコのカナダ滞在中のこの日、ジョンはふたつのテレビ出演をこなした(このときの滞在で最大の出来事になったのは12月23日に、ジョントルドー大統領との長い会見に成功したことである。ジョンとヨーコが一国の元首に平和メッセージを直接訴えかけることが出来たのは、これが最初で最後)。
最初は(アメリカの)CBSテレビ用の録画で、ジョンはトロント大学に「ザ・ミディアム・イズ・ザ・メッセージ」の著者であるカナダのコミュニケーション理論研究家、マーシャル・マクルーハンを訪ね、45分にわたって啓発的な会話を繰り広げた(しかし、この映像の放送の詳細は残されていない)。
次にジョンは、トロントのカナダ放送協会のテレビ・スタジオに行き、CBCネットワークのニュース番組「CBCウイークエンド」に生出演した。ジョンはラビ・エイブラハム・フェイバーグ(モントリオールのベッド・インで'Give Peace A Chance'のレコーディングでコーラスに参加した)とともに、キャスターのロイド・ロバートソンからインタビューを受けた。番組は、現地時間の午後10時15分から11時15分に放送された。

12月21日(日)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

バーンズにあるオリンピック・サウンド・スタジオで、午後2時から4時まで、グリン・ジョンズが"GET BACK"のミキシングと編集を続けた。

Introduction 1970



ひとつの時代の終幕

年が明けて、ビートルズの4人は終焉のときが訪れたことを、つまり、もうこれ以降グループのプロジェクトはありえないことを悟った。グループ内では、すでにこれ以上ないほどの深い対立によって、片方にポール、もう片方にはジョン、ジョージ、リンゴと、ふたつに分裂してしまっていた。ポールは4月に、この対立は「個人的な意見の相違、ビジネス上の意見の相違、そして音楽的な相違」によるものだと要約した。ポールと3人はめったに接触することもなくなり、2月ごろになって、ポールがジョンに電話でビートルズをやめようと思うと告げると、かつてのパートナーは「けっこう!　これで決心がついたのはふたりということになったな」と答えただけだった。

ポールが最終的に心を決めたのは、ほかの3人が支持していたアラン・クラインが、ユナイテッド・アーティスツと話し合って決めた映画“LET IT BE”の公開日とかちあうということで、ポールの初のソロ・アルバムのリリースを阻止したときだった。“GET BACK”の映像をまとめたこの映画は、アルバムの“GET BACK”と同様、製作から1年も経過して古いものになってしまい、誰からもうとまれ、嫌がられ、ユナイテッド・アーティスツとの契約を埋めるものでしかなかったのに、クラインはその作品を優先させたのである。

どんないさかいにも必ず双方の言い分というものがあるが、ポールには、これは自分の活動に対する嫌がらせだとしか考えられなかった。リンゴがポールの自宅に事情を説明に来ても、もうこれでグループは終わりにしてやると脅しながら、リンゴを追い返す始末だった。ビートルズがすでに数か月も活動していなかったとはいえ、グループがここまで崩壊していたとは世間は知る由もなかった。1968年8月にリンゴがやめると決心したことは隠し通され、1969年1月にジョージがしばらくバンドを離れていたという事実はもれてしまったものの、グループ内の対立の根の深さはまだ世間一般ではまったく知られていなかったし、数日後にジョージが戻ってくると、表向きには万事解決したものと思われていた。1969年9月になると、ついにジョンがグループと「離婚」したいと宣言したが、ビジネス上の交渉が困難になるため、ジョンの宣言について他言することは禁じられた。

そして、5月8日、“GET BACK”プロジェクトが始まってから1年4か月もたって、アルバム“LET IT BE”がリリースされた。プロデュースをまかされたフィル・スペクターが、大胆なミキシングをほどこしてようやく完成したのだ。しかし、ある評論家はこれが「安手の墓碑銘であり、ボール紙で作られた墓石であり、過度に装飾されふくらまされたEPという内容である」とし、大多数の人間もこれと同感だった。つぎはぎだらけの寄せ集めで、手の加え方が過剰なら、当事者のこの作品への評価も過剰である、と。ジョージ・マーティンは、フィル・スペクターがビートルズのサウンドにほどこした音を聴いてひどく腹を立てたと言われているし、“GET BACK”の舞台裏で活躍したグリン・ジョンズにいたっては、これまでスペクターへの誹謗中傷を山ほど吐き捨ててきている。

CamScannerでスキャン

ポール・マッカートニーでさえ、ビートルズとの提携関係の解消を法廷で訴えたその供述のなかで、'The Long And Winding Road' など数曲におけるスペクターの手の込んだ処理は「聴くに耐えない手法」であるとした。また、ポールは法廷で、自分がアルバムのリリース前にどれだけ内容を変えようと試みたか、そしてそれがどういう形で拒絶されたかということを資料に基づいて説明した。さらに「当時だけだが」豪華パンフレットという付録をつけてアルバムの小売り価格を33パーセントも高くしたことを含め、アルバムの装丁そのものへの不快感を公に表明した。通常の状態でアルバムを買えるようになったのは、1970年11月になってからのことだった。しかし、フィル・スペクターにしてみれば、ジョンやジョージやアラン・クラインからの依頼を正確にこなしただけの話だった。つまり、映画と抱き合わせにするアルバムを、ニューヨークでワールド・プレミア・ショー（ビートルズは出席していない）が行なわれる5月13日までに仕上げろ、ということだ。スペクターが世界最高のプロデューサーであるかどうかは別として、このとき彼にはアーティストに作品を書き直させたり、レコーディングし直させるという選択は許されなかったのである。しかも、スペクターに押しつけられたのは、ほとんどがビートルズの水準からすれば二流と言える作品ばかりだった。グループのなかでやる気のなさと言い争いと険悪な空気がうず巻いていた時期にレコーディングされ、1966年以降のビートルズの作品に典型的な完璧で秀逸なスタジオ仕上げを意図的に排除するため、わざわざ借りものの機材でライブ録音されたものだからだ。ジョンはのちにこのときのスペクターについて、ジョンらしい荒っぽい表現で、「フィルは、最低にやる気のない気分の、最悪の状態でレコーディングされた最低最悪のクソの山を押しつけられて、それでも形のあるものを作ったんだ」と語った。

ビートルズが実質的に解散し、もう二度と一緒に活動しないのは確実だというニュースが世に知れわたったのは、1970年4月10日のことだ。それは衝撃的な知らせだった。解散という内容の正式な発表は何もなかったが、アルバム"McCARTNEY"の試聴盤と一緒にメディアに配られたポールへのQ&A形式の簡潔なインタビューを読んだかぎりでは、そういう結論しか考えられなかった。そのなかでポールは、ビートルズには何の将来性もないこと、ジョン、ジョージ、リンゴに未練はないこと、さらに今後はグループから離れたいということを、率直に述べていた。

ビートルズ解散のニュースは、ほかのどんなニュースをも押しやって、世界中の朝刊または夕刊のトップを飾り、テレビやラジオでもニュース速報として報じられた。

ジョンはこのニュースを聞いて喜ぶと同時に憤慨した。ビートルズがようやく終わりを迎えそうだということには満足したが、ポールがあたかも自分ひとりの考えのようにこれを発表したのが気に入らなかった。ビートルズの終焉を迎えるにあたって、このときのジョンが何か悔いがあったとすれば、それは前年9月に自分から解散を発表しなかったことだけだった。

契約上のしがらみと恐ろしいまでの経営上の混乱のため、ビートルズの遺体は数年もそのまま埋葬できない状態が続いたが、弔辞が読みあげられたのはこの日、4月10日だった。この日、さまざまな意味において、ある時代が幕を閉じた。そして、その時代が繰り返されることは二度とないのである。

CamScannerでスキャン

3人のビートルで'I Me Mine'

1月3日(土)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズが最後に4人でEMIスタジオに集合したのは1969年8月20日だが、これがビートルズ最後のセッションにはならなかった。というのも、この日と1月4日に、ポール、ジョージとリンゴがアルバム"GET BACK"を完成させるために再びEMIに集まったからだ。ジョンは4週間の休暇でデンマークに行っていた。

(映画"LET IT BE"で観られるように)トゥイッケナム・スタジオで行なわれたリハーサルで、ジョージはその前の夜に作ったばかりの新曲'I Me Mine'をリンゴに聴かせている。そして、このシーンが映画に収録されることになったため、そのサウンドトラック・アルバム"LET IT BE"用にもこの曲を正式にレコーディングすることが必要になったのだ。そこで、この日の午後2時30分から午前0時30分までのセッションで、3人は(アコースティック・ギター、ベース、ドラムという編成で)リズム・トラックを16テイク録音し、それからエレクトリック・ピアノ、エレクトリック・ギター、リード・ボーカル、バック・ボーカル、オルガン、セカンド・アコースティック・ギターを、テイク16にオーバーダビングした。

この曲が完成したときの長さはわずか1分34秒しかなかった。しかし、フィル・スペクターが"LET IT BE"に収録するためにこの曲用にオーバーダビングされた材料を再点検し、再プロデュースし、再編集した段階では2分25秒の曲となる。

ビートルズの名で最後のレコーディング

1月4日(日)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

"GET BACK"のレコーディングでオーバーダビングされたのは、1969年4月30日に間奏部にギター・ソロが加えられた'Let It Be'だけだった。そして、この日午後2時30分から午前4時までのセッションで、この曲にさらにオーバーダビングが加えられた。

最初に、1969年1月31日に収録した8トラックに、ジョージ、ポール、リンダ・マッカートニーによるハーモニー・ボーカルをかぶせた。次にこれを3回リダクション・ミックスして、ジョージ・マーティンのアレンジによるトランペット2本、トロンボーン2本、テナー・サックス1本を同時にオーバーダビングした。そのベスト・テイクに、さらにジョージが新しく録音した切れの鋭いギター・ソロ、リンゴのドラム、ポールのマラカスを加え、曲のエンディングにチェロを少し重ねた。セッションの最後にステレオ・ミックスを作り、この日と前夜に仕上げたテープをすべてグリン・ジョンズが持ち帰った。

注:3月6日にイギリスでリリースされるシングル'Let It Be'は、この日の新しいギター・ソロがカットされている。一方、アルバム・バージョンでは1969年4月30日にレコーディングしたオリジナルのギター・ソロがカットされている。そのためこの2バージョンは、テイクそのものが違うような印象を受けるが、じつは同じテイクである。

アルバム"GET BACK"、2度目の編集が終了

1月5日(月)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

オリンピック・スタジオで、午後7時から11時半までのセッションで、グリン・ジョンズは新たな44分のアルバム"GET BACK"のマスター・テープを完成させた。今回は'Teddy Boy'を収録曲からカットした。理由は、映画に使われなくなったのと、ポールが初のソロ・アルバムのために'Teddy Boy'をレコーディングし直しているとジョンズに告げていたからかもしれない(1970年2月21日参照)。その代わり、新しくレコーディングされた'I Me Mine'と、'Across The Universe'を映画に収録されることになったという理由で追加した(この2曲はこの日のセッションで、ステレオ・ミキシングされた)。

レコーディング開始から1年たってようやく完成した"GET BACK"の収録曲と録音日は次のとおりである(年の記載がないものは1969年)。A面:'One After 909'(1月30日)、'Rocker'(1月22日)、'Save The Last Dance For Me'(1月22日)、'Don't Let Me Down'(1月22日)、'Dig A Pony'(1月24日)、'I've Got A Feeling'(1月24日)、'Get Back'(1月28日、シングル・バージョン)、'Let It Be'(1月31日と4月30日のオーバーダビングを加えたもの。ジョンズは1970年1月4日の仕上げは採用しなか

った)、B面:'For You Blue'(1月25日)、'Two Of Us'(1月24日)、'Maggie Mae'(1月24日)、'Dig It'(1月26日)、'The Long And Winding Road'(1月31日)、'I Me Mine'(1970年1月3日)、'Across The Universe'(1968年2月4日~8日)、'Get Back (reprise)'(1月28日)。
しかし、この"GET BACK"も前回と同じく、未発表に終わる。ビートルズの間では、これでいきたいのかどうか、また意見がまとまらなかった。さらに、グリン・ジョンズが、印税の支払いを期待できないのにプロデューサーとしてのクレジットにどうしてこうもこだわるのか、ジョンには理解できなかった。3月になると、これ以上何かほどこしようがあるかどうか確かめるため、フィル・スペクターを招くことになる。

1月8日(木)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

午後9時から11時までのセッションで、グリン・ジョンズは'Let It Be'(シングル・バージョン)と'For You Blue'をステレオでリミックスし、"GET BACK"をより完璧な内容にした。
のちに公開されたスタジオ資料によると、この日'For You Blue'をミキシングする前に、ボーカルのオーバーダビングが加えられていたことが判明し、ジョージがセッションに参加していたことがわかった。

1月14日(水)

オリンピック・サウンド・スタジオ
London

午後2時30分から5時30分まで、リンゴは"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッションをした。'Love Is A Many Splendoured Thing'(1955年のフォー・エイセズのヒット曲で、クインシー・ジョーンズの新アレンジ)と'Sentimental Journey'(1945年のドリス・デイのヒット曲で、1973年から74年にかけてよくリンゴと一緒に仕事をすることになるプロデューサーのリチャード・ペリーの新アレンジ)に、ボーカルをオーバーダビングした。この2曲については、ボーカルをオーバーダビングするためのオーケストラ演奏のテープがアメリカでレコーディングされ(日付は不明)、イギリスにテープが送られてきていた。午後5時30分から6時までにラフなステレオ・ミックスを作って、セッションを終えた。

1日で作曲とレコーディングとミックスをした'Instant Karma!'

1月27日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ/第3スタジオ
London
NBCテレビジョン・スタジオ
Alameda St, Burbank, Los Angeles, California, USA

午前10時から11時30分までに、ジェフ・エメリックがビートルズの'The Inner Light'のステレオ・ミックスを初めて作った。アップルから要請されたためだが、用途は不明(これは1981年までリリースされない)。
その数時間後、午後7時に始まって午前4時に終わった第3スタジオでのセッションでは、プラスティック・オノ・バンドがニュー・シングルのレコーディングをして、ミックスまで完成させた。曲はこの日の朝作曲したというジョンの'Instant Karma!'である。ジョージ・ハリスンの勧めで、このセッションはフィル・スペクターがプロデュースした。以降、ジョンとジョージはスペクターと長年仕事を続けることになる(また、このときの縁がもとで"GET BACK"のテープの処理を依頼する。3月23日参照)。
'Instant Karma!'の編成は、アコースティック・ギター(ジョン)、ドラム(アラン・ホワイト)、ベース(クラウス・フォアマン)、エレクトリック・ピアノ(ビリー・プレストン)、リード・ギター(ジョージ)。午後7時から0時まで、ベーシック・トラックを10テイク録音した。次に、午前3時までさまざまなオーバーダビングをして、メンバー全員とヨーコ、マル・エバンズ、ロンドンのナイト・クラブ、ハチェッツの常連客による大人数のコーラスと手拍子を3トラック分レコーディングした。
午前3時から4時まで、4種類のステレオ・ミックスを作って、セッションを終えた。そのなかのベスト・ミックスをA面に収録したこのシングルは、2月6日にイギリスでリリースされる(B面はヨーコの'Who Has Seen The Wind?'だが、プライベートに録音された曲でレコーディング日時は不明)。
アメリカ盤シングル用に、フィル・スペクターは数日後にロサンゼルスで新たなステレオ・ミックスを作る。ジョンにはまったく知らされていなかったが、これがスペクターの典型的

な仕事のやり方だった。
この日、1月29日の映画“THE MAGIC CHRISTIAN”のロサンゼルスでのプレミア・ショーに出席するため、ロスに渡っていたリンゴは、NBCの人気コメディ番組『ローワン・アンド・マーティンズ・ラフ・イン』に出演しないかと誘われ、収録に招待された。撮影はダウンタウンの美しいバーバンクにあるスタジオで観客を入れて行なわれ、リンゴはルス・バジーとアート・ジョンソンとともに番組ではおなじみのベンチのセットに腰かけるなど、ほかのゲストに混じって何度も短く特別出演する。
この番組は、アメリカでは2月23日の午後8時から9時まで(EST)に放送。イギリスでは4月12日午後7時25分から8時15分まで、60分のうちコマーシャルの時間を除き、50分番組としてBBC2で放送される。
リンゴは“SENTIMENTAL JOURNEY”のセッションを再開するため、2月2日に帰国する。その前に、ABCテレビの土曜の昼の音楽番組『ゲット・イット・トゥギャザー』のインタビューを受けた。この内容は3月7日の午後12時から12時30分(EST)に放送された。

2月3日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

リンゴの“SENTIMENTAL JOURNEY”の収録曲'Love Is A Many Splendoured Thing'の録り直し。午後2時30分から4時30分まで、この曲のアレンジャーのクインシー・ジョーンズが16人編成のバンドを率いて8テイクをレコーディングした。さらに午後4時30分から6時30分まで、ビリー・プレストンがオルガンをオーバーダビングし、それにリンゴがボーカルを加えた。午後6時30分から7時まではステレオ・ミキシングをした。

2月5日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から6時30分まで、'Love Is A Many Splendoured Thing'のテイク8にリンゴのボーカルを新たにオーバーダビングした(2月6日午後7時から10時まで第2スタジオで行なわれる予定だったセッションはキャンセルされた。クインシー・ジョーンズがこの曲に25人編成のオーケストラを加える予定だった。2月17日と19日を参照)。

2月6日(金)

アップル・コープス
London

BBCラジオ1の番組「シーン・アンド・ハード」用に、ジョンとヨーコがデビッド・ベランからインタビューを受けた。アップルで収録されたこのインタビューから5分40秒の抜粋が、2月15日午後3時から4時までの番組で放送される。
また、5月28日午後2時15分から2時30分(イギリス時間)にかけて、BBCワールド・サービスで放送された番組「プロファイル」でもこのインタビューの抜粋が紹介される。
この日、プラスティック・オノ・バンドのニュー・シングル'Instant Karma!'がイギリスでリリースされる。また、「ニューヨーク・タイムズ」紙が、ホワイト・アルバムの数曲にとりつかれたチャールズ・マンソンによる殺人事件を報じる。

ジョンとヨーコ、短い髪でテレビ出演

2月7日(土)

ウェンブリー・スタジオ、第1スタジオ
Wembley

この日の夕方、ジョンとヨーコはロンドン・ウイークエンド・テレビ(LWT)のトーク番組「ザ・サイモン・ディー・ショー」の録画をした。ふたりはイギリスの視聴者に、髪を短くカットした姿を初めて披露する。また、イギリスの黒人運動の指導者であるマイケル・Xを番組に連れてきた。ふたりは前の週の水曜にロンドン北部のホロウェイにあるマイケル・Xの「ブラック・センター」で行なわれたイベントに参加したばかりだった。
「ザ・サイモン・ディー・ショー」は(元BBCの)サイモン・ディーの新番組で、この日の収録は4回目の放送分。番組は翌日2月8日の午後11時25分から12時15分にかけて放送される。

2月9日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から7時まで、リンゴの“SENTIMENTAL JOURNEY”のセッション。午後2時30分から3時までは、'Whispering Grass'(1940年のインク・スポッツのヒッ

ト曲)のモノ・デモ・テープを作った。ジョージ・マーティンは、テイク3と5を編集したベスト・テイクを持ち帰り、のちにアレンジを依頼していたロン・グッドウィンに渡す。

午後3時から6時までは、エルマー・バーンスタインの新アレンジによる'Have I Told You Lately That I Love You'(1945年のビング・クロスビーのヒット曲)の8トラックのリダクション・ミックスをしながら、同時にリンゴのリード・ボーカルをオーバーダビングした。この曲も、アメリカでボーカル・オーバーダビング用のオーケストラ・テープがレコーディングされ(日時不明)、イギリスに送られてきたものだった。

午後6時から7時まで、完成したレコーディングのステレオ・ミックスを作った。

2月10日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日は同じスタジオで、ふたつの別のセッションが行なわれた。午後2時30分から3時45分までは、ジェフ・エメリックが'Instant Karma!'の新しいモノ・ミックスを3種類作った。ジョンが2回録ったリード・ボーカル・トラックのうちひとつを消し、ジョンが新たなボーカルをかぶせられるようにする。翌日プラスティック・オノ・バンドは『トップ・オブ・ザ・ポップス』の録画をすることになっており(2月11日参照)、その演奏で使うためだ(ジョンのボーカル以外は当て振りとなる)。

夕方には、"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッションが行なわれた。午後7時から9時20分まで、ジョージ・マーティンが15人のオーケストラを指揮し、'Dream'にオーバーダビングを加えた。午後9時20分から10時30分まで、この曲のステレオ・ミックスを作った。

ジョン、ソロで初めてテレビで演奏

2月11日(水)

テレビジョン・センター、第8スタジオ
London
EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズがテレビ・スタジオにまで出かけて『トップ・オブ・ザ・ポップス』に出演したのは、1966年6月16日、'Paperback Writer'と'Rain'を演奏したときの1回だけだった。それから4年後、ジョンは'Instant Karma!'を演奏するために初めてソロとして出演した。収録に参加した今回のプラスティック・オノ・バンドのメンバーは、ジョン(エレクトリック・ピアノ)、クラウス・フォアマン(ベース)、無名のセッション・メンバー(ベースとタンバリン)、アラン・ホワイト(ドラム)と、ヨーコ(目隠しをして編み物をしたり、トランプを手に持ったりする)、マル・エバンズ(ときどきタンバリンを入れる)だった。

(おなじみの寄せ集めの)観客の前で行なわれた演奏と、この放送分そのものもこの夜に録画され、翌日2月12日の午後7時15分から8時にかけてBBC1で放送された。ジョンとバンドは、午後3時30分からロンドン西部にあるテレビジョン・センターでカメラ・リハーサルをして、午後7時30分から10時まで本番を収録した。

プラスティック・オノ・バンドはこの日、じつは2種類のバージョンを収録していて、2回目のほうは翌週の2月19日午後7時15分から8時までの『トップ・オブ・ザ・ポップス』で放送。両バージョンとも、1月27日にEMIスタジオでレコーディングした演奏と2月10日にボーカル・トラックを1トラックだけにしたテープの上に重ねて、ジョンが実際に歌った。

注:2月5日午後7時15分から8時にかけて放送された『トップ・オブ・ザ・ポップス』では、アップルがBBCに提供したジョンとヨーコの16ミリ無声フィルムに合わせて'Instant Karma!'が流れていた。3月5日には、2月12日に放送されたスタジオ・バージョンが再放送される。

一方、この日、EMIスタジオではリンゴの"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッションが行なわれ、'I'm A Fool To Care'(1954年のレス・ポール・ウィズ・メアリー・フォードのヒット曲で、クラウス・フォアマンによる新アレンジ)をレコーディングした。

午後2時30分から5時30分までクラウス自身が(ビリー・プレストンを含む)15人編成のオーケストラを指揮し、午後5時30分から6時30分までにテイク19と20と21を編集して、ベストのテイク19を作った。このあとジョンのテレビ収録に参加する予定だったクラウスは、大急ぎでBBCのスタジオに駆けつけた。午後6時30分から9時までは、リンゴがボーカルをオーバーダビングし、午後9時から10時までステレオ・ミキシングを行なった。さらに、午後10時から11時15分までギターをオーバーダビングし、11時15分から11時45分までステレオ・ミックスを作ってセッションを終えた。

CamScannerでスキャン

2月12日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

"SENTIMENTAL JOURNEY" のセッションで、'Let The Rest Of The World Go By' (1919年の曲で、ディック・ヘイムスが1944年の映画 "WHEN IRISH EYES ARE SMILING" のなかで歌った。レス・リードの新アレンジ)をレコーディングした。午後7時から9時までのセッションではリード自身が31人編成のオーケストラと9人のシンガーを指揮し、Bフラットのキーで6テイクと、Cのキーで5テイクをレコーディングした。午後9時から午前1時まで、リンゴがテイク6にボーカルをオーバーダビングし、午前1時から1時30分にかけてステレオ・ミックスを作った。

2月17日(火)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午前10時から午後1時までリンゴの "SENTIMENTAL JOURNEY" のセッションで、フランシス・ショーが15人のストリングス・オーケストラを指揮し、'I'm A Fool To Care' と'Love Is A Many Splendoured Thing' にオーバーダビングした。この日のセッションは実際には午前9時30分に始まっていて、30分間で 'I'm A Fool To Care' のリダクション・ミックスが用意されていた。

リンゴ、ジョージの協力を得て 'It Don't Come Easy' をレコーディング

2月18日(水)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

午後2時30分から5時30分までのセッションでは、リンゴは 'Have I Told You Lately That I Love You' と 'Let The Rest Of The World Go By' にボーカルを入れ直し、5時30分から6時まで後者の曲のステレオ・ミックスを作った。

その "SENTIMENTAL JOURNEY" のセッションが終わると、リンゴはそのまま第2スタジオに残って、楽しい夜のセッションに興じ、のちに 'It Don't Come Easy' となる曲を初めてレコーディングした。この時点ではまだ 'You Gotta Pay Your Dues' という仮タイトルのままだった。プロデュースはジョージ・マーティンが担当したが、スタジオではジョージ・ハリスンがミュージシャンを指揮した。午後7時から午前12時30分までに、ジョージ(アコースティック・ギター)、クラウス・フォアマン(ベース)、リンゴ(ドラム)、スティーブン・スティルス(ピアノ)という編成で、ベーシック・トラックを20テイク録音した。午前12時30分から4時までは、ジョージが間奏部のソロを含む2種類のエレクトリック・ギターをオーバーダビングし、リンゴがそこにリード・ボーカルを加えた。午前4時から4時30分までに、ステレオ・ミックスを作った。注:この日の夜と翌日の夜のセッションについて、音楽誌ではアップル・スタジオで行なわれたと報じられていたが、それは誤りである。

2月19日(木)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

EMIスタジオでリンゴのセッションが2回行なわれた。最初は午後2時30分から5時まで、"SENTIMENTAL JOURNEY" のセッションで、'Love Is A Many Splendoured Thing' に、シンガー8名、フルート1名、オルガン1名、ビブラフォン1名の演奏をオーバーダビングした。2回目は午後5時から午前1時30分までのセッションで、'You Gotta Pay Your Dues' ('It Don't Come Easy')のレコーディングを続けたが、この日はジョージ・ハリスンは参加していない。午後5時から6時までは、前の夜のテイク20にリンゴが新たなリード・ボーカルをオーバーダビング。1時間の休憩の間に、この曲を録り直すことが決まり、午後7時から11時までテイク21から30までをレコーディングした。さらに午後11時から午前1時30分まで、テイク30に2種類のベースをオーバーダビングした。作業はここで終わって、この日のレコーディングはミキシングされず、未完成のまま残された。3月8日、リンゴは2度目の録り直しを開始する。

2月20日(金)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

リンゴの 'Love Is A Many Splendoured Thing' 'Dream' 'Sentimental Journey' 'I'm A Fool

CamScannerでスキャン

To Care' 'Let The Rest Of The World Go By' 'Have I Told You Lately That I Love You'のステレオ・ミックスを作った。午前11時から午後1時までのセッションの最後と午後2時30分から6時45分までのセッションでは、これらの曲とミックス済みの3曲('Night And Day' 'Stardust' 'Blue Turning Grey Over You')を初めてアルバム"SENTIMENTAL JOURNEY"のマスター・テープとして編集した。このテープからサンプルのラッカー・ディスクがカットされた。

ポールのソロ・アルバム

2月21日(土)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

ビートルズのほかの3人やアップルのスタッフを含めて、この時点ではほとんどの人が知らなかったことだったが、じつはポール・マッカートニーも初のソロ・アルバムのレコーディングを続けていた。セント・ジョンズ・ウッドの自宅で始め、やがてビリー・マーティンという偽名でウィルズデンにあるモーガン・スタジオに場所を移していた。

レコーディングを始めたのは、1969年のクリスマス前に自宅にスチューダー製の4トラック・テープ・レコーダーが届いたときからだ。コンソールやミキサー、レベル・メーターなどの装置はなく、マイク1本だけで作業を続けたが、最初の曲はスチューダーを試すためにレコーディングした'The Lovely Linda'だった。それに続いて、'That Would Be Something'、アドリブ・インストゥルメンタルの'Valentine Day'と'Momma Miss America (Rock & Roll Springtime)'、ワイン・グラスを鳴らして4トラックで録音した'Glasses' 'Oo You' 'Teddy Boy'(1969年1月24日参照)、'Junk'(1968年5月30日参照)、'Junk'のインストゥルメンタル・バージョン'Singalong Junk'をレコーディングした。しかし、録音した日時や、その他の詳細を記録した資料などは存在しない。

また、ビリー・マーティンがモーガン・スタジオで行なった秘密のセッションは1970年2月初旬、おそらく10日に始まったと思われるが、その資料も残っていない。とにかく、モーガンで行なわれた作業は次のとおり。まず'Hot As Sun'と'Kreen-Akrore'(この曲は2月12日から取りかかった)という2曲のインストゥルメンタルを8トラックでレコーディングして完成させ、'Junk' 'Singalong Junk' 'Oo You' 'Teddy Boy'をそれぞれ4トラックから8トラックにコピーしてオーバーダビングし、'Oo You' 'Teddy Boy' 'Junk' 'Kreen-Akrore'のステレオ・ミックスを完成させた。また、'The Lovely Linda' 'Glasses' 'Singalong Junk' 'Momma Miss America (Rock & Roll Springtime)'(この曲のかっこ内のサブタイトルはリリース時にはカット)の最初のステレオ・ミックスも作った。しかし最終的には使われない。モーガン・スタジオでは、ロビン・ブラックがバランス・エンジニアを務めている(ここに紹介したセッションの詳細は、ポールがこのニュー・アルバムのプロモーションのために発行した詳細なプレス・リリースの内容をまとめたもの)。

そして、この日、ポールはソロ・アルバム制作の場をアビイ・ロードに移した。ここでもビリー・マーティンという偽名を使っていて、スタジオ時間もアップルやAIRを通さずに、この名前で直接予約していた。EMIでの最初のセッションは、正午から午後2時45分までと、午後3時45分から8時までで、'The Lovely Linda' 'Momma Miss America' 'Glasses'(新曲で未完成の'Suicide'のごく一部が続いている)、'Singalong Junk'の新しいステレオ・ミックスを作った。

アルバム"McCARTNEY"のプロモーション・フィルム

2月22日(日)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

この日の正午から午後10時までのセッションは名目上はミキシング・セッションで、以前に録音した'That Would Be Something'と'Valentine Day'のテープをEMIに持ち込み、初めてステレオ・ミックスした。ポールは新曲もレコーディングすることに決め、アルバムのなかでもっとも高く評価される2曲'Every Night'と'Maybe I'm Amazed'を完成させた。2曲ともステレオ・ミックスまで作ったが、'Every Night'は2月24日にミックスし直される。

ポールはこのアルバム"McCARTNEY"からは1枚もシングル・カットしていない。しかし、群を抜いている作品は間違いなく'Maybe I'm Amazed'だったため、ポールはこの曲を使った4分のアルバム・プロモーション・クリップの

制作をチャーリー・ジェンキンズに依頼している。ジェンキンズが35ミリ・カラー・フィルムで制作したこのクリップは、日常的なフォト・スチール写真を編集したものだが、そのほとんどはリンダが、そして一部はポールが撮影したものだ。
このクリップは4月19日の午後6時から6時5分まで、ロンドン・ウイークエンド・テレビによりロンドン地区のみで、このクリップのための番組枠のなかで放送され、アメリカでは同日午後8時から9時(EST)までのCBSの「エド・サリバン・ショー」で紹介される。

2月24日(火)
EMIスタジオ、第1／第2スタジオ
London

EMIでふたつのセッションが同時に行なわれた。第2スタジオには(まだビリー・マーティンと名乗っていた)ポールが、第1スタジオにはリンゴがいた。
午前10時から午後1時まで、ポールはモーガン・スタジオでレコーディングした'Hot As Sun'のステレオ・ミックスを作り、22日に作った'Maybe I'm Amazed'のベスト・ミックスをコピーした。さらに、午後3時30分から6時15分までは、'Every Night'をミキシングし直した。
一方、リンゴは午後3時30分から7時15分までのセッションで、'Blue Turning Grey Over You'のリダクション・ミックスをしながら同時に新たなリード・ボーカルをオーバーダビングした。続いて、6種類のステレオ・ミックスがそれぞれ違うテイクから作られ、そのうち4つを編集してマスター・ミックスが作られた。

2月25日(水)
EMIスタジオ、第2スタジオ
London
ド・レイン・リー・サウンド・センター
Dean St, London

EMIではポールが午前10時45分からセッションを始め、ソロ・アルバムのためにレコーディングした各タイトルのプレイバックを、45分間にわたって聴いた。午後11時30分から午前2時15分までは新曲'Man We Was Lonely'のベーシック・トラックを12テイク録音して完成させた。1時間休憩したのち、午後3時15分から9時まで各種の楽器をこのテープにオーバーダビングし、リンダと一緒にボーカルをかぶせた。効率のいいセッションの日の典型で、午後9時から11時までに1回ステレオ・ミキシングしただけでアルバム用のマスター・リールに収録された。
一方、ド・レイン・リーの新しいソーホー・スタジオでは、リンゴの"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッションが行なわれた。ジョン・ダンクワースの指揮による20人のオーケストラが'You Always Hurt The One You Love'(1944年のミルズ・ブラザースのヒット曲で、ダンクワースによる新アレンジ)をレコーディングするのを見学した。午後2時から5時30分までのセッションでリンゴがこのテープにボーカルを加え、5時30分から7時30分にかけてステレオ・ミックスが作られた。

2月28日(土)
EMIスタジオ、第4室
London

アップルのマルコム・デイビーズのプロデュースで、ジョージの'For You Blue'の新たなステレオ・ミックスが作られたが、理由は不明である。このミックスはアルバム"GET BACK"に追加されるわけでもなく、"LET IT BE"にも採用されない(セッションの開始時刻と終了時刻は記録されていない)。

3月5日(木)
モーガン・スタジオ
London

ポールがソロ・アルバムのためにレコーディングとミキシングをしたロンドン北部にあるモーガン・スタジオで、リンゴのアルバム"SENTIMENTAL JOURNEY"のセッションが2日間行なわれ、レコーディングが完了。この日のセッションでは36人編成のオーケストラを使って2曲レコーディングされ、それぞれのアレンジャーがオーケストラの指揮をした。最初は'Whispering Grass'(アレンジャーはロン・グッドウイン、2月9日参照)で、次が'Bye Bye Blackbird'(1926年にエディ・カンターが歌った曲で、ビー・ジーズのモーリス・ギブの新アレンジ)だった。午前10時から午後1時までという能率のいいセッションで、リンゴはこの2曲にボーカルをオーバーダビングして完成させた。

CamScannerでスキャン

リンゴのアルバム“SENTIMENTAL JOURNEY”完成

3月6日(金)
モーガン・スタジオ
London
EMIスタジオ、第4室
London

モーガン・スタジオでの午前10時から正午までのセッションで、'You Always Hurt The One You Love'にサックス(アレンジャーのジョン・ダンクワースが演奏)、ピアノとドラムをオーバーダビングした。夕方から(午後5時30分開始、終了時刻は不明)はEMIでミキシング・セッションが行なわれ、'Bye Bye Blackbird' 'Love Is A Many Splendoured Thing' 'Whispering Grass' 'You Always Hurt The One You Love'のステレオ・マスターを制作した。

これで、リンゴの初のソロ・アルバムは完成した。プレス工場の作業とジャケット写真の印刷(3月15日も参照)を急がせ、イギリスでは3月27日にリリースされることになる。

3月8日(日)
トライデント・スタジオ(?)
London

リンゴは2月18日と19日のレコーディングに続いて、このときには新しいタイトルになっていた'It Don't Come Easy'の2回目の録り直しを行ない、またジョージ・ハリスンがプロデュースを手がけ、ギターを弾いた。このセッションが本当にトライデント・スタジオで行なわれたかどうかを証明する資料は残っていないが、EMIでなかったことは確かだ。

アップルは音楽誌に、「このレコードをシングルとしてリリースする予定は今のところまったくない」と発表したが、そのとおりだった。3月11日と1970年10月にオーバーダビングをするが、リリースされるのは1971年4月9日のことだ。

ビートルズの特別番組にジョージが出演

3月11日(水)
エオリアン・ホール、スタジオH25
London
トライデント・スタジオ(?)
London

BBCラジオが公休日のビートルズ・スペシャルを最後に放送したのはもうずいぶん昔、ラジオ1がまだライト・プログラムと呼ばれていたころの話だった。ところが、1970年3月30日のイースター休日、ジョージ・ハリスンが出演を承諾したので、ラジオ1は「ザ・ビートルズ・トゥデイ」という特別番組(午後4時31分から5時15分)を放送できることになった。活動の後期ではかなりめずらしいことだったが、収録はBBCのスタジオ、つまり、ロンドンのニュー・ボンド・ストリートにあるエオリアン・ホールで行なわれた。この日ジョージは午後5時から6時まで、ジョニー・モランからインタビューを受けた。「ザ・ビートルズ・トゥデイ」ではさまざまなことについて幅広く発言していて、ビートルズの近況だけでなく、アップル・レコードのほかのアーティストについて、とくにジョージが目をかけていたジャッキー・ロマックス、ビリー・プレストン、ドリス・トロイ、ラダ・クリシュナ・テンプルなどのことも話題になった。また、番組では、アップルからBBCに提供されたビートルズの'Dig It'の3分13秒におよぶロング・バージョンが放送される。アルバム“LET IT BE”に収録されたのはかなり短いバージョンだ。

このときのジョージのインタビューから、1分20秒と30秒の短い抜粋が、3月15日に午後3時から4時にかけて放送され、モランがレギュラー・ホストを務めていたラジオ1の番組「シーン・アンド・ハード」でも紹介される。

またこの日の夜、リンゴの'It Don't Come Easy'のレコーディングがトライデント・スタジオで続けられたと思われる。プロデューサーはやはりジョージ・ハリスン。

3月13日(金)
EMIスタジオ、第3スタジオ
London

正午から午後1時30分まで、クリス・トーマスがEMIの第3スタジオで'Sentimental Journey'のモノ・ミックスをプ

ロデュースした。これはアルバム収録用ではなく、この曲のプロモーション・クリップの撮影に使用するためのものだった(3月15日参照)。

リンゴのアルバム・プロモ・クリップとジャケット写真

3月15日(日)

トーク・オブ・ザ・タウン
Cranbourn Street, London

EMIはアルバム“SENTIMENTAL JOURNEY”からシングル・カットすることを予定していなかったが、この日リンゴは、アルバム全体のプロモーション・クリップとして配給することになるタイトル曲‘Sentimental Journey’のクリップを撮影するために、ロンドンの人気キャバレー、トーク・オブ・ザ・タウンを訪れた。撮影は午前10時から始まり、ニール・アスピノールが監督を、ジョン・ギルバートがプロデューサーを務めた。

きれいなブルーのスーツに変なピンクの蝶ネクタイをつけたリンゴは、(キャンドルをともしたテーブルに座っている)客の前で、ゆっくり歩いたり、踊ったり、歌ったりする。トーク・オブ・ザ・タウン・オーケストラを特別に指揮するジョージ・マーティン、白いスーツに身を包んだ数人のダンサーとクリップの途中でステージから降りてきて、またステージに戻る3人のバック・ボーカリスト(ドリス・トロイ、メイドリン・ベル、マーシャ・ハート)などの光景が撮影された。

‘Sentimental Journey’のクリップは、BBCでは『トップ・オブ・ザ・ポップス』でもほかの番組でも放送されないが、3月29日にリンゴがゲスト出演したLWTの『フロスト・オン・サンデイ』で紹介された(3月29日参照)。アメリカでは、5月17日午後8時から9時(EST)にCBSの『エド・サリバン・ショー』で放送される。

この日のプロモーション・クリップの撮影には、もうひとつおまけがあった。リンゴがのちに打ち明けた話では、アルバム“SENTIMENTAL JOURNEY”のジャケット写真は、リンゴが生まれ育ったリバプールのアドミラル・グローブの通りの端にあるエンプレス・パブを背景にリンゴが立っているというものだが、その背景写真に貼ってある写真は、トーク・オブ・ザ・タウンのなかでこの日撮影されたものだ。

3月16日(月)

EMIスタジオ、第2スタジオ
London

2月25日以来初めて、「ビリー・マーティン」がEMIスタジオでセッションをした。ただ、ポールはこの日の午後6時30分から8時までのセッションで、モーガン・スタジオでレコーディングした‘Oo You’の8トラック・テープとステレオ・ミックスを聴き直しただけで、レコーディングとミキシングはしなかった。

ポールのソロ・アルバム完成 フィル・スペクターが“LET IT BE”に着手

3月23日(月)

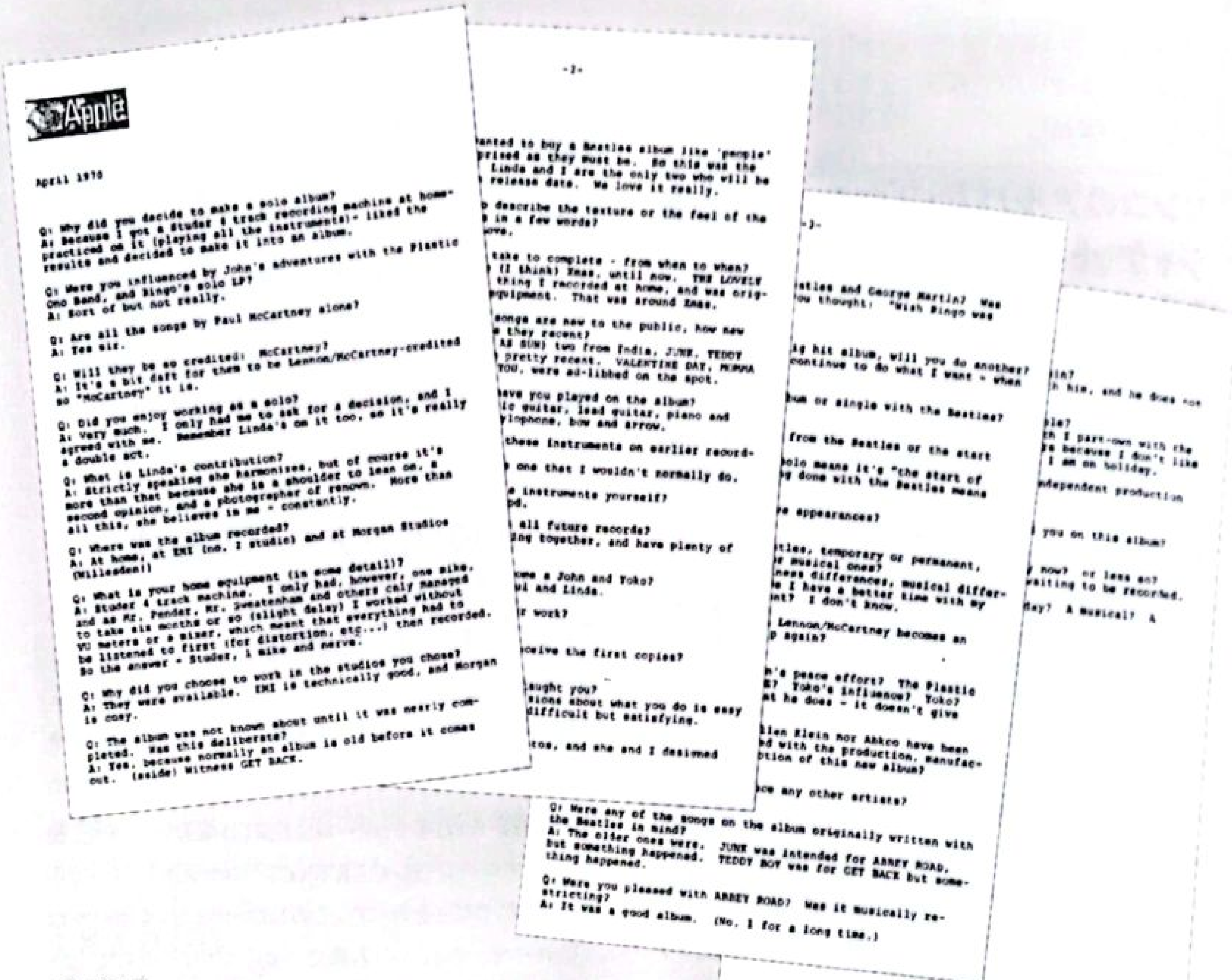
EMIスタジオ、第3スタジオ/第4室
London

午後3時から7時まで、ポールはEMIの第3スタジオで、初のソロ・アルバム“McCARTNEY”のマスター・テープを完成させ、コピーを作った。この日のセッションもポールは「ビリー・マーティン」の名前で予約していた。そして、ようやくその目的を、つまり、制作作業を極秘に進めることをやり遂げたのだ。このアルバムはイギリスでは4月17日にイギリスでリリースされる。

一方、ポールとジョージ・マーティンは知らなかったが、第4室では、すっかりすり切れてしまったような、ある古いテープが再びテープ・マシンにかけられていた。いよいよ、グリン・ジョンズと“GET BACK”に退場を願い、代わりにその奇行癖で有名なプロデューサー、フィル・スペクターと“LET IT BE”の登場とあいなったのである。

ロック界ではもっとも有名なレコード・プロデューサーであると誰しもが認めるであろうフィル・スペクターは、アイク・アンド・ティナ・ターナーの‘River Deep Mountain High’、ライチャス・ブラザーズの‘You've Lost That Lovin' Feelin'’、クリスタルズの‘Da Doo Ron Ron’、ロネッツの‘Be My Baby’や、ほかにも多数のロックの名曲を手がけてきた人物である。そして、こうした曲が名曲とされるのは、そのほとんどがスペクターの「ウォール・オブ・サウンド」と呼ばれる独特の音作りの恩恵にあずかっていたから

CamScannerでスキャン


Apple

April 1970

Q: Why did you decide to make a solo album?
A: Because I got a Studer 4 track recording machine at home- practiced on it (playing all the instruments)- liked the results and decided to make it into an album.

Q: Were you influenced by John's adventures with the Plastic Ono Band, and Ringo's solo LP?
A: Sort of but not really.

Q: Are all the songs by Paul McCartney alone?
A: Yes sir.

Q: Will they be so credited: McCartney?
A: It's a bit daft for them to be Lennon/McCartney-credited so "McCartney" it is.

Q: Did you enjoy working as a solo?
A: Very much. I only had me to ask for a decision, and I agreed with me. Remember Linda's on it too, so it's really a double act.

Q: What is Linda's contribution?
A: Strictly speaking she harmonises, but of course it's more than that because she is a shoulder to lean on, a second opinion, and a photographer of renown. More than all this, she believes in me - constantly.

Q: Where was the album recorded?
A: At home, at EMI (no. 2 studio) and at Morgan Studios (Willesden!)

Q: What is your home equipment (in some detail)?
A: Studer 4 track machine. I only had, however, one mike, and as Mr. Pender, Mr. Sweatenham and others only managed to take six months or so (slight delay) I worked without VU meters or a mixer, which meant that everything had to be listened to first (for distortion, etc...) then recorded. So the answer - Studer, 1 mike and nerve.

Q: Why did you choose to work in the studios you chose?
A: They were available. EMI is technically good, and Morgan is cosy.

Q: The album was not known about until it was nearly completed. Was this deliberate?
A: Yes, because normally an album is old before it comes out. (aside) Witness GET BACK.

Q: Were any of the songs on the album originally written with the Beatles in mind?
A: The older ones were. JUNK was intended for ABBEY ROAD, but something happened. TEDDY BOY was for GET BACK but something happened.

Q: Were you pleased with ABBEY ROAD? Was it musically restricting?
A: It was a good album. (No. 1 for a long time.)

1970年4月

Q: なぜソロ・アルバムを作ろうと決めたのですか?

A: スチューダーの4トラック・レコーディング・マシーンが自宅にあって、それで(あらゆる楽器を演奏して)試していた――それで、その結果が気に入って、アルバムにすることにしたんだ。

Q: ジョンのプラスティック・オノ・バンドでの斬新な活動や、リンゴのソロ・アルバムに影響を受けましたか?

A: 多少はね。でもそれほどでもないよ。

Q: すべての曲の作曲者は、ポール・マッカートニーだけですか?

A: イエス・サー。

Q: それらの曲は、「マッカートニー」とクレジットされるのですか?

A: 「レノン=マッカートニー」とするのはちょっとばかげているから、「マッカートニー」にするよ。

Q: ソロで活動することを楽しんでいますか?

A: とてもね。決定を下すためにたずねるべき人は僕だけで、僕は自分に同意した。リンダも関わっていることを忘れないでね。だから実際にはダブルアクトだ。

Q: リンダはどんな貢献をしていますか?

A: 厳密には彼女はハモリ担当だけど、もちろんそれ以上だ。彼女は何でも相談できる相手で、セカンドオピニオンで、著名な写真家だ。それより何より、彼女は僕を信じている――常にね。

Q: そのアルバムはどこでレコーディングしましたか?

A: 自宅、EMI(第2スタジオ)、それからモーガン・スタジオ(ウィルスデン!)

Q: あなたの自宅の機材は何ですか?

A: スチューダーの4トラック・マシーン。でも僕はマイクを1本しか持っていなかった。それにペンダー氏とスウェットナム氏とその他の人たちが6か月くらいかかったから(ちょっとした遅れ)、僕はVUメーターもミキサーもなしに作業したんだ。だからすべてのものを(ディストーションとかのために)最初に聴いてから録音する必要があった。だから答えは、スチューダー、1本のマイク、そして神経。

Q: なぜ今回、そのスタジオを選んだのですか?

A: 利用可能だったから。EMIは機材的にもいいし。モーガンは居心地がいい。

Q: ほとんど完成するまでアルバムのことは知られていませんでした。それは意図的ですか?

A: そうだよ。だって通常アルバムはリリースされる前に古くなってしまうだろ。(小声で)"GET BACK"がいい例だ。

CamScannerでスキャン

だ。ただ、自身もかつてシンガーだったスペクターは、スタジオのコントロール・ルームの中でもいかにもアーティストらしい気まぐれぶりをみせることで有名だった。
'Instant Karma!'に続いて、スペクターは、ジョン、ジョージ、アラン・クラインに招かれ、"GET BACK"のテープをプロデュースし直し、映画"LET IT BE"の公開にあわせてリリースできるだけの内容のアルバムを仕上げてほしいと依頼された。ジョージはイースターに行なわれたこの一連のミキシング・セッションのほとんどに立ち合い、EMIスタジオのバランス・エンジニアであるピーター・バウンがスペクターのアシスタントとなった。
スペクター独特の音作りは"LET IT BE"においても、日を追うごとにはっきりと打ち出されることになる。この日の最初のセッションでは、'I've Got A Feeling'の2種類のバージョン、'Dig A Pony'の屋上レコーディング(「all I want is」というバック・ボーカルをカット)と'One After 909'のミキシングをした。開始時刻と終了時刻は不明。さらに'I Me Mine'をミキシングして、曲そのものの長さを伸ばし(1970年1月3日参照)、1968年2月にレコーディングした'Across The Universe'の新たなミキシングを作った。

3月25日(水)

EMIスタジオ、第4室
London
アップル・コープス
London

フィル・スペクターがこの日のセッションでミキシングした'Two Of Us'は、アルバム"LET IT BE"のスペクターの作業のなかでもおそらく最高の出来だろう。この日はまた、(1月8日のジョージの新たなボーカルを採用した)'For You Blue'のミックスも作った。さらに興味深いのは、'Teddy Boy'を手がけていることだ。もしこの曲が最終的にアルバムに収録されていたなら、映画の内容と完全に一致させるという目的に反することにもなり、ポールが行なったソロ・バージョンともかち合うことになっていたはずだ。
この日アップルでは、リンゴがラジオ1の「シーン・アンド・ハード」のために、デビッド・ウィッグとのインタビューに応じた。このインタビューは、3月29日に5分20秒、翌週の4月5日には2分15秒の抜粋が、それぞれ午後3時から4時までの放送分のなかで紹介される。

3月26日(木)

EMIスタジオ、第4室
London

フィル・スペクターはビートルズのパーカッション・サウンドを全体的にシャープに仕上げているが、そのなかでもきわだった出来となったのが'Let It Be'のミックスだ。リンゴのハイハットに相当量のエコーをかけて、はっきり前面に打ち出している。また、編集作業によって曲の長さを延ばし、1970年1月4日録音のギター・ソロのみを使用したため、シングル・バージョンとは著しく違うバージョンとなった。
また、スペクターは'Get Back'にもかなりの時間を費やしている。ベースにしたのはシングル・バージョンだったが、曲の最初に関係のないおしゃべりを挿入し、アップルの屋上パフォーマンスの最終曲に続いた拍手とお礼の言葉を、曲のエンディングにクロスフェイド編集したため、一般にはまったく違うバージョンだと受け取られた。
さらにこの日は、'Maggie Mae'のリミックスと4月1日のオーバーダビング・セッション用に'The Long And Winding Road'もリミックスした。

3月27日(金)

EMIスタジオ、第4室
London

12分25秒のオリジナルのうち49秒だけを使って'Dig It'をステレオ・ミキシングし、録音テープのなかから多数の短い演奏や会話の断片を集めた。このなかから2種類が、完成したアルバムのマスターに挿入されている。そのひとつが、「That was 'Can You Dig It' by Georgie Wood, now we'd like to do 'Hark The Angels Come'(今のはジョージー・ウッドの'Can You Dig It'でした。次は'Hark The Angels Come'をやりまーす)」というジョンの語りで、スペクターはこれを'Dig It'の最後にクロスフェイドさせ、アルバムの次の曲、賛美歌にも似た'Let It Be'の曲紹介としている。もうひとつは、やはりジョンの「'I Dig A Pygmy' by Charles Hawtrey and the Deaf Aids. Phase one, in which Doris gets her oats(チャールズ・ホートリー・アンド・デフ・エイズによる'I Dig A Pygmy'をやります。その1では、ドリスが

CamScannerでスキャン

うまいとこだけかすめとります)」というきわどい言葉で、スペクターはこれをアルバムのオープニングに使った。
この日、リンゴのソロ・デビュー・アルバム"SENTIMENTAL JOURNEY"がイギリスでリリースされる。

3月29日(日)
ウェンブリー・スタジオ、第3スタジオ
Wembley

ロンドン・ウイークエンド・テレビのデビッド・フロストの番組に、リンゴがこの4か月で2回目の生出演をした。今回は、「フロスト・オン・サンデイ」シリーズの最後の放送である。(1969年12月6日の)前回の出演では、映画"THE MAGIC CHRISTIAN"の話が中心だったが、今回はアルバム"SENTIMENTAL JOURNEY"のプロモーションが目的で、3月15日にトーク・オブ・ザ・タウンで撮影したプロモーション・クリップが放送された。番組は、この日の午後10時25分から11時25分に、ウェンブリーのスタジオから生放送された。

3月30日(月)
EMIスタジオ、第4室
London

この日のセッションで、フィル・スペクターは非常に興味深いミキシングを試みたが、最終的には拒否されてしまう。'For You Blue'の間奏の16秒にわたるテープ・ループを作り、自由に使用することができた映画のサウンドトラックから多数の会話を抜粋してこれに重ねていった。しかし、最終的にアルバム"LET IT BE"に使用されるサウンドトラックからの会話は、実際にはトゥイッケナムでのリハーサル・セッションで録音されていた、ジョンの「Queen says no to pot-smoking FBI movement (女王はFBIのマリファナ常用を禁じよと言っている)」という語りだけだ。

3月31日(火)
ブロードキャスティング・ハウス、スタジオ29
London

リンゴが午前9時から9時55分まで、ロンドンのブロードキャスティング・ハウスからBBCラジオ2の生中継番組、「オープン・ハウス」に出演した。司会のピート・マレーと、"SENTIMENTAL JOURNEY"やそのほかの話題について語った。

"LET IT BE"にオーケストラを入れる

4月1日(水)
EMIスタジオ、第1スタジオ
London

フィル・スペクターによる"LET IT BE"のミキシング・セッションのクライマックスを迎え、'Across The Universe' 'The Long And Winding Road' 'I Me Mine'に、壮大なオーケストラとコーラスをオーバーダビングした。
ビートルズのメンバーでこのセッションに居合わせたのはリンゴだけだった。グループ最後のものとなったこのセッションでは、スペクターの創造力が最大限に発揮されたが、その過程で関係者のほとんどを腹立たせてしまったせいで、もっとも困難で忘れがたいセッションとなった。ちなみに関係者とはつまり、バランス・エンジニア、テクニカル・エンジニア、50名のミュージシャンとオーケストラ指揮者の全員のことだ。リンゴはスペクターに頭を冷やせといさめ、バランス・エンジニアのピート・バウンは(スペクターからの謝罪の電話をもらって戻ってくるまで)怒って家に帰ってしまい、オーケストラの奏者たちも途中で演奏を中断してしまうというありさまだった。
オーケストラのスコアを書いたのは、スペクター自身ではない。'I Me Mine'と'The Long And Winding Road'はリチャード・ヒューソンが、'Across The Universe'はブライアン・ロジャーズがそれぞれアレンジと指揮を担当していた。また、後者2曲については、ジョン・バームがコーラスの高音部とボーカル・ハーモニーのスコアを書いていた。しかし、アンサンブルのスケールとビジョンはすべてスペクターの発想によるものだ。ここに、バイオリン18名、ビオラ4名、チェロ4名、ハープ1名、トランペット3名、トロンボーン3名、ドラム(リンゴ)、ギタリスト2名、さらにシンガー14名という、まさに壮大な「ウォール・オブ・サウンド」がビートルズのセッションで実現したのだ。総勢50名を集めたこのセッションで、EMIは1,126ポンド5シリングという巨額の人件費を支払うことにもなった。

CamScannerでスキャン

アルバム"LET IT BE"が完成

4月2日(木)

EMIスタジオ、第4室
London

フィル・スペクターの最後の仕事となったのは、'The Long And Winding Road' 'I Me Mine' 'Across The Universe'のステレオ・ミックスをして、編集することだった。このアルバムは、"GET BACK"プロジェクトとしてレコーディングが開始されてからじつに1年4か月後の5月8日になって、ようやくイギリスでリリースされる。
映画"LET IT BE"は、5月13日にニューヨークで、1週間後の5月20日にロンドンとリバプールでプレミア・ショーが開かれるが、どちらにもビートルズはひとりも参加しない。しかし、1969年1月に撮影された何百時間にもおよぶフィルムを210分に編集した1回目のラフ・カットなら、4人は1969年7月20日に観ていた。公開されたフィルムはさらに短く、ポール、ジョージ、リンゴの意見によりジョンとヨーコの場面がかなりカットされ、88分という長さになっていた。ポール、ジョージ、リンゴの3人は、1969年10月に88分になったバージョンを観ているが、ジョンとヨーコはこれを観ようともしなかった。アルバム同様、映画のタイトルもずっと"GET BACK"のままで、"LET IT BE"に変更されたのは1970年の春になってからだ。

ビートルズの終わりを宣言

4月10日(金)

アップル・コープス
London

ポールが、ビートルズは実質的に解散状態にあると宣言し、世界中のトップ・ニュースを飾ったこの日、ジョージはアップルのオフィスで、通常はBBC1のスタジオから日曜に放送される神学的なテレビ番組で、俗に「神様枠」と言われていた「ファクト・オア・ファンタジー?」への出演分を収録していた。これは、4月26日午後6時15分から6時50分にかけて放送された(また、4月27日午後12時50分から1時25分にもBBC1で再放送される)。
このときの番組のサブタイトルは「祈りと瞑想」で、ジョージはクリシュナ運動を中心とした話題についてインタビューを受け、11分弱の抜粋が放送で紹介される。

付録

DATA INDEX

CamScannerでスキャン

RECORDING

公式発表曲（1962～1970年）レコーディング&ミキシング完全データ

(日付からより詳しい情報にアクセスできます。ただし、日付にカッコが付いているものは、ダイアリーに記述がありません)

EMIレコーディングの日付／作曲者索引（曲名アルファベット順）曲名のあとにイニシャル（J,P,G,R）は主要作曲者を示す。ただし、そのメンバーの単独作品であるとはかぎらない。
ビートルズのメンバー以外の人物が作曲した曲については、イニシャルを記載していない。Rはレコーディング日、Mはミキシング日を表す。

A

Across The Universe (J)
アクロス・ザ・ユニバース
R：1968年2月4・8日，1970年4月1日
M：1968年2月8日，1969年10月2日，1970年1月5日，3月23日，4月2日

Act Naturally
アクト・ナチュラリー
R：1965年6月17日
M：1965年6月18日

All I've Got Do (J)
オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ
R：1963年9月11日
M：1963年9月30日，10月29日

All My Loving (P)
オール・マイ・ラヴィング
R：1963年7月30日
M：1963年8月21日，10月29日

All Together Now (P)
オール・トゥゲザー・ナウ
R：1967年5月12日
M：1967年5月12日，11月15日（11月10日の項参照），1968年10月29日

All You Need Is Love (J)
愛こそはすべて
R：1967年6月14・19・23～26日
M：1967年6月21・26日，11月1日，1968年10月29日

And I Love Her (P)
アンド・アイ・ラヴ・ハー
R：1964年2月25日～27日
M：1964年3月3日，6月22日

And Your Bird Can Sing (J)
アンド・ユア・バード・キャン・シング
R：1966年4月20・26日
M：1966年4月20・27日，5月12・20日

Anna (Go To Him)
アンナ
R：1963年2月11日
M：1963年2月25日

Another Girl (P)
アナザー・ガール
R：1965年2月15・16日
M：1965年2月18日・(23日)

Any Time At All (J)
エニイ・タイム・アット・オール
R：1964年6月2・3日
M：1964年6月4・22日

Ask Me Why (J)
アスク・ミー・ホワイ
R：1962年6月6日，11月26日
M：1962年6月6日，11月30日，1963年2月25日

B

Baby It's You
ベイビー・イッツ・ユー
R：1963年2月11・20日
M：1963年2月25日

Baby You're A Rich Man (J, P)
ベイビー・ユーアー・ア・リッチマン
R：1967年5月11日
M：1967年5月11日，1971年10月22日（1967年11月7日のダイアリー参照）

Baby's In Black (J, P)
ベイビーズ・イン・ブラック
R：1964年8月11日
M：1964年（8月14日），10月26日，11月4日

Back In The U.S.S.R. (P)
バック・イン・ザ・U.S.S.R.
R：1968年8月22・23日
M：1968年8月23日，10月13日

Bad Boy
バッド・ボーイ
R：1965年5月10日
M：1965年5月10日

The Ballad Of John And Yoko (J)
ジョンとヨーコのバラード
R：1969年4月14日
M：1969年4月14日

Because (J)
ビコーズ
R：1969年8月1・4・5日
M：1969年8月12日

Being For The Benefit Of Mr. Kite! (J)
ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト
R：1967年2月17・20日・(28日)，3月29・31日
M：1967年3月31日，4月7日

Birthday (P)
バースデイ
R：1968年9月18日
M：1968年9月18日，10月14日

Blackbird (P)
ブラックバード
R：1968年6月11日
M：1968年6月11日，10月13日

Blue Jay Way (G)
ブルー・ジェイ・ウェイ
R：1967年9月6・7日，10月6日

CamScannerでスキャン

M：1967年10月12日．11月7日

Boys
ボーイズ
R：1963年2月11日
M：1963年2月25日

C

Can't Buy Me Love (P)
キャント・バイ・ミー・ラヴ
R：1964年1月29日．2月25日．3月10日
M：1964年2月26日．3月10日

Carry That Weight
キャリー・ザット・ウェイト
(Golden Slumbers / Carry That Weight の項を参照)

Chains
チェインズ
R：1963年2月11日
M：1963年2月25日

Come Together (J)
カム・トゥゲザー
R：1969年7月21～23・25・29・30日
M：1969年8月7日

The Continuing Story Of Bungalow Bill (J)
コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル
R：1968年10月8日
M：1968年10月9日

Cry Baby Cry (J)
クライ・ベイビー・クライ
R：1968年7月15・16・18日
M：1968年10月15日

D

A Day In The Life (J. P)
ア・デイ・イン・ザ・ライフ
R：1967年1月19・20日．2月3・10・22日．3月1日
M：1967年1月30日．2月13・22・23日

Day Tripper (J)
デイ・トリッパー
R：1965年10月16日
M：1965年10月25日．1966年11月10日

Dear Prudence (J)
ディア・プルーデンス
R：1968年8月28・29日
M：1968年8月30日．10月5・13日

(There's A) Devil In Her Heart
デヴィル・イン・ハー・ハート
R：1963年7月18日
M：1963年8月21日．10月29日

Dig A Pony (J)
ディグ・ア・ポニー
R：1969年1月22・24・28・30日
M：1969年2月5日．(1969年3月4日の項参照)．1970年3月23日

Dig It (J)
ディグ・イット
R：1969年1月24・26日
M：(1969年3月4日の項参照)．1970年3月27日

Dizzy Miss Lizzy
ディジー・ミス・リジー
R：1965年5月10日
M：1965年5月10日

Do You Want To Know A Secret (J)
ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット
R：1963年2月11日
M：1963年2月25日

Doctor Robert (J)
ドクター・ロバート
R：1966年4月17・19日
M：1966年4月19日．5月12・20日．6月21日

Don't Bother Me (G)
ドント・バザー・ミー
R：1963年9月11・12日
M：1963年9月30日．10月29日

Don't Let Me Down (J)
ドント・レット・ミー・ダウン
R：1969年1月22・28・30日
M：1969年2月5日．(1969年3月4日の項参照)．4月4日

Don't Pass Me By (R)
ドント・パス・ミー・バイ
R：1968年6月5・6日．7月12・22日
M：1968年6月6日．7月12日．10月11日

Drive My Car (P)
ドライヴ・マイ・カー
R：1965年10月13日
M：1965年10月25・26日

E

Eight Days A Week (J. P)
エイト・デイズ・ア・ウィーク
R：1964年10月6・18日
M：1964年10月12・27日

Eleanor Rigby (P)
エリナー・リグビー
R：1966年4月28・29日．6月6日
M：1966年4月29日．6月22日

The End (P)
ジ・エンド
R：1969年7月23日．8月5・7・8・15・18日
M：1969年7月30日．8月18・19・21日

Every Little Thing (P)
エヴリー・リトル・シング
R：1964年9月29・30日
M：1964年10月27日

Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey (J)
エヴリボディーズ・ゴット・サムシング・トゥ・ハイド・エクセプト・ミー・アンド・マイ・モンキー
R：1968年6月26・27日．7月1・23日
M：1968年7月23日．10月12日

Everybody's Trying To Be My Baby
みんないい娘
R：1964年10月18日
M：1964年10月21日．11月4日

F

Fixing A Hole (P)
フィクシング・ア・ホール
R：1967年2月9・21日
M：1967年2月21日．4月7日

Flying (J. P. G. R)
フライング
R：1967年9月8・28日
M：1967年9月8・28日．11月7日

The Fool On The Hill (P)
フール・オン・ザ・ヒル
R：1967年9月6・25～27日，10月20日
M：1967年9月25・27日，10月25日，11月1日

For No One (P)
フォー・ノー・ワン
R：1966年5月9・16・19日
M：1966年6月21日

For You Blue (G)
フォー・ユー・ブルー
R：1969年1月25日，1970年1月8日
M：(1969年3月4日の項参照)，1970年1月8日，2月28日，3月25・30日

From Me To You (J, P)
フロム・ミー・トゥ・ユー
R：1963年3月5日
M：1963年3月14日

G

Get Back (P)
ゲット・バック
R：1969年1月23・27・28・30日
M：1969年2月5日，(1969年3月4日の項参照)，3月26日，4月4・7日，1970年3月26日

Getting Better (P)
ゲッティング・ベター
R：1967年3月9・10・21・23日
M：1967年3月23日，4月17日

Girl (J)
ガール
R：1965年11月11日
M：1965年11月15日

Glass Onion (J)
グラス・オニオン
R：1968年9月11～13日・16・26日，10月10日
M：1968年9月26日，10月10日

Golden Slumbers / Carry That Weight (P)
ゴールデン・スランバーズ～キャリー・ザット・ウェイト
R：1969年7月2～4日・30・31日，8月15日
M：1969年7月3・30日，8月18・19日

Good Day Sunshine (P)
グッド・デイ・サンシャイン
R：1966年6月8・9日
M：1966年6月9・22日

Good Morning Good Morning (J)
グッド・モーニング・グッド・モーニング
R：1967年2月8・16日，3月13・28・29日
M：1967年3月29日，4月19日

Good Night (J)
グッド・ナイト
R：1968年6月28日，7月2・22日
M：1968年10月11日

Got To Get You Into My Life (P)
ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ
R：1966年4月7・8・11日，5月18日，6月17日
M：1966年5月18日，6月17・20・22日

H

Happiness Is A Warm Gun (J)
ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン
R：1968年9月23・24・25日
M：1968年9月25・26日，10月15日

A Hard Day's Night (J)
ビートルズがやって来るヤァ！ヤァ！ヤァ！
R：1964年4月16日
M：1964年4月20・23日，6月9・22日

Hello, Goodbye (P)
ハロー・グッドバイ
R：1967年10月2・19・20・25日，11月2日
M：1967年11月1・2・6・15日(11月10日の項参照)

Help! (J)
ヘルプ
R：1965年4月13日
M：1965年4月18日，6月18日

Helter Skelter (P)
ヘルター・スケルター
R：1968年7月18日，9月9・10日
M：1968年9月17日，10月9・12日

Her Majesty (P)
ハー・マジェスティ
R：1969年7月2日
M：1969年7月30日

Here Comes The Sun (G)
ヒア・カムズ・ザ・サン
R：1969年7月7・8・16日，8月6・11・15・19日
M：1969年7月8日，8月4・19日

Here, There And Everywhere (P)
ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア
R：1966年6月14・16・17日
M：1966年6月17・21日

Hey Bulldog (J)
ヘイ・ブルドッグ
R：1968年2月11日
M：1968年2月11日，10月29日

Hey Jude (P)
ヘイ・ジュード
R：1968年7月29・30・31日，8月1・2日
M：1968年7月30日，8月2・6・8日

Hold Me Tight (P)
ホールド・ミー・タイト
R：1963年2月11日，9月12日
M：1963年9月30日，10月29日

Honey Don't
ハニー・ドント
R：1964年10月26日
M：1964年10月27日

Honey Pie (P)
ハニー・パイ
R：1968年10月1・2・4日
M：1968年10月1・5日

I

I Am The Walrus (J)
アイ・アム・ザ・ウォルラス
R：1967年9月5・6・27・28日
M：1967年9月5・6・28・29日，11月6・17日

I Call Your Name (J)
アイ・コール・ユア・ネーム
R：1964年3月1日
M：1964年3月3・4・10日，6月4・22日

I Don't Want To Spoil The Party (J)
パーティーはそのままに
R：1964年9月29日
M：1964年10月26日，11月4日

I Feel Fine (J)
アイ・フィール・ファイン
R：1964年10月18日
M：1964年10月21・22日・(27日)

I Me Mine (G)
アイ・ミー・マイン
R：1970年1月3日，4月1日
M：1970年1月5日，3月23日，4月1・2日

I Need You (G)
アイ・ニード・ユー
R：1965年2月15・16日
M：1965年2月18日・(23日)

I Saw Her Standing There (P)
アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア
R：1963年2月11日
M：1963年2月25日

I Should Have Known Better (J)
恋する二人
R：1964年2月25・26日
M：1964年3月3日，6月22日

I Wanna Be Your Man (J, P)
彼氏になりたい
R：1963年9月11・12日・30日，10月3・23日
M：1963年10月23・29日

I Want To Hold Your Hand (J, P)
抱きしめたい
R：1963年10月17日
M：1963年10月21日，1965年6月8日，1966年11月7日

I Want To Tell You (G)
アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー
R：1966年6月2・3日
M：1966年6月3・21日

I Want You (She's So Heavy) (J)
アイ・ウォント・ユー
R：1969年1月29日，2月22日，4月18・20日，8月8・11日
M：1969年2月23日，4月18日，8月11・20日

I Will (P)
アイ・ウィル
R：1968年9月16・17日
M：1968年9月26日，10月14日

I'll Be Back (J)
アイル・ビー・バック
R：1964年6月1日
M：1964年6月10・22日

I'll Cry Instead (J)
ぼくが泣く
R：1964年6月1日
M：1964年6月4・22日

I'll Follow The Sun (P)
アイル・フォロー・ザ・サン
R：1964年10月18日
M：1964年10月21日，11月4日

I'll Get You (J, P)
アイル・ゲット・ユー
R：1963年7月1日
M：1963年7月4日

I'm A Loser (J)
アイム・ア・ルーザー
R：1964年8月14日
M：1964年8月14日，10月26日，11月4日

I'm Down (P)
アイム・ダウン
R：1965年6月14日
M：1965年6月18日

I'm Happy Just To Dance With You (J)
すてきなダンス
R：1964年3月1日
M：1964年3月3日，6月22日

I'm Looking Through You (P)
君はいずこへ
R：1965年10月24日，11月6・10・11日
M：1965年11月15日

I'm Only Sleeping (J)
アイム・オンリー・スリーピング
R：1966年4月27・29日，5月5・6日
M：1966年5月6・12・20日，6月6日

I'm So Tired (J)
アイム・ソー・タイアード
R：1968年10月8日
M：1968年10月15日

I've Got A Feeling (P)
アイヴ・ガッタ・フィーリング
R：1969年1月22・24・27・28・30日
M：1969年2月5日，(1969年3月4日の頃参照)，1970年3月23日

I've Just Seen A Face (P)
夢の人
R：1965年6月14日
M：1965年6月18日

If I Fell (J)
恋におちたら
R：1964年2月27日
M：1964年3月3日，6月22日

If I Needed Someone (G)
恋をするなら
R：1965年10月16・18日
M：1965年10月25・26日

In My Life (J)
イン・マイ・ライフ
R：1965年10月18・22日
M：1965年10月25・26日

The Inner Light (G)
ジ・インナー・ライト
R：1968年1月12日，2月6・8日
M：1968年2月6・8日，1970年1月27日

It Won't Be Long (J)
イット・ウォント・ビー・ロング
R：1963年7月30日
M：1963年8月21日，10月29日

It's All Too Much (G)
イッツ・オール・トゥー・マッチ
R：1967年5月25・31日，6月2日
M：1967年10月12日，1968年10月16・17日

It's Only Love (J)
イッツ・オンリー・ラヴ
R：1965年6月15日
M：1965年6月18日

CamScannerでスキャン

J

Julia (J)
ジュリア
R: 1968年10月13日
M: 1968年10月13日

K

Kansas City / Hey Hey Hey Hey!
カンサス・シティ〜ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ
R: 1964年10月18日
M: 1964年10月26日

Komm, Gib Mir Deine Hand (J, P)
抱きしめたい（ドイツ語版）
R:（1963年10月17日の項参照）、1964年1月29日
M: 1964年1月29日、3月10・12日

L

Lady Madonna (P)
レディ・マドンナ
R: 1968年2月3・6日
M: 1968年2月6・15日、1969年12月2日

Let It Be (P)
レット・イット・ビー
R: 1969年1月25・26・31日、4月30日、1970年1月4日
M:（1969年3月4日の項参照）、1970年1月4・8日、3月26日

Little Child (J, P)
リトル・チャイルド
R: 1963年9月11・12日、10月3日
M: 1963年9月30日、10月23・29日

The Long And Winding Road (P)
ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード
R: 1969年1月26・31日、1970年4月1日
M:（1969年3月4日の項参照）、1970年3月26日、4月2日

Long Long Long (G)
ロング・ロング・ロング
R: 1968年10月7・8・9日
M: 1968年10月10・12日

Long Tall Sally
のっぽのサリー
R: 1964年3月1日
M: 1964年3月10日、6月4日

Love Me Do (P)
ラヴ・ミー・ドゥ
R: 1962年6月6日、9月4・11日
M: 1962年6月6日、9月4・11日、1963年2月25日

Love You To (G)
ラヴ・ユー・トゥ
R: 1966年4月11・13日
M: 1966年4月11・13日、5月16日、6月21日

Lovely Rita (P)
ラヴリー・リタ
R: 1967年2月23・24日、3月7・21日
M: 1967年3月21日、4月17日

Lucy In The Sky With Diamonds (J)
ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ
R: 1967年2月28日、3月1・2日
M: 1967年3月2・3日、4月7日

M

Maggie Mae
マギー・メイ
R: 1969年1月24日
M:（1969年3月4日の項参照）、1970年3月26日

Magical Mystery Tour (P)
マジカル・ミステリー・ツアー
R: 1967年4月25・26・27日、5月3日、11月7日
M: 1967年4月27日、5月4日、11月16・17日

Martha My Dear (P)
マーサ・マイ・ディア
R: 1968年10月4・5日
M: 1968年10月5日

Matchbox
マッチボックス
R: 1964年6月1日
M: 1964年6月4・22日

Maxwell's Silver Hammer (P)
マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー
R: 1969年7月9・10・11日、8月6・25日
M: 1969年7月10日、8月6・12・14日

Mean Mr Mustard
ミーン・ミスター・マスタード
（Sun King / Mean Mr Mustard の項を参照）

Michelle (P)
ミッシェル
R: 1965年11月3日
M: 1965年11月9・15日

Misery (J, P)
ミズリー
R: 1963年2月11・20日
M: 1963年2月25日

Money (That's What I Want)
マネー
R: 1963年7月18・30日
M: 1963年8月21日、9月30日、10月29日

Mother Nature's Son (P)
マザー・ネイチャーズ・サン
R: 1968年8月9・20日
M: 1968年8月20日、10月12日

Mr Moonlight
ミスター・ムーンライト
R: 1964年8月14日、10月18日
M: 1964年10月27日、11月4日

N

The Night Before (P)
ザ・ナイト・ビフォア
R: 1965年2月17日
M: 1965年2月18日・(23日)

No Reply (J)
ノー・リプライ
R: 1964年6月3日、9月30日
M: 1964年10月16日、11月4日

Norwegian Wood (This Bird Has Flown) (J)
ノルウェーの森
R: 1965年10月12・21日
M: 1965年10月25・26日

Not A Second Time (J)
ノット・ア・セカンド・タイム
R: 1963年9月11日
M: 1963年9月30日、10月29日

…where Man (J)
…ぼっちのあいつ
…1965年10月21・22日
…1965年10月25・26日

O

…La Di, Ob-La-Da (P)
…・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ
…1968年7月3・4・5・8・9・
…15日
…1968年7月8・11・15日，
…12日

…Octopus's Garden (R)
…パス・ガーデン
…1969年4月26・29日，7月
…18日
…1969年4月29日，7月18
…

…Darling (P)
…ダーリン
…1969年1月27日，4月20・
…7月17・18・22・23日，
…8・11日
…1969年4月20日，5月1日，
…12日

…Brown Shoe (G)
…ルド・ブラウン・シュー
…1969年2月25日，4月16・
…
…1969年2月25日，4月16・
…

…After 909 (J)
…・アフター・909
…1963年3月5日，1969年1
…・28・30日
…1969年2月5日，1970年3
…日

…a Northern Song (G)
…ー・ア・ノーザン・ソング
…1967年2月13・14日，4月
…

M：1967年2月14日，4月21日，1968年10月29日

P

Paperback Writer (P)
ペイパーバック・ライター
R：1966年4月13・14日
M：1966年4月14日，10月31日

Penny Lane (P)
ペニー・レイン
R：1966年12月29・30日，1967年1月4・5・6・9・10・12・17日
M：1966年12月29・30日，1967年1月9・12・17・25日，1971年9月30日（1967年11月17日の項参照）

Piggies (G)
ピッギーズ
R：1968年9月19・20日，10月10日
M：1968年10月11日

Please Mister Postman
プリーズ・ミスター・ポストマン
R：1963年7月30日
M：1963年8月21日，10月29日

Please Please Me (J)
プリーズ・プリーズ・ミー
R：1962年9月11日，11月26日
M：1962年11月30日，1963年2月25日

Polythene Pam / She Came In Through The Bathroom Window (J, P)
ポリシーン・パン〜シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドー
R：1969年7月25・28・30日
M：1969年7月30日，8月14日

P.S. I Love You (P)
P.S. アイ・ラヴ・ユー
R：1962年6月6日，9月11日
M：1962年6月6日，9月11日，1963年2月25日

R

Rain (J)
レイン
R：1966年4月14・16日
M：1966年4月16日，1969年12月2日

Revolution (J)
レボリューション
R：1968年7月9・10・11・12日
M：1968年7月12・15日，1969年12月5日

Revolution 1 (J)
レボリューション 1
R：1968年5月30・31日，6月4・21日
M：1968年5月31日，6月4・21・25日

Revolution 9 (J)
レボリューション 9
R：1968年6月10・11・20・21日
M：1968年6月21・25日，8月20・26日

Rock And Roll Music
ロック・アンド・ロール・ミュージック
R：1964年10月18日
M：1964年10月26日，11月4日

Rocky Raccoon (P)
ロッキー・ラックーン
R：1968年8月15日
M：1968年8月15日，10月10日

Roll Over Beethoven
ベートーベンをぶっとばせ
R：1963年7月30日
M：1963年8月21日，10月29日

Run For Your Life (J)
浮気娘
R：1965年10月12日
M：1965年11月9・10日

S

Savoy Truffle (G)
サボイ・トラッフル
R：1968年10月3・5・11・14日
M：1968年10月14日

Sexy Sadie (J)
セクシー・セディ
R：1968年7月19・24日，8月13・21日
M：1968年8月21日，10月14日

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (P)
サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド
R：1967年2月1・2日，3月3・6日
M：1967年2月2日，3月6日

Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise) (P)
サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド（リプリーズ）
R：1967年4月1日
M：1967年4月1・20日

She Came In Through The Bathroom Window
シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドウ
(Polythene Pam / She Came In Through The Bathroom Window の項を参照)

She Loves You (J, P)
シー・ラヴズ・ユー
R: 1963年7月1日
M: 1963年7月4日, 1966年11月8日 (1963年10月31日～11月10日の項を参照)

She Said She Said (J)
シー・セッド・シー・セッド
R: 1966年6月21日
M: 1966年6月21・22日

She's A Woman (P)
シーズ・ア・ウーマン
R: 1964年10月8日
M: 1964年10月12・21日

She's Leaving Home (J)
シーズ・リーヴィング・ホーム
R: 1967年3月17・20日
M: 1967年3月20日, 4月17日

Sie Liebt Dich (J, P)
シー・ラヴズ・ユー (ドイツ語版)
R: 1964年1月29日
M: 1964年3月12日

Slow Down
スロウ・ダウン
R: 1964年6月1・4日
M: 1964年6月4・22日

Something (G)
サムシング
R: 1969年2月25日, 4月16日, 5月2・5日, 7月11・16日, 8月15日
M: 1969年2月25日, 5月6日, 7月11日, 8月19日

Strawberry Fields Forever (J)
ストロベリー・フィールズ・フォーエバー
R: 1966年11月24・28・29日, 12月8・9・15・21日
M: 1966年11月28・29日, 12月9・15・22・29日, 1971年10月26日 (1967年11月7日の項参照)

Sun King / Mean Mr. Mustard (J)
サン・キング～ミーン・ミスター・マスタード
R: 1969年7月24・25・29日
M: 1969年7月30日, 8月14・21日

T

A Taste Of Honey
蜜の味
R: 1963年2月11日
M: 1963年2月25日

Taxman (G)
タックスマン
R: 1966年4月20・21・22日, 5月16日
M: 1966年4月27日, 5月16日, 6月21日

Tell Me What You See (P)
テル・ミー・ホワット・ユー・シー
R: 1965年2月18日
M: 1965年2月20日・(23日)

Tell Me Why (J)
テル・ミー・ホワイ
R: 1964年2月27日
M: 1964年3月3日, 6月22日

Thank You Girl (J, P)
サンキュー・ガール
R: 1963年3月5・13日
M: 1963年3月13日

There's A Place (J)
ゼアズ・ア・プレイス
R: 1963年2月11日
M: 1963年2月25日

Things We Said Today (P)
今日の誓い
R: 1964年6月2・3日
M: 1964年6月9・22日

Think For Yourself (G)
嘘つき女
R: 1965年11月8日
M: 1965年11月9日

This Boy (J)
こいつ
R: 1963年10月17日
M: 1963年10月21日, 1966年11月10日

Ticket To Ride (J)
涙の乗車券
R: 1965年2月15日
M: 1965年2月18日・(23日)

Till There Was You
ティル・ゼア・ウォズ・ユー
R: 1963年7月18・30日
M: 1963年8月21日, 10月29日

Tomorrow Never Knows (J)
トゥモロー・ネバー・ノウズ
R: 1966年4月6・7・22日
M: 1966年4月27日, 6月6・22日

Twist And Shout
ツイスト・アンド・シャウト
R: 1963年2月11日
M: 1963年2月25日

Two Of Us (P)
トゥ・オブ・アス
R: 1969年1月24日・25・31日
M: (1969年3月4日の項を参 1969年4月25日, 19 年1月25日

W

Wait (P)
ウェイト
R: 1965年6月17日, 11月 日
M: 1965年6月18日, 11月 日

We Can Work It Out (P)
恋を抱きしめよう
R: 1965年10月20・29日
M: 1965年10月28・29日, 11月10日, 1966年11月10日

What Goes On (J)
消えた恋
R: 1965年11月4日
M: 1965年11月9日

What You're Doing (P)
ホワット・ユー・アー・ドゥーイング
R: 1964年9月29・30日, 10月26日
M: 1964年10月27日

When I Get Home (J)
家に帰れば
R: 1964年6月2日
M: 1964年6月4・22日

When I'm Sixty-Four (P)
ホエン・アイム・シックスティー・フォー
R: 1966年12月6・8・20・21日
M: 1966年12月21・29・30日, 1967年4月17日

CamScannerでスキャン

While My Guitar Gently Weeps (G)
ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス
R：1968年7月25日，8月16日，9月3・5・6日
M：1968年10月7・14日

Why Don't We Do It In The Road (P)
ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード
R：1968年10月9・10日
M：1968年10月16・17日

Wild Honey Pie (P)
ワイルド・ハニー・パイ
R：1968年8月20日
M：1968年8月20日，10月13日

With A Little Help From My Friends (J, P)
ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ
R：1967年3月29・30日
M：1967年3月31日，4月7日

Within You Without You (G)
ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー
R：1967年3月15・22日，4月3日
M：1967年3月15・22日，4月3・4日

The Word (J, P)
愛のことば
R：1965年11月10日
M：1965年11月11・15日

Words Of Love
ワーズ・オブ・ラヴ
R：1964年10月18日
M：1964年10月26日，11月4日

Y

Yellow Submarine (P)
イエロー・サブマリン
R：1966年5月26日，6月1日
M：1966年6月2・3・22日

Yer Blues (J)
ヤー・ブルース
R：1968年8月13・14・20日
M：1968年8月14日，10月14日

Yes It Is (J)
イエス・イット・イズ
R：1965年2月16日
M：1965年2月18日・(23日)

Yesterday (P)
イエスタデイ
R：1965年6月14・17日
M：1965年6月17・18日

You Can't Do That (J)
ユー・キャント・ドゥ・ザット
R：1964年2月25日，5月22日
M：1964年2月26日，3月10日

You Know My Name (Look Up The Number) (J)
ユー・ノウ・マイ・ネーム
R：1967年5月17日，6月7・8日，1969年4月30日
M：1967年6月7・9日，1969年4月30日，11月26日

You Like Me Too Much (G)
ユー・ライク・ミー・トゥ・マッチ
R：1965年2月17日
M：1965年2月18日・(23日)

You Never Give Me Your Money (P)
ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー
R：1969年5月6日，7月1・11・15・30・31日，8月5日
M：1969年7月15・30日，8月14日

You Really Got A Hold On Me
ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー
R：1963年7月18，10月17日
M：1963年8月21日，10月29日

You Won't See Me (P)
ユー・ウォント・シー・ミー
R：1965年11月11日
M：1965年11月15日

You're Going To Lose That Girl (J)
恋のアドバイス
R：1965年2月19日，3月30日
M：1965年2月20日・(23日)，4月2日

You've Got To Hide Your Love Away (J)
悲しみはぶっとばせ
R：1965年2月18日
M：1965年2月20日・(23日)

Your Mother Should Know (P)
ユア・マザー・シュッド・ノウ
R：1967年8月22・23日，9月16・29日
M：1967年9月29・30日，10月2日，11月6日

CamScannerでスキャン